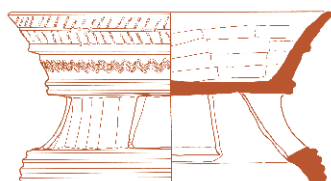


奈良文化財研究所學報第71冊

飛鳥池遺跡發掘調查報告

本文編〔Ⅱ〕

—土器・土製品—



独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

2022

奈良文化財研究所學報第71冊

飛鳥池遺跡發掘調查報告

本文編〔Ⅱ〕

—土器・土製品—

獨立行政法人 國立文化財機構

奈良文化財研究所

2022

飛鳥池遺跡発掘調査報告

本文編〔Ⅱ〕—土器・土製品—

目 次

第Ⅳ章 出土遺物

8	土器・土製品	1
A	南地区東の谷の水溜・炭層出土土器	3
i	水溜遺構出土土器	3
ii	水溜下灰色粘土層出土土器	27
iii	炭層4出土土器	33
iv	炭層3出土土器	40
v	炭層2出土土器	50
vi	炭層1出土土器	58
vii	炭層出土須恵器甕類	63
B	北地区の溝出土土器	66
i	南北大溝SD1130出土土器	66
ii	南北溝SD1110出土土器	80
iii	SD1080出土土器	100
iv	SD1116・1118出土土器	104
C	土坑出土土器	105
i	SK1126出土土器	105
ii	SK1128出土土器	108
iii	SK1170出土土器	109
iv	SK1153出土土器	111
v	水溜状土坑SX761 出土土器	117
vi	SK764・770出土土器	119
D	井戸出土土器	121
i	石敷井戸SE1090 出土土器	121
ii	SE1159出土土器	128
iii	石敷井戸SE1160 出土土器	129
iv	SE777出土土器	130
v	SE822出土土器	130
E	その他の遺構出土土器	131
i	北地区石組方形池SG1100 出土土器	131
ii	南北溝SD1103 出土土器	137
iii	北地区その他の遺構等 出土土器	145
iv	西の谷の工房関連遺構・ 包含層出土土器	148
v	東の谷の工房関連遺構・ 包含層出土土器	152
vi	北地区の平安時代・ 中世の遺構出土土器	156
F	工房下層遺構包含層等出土土器	158
i	工房下層包含層（灰緑色粘砂層） 出土土器	158
ii	工房下層包含層（灰色シルト層） 出土土器	175
iii	東の谷7世紀中頃の流路 SD1173出土土器	176

G	飛鳥池東方遺跡出土土器	179
	i 流路SD1700等出土土器	179
	ii 縄文土器	186
H	古墳時代の遺構等出土土器	187
I	墨書土器・ヘラ書土器・針書土器	200
J	陶 硯	214
K	漆塗土器	219
L	新羅土器	221
M	施釉陶器	222
	i 7世紀の鉛釉・緑釉陶器	222
	ii 平安時代の施釉陶器・磁器	226
N	ミニチュア土器	229
O	土 馬	231
P	その他の土製品	233
Q	製塩土器	235
R	埴 輪	238

飛鳥池遺跡発掘調査報告

(学報第71冊)

本文編全体目次

第I章 序 言

- 1 調査の経緯
- 2 調査組織
- 3 報告書の作成

第II章 調 査

- 1 調査地域
- 2 調査の概要
- 3 調査成果の公表
- 4 調査日誌抄

第III章 遺 跡……………全て〔Ⅲ〕

- 1 遺跡の立地と地形
- 2 遺跡の基本層序
- 3 古墳時代の遺構
- 4 7世紀中頃の遺構
- 5 飛鳥池工房期の遺構
- 6 北地区の遺構
- 7 平安時代以降の遺構
- 8 飛鳥池東方遺跡

第IV章 出土遺物

- 1 生産工房関係遺物
- 2 木製品ほか
- 3 瓦埴類
- 4 木 簡
- 5 建築部材
- 6 石 器・石製品
- 7 その他の銭貨
- 8 土 器・土製品……………〔Ⅱ〕

第V章 自然科学による分析

- 1 飛鳥池遺跡出土
金属製遺物の科学的調査
- 2 飛鳥池遺跡出土
ガラスの科学的調査
- 3 飛鳥池遺跡出土遺物の
鉛同位体比測定結果

第VI章 考 察

- 1 富本銭の鑄造年代と銭文
ならびに鑄銭技術
- 2 瓦からみた飛鳥池遺跡と
飛鳥寺の禪院
- 3 鉄滓・羽口・炉からみた
鉄鍛冶工房の性格
- 4 木簡と遺跡
- 5 遺構の変遷……………〔Ⅲ〕
- 6 飛鳥池工房の操業内容と
空間復元……………〔Ⅲ〕

第VII章 結 語……………〔Ⅲ〕

English Summary……………〔Ⅲ〕

出土木簡釈文（抄）

※上記〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕は、本文編の分冊を示す。
それ以外は、本文編〔Ⅰ〕に収録。

別 冊

図版編〔Ⅰ〕

遺構図面・遺構写真、木 簡、瓦埴類、
土 器・土製品、建築部材、石 器・石製品

図版編〔Ⅱ〕

生産工房関係遺物、木製品、別 図（遺物分布図）

付 図

- 1 飛鳥池遺跡遺構図
- 2 飛鳥池遺跡石組方形池

例 言

1. 本書は、『飛鳥池遺跡発掘調査報告』（奈良文化財研究所学報第71冊）の「第IV章 出土遺物 8 土器・土製品」部分を、本文編〔Ⅱ〕—土器・土製品—として一冊にまとめたものである。その内容は、当初に報告書の刊行を予定していた2005年3月までの整理作業結果に基づいており、その後の研究の進展等は反映していない。
2. 飛鳥池遺跡の概要や調査経緯、および出土遺物のうち生産工房関係遺物に関しては、本文編〔Ⅰ〕—生産工房関係遺物—（2021年12月刊行）を、個別の遺構に関しては、続編の本文編〔Ⅲ〕—遺跡・遺構—をそれぞれ参照のこと。
3. 7世紀と藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴに編年されるが、その詳細については『藤原報告Ⅱ』（1978年）を参照されたい。また、奈良時代の土器の時期区分は、平城Ⅰ～Ⅶに編年されるが、その詳細については『平城報告Ⅶ』（1976年）を参照されたい。
4. 土器・土製品に関する写真は、基本的には図版編〔Ⅰ〕のPL. 211～271に収録した。また、被熱土器については、本文編〔Ⅰ〕第IV章第1節Giv（134～141頁）に、漆付着土器については、同Ov（184～191頁）に遺物の解説を記載したほか、写真は図版編〔Ⅱ〕のPL. 359、およびPL. 388～393に収録した。
5. 本書の執筆分担は次のとおりであり、いずれも奈良文化財研究所に在籍したことのある者である。

第IV章 出土遺物

8 土器・土製品

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| A 南地区東の谷の水溜・炭層出土土器 | |
| B 北地区の溝出土土器 | |
| C 土坑出土土器 | |
| D 井戸出土土器 | |
| E その他の遺構出土土器 | 以上A～E
金田明大・加藤雅士・
西口壽生 |
| F 工房下層遺構包含層等出土土器 | 西口壽生 |
| G 飛鳥池東方遺跡出土土器 | |
| i 流路SD1700等出土土器 | 金田明大・西口壽生 |
| ii 縄文土器 | 加藤雅士 |
| H 古墳時代の遺構等出土土器 | 飛田恵美子・西口壽生 |
| I 墨書土器・ヘラ書土器・針書土器、 | |
| J 陶硯、K 漆塗土器 | 以上 渡辺丈彦 |
| L 新羅土器 | 加藤雅士 |
| M 施釉陶器 | |
| i 7世紀の鉛釉・緑釉陶器 | 西口壽生 |
| ii 平安時代の施釉陶器・磁器 | 金田明大・西口壽生 |
| N ミニチュア土器、O 土馬、P その他の土製品 | 渡辺丈彦・石橋茂登 |
| Q 製塩土器、R 埴輪 | 飛田恵美子・西口壽生 |

6. 遺構・遺物の写真撮影は井上直夫がおこない、中村一郎と岡田 愛が協力した。
7. 遺物の整理作業や図面・図版の作成には、以下の各氏の協力を得た。
赤松一恵、稲田登志子、乾 陽子、井上富美子、羽鳥幸一*、宮原智美、巽 淳一郎、
玉田芳英、深澤芳樹、安田龍太郎、渡邊淳子* (*は研究補佐員)
8. 奈良国立文化財研究所、奈良文化財研究所の出版物に関しては下記の略称を使用した。
機関名についても、奈文研と省略する。
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26』 → 『藤原概報 26』
『奈良国立文化財研究所年報 2000-II』 → 『年報 2000-II』
『奈良文化財研究所紀要 2001』 → 『紀要 2001』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV』 → 『藤原報告 IV』
9. 発掘調査で検出した遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号との組み合わせにより表記した。本遺跡の地区割りは大地区が5BAS・5AKAで一部5AMEを含むが、
遺構番号は5BASと一連の番号を付すことにした。
SA (塀)、SB (建物)、SC (回廊)、SD (溝)、SE (井戸)、SF (道路)
SG (池)、SK (土坑)、SS (足場)、SY (窯)、SX (その他)

第Ⅳ章 出土遺物

8 土器・土製品

土器・土製品は、発掘区全域から多量（整理箱1,200箱以上）に出土した。以下では、まず、出土土器の過半を占める南地区の水溜遺構埋土と炭層とからなる廃棄物層の土器（A）を、細分した層序毎に記述し、それらの基層をなす灰粘土層出土土器を加えることで、工房の操業～廃絶の変遷全般にわたる出土土器の大勢を報告する。次いで、主に北地区に展開する諸遺構の出土土器について、遺構の種類毎に、溝（B）、土坑（C）、井戸（D）の順に記述し、その他（E）には石組方形池SG1100（i）と南北溝SD1103（ii）、北地区の柱穴等（iii）、西の谷の工房関連遺構（iv）、東の谷の工房関連遺構（v）、および、北地区の平安時代・中世の遺構（vi）を含めた。これら遺構出土土器では、多量の木簡が伴出した南北大溝SD1130・南北溝SD1110出土土器が、水溜遺構・炭層→SD1110→SG1100→SD1101からなる工房排水体系の構築段階、および工房の操業停止・廃絶時期を示す資料として重要な位置を占める。また、石組方形池SG1100と東南部のSD1103出土土器は、近接する土坑SK1153出土土器とともに、奈良時代に降る土器を多く含む点で、廃棄物層やSD1110出土土器とは異なる様相を示している。なお、遺跡の立地と性格を反映して、個々の遺構・層序出土土器には上流部や下層の土器が含まれ、下流部や上層へ流出したのものも多いため、土器群の器種構成等は概括的な傾向を示すにとどまる。また、本格的な工房遺構以前の下層遺構等の土器（F）については量的にまとまりがあり、当該期の基準資料となりうる灰緑色粘砂層と7世紀中頃の流路SD1173出土土器について報告し、飛鳥池東方遺跡出土土器（G）と古墳時代の土器（H）はやや簡単な報告にとどめた。

遺構の種類
毎に記述

土器・土製品の種類には、土師器、須恵器、ロクロ土師器、黒色土器、瓦器、縄文土器、墨書土器、陶硯、漆塗土器、施釉陶器、新羅土器、ミニチュア土器、土馬、当て具、紡錘車、円板、製塩土器、埴輪などがあり、土師器、須恵器が圧倒的多数を占める。報告は、上記の記載順にしたがって、遺構・層序ごとに、土師器（ロクロ土師器を含む）、須恵器、その他に分けておこない、墨書土器以下の特殊土器・土製品は、種類別（I～R）にまとめた。また、漆パレット・漆壺などの漆附着土器は漆工関連遺物、著しい高熱をうけた被熱土器は金属加工関連遺物として、本文編〔I〕で報告する。土器番号は、A～Hでは記載順の一連番号（1～1672）とし、I～Rの特殊土器・土製品における一連番号（1～338）ともに写真図版と対応する。

土器・土製品
の種類

土器の器種名・手法名・時期区分については、基本的には『平城報告Ⅶ』・『藤原報告Ⅱ』に準拠したが、その後の奈文研出版物を参考に、一部変更した¹⁾。なお、供膳具における径高指数（器高÷口径×100）を同じくするまとまりと、分量による器種分化（I～Ⅳ）は踏襲したが、胎土色調による群別は、地域と時期、性格を異にする土器群への適用は困難であり、それらに包括されない多様な存在こそが、本土器群の特色でもあることから、全般の記載法を変更して、できる限り多数を詳述することとした。以下に、頻出する主要な器種・手法について、変更・補正点を含めて記し、その他は個々の説明の中で追加する。

器種名・
手法名・
時期区分

調整手法 土師器供膳具の調整手法については、器体の縁辺に沿ったヨコナデと不定方向のナデ調整を区別するとともに、底部不調整で口縁部ヨコナデの a 手法、底部をヘラケズりする b 手法、口縁部まで広くヘラケズりする c 手法とし、外面のヘラミガキの範囲が、口縁部のみ 1 手法、底部のみ 2 手法、全体に及ぶ 3 手法、施さない 0 手法との組み合わせで、a0 手法・b1 手法等

暗文 と表記した。杯皿類に多用される「暗文」は底部にラセン文、口縁部に放射文を施すことを基本とするが、ラセン文には巻きの細粗があり、放射文には「正放射文」と「斜放射文（左傾・右傾）」のほか、「2 段＋ループ状ラセン文」「2 段」「1 段＋連弧文」「1 段」の組み合わせがあり、種類と組み合わせおよび精粗等は、産地や時期の違いの目安となることから詳述した。

土師器供膳具の器種 土師器供膳具の一般的な器種は、平底系の杯 A・杯 D、丸底系の杯 C・杯 G・杯 H、高台のつく杯 B、器高の高い椀・鉢、器高が低く無台の皿 A、有台の皿 B があり、高い脚をもつ高杯には、大型で浅い杯部の高杯 A のほかに、杯 C に対応する高杯 C（既報告の高杯 B）、杯 G に対応する高杯 G、杯 H に対応する高杯 H がある。平底系の杯 A と杯 B には口縁上部が外反し、端部が丸く内肥厚する a 類と、直線的な口縁部で端部の肥厚が小さい b 類のほか、丸味のある底部で口縁端部が外肥厚するなどの異形（c 類）があり、杯 D は内彎気味の口縁部の端部が丸く内肥厚するものである。丸底系の杯 C・杯 G・杯 H は、暗文、ヘラミガキをもつもの（杯 C）、それらを欠くもの（杯 G）、ヘラケズリの底部とヨコナデの口縁部との境に段をもつもの（杯 H）として区別され、皿・鉢にも G・H の別がある。杯 C は、小さな平底から口縁上部で内屈し、口縁端部に内傾面をもつもの（a 類）、全体に丸底で口縁端部が内肥厚して凹線状の面をもつもの（b 類）、および口縁端部が小さく外反し、底部を軽くヘラケズりするもの（c 類）などに細分され、杯 G は、口縁端部が外反する a 類、内傾面をもつ b 類、外傾面をもつ c 類のほか、b 類に類似するが底部を軽くヘラケズりする d 類に細分され、それぞれ胎土・色調が異なるが、それらに包括されないものもあり、土師器全体を通した対応関係は明確ではない。煮炊具には、球形体部の甕 A、把手の付く甕 B、長胴の甕 C があり、『藤原報告Ⅱ』で調整法・胎土・色調において「河内地方」「近江・山城地方」に特徴的とされたまともは、それぞれ「河内型」「近江型」と呼称し、「大和 A 型」「大和 B 型」「伊勢型」など調整法等の相違による地域色提唱²⁾に従うとともに、それら以外の多様なものも存在することから、その特徴を詳述した。

土師器煮炊具の地域色 須恵器供膳具は、古墳時代以来の丸底系有蓋の杯 H と、7 世紀以降の平底系有蓋の杯 G、無台の杯 A、有台の杯 B、器高の高い椀、器高の低い皿・盤、高い脚の付く高杯などに大別され、有台の杯 B などには蓋類が伴い、7 世紀後半以降の杯 A・杯 B などには土師器と同様に径高指数、法量による器種分化がある。また、無台の杯 A・椀 A には、平底系と丸底系の別があり、既報告ではともに無蓋を想定しているが、平底系の杯 A には、重ね焼き痕跡などにより有蓋と無蓋とがあると判断され、本報告では、無蓋を杯 Aa、有蓋を杯 Ag、いずれか不明のものは杯 A とし、無蓋で底部の丸いものは杯 Ac として区別した。したがって前述の杯 B 類の蓋には杯・椀 Ag 類の蓋が含まれ、最少径の Ag 類と杯 G との区分には、口径・調整法を加味した。また、蓋類は身受けのかえりの有・無により蓋 a 類・蓋 b 類と呼び分けた。杯類の調整手法は、粘土塊から切り離れたままの「ヘラ切り不調整」とロクロの回転を利用した「ロクロケズリ」「ロクロナデ」があり、それぞれロクロの回転方向が確認されるものは、（R：右回転）（L：左回転）と記し、ロクロを使用しない調整は「ヘラケズリ」「ナデ」とした。

A 南地区東の谷の水溜・炭層出土土器

南地区の廃棄物層は、東の谷に設けられた水溜遺構の南半上流部を覆う埋土・堆積層と北半下流部で工房に面して炭化物の多い炭層、および下流部に合流する西の谷の炭層とからなる。東の谷では、谷底の古墳時代土器を含む有機物層の上に無遺物の暗灰色粘土層を介して、両岸に7世紀中頃の流路SD1173があり、さらにそれらを覆う灰色粘土層の堆積がある。水溜遺構はそれらの上部を整形して構築された水処理施設であり、北地区の南北溝SD1110→石組方形池SG1100→石組溝SD1101を通じて、飛鳥池東方遺跡のSD1700に排水される。そのため、廃棄物層には工房活動時の土器に加えて、流路SD1173や陸橋等構築以前の灰色粘土層に起源のある土器および、廃絶後の土器が含まれ、破片が下流の北地区の諸遺構・包含層へ流出したものもある。以下では、おもに東の谷の廃棄物層の土器を、①南半上流部の水溜遺構出土土器、②水溜下灰色粘土層出土土器、③北半部で炭化物の多い炭層出土土器に分けて記述する。

i 水溜遺構出土土器 (Fig.1~9-1~199, PL.211~216・247)

ここでは狭義の水溜遺構埋土として、陸橋SX1225以南の比較的炭化物が少ない地区 (SX1226南半・1228・1230・1231) から出土した土器を扱う。水溜遺構の発掘では、上から茶土、茶砂土、炭混灰土、谷木屑層、炭混灰粘土に分層され、炭混灰土・谷木屑層・炭混灰粘土は、水溜の縁辺底部に貼り付くように堆積し(土層名はほぼ遺物とりあげ名称のため、「色」を省略している)、茶砂土は個々の水溜遺構の中央部を流れ、陸橋を覆うように堆積する層序で、その上部の茶土は水溜・陸橋の起伏を残さないまでに平坦に堆積していた。したがって、水溜遺構が機能している段階の堆積層は炭混灰土以下の層序であり、茶砂土は機能停止時から程ない頃の埋土、茶土は廃絶後の再堆積層を含むと考えられる。水溜遺構の出土土器には、主体を占める7世紀後半~8世紀初頭に属す土器に加えて、下層の流路SD1173に起源のある7世紀中頃の土器が含まれ、茶土を中心に工房廃絶後の奈良・平安時代の土器が含まれる。茶砂土以下の層序間には、明確な違いは認められないものの、古相を呈するものが炭混灰土以下の層序に目立つ傾向がある。なお、谷の南西岸寄りで検出された砂岩塊の集積を伴う「溝上層」出土土器は、水溜遺構の構築時の整地に関わる土器としてここに収めた。以下では、出土層序にふれながら、土師器供膳具・溝上層の土器・土師器煮炊具・須恵器の順に器種ごとに記述する。

分層発掘

土師器 器種には杯A、杯B、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿X(方形皿)、鉢、壺A、壺B、高杯、甕A、甕B、甕C、鍋A、甌などがある。供膳具では形態・手法等が多様な杯A・杯Cと杯Hが多く、次いで杯G、皿A、皿Bがあり、その他はわずかであり、煮炊具では大小の甕Aが多く、次いで甕Cがあり、甕B、甌、鍋は少ない。なお茶土には平安時代の墨書土器皿A (Fig.97-74, PL.263) やミニチュア土器 (Fig.106, PL.269) の甕 (219)、鍋 (222・223)、竈 (225・226) が含まれ、茶砂土にミニチュア土器の甕 (224) があり、墨書土器鍋B (Fig.98-86) は水溜SX1226の炭混灰土からの出土である。

杯Aには腰部の丸いa類 (1~4・7~11) と、平底で屈折するb類 (5・6・12)、異形のc類 (13~20) がある。また、平安時代の杯A (38) が茶土から出土している。a・b両類の杯Aは、

杯Aの3類

茶土・茶砂
土の杯A

いずれも内面に2段放射暗文をもつ。径高指数35~37のもの(9~11)、径高指数27~32のもの(1~7・12)、径高指数23前後(8)があり、それぞれ飛鳥Ⅲ、飛鳥Ⅳ~Ⅴ、飛鳥Ⅴ~平城宮土器Ⅱに属するとみられる。茶土出土の杯AⅢ(1)はa1手法で、口径11.6cm、器高3.1cm、径高指数27。底部のラセン文が比較的細かく、明茶色で砂混じりの胎土。茶灰土出土の杯Aには口径17.6~19.0cm、器高5.0~5.6cmの杯AⅠ(4~6)と口径16.0~16.8cm、復元器高4.6~4.7cmの杯AⅡ(2・3)があり、いずれもb1手法。杯AⅠ(4)は口径17.6cm、器高5.6cm、径高指数32のa類で、口縁端部が小さく内肥厚する。外面の太いヘラミガキと、底部の細かなラセン文が特徴的で、上段の放射暗文が幅広い。飛鳥Ⅳに属する。杯AⅠ(5・6)はb類で、茶褐色を呈し赤色粒子を少量含む胎土。5のヘラミガキが緻密で古相であるのに対し、6のヘラミガキはかすかで、口径が大きく、飛鳥Ⅴに属する可能性が高い。杯AⅡ(2)は細かなヘラケズリのb1手法。口縁端部は小さく丸く内肥厚し、淡赤褐色を呈する微白色砂質土。口径16.8cm、器高4.6cm、径高指数27。杯AⅡ(3)は丸く内肥厚する口縁端部上面に小さな面をもち、軽いヘラケズリのb1手法で、上段の放射暗文が幅広く、淡茶褐色を呈する微砂質土。口径16.0cm、復元器高4.7cm。

炭混灰土
の杯A

炭混灰土出土の杯Aには杯AⅠ(11)、杯AⅡ(9・10)、杯AⅢ(7・8)がある。杯AⅠ(11)はb1手法で、直立する口縁部上端の肥厚が小さく、口縁部内面の2段放射暗文は上下段ともに細密で、底部のラセン文も細かい。口径17.9cm、器高6.3cm。赤褐色の精良土。杯AⅡ(9・10)は口径15.0~16.0cm、復元器高5.5~5.8cm。ともにb1手法。9は直立気味の口縁端部をわずかに内肥厚させた端正な器形で、明茶色を呈し微砂質の精良土。10の口縁端部は外肥厚して上方に小さな面をつくる。暗文は細密で、口縁上端近くまでの下段の放射文に重ねて、上段の斜放射文を施し、その始点付近に上向きのループ状の連弧文を1条巡らせる。微砂質の精良土で明茶色を呈するが、内外面についた黒色の汚れから漆塗土器の可能性もある。径高指数および口縁端部の形状、暗文が坂田寺跡SG100上層の杯Aに類似し、飛鳥Ⅲに属する。杯AⅢ(7・8)はb1手法で、口径9.8~10.0cm、器高2.3~2.8cm。7は外方へ開く口縁の端部が小さく丸く巻き込み、橙褐色で微砂と雲母片を多く含む精良土。8は口縁端部の内肥厚がわずかで、胎土に石英粒を含む。杯AⅠ(12)は谷木屑層出土で、口径17.2cm、器高5.2cm、径高指数30。粗いヘラミガキのb1手法で、直線的に開く口縁の端部が内外に肥厚し、上段の放射暗文が左傾きで幅広い。微砂・雲母片を多く含む濃茶色の胎土。これら水溜遺構の機能段階の杯Aには、飛鳥Ⅲ・Ⅳ・Ⅴに属するものが混在し、径高指数の小さい8も飛鳥Ⅴに属するとみられる。

異形の杯A

13~16と18~20は器形と手法の上で杯Cとの混淆のみられる異形(杯Ac類)で、それぞれ多様である。杯AcⅠ(13~15)は、飛鳥Ⅰ~Ⅱの杯CⅠに類似した丸底で深い器形であるが、口径が大きいことと、下段の放射暗文の始点が底部外縁寄りにある杯Aの施文法である点が異なり、厚い器壁と小さく外反する丸い口縁端部、淡褐色~赤褐色で石英や赤色粒子を多く含む均質で細砂質の胎土が、器高の低い16や、後述の南北大溝SD1130出土例に共通することから、飛鳥Ⅲ~Ⅳに属する杯Aの異形品と考えた。茶砂土出土の13は、b3手法で口径18.2cm、器高7.2cm、径高指数40。口縁部内面の2段の放射暗文がともに直立する点も異例である。口縁部外面に「*」形、底部内面に「x」形の針書きがあり、内外面に黒色の付着物がある。炭混灰土出土の14はb1手法で、暗文は上段の放射文が左傾きで粗雑な2段の放射暗文。赤褐色で石英粒を多く含む胎土。口径19.4cm、器高7.0cm、径高指数36。炭混灰粘土出土の15はb1手法で、口縁部内面

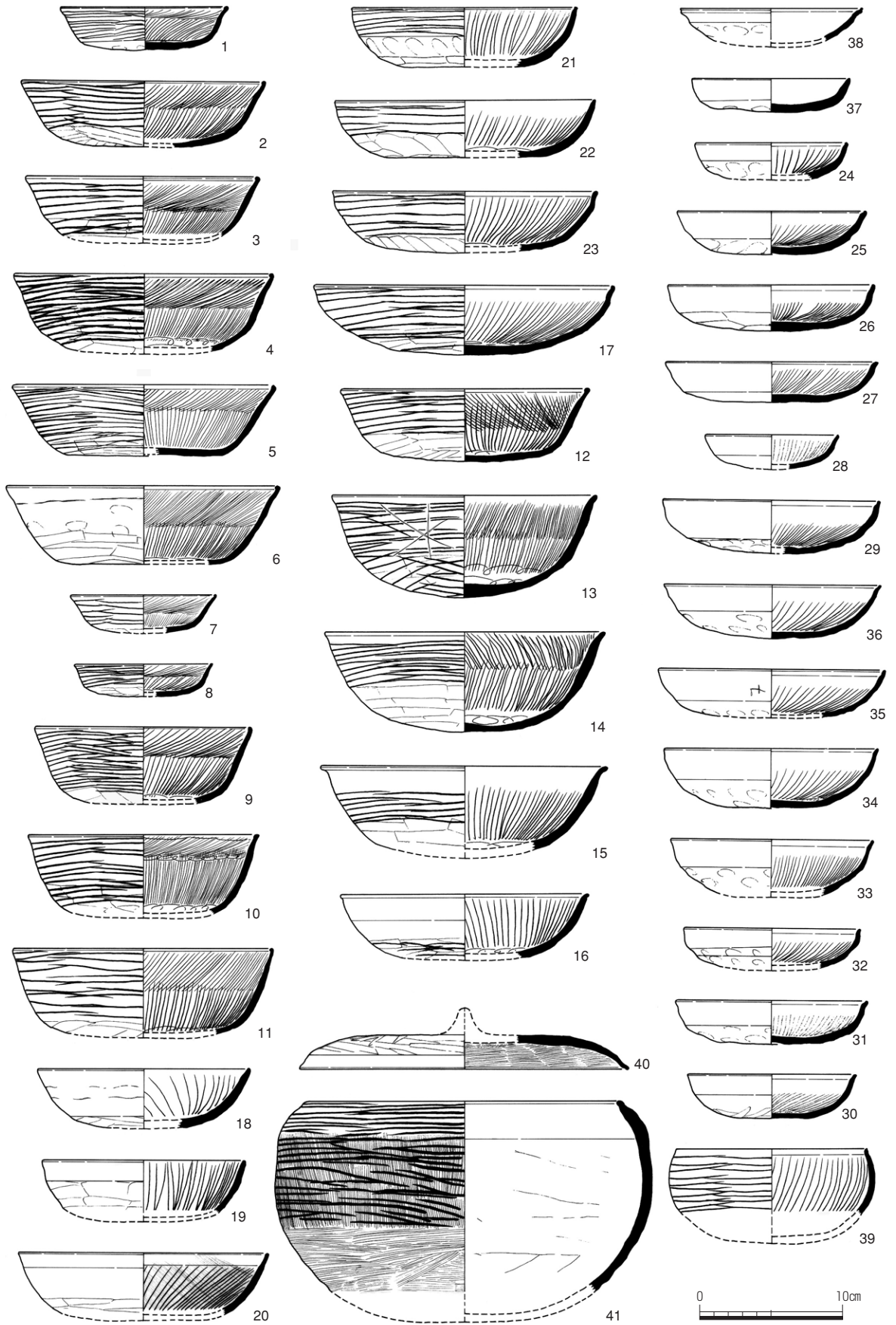


Fig. 1 水溜遺構出土土器 (1) 1:4

に1段の放射暗文。口径19.9cm、復元器高6.4cm、径高指数32。口縁端部が外反する杯Aの異形品のうち、器高が低い16は、炭混灰土出土で、左傾きの1段放射暗文を底部外寄りから口縁端部近くまで施し、外面のヘラミガキを欠くb0手法。明橙色を呈す細砂質の胎土。口径17.2cm、器高4.7cm。径高指数27は飛鳥Ⅳの杯Cと類似する。

18～20は口縁端部をわずかに内肥厚させるもの。20は口径17.2cm、復元器高4.7cmで、色調、胎土は16と共通するが、平底の器形と丸く収めた口縁端部、口縁部内面のハケ目状の条痕が異なる。19は口縁端部を丸く収め、口縁部上半までのb0手法で、一部ジグザグに施される口縁端部までの1段放射暗文が異例で特徴的。口径14.0cm、復元器高4.4cm。19・20はともに炭混灰土出土。18は丸底気味のb0手法で、杯Cの異形である可能性があるが、口縁端部がわずかに内肥厚し、粗い左傾きの1段放射暗文で、口縁部外面に粘土紐継ぎ目が残る。口径14.7cm、器高4.2cm、径高指数29。飛鳥Ⅳに属するとみられる。茶土出土の杯A(38)は口径12.6cm、復元器高2.6cm。e手法で、口縁端部は小さく上肥厚して凹線状に凹んだ面をもち、赤褐色で微砂質の胎土。後述の炭層1出土例(499等)や東の谷東岸の工房1上の包含層(青灰粘土)出土例(1216)と同様に、平安時代初期に属する。

杯 B 杯Bには、茶砂土出土の杯BI(43・44)と杯BII(42)、炭混灰粘土出土の杯BI(45)がある。杯BI(43)は口縁端部が小さく内肥厚するa類の杯部にハの字に開く高台がつく。底部内面に細かなラセン文、口縁部に2段の放射文と上向きのループ状のラセン文を施す。淡茶褐色を呈し、微砂質の精良土。口径16.8cm、器高6.0cm。杯BI(44)は、口縁部が直線的に開くb類の杯部で、下端に高台貼り付け時のナデ調整が残る。口径17.7cm、残存高5.1cm。外面のヘラミガキが太く、内面に2段の放射暗文を施し、赤褐色を呈す精良土。杯BII(42)は小さな平底で腰部の丸い杯Cに似た杯部に、薄い基部で端部が外肥厚する高台がつく。b1手法で口縁端部は丸く、暗文は底部に小さなラセン文、口縁部に上端近くまでの1段放射文。底部外面中央に「×」のヘラ書きをもち、赤褐色で赤色粒子を多く含む微砂質の胎土。口径14.9cm、器高5.5cm。高台径11.0cm。炭混灰粘土出土の杯BI(45)は口縁端部が小さく肥厚し、腰部の丸い杯部に、端部が外肥厚する高台がつく。b1手法で外面のヘラミガキが粗く、暗文は底部のラセン文、口縁部の2段放射文ともに細密。口径19.2cm、器高5.9cm。高台径12.0cm。42は飛鳥Ⅴ以降、他は、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。

杯 蓋 杯蓋には頂部をヘラミガキする杯BI蓋(71・72)、杯BII蓋(73)のほかに、胎土・調整が異なる蓋X(74・75)がある。杯BI蓋(71)は、緩い弧をもつ頂部と小さく下肥厚して外方に面をもつ口縁端部、上面がやや盛り上がるつまみの形状が須恵器杯B蓋b類に類似する。頂部内面はヨコナデ調整で、外面のヘラミガキは中央部で6分割、外縁部で5分割する。赤褐色で微砂質の精良土。口径19.4cm、器高3.0cm。つまみ径4.0cm。杯BI蓋(72)は、頂部外縁で小さく折れ曲がり、口縁端部は下方へ小さく肥厚する。口縁外面から内面をヨコナデ調整し、頂部外面を4分割でヘラミガキする。明橙色で赤色粒子と雲母片を多く含む微砂質土。つまみは伴出した胎土・色調が共通する破片からみて、周縁がわずかに肥厚する平坦な上面に1重のラセン暗文をもつとみられる。口径19.8cm、復元器高3.1cm。杯BII蓋(73)は、弧状の頂部と小さく外肥厚する口縁端部、圭頭形の大きなつまみが灰緑色粘砂層の土師器蓋(1327)に類似する。頂部内面はヨコナデ調整で、外面に4分割のヘラミガキ。口径17.3cm、器高3.4cm。杯B蓋はいずれ

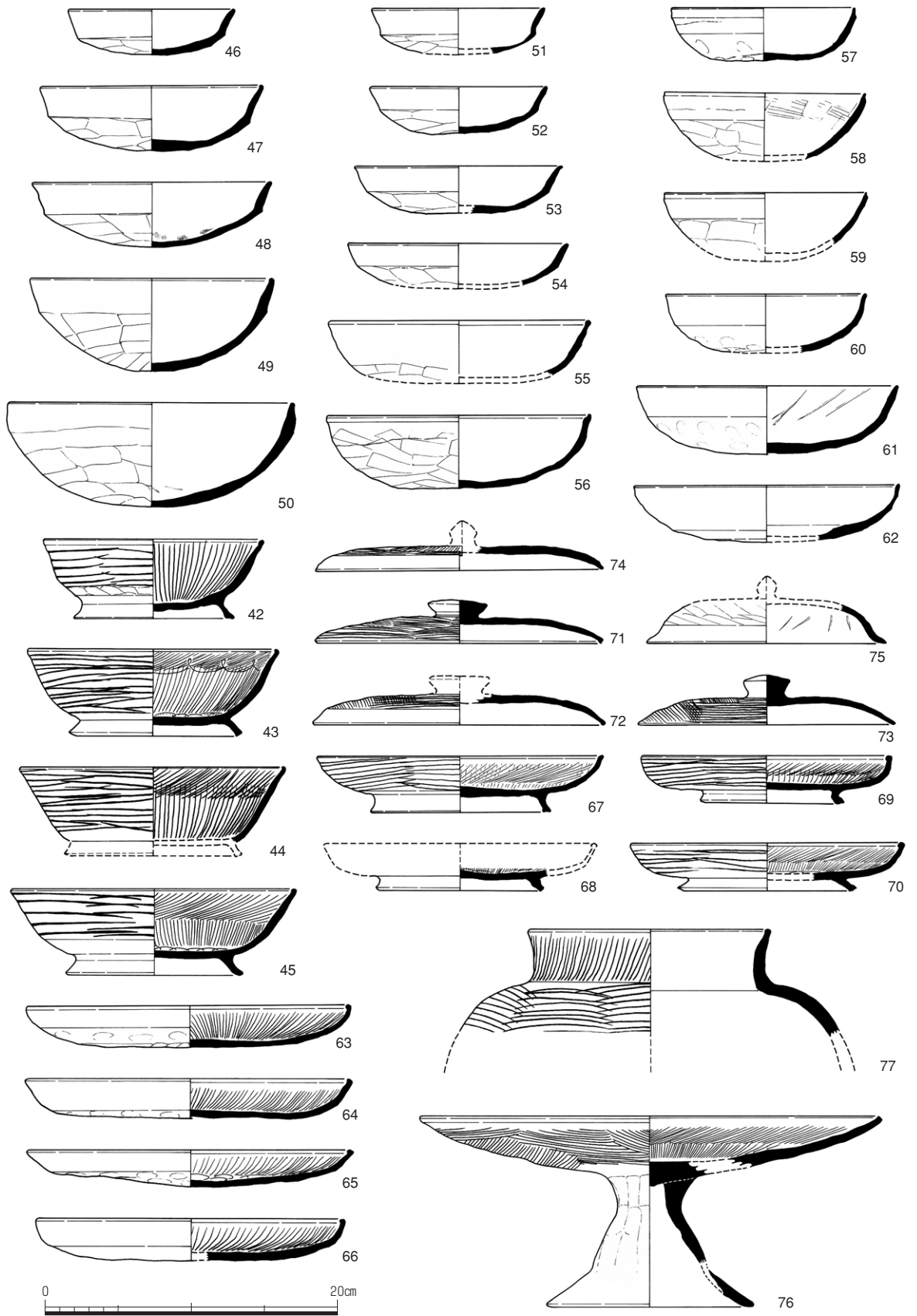


Fig. 2 水溜遺構出土土器 (2) 1:4

も炭混灰土出土で、古相を示す73のほかは、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

ハケ目・ヘラケズリの蓋

蓋X(74・75)は鉢X蓋(40)と同様に、頂部の内・外面をハケ目・ヘラケズリ調整する蓋で、口径では杯BI蓋・杯BII蓋に対応するが、胎土・調整の共通する杯類は特定できず、供膳具以外の蓋の可能性がある。蓋X(74)は、口縁端部が小さく外反し、頂部外面をハケ目調整、内面を多方向にナデ調整。円錐形のつまみはハケ目の使用と、橙色で微砂や赤色粒子を多く含む胎土が共通する茶砂土出土の破片から推定した。口径19.4～19.9cmといびつで、復元器高3.5cm。口縁外周部内面に煤が付着し、鍋や火にかけた杯G・鉢類にかぶるとみられる。蓋X(75)は外面をヘラケズリした笠形の頂部と丸く外反する口縁部とからなり、頂部内面にコテ状工具痕が残る。砂粒を多く含む胎土で、赤褐色を呈し、内面全面に黒色の汚れがつく。口径16.3cm。底部をヘラケズリする杯H系の器種、あるいは胎土・色調が共通し、体部外面をヘラケズリする甕A(88)のような小型の甕にかぶると考えられる。ともに谷木屑層出土。

杯 C

杯Cは、法量では口径16.8～20.8cmの杯CI(17・22・23)、口径13.5～15.7cmの杯CII(21・26・27・29・33～36)、口径11.1～13.2cmの杯CIII(25・30～32)、口径9.2～10.5cmの杯CIV(24・28)に分けられる。茶土出土の杯C(21～27)には、b1手法(21～23)とa0手法(24～27)があるが、前者はいずれも平底気味の皿形で、口縁端部や暗文も飛鳥Ⅳ～Ⅴの一般的な杯C(a・b類)とは異なっている。杯CI(22・23)は口径18.0～18.4cm、器高4.1～4.6cm、径高指数23～25。22は口縁端部が尖り、底部外面のヘラケズリは平らな中央部と周縁部とを分けておこなう。底部内面のラセン文と口縁中程までの1段放射暗文が粗く、淡褐色で赤色粒子を含む微砂質土。23は口縁上部で内屈したのち外反し、端部は鈍い内傾面となる。底部のみ一方向にヘラケズリ。太い1段放射暗文が口縁端部近くにおよび、赤褐色で赤色粒子の多い微砂質土。杯CII(21)のヘラケズリは22と同じで、細い1段放射暗文が尖り気味の口縁端部まで及ぶ。口径15.6cm、器高4.2cm、径高指数27。a0手法の杯Cには杯CII(26・27)、杯CIII(25)、杯CIV(24)がある。杯CII(27)は口縁端部に内傾面をもち、細かな暗文。口径14.6cm、器高2.9cm、径高指数20で奈良時代に降る可能性がある。杯CII(26)は内屈し端部が小さく内肥厚する口縁で、口径14.1cm、器高3.3cm。杯CIII(25)は内側が凹線状をなす口縁端部で、粗いラセン文と口縁部中程までの放射暗文を施し、淡茶色の微砂質土。口径13.0cm、器高3.1cm。杯CIV(24)も凹線状の口縁端部で、放射暗文が太く、赤色粒子を含む胎土。口縁端部に煤が付着し、灯明皿の可能性はある。口径10.4cm、復元器高2.7cm。

茶砂土の杯 C

茶砂土出土の杯C(17・28・29)のうち、杯CI(17)はb3手法で、肉厚の小さな平底で上部が内屈する口縁部。淡茶褐色の砂質土。口径20.8cm、器高4.9cmの大型で、奈良時代(平城宮土器Ⅱ～Ⅲ)に属する。杯CII(29)は指頭痕の凹凸が著しいa0手法。口縁上部が内屈するa類で、口縁端部が凹線状をなす。赤褐色の精良土で赤色粒子を多く含み、内外面に茶褐色の汚れがつく。口径15.0cm、器高3.8cm。杯CIV(28)は丁寧なナデ調整のa0手法で、口径9.2cm、復元器高2.5cm。淡橙色で赤色粒子を多く含み、内面の1段放射暗文がかすかである。

炭混灰土の杯 C

炭混灰土出土の杯C(30～36)はほとんどがa0手法。杯CII(33・34)は口径14.0～14.7cm、器高4.2cm、径高指数29前後で、飛鳥Ⅲに属する。33は口縁上部が内屈するa類で赤褐色の微白砂質土。34はb類で口縁端部に内傾面をもつ赤褐色の精良土。底部外面に木葉痕が残る。杯CII(36)は口縁端部が外反気味で、口径15.0cm、器高3.8cm、径高指数25。杯CII(35)は端部が

内肥厚して凹線状の口縁。赤褐色の精良土。口縁部外面に針書きをもつ。口径15.6cm、器高3.4cm、径高指数22で、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。杯CⅢ(30)は軽いヘラケズリのb0手法。1段放射暗文が細密。口径11.6cm、器高3.2cm、径高指数28。飛鳥Ⅲに属する。杯CⅢ(31・32)は口径12.2～13.2cm、器高3.0～3.1cm、径高指数24前後。口縁端部が凹線状の31は黄褐色で砂混じりの胎土で小さく外反する32は赤色粒子を多く含む。ともに飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。

鉢A(39)は茶砂土出土。口径13.3cm、復元器高6.8cm。内彎する口縁の端部に内傾面をつくり、外面はヘラミガキ、内面には直立気味の放射暗文。橙褐色で微砂質の精良土。下層起源の土器であろう。鉢X(41)は内彎する肉厚な口縁部の端部を薄くつまみ出し、外側に凹線状の段をつくる。体部は外面上半部を縦方向、下半部を横方向にハケ目調整したのち、体部上半に太いヘラミガキを粗く施し、内面には条痕が明瞭でない板ナデ調整が残る。口径21.6cm、復元器高15.5cm。淡褐色で雲母片と微砂の多い胎土。なお、外面を同様の調整法で調整したものにSD1130出土の壺(594)があり、胎土、色調が類似する。鉢X蓋(40)は頂部外面をヘラケズリし、内面は広くハケ目調整する。口径および口縁端部の形状が鉢X(41)の口縁外面の凹線部にかぶるに相応しいことと、ハケ目調整が共通することから、鉢X(41)の蓋と考え、つまみは茶砂土出土の同じ調整法の破片から円錐形と推定した。口径23.0cm、残存高2.4cm。赤色粒子・雲母片を多く含む茶灰色の胎土は、杯H類に通じる。

杯Gには法量では杯GI(55・56・61)と杯GⅢ(57～60)があり、それぞれ手法と器形に多様なものがある。茶土出土の杯GI(55)はb0手法で、形態が無暗文の杯Aに類似するが、丸く肥厚する口縁端部と淡褐色で白色砂の多い特徴的な胎土が異なる。口径17.8cm、復元器高4.2cm。炭混灰粘土出土の杯GI(56・61)は口径17.8～17.6cm、器高5.1～4.7cm、径高指数29～27。ともに飛鳥Ⅲの杯CIに似た器形だが、暗文を欠く。56は内傾面をもつ口縁端部で、外面を口縁部近くまで粘土紐継ぎ目が残る程度に軽くヘラケズりする杯Gd類。橙褐色で赤色粒子を多く含む粗い胎土。61は尖り気味の口縁端部で、底部外面はナデ調整、内面に板状工具痕が残り、淡褐色で雲母片を多く含む胎土の杯Gc類。外面に煤が付着し吹きこぼれ痕が認められる。なお、炭混灰粘土には61と同じ技法の杯GⅢがある。炭混灰土出土の杯GⅢも器形・手法が多様で、杯GⅢ(57)は底部中央が分厚い小さな平底で、口縁は内端が突出し外側に凹面をもつGc類。淡褐色の微砂質土で、口径12.4cm、器高3.7cm。杯GⅢ(58・59)は丸底気味のやや深い器形で、口縁端部と胎土とが杯Gc類の特徴をもつが、底部外面を一方に軽くヘラケズりする杯Gd類。これらは『藤原報告Ⅱ』の椀にあたり、飛鳥Ⅴの藤原宮の井戸SE1105出土土器や平城宮土器ⅠのSD1900出土土器に類例がある。³⁾58は口縁外面に粘土紐継ぎ目残り、内面は斜めハケ目ののちヨコナデ調整。口径13.6～13.8cm、器高4.6cm。杯GⅢ(60)は丸味のある底部外面を軽くヘラケズリし、口縁端部に小さな内傾面をもつGd類。赤褐色で雲母片を含む精良土。口径13.4cm、器高4.2cm。径高指数31。なお、茶土出土の小皿型の杯(37)は、鈍い内傾面をもつ口縁で、底部外面は不調整で指頭痕が残り、内面は杯Gd類と同様にコテ状工具によるナデ調整。口縁部に炭化物が付着する灯明皿で、伴出する土馬やミニチュア土器とともに奈良時代前半代に属する。

ロクロ土師器の杯C(62)は谷木屑層出土で、口径18.0cm、器高3.9cm。土師器杯CIの器形を底部外面のロクロケズリ(L)、内面のロクロナデなど須恵器の技法でつくり、淡黄橙色。

杯Hには杯HI、杯HⅡ、杯HⅢがある。茶砂土出土の杯HI(50)は器高の高い鉢形で、口縁部

下の段が小さく、口縁端部は薄い。口径19.0cm、器高7.2cm。底部内面が暗茶色に汚れる。茶砂土の杯HII (47~49)のうち、49は深い鉢形で、薄い口縁端部が小さく内肥厚する。口径16.2cm、器高6.5cm。器高の低い47・48は口縁部下の稜が明確。口径15.0~16.0cm、器高4.5~4.6cm。47は肉厚で内面が平坦な底部で、48の丸みのある底部内面に布目痕が残る。茶色砂土の杯HIII (46)は二次加熱により内面が黒変する。口径11.2cm、器高3.2cm。炭混灰土出土の杯HII (53・54)は平底気味で浅く、口径14.2~15.0cm、器高3.1~3.3cm。53は小さく外反する口縁端部で、外面全面に煤がつき黒色化する。炭混灰土の杯HIII (51・52)は口縁下部の段が明瞭で端部が丸い。口径11.6~13.0cm、器高3.2~3.3cm。52は橙茶色で赤色粒子が多く、51は茶褐色で赤色粒子を含まず、口縁部に灯明痕がある。

皿 A 皿Aにはb0手法で深いもの(63・66)とa0手法で浅いもの(64・65)がある。茶砂土出土の皿AI(65・66)はともに底部外面に木葉痕をとどめ、赤褐色で微砂質の精良土。a0手法の65は大きく内肥厚して外側に面をもつ口縁端部で浅く、底部外面の指頭痕が目立つ。口径21.6cm、器高2.6cm。内外面ともに表層が黒色を呈す。b0手法の66は直立気味の口縁で、端部は小さく巻き込み、底部外面を軽くヘラケズリする。口径20.6cm、器高2.9cm。谷木屑層の皿AI(63)は口径21.8cm、器高2.9cm。形状と手法は66と同じで、内外面の表層が黒色化し、漆塗土器の可能性のある点は65と同じ。炭混灰粘土の皿AI(64)は口縁端部の内肥厚が小さな三角形で、平らな底部外面に指頭痕が目立つ。口径21.8cm、器高2.8cm。赤褐色で微砂質精良土。

皿 B 皿B(67~70)には内彎気味に開き、端部に内傾面をもつ皿BI(67)と、直立気味の口縁部で端部が丸く肥厚する皿BII(69・70)があり、口縁部を欠く68は高台の様相から後者とみられる。67は水溜SX1226東岸端の整地土出土で、他はSX1228で68は炭混灰土、69は茶砂土、70は茶砂土と炭混灰粘土からの出土。皿BI(67)はb1手法で、底部中央が肉厚な皿部に高めの高台がつき、暗文は下段の正放射文に上段の斜放射文が幅広く重なる。淡黄褐色で微白砂質の精良土。口径19.4cm、器高3.9cm。高台径12.2cm。皿BII(69)は口径17.0cm、器高3.3cm、高台径9.8cm。底部中央に2重のラセン文、底部から口縁部に2段放射暗文を施し、外面は密なヘラミガキ。内外面外表に茶褐色の汚れがつき「漆塗土器」の可能性が高い。70は口径18.4cm、器高3.3cm。ハの字形に開く長めの高台が内寄りにつく。外面のヘラミガキが粗いが、内面の暗文は細かく密で、赤褐色の精良土。68は高台径11.0cm。低い高台と細密な暗文、内外面に黒褐色の汚れがつく点が69と共通する。図示しなかった高台径18.0cmの大型皿B片を含め、水溜遺構出土の皿Bは「漆塗土器」の可能性が高いものが多い。

皿 X (方形皿) なお、皿類には図示していない皿X(方形皿)がある。隅丸方形の底部に直立する口縁部がつく「折敷」写しの器形で、長辺16.3cm以上、短辺8.1cm以上、器高3.6cm。口縁端部はナデ調整で丸く収め、口縁部下端をヘラケズリするほかは、内外面全面をヘラミガキ調整。底部では長辺の周縁部を辺に平行に、中央部は短辺周縁と同方向に施し、口縁部は辺に平行に施す。赤色粒子を含む精良土で、表層は明橙色、断面が灰色を呈するロクロ土師器に似た焼成⁴⁾。後述の灰緑色粘砂層の土師器方形皿(1334)とは製作法や大きさ、厚みが異なる。

高杯 A 高杯A(76)はともに茶土の直上から出土し、胎土・色調が共通する杯部、脚部、脚端部の接合しない破片から復元した。杯部は口径31.5cm。口縁端部はわずかに内肥厚し、外面を分割ヘラミガキ、内面に2段の放射暗文を施す。脚柱部は外面を縦方向のナデ調整、内面にしほり

目と粘土紐継ぎ目が残りに、脚裾部は端部をヨコナデ調整で丸く収める。茶褐色で長石・雲母片を含む砂質の胎土は杯G類に通じ、脚柱部の形状・技法は高杯Cに通じる特徴で、飛鳥V以降に出現する一般的な高杯A（例えば墨書土器Fig. 93-48）にみられる脚柱部のヘラケズリを欠く。高杯Aは本遺跡では、本例を含めて3点のみの稀少な器種である。壺A（77）は張りのある体部と直立する口頸部からなる。口頸部内外面は平滑なヨコナデ調整。上部で薄くなる口縁の端部は丸く内肥厚し、体部内面は粗いナデ調整。体部外面に弧状の分割ヘラミガキ、口頸部外面に縦方向のヘラミガキを施すが、内面には施さない。口径16.2cm。赤褐色で微砂質の精良土。

Fig. 3に掲げた土器は、水溜SX1230の西岸・掘立柱塀SA1237と重複する位置で、掘立柱塀建設以前の埋め立て整地に関わる土層「溝上層」から出土した土器で、水溜構築の上限を示す。土器には、図示した土師器杯AI（83）、杯CI（81・82）、杯CⅢ（78～80）、高杯C（84）のほかに須恵器杯G、壺K、甕A（193・196・197）などがあり、杯Cの79～82および須恵器杯Gは下層の流路SD1173に起源があり、陸橋の護岸にも使われている砂岩塊とともに出土した78・83・84は飛鳥Ⅲに属するとみられる。

杯AI（83）はb1手法で、わずかに内彎する口縁の端部が小さく内肥厚する。肉厚な底部内面に4重以上の細かなラセン暗文、口縁部内面には細密な2段放射文を施す。下段は正放射文で、上段の斜放射文の幅が広い丁寧なつくり。口径18.4cm、器高7.5cm、径高指数33。杯CⅢ（78）はa0手法。口縁端部が尖り気味で薄く、淡褐色で雲母片を含む胎土。口径10.5cm、器高2.8cm。高杯C（84）は口径17.6cm、器高10.5cm。口縁端部に内傾面をつくり、暗文はラセン文と1段正放射文。外面のヘラミガキを欠き、2段成形の杯部が灰緑色粘砂層例に比べて浅い。赤褐色で赤色粒子、微白砂を含む精良土。杯CI（81）は口径16.6cm、器高5.6cm、径高指数34。小さな平底から開く口縁部が端部近くで内屈する。b0手法。口縁端部に内傾面をもち、内面の細密な1段放射暗文は長く口縁端部に至る。橙褐色を呈し、白色微砂を含む精良土。杯CI（82）は口径20.2cm、器高6.0cm、径高指数30。大型で比較的浅く、緩やかな弧を描いて直立する口縁の端部が小さく外反し内傾面をつくる。b1手法で粗いヘラミガキ、ヘラケズリは底部のみの一方向。白色微砂を含む精良土。灰緑色粘砂層の一部に類似する。杯CⅡ（79・80）は口径12.4cm、器高

水溜構築
の 上 限

杯 AI

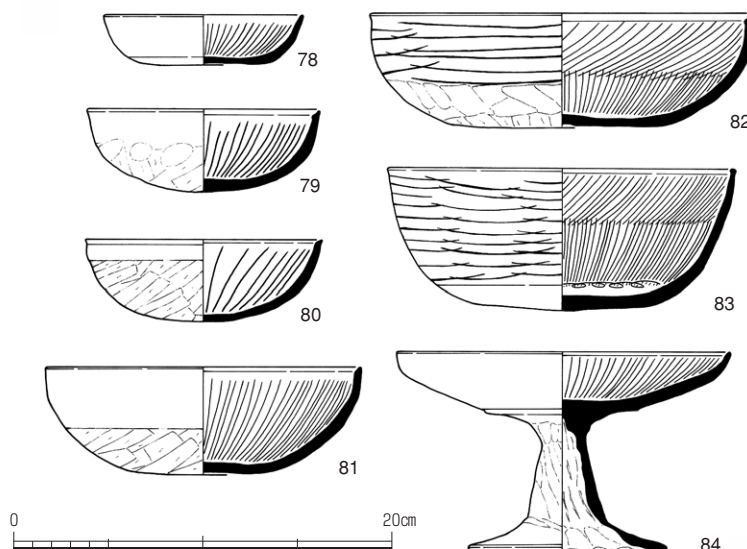


Fig. 3 水溜遺構出土土器（3）1:4

太い放射暗文

4.4cm。径高指数36。b0手法で、口縁端部に内傾面をつくり、口縁上半近くまでのヘラケズリと、内面の太く粗雑な1段放射暗文が、甘樫丘東麓SX37出土土器⁵⁾に類似する。

壺B(89)は茶砂土出土で、緩やかに外反する口縁部の端部を丸く収め、体部外面は縦方向のナデ調整で、内面に粘土紐の継ぎ目が残る。体部下半～底部の外面には成形時の作業台の圧痕や皺が残り、内面は多角形になでつける。赤色粒子を多く含む「大和B型」の甕類と共通する胎土で、口径9.6cm、器高7.2cm。

茶土・茶砂土の甕A

茶土・茶砂土出土の甕Aには口径28.0cmのAⅠ(85)、口径約14～15cmのAⅢ(86・87)、口径12.0cmのAⅣ(88)がある。茶土出土の甕AⅠ(85)は大きく外反する口縁の端部を上方に肥厚させて外側に面をつくる。口縁端部までの外面に縦ハケ目、内面に幅広い斜めハケ目を施したのち、口縁部外面から体部内面をヨコナデ調整。外面の縦ハケ目はかすかである。淡褐色で砂粒を多く含む胎土で、内面に焦げ付きが厚く付着する。遺存する範囲に把手に関わる痕跡がないことから甕Aとしたが、口径28cmの大型で甕BⅠの可能性があり、外反度と口縁端部の肥厚が大きいことから飛鳥V以降に属する可能性がある。甕AⅢ(86)は口径14.6cm、器高13.4cmの「大和A型」で、弧を描いて外反する口縁の端部を上下に肥厚させて面をつくる。口縁部～頸部の外面に縦方向の一次ハケ目、内面に断続するヨコハケ目を施し、内外ともにナデ調整する。体部外面は中程に二次ハケ目、底部に三次ハケ目を施し、内面には外面の二・三次ハケ目に対応して、小さな円形の傷がある当て具痕が残る。赤褐色で赤色粒子を含む精良土。外面全面に煤が付着し、内面は口縁部～頸部下までに焦げ付きの汚れが付着する。甕AⅢ(87)は口径13.9cm、

大和A型

器高14.4cmの「大和B型」で、外反する口縁の端部は丸く収める。口縁部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向の断続するハケ目ののちに横方向のナデ調整。体部外面もかすかな縦ハケ目で底部外面は横方向のナデ調整。体部内面は横方向のナデ調整で底部は指押えおよびナデ調整する。茶灰色を呈し微白砂を含む胎土で、外面の煤の付着が著しくない。86・87はともに飛鳥V以降に属し、水溜SX1232の茶砂土出土。甕AⅣ(88)はSX1228の茶砂土出土。体部外面を頸部まで斜めにヘラケズリし、内面は口縁端部まで横方向のハケ目調整。器壁の薄い口縁の端部を小さく外反させる。赤褐色の微白砂を含む精良土。体部外面を広くヘラケズリする甕Aは、後述の灰緑色粘砂層(1343)や石神遺跡SE800などにわずかにみられるものの珍しく、石川県小杉流通団地No.18-B遺跡⁶⁾など北陸地方の出土例も主体を占めるものではない。

大和B型

炭混灰土・谷木屑層の甕A

炭混灰土・谷木屑層出土の甕Aは、大きさでは口径約19～21cmの甕AⅡ(93・94・105・108)、口径13～14cmの甕AⅢ(101・103・104)、口径12cm以下の甕AⅣ(100・102)があり、調整法は「大和A型」「大和B型」「河内型」のほか多様なものがある。炭混灰土出土の甕AⅡ(93)は口縁部内面のナデによる段状の凹凸が特徴的で、肩部内面に網目状の細線をもつ当て具痕が残り、肩部以下の体部内面は横方向にヘラケズリし器壁が薄い。体部外面の細かな縦ハケ目は、口縁部外面のヨコナデで消されている。砂を多く含む粗い胎土で淡黄灰色を呈し肩部外面に黒斑がある。口縁部内面の段状ナデと体部内面の横方向ヘラケズリは京都府綾中遺跡、青野南遺跡など丹波北部～日本海沿岸部に出土例がある「青野型甕」の特徴を備えている⁷⁾。甕AⅡ(94)は厚手で直立する頸部から強く外反し、口縁端部は上方に尖り外方に面をもつ。口縁部～体部外面と頸部内面に粗い条痕のハケ目を施し、口縁部外面と体部内面はヨコナデ調整。淡黄褐色で微砂を含む胎土ともども飛鳥地域では珍しい。谷木屑層の甕AⅡ(105)は体部外面を細かな縦ハ

青野型甕

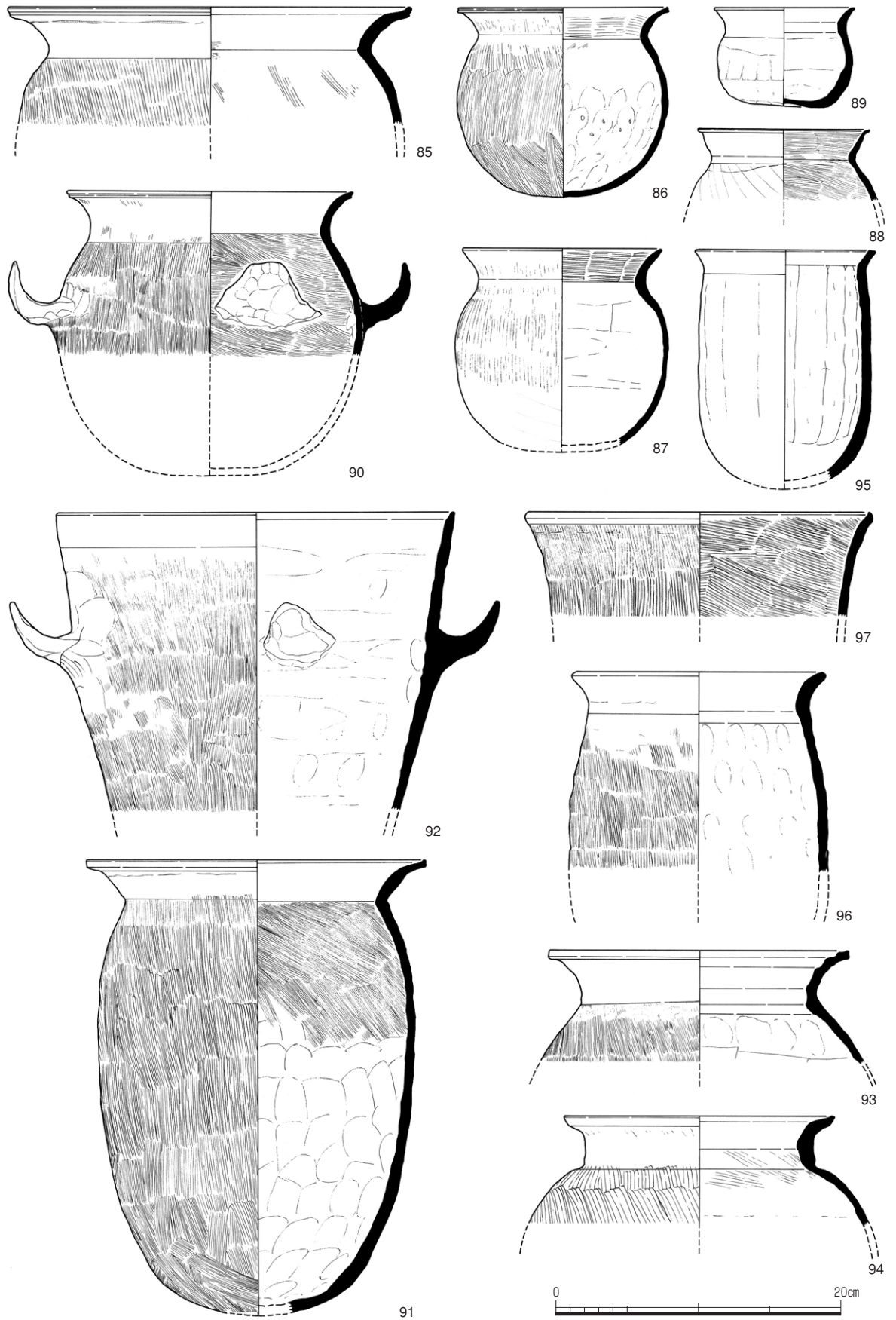


Fig. 4 水溜遺構出土土器 (4) 1:4

ケ目、内面を縦方向のヘラケズりする「河内型」。頸部のくびれと口縁部の外反が弱く、口縁端部が丸く内肥厚して凹線状を呈する点に相違がある。赤褐色で赤色粒子・金雲母片・微白砂を多く含む精良土。体部外面全面に煤が厚く付着する。谷木屑層出土の甕AⅡ(108)は93と同じ口縁部内面を段状になでる「青野型甕」で、口縁端部を丸く収め、内面に粘土紐の継ぎ目があり、残存する範囲内に横方向のヘラケズりはみられないものの胎土色調が共通する。甕AⅢ(101)と甕AⅣ(102)は、体部内面を縦方向にヘラケズりする「河内型」で、赤褐色で微砂質の精良土、硬質な焼成が共通する。101の口縁部が内彎気味で内面を横ハケ目、端部が内肥厚して外側に面をつくるのに対して、102の口縁部が外反気味で内面をナデ調整、端部が外肥厚して上方に面をつくる違いがあり、体部外面の縦ハケ目の細かさと体部の形状にも小異がある。101の口径13.6cm、102の口径11.8cm。甕AⅢ(103・104)は「大和A型」の調整法で、内外面の全面に炭化物や煤による汚れがつく。103は体部が縦長気味で、丸く外反する口縁の端部を小さく内肥厚して外方に面をつくり、口縁～肩部内面を横方向のハケ目調整。体部下半には当て具痕が残る。口径13.7cm、器高16.0cm。104は球形の体部に直立気味の長い口縁部がつき、口縁端部は細く丸く収める。体部内面には粘土紐継ぎ目と当て具痕、頸部に横ハケ目があり、口縁部内面上半から外面はヨコナデ調整。口径14.4cm、器高15.7cm。直立気味の長い口縁部は飛鳥Ⅰの甕Aに多い特徴に通じる。甕AⅣ(100)は体部外面下半をヘラケズリ調整する「近江型」とみられるが、内面は板状工具によるナデ調整で、底部に工具の縁辺による傷が残る。淡黄褐色を呈し、内外面に著しい炭化物と煤による汚れがつく。口径11.8cm、器高11.6cm。

河内型

近江型

炭混灰粘土の甕A

甕AⅣ(98・99)は炭混灰粘土出土である。98は「大和A型」の調整法で、口縁端部は上方につまみ出して外方に面をもつ。口径12.8cm、器高12.2cm。橙茶色を呈する砂粒を含む胎土で、外面全面と頸部下までの口縁部内面に黒褐色の煤が付き、体部内面は茶褐色に汚れる。99は肩部近くまでの外面を斜め方向にヘラケズリし、体部内面上半はかすかな斜めハケ目、下半～底部内面はナデ調整。体部外面に煤の付着が著しく、頸部には吹きこぼれの跡があり、暗橙褐色を呈する微砂質の胎土。これらの特徴は前述の甕(88)などと共通する。

茶砂土の甕B

甕B(90・106・107)には口径22～24cmの甕BⅡと、口径約20cmの甕BⅢがある。SX1228茶砂土出土の甕BⅢ(90)は口径19.8cm。緩やかに外反する口縁の端部を上方に肥厚させる。体部上半は外面を縦ハケ目、内面を横ハケ目調整するが、下半の調整は欠失していて不明。体部中程上寄りに大きな三角形の把手を貼り付ける。体部～頸部内面に茶褐色の汚れが付着し、外面には口縁端部以下の全面に煤が付着する。明橙褐色を呈し赤色微粒子を含む精良土で、口縁や把手の形状・特徴および形態・調整から、飛鳥Ⅳに属す「大和A」系の甕とみられる。SX1228の谷木屑層出土の甕BⅡ(106・107)は、直線的に外傾する口縁部と内面をハケ目調整ののちに縦方向にヘラケズりする体部からなる「河内型」の特徴をもつが、器壁が厚いことと赤色粒子や雲母片を多く含む胎土は通有の「河内型」と異なる。口径24.4cm、器高21.7cmの106が、頸部外面に粗い縦方向の一次ハケ目、体部上半に斜めの二次ハケ目を施し、体部下半をヘラケズりする「近江型」調整法の特徴を併せもつものに対して、口径22.2cmの107は、体部～底部の外面を縦方向にハケ目調整し、ヘラケズリ調整を欠く。両者は体部・口縁端部の形状もやや異なるが、把手が肉厚な三角形で、器壁が厚く、内面に汚れがあるものの外面の煤が明確でない点では共通している。

谷木屑層の甕B

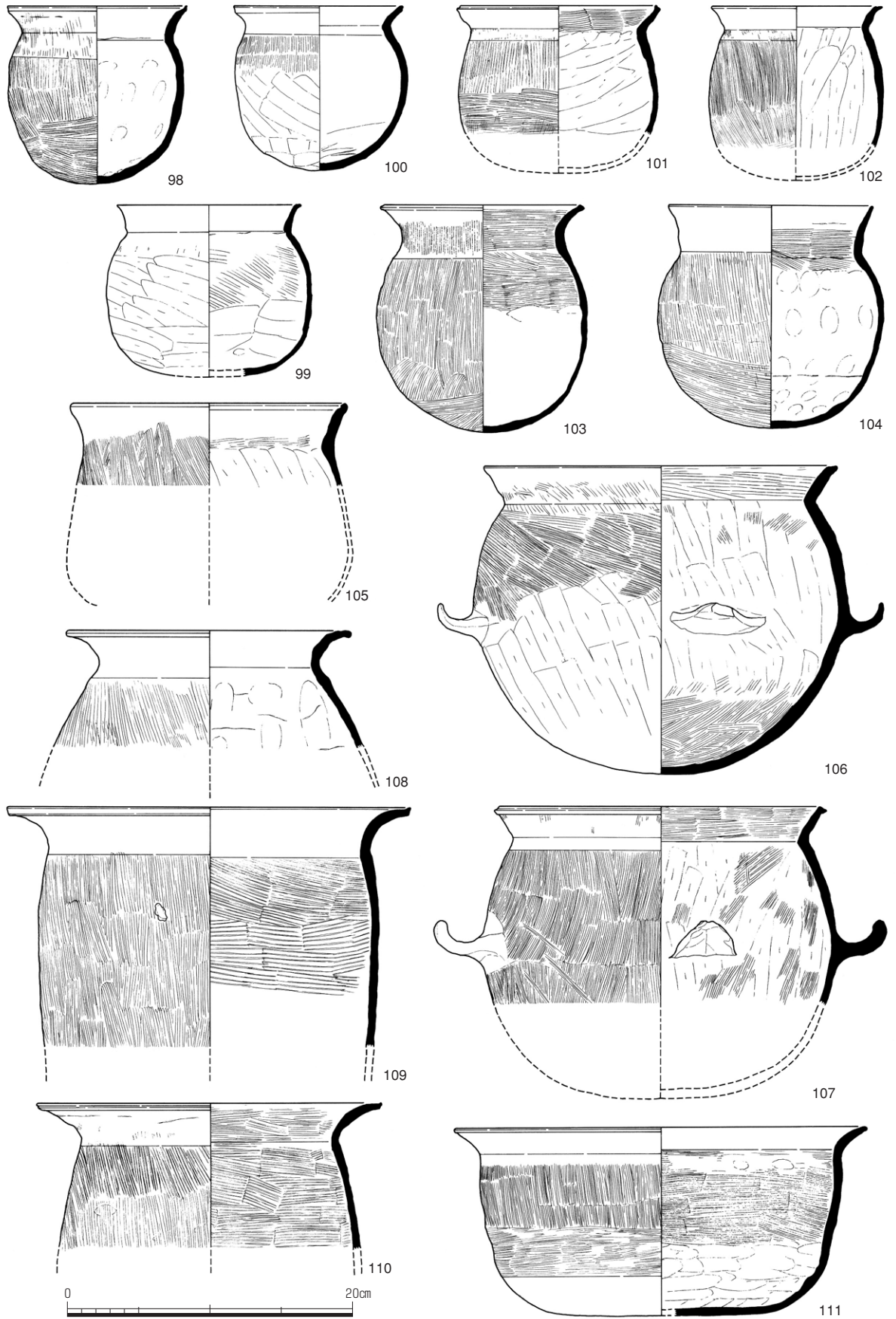


Fig. 5 水溜遺構出土土器 (5) 1:4

- 茶砂土の甕 C
甕 C (91・95・96・109・110) には法量でCI (91・109・110)、CII (96)、CIII (95) があり、大半がCIでCII・IIIはごく少ない。SX1228の茶砂土出土の甕 C (91) は口径23.6cm、器高31.7cm。体部外面縦ハケ目、内面上半に斜めハケ目を施し、内面下半に当て具痕が残る典型的な「大和A型」。口縁部は内側に稜をもって外反し、端部の外方に面をつくる。口縁部外面には粘土紐継ぎ目が残る。頸部下より上方が赤色化し、体部外面には煤が厚く付着するが、底部の周縁に小さな円形の煤の少ない箇所がある。支脚の位置であろう。赤褐色で砂を含む精良土。飛鳥Vに属する。SX1228の谷木屑層出土の甕CI (109・110) は体部内面上半に粗い横ハケ目、下半をナデ調整する点で91と異なるが、明褐色を呈し赤色粒子を含む精良土。109は口径27.8cmで口縁端部外方に明確な面をもつ。内面には広く茶色の焦げつきがみられ、頸部外面に煤がつかない部分があり、竈口に接して掛けられたとみられる。110は口径24cm、外反する口縁部の内面にハケ目が残る。いずれも飛鳥Vに属する。甕CII (96) はSX1226の炭混灰土出土。肉厚で緩く外反する口縁の端部はナデ調整で丸く収め、体部外面の縦ハケ目は頸部以上には及ばない。体部内面は押え痕とナデ調整。淡黄色を呈し、砂質の胎土に石英粒を多く含む。口径17.2cm。甕CIII (95) は砲弾型の体部に外傾する短い口縁部がつく。体部内面の縦方向ヘラケズリと端部上方に面をもつ直線的な口縁部は「河内型」の特徴であるが、体部外面のハケ目が明瞭でなく、幅2.5cm間隔で縦方向の平坦面がある。色調・胎土は「河内型」甕Aと酷似する。底部外面が加熱によって赤色化するほかは、体部全面に煤が付着し、体部内面下半は茶褐色に汚れる。口径12.6cm、器高16.8cm。SX1224の炭混灰土出土で、炭層4A層の259と酷似する。
- 甕
甕 (92) は直線的に開く口縁部の内外面をヨコナデ調整し、端部は凹面状の内傾面をなす。先の細い三角形で「挿入式」接合法の把手と胎土・色調・調整法が大和B型の甕Bと類似する。口径27.6cm、残存高21.0cm。SX1231の茶土・茶砂土出土。甕 (97) はわずかに開く口縁の端部を上方につまみ出し、外傾面をつくる。外面を縦方向、内面を斜め方向に施した条の粗いハケ目調整および赤褐色で赤色粒子や石粒を多く含む胎土が甕B (90)、甕C (110)に通じる。口径24.0cm。SX1226の炭混灰土出土。ともに飛鳥IV～Vに属する。
- 鍋 A・B
鍋A (111) は平底で、体部外面下半を横ハケ目調整、底部をナデ調整し、内面は横方向になでつける「大和B型」の成形調整法。口縁部の形状と色調、胎土も「大和B型」の甕類に通じる。全周が遺存しないので把手がつく鍋Bの可能性もある。口径28.6cm、器高12.5cm。SX1228の谷木屑層出土。墨書土器の鍋B (Fig. 98-86) は口縁端部の外傾面、「貼付式」の把手、色調・胎土が「大和A型」の甕Bに酷似し、飛鳥IV～Vに属する。口径24.8cm、残存高10.2cm。
- 水溜遺構の須恵器
須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、杯G、椀C、皿A、皿B、鉢A、鉢C、盤A、盤B、壺K、平瓶、甕などがあり、墨書土器杯AIII (Fig. 97-75、PL. 263) や、漆付着土器の杯BIII・椀A (PL. 388-16・22・36)、漆壺の平瓶、短頸壺 (同-45・46)、被熱土器の杯A・Gがある。漆付着土器を含めても有台の杯Bは少なく、無台の杯A類と大型の皿・盤類の多さが目立つ構成で、それらには使用痕や汚れの付着する頻度が著しい傾向にある。
- 杯蓋の大別
杯B蓋には見受けのかえりをもつa類 (112~117・156・162) とかえりのないb類 (118~124) があり、それぞれ口径で蓋a類III (112~115)、a類III (116・117・162)、a類IV (156) および、b類II (118・119)、b類III (120~124) に分けられる。層序別では茶土出土 (113・114・118)、茶砂土出土 (115・119~121)、炭混灰土出土 (116・122~124・156・162) があり、茶砂土・炭混

灰土ともにb類が多く含まれ、層序の違いによるa類とb類の偏りは認められない。また、組み合うべき杯Bは少量で、口径の対応も整合性を欠いており、これらの杯B蓋には、杯Ag、椀Ag、椀Bなどの蓋が含まれるとみられる。

蓋aⅢ(112~115)は口径16.7~17.2cm。かえり径14.4~14.8cm。口径15.7~16.2cmの杯BⅢ等にかぶる蓋。頂部が直線的なもの(112)と、丸みのある笠形のもの(113~115)があり、つまみに大(112・115)と小(113・114)がある。蓋aⅢ(112)は水溜SX1230・1228を分かち陸橋SX1229の下に潜り込む砂層から出土した水溜遺構の初期段階の土器で、完形品。直線的な頂部の中央が肉厚で、口縁端部は丸く内肥厚し、かえりは細い。つまみは口径に比して大きく扁平で、暗灰色を呈し、黒色微粒子の多い微砂質土。ロクロケズリの方向と範囲は外面全面の著しい降灰のために不明。蓋aⅢ(113・114)はともに丸みのある頂部で小振りのつまみだが、113のつまみは先端の丸い宝珠形で、かえりが小さく、器壁が薄い頂部外面を広くロクロケズリ(L)する。114は中央が肉厚な頂部外面を広くロクロケズリ(R)し、外縁に稜をもつ円錐形のつまみと、基部の大きなかえりをもつ点が異なる。蓋aⅢ(115)は大振りで高めの宝珠形のつまみだが、頂部中央が薄く、外面のロクロケズリ(R)の範囲が小さめ。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。113~115はそれぞれ異なる産地の製品とみられる。

蓋 a 類

水溜初期
段階の蓋

蓋aⅢ(116・117・162)は口径14.7~15.4cm、かえり径12.6~12.8cm。口径13.7~14.5cmの杯BⅢ等にかぶる蓋。116は丸い笠形の頂部外面1/2をロクロケズリ(R)し、内面は多方向のナデ調整。伏せた杯B身と交互に重ねた重ね焼きによって、口縁外縁部の内外面が黒色を呈するほかは、灰白色で石粒を含む胎土。117は低い笠形の頂部をロクロケズリ(R)し、やや高い宝珠形のつまみがつく。外面は厚い降灰がかかり暗灰色、内面は青灰色で黒色微粒子を多く含む精良土。162は丸く高い笠形の頂部で細いかえりが口縁部よりも下方へ飛び出す点で、一般的な杯B蓋とことなり、椀B・鉢などにかぶる可能性が高い。頂部外面は2/3をロクロケズリ(R)、内面も2/3を多方向のナデ調整。口縁外縁部外面のみが黒灰色を呈し、他は淡灰色。白色土を含む微砂質土。口径15.0cm、かえり径13.0cmで、同地区・層序出土の杯AgⅢ(163)に対応する大きさで、内面を広く多方向にナデ調整する点でも類似する。蓋aⅣ(156)は口径12.5cm、かえり径9.2cm。杯G蓋に似た大きさであるが、頂部外縁の屈曲と高い円錐形のつまみは、飛鳥Ⅲ~Ⅳの杯B蓋のそれに近く、平底で有蓋の杯AgⅤ(157~159)にかぶる蓋とみられる。

杯Ag類の蓋

蓋bⅡ(118・119)は直線的で扁平な頂部で、口径18.0cm。口径16~17cmの杯BⅡにかぶる蓋。118は薄い器壁の頂部外面をロクロケズリ(L)、内面は中央部までのロクロナデで、指頭痕が多数残る。口縁端部は短く丸い折り返しで、つまみは大振りで扁平な宝珠形。外面は淡青灰色で全面に薄い降灰がかかり、内面は淡灰色。黒色粒子を多く含む微砂質土で東海地方の産品⁸⁾。119は肉厚な頂部に中央部がわずかに盛り上がる扁平な宝珠形つまみがつき、鈍く折り返した口縁端部が薄くて長い。頂部外面ロクロケズリ(R)、内面は広い範囲を多方向のナデ調整。淡青灰色で砂粒を多く含む胎土。蓋bⅢ(120~124)は口径13.8~16.1cm。口径13~15cmの杯BⅢ等にかぶる蓋。120は丸みのある笠形の頂部で屈曲して鈍く折り返す口縁部。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。頂部外面の降灰が著しい。121・122は直線的で低い笠形の頂部を広くロクロケズリ(L)し、大振りなつまみがつく。頂部内面中央部までをロクロナデ調整し、青灰色で黒色粒子を多く含む精良土。口縁端部の折り返しに長短があり、つまみ上面の形状も異なる

蓋 b 類

が、ともに東海地方、猿投窯の製品で、茶土・茶砂土出土の121がより新相を示すとみられる。123は肉厚で扁平な頂部外面を広くロクロケズリ（R）。基部の大きなつまみを欠く以外は完形で、太く鈍い折り返しの端部が尖る。口径14.4cm。淡灰色を呈する外面には淡緑色の降灰が著しく、内面の火膨れがはじけた小孔に墨と朱が詰まる転用硯。124は肉厚で扁平な頂部に上面が平坦な小振りのつまみがつき、口縁の折り返しは鈍い外傾面をなす。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

杯 B 杯B（125～130）には、高い高台の杯BⅢ（129）と低い高台の杯BⅡ（130）、杯BⅢ（125～128）があり、層序別では茶砂土（130）、炭混灰土・谷木屑層（127～129）、炭混灰粘土（125・126）がある。漆附着土器の杯B（PL.388・389-22など）を含めても、蓋類の半分量程度と少ない。

杯BⅢ（129）は丸みのある底部内寄りに「ハ」の字に開く長い高台がつき、口縁端部はかすかに外肥厚して上方に鈍い面をつくる。底部外面ロクロケズリ（R）後ナデ調整、内面中央部に多方向のナデ調整。淡青灰色で砂粒を多く含む。口径14.6cm、器高5.9cm。大官大寺下層SK121出土例と同法量で、飛鳥Ⅲに属する。なお、茶砂土出土の漆附着土器杯BⅢ（PL.388-22）は口径14.4cm、器高5.1cm、底部外面ロクロケズリ。129と同様に飛鳥Ⅲに属する。杯BⅡ（130）と杯BⅢ（128）は、口径が異なるが器高が同じで、腰部に稜をもち、ロクロケズリ（R）した垂れ気味の底部外面外寄りの斜面に、縦長の高台がつき、黒色粒子を多く含む胎土も共通する。ともに東海地方の製品。130は口径16.4cm、器高4.7cm。全体に器壁が薄く、口縁端部は丸く収め、淡青灰色を呈す。128は底部の中央がやや肉厚だが、口縁部の器壁が薄く、暗赤灰色を呈し、胎土に白色土の縞をもつ。尾張猿投窯の製品とみられるが、底部外面の「T」字形のヘラ記号は尾北高蔵寺2号窯にも類例がある。口径14.0cm、器高4.7cm。口径は同じく東海地方の製品である蓋b類Ⅲ（121）に対応する。杯BⅢ（125・126）は口径14.5～15.0cm、器高3.7～3.8cmで、口径に比して器高が低いもの。ともに底部外面ロクロケズリであるが、125は腰部が丸く、内底面にロクロ目をもち、内寄りにつく高台が強く外肥厚するのに対して、126は腰部に稜をもつ肉厚で平坦な底部で、内面は広く一方向にナデ調整し、小さく外肥厚する高台がやや外寄りにつく。胎土も125が黒色粒子を多く含み、126には砂粒が多く含まれ、産地を異にする。127は口径13.8cm、器高4.2cm。口縁部の開きが大きい、ヘラ切り不調整の底部外面の内寄りに方形の高台がつき、飛鳥Ⅳに属する。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。

椀 C 椀C（131）は内彎気味に大きく開く口縁の端部が鈍い内傾面をなし、平らな底部の縁辺にやや踏ん張る低い高台を付す。口縁部下半と底部外面を丁寧なロクロケズリ（R）。内底面はロクロナデで滑らかに仕上げ、中央部に一方向のナデ調整を施す。口縁端部から高台側面までに降灰がみられ、淡青灰色を呈し黒色粒子を多く含む胎土で、尾張猿投窯産。口径19.4cm、器高8.3cm。SX1230の茶砂土・茶土出土。

無台の杯類
の細別

無台の杯A類（132～155・157～161・163）には平底のもの（132～149・157～159・163）と丸底気味のもの（150～155・160・161）とがある。前者には降灰・重ね焼き痕の様子から、蓋と身と合せ口あるいは交互に重ねて焼成した有蓋と考えられるもの（杯Ag：132～137・139・140、椀Ag：141）と、火礫きや降灰の様子から基本的に同一器形を重ね焼きした無蓋と考えられるもの（杯Aa：138・142～149）とがあり、後者（杯Ac・杯C）はいずれも無蓋とみられる。層序別では、杯Aaは茶土（142～145・147）、茶砂土（148・149）に多く、炭混灰土（138・146）には少ないが、炭混灰土には無蓋の杯Ac（151～154）が多くあり、水溜遺構全体での無蓋の杯Aの多さが目立

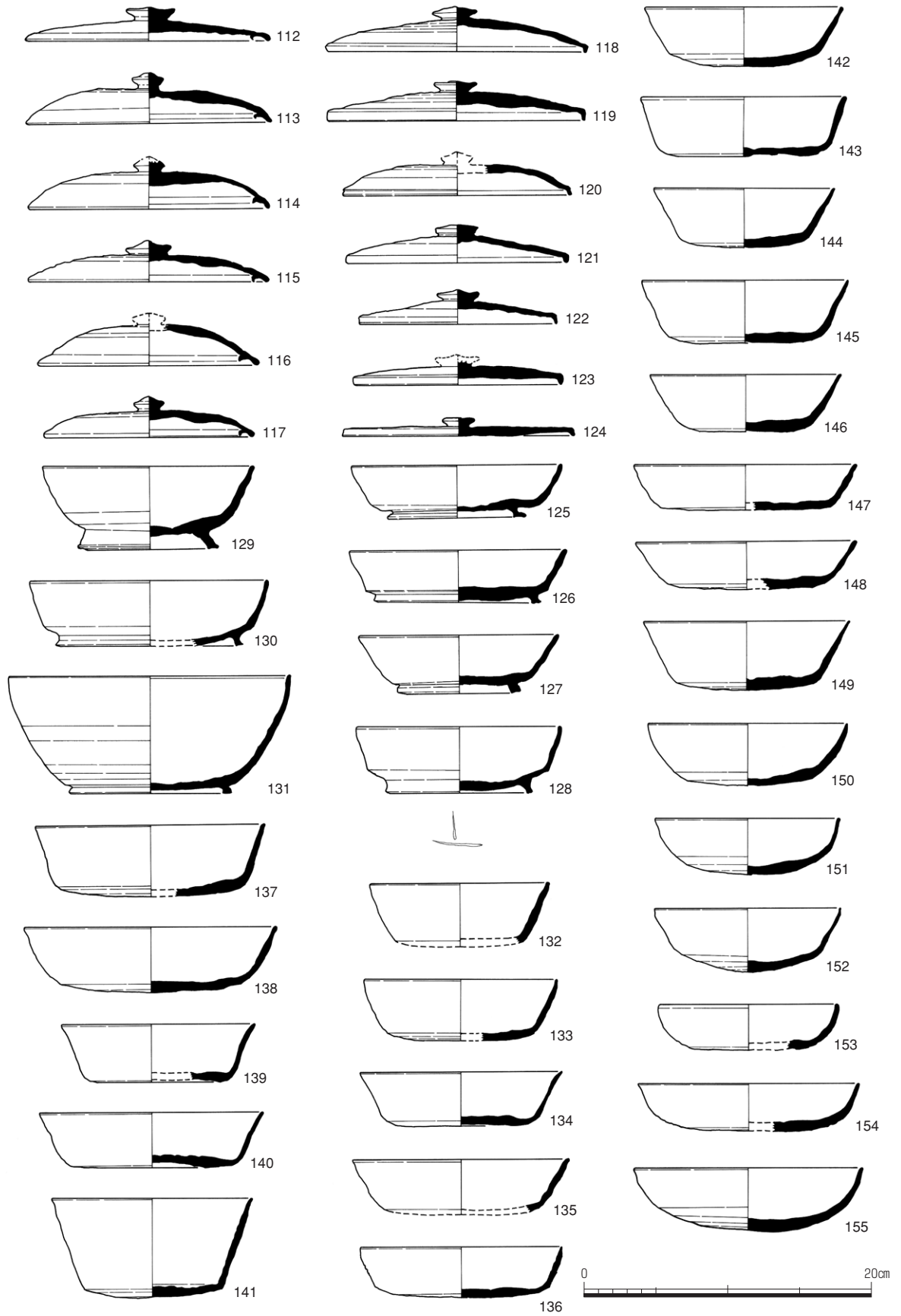


Fig. 6 水溜遺構出土土器(6) 1:4

っている。法量では杯AII（口径17.0～18.0cm）、杯AIII（同13.5～15.8cm）、杯AIV（同12.0～13.0cm）、杯AV（同9.0～11.0cm）があるが、有蓋の杯AgVと杯Gとの区別は難しい。

杯 Aa 類 無蓋の杯Aaには、口径でⅡ（138）、Ⅲ（142・143・145・147～149）、Ⅳ（144・146）の別があり、Ⅲには器高の低いもの（147・148）がある。143がやや直立気味で肉厚の口縁部で、底部外面がヘラ切り不調整であるほかは、いずれも器壁の厚い底部外面をロクロケズリ（R）し、斜めに開く口縁の上方が薄い特徴をもつが、形態と胎土には微細な差異がある。腰部にやや丸みがある杯AaII（138）は、底部外面は切り離しの凹凸が残る軽いロクロケズリ（R）で、内面は多方向のナデ調整。灰白色を呈し雲母片を多く含む砂質の胎土。口径17.4cm、器高4.6cm、径高指数24。底部にやや丸みのある杯AaIII（142）は淡灰色で白色土と黒色微粒子を多く含む胎土。口径13.6cm、器高4.2cm。径高指数31。口縁中程でさらに開く杯AaIII（145）・杯AaIV（144）は淡青灰色で含まれる白色土と黒色粒子がロクロケズリ調整で流れる点でも類似している。より器高の高い杯AaIII（149）は口径14.6cm、器高4.9cm。径高指数34。肉厚な底部と薄い口縁部、淡青灰色で黒色粒子が目立つ微砂質の胎土もAaIV（146）と共通する。器高の低い杯AaIII（147・148）は、口径15.2～15.4cm、器高3.2～3.4cm。径高指数21。147は端部を強くロクロナデして薄く尖らせた口縁部で、淡青灰色で白色土の縞と微青粒子を多く含む胎土。猿投窯産とみられ、口縁上部に降灰がかかり底部内外面に火襻きをもつ。

杯 Ac 類 杯Acには、口径でⅢ（150・154）とⅣ（151～153）があり、形態では、器高が高いもの（150・152）と低いもの（151・153・154）およびロクロ土師器杯Cに似た杯AcIII（155）とがある。150・152は口縁部の内外面に火襻きが明瞭に残る同一器形の重ね焼き。底部外面を丁寧なロクロケズリ（R）で仕上げ、内面には4方向のナデ調整。内彎気味の口縁端部が薄く尖り、白色土と黒色粒子を多く含む微砂質土で、杯Aa（144・146）や杯Ag（133・136）などと同じ東海地方産とみられる。杯H蓋に似た器形の151は内面と口縁上端部外面とに降灰がみられる。口径12.7cm、器高3.9cm。器高の浅い153は底部外面ヘラ切り後ナデ調整。154は底部外面ロクロケズリ（R）で、白色土の縞をもつ緻密な胎土。内面に著しい炭化物の付着がある。口径15.3cm、器高3.4cmで杯AaIII（147・148）と同一法量で、内底部の形状が異なる。杯AcIII（155）は口径15.8cm、器高4.5cm、径高指数28。底部外面ロクロケズリ（R）、内面は多方向のナデ調整で、口縁端部が小さく外反する。青灰色を呈し黒色粒子を多く含む。口縁部上半の内外面に降灰がある同一器形重ね焼きであるが、151・153・154とともに杯Ac類では希少な形態である。

杯 Ag 類 有蓋の杯Agには、口径でⅢ（134～137・140）とⅣ（132・133・139）とⅤ（157～159）があり、ⅢとⅣにはそれぞれに器高4.5～5.0cmの高い一群（137・132）と、器高3.6～3.9cmの低い一群（140・134～136）とがある。底部外面の調整には、ロクロケズリ（R）のもの（133・134・137）、ロクロケズリ（L）のもの（136）、ヘラ切り不調整のもの（139・140）があり、色調も暗灰色（132・134）、青灰色（133・136・139・140）、灰色（137）、茶褐色（135）などさまざまであるが、いずれも口縁部外面が降灰のかかる濃色系、内面と底部外面とが淡色系の色調で、蓋と交互の重ね焼きである。層序別では、茶土（133・139）、茶砂土（132・134～136）、炭混灰土（137）、炭混灰粘土（140）に分かれるが、杯AgIII（134・140）と杯AgIV（139）は、外反する薄い口縁部と、上げ底気味のヘラ切り不調整（R）の底部、黒色粒子を多く含む胎土が共通する同形品で、層序の違いをこえて出土し、杯AgIII（136）には茶砂土と炭層4C層出土片が接合している。136

は口縁端部の外側を強くなでて尖り、底部外面をロクロケズリ（L）で平滑に整え、黒色粒子を多く含む微砂質土で、内面が薄茶色を呈す猿投窯産。底部外面に「二」のヘラ記号をもつ。ロクロケズリの方向が異なるが、口縁端部の特徴が同じ133および杯AcⅢ（150）も同じく東海地方産とみられる。

杯AgV（157～159）、杯AgⅢ（163）と杯G（160・161）は、いずれも谷木屑層出土。杯AgⅢ（163）は136等と同法量であるが、底部外面ヘラ切り不調整で、口縁端部の形状が異なる別産地の製品。底部内面を広く多方向にナデ調整することと、口径を除けば杯Gと変わらない。杯AgV（157～159）は、底部外面ヘラ切りのちナデ調整で、下層遺構起源の杯Gと類似するが、底部内縁に稜をもち、口縁部が直線的に開く点で、口縁が直立する杯Gと異なることや、杯AgV（157）と口径の上で組み合う杯蓋a類Ⅳ（156）の、つまみ・口縁部・かえりの形状が杯G蓋とは異なることから、杯Agの最も小型の器種とみるべきものである。157の口径10.6cm、器高3.4cm。158の口径10.0cm、器高2.8cm、159の口径10.0cm、器高3.3cm。杯G（160・161）は丸みのある底部外面をヘラ切り後ナデ調整し、口縁部は直立気味。160は口径9.0cm、器高2.8cm。内面に金属系光沢のある汚れが付き、二次加熱により赤紫色を呈す。下層起源の杯Gを被熱土器として転用した可能性がある。161は上半で小さく外反する口縁で、口径10.8cm、器高3.6cm。暗青灰色の砂質土。下層起源の杯Gの可能性はあるが、二次加熱などはみられない。

杯Agと杯G

椀A（141）は口径13.8cm、器高7.0cm。口縁部外面にのみ降灰がみられる有蓋の器種で、法量では蓋a類の117やb類の123が対応する。肉厚でやや垂れ気味の底部外面をロクロケズリ（L）し、口縁端部は外方を強くなでて薄くする。内面と底部外面が淡黄灰色で他は淡灰色を呈し、黒色粒子を多く含む胎土で、東海地方産とみられる。SX1230の茶土出土。漆附着土器の椀AⅣ（36）は口径12.0cm、器高4.8cm。底部ロクロケズリ。灰色で砂粒を多く含む胎土。SX1228の炭混灰土出土。

椀 A

皿類には、高台が無く口縁部が直線的な皿A（171～176）、高台が無く口縁部が内彎気味に開く皿C（177～180）、高台をもつ皿B（167～170）および皿B蓋（164～166）とがある。皿Aには口径の大小に加えて、器高の浅いもの（171・172）と深いもの（173～176）があり、直立気味の口縁で口縁端部に肥厚と面をもつもの（173・174・176）と、斜めに開き鈍い内傾面とするもの（172・175）などの小異がある。皿Aの底部外面は、173を除き、ロクロケズリ（R）で、内面は平坦な部分について多方向にナデ調整する。皿A（171・172）は口径23.6～24.8cm、器高2.7～3.3cm。171は青灰色で砂粒が少なく、172は灰白色で砂粒の多い違いがあるが、ともに茶褐色の汚れが部分的につく。171は炭混灰粘土、172は茶土相当層出土。皿A（173）の口径22.0cm、器高4.8cm。174の口径23.5cm、器高3.6cm。173は口縁下半外面と垂れ下がる底部中央部とをヘラケズリ調整し、底部外周には指押え痕が残る。淡褐色を呈し、白色土の縞と細砂粒を多く含む胎土。174は丸みのある底部で口縁端部上方に面をつくり、淡灰色で白色砂粒の多い胎土は美濃須衛窯の製品に通じる。皿A（175）は胎土と内面の摩耗痕が174と類似するが、鈍い内傾面をなす口縁端部と、平坦な底部が特徴的に異なる。色調が外面（灰白色）と内面の上半（淡灰色）と下半（淡青灰色）とで異なり、甕などにかぶせて焼成されたことが想定され、内面の摩耗痕は、炭層3出土の盤B（398）と共に、皿・盤類の使用形態の一端を推測させる。口径26.0cm、器高4.3cm。皿A（176）は口径26.4cm、器高4.3cm。黒色粒子を多く含む胎土で、外面全面が暗

皿類の細別

皿の使用
形態

灰色、内面は淡灰色。胎土は異なるが、175と同様の重ね焼きで、これら深手の皿Aは甕類の蓋であるとともに、それらに貯蔵する物品の調理加工用の器でもあると想定される。

皿 C 皿C (177) は内彎気味に弧を描く口縁部の端部が小さく外肥厚し内傾面をつくる。底部外面はロクロケズリ (R)。口径18.4cm、器高3.0cm、径高指数16。灰白色を呈す微砂質の胎土で、内外面に焦げ茶色の汚れが付着する。SX1228炭混灰粘土出土。この点は他の皿C (炭層4B-307など) や杯Acにも共通し、これらが工房用の器種である可能性を示唆している。皿C (178) は口径22.8cm、器高3.2cm。177よりも一回り大きい同形品。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。茶砂土出土。皿C (179) は口径23.8cm、器高3.6cm。口縁端部の内外への肥厚が大きく、明確な面をもつ。内外面とも淡茶灰色を呈し、口縁上端部外面のみが黒ずむ同一器形の重ね焼きで無蓋の器種。底部内面に褐色の汚れが残る。皿C (180) は口径29.4cm、残存高4.0cm。口縁端部の外肥厚が著しく、ロクロケズリ (L) した底部外面に2条の凹線が巡る点が壺A蓋 (183) に類似し、内面が淡茶色で外面が灰色を呈することから、皿B蓋の可能性があり、黒色砂粒を多く含む東海地方の産品とみられる。SX1224炭混灰土とSX1220炭層2C層の出土土器とが接合した。

皿 B 高台をもつ皿B (167~170) には、口径でI (170)、II (169)、III (168)、IV (167) がある。口縁部下半以下を丸くロクロケズリ (R) する169以外は、稜をもつ腰部以下をロクロケズリ (R) した、器壁の薄い垂れ気味の底部であるが、高台の高低と形状には違いがある。皿BI (170) は口径33.4cm、器高6.2cm。口縁端部が小さく外反し、高台は下端部が著しく内肥厚する。外面全面が灰色、内面が淡黄灰色を呈し、砂粒を多く含む東海地方産。皿BIII (168) は高台径20.0cm、復元口径約26cm。中央部が肉厚で垂れ気味の底部と、高い高台の形状が杯B (128・130) に類似する東海地方産。皿BIV (167) は口径22.0cm、器高4.4cm。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。皿BII (169) は口径29.8cm、器高6.2cm。薄くつまみ出した口縁端部以外は肉厚で、内傾面をもつ高台がつく。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土だが、陶邑窯産であろう。169のみSX1224炭混腐植土出土で、他はSX1228・1230の炭混灰土出土。

皿 B 蓋 皿B蓋 (164~166) には炭混灰粘土出土の蓋a類 (166) と、茶土出土の蓋b類 (164・165) とがある。166は平らな頂部外縁までをロクロケズリ (R)、肉厚な口縁端部は、ロクロナデ調整で先端が小さく外反する。つまみは小振りて背が高く、上面が丸く盛り上がる宝珠形で、つまみ周辺は広くロクロナデ調整。受部は肉厚で、先端が小さく外反し、強く折り返したかえりが薄く鋭い。頂部内面は広く多方向のナデ調整。口径26.9cm、器高3.2cm、かえり径22.8cm。口径約24cmの身にかぶる。外面が暗灰色で内面は淡灰色。黒色粒子と白色土を含む胎土の東海地方産。蓋b類は頂部の平らな笠形 (164) と直線的な山形 (165) の違いはあるが、ともに薄手で、小さく外側へ屈曲する口縁端部で、奈良時代に降る可能性がある。164は頂部平坦部まで、165は口縁外縁の屈曲部までの外面をロクロケズリ (R)、内面は多方向のナデ調整。164の口径26.0cm。165の口径29.6cm。ともに淡青灰色~淡灰色で砂粒を多く含む胎土。

鉢 A 鉢A (185) は底部外縁に稜をもち、上部で内屈する口縁の端部は内外に肥厚して内傾面をもつ。体部下半と底部外面をロクロケズリ (R)、底部内面を多方向にナデ調整する以外は、ロクロナデ調整で器壁が薄い。淡灰色を呈し、砂粒を含む軟質の焼成。内面に煤状の汚れが付着する。

皿 B 口径19.8cm、器高11.9cm。SX1228炭混灰粘土出土。皿B (181・182) は器高の深淺があるが、平底で口縁部下半と底部の外面をロクロケズリ (R) し、斜めに開く口縁の端部上方に面

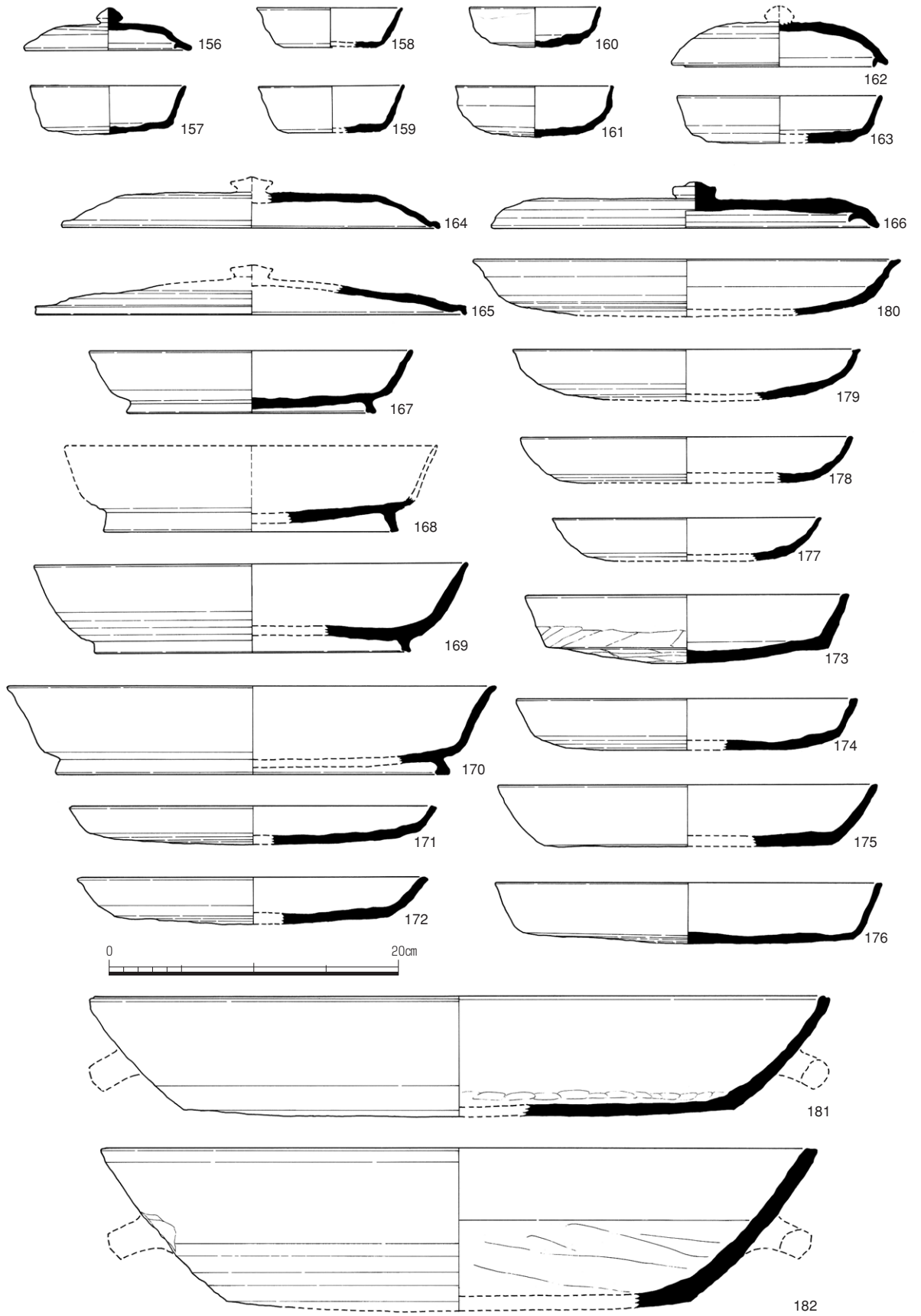


Fig. 7 水溜遺構出土土器 (7) 1:4

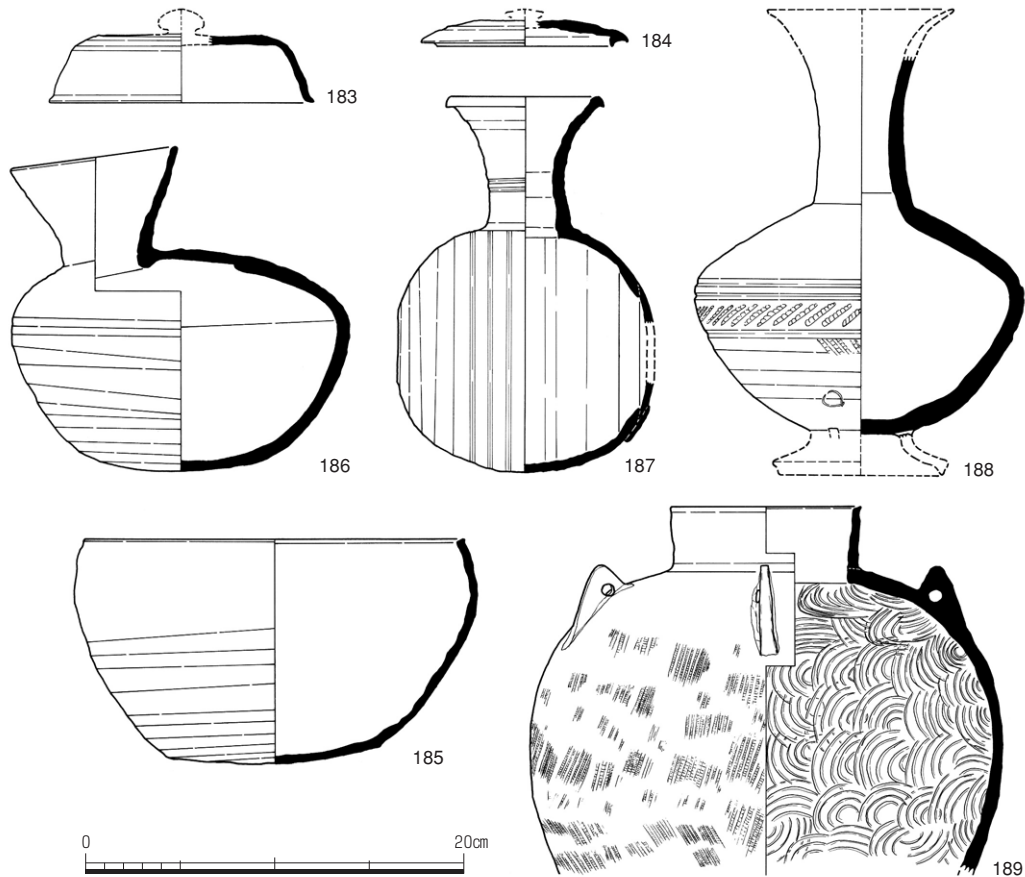


Fig. 8 水溜遺構出土土器 (8) 1:4

をつくり、口縁側面に把手の剥離痕がある。181は口径50.0cm、器高8.3cm。底部内面は当て具による押え痕の上を多方向のナデ調整。口縁内端より内側が灰白色、外側が黒色を呈する伏せ焼きで、底部外面には重ね焼きによる黒色の斑点がある。182は口径48.0cm、器高11.1cm。口縁中程以下の内面を斜め方向にナデ調整し、摩耗が著しい。口縁内端より内側と底部外面が淡白黄色、口縁側面の表層が黒色を呈する伏せ焼き。ともに黒色粒子を多く含む微砂質の胎土で東海地方産とみられる。いずれもSX1226内の炭混灰土・茶土 (181)、炭層1・茶土相当層 (182) からの出土で、炭層3出土土器に含めた盤B (398) の多くの破片が出土した富本銭出土土坑SK1240に近接している。

壺 A 蓋 壺A蓋 (183) は杯Aを逆転した形態で、頂部外面中央はロクロナデ、丸みのある肩部をロクロケズリ (R) し、肩部縁辺に2条の凹線を巡らせる。口縁端部は小さく外肥厚して内傾面をもつ。口径13.8cm。直立口縁の甕B (189) や壺Aなどにかぶる蓋である。壺蓋 (184) は太いかえりが口縁部よりも下方に飛び出す小型の蓋。口径11.0cm、かえり径9.2cm。

平 瓶 平瓶 (186) は丸みのある肩部をもつ器高の高い体部と、ラッパ状に開く口縁部とからなる。底部と体部外面の肩部下までを丁寧なロクロケズリ (R) で仕上げ、口径8.6cm、体部径17.6cm、器高17.2cm。陸橋SX1232下の灰色砂層出土で、下層遺構起源の土器とみられる。

フラスコ形長頸瓶 壺 (187) は球形の体部に、上半部がラッパ型に開く長い口縁部をもつ「フラスコ形長頸瓶」。下半をロクロケズリした体部中程に4条の凹線、頸部中程に2条の凹線が巡る。口縁端部は外側に折り返して肥厚する。口径7.7cm、体部径13.6cm、器高19.9cm。口縁部内側や体部外面にか

かる薄い灰緑色の降灰および胎土・色調から遠江湖西窯の産品とみられ、形状は湖西窯の大沢第5地点I号窯例⁹⁾に類似する。水溜遺構の最下層にあたる炭混灰粘土層出土。なお、187と同様に湖西窯産と推定されるSD1130出土の630・631とは口縁部の形状が微妙に異なり、猿投窯産とみられる炭層2出土の477・478とは胎土と降灰の様子が異なる。壺K(188)は水溜SX1230東岸沿いの斜行溝SD1234出土。SD1234は工房からの流水をSX1226に導くために掘られた断面V字形の素掘溝で、188は水溜遺構機能時の土器である。上方で開く細長い口頸部の上半と脚台を欠き、算盤玉形の体部中央に3条の凹線と刺突文帯が巡り、刺突文帯の一部は凹線を挟んで矢羽状をなす。体部外面下半をロクロケズリ(R)するほかはロクロナデで、頸部内面に絞り目が残る。底部近くにヘラ記号「○」を刻み、剥離した脚台のつけ根に小さな透孔を三方に穿つ。青灰色を呈する大阪陶邑窯産とみられる。体部径17cm。

須恵器甕は肩の張った縦長の体部に、外反し端部の肥厚する口頸部がつく甕A、比較的小さな頸部から直立する口縁部がのびる甕B、横長の体部で広い頸部に短く直立する口縁部をもつ甕Cがあり、甕Aには法量の大中小や多様な口縁部形状がある。遺跡内での接合関係、叩き板―当て具痕同定の検討結果によれば、中小型の甕Aが主体を占め、甕Cがそれに次ぎ、大型の甕Aや甕Bはごく少ない傾向にあるが、破片が下流域の遺構や上層へ流出した個体も多く、確定的ではない。所属時期は前述の供膳具と同様に、主体は7世紀後半～8世紀前半にあり、7世紀中頃のものが少量含まれる。また、陶邑窯産のほか美濃・尾張など東海地方産が目立つ。

須恵器甕類

甕B(189)は略球形体部と直立する長めの口縁部とからなり、口縁端部は外肥厚し内傾面をもつ。肩部に小円孔を開けた三角形薄板状の耳が4個つき、耳の側面は指押え調整で端部のみをヘラケズリする。体部外面は木目直交平行文叩き目のちナデ調整で、内面に大振りの同心円文当て具痕が残る。頸部以下の体部外面に降灰があり、183のような蓋をかぶせた状態での焼成とみられる。青灰色の緻密な胎土で大阪陶邑窯産であろう。口径10.0cm、体部径約25cm。

4耳付甕B

甕A(190)は強く屈曲する頸部と端部を外側に折り曲げた比較的小さい口縁部が特徴的で、外面は細刻で深い平行文叩き目が左流れし、内面には無刻の浅い同心円状当て具痕が残る。薄い器壁と口縁部形状、および色調、胎土、頸部内外面の鉄釉などから尾張猿投窯産とみられる。口径28.5cm、頸径20.4cm、体部径46.8cm、推定器高約43cm。SX1228の炭混灰土出土。

大型の甕A(191)もSX1228炭混灰土出土の東海地方産で、直線的に大きく開く長い口縁部の外面には6条の凹線と多数の櫛状工具刺突文をもつ。内面は斜めにナデ上げ、口縁端部は外側に面をもつ小さな肥厚で上方に尖る。口径36.0cm。体部内面は無刻の当て具痕、外面は左流れで細刻の平行文叩き目。灰白色を呈し器壁が薄く、口縁部内外面などに鉄釉を塗布する。甕A(192)は口径23.4cm、体部最大径49.5cmの中型。器高は約49cmと想定される。弧を描く頸部から緩やかに外反し端部は突帯状に肥厚して上方に面をつくる。外面は細刻で粗い平行文叩き目のちに、条の粗いカキ目を上半部は密な間隔で施し、下半部は粗い間隔で施す。内面は太い芯と幅広の同心円文を密に刻んだ当て具痕で、外面のカキ目の変わり目と対応して交替する。底部外面に漆の付着がみられ、漆工房での使用が想定できる。淡青色で微砂質。SX1231茶砂土～SX1228炭混灰土に分布する。甕A(193)は緩やかに外反する口縁の端部下を小さな突帯状に肥厚させる。口径19.4cm、体部最大径39.6cm、器高42cm。体部外面は細刻で粗い平行文が部分的に欠けた叩き目で細かな木目が浮き出し、内面は太い芯と細刻で粗い同心円文当て具痕

大型甕A

漆の付着

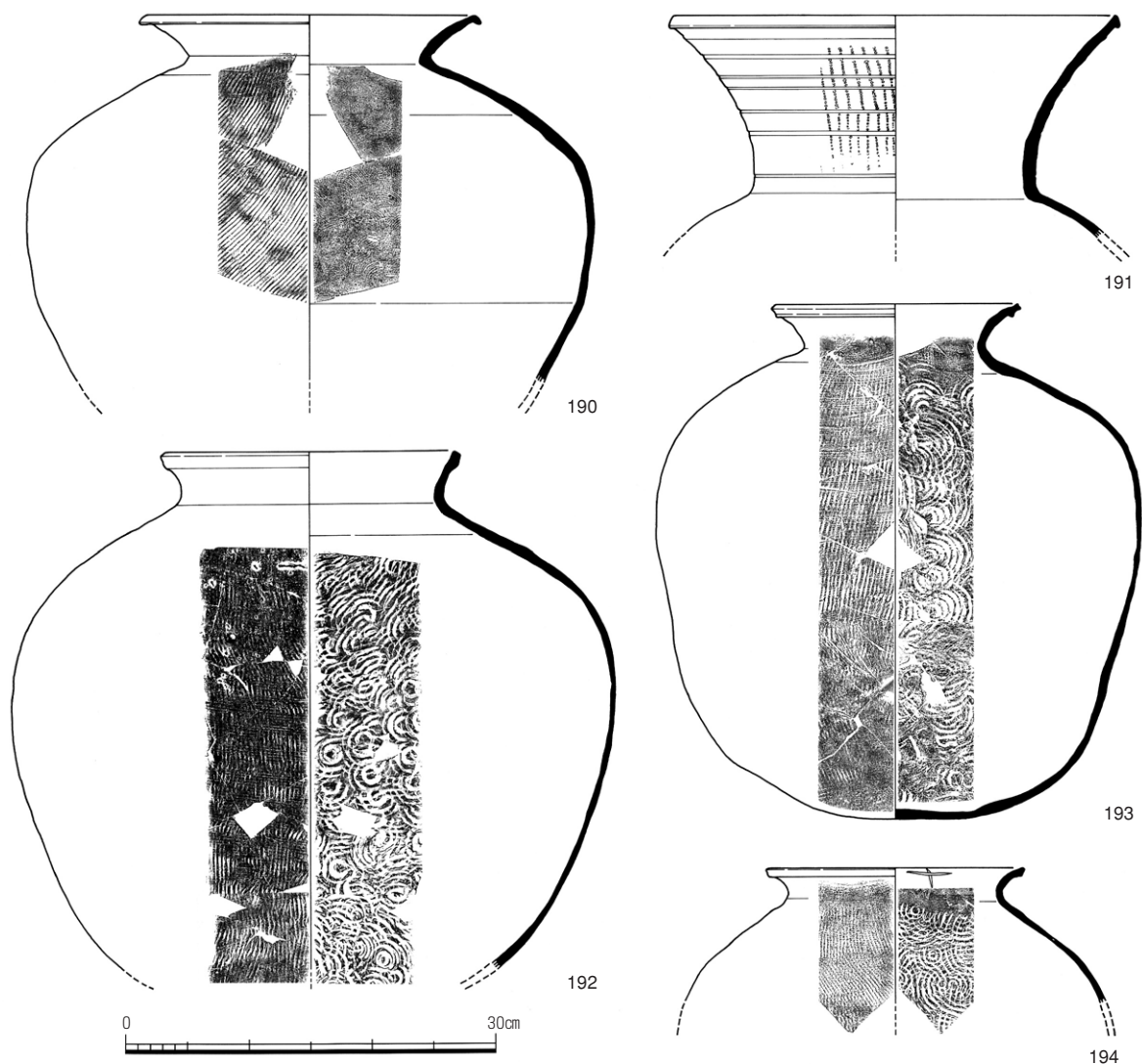


Fig. 9 水溜遺構出土土器 (9) 1:6

で、当て具には著しいひび割れが生じている。丸底気味の体部下1/3で内面の当て具痕が交替し、上2/3の外面にはカキ目を粗く施す。淡青灰色を呈し石粒を多く含む胎土。甕A (194) は緩やかな弧を描いて外反する口縁の端部が、下肥厚して三角形を呈し外側に面をもつ。体部外面は細刻で浅い平行文叩き目で、内面は小芯に幅広で密な同心円文当て具痕。口縁部内面に「十」字形のヘラ記号を刻む。外表が青灰色、素地が赤紫色を呈し、白土の縞が入る砂質の胎土で外面全面に白色の降灰がある。193と194はSX1230西岸の溝上層、整地土出土。

PL. 247の甕195は、SX1231の茶土・茶砂土の甕Cで、体部外面は直線的で細い平行文を粗く刻んだ叩き目。内面は無刻の当て具痕がかすかに残る横方向ナデ調整で平滑。内面に鉄釉の飛沫がある尾張猿投窯産。甕196は溝上層の甕Cで、外面は細かな木目に右斜交で細刻の平行文叩き目。内面はやや太く不整形な芯の周りに細刻の同心円文を密に刻んだ当て具痕を横方向にナデ消す。淡灰色微砂質の胎土で美濃須衛窯産とみられる。甕197も溝上層の甕Aで大きく開く口縁部に2条の凹線と櫛描波状文をもつ。外面は細刻で密な平行文叩き目と条の細かいカキ目調整。内面は小芯でやや幅広の同心円文を密に刻む当て具痕。青灰色で砂じりの精良土。甕198は水溜SX1231炭混灰土とSX1222の炭層4Aとに分布する甕Aで、外面は幅広い木目に直

尾張産の甕 C
美濃産の甕 C

交する細い平行文を粗く刻んだ叩き目ののちに条の粗いカキ目。内面には太芯で細刻の同心円文当て具痕。砂混じりの胎土。甕199はSX1232茶砂土の体部片のほかは、炭層3や北地区の石敷井戸SE1090周辺に破片が広がる甕Aで、外反する口縁の端部は斜外方に面をつくる。体部外面は細刻の平行文叩き目ののちに条が細かく密なカキ目。内面には中央に6弁の星形を刻んだ車輪文を幅広で密な刻みの同心円文で囲む当て具痕が明瞭に残る。

ii 水溜下灰色粘土層出土土器 (Fig. 10・11-200~229・230~247)

水溜下灰色粘土層は、東の谷の水溜構築以前の堆積層で、谷の中程でその一部を検出した。出土土器には、飛鳥Ⅲ~Ⅳを主体とする土師器・須恵器があり、転用硯、漆壺、漆塗土器、被熱土器などが少量含まれる。須恵器甕では、南北大溝SD1130出土片との接合関係が確認され、土器の様相もSD1130出土土器と類似する。また、下層遺構起源の土器が少量含まれる。

水溜構築以前の堆積層

土師器 器種には杯A、杯C、杯G、杯H、高杯C、皿A、蓋、鉢、壺A、甕A、甕B、鍋B、竈などと、ロクロ土師器の蓋、杯Cがある。杯C・甕Aが多いほかは少量である。

杯A (200・201) はいずれもb1手法である。200は内面下段の放射暗文の始点が杯Aに似て外寄りであることから杯Aの異形と考えたが、口径17.0cm、器高5.3cm、径高指数31で、下層遺構起源の杯CIの可能性もある。硬質で橙褐色を呈す白土混じりの微砂質土。底部にヘラ書き文がある。器面全体に薄く漆が付着し、漆塗土器あるいはパレットとしての使用が想定される。201は丸みのある底部で、口縁端部が小さく内肥厚する。暗文は底部にラセン文、口縁部に上段が幅広い2段の放射文を密に施し、外面のヘラミガキも密である。口縁部が歪み口径17.3~17.8cm、器高5.8cm、径高指数33。赤褐色の精良土。

杯 A

杯Cには法量の違う杯CI、杯CII、杯CIIIがあり、いずれもa0手法である。杯CI (204) は口径16cmの直立気味の口縁で、底部近くが肉厚なことから高杯C杯部の可能性がある。口径約14cmの杯CII (202・203・208) のうち、202は器高が高く、直立する正放射暗文を口縁端部近くまで施すもので、下層遺構起源の可能性があり、203は口縁端部が小さく外肥厚し、左傾きの1段放射暗文を施す点で異形に属す。杯CII (208) は、かすかな内傾面をもつ口縁端部の下にコテ状工具痕が巡り、赤褐色を呈す微砂質の胎土で、口径13.8cm、器高3.2cm、径高指数23。杯CIII (205~207) は口径10.8~11.8cm、器高2.5~2.9cmで径高指数23余。口縁上部が屈曲するa類(206)は端部が凹線状で、内面の放射暗文は太く粗い。赤褐色の精良土。滑らかな弧を描く口縁のb類には、口縁端部が小さく内肥厚するもの(205)とかすかな内傾面をつくるもの(207)とがあり、205は細かく密な放射暗文で、207の放射暗文は太く粗い。杯G (209) は口縁部を丸く収め、底部の小範囲を軽く削るGd類。淡茶灰色で、砂粒を多く含み、口径11.4cm、器高3.8cm。径高指数33。下層遺構起源の可能性もある。

杯 C

杯 G

蓋 (210) は口径25.4cmの大型で、頂部中央に大径のつまみを付す。口縁端部の肥厚は盤に類似し、頂部外面はつまみ周りとは外縁部とに分けて、密にヘラミガキし、内面には7重の細かなラセン暗文を施す。茶褐色で微細な赤色粒子を含む微砂質土。内面に黒色の汚れが付着する。蓋 (211) は口縁部を欠くが頂部の丸い深い器形で、断面圭頭形の高いつまみがつく。外面はつまみ近くを6分割、外縁部も同様に分けた密なヘラミガキ。内面は丁寧なヨコナデ調整で平滑に仕上げる。淡褐色の微砂質土。復元口径約18cm。壺Aの蓋であろう。皿A (212) はb0手法。

大型蓋

小さな内傾面をもつ口縁端部で、茶褐色で砂粒の多い胎土。口径26.0cm、器高3.1cm。

ロク
土 師 器

ロクロ土師器には蓋(213)、杯C(214)、皿がある。蓋(213)は受け部が長く、かえりが小さい点で須恵器杯蓋a類と同形で、赤褐色を呈す精良土。口径10cm余りの杯Agにかぶるとみられる。なお、213と同形・同色のロクロ土師器杯蓋a類が、水溜遺構SX1228とSX1226の間の陸橋SX1227上に設けられた排水路から出土しており、そこでは、端正な宝珠形つまみのつく頂部外面をロクロケズリ(R)したのちに、土師器杯蓋と同様の分割した平行線状ヘラミガキを施している。杯C(214)は底部をロクロケズリ、口縁部をロクロナデ調整し、口縁端部を小さく外反させて、土師器杯CⅢと同形につくるが、内面に暗文はなく、淡茶色で細砂や雲母片を含む微砂質土。口径13.0cm、器高3.3cm、径高指数25。

壺

A 壺A(215)は直立する長い口縁部の端部を小さく内外に肥厚させ、外面を縦方向に細かく、内面は横方向に分割してヘラミガキする。体部内面は下半を細かな横ハケ目調整、上半はナデ調整し、粘土紐継ぎ目が残る。外面は幅広いヘラミガキを、肩部では弧状に、下半は横方向にそれぞれ6~8分割して密に施す。口径14.6cm、体部径26.0cm。赤褐色の精良土。長い口縁部とヘラミガキは藤原宮の運河SD1901A出土例などに類似する。

甕

A 甕類には大型の甕Bと小型の甕A、甕Cがあり、球形の体部のほかに、長胴気味のもの(224・225)を含む多様な調整法の小型の甕Aが多い。甕A(216)は先端を丸く外肥厚させる先細りの口縁部で、体部外面のかすかな縦ハケ目と内面の平滑なナデ調整から「大和B型」に属す。口径13.4cmで赤色粒子を少し含む淡茶色の胎土。甕A(217)は体部内面に当て具痕状の凹みをもつ点では「大和A型」に属するが、直立気味の口縁端部が杯Gc類の口縁部の如く凹線状外傾面をもち、体部外面が斜方向のハケ目調整である点は、古墳時代あるいは下層遺構起源の土器の可能性がある。口径13.0cm、体部径15.0cm。淡茶褐色で砂粒を多く含む胎土で、内外面とも炭化物による汚れが著しい。甕A(218・219)は口縁部の外反度が異なるが、ともに口縁端部を上方に肥厚させて外側に面をつくる点で「大和A型」に属するとみられる。218は体部上半外面をかすかな縦ハケ目調整、内面をコテ状工具によるナデ調整する。口径14.6cm。淡褐色で赤色粒子や雲母片が少量混じる胎土。外面全体に煤が付着する。甕A(219)は口縁部外面を体部と一連の縦ハケ目調整のちヨコナデ調整、内面を横ハケ目調整のちヨコナデ調整する。体部外面下半に二次ハケ目を施し、内面にはそれに対応して無刻の当て具痕が残る。橙褐色を呈し砂粒を少量含む胎土。口径15.5cm、体部径16.5cm。甕A(220)は口縁端部を内肥厚させて外傾面をつくり、体部内面をヘラケズリ、外面を細かな縦ハケ目調整する「河内型」で、口縁部内面は横ハケ目調整。赤褐色で、金雲母と赤色粒子を多く含む。口径15.0cm。甕C(221)は体部内面の長いヘラケズリで、口頸部内面の横ハケ目を削りとり、体部外面は3段に分けた縦ハケ目調整で、色調・胎土も「河内型」。口径13.6cm、復元器高19.8cm。甕A(222)は緩やかに外反する肉厚で長い口縁部と撫で肩の薄い体部が特徴的。体部外面は細かな縦ハケ目、内面は縦方向になでつける。茶褐色で石粒の混じる胎土。口径14.8cm。甕A(223)は体部外面ナデ調整で、下半に底部成形時の段が残り、内面はコテ状工具痕の残るナデ調整。口縁端部は外肥厚して内側に凹面をつくる。淡橙色を呈す微砂質の胎土で、口縁部外面に吹きこぼれの痕跡がある。口径14.4cm。最も小型の甕A(224)は口径11.4cm。内外面ナデ調整の撫で肩の体部は長胴気味とみられ、肉厚な頸部が緩やかに外反し、端部は内外に肥厚する。灰褐色系で砂粒を多

河内型の
甕 C

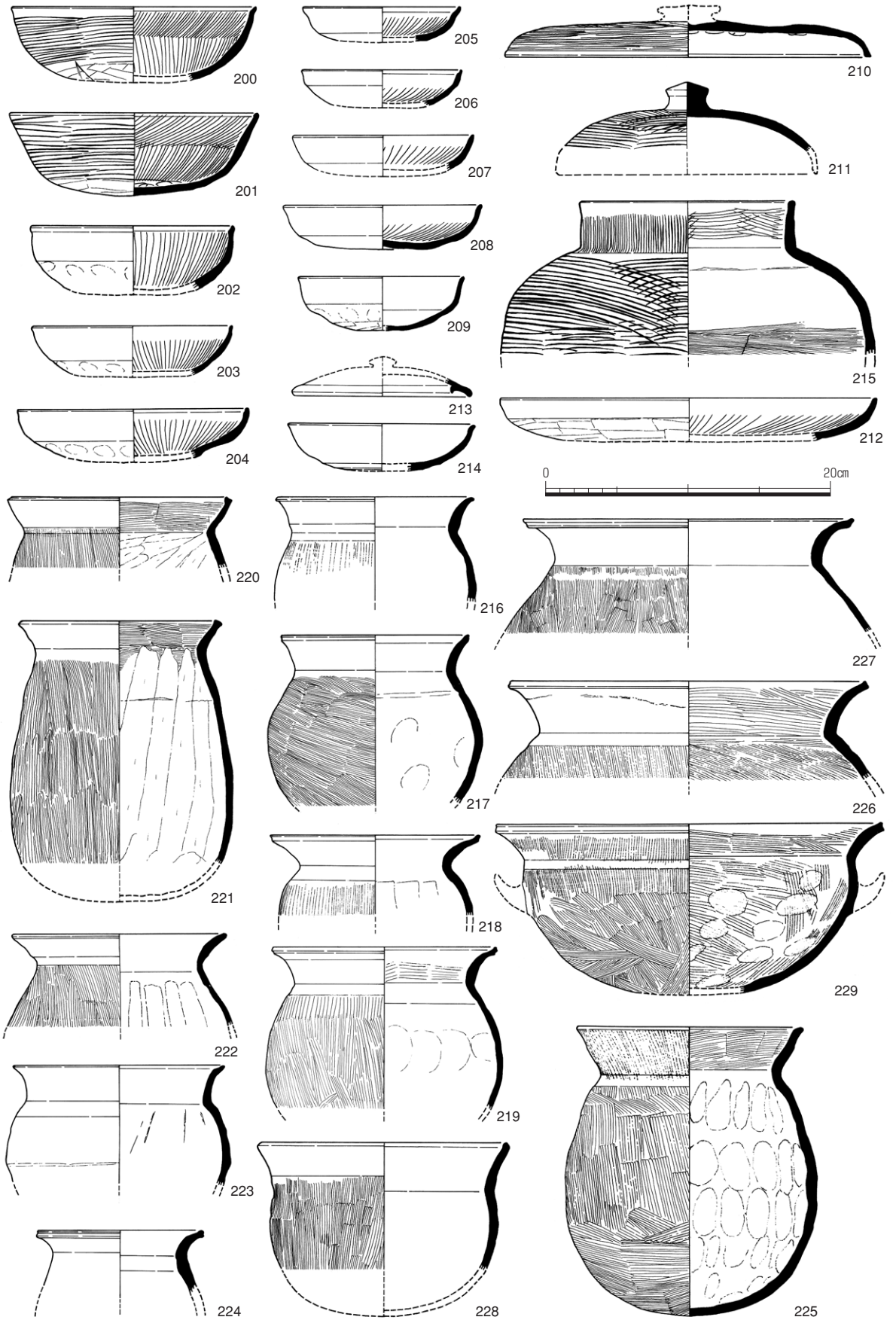


Fig. 10 水溜下灰色粘土層出土土器 (1) 1:4

- く含む胎土。長胴気味の体部をもつ甕A (225) はほぼ完形品。内彎気味に開く口縁の端部が外肥厚して上方に面をもち、口縁部外面は縦ハケ目ののちヨコナデ、内面は横ハケ目調整で、体部内面には外面のハケ目調整に対応した無刻の当て具痕の凹凸が全面に残る。支脚の跡とみられる底部周縁の小円形部を除く外面全面が著しく煤け、内面には体部中位に喫水線、底部に焦げ付き痕がある。口径15.6cm、器高20.2cm。体部内面に当て具痕があるが「大和A型」とは口縁部の形状が異なる。
- 使用時の支脚跡**
- 甕 B** 甕B (226・227) はともに把手を欠く。227は上方に長く肥厚し外側に面をもつ口縁端部で、体部内面は横方向のナデ調整。淡褐色で砂混じりの胎土の「大和A型」と微妙に異なる。口径22.8cm。226は口径25.0cm。小さな外傾面をなす口縁端部であるが、体部外面は条の細かな縦ハケ目調整で、内面は稜をなす頸部を境に、体部を細かな斜めハケ目、口縁部を条の粗い横ハケ目調整する。全体に器壁が厚く、色調、胎土も「大和型」とは異なる。鍋B (229) は体部外面をハケ目調整、内面には広くハケ目状の条痕があり、当て具痕の凹凸が残る「大和A型」。体部上寄りに貼付式接合法の把手の剥離痕がある。口径26.8cm、器高12.0cm。明茶色で石粒を多く含む胎土で、内面は茶褐色に汚れる。なお把手脇に「寺」の一部とみられる墨痕があり、SD1130出土の「大和B型」の墨書土器鍋B (Fig. 90-12・14) やSX1226炭混灰土出土の墨書土器鍋B (Fig. 98-86) などとの親近性を示す。鍋A (228) は体部外面を縦ハケ目、内面をコテ状工具によるナデ調整の「大和A型」だが、小型で深い器形は類例に乏しい。口径17.0cm。
- 墨書「寺」**
- 須恵器の種類** 須恵器 器種には杯A、杯B、杯G、杯蓋、椀、盤A、台付皿、蓋X、高杯H、鉢A、鉢X、壺、甕があり、圈足円面硯 (Fig. 100-123) や転用硯の杯B (Fig. 101-134)、漆壺の平瓶 (PL. 393-82) などがある。
- 杯蓋** 杯蓋 (230) はロクロケズリ (R) の低い頂部に上面の丸いつまみがつく。外面が淡青灰色で内面は暗紫色。口径10.7cm、かえり径8.8cm。口径9.6cmの身にかぶる蓋であるが、つまみを覆う重ね焼き痕から、高台径6.6cmの椀Bの蓋である可能性がある。杯G蓋 (231) は高い山形の頂部とハの字に開く外縁部とからなり、ロクロケズリ (R) で仕上げた頂部中央に小さなつまみがつく。受け部の幅が広く、かえりの先端が鋭く尖る。口径10.5cm、かえり径8.2cm。淡青灰色の精良土で、外面全体に薄い降灰がみられ、内面に漆状の付着物がある。杯蓋aIV (232) は口径12.2cm、かえり径10.4cm。杯AgIVの蓋。頂部の1/2ほどをロクロケズリ (R) 調整。内面には炭化物様の汚れがあり、研磨痕はないが転用硯の可能性もある。淡灰色で微砂質。杯蓋aIV (233) は背の高い逆台形のとつまみと長くのびた受け部が特徴的で、かえりは内寄りに小さく引き出されている。口径13.8cm、かえり径10.8cm、器高3.1cm。暗灰色を呈し外面全面に厚い降灰がある。
- 杯 G** つまみの形状が一般的な杯B蓋と異なり、椀類の蓋の可能性もある。杯G (234) は底部外面ヘラ切り不調整。黒色粒子を多く含む微砂質土で、淡青灰色の外側面にのみ薄い降灰があり、淡
- 杯 Ag** 灰色を呈する内面には褐色の汚れが付着する。口径9.4cm、器高3.8cm。杯AgV (235) は平らな底部とやや開き気味の薄い口縁部とからなる。底部外面ヘラ切り不調整 (R) で、内面中央に一方方向のナデ調整、他はロクロナデ。外側面が暗灰色で内面は青灰色。黒色粒子を多く含む微砂質土。口径10.6cm、器高3.0cm。杯AgIV (236) は口縁端部が摩耗し、外側面のみ黒色の降灰がみられる。底部外面をロクロケズリ (R) で滑らかに仕上げ、内面はロクロナデで底部中央に一方方向のナデ調整を施す。黒色粒子を多く含む微砂質土で灰色を呈す。口径13.0cm、器高

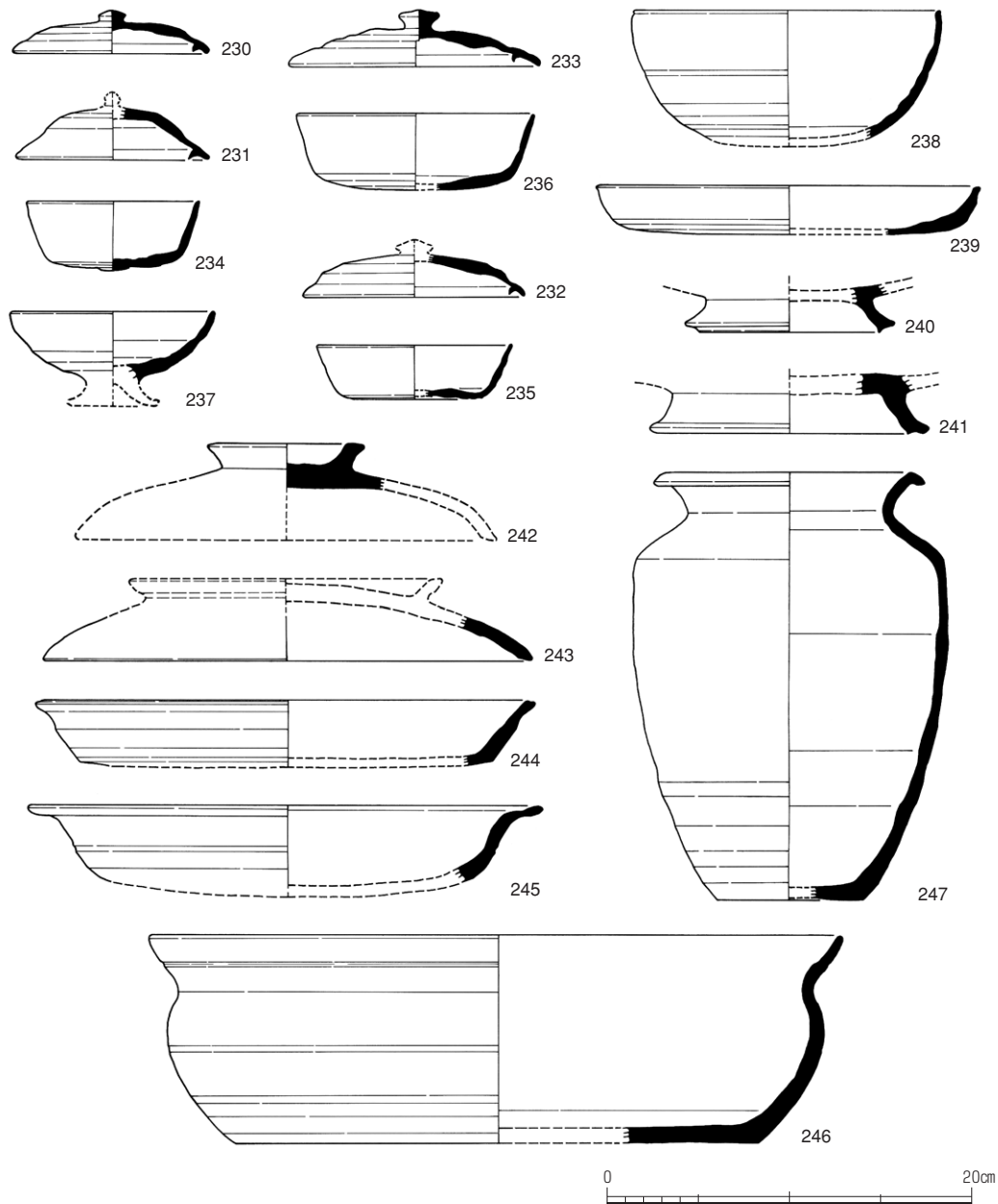


Fig. 11 水溜下灰色粘土層出土土器 (2) 1:4

4.2cm。高杯H (237) は杯H蓋を天地逆にした形態の杯部で、ロクロケズリ (L) した底部外面の内寄りに脚部を接合する際のロクロナデが残る。口径11.0cm、残存高4.5cm。黒色粒子を多く含む精良土で、内面は淡灰色を呈し、外面に降灰がある。杯G蓋 (231)、杯G (234) とともに下層遺構起源の可能性がある。

高杯 H

鉢A (238) は内彎気味に開く口縁部の端部に鈍い内傾面をつくり、端部外縁に凹線状の凹み、体部中位に1条の凹線文が巡る。体部下半はロクロケズリで平滑に仕上げ、微砂を多く含む胎土。色調は内面は淡青灰色であるが、外面は口縁部が暗灰色で降灰がかかり、底部は紫色をおびていて有蓋の器種とみられ、東海地方の製品であろう。口径16.7cm、残存高6.9cm。

鉢 A

盤A (239) は広く平らな底部と短い口縁部とからなる。口縁上部外側を強くなでて、端部上面に外肥厚した小さな平坦面をつくる。底部をロクロケズリ (L) で平らに仕上げたために、

盤 A

底部外縁から口縁部下半が厚く、底部中央は薄い。白色土の縞を含む微砂質精良土で、灰白色を呈し軟質。東海地方の製品である。口径21.0cm、器高2.7cm。盤A（244）は直線的に開く口縁の端部が外肥厚する。口縁下半と底部外面をロクロケズリ（R）。台付皿（240・241）はハの字に開く長い脚台部の破片で、240は台径9.8cm。つまみ出した内端で接地する点が台付杯（杯Bの祖形）の台部に酷似し、灰褐色で微白砂を含む胎土。241は台径13.0cmの大型で、外肥厚する端面全面が接地する。青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。ともに東海地方の製品であろう。

- 蓋 X 蓋X（242）は輪状つまみ部の破片で、皿の台部の可能性があるが、外面の調整が丁寧で降灰がかかることから蓋と考えた。つまみ径8.4cm。淡茶色で白色土を含む精良土。蓋X（243）は端部が三角形に尖る口縁部の破片で、皿の可能性はあるが、外面の丁寧なロクロケズリと口縁端部までの降灰から盤A等の蓋と判断した。炭層4C層出土片が接合しており、つまみは同工の炭層4C出土片から復元した。口径26.7cm。淡青灰色で一部が褐色を呈し、外面に鉄釉を塗布することから、尾張猿投窯産とみられる。皿X（245）は強く外反する口縁部を長く引き出し、丸みを帯びた底部外面はロクロケズリ。内面全面に煤状の汚れがつくことから皿と判断したが、口縁部中程外面に1条の凹線文が巡り、鉢・皿などの蓋である可能性がある。灰白色で黒色・白色粒子を多く含む胎土。口径27.7cm、残存高4.2cm。
- 皿 X
- 鉢 X 鉢X（246）は、大型で平底の浅い体部と、括れた頸部から内彎気味に外反する口縁部とからなり、口縁端部は丸く収める。口縁部と体部中程に浅い凹線を各1条巡らし、体部下半と底部の外面をロクロケズリ（R）。内面はロクロナデで平滑に仕上げる。口縁端部より内側と底部外面が淡い灰色で、外側面は濃い暗灰色を呈し、砂粒を含む微砂質の胎土。同様の器形は尾張猿投窯などに類例があるが、猿投窯例とは器壁の厚さとロクロケズリの鋭さの点で異なり、美濃窯例とは口縁部の形状が異なる。胎土からは尾北篠岡窯の製品の可能性がある。体部内面に漆附着の痕があり、口径37.6cm、器高11.4cm。壺（247）は平底の長い体部で、屈曲する肩部と外反する口縁の端部を外折して肥厚させる点に特徴がある。底部外面は「板起し技法」ののちナデ調整で、体部下半をロクロケズリするほかはロクロナデ調整。底部外面を除く全面に淡緑色の自然釉が厚くかかり、黒色土と白色土の縞をもつ精良土で、猿投窯の製品とみられる。口径13.2cm、器高23.3cm、体部径17.2cm。破片は下流のSX1220炭層3からも出土した。
- 甕 A 甕A（248・249）は、ともに体部片が炭層4、南北大溝SD1130、南北溝SD1110および包含層からも出土し、漆甕（PL.391-92）とともに水溜下灰色粘土層と炭層4、SD1130の親近性を示している。甕A（248、PL.247）は外傾する短い口縁の端部を丸く収め、外面は細かい木目が浮きだした細刻で粗い平行文叩き目ののちに木目の細かなカキ目を粗く施す。内面は上半には、小芯に細刻で粗い同心円文当て具痕、底部には楕円形文当て具痕が残る。暗灰色で白砂を含む胎土。甕A（Fig.23-249）は大型で長く直線的に開く口縁部。端部は外側を突帯状に肥厚させ上方につまみ出す。口縁部上半に2条一組の直線文2組と、その間に3～4本の櫛描波状文を配す。体部は上半が大きく膨らむ形態で、外面は細かな木目の浮き出した細刻で粗い平行文叩き目で、細木目のカキ目を粗く施し、内面は小芯で細刻の同心円文当て具痕。体部中程の粘土帯の継ぎ目には、幅広で粗い刻みの同心円文当て具を使う。体部径84.0cm、口径44.0cm、頸径31.0cm、口縁部の高さ15.2cm。青灰色で微砂を含む精良土。底部外面の一部に漆が附着する。大きさは別掲の漆貯蔵用甕（図版編〔Ⅱ〕PL.391-392、体部径約73cm）よりも一回り大きい同形で、

ともに漆工房内で使用されたと考えられる。

iii 炭層4出土土器 (Fig. 12~14-250~295・296~320, PL. 218~220)

炭層は、西の谷下流域と東の谷との合流部における1991年の調査では、炭層、炭層Ⅱ、粗炭層とに分層し、東の谷下流域の第93・98次調査では、炭層1、炭層2、炭層3、炭層4に大別されるとともに、それぞれA・B・C層などに細分された。1991年の粗炭層は含まれる木炭の粒度の違いから、炭層3に対応すると判断され、水溜遺構縁辺部に厚い堆積として検出されることから、水溜遺構上流部の炭混灰土・谷木屑層・炭混灰粘土に相当する、水溜遺構機能時の堆積層とみられた。炭層2は谷中央部に厚く、縁辺部で薄くなる堆積層で、中に砂層を含むことから、水溜遺構の茶砂土に相当し、機能停止後ほどない頃、谷全域に広がる炭層1は、茶土に相当する2次堆積層、そして、炭層4については炭層3の外側で工房の炉跡群にからむ堆積層とみられた。土器はいずれの層序からも木簡や工房関係遺物とともに多量に出土し、炭層全体では7世紀後半から8世紀初めの土器を主体としつつ、下層遺構起源の7世紀中頃の土器が混じる構成で、炭層1と炭層4Aの一部には奈良・平安時代の土器が含まれる。以下では、第93・98次調査の分層に従って、層序別に記述する。

炭層の分層

炭層4は、検出時に水溜遺構の縁辺部から中央へ向かう傾斜堆積である炭層3の東外側、炉跡上に及ぶものを総称し、炉跡作業面の確認と連動して細分した。3面確認したうちの土層炉跡は4A層上面で、中層は4C層上面で検出している。したがって、層序の繋がりの把握が正しければ、4C層の遺物は下層工房期の操業時の廃棄物を均した整地にもなうもので、同じく4A層は中層工房期の遺物を含むと考えられる。なお、炭層4は炭層3に接する箇所もあるが、谷中央部では炭層1の残りとの接し、工房上では上部の包含層（青灰色粘土層）や茶土と直接に接していて、奈良・平安時代の土器が含まれている。

炉跡作業面との対応関係

土師器 器種には杯A、杯B、杯C、杯D、杯G、杯H、皿A、壺B、甕A、甕B、甕Cがあり、多様な杯A・杯C・杯Gと甕Aが多く、土師器甕製作用の当て具 (Fig. 12-257・260) が4B・4C層から出土している。なお、4D層および、4C層の276・278・280、4B層の263・272、4A層の251・256・258以外の土器は「富本銭」が伴出している。

土師器の種

4A層の杯A (250・252・253) はいずれもb手法。2段放射暗文で径高指数26の杯AI (250)、1段放射暗文で同30以上の杯AII (252・253) がある。250はb3手法で、口縁上半部が外反するa類。口縁端部を丸く巻き込み、上段の放射暗文の幅が狭く、飛鳥Vに属する一般的な形態である。これに対して、252・253は直立気味の肉厚な口縁部で、端部は小さく外反し、内壁厚が小さい。1段放射暗文は直立気味で長く、外面の太いヘラミガキと橙褐色で微砂質の胎土が水溜遺構の杯Aの異形 (13~16) に類似する。一般的な形態の杯Aでは1段放射暗文は、平城宮土器Ⅲ以降に、間隔の広い斜放射文としてみられるが、本例は細かな正放射文である点で異なり、飛鳥Ⅳの藤原宮の運河SD1901A出土例¹²⁾に類似する。250の口径18.4cm、器高4.9cm。252と253は口径15.2cmと14.8cm、器高5.0cmと4.4cm。4A層の杯 (260) は、e手法で平安時代初めに属する。炭層4A層が上層の青灰色粘土層と直接に接する位置からの出土で、同層出土の杯 (Fig. 64-1216) や炭層1の杯 (Fig. 21-498~501) および水溜遺構茶土の杯 (38) と類似する。

杯 A

1段放射暗文の杯A

4B層の杯AI (262) は粗いヘラミガキのa1手法。直線的に開く口縁部で、暗文は細かな2段

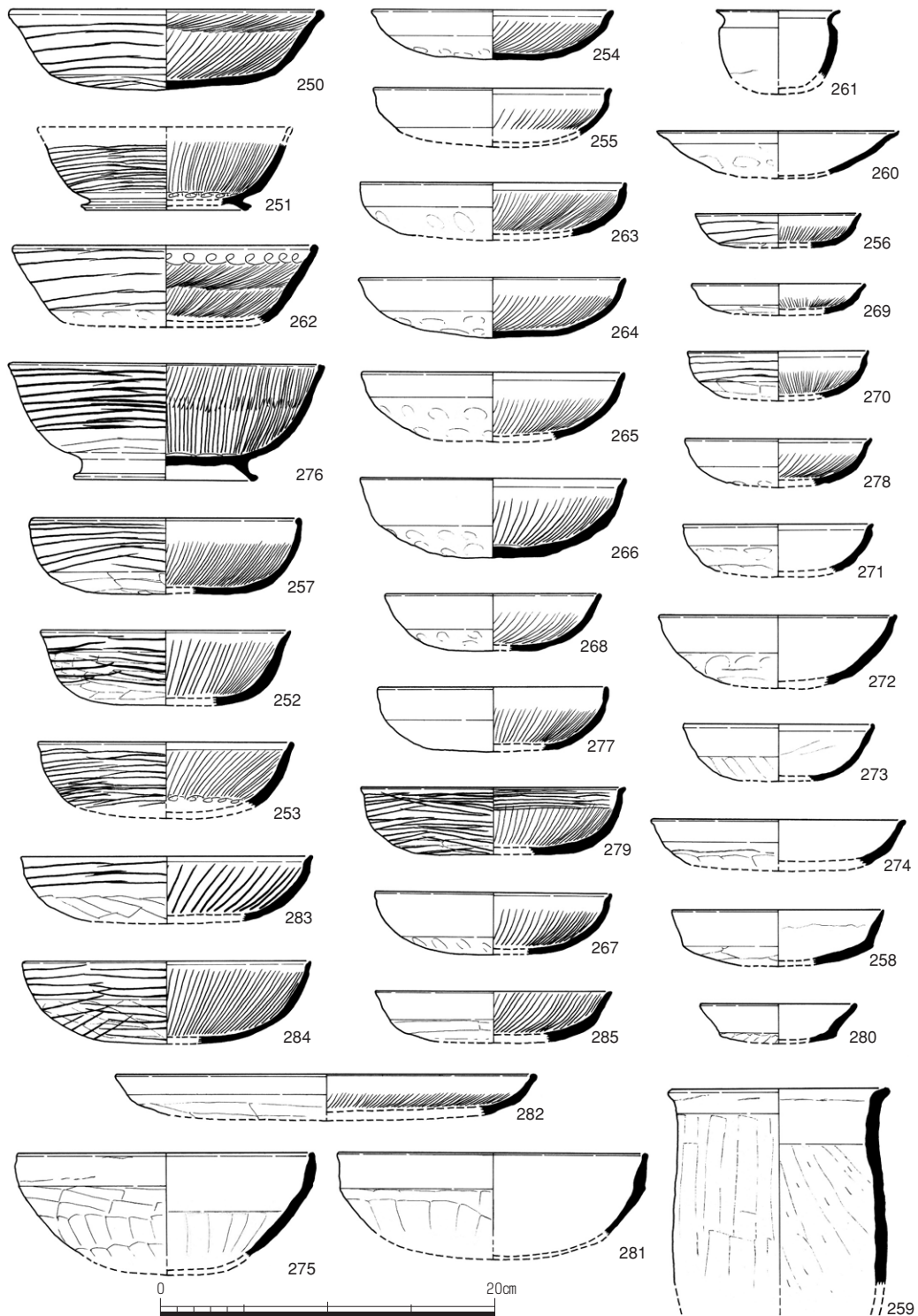


Fig. 12 炭層4出土土器(1) 1:4

の斜放射文と上端部に1条のループ状のラセン文。杯BIの可能性ある。口径17.6cm。

杯Bには4A層の杯BII (251)、4C層の杯BI (276) がある。251は口縁端部を欠くが、底部外寄りにハの字に開く高台がつき、密なヘラミガキと細密な放射暗文。赤褐色で微白砂を含む精良土。276は高い高台が底部内寄りにつき、口縁端部は小さく内肥厚し上方に面をつくる。暗文は細密な2段放射文が直立して口縁端部まで及ぶ異例なもの。口径18.2cm、器高7.0cm。飛鳥

Ⅲ～Ⅳに属する。内外面全面に茶褐色の汚れが付き、漆塗土器の可能性もある。

杯Cは4A層(254～256)、4B層(263～270)、4C層(277～279)、4D層(283～285)の各層から出土し、径高指数では30前後、同27前後、同22前後に大別される。4A層に浅い器形のものが多く、4B層にはいずれもが含まれ、4C・4D層に深いものが多い傾向にあるが、4D層の径高指数22前後のもの(283・285)は異形であり、4A層の一部を除き細別層序間に明確な差異はないとみられる。

杯 C

径高指数30前後の杯CI(284)は4D層出土で、b1手法。内彎気味に開く口縁の端部に内傾面をつくり、内面の暗文は底部中央付近からの1段の正放射文を長く施す。口径17.0cm、器高4.9cm。杯CII(266)は4B層出土で、a0手法。口縁上部が内屈し、口縁端部内面が凹線状をなすa類で、赤褐色の微砂質土。口径15.8cm、器高4.8cm。杯CII(277)は4C層出土のa0手法。内彎気味の口縁部で、内面の放射暗文が細かく、口径13.6cm、器高3.9cm。杯CIII(270)は、4B層出土のb1手法。口径10.7cm、器高3.0cm。これらは下層遺構起源の可能性もある。

径高指数
30 前後

径高指数27前後の杯Cには口径15.7～15.8cmの杯CI(265・279)、口径12.6～14.0cmの杯CII(267・268)と口径11.0cmの杯CIII(278)がある。4B層の杯CI(265)は口縁上部で屈曲するa類で、口縁外面を幅狭くヨコナデ調整するa0手法。口径15.6cm、器高4.2cm。4C層の279はb3手法で直立気味の口縁端部が強く外肥厚し、内面は上段を横方向に丁寧に磨く点で杯Cとしては異例で、欠失した底部中央につまみがついて蓋となる可能性がある。赤褐色の精良土で口径15.7cm、器高4.1cm。内面に漆が付着する。杯CII(267・268)はともに4B層出土でa0手法。267は口縁端部が凹線状となり、268は口縁端部が小さく内肥厚する点で異なる。267の口径14.0cm、器高3.7cm。268の口径12.8cm、器高3.4cm。4C層の杯CIII(278)は口径11.0cm。内彎気味に開く口縁の端部が外反する。これらは279を除き飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。

径高指数
27 前後

蓋の可能性

径高指数22前後の杯Cには杯CI(283)、杯CII(263・264)、杯CIII(254・255・285)があり、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。4D層の杯CI(283)は口縁上部で屈曲するa類でb1手法。内面の1段放射暗文が太くまばらで斜めに傾き、橙褐色の微砂質土。口径17.2cm、器高4.1cm。4B層の杯CII(263・264)は口径15.8cm、器高3.5～3.6cm。口縁端部内面が凹線状を呈し、263の放射暗文は細かく密に口縁部まで及ぶ。杯CIII(254・255)はa0手法で口縁上部で屈曲するa類。254の底部外面には「旧」に似た針書きがある。ともに4A層出土で飛鳥Ⅴに一般的な形態である。これに対して、4D層出土の杯CIII(285)はb0手法で、直線的に開く薄い口縁の端部がわずかに外肥厚し、口縁端部まで1段放射暗文が及ぶ点で異例である。口径14.0cm、器高3.1cm。杯CIV(256・269)はともに小型の杯Cとしては異例の平底気味のb手法で、4B層出土の269は口径10.3cm、器高1.8cm、径高指数18で、皿Cの可能性があり、4A層出土の256は口縁部外面の粗いヘラミガキと、内面の放射暗文から、奈良時代に降る杯AⅣの可能性もある。

径高指数
22 前後

杯D(257)は平底から弧を描いて内彎気味に立ち上がる口縁の端部が丸く内肥厚する。b1手法で内面には細かな1段放射暗文を密に施し、赤褐色で微白砂を含む精良土。口径15.6cm、器高4.5cm。4A層出土で飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。

杯 D

杯G(271～274)は4B層出土で杯CII・Ⅲに相当する法量のものがあり、口縁端部などによる細分のb類とd類がある。杯GbII(272)はa0手法で端部に内傾面をもつ。深い椀形で口径14.0cm、器高4.3cm。径高指数31。杯GbIII(271)はa0手法の浅い杯形で端部が小さく外反して内傾

杯 G

面をもつ。口径11.2cm、器高3.2cm。径高指数29。ともに茶灰色を呈する微砂質の胎土。杯GdII (274) は浅い杯形で底部外面を軽く削る。口径15.0cm、器高3.1cm、径高指数21。杯GdIII (273) はやや深い杯形で底部外面を軽く削り、口縁端部は小さく内肥厚する。口径11.2cm、器高3.5cm。杯Gd類は茶褐色で砂粒の多い胎土が共通する。

杯Hには杯CI・Ⅲ・Ⅳに相当する法量のものがあり、いずれも淡褐色～淡橙色で、赤色粒子・雲母片を多く含む微砂質土。4A層出土の杯HIII (258) は口径12.6cm、器高3.3cm。4B・C層出土の杯HI (275・281) は大きく深い器形で、275は内面を縦方向にナデ調整し、口径17.4cm、器高7.4cm。281は分厚い口縁部と薄い底部とからなり、口径18.2cm、復元器高6.4cm。4C層出土の杯HIV (280) は小型で浅く、口縁端部が内彎する。口径9.2cm、器高2.4cm。

皿 A 皿A (282) は4C層出土。b₀手法で底部外縁が屈曲し、直線的な口縁の端部が内肥厚するb類。内面の放射暗文は細密で、茶褐色を呈す微砂質の胎土。内外全面に暗褐色の汚れが染みつき、漆塗土器の可能性ある。口径24.4cm、器高2.8cm、径高指数12。

壺 B 壺B (261) は口径7.2cm、器高5.1cm。口縁部と体部内面をヨコナデ調整。扁平な体部の外面は粘土紐継ぎ目と指頭圧痕が残る不調整。茶灰色を呈し赤色粒子を多く含む胎土。杯 (260) と同じ4A層出土で、奈良・平安時代に降る可能性がある。

甕 A 甕Aには口径13.8～14.6cmの甕AIII (286～289) と口径12.0～12.7cmの甕AIV (290・292) がある。甕AIIIの多くは下膨れの体部内面を縦～斜め方向にヘラケズリする「河内型」であるが、口縁端部が内外に肥厚するもの (286)、大きく内肥厚するもの (287・288)、外肥厚して上方に面をつくるもの (289) の小異があり、それぞれ調整法や色調、胎土には微妙な違いがある。286～288は直線的な口縁部内面を横ハケ目調整し、頸部内面に稜をもち、体部外面の縦ハケ目が細かい典型的な「河内型」で、286は暗褐色で赤色粒子を多く含み、287・288は赤褐色～茶褐色で微細な長石粒の多く含む胎土が特徴的。甕AIII (289) は口縁内面にハケ目を施さず、茶褐色で砂を多く含む胎土。いずれも4B層出土。甕AIVはともに「大和型」で、4B層出土の290は、茶褐色で赤色粒子や微砂を多く含み、外反する口縁の端部を丸く収めた「大和B型」。4C層出土の292は頸部が長く口縁端部外面に凹線状の面をもつ「大和A型」。甕AIII・Ⅳともに被熱による器壁の損傷が著しい。

甕 B 4B層出土の甕B (293) は口径27.0cm、体部径約30cmの「大和A型」で、強く外反する口縁の端部は内外に肥厚して外側に面をつくり、内面に横ハケ目調整が残る。体部外面は斜めハケ目調整、内面は横方向のナデ調整で、部分的に当て具痕や粘土紐継ぎ目が残る。口縁端部の形状と角に丸みのある正三角形の把手から飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。

甕 C 甕Cにも多様な調整のものがあり、法量の大小がある。小型の甕CIII (259) は4A層出土で、口径12.6cm。厚手で砲弾形の体部に強く外反する短い口縁部がつく。体部外面はかすかなハケ目が残るナデ調整で、内面は斜め方向のケズリあるいは強いナデ調整。淡橙茶色で赤色粒子¹³⁾を多く含む胎土や外面に縦方向の面をもつ形状が水溜遺構の95に類似し、大阪森の宮遺跡に類例がある。甕CI (291) は4B層出土で、口径23.0cm。外傾する口縁の端部が外肥厚して上方に面をつくり、体部内面をハケ目調整のちにヘラケズリする点¹⁴⁾が特徴的で、同じ口縁端部の甕AIII (289) と胎土が共通する。難波宮跡や住友銅吹所遺跡¹⁴⁾などにも類例があるが、いずれも主体を占めない。甕CI (294・295) は4C層出土で、口径24.2～24.4cm。強く外反する口縁の端部を

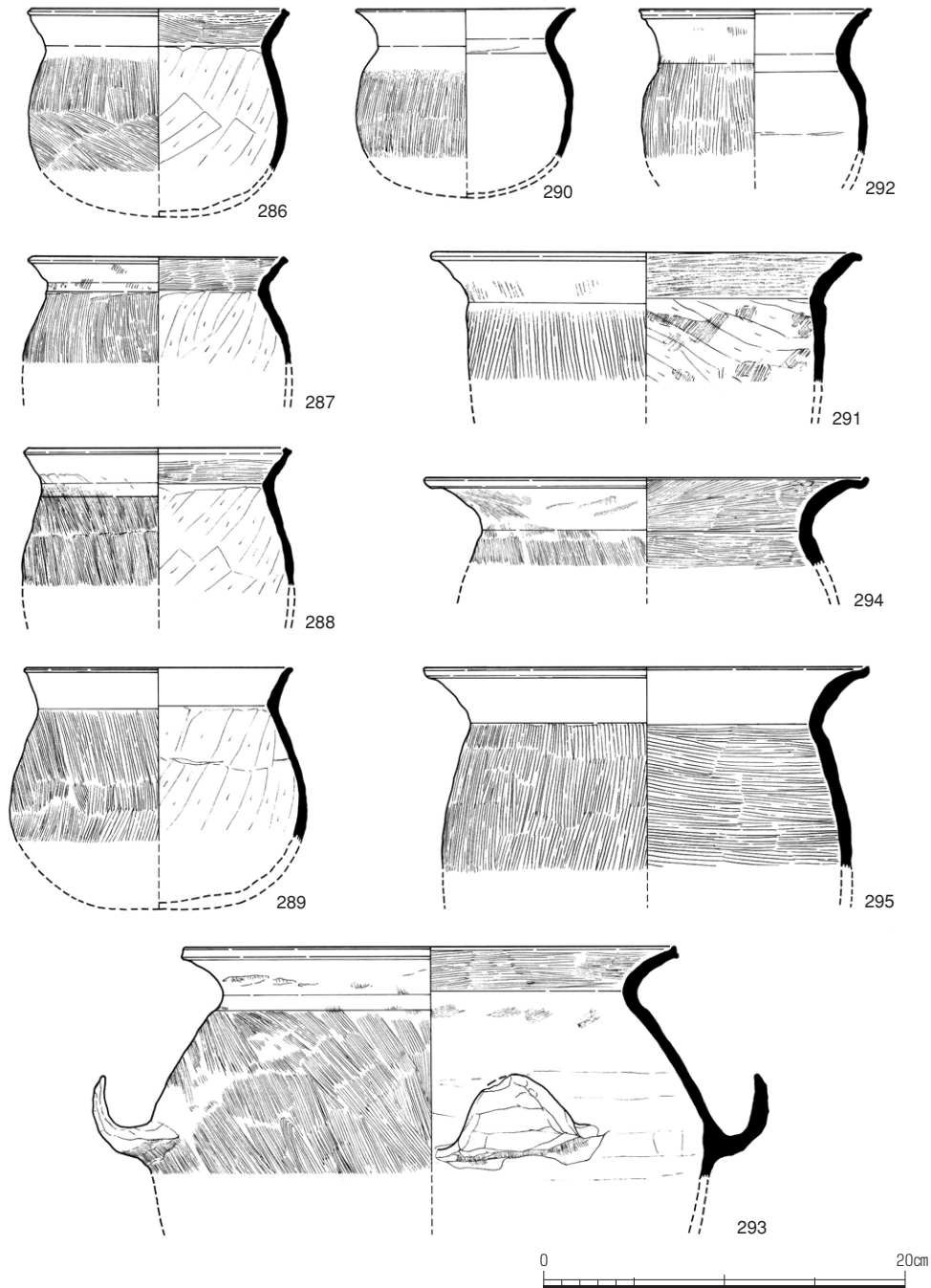


Fig. 13 炭層4出土土器(2) 1:4

上方へ肥厚させて外側に面をつくる。294は口縁～体部内面を細かな横ハケ目調整し、頸部外面にも斜め方向のハケ目が残り、明橙茶色で砂の多い微砂質土。295は体部内面を横ハケ目調整するが、口縁部はナデ調整で、橙色で砂や微砂が多く赤色粒子を少し含む胎土。いずれも体部内面下半のヘラケズリは確認できず典型的な「伊勢型」¹⁵⁾か否かは明らかではない。

須恵器 器種には、杯A、杯B、杯C、杯G、杯蓋、鉢E、壺、横瓶、甕などがあり、漆壺(PL. 391-88)などが含まれる。以下、細別層序ごとに記し、甕類は炭層全体でまとめて後述(vii炭層出土須恵器甕類)する。

296～303は炭層4あるいは4A層出土。蓋(296)は口径10.8cm、器高2.3cmの小型の蓋で、丸

炭層4・
4A層

い頂部のロクロケズリは成形時の段を残し、中央に上面が平坦で薄い円盤状のつまみがつく。基部が太いかえりの内側面が直立し、受け部の幅が広く、口径9cm余の壺類の蓋であろう。外面全面に厚い降灰がかかり、淡黄灰色で黒色粒子の多い微砂質土。杯G(297・298)はともに底部外面へラ切り(R)不調整。297は口径9.2cm、器高3.6cm。薄手の口縁部が直立する。298は口径10.4cm、器高3.4cm。開き気味の口縁部で、淡青灰色で微黒粒子を多く含み、ごく硬質の焼成。杯BⅢ蓋(299)は小さく鋭いかえりをもつa類。ロクロケズリ(R)した頂部中央に上面が平坦で小振りのつまみがつき、口縁端部は三角形をなして外側に面をつくる。口径15.0cm、器高2.8cm、かえり径12.4cm。外面に「キ」のヘラ記号。杯BⅢ蓋(300)は丸い頂部のb類で、口縁端部が小さく外反する。つまみは高めで上面がやや凹む。淡青灰色で砂混じりの胎土。口径14.6cm、器高3.3cm。杯BⅡ(301)は口径19.4cm、器高6.5cm。肉厚で平坦な底部外面をロクロケズリ(R)、内面は多方向のナデ調整。内彎気味に踏ん張る高台を境に、腰部に丸みをもって開く口縁部が薄い。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属す。壺X(302)はいわゆる「盤口壺」。2条の凹線を巡らす細い頸部の上方が大きく開き、凹線状の鋭い段をなして盤状に開く。端部は外肥厚して凹線状の内傾面をもつ。口径21.3cm。淡灰色で一部が濃茶色をなし、微細な黒色粒子を含む精良土で堅質な焼成。同形の口縁部をもつ壺は、美濃老洞1号窯出土大型¹⁶⁾窟などに類例があるが、胎土・色調などからは、本例は尾張猿投窯の製品の可能性がある。横瓶(303)は口径13.2cm、復元器高21.2cm。大きく開く長い口縁部の端部を丸く収め、体部外面は中央部を木目の浮き出す細刻の平行文叩き目、両側部に細かなカキ目をラセン状に施し、内面は細刻の同心円文当て具痕。淡青灰色を呈し外面に降灰が厚くかかる。遠江湖西窯産の可能性はある。

4 B 層 304～307は炭層4B出土。杯BⅡ蓋(304)はa類で口縁端部を丸く収める。頂部外面ロクロケズリ(R)、内面が淡橙色、外面は黒灰色で、微砂質の堅質な焼成。口径17.7cm、かえり径14.8cm。杯Ac(305～307)は丸みをもって内彎気味に開く口縁で、端部は丸く収める。杯AcⅢ(305)は、口径14.8cm、器高4.3cm。底部外面へラ切り不調整。杯AcⅣ(306)は口径11.6cm、器高4.2cm。底部外面ロクロケズリ(R)。杯AcⅡ(307)は口径19.0cm、器高3.5cm。底部外面をロクロケズリ(R)で平滑に仕上げ、内面は多方向のナデ調整。口縁端部の形状に小差はあるが、ともに灰白色～淡黄色を呈し、細砂質の精良な胎土で、内外面に漆あるいは炭化物による黒色・褐色の汚れがつく。

4 C 層 308～315は炭層4C出土。杯G(308)は小口径で深く、薄手の口縁部の先端が小さく外反し、底部外面ロクロケズリ。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。口径8.0cm、器高3.9cm。最も小型化した水落遺跡出土例と対比される。杯G(309)は小さな平底をロクロケズリ(R)。青灰色の外側面にのみ降灰があり、内面と底部外面が淡灰色を呈する有蓋の器種。外反する口縁端部内面に黒褐色の付着物があり、灯明器とした可能性がある。口径9.6cm、器高3.2cm。杯BⅢ蓋(310)は口径13.8cmのa類で、杯Ag蓋の可能性はある。丸い頂部外面の2/3ほどを丁寧にロクロケズリ(R)。端部は丸く収め、かえりは内寄り小さな三角形。外面は青灰色で自然釉状の厚い降灰がかかり、内面は黄土色。砂粒を含む微砂質の胎土で堅緻な焼成。杯BⅢ(311)は斜めに開く口縁部の外面下半に著しいロクロ目が残り、底部外面のロクロケズリ(R)も粗い。高台は端部を内外に肥厚させ、外方へ踏ん張る。淡青灰色で石英粒と黒・白色土の混じる胎土。口径13.3cm、器高4.1cm。杯AaⅡ(312)は口径17.0cm、器高3.9cm。斜めに大きく開く口縁の端部を

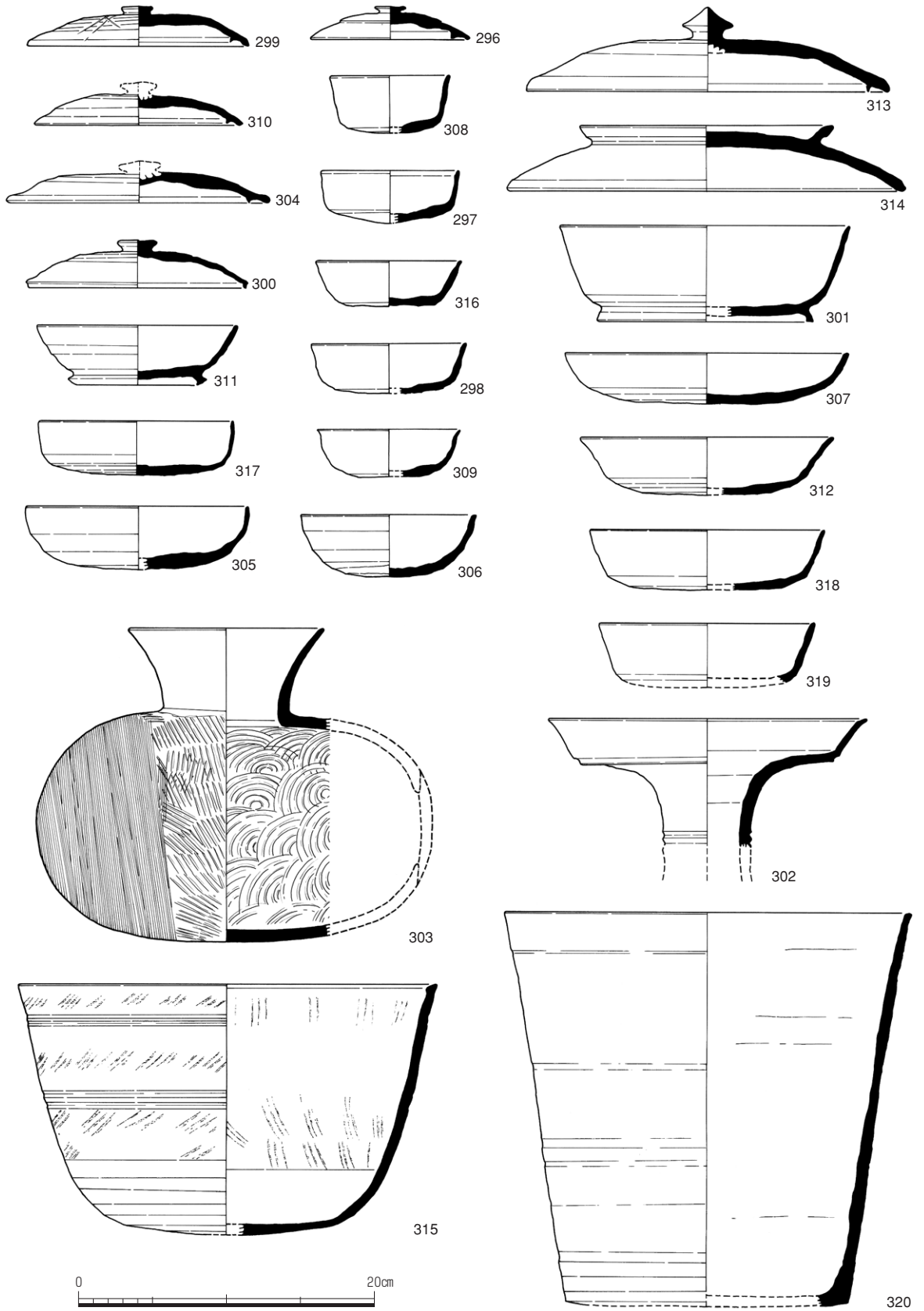


Fig. 14 炭層4出土土器(3) 1:4

丸く収め、平滑で丸みのある底部外面はロクロケズリ（R）、内面は多方向のナデ調整。大きさと器形は異なるが、底部の形状、内外面の調整、色調、胎土は杯AcII（307）と酷似する同地方産。口縁の端部と内面に数本の灯明痕跡が残り、灯明皿としての使用が想定される。

皿BI蓋（313）は頸部の長い端正な山形の高いつまみで、張りのある笠形の頂部は外面を広くロクロケズリ（R）し、内面はロクロナデおよび多方向ナデで極めて平滑に仕上げる。小さく内肥厚した口縁端部の外側に傾斜面をつくり、かえりは細く鋭い。口径24.5cm、復元器高5.8cm、かえり径21.8cm。口径22.4cmほどの皿・鉢類にかぶる。黒色・白色粘土の縞をもつ胎土で、灰青色を呈すが、頂部には重ね焼きで生じた円形の淡褐色の部分がある。東海地方産。蓋X（314）には灰粘土層出土片が接合し本来は同層の土器である。口径26.6cm、器高4.5cm。浅い皿Bに似た器形であるが、口縁端部が水溜下灰粘土層の蓋X（243）に類似した三角形を呈し、つまみの内側と頂部外面を板状工具によるロクロナデ、内面は多方向のナデ調整で平滑。全体に白色微砂を多く含む胎土で灰白色を呈するが、つまみ部にのみ鉄分の多い土を使い橙色を呈する。口縁端部に鉄釉が付着する尾張猿投窯の製品。

蓋 X
灰粘土層と接合

鉢 X

鉢X（315）は丸みのある底部外面をロクロケズリ（R）、直線的に開く口縁部の中程と上部に2条一組の凹線文が巡り、口縁端部は内肥厚して内傾面をつくる。外面に右斜交で細刻の平行文叩き目、内面に幅広く密な同心円文の当て具痕がかすかに残り、底部中央内面に使用による摩滅痕がある。口径27.8cm、器高16.9cm。砂粒を含む胎土で青灰色。形状は和銅元年銘の下道¹⁷⁾ 園勝依母夫人骨蔵器（銅製）の身部に類似する。

4 D 層

316～320は4D層出土。杯G（316）は底部外面をロクロケズリ（R）、肉厚な口縁部の端部を薄く引き出し、黒色粒子と白色土を多く含む胎土で東海地方、尾北窯産。口径9.7cm、器高3.2cm。斜めに開く口縁部で杯AgVの可能性はある。杯AgIV（317）は肉厚な底部外面ロクロケズリ（L）、直立気味の口縁部が薄く、外面が暗青灰色、内面が淡灰色で有蓋。口径13.0cm、器高3.7cm。黒色粒子を多く含む精良土。杯AⅢ（318・319）も底部外面はロクロケズリ（R）。318は淡褐色で赤色粒子を多く含み、口径15.6cm、器高4.1cm。319は白色土の縞が目立つ精良土で、口径14.4cm、器高4.4cm。ともに東海地方の製品。鉢E（PL. 219-320）は平らな底から直線的に開くバケツ形。口径27.2cm、器高26.7cm。口縁端部は外肥厚して上方に面をつくり、体部外面下半をロクロケズリ（L）する。体部上半には4～5条の凹線が巡り、内面には粘土紐継ぎ目が残る。色調は外表が灰色で断面は黄灰色、青色微粒子を含む砂質の胎土で、東海地方産とみられる。類例は尾北の篠岡78号窯例¹⁸⁾のほか、ヘラ書銘「三野国加／秦人マ佐□」から美濃須衛窯産とみられる石神遺跡¹⁹⁾第11次調査出土例がある。

東海地方産

iv 炭層3出土土器（Fig. 15～17-321～372・373～402、PL. 217～220）

炭層3は、西の谷下流域とそれが合流する水溜SX1222の西縁辺部で検出した1991年調査の粗炭層に相当し、東の谷の工房・水溜遺構を検出した第93・98次調査では、東の谷東岸の工房1近くの水溜遺構東縁辺部に厚く、中央で薄い堆積層として検出し、一部で相対的に下層の薄層を3B・3C層として分離した。出土土器には西縁辺部と東縁辺部とで接合する個体もあり、3B・3C層についても土器の構成に差異はみいだせない。土器には土師器・須恵器があり、墨書土器（土師器鍋A、須恵器皿B）、転用硯、新羅土器のほか、多数の漆付着杯類、漆壺・漆甕、

炭層3の分細

被熱土器が含まれる。なお、富本銭出土土坑SK1240内出土土器（397・398）も、炭層3出土の多くの破片と接合し、この層が西の谷の工房および東の谷東岸の工房1での操業の最終段階に投棄された遺物を主体とすることを示している。

土師器 器種には杯A、杯C、杯G、杯H、皿A、鉢H、鉢X、盤A、高杯H、壺B、甕A、甕B、甕C、鍋Aなどがあり、墨書土器鍋A（Fig. 95-61）や、漆附着土器杯C（PL. 388-3・5）がある。なお、杯A（323）・杯C（325・326・331・332・335・336・346）・皿A（349・351）・甕A（360・362・365・368）・壺B（364）は3B層出土である。

土師器の種

杯Aには、杯AI（322～324）と杯AII（321）があり、いずれもb1手法。杯AII（321）は上段の広い2段放射暗文が口縁端部に及び、口径16.2cm。器高は復元よりも高い可能性がある。杯AI（322）はa類で小さく内肥厚する口縁端部。口径19.6cm、器高5.5cm。赤褐色の精良土で、内外面が黒褐色を呈し、漆塗土器の可能性が高い。323はわずかに内彎する口縁の端部が上方に面をもち、暗文は細密な2段放射文で古相を示す。口径18.8cm、復元器高6.0cmであるが、全面に薄く漆が付着し、漆塗土器の杯BIの可能性が高い。杯AI（324）は口縁端部が小さく外反する異形形で、口縁部外面に凹凸がある。口径19.0cm、器高5.4cm。なお、炭層3の杯Aの暗文は大半が2段放射文であり、ループ状のラセン文を加えるものは少ない。

杯 A

杯Cは法量で杯CI（325～328・333）、杯CII（329～332）、杯CIII（337～341）、杯CIV（334～336）があり、径高指数35（325・327）、同27～30（326・331・333～336）、同24～25（328～330・337・338・341）、同22～23（332・339・340）があるが、飛鳥Vを降るものは含まれない。

杯 C

径高指数35の杯CI（325）は、内彎気味の口縁部の端部が小さく外反し、口縁下半をヘラケズリする。内面に細密な2段放射暗文、外面は上半部に密なヘラミガキ。口径15.6cm、復元器高5.5cmで、下層起源の可能性が高い。杯CI（327）は異形に属し、内彎する口縁の端部が小さく外反して内傾面をもち、外面は下半をハケ目調整し粗いヘラミガキを施す。内面の暗文は口縁端部に及ぶ長い1段放射文。口径19.0cm、復元器高6.7cm。胎土・色調は、外面の調整法が類似する水溜遺構の鉢X（41）に共通する。

径高指数35

径高指数27～30の杯C（326・331・333～336）のうち、杯CI（326・333）はいずれも異形に属す。326は内彎気味の口縁の端部が外反して内傾面をもち、暗文は1段放射文の上部にループ状のラセン文を2重に巡らせ、外面のヘラミガキが極めて密である。口径16.2cm、器高4.4cm。炭層3B出土。333はb0手法で、内面の暗文は太く粗い1段放射文。内面が淡褐色で、外面に赤褐色の焼きムラをもつ点を含めて皿A（349）と共通する。口径16.4cm、器高4.4cm。杯CII（331）はa0手法で、弧を描く口縁部のb類。口縁端部は丸く収める。口径14.0cm、器高3.8cm。暗文は底部に1重のラセン文、口縁部中程までの細かな1段放射文。杯CIV（334～336）は口径9.0～10.8cm、器高2.6～3.1cmで、a1手法（335）とa0手法（334・336）があるが、334・335は端部を小さく内肥厚させて凹線状につくり、赤褐色で微砂を含む胎土。336は丸く収める端部で淡褐色を呈し赤色粒子を多く含む胎土。

径高指数
27～30

径高指数24～25の杯C（328～330・337・338・341）はほとんどがa0手法。杯CI（328）は細密な1段放射暗文で、口縁端部に凹線状の内傾面をもち、淡褐色で微砂を多く含む胎土。口径16.6cm、器高4.1cm。杯CII（329）は口径16.2cm。鈍い内傾面をもち、口縁部中程までの左傾きの1段放射文。明茶色で微砂を多く含む胎土で、口縁部内側にタール状の付着物がある。杯CII

径高指数
24～25

(330) は口縁上部が内屈し、口縁端部近くまでの1段放射文をもつ。口径15.0cm、器高3.8cm。口縁部に外側からの小孔を焼成後に穿つ。杯CⅢ(337・338・341)は口径11.6~13.0cm、器高2.8~3.2cm。いずれも口縁端部が内肥厚して凹線状の内傾面をなし、白色微砂が目立つ胎土であるが、341の底部外面には軽いヘラケズリが施されている。

径高指数
22 ~ 23

径高指数22~23の杯C(332・339・340)もa0手法。杯CⅡ(332)は弧を描く口縁部で端部は凹線状の内傾面をもち、内面の暗文は粗い1段放射文。明黄色で赤色粒子を多く含む胎土。口径15.4cm、復元器高3.6cm。杯CⅢ(339・340)は口径12.6~13.0cm、器高2.8~2.9cm。340は口縁上部で内屈し、端部が鈍い内傾面のa類で、339は平底から弧を描いて開く口縁の端部が凹線状の内傾面をなすb類。両者は含まれる微砂の量に違いがある。

杯 G

杯G(342~344)には杯CⅡに相当する大きさの杯GⅡ(342・343)と杯AⅣに相当する大きさの344があり、多くに煤や漆の付着がみられる。杯GⅡ(342・343)はa0手法で、暗文をもたない。342は口径14.6cm、器高3.8cm。茶褐色で微砂を多く含む胎土。343は口径16.4cm、器高4.2cm。口縁端部が外肥厚して内傾面をつくるGb類で、雲母片を多く含む淡褐色の胎土。内面に漆が厚く付着する。344はa0手法で、内面に厚く漆が付着し、調整法や暗文の有無は不明。内彎する口縁端部の形状は杯Aのそれに類似し、杯AⅣの可能性もある。口径10.8cm、器高2.3cm。径高指数20。杯HⅢ(345)は口径11.8cm、器高2.9cmで、段をもって外反する口縁部の端部を小さく内側に巻き込む。淡褐色で赤色粒子を多く含む杯Hに一般的な胎土。

蓋 X

蓋X(346)は内面に細密な放射暗文をもつ浅い杯CⅠを伏せた形態で、頂部外面の太い分割ヘラミガキが蓋であることを示す。口径18.6cm。赤褐色で微白砂を多く含む精良土。

皿 A

皿A(347~351)には、口径22.4~24.0cmの皿AⅠ(348~351)と口径17.5cmの皿AⅡ(347)がある。347はb3手法で、器高1.9cm。口縁端部が丸く内肥厚し上方に凹線状の面をもつ。口縁部内面の暗文は1段の放射文。明茶色で微砂を含む精良土。皿AⅠ(348)もb3手法で、内彎気味に開く口縁の端部は鈍い内傾面をもつ。内面の暗文は細かな2段放射文で上段の幅が広く古相を示す。赤褐色で微砂を含む胎土。口径24.0cm、器高2.3cm。皿AⅠ(349)は太く粗い1段放射暗文と外肥厚して上方に面をもつ口縁端部が特徴的な異形品で、底部外面は成形時の凹凸が残る乱雑なヘラケズリでヘラミガキは施さない。赤色粒子を多く含む胎土で、外面が赤褐色、内面は淡褐色を呈す。器高2.4cm。350は粗いヘラミガキのb1手法で、口縁端部は丸く内肥厚し、左傾気味の細い1段放射暗文。明茶色を呈し、微砂を多く含む胎土で、内外面ともに炭化物の付着が著しい。皿AⅠ(351)は屈曲気味に立ち上がる口縁で端部はかすかに内肥厚する。底部の器壁が厚いa0手法で、外面には成形時の凹凸と木葉痕が残り、内面の暗文は底部のラセン文と口縁部の1段放射文ともに細くかすかで、赤褐色を呈し雲母片を含む精良な胎土は飛鳥地域には一般的。口径22.8cm、器高2.4cm。径高指数12。

高杯
・ 鉢 H

高杯H(352)は脚径9.6cmの脚部のみの破片。脚柱部外面を縦方向にヘラケズリし、内面は円錐形にえぐり、脚端部は内外面ともにヨコナデ調整。脚柱の高さから、下層遺構起源の可能性がある。鉢H(353・354)は口縁部上半が薄く、端部は丸く内肥厚する。口径23.6~24.0cm。354は器高8.5cmで、底部内面にはコテ状工具によるナデ調整痕の上に布目痕がつく。布目痕は底部外面のヘラケズリのために伏せた際のもものとみられる。高杯H(352)とともに淡褐色で赤色粒子を多く含む杯Hに共通する胎土。

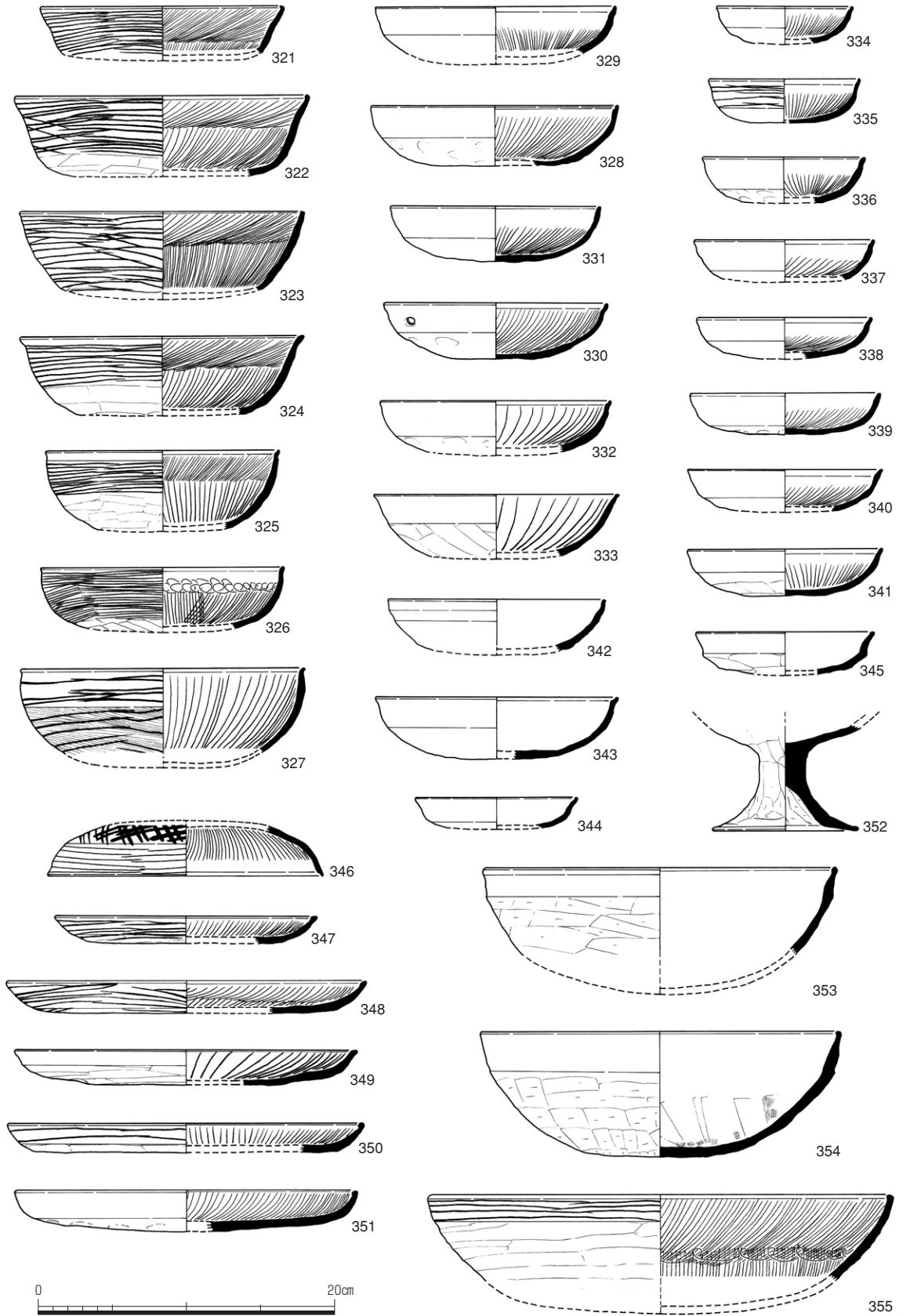


Fig. 15 炭層3出土土器(1) 1:4

盤A (355) は口縁部外面下半を幅広いヘラケズリ、上半には線状のヘラミガキ。口縁端部は丸く内肥厚し、内面の暗文は2段の放射文とその間のループ状のラセン文のいずれもが細密である。淡褐色で赤色粒子を多く含む精良土。口径30.8cm、残存高5.8cm。

大型の鉢X 鉢X (369) は広口で「く」の字形に開く口縁部をもつ鍋形の鉢で、頸部内面が稜をなし口縁端部は内肥厚して外側に面をつくる。体部外面下半をヘラケズリするほかは平滑にナデ調整。口径35.4cm。胎土は杯類と同じ精良で淡黄褐色を呈し、煮炊具として使用された形跡はない。形状・胎土ともに、南河内地方の鍋形土器に類似し、また、後述する南北大溝SD1130他に破片がある「内外面をヘラミガキした鍋形土器」や飛鳥京跡出土の鍋形土器、および体部下半をヘラケズリする土坑SK1126出土の鍋B (863) に類似するが、本例にはヘラミガキがなく、口縁部の形状が異なる。なお『平城報告XI』では、内外面にヘラミガキを施し高台のつく奈良時代後半の器種を、土師器鉢Fとするが、本例は高台の有無も不明であり、これらの系譜関係は明らかでない。

甕 A 甕類は、多様な調整手法の中小型の甕Aが主体を占め、大型の甕B、甕C・鍋類は少ない。甕Aには、ハケ目調整を基調とするもの(356~362)とほとんどハケ目を残さないものがある。甕AⅢ(356)は下膨れの体部と直線的に開く口頸部からなり、体部外面を条の細かな縦ハケ目、体部内面をヘラケズリする「河内型」。口径13.3cm、復元器高10.4cm。淡茶褐色で赤色粒子を多く含む微砂質の胎土も「河内型」に特徴的。甕AⅢ(357・358・359)は口頸部が緩やかに外反し、体部内面はナデ調整、外面は頸上部までの縦ハケ目。口径13.4~15.8cm。358・359は口縁端部を小さく肥厚させて面をつくり、明橙褐色で砂混じりの胎土で、口縁部内面に横ハケ目を施す。357は体部外面下半に横ハケ目を施し、黄褐色で赤色粒子を多く含む胎土で、口縁部内面はナデ調整。甕AⅢ(360)は撫で肩で縦長の体部と直立気味の口頸部からなり、口縁上部が外反して端部は丸く収める。口径14.6cm。復元器高17.4cm。茶褐色で白色砂粒を含む胎土の「大和型」で、体部外面は縦ハケ目、内面には押え痕の凹凸があり、口縁上部内面に横ハケ目、外面には粘土紐継ぎ目が残る。甕AⅡ(361)は肉厚な頸部が外反し端部を丸く収める。口縁部内外面の段状の凹凸をもつナデ調整と、体部下半内面の横方向のヘラケズリと、灰褐色で砂粒の多く混じる胎土が、水溜遺構の93・108に類似する「青野型甕」。口径17.0cm、体部径16.0cm。甕AⅡ(362)は球形の体部と強くくびれて外反する口縁部からなる。淡茶褐色で雲母片を多く含む均一な砂質の胎土は異形の杯C類と共通する。口径16.4cm。

363~368は内外面にハケ目がほとんど残らない甕Aあるいは壺類。広口で器高が低い壺B(363・364)には、体部外面の調整にヘラケズリ(363)とナデ調整(364)とがある。364は直線的に開く口縁の端部に内傾面をもち、赤褐色で赤色粒子を多く含む胎土。口径10.2cm、体部径11.1cm。363は体部外面を広くヘラケズリする点で小型甕A(水溜遺構茶砂土の88など)に類似するが、赤色粒子を多く含む微砂質の胎土は杯H類に近く、ミニチュア土器の壺H(Fig. 106-218)に相当するとみられる。口径8.2cm、復元器高5.2cm。

甕A(365・368)はともに体部内面にコテ状工具によるナデ調整を施すが、口縁部形状と胎土が異なり、別産地とみられる。365の外面にはかすかな縦ハケ目が残り、直線的に開く口縁部は端部を丸く肥厚させ、外面に粘土紐継ぎ目が残る。口径15.0cm、復元器高13.6cm。明茶褐色で赤色粒子と白色微砂粒を多く含む胎土。368は体部外面を縦方向にナデ調整、外反する口縁部の端部を上方に肥厚させて外側に面をつくる。茶褐色で微砂と雲母片を含む胎土で、口径

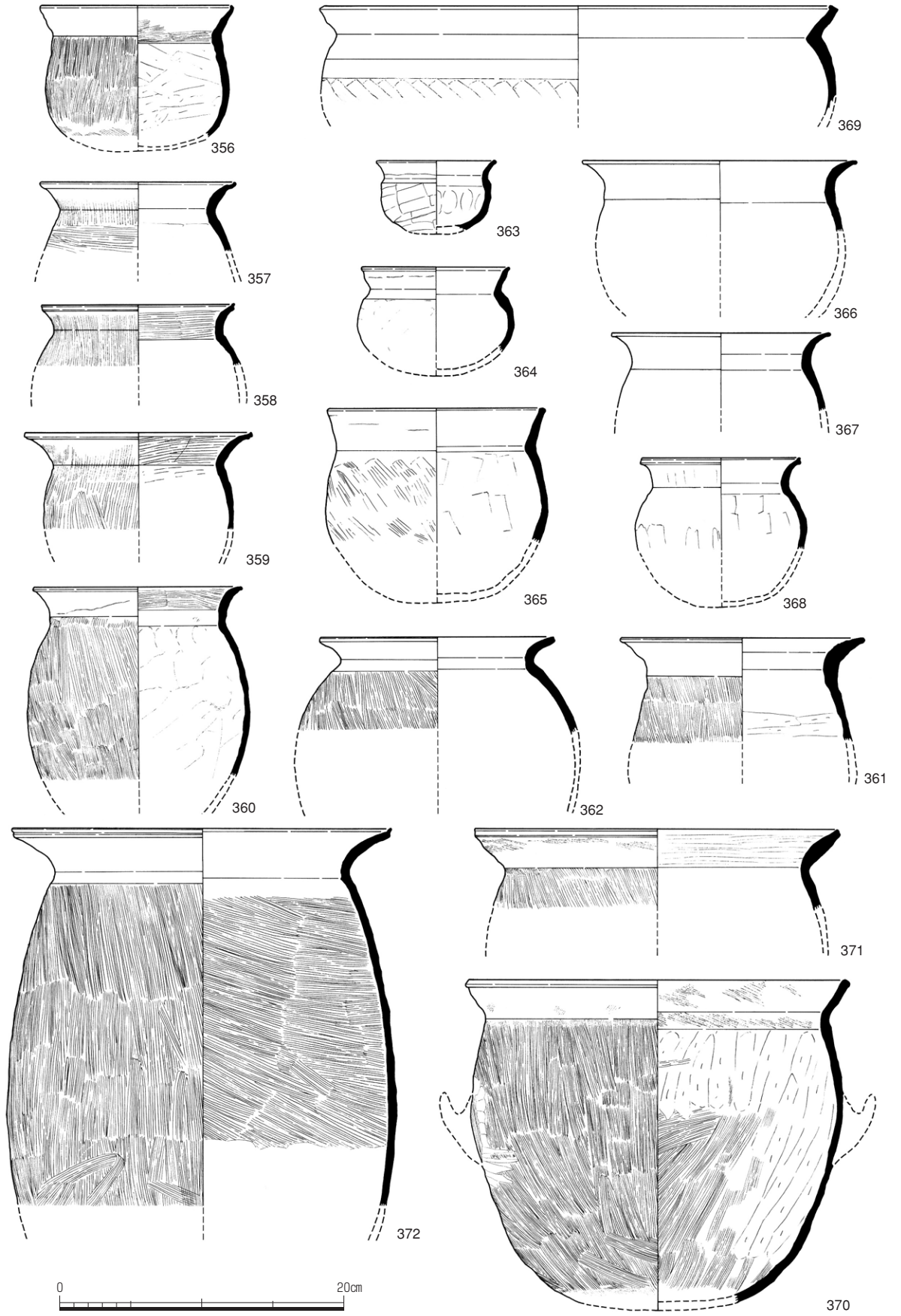


Fig. 16 炭層3出土土器(2) 1:4

11.0cm、体部径12.0cm。甕A (366・367) は弧を描いて外反する口縁部で、端部は薄く丸く収め、体部内外面はともにナデ調整。黄茶～茶褐色を呈し、微砂と赤色粒子を多く含む胎土も「大和B型」のそれとは異なる。366は口径19.2cm、367は口径15.2cm。

甕B (370) は内彎気味に開く口縁の端部を外肥厚させて鈍い面をつくり、口頸部内面は斜めハケ目ののちヨコナデ調整。体部内面は縦ハケ目ののちに縦方向にヘラケズリし、下半部を中心にハケ目調整が残る。体部中程に大きな円形の把手基部の剥離痕があり、その中央部には縦ハケ目、周縁部には貼り付け時のナデ調整がある。茶褐色を呈し、微砂と赤色粒子を多く含む「河内型」に通じる胎土で、口径26.0cm、復元器高23.2cm、体部径26.0cm。口縁端部が微妙に異なるものの、体部内面の調整法や胎土が共通する炭層4B層の甕C (291) 等と同一産地とみられる。甕C (371) は口径25.4cm。体部外面を縦ハケ目、内面はナデ調整。口縁部内面には粗いハケ目の痕跡がある。茶褐色で角閃石などの砂粒を多く含む胎土と、中程が肉厚な口縁の端部の外方に面をつくる形状は「伊勢型」甕の特徴と共通する。甕CI (372) は均一な厚みの長く外反する口縁で、端部は上方につまみ出して外方に面をつくる。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面上半は横ハケ目で、下半に当て具痕の凹みが残る「大和A型」。口径26.7cm、体部径27.2cm。淡橙色で微砂と赤色粒子を多く含む胎土。「大和A型」の甕が口縁端部に明確な面をもつようになる飛鳥V以降に属するとみられる。

伊勢型

大和A型

須恵器の種

須恵器 器種には杯A、杯B、杯G、椀A、椀B、鉢A、盤B、壺K、壺、平瓶、甕A、甕Cがあり、墨書土器皿B (Fig. 96-63)、ヘラ書土器壺 (Fig. 98-98)、転用硯皿蓋 (Fig. 101-137)・同甕 (Fig. 108-246) のほか、漆附着土器(椀AIV: PL. 388-38、椀BV: 同39)、漆壺(徳利形: PL. 391-55、平瓶: 同75・77・80・83、長頸壺)などが多数含まれ、漆甕(PL. 391-92)の破片がある。なお、373・374・392は3B層出土で、397・398と甕片(539)は富本銭出土土坑SK1240にも破片がある。また、381・382・384・389・390・400は西の谷が合流する水溜SX1222西端部、その他は東の谷東岸の工房1に近いSX1222・1220の東端部からの出土である。

杯蓋

杯G蓋 (373・374) はSX1220東南端の3B層出土。373は厚手の頂部外面をロクロケズリ(R)し、口縁端部は丸く内肥厚し、かえりの先端も丸く収める。外表は暗紫色で、断面が橙色。細かな赤色粒子と微白砂を含む多孔質の胎土。口径10.5cm、かえり径8.3cm。かぶるべき身の口径は約9.5cm。374は口径11.6cm、器高2.6cm、かえり径9.8cm。丸い頂部に上面が平らなつまみがつき、薄い口縁部に小さなかえりをもつ。外面全面に厚い降灰がかかり、淡青灰色の細砂質土。杯BV (385) の蓋の可能性もある。杯G (375) は斜めに開く薄い口縁で、底部外面ヘラ切り不調整。内面が濃青灰色、外面が灰色を呈し、口径10.4cm、器高3.2cm。杯AgVの可能性もある。杯G (376) は直立する薄い口縁の上端が小さく外反し、口縁下半と厚手の底部外面をロクロケズリ(L)。口縁部が歪む完形品で、口径8.9～9.5cm、器高3.8cm。下層起源とみられる。

杯B蓋 (377～383) にはa類とb類があり、b類が大多数を占める。口径ではaⅢ (377)、bⅣ (378)、bⅢ (379・380)、bⅡ (381・382)、bⅠ (383) とに分かれる。蓋aⅢ (377) は口径15.2cm、かえり径13.6cm。低い笠形の頂部外面をロクロケズリ(R)し、内面はロクロナデののちに中央部を多方向にナデ調整。口縁端部は小さな外傾面をなし、小三角形のかえりが内寄りにつく。灰白色で砂粒を多く含む胎土で、外面に厚い降灰がかかる。蓋bⅣ (378) は肉厚の頂部と薄い口縁部からなる低い笠形で、上面の丸い扁平なボタン状のつまみをもち、口縁端部は外側に浅

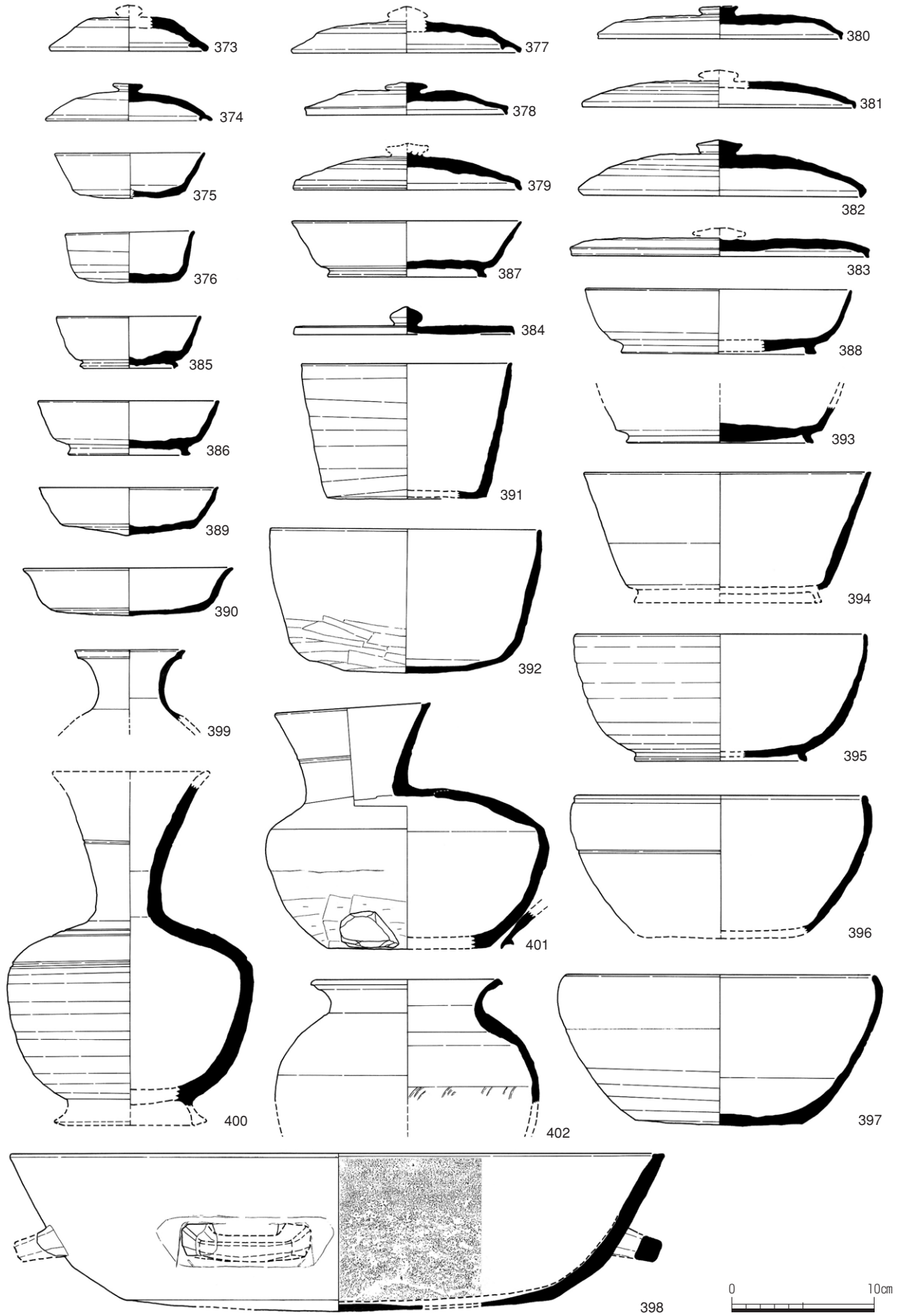


Fig. 17 炭層3出土土器(3) 1:4

い凹面をつくって尖る。青灰色で黒色粒子を多く含む胎土で、外面全面に厚い降灰がかかり、頂部の調整法は確認できない。口径14.0cm。蓋bⅢ(379・380)は、口径16.0～17.0cm。379は丸い笠形の頂部と外開きに屈折する長めの口縁端部からなり、上部が欠けたつまみのくびれ部は太い。頂部外面の2/3をロクロケズリ(R)、内面は中央部をナデ調整。淡灰色を呈する微砂質の胎土で硬質。380は広く平坦な笠形をなす肉厚の頂部外面をロクロケズリ(R)し、薄い口縁部の先端を垂直に屈折する。つまみは上面が浅くくぼみ、くびれが小さい。外表が暗青灰色、断面が赤茶色を呈し細砂粒を多く含む胎土で外面全面に厚い降灰がかかる。蓋bⅡ(381・382)は口径19.0～19.4cm。381は張りのある薄い頂部をロクロケズリし、口縁部の外面と内面に残る降灰から、外面には口径16.8cm、内面には台径10.0cmの杯類を重ね焼きしたことがわかる。382は丸い笠形の肉厚な頂部をロクロケズリ(R)し、口縁端部は内折して外傾面をつくる。つまみは上面が円錐形に盛り上がり、縁部は細く尖る。黒色粒子を含む胎土で淡灰色。蓋bⅠ(383)は均一な厚みの扁平な頂部で口縁端部は小さく下方へつまみ出して外側に面をもつ。口径20.8cm。つまみは欠失するが貼り付けのためのナデ調整から薄く扁平な形状とみられ、頂部外面に厚い降灰がかかり、ロクロケズリの範囲は不明。内面は中央部に多方向のナデ調整を施し、ほぼ全面に墨が付着しており転用硯としての使用が想定される。淡灰色で砂粒を多く含む胎土。椀BⅢ蓋b類(384)は扁平な頂部の中程に浅い沈線状の段が巡る、いわゆる段蓋で、丸く大きな宝珠形つまみをもつ。金属器写しの椀類にかぶる蓋で、口縁端部の屈折が極めて小さく、口径15.4cm、器高2.0cm。暗青灰色を呈し微細な黒色粒子を多く含む精良土で、外面全面に厚い降灰がかかり、尾張猿投窯産とみられる。

高台の痕跡

杯 B 杯B(385～388)には口径で杯BV(385)、杯BIV(386)、杯BⅢ(387)、杯BⅡ(388)がある。杯BV(385)は口径10.0cm、器高3.7cm。底部外面はヘラ切り(R)不調整で、内面のロクロ目を反映して不均一な厚みとなり、直線的に開く口縁部は薄い。高台は細く内彎気味で、内端が接地する。微砂と黒色粒子を多く含む胎土で灰色を呈し、内面に自然釉が厚くかかる。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。杯BIV(386)は口径12.6cm、器高3.9cm。径高指数31で飛鳥Ⅳに属する。底部外面ヘラ切りののちナデ調整、内面中央部を多方向のナデ調整。やや高い高台が内寄りにつき端部が外肥厚する。杯BⅢ(387)は口径16.2cm、器高4.0cm。径高指数25。薄い口縁部が直線的に大きく開き、底部外面ヘラ切り不調整で、平坦な内面を多方向にナデ調整。高台の端部は外肥厚し下方に平坦な面をもつ。暗青灰色で砂粒を含む精良土。飛鳥Ⅴに属する。杯BⅡ(388)は中央部が肉厚な底部外面をロクロケズリ(R)、内面は多方向のナデ調整。薄手の口縁部が丸く立ち上がり端部は尖る。高台は方形で、端部がやや外肥厚する。淡灰色を呈し黒色粒子を多く含む胎土。口径18.8cm、器高4.5cm。「入寺」の墨書土器杯BⅡ(Fig.96-63、口径19.4cm、器高4.2cm)とともに、飛鳥Ⅳに属する。

杯 A 杯Aは有蓋の杯Ag類よりも、杯AaⅣ(389)や杯AcⅢ(390)など無蓋の器種が多い。杯AaⅣ(389)は口径12.4cm、器高3.4cm。径高指数27。底部外面はヘラ切り(R)不調整で、内面中央に一方方向のナデ調整。口縁端部が小さく外反し、外面の一方に降灰がかかり内面に火襷をもつ。杯AcⅢ(390)は底部外面をロクロケズリ(R)、内面は広く多方向にナデ調整。口縁上部が滑らかに外反し、端部は薄く丸い。淡青灰色で黒色粒子や微白砂を多く含み、東海地方産とみられる。口径14.6cm、器高3.4cm。径高指数23。

- 椀 A (391) は底部と口縁部の境が角張り、口縁部が直立する箱型で、口径14.8cm、器高9.5cm。口縁部下半と底部の外表面をロクロケズリ (R)、その他はロクロナデ調整。口縁端部は小さく外反して、外側が浅い凹線状となるが、降灰は凹線以下の口縁部外表面にのみ著しく、端部が摩耗することからも、有蓋の器種とみられる。暗灰色を呈し微砂と黒色粒子を多く含む東海地方産。椀 AI (392) は底部との境が丸く、上部が小さく内彎する口縁部が直立気味に開く。口縁部下端と底部とを手持ちのヘラケズリ調整。底部内面は多方向のナデ調整。暗青灰色で微砂粒の多い硬質な焼成。口径19.0cm、器高10.1cm。有蓋の器種とみられる。
- 高台をもつ椀には底部との境が角張る椀 B (393・394・漆附着土器 PL. 388-39) と丸い弧を描く銅鉢形の椀 C (395) とがある。漆附着土器の椀 BIV (PL. 388-39) は口径10.6cm、器高4.5cm。小さな底部の外表面はロクロケズリで、斜めに踏ん張る方形の高台がつき、大きく開く口縁部の端部は薄く引き出される。椀 BII (393) は口縁部を欠くが、後述の椀 BI (509) のような直線的に開く口縁部の深手の器種とみられ、底部中央が肉厚な点と高台径は杯 BII (388) に類似する。底部外表面を滑らかなロクロケズリ (L)、内面中央部をナデ調整し、丸く外反する高台の形状と淡灰色で黒色粒子を多く含む胎土は東海地方産の可能性を示す。椀 BI (394) は高台を含む底部を欠くが、直線的に開く口縁の端部は上方に小さな面をつくる。口縁部下半以下をロクロケズリ (R) し、淡灰色で、黒色粒子が少ない砂質の胎土から美濃須衛窯の製品の可能性がある。口径20.1cm、器高9.2cm。飛鳥 V に属する。銅鉢形の椀 C (395) は口径20.3cm、器高8.9cm、径高指数44。内彎気味の薄い口縁部外表面に4条の凹線状の浅い凹みが巡り、口縁部下半から底部はロクロケズリ (L)。外反気味で端部の丸い高台がつく。外表が青灰色、断面が淡茶色で微砂質の胎土。外表面に明茶色に発色する鉄釉が塗布されており、尾張猿投窯産の可能性が高い。
- 鉢 A (396) は口縁の上部で内彎し、端部外表面に凹線状の浅い段、中程に1条の凹線が巡る。底部外表面ロクロケズリ (R)、その他はロクロナデで、青灰色で外表面上半に降灰がかかり、微砂と黒色粒子を多く含む胎土。口径19.9cm、復元器高10.0cm。東海地方産の可能性が高い。
- 鉢 A (397) と盤 A (398) は富本銭出土土坑 SK1240 出土で、破片の多くが SX1224 内の東縁部の炭層 3 に含まれ、水溜・陸橋の機能最終段階に、工房域から SK1240 へ投棄されたものである。鉢 A (397) は直線的な体部下半と平らな底部外表面をロクロケズリ (R)、底部内面は多方向のナデ調整で、口縁は上部で内彎し端部は丸い。口径21.9cm、器高10.6cm。灰白色で赤色粒子と白色土を多く含む軟質の焼成で陶邑窯産とみられる。盤 A (398) は平底で斜めに大きく開く口縁の端部が小さく内肥厚して上方に面をつくる。底部と口縁部の境は斜めになる箇所と角張る箇所とがあり一定しないが、口縁部下半と底部の外表面をロクロケズリののちナデ調整、口縁部上半の内表面はロクロナデ。口縁部外表面に方形に削り出し面取りした把手が横位につく。口縁部下半から底部の内表面には、堅い顆粒状の物質をかき回したことによる擦痕と摩耗がみられ、特に底部周縁部の摩耗が著しく、厚さ 2mm にまで擦り減っている。廃材に含まれた金属成分の比重洗鉢に使用された「ゆり盆」の可能性が高い (本文編 [I]、115・116頁参照)。口径45.6cm、器高11.2cm。淡青灰色～白色の軟質焼成で、砂粒を多く含む胎土。東海地方あるいは中国地方の製品の可能性がある。
- 壺 (399) は外反する口縁の端部を上方に引き出し玉縁状をなす。ロクロナデ成形で頸部が著しく薄く、暗青灰色で微砂質の胎土。口縁から頸部内面に漆液が固着した漆容器。SX1222の東部出土。口径7.6cm。壺 K (400) は口縁先端と脚台部を欠くが、頸・肩・体部に凹線文が巡

り、濃緑色の自然釉が厚くかぶる。厚手で黒色粒子・白色砂を多く含む多孔質の胎土が特徴的。体部径17.1cm、復元器高25cm、推定口径11.0cm。西の谷下流部の炭層2とSX1220西縁の炭層3出土片が接合。平瓶(401)は口径10.8cm、体部径20.0cm、器高17.3cm。広口の口縁端部は内傾面をなし、頸部に凹線文1条を巡らす。体部下半と底部はヘラケズリ調整で、体部下半外側面に口径約11cmの蓋aIV類の破片が釉着し、降灰・胎土・色調が400と酷似する同産地。壺(402)は丸い肩部と外反する口縁部とからなり、口縁端部は縁帯状に肥厚し、外側に面をもつ。体部上半は内外面ともロクロナデで肉厚、下半の内面にかすかな当て具痕が残る。暗灰色を呈する多孔質で砂質の胎土が400・401と類似する。口径12.7cm、体部径18.5cm。

v 炭層2出土土器 (Fig. 18~20-403~444・445~478、PL. 217~219)

炭層2は西の谷の下流域から東の谷の水溜遺構の陸橋をも覆う堆積で、第93・98次では水溜中央部に厚い層序を、炭層2、2A、2B、2C、2D、2Fに分層した。土器は前3者に多く、奈良時代に降る可能性のあるものが含まれ、炭層2C・2D・2Fはやや少量ながらも炭層3の直上に位置することから、その親近性が高い傾向にある。土師器・須恵器のほかに、少量の施釉陶器 (Fig. 104・105-165・167・181など) が含まれ、土器の多くは西の谷、東の谷上流部からの流入品で占められ、内容はそれらと変わらない。

土師器 器種には杯A、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、鉢A、鉢B、壺B、甕A、甕C、鍋A、鍋Bなどがあり、2B層の墨書土器杯AI (Fig. 95-57) や、漆附着土器 (PL. 388-7など)、土師器甕成形用の当て具 (PL. 270-258・259) がある。

杯 A 杯AI (403~411) は口径16.7~19.6cm、器高4.6~6.4cm。いずれもb₁手法。層序別では2A層(403~405)、2B層(406)、2F層(407~411)がある。403は口縁上部が外反するa類で、外面のヘラミガキが幅広く、淡褐色を呈す砂混じり土。404は口縁中程が肉厚で端部が内屈するb類。濃橙茶色で赤色粒子を多く含む。403・404は2B層の墨書土器杯AI (Fig. 95-57) とともに径高指数25~26で、飛鳥V~平城宮土器IIに属する。405は上段の幅広い2段放射暗文と外面のヘラミガキが細密であり、口縁端部内面に漆が付着し、漆パレットとして刷毛先を整えたと推定される。2B層の406は口縁部の器壁が厚く端部を丸く収める異形品。口縁部の暗文は上段の幅広い2段の放射文。口径19.6cm、器高6.2cm。径高指数32。飛鳥IV~Vに属する。2F層の杯AIには多様なものがあり、407は口径16.7cm、器高4.8cm、径高指数29。2段の放射文の間にループ状のラセン文が1条巡り、飛鳥IVに属する。408~411は上段の幅広い2段放射暗文。408・411はより小型で、口径17.2~17.6cm、器高5.0~5.4cm。408は径高指数28。小さく内肥厚する口縁端部で底部内面のラセン文が細かく、411は径高指数が高く、暗文が直立気味で細かく、橙茶色を呈する微砂質の胎土。409・410はより大型で、口径19.0~19.4cm、器高5.8~6.4cm。暗文が細密な409は内外面の外表が黒褐色を呈し、漆塗土器である可能性があり、口縁端部の肥厚が鈍い410は、粗く太いヘラミガキの異形品。ともに飛鳥IV~Vに属する。

杯 C 杯CI (412~414) は口径18.0~20.5cm、器高3.8~4.5cm。いずれもb₁手法だが、口縁端部・色調・胎土はそれぞれ異なる。口縁端部が凹線状をなす412は密なヘラミガキで径高指数24。赤褐色で赤色粒子を多く含む胎土。口縁上部で屈曲し内傾面をつくる413は、底部のラセン文が大振り径高指数21。赤褐色できめの細かな胎土。端部の肥厚しない414は、粗い線状のヘラ

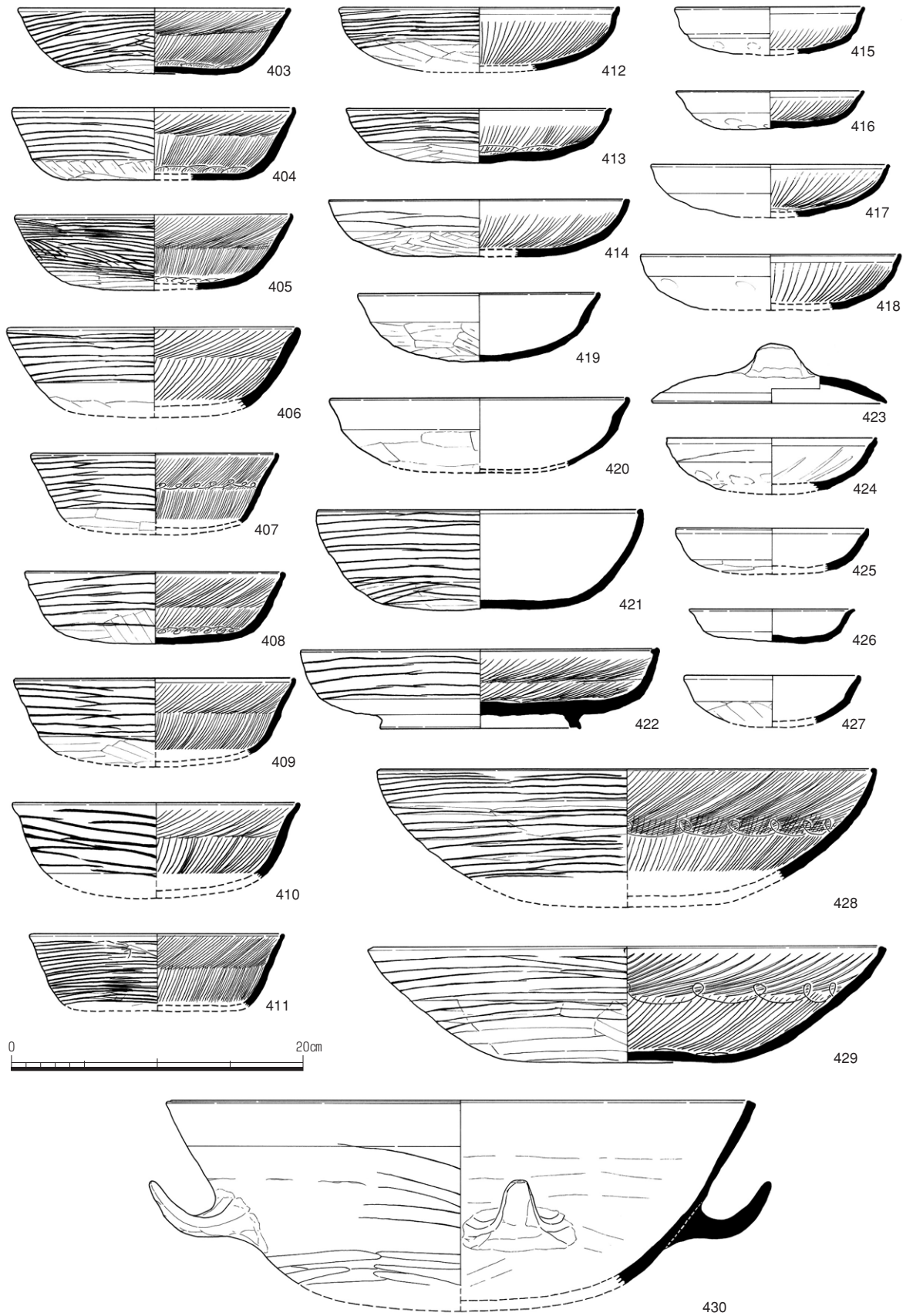


Fig. 18 炭層2出土土器(1) 1:4

- 平城宮Ⅱ
土器Ⅱ
- ミガキで径高指数20。茶褐色で砂粒を多く含む胎土。いずれも炭層2・2A層出土で、413・414は平城宮土器Ⅱに属する可能性がある。杯CⅢ(416)は2D層出土。a0手法で端部がかすかに内壁厚し、淡黄褐色で微白砂を多く含む。口径12.7cm、器高2.7cm。径高指数21。杯CⅢ(415)と杯CⅡ(417・418)は工房近くの2F層出土で、a0手法。炭層3例と類似する。415は口径12.8cm、器高3.2cm。径高指数25。鈍い内傾面の口縁端部。417は口径16.2cm、器高3.6cm。418は口径17.8cm、器高3.8cm。赤褐色で微砂質の胎土。417・418は飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。
- 杯 G 杯G(424～426)はいずれも2B層出土。424は口縁端部外側が凹線状の面をなすGc類で、淡黄色で砂混じりの胎土。口縁部外面に粘土紐継ぎ目、内面に斜方向のナデ調整が残り、口径13.2cm、器高3.8cm。杯G(425)は底部外面を軽くヘラケズリするGd類。口縁端部を上方につまみ出し外方に面をつくる点と色調・胎土はGc類と同じ。口径13.2cm、器高3.2cm。杯G(426)は小型の皿形で、口縁端部が小さく外反し内側に灯明痕が残る。茶灰褐色で赤色粒子を含む胎土。口径11.2cm、器高2.4cm。径高指数21。424は下層起源の可能性があり、他は飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。
- 杯 H 杯HI(420)は肉厚な口縁部の先端が薄くなり内壁厚する。口径20.4cm、器高5.3cm、径高指数26。飛鳥Ⅴの杯AIに相当する大きさをもつ。杯HI(419)は底部外面のヘラケズリが細かく底部に丸みをもつ。口径16.7cm、器高4.7cm。径高指数29。淡橙茶色で赤色粒子や雲母片を多く含む砂質の胎土。杯HⅢ(427)は口径11.8cm、器高3.6cm。下層起源の可能性はある。蓋(423)は頂部外面に、中心から外れて扁平な板状のつまみがつく。頂部外面を軽くヘラケズリし、口縁端部が薄く尖る杯Gd類と同じ調整技法の粗い器面で、胎土・色調も類似し同工の片口鉢類にかぶるとみられる。口径16.0cm、器高4.1cm。飛鳥Ⅴの藤原宮東面内濠SD2300に類例がある。
- 蓋
- 鉢 B 鉢B(421)は平底で口縁上部が内彎し、端部は丸く内壁厚して巻き込む。b1手法で、内面に暗文は施さない。口径22.0cm、器高6.9cm。SX1222の中央部2C層出土。
- 皿 B 皿BⅡ(422)は直立気味の口縁の端部が内壁厚し、上方に面をつくる。肉厚な底部の内寄りについた高台の内側は一方方向のヘラケズリだが、外側は口縁部下半までをロクロ(L)を用いたようなヘラケズリ。内面は底部に大振りのラセン文、口縁部に2段の放射文を施し、外面のヘラミガキは粗い線状。橙褐色で砂粒を多く含む胎土。口径24.4cm、器高5.5cm。蓋(423)・杯
- 盤 A G(424)と同じSX1220西縁の2B層出土で、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。盤A(428・429)は口径33.6～34.7cm、器高8.0～9.5cm。口縁上部が内彎気味(428)と直線的(429)の違いはあるが、ともに口縁部下半をヘラケズリするb1手法で、口縁部内面には2段の斜放射文と間のループ状のラセン文を施す。粗い斜めの暗文で、口縁端部の肥厚が大きく、上げ底気味の平底である429が新相を示し、飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅱに属し、428は飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられるが、428はSX1220東南隅の2A層、429はSX1220西南隅の2B層出土である。盤A(430)は口径39.4cm、器高14.4cmの深い器形で、口縁部中程に壺Aの把手に類似した幅狭く長めの把手が2個つき、口縁端部は内側を小さくつまみ出した浅い凹面をなす。口縁下半から底部の外面は軽いヘラケズリののちナデ調整し、内面は横方向のナデ調整で、暗文はなく、口縁部上半は内外ともに幅広いヨコナデ調整。口縁部のヘラミガキは把手を避けて線状に粗く施し、底部のヘラミガキは幅広い。淡赤褐色で微砂を含む精良土。西の谷下流域南の工房上の炭層Ⅱ出土。
- 甕 A 甕AⅢ(431・432)は球形の体部と弧を描いて外反する口縁部からなる。431は体部外面を縦

- ハケ目、内面を横方向にナデ調整し、口縁部外面は縦ハケ目をヨコナデで消し去り、内面には横ハケ目が残る。茶褐色で赤色粒子と雲母片を多く含む微砂質の胎土の「大和型」。口径15.2cm、体部径15.0cm。432は頸部と体部の境にナデ調整による段をもち、奈良時代に降る可能性がある。体部外面はナデ調整、内面はコテ状工具によるナデ調整で淡黄褐色を呈し、外面の煤化と内面の茶褐色の付着が著しい。口径15.6cm。SX1220の西寄りの2B層出土。甕AⅢ（433）は小型の「河内型」で、口径13.6cm、体部径13.0cm。口縁部内面に粗い斜めハケ目、体部内面は縦方向のヘラケズリ。茶褐色で微砂と砂粒を多く含む胎土。431とともにSX1220東寄りの2A層出土。甕AI（434）は口縁部内面のナデ調整が段状の凹凸をもち、体部内面を横方向にヘラケズりする「青野型甕」。淡灰褐色で砂粒を多く含む胎土は水溜遺構の93・108や炭層3の361などと同じ。口径21.6cm。SX1222の東縁部の2F層下の粘土層から出土した。
- 甕CII（435）は直線的に開き、端部を小さく内肥厚させる口縁形状と、外面を条の細かな縦ハケ目、内面を縦方向にヘラケズりする体部調整法から「河内型」に属し、淡褐色で微白砂質の胎土。口径16.6cm、体部径14.0cm。甕CIV（436）は口径12.0cmの小型の砲弾形。直線的に開く短い口縁部の端部が内肥厚して内傾面をつくり、筒状の体部内面を縦方向のヘラケズりする点は「河内型」であるが、外面は粘土紐継ぎ目の残るナデ調整。橙白色で微砂を多量に含む胎土。内外面共に煤化と茶褐色の汚れが著しい。甕C（437）は大きく弧を描いて外反する口縁の端部を丸く内肥厚させ、頸部下までの内面を横ハケ目調整、外面には粘土紐の継ぎ目が残る。「大和型」であるが、体部内面はナデ調整で、当て具痕は明瞭でなく、淡橙色で砂粒が多く赤色粒子は少ない。口径20.2cm。甕C（438）は外面の細かなハケ目、内面のハケ目を残すヘラケズリ、口縁部内面のハケ目調整が炭層4Bの甕C（291）と共通し、外肥厚して上方に面をつくる口縁端部や胎土も類似する同一生産地の製品とみられる。口径20.6cm、体部径20.0cm。口縁端部が微妙に異なるが炭層3の甕B（370）も同じ産地とみられる。
- 罏釜（439）は極めて稀れな器種。やや括れた砲弾形の上部寄りに、端部を丸く収めた長い罏釜が水平に付き、外傾して開く長い口縁の端部はわずかに内肥厚する。体部外面を細かな縦ハケ目、口縁部外面には縦ハケ目がわずかに残る。内面は口縁部に粗い横ハケ目を施すほかは、指掌文をもつナデ調整。罏釜の端部以下の外面に著しく煤が付着し、罏釜上面から口縁部外面はわずかに煤け、内面は括れ部以下に焦げ茶色の汚れが残る。口径19.8cm、体部径19cm、罏釜径23.6cm。茶褐色で角閃石や微白砂、雲母、石英粒を多く含むいわゆる「生駒西麓」の胎土。7世紀代の飛鳥地域出土の罏釜はこの胎土に限られる。
- 鍋A（440・441）と鍋B（442）はSX1220南中央部、鍋B（444）はSX1222東部の2A層出土。それらには口径の大小と体部の深淺があり、口縁部の開き方も多様であるが、いずれも「大和A型」の調整法で、口縁端部は上方へ肥厚して外側に面をつくり、鍋B（442・444）では頸部と体部の境にナデ調整の段をもつことから、飛鳥V以降に属するとみられる。鍋A（440）は口径28.6cm、復元器高6.6cmで、浅い体部の内面に当て具痕の凹凸が残り、口縁部内面は横方向のハケ目調整。明茶色で砂混じりの微砂質土。内外面に著しく炭化物が付着する。鍋A（441）は口径29.6cm、復元器高約12cm。体部内面は当て具痕を板状工具による横方向のナデ調整で消す。淡褐色で赤色粒子を多く含む微砂質土で底部外面に黒斑をもつ。鍋B（442）は鉢X（369）に似た広口の器形で、口径33.4cm、復元器高13.5cm。体部下外面の二次ハケ目が横方向に施され、

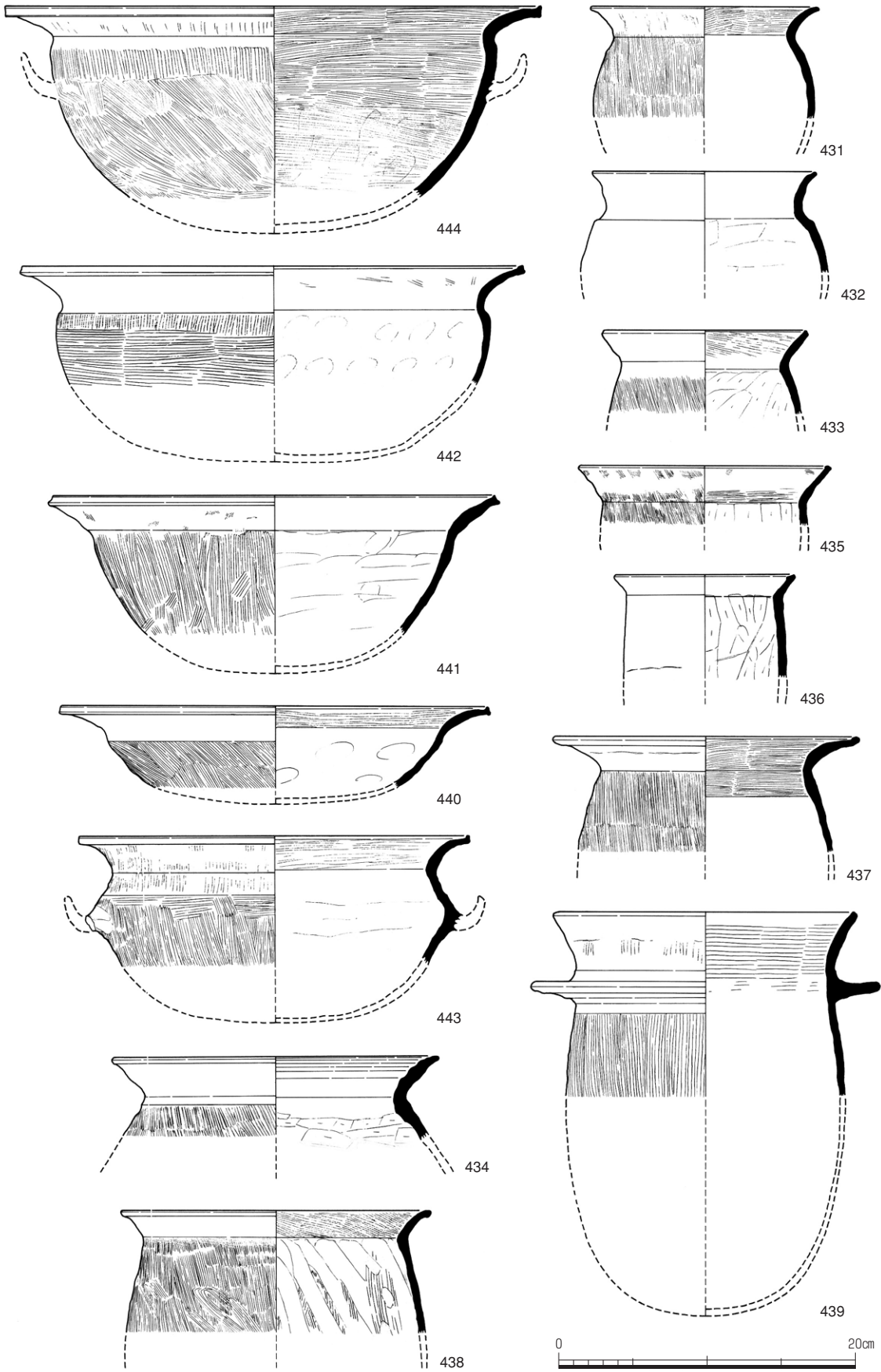


Fig. 19 炭層2出土土器 (2) 1:4

体部内面に当て具痕が残る。把手は遺存しないが二次ハケ目の位置につくとみられる。淡橙色で雲母片を多く含む砂質土。鍋B(444)は口径35.6cm、復元器高15.4cm。深い体部と口縁部の内面を横ハケ目調整したのち、外面の体把手位置より下の斜方向の二次ハケ目に対応して、体部下内面に押え痕とナデ調整を加える。淡褐色で赤色粒子と雲母片を多く含む胎土。鍋B(443)は頸部のくびれが大きく、甕Bの体部を浅くした器形。口径26.0cm、復元器高12.6cm。体部内面は板状工具による横方向のナデ調整。体部外面の二次ハケ目は442と同様の横ハケ目と縦ハケ目を併用する。把手は基部の幅が広い薄手の貼付式で、上肥厚して外側に面をつくる飛鳥V以降の口縁端部と矛盾しない。SX1220西縁部の2B層出土。

須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、椀B、皿A、皿B、皿C、壺、罍、甕などがあり、墨書土器杯BII(64)、漆壺(40・43・76・84など)、漆付着土器(12・13・21・32)、被熱土器などがある。皿A、皿Bともに大型の器種が多く、小型の皿類を含めて東海地方の産品が目立つ。

須恵器の
器種

杯A(454~458)には口径でAI(457)、AII(458)、AIII(454・455)、AIV(456)があり、458は炭層2、454・455は2B層、456は2C層、457は2F層出土。AIII(454)は丸みのある口縁部下半から底部外面をロクロケズリ(R)ののちナデ調整し、薄く尖る口縁部と底部内面はロクロナデ。口径14.8cm、器高4.5cm。口縁部内外面が青灰色で、底部外面が淡黄白色を呈し、同一器形を重ね焼きしたAa類とみられる。杯AIII(455)は丸みのある腰から薄く直線的に開く口縁部で、端部が小さく外肥厚して内傾面をつくる。ロクロケズリ(R)で平滑に仕上げた底部外面に火襻きがあり、外面が淡青灰色、内面が灰白色を呈することから有蓋の杯Ag類と考える。口径15.5cm、器高3.9cm、径高指数25で、色調と薄手で卓越したロクロ技法から東海地方産の可能性が高く、飛鳥IV~Vに属する。杯AIV(456)は底部外面ヘラ切り(R)不調整で、口縁端部は丸く収める。青灰色を呈し口縁部外面にのみ薄く降灰がみられることから有蓋のAg類の可能性が高い。口径13.0cm、器高3.5cm。径高指数27。杯AI(457)は垂れ気味の底部外面をロクロケズリ(R)し、内面は多方向のナデ調整。直線的に開く口縁の端部は丸く尖る。口径19.0cm、器高3.9cm。灰白色を呈し、微砂と赤色粒子をやや多く含む精良土で東海地方産とみられる。飛鳥IVに属する。杯A(458)は外面をロクロケズリ(R)した平底で、斜めに開く口縁部との境に稜をもち、端部は丸く収める。口径17.1cm、器高3.9cm。径高指数23。外面が青灰色を呈する微砂粒の多い胎土。

杯 A

杯B蓋(445~453)にはa類とb類があり、口径ではaIV(445)、aIII(446~448)、bIV(449)、bIII(450・451)、bII(452)、bI(453)がある。445~448・451が炭層2出土。449・452は2B層、450は2C層、453が2F層からの出土。杯蓋aIV(445)は頂部中央が肉厚で、ロクロケズリの範囲が狭い。口径14.6cm、かえり径12.3cm。青灰色を呈し、口縁外周部外面にのみ降灰がみられ、口径約13cmの杯類を伏せて重ね焼きしたことがわかる。杯蓋aIII(446~448)は口径15.6~16.0cm、かえり径13.6~13.8cm。頂部の形状とかえり・口縁端部の形状は多様で、肉厚で扁平な頂部の448の口縁端部が薄く、丸みのある頂部の446の口縁端部は厚く内屈気味で外方に面をつくる。448は濃青灰色、447は淡青灰色、446は淡灰色でいずれも頂部外面に広く降灰がかかる。447は器壁の薄い低い笠形で、口縁端部が丸く長く肥厚する特徴から陶邑窯産とみられる。杯蓋bIV(449)は口径14.0cmで、山笠形の頂部2/3をロクロケズリ(R)。大振りで扁平なつまみがつき、淡青灰色を呈する砂粒を多く含む胎土で、美濃須衛窯産とみられる。杯蓋bIII(450・451)

杯 B 蓋

段をもつ蓋 はともに東海地方産。450は大きく背の高いつまみで、口縁端部までを丁寧なロクロケズリ（R）し、頂部外面中程に凸線による段をもつ金属器模倣の椀類の蓋。口縁部よりも下方に垂れた頂部内面が摩耗する。濃青灰色で微砂質の精良土。口径16.7cm、器高1.9cmで、径約15cmの身にかぶる。451は中央の盛り上がる円盤状の大きなつまみをもつ。頂部を口縁近くまで広くロクロケズリ（R）し、薄い口縁部は端部を斜め下外方に折り曲げる。青灰色を呈し、形状と白土と黒色粒子を多く含む精良な胎土。径15.8cm、器高2.0cm。口縁外周部の降灰から径約14cmの杯BⅢを重ね焼きしたことがわかる。杯蓋bⅡ（452）は大振り丸いつまみをもつ。淡茶色で微砂を含み、外面に著しい降灰がかかる東海地方産。内面中央が滑らかで、漆様の付着物がある。杯蓋bⅠ（453）は薄手で扁平な頂部を口縁近くまでロクロケズリし、口縁端部は丸く折り曲げる。淡青灰色で黒色粒子を多く含む胎土。猿投窯産の可能性ある。

杯 B 杯B（461～464）にはBⅡ（464）、BⅢ（462・463）、BⅣ（461）がある。いずれも2B層出土。杯BⅣ（461）は直立気味に開く薄い口縁部で、肉厚な底部内寄りに「ハ」の字に開く細い高台がつく。口径12.8cm、器高4.6cm。径高指数36。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。杯BⅢ（462）は大きく斜めに開く口縁部で、方形の高台が、ロクロケズリ調整の底部外縁寄りにつく。口径14.8cm、器高4.7cm。径高指数31。飛鳥Ⅴに属する。杯BⅢ（463）は肉厚で平坦な底部で、薄い口縁部は下半部が内彎し上半が外反する。底部外面をロクロケズリ（R）、底部内面は多方向のナデ調整。口径15.4cm、器高4.0cm。径高指数26。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。杯BⅡ（464）は口径17.4cm、器高5.1cm。径高指数29。直線的に開く口縁部の端部は丸く肥厚し、ロクロケズリ（R）した平らな底部に、端部が小さく外肥厚する方形の高台がつく。なお、2A層出土の墨書土器杯B（Fig. 96-64）は直径12.8cmの低い高台であるが端部が強く外肥厚し、飛鳥Ⅳに属する。

椀 B・C 椀BⅠ（465）は垂れ気味の底部をロクロケズリ（L）、口縁端部は広い内傾面をもって尖る。暗青灰色で白色土を含む精良土の東海地方産。口径18.8cm、器高7.0cm、径高指数37。銅鉢形の椀C（466）は口縁上部が内彎し端部は丸く、丸みのある口縁下半と底部外面をロクロケズリ（R）。薄い器壁の底部に下端が外肥厚する高台がつく。端部を除く口縁部外面に淡緑色の降灰がかかり、淡青灰色で黒色粒子を多く含む東海地方産。口径21.0cm、器高8.4cm、径高指数40。

皿 C 皿C（459・460）は腰部の丸い平底で、底部外面ロクロケズリ（L）。口縁端部は広い内傾面をなす。口径16.9～17.0cm、器高2.6～2.9cm。径高指数15～17。形状は尾北の高蔵寺2号窯例、濃黄白色の色調と胎土は猿投窯の岩崎41号窯例に似る。ともにSX1222西端部炭層Ⅱ出土。

皿 A 皿A（467・468）は口縁部下半と平らで広い底部外面をロクロケズリ（R）し、内面はナデ調整。口縁端部は小さく外反して丸く収める。大型の468の底部外面中央部にはナデ調整を施し、ともに黄橙色を呈する東海地方産。467はSX1220西端の2C層出土で、口径25.0cm、器高3.2cm。468は同じく2B層出土で口径33.5cm、器高3.9cm。形状などがSD1110出土の砥土器（Fig. 108-245）に類似する。皿AⅠ（470）も斜めに開く口縁端部が外肥厚気味に丸く収めるもので、外面は口縁部下半と底部をロクロケズリ（R）し、境に稜をもつが、ロクロナデ調整の内面はなだらか。細砂を含む精良土で淡黄白色を呈する軟質。口径25.0cm、器高3.1cm。西の谷炭層の皿AⅠ（522）より小さいが、同質同色の東海地方産で、尾北篠岡窯産の可能性ある。

皿A（469・471・472）は口縁端部が盤Aの形状に似て、外肥厚して面をつくるもの。皿AⅢ（469）は口径22.0cm、器高2.2cm。外面をロクロケズリ（R）した底部から内彎気味に短く開き、

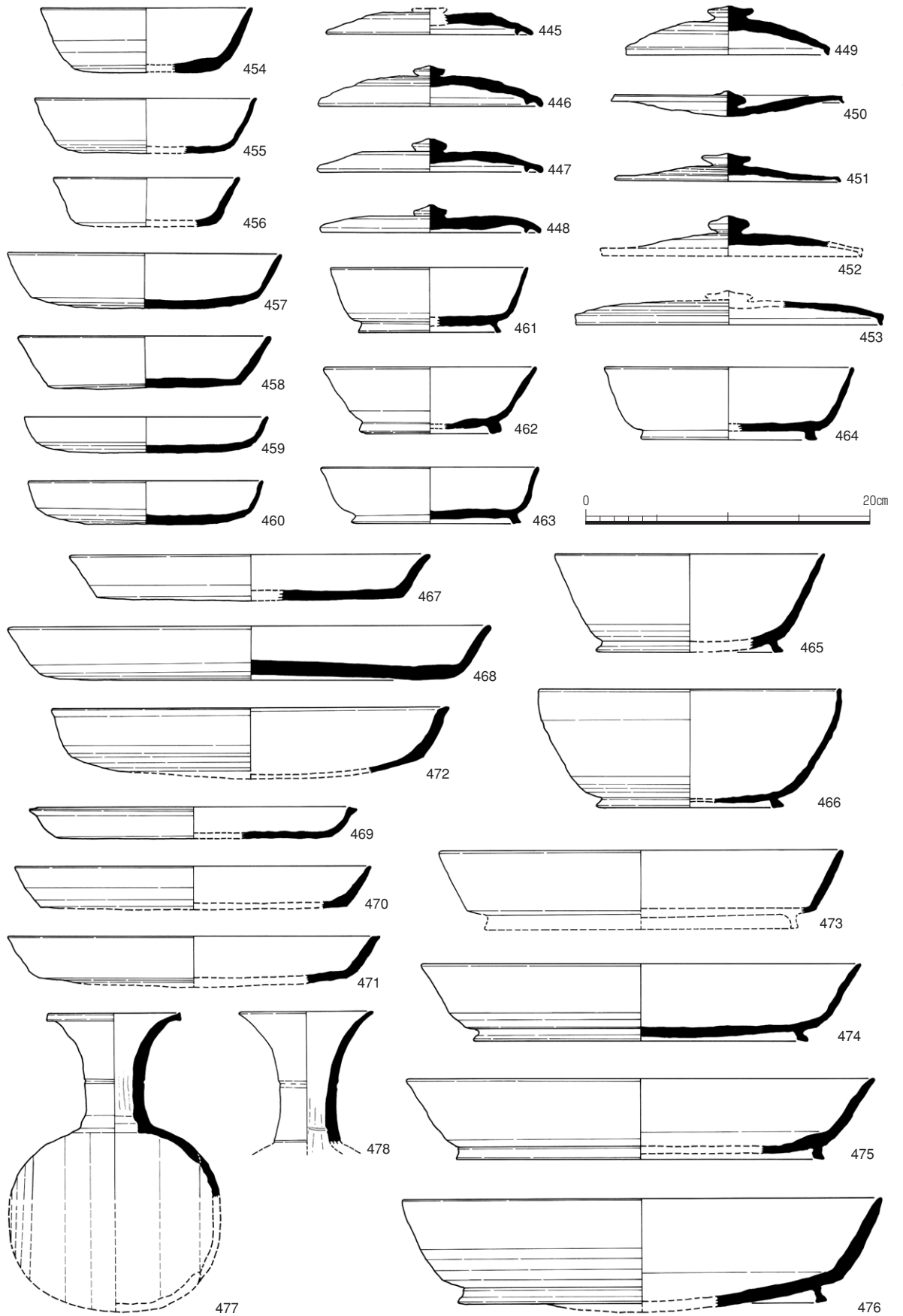


Fig. 20 炭層2出土土器(3) 1:4

大きく肥厚した端部上方に浅い凹面をもつ。口縁端部よりも内側と底部中央外面が黄灰色、口縁部外面が灰色を呈する無蓋の器種で、東海地方産。皿AI (471) は底部外面ロクロケズリ (L) で、下方へ垂れ気味。口縁端部の肥厚は大きくなく浅い凹面をなす。口径26.0cm、器高3.6cm。皿AI (472) は口縁部下半と底部外面をロクロケズリ (L)、内面は多方向の乱雑なナデ調整で、器壁の薄い底部が丸く垂れ下がる。内面に薄い降灰と火襷きをもち、口縁部外面が暗灰褐色であるほかは黄茶灰色を呈する東海地方産の無蓋の器種。口径27.8cm、器高5.0cm。

- 皿 B 皿BI (473~476) もSX1220西端出土で形状に差異はあるものの東海地方の産品である。皿BI (473) は直線的に開く短い口縁部で、外面が燻銀色で光沢がある。口径28.0cm、器高5.5cm。皿BI (474・475) は丸みのある腰部から外反気味に開く口縁で端部は薄く尖る。474は口径30.8cm、器高5.5cm。ロクロケズリ (L) で平滑に仕上げた底部外面に外彎する高台がつき、底部外面に高蔵寺2号窯に例のある「T」のヘラ記号をもつ。475は底部外面ロクロケズリ (R) で、高台部より内側の器壁が薄く、底部内面に摩耗がみられ、淡灰色で口縁部外面にのみ降灰がかかり、口縁部内端に小さな火襷きがある。口径32.6cm、器高5.7cm。皿BI (476) は口縁部下半と底部の外面をロクロケズリ (L) し、底部内面はナデ調整、底部内寄りに基部の細い高台がつく。薄く尖った口縁端部のほかは肉厚で、底部が高台よりも下方に垂れる。暗灰色で黒色粒子と白色土を含む胎土で、東海地方、尾張猿投窯産の可能性がある。

フラスコ型
長頸瓶

壺 (477) はいわゆる「フラスコ型長頸瓶」でSX1224西側の炭層2B出土。頸部外面に1条の凹線が巡り、口縁部は上方で外反し端部外側に面をつくる。体部成形時の底部はロクロケズリ (R)。口径9.4cm、頸高8.0cm、体部径13.0cm。青灰色を呈し、黒色土多く含む胎土で、外面全面に緑色透明の自然釉が厚くかかる尾張猿投窯産。壺 (478) はSX1220中央部の炭層2C出土。口径9.2cmの口縁部で端部の肥厚はみられないが、色調などは477に類似する。

vi 炭層1出土土器 (Fig. 21・22-479~524, PL. 217)

炭層1は西の谷と東の谷の下流部に広範に広がる2次堆積層で、出土土器の多くは炭層3・4をはじめとする下層に起源をもつものである。多量の土師器、少量の須恵器ともに小片が多く、他層に比べて奈良時代・平安時代に降るものが多い。ここでは、Fig. 21に、東の谷の炭層最上層 (炭層・炭層1) 出土の土師器 (479~505) と黒色土器 (506) を、Fig. 22に、同層の須恵器 (507~510) と、細別層序を確認しなかった土師器・須恵器 (511~516)、および西の谷の炭層出土土器 (517~524) からの抽出資料を示した。なお、墨書土器には土師器杯A (Fig. 95-56: 物女)、鍋 (同58: 石河宮)、甕 (同59: 養戸)、甕 (同60: 人)、須恵器杯A (Fig. 96-62: 酢)、鉢A (同65: 道宣師鉢) があり、圈足円面硯、白磁蹄脚円面硯、転用硯、施釉陶器などがある。

土師器 器種には、杯A、杯C、杯F、蓋、杯G、杯H、皿A、鉢H、盤A、甕、鍋A、鍋Bがあり、奈良・平安時代の杯、皿A、羽釜および黒色土器碗B (506) などがある。

杯AI (479~484) には、飛鳥Ⅲ~平城宮土器Ⅱに属するものがある。杯AI (479) は、端部の肥厚が小さいb類で、b1手法。暗文は上段の放射文が幅広い2段の放射暗文。口径18.4cm、器高5.5cm。杯AI (480) はb1手法で、暗文は2段の放射文の間にループ状のラセン文を配す。口径17.4cm、器高5.7cm。479・480は径高指数30・33で、飛鳥Ⅲ~Ⅳに属する。杯AI (481) はb1手法で、暗文は上段が幅広い2段放射文。口径16.8cm、器高4.7cm。径高指数28で飛鳥Ⅳ~Ⅴ。

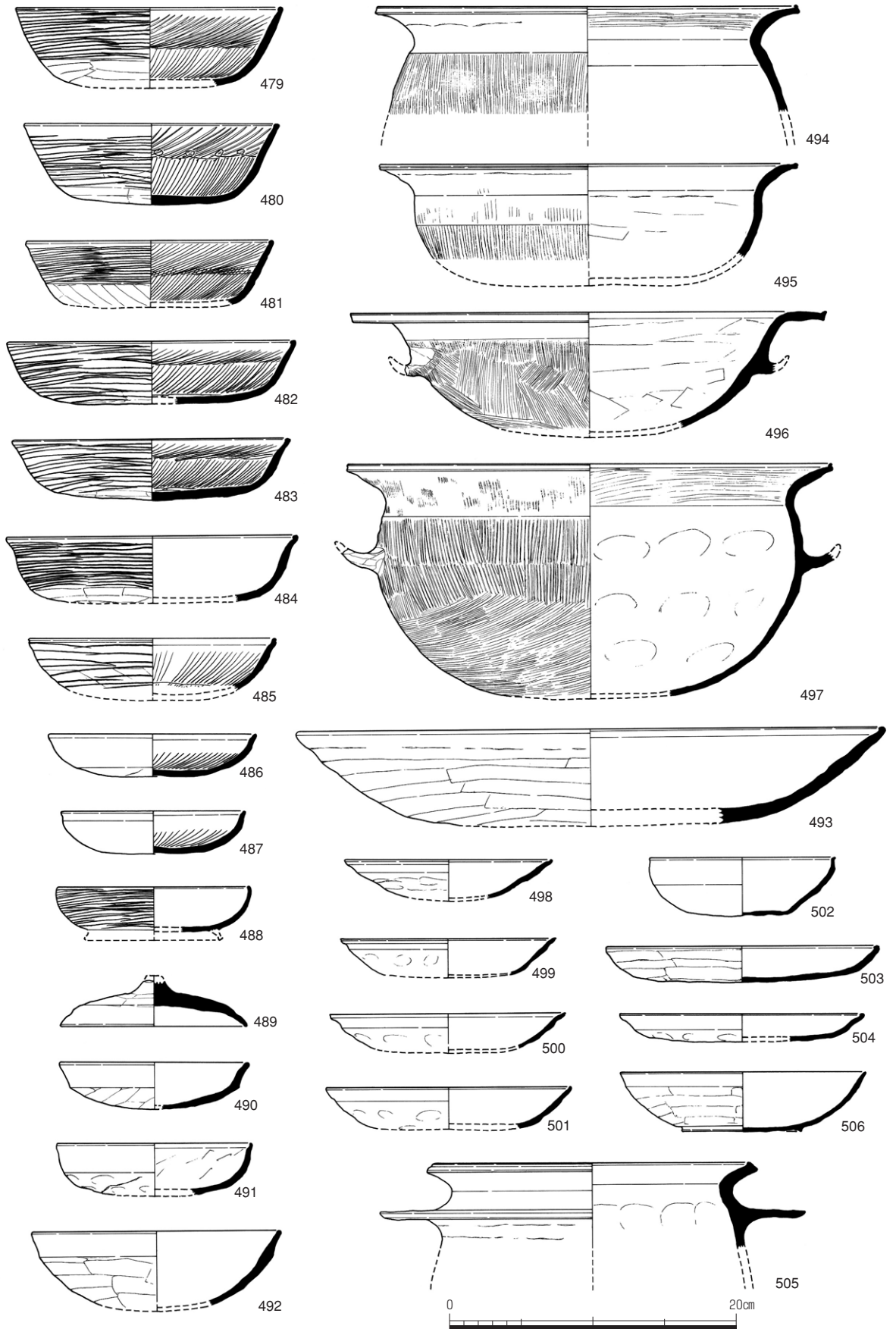


Fig. 21 炭層1出土土器(1) 1:4

杯AI (482・483) はb1手法で、暗文は2段放射文。口径18.8～19.8cm、器高4.2～4.4cm。径高指数22。杯AI (484) は内面の剥離が著しく暗文は不明だが、a類で密なヘラミガキのb1手法。淡橙色で赤色粒子や雲母片の多い微砂質土。口径20.0cm、器高4.7cm、径高指数24。飛鳥V～平城宮土器Ⅱに属す。「物女」の墨書土器杯AI (Fig. 95-56) はa1手法で、暗文は1段放射文と連弧文。口径20.4cm、器高3.9cm。径高指数19で、平城宮土器Ⅱに属する。

杯 C 杯CI (485) は口径17.0cm、復元器高4.5cm、径高指数26で、底部が緩やかな曲線を描き、端部が小さく外反して外面に細い凹線が巡る口縁が杯Gc類のそれに類似する。微砂質の胎土で明橙色を呈し、底部内面の大きなラセン暗文、口縁中程までの太くて粗い1段放射暗文、外面の太いヘラミガキともども杯Cの異形品であることを示す。杯CⅢ (486・487) はa0手法で、赤褐色で精良な胎土の通有品。口径12.6～14.2cm、器高3.0cmであるが、径高指数21の486は飛鳥V以降、奈良時代に降る可能性が高い。

杯 F 杯F (488) は平底で内彎する口縁の端部を小さく内肥厚させ、内面はヨコナデ調整で暗文は施さない。外面はヨコナデ調整のちに密なヘラミガキで平滑に仕上げる。全体に薄い器壁で赤茶色の緻密な胎土。底部に径約9cmの高台の剥離痕があり、口径13.2cm、復元器高4.3cm。

蓋 X 蓋X (489) は頂部と口縁部との境に段をもち頂部をヘラケズリする点で杯Hと同じ技法でつくられた蓋で、赤色粒子を多く含む胎土も共通する。つまみは上端部を欠くが、頂部と一連のヘラケズリで整形した長方形板状をなすとみられ、口径12.8cm。全体に二次加熱を受け、一部が還元した灰色を呈しており、埴塙の蓋として使用された可能性が高い。

杯 G 杯GbⅢ (491) はa0手法で内面にはコテ状工具によるナデ調整。口径13.4cm、器高3.7cm。杯HⅢ (490) と杯HI (492) は暗黄褐色で赤色粒子を多く含む特有の胎土。490は口径13.0cm、器高3.3cm。492は口径17.2cm、復元器高5.6cm。盤AI (493) は口縁端部近くまでの外面をヘラケズリし、内面に暗文は施さない。口径41.2cm、器高6.7cmで奈良時代に降る可能性がある。

甕 B 甕BI (494) は鍋B (496・497) とともに「大和A型」。外反する口縁の端部を内肥厚させて外側に面をもち、口縁上半の内面に横ハケ目、外面には粘土紐継ぎ目が残る。淡褐色で微砂、赤色粒子が多い胎土。口径29cmの大型で残存部以下に把手がつくとみられ、口縁端部の形状から

鍋 A は飛鳥V以降に属する。鍋A (495) は炭層2の442に類似した大型の浅鍋で、口径28.8cm。緩やかに外反する口縁の端部をわずかに肥厚させ、体部内面を板状工具による平滑なナデ調整、外面に粗い縦ハケ目がかすかに残る「大和B型」。黄橙色で赤色粒子を多く含む微砂質土。

鍋 B 鍋B (496) は丸底の浅い体部に、水平に開く口縁部がつき、端部は上方に肥厚して外側に面をもつ。内面を板状工具によるナデ調整した「大和A型」で著しく広い基部の薄手の把手がつく。淡黄褐色で赤色粒子を多く含む微砂質土。口径33.0cm、器高8.7cm。鍋B (497) は深い体部の内面に当て具による凹凸が残る「大和A型」で、口径33.4cm、器高16.4cm。基部が幅広く薄手の把手を貼り付ける。炭層1の鍋類は図示しなかった今1点の鍋Bを含めて、大型で口縁が強外反し、「大和A型」では口縁端部の肥厚が大きいものが多く、幅広で薄い把手を貼り付ける。いずれも飛鳥V～奈良時代前半に属するとみられる。

奈良・平安時代の土器 498～506には炭層1出土の奈良時代後半～平安時代のものを示した。杯 (498～501) と皿A (504) はe手法で、茶褐色を呈し微砂や雲母片を多く含む。杯 (498～501) は口径14.4～17.0cm、器高約3.0cmで、口縁端部内側に灯明痕とみられる汚れをもつ。椀C (502) は小さな平底で口

縁部近くが内屈し、口縁端部は外肥厚して内傾面をもつ。口径12.8cm、器高4.1cm。全体に薄手で赤色粒子や雲母片を多く含む。奈良時代後半～平安時代初めの土器とみられる。皿A (503) はc手法で、口縁端部が小さく内肥厚する。平城宮SE311B出土土器に類似し、平安時代初めに属すとみられる。皿A (504) は器壁が薄く、上部で外反する口縁部の端部は小さく内側に巻き込み、残存範囲内に灯明痕はない。口径16.8cm、器高2.0cm。羽釜 (505) は強く外反する厚手の口縁部の端部が上肥厚し、頸部直下に薄く幅広い齔が巡る。砂粒の多い胎土で外面は茶褐色を呈し、齔先以下には多量の煤がつき、淡茶褐色を呈す内面には一部茶褐色の汚れが残る。口径22.0cm、齔径29.6cm。黒色土器碗B (506) は黒色土器A類で、口径17.0cm、器高4.2cm。ヘラケズリ調整の口縁部下半外面は、茶褐色を呈し微砂や砂粒を多く含む。底部には小さく低い三角形の高台を付し、高台内部はナデ調整。

黒色土器類
A

上述のうち、土師器杯 (498) と碗C (502)、皿A (503) はSX1220の上部の炭層1、土師器杯 (499～501)・皿 (504)・羽釜 (505)、黒色土器碗B (506) は東の谷東岸の工房1西縁部に近い炭層1Bから出土したものであるが、西の谷上流部西岸の炭層1に含まれる土器と差異はない。後述の東岸の工房1上の包含層出土土器 (E-iii, Fig. 62) などとともに奈良時代後半～平安時代前半の南地区での活動拠点が、谷上流部、東・西縁辺部にあることを示すものである。

炭層1の
須恵器

須恵器 蓋 (507)、杯BⅢ (508)、碗B (509)、皿CI (510) がある。蓋 (507) は扁平な頂部に小さな段と凹線が巡り、高い宝珠形のつまみがつく。金属器写しの碗類の蓋であろう。口縁部は稜をなして鋭く折れ、端部は尖る。頂部外面ロクロケズリ (R) で、内面はロクロナデ。口径14.2cm、器高2.6cm。杯BⅢ (508) は口径14.2cm、器高3.6cm。径高指数25。底部外面はヘラ切り (R) 不調整。碗BI (509) は底部との境に稜をもち直線的に開く深い器形で、ハの字に踏ん張る高めの高台がつく。口縁部下半と肉厚な底部外面をロクロケズリ (R) し、薄い口縁部はロクロナデ調整で、端部は鈍い内傾面をなす。淡灰色で白色微砂と黒色粒子を多く含み、口縁部外面に降灰がかかる。東海地方の産品。口径20.2cm、器高10.4cm。皿CI (510) は丸みのある底部外面をロクロケズリ (L) し、口縁端部は外肥厚して上方に面をつくる。断面および底部内外面が黄白色を呈するほかは淡灰色で、同一器形を重ね焼きした無蓋の器種。黒色粒子を多く含む微砂質土で東海地方、尾北窯産の可能性ある。口径29.8cm、器高4.2cm。底部内面に摩滅痕と茶褐色の付着物がある工房使用の土器。

511～516は東の谷東岸の工房1上で細別層序を確認する以前の炭層出土土器である。土師器杯CII (511) はa0手法で、内彎気味の口縁の端部は鈍い内傾面をなし、口径16.4cm、器高4.1cm。径高指数25で飛鳥Ⅲに属す。須恵器杯G (512) は口径9.6cm、器高4.0cmで、底部外面はロクロケズリ。淡灰色を呈する精良な胎土。SD1173などの下層遺構起源の土器。須恵器皿BI (513) は底部と口縁部の境に稜をなして、直線的に開く口縁の端部は丸く収める。口縁部下端と底部外面はロクロケズリ (R)。底部外面に外方へ踏ん張るように折り曲げた細い高台がつく。淡灰色を呈する砂質の胎土で、美濃須衛窯産の可能性ある。口径26.0cm、器高4.9cm。須恵器盤A (514) は垂れ気味の底部外面をロクロケズリ (R) し、内面は多方向のナデ調整。直立気味に開く口縁の端部は上方に面をつくる。外面の外表のみが黒灰色で、他は灰白色を呈し有蓋の器種あるいは伏せた重ね焼き。口径26.0cm、器高5.3cm。微細な黒色粒子を含む微白砂質の胎土は東海産の可能性ある。盤A (515) は口縁端部が外肥厚して内傾面をつくる。口縁下端と底部の外面

東岸工房1
上の炭層

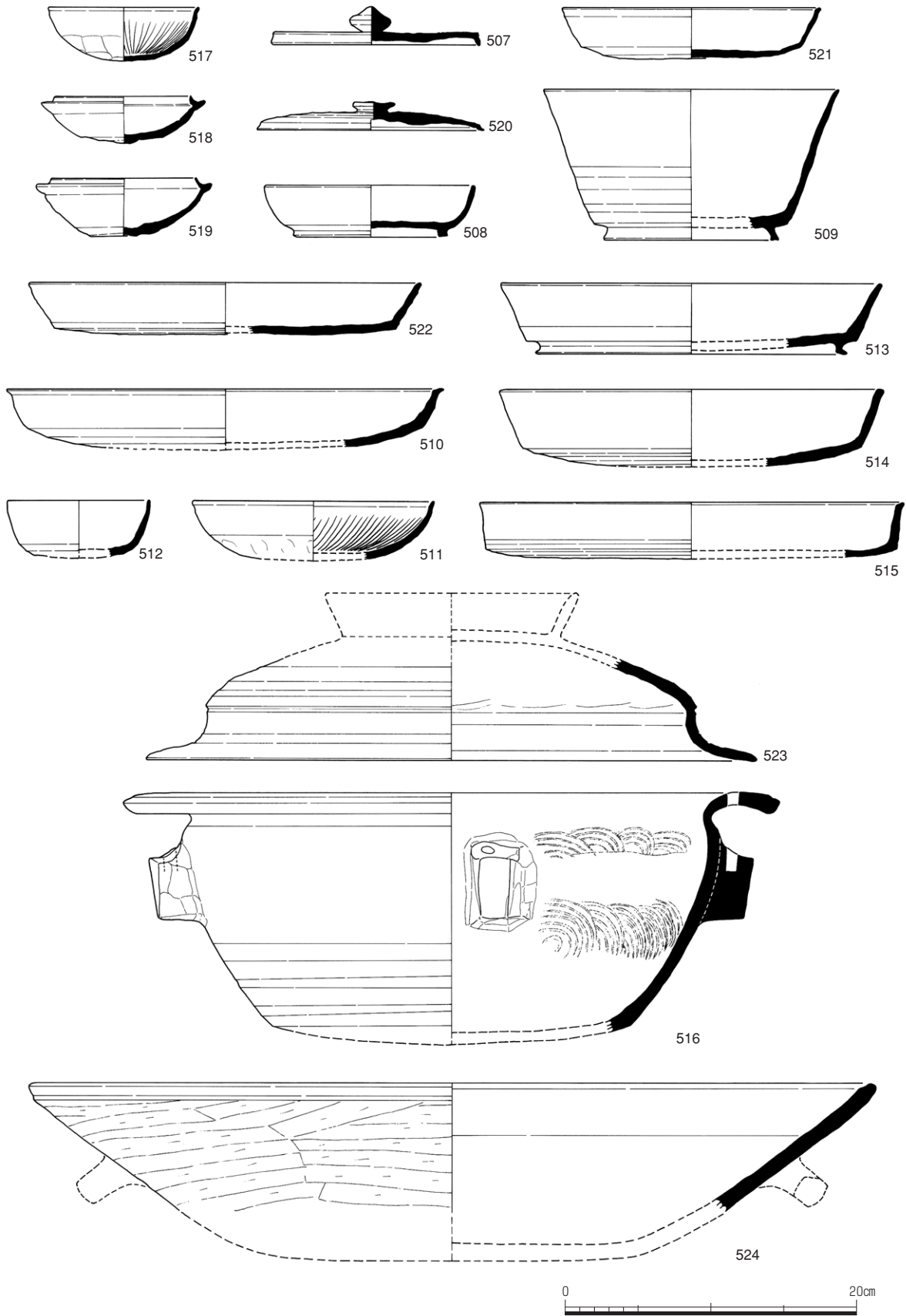


Fig. 22 炭層1出土土器(2) 1:4

をロクロケズリ (R)。断面が淡橙色で外表は青灰色を呈し、外面に降灰がみられることから、514と同様に有蓋の器種あるいは伏せた重ね焼き。口径29.0cm、器高3.9cm。鉢X (516) は広口で口縁が強く外反する鍋形の器形で、炭層3の土師器鉢X (369) やSD1173の鉢X (1450) と類似する。肩部下にヘラケズリ調整した縦長長方形の把手がつき、把手上面には直径0.8cmの孔を穿つ。本例には口縁部に穿孔した箇所は遺存しないが、SD1130等出土の同形の土師器片には把手と口縁部とに穿孔した例があり、細棒を通して蓋を固定したものと考えて復元図化した。体部下半と底部の外面はロクロケズリ (R)、内面はナデ調整。上半部は内外面ともにロクロナデ。体部内面上半の同心円文の当て具痕がかすかに残る。体部下半外面が淡灰色で他は淡青灰色を呈し、白色土の縞を含む精良土。口縁部下面に変色した鉄釉が残る猿投窯産。

517~524は西の谷中段の工房の炭層出土土器である。土師器杯CⅢ (517) はb0手法で口縁端部に内傾面をつくり、明褐色で赤色粒子を多く含む。口径10.2cm、器高3.8cm、径高指数37。須恵器杯H (518・519) は口径9.2~9.8cm、受け部径11.2~12.1cm、器高3.3~4.1cmで、底部外面はヘラ切り不調整、内面は一方向のナデ調整。518の口縁端部内側につく灯明痕を含め、灰緑色粘砂層例 (1362・1363) と類似し、これら517~519は下層遺構起源の土器とみられる。

西の谷中段の
工房の炭層

須恵器杯BⅢ蓋 (520) は肉厚の頂部外面を広くロクロケズリ (R)、薄く引き出した口縁の端部は小さく外反する。中央に大振りのつまみがつき、口径15.6cm。灰色を呈し、黒色・白色粒子を多く含む精良土で尾張猿投窯産とみられ、飛鳥Ⅳに属する。皿A (521) は底部外面をロクロケズリ (R)、口縁端部が小さく外肥厚する。同一器形の重ね焼きの無蓋で、口径17.5cm、器高3.6cm。径高指数21。皿A (522) は口縁部下端と平らな底部外面を丁寧にロクロケズリ (L) し、直線的に斜めに開く口縁の端部は丸く収める。口径26.8cm、器高3.6cm、径高指数14。521・522はともに薄手で、黄白色を呈し黒色・白色粒子を多く含む精良土で尾張猿投窯産とみられる。蓋X (523) は頂部中程に段をもって強く外彎し、口縁端部が尖る。頂部上半外面はロクロケズリ、内面はナデ調整で当て具痕が残り、口縁部は内外ともにロクロナデ。外面の段に3条の凹線が巡る。器形からは、石神遺跡第17次調査の整地土や難波宮西北部水利施設第7c層に類例のある7世紀中頃の大型台付鉢 (盤) の可能性があるが、本例は凹線を伴う段をもつ点で異なり、水溜下灰色粘土層の242・243と同様に、薄い降灰が認められる外面の調整が丁寧であることから大型鉢類の蓋と考えた。口径41.6cm、器高11.2cm。淡青灰色で微砂質の胎土の東海地方産。

大型蓋X

台付鉢の
可能性

盤A (524) は谷の合流部に近い炭層2出土で、直線的に大きく開く口縁部外面を分割ヘラケズリ。丸く収めた口縁端部及び内面はロクロナデ (R) し、内面下半にはロクロケズリの形跡がある。口縁部中程の外面に横位に貼り付けた把手の痕跡が残る。淡灰色で黒色粒子を多く含む胎土は、SK1128の盤A (874) などと同質で東海地方産の可能性はある。

vii 炭層出土須恵器甕類 (Fig. 23-525~539, PL. 220・248)

甕類は中・小型の甕Aが多く、甕Bは炭層4・3に少量、甕Cは炭層3以上に比較的多数あるが、いずれも他の層序・遺構と接合する個体が多いことから、大別・細別した炭層ごとの出土甕類の数量と特徴の把握は困難である。産地では陶邑窯産に加えて東海地方産も目立ち、特徴的な叩き目・当て具痕をもつものがある。

甕A (525) は、SX1224上の炭層2D層と北地区の木樋暗渠SX1119とから出土。外傾する口

縁部の端部が上方に肥厚し外側に面をもつ。口径23.6cm、頸径19.2cm、体部径45.0cm、推定器高49cm。内部に白色物が付着する。体部外面は細刻で粗い平行文叩き目に密なカキ目、内面は大きな中央に太い8弁の星形を加えた車輪文を刻み、幅広で密な刻みの同心円文で囲む当て具痕(PL.248)。口縁部形状は備前邑久窯例に類似する。甕A(526)はSX1222の炭層Ⅱ出土。口径20.0cm、頸径14.8cm、頸高8.0cm。外面は左斜交の細刻平行文を粗い間隔で刻んだ幅広い木目の叩き目。肩部内面には、細く粗い「の」渦巻き文を浅く刻んだ²¹⁾当て具痕。体部径39cm、器高47.5cm。灰白色で微砂質、内面に火膨れがあり、当て具痕が類似する美濃須衛²²⁾10号窯産の可能性が高い。美濃須衛10号窯は美濃窯編年のⅣ期第1小期で、「美濃国」印をもつ老洞1号窯よりも古い7世紀末～8世紀初頭にあてており、飛鳥Ⅴに相当する。甕A(527)はSX1220東端の炭層3・2Aに少量の体部片があり、北地区包含層に広がる。外反する短い口縁の端部が突帯状に肥厚し外側に面をもつ。外面は左斜交の細く粗い平行文叩き目ののち、頸部下を幅広くナデ調整。内面は小さな芯を幅広で密な同心円文で囲む深い当て具痕。口径19.2cm、頸径17.3cm、推定体部径約42cm。外表が青灰色、素地が紫色を呈する砂質の胎土で、陶邑窯産の可能性がある。甕A(528)はSX1220の炭層3底出土。口径15.8cmの小型で、口縁端部外側に面をつくる。体部外面は細い溝を間隔粗く刻んだ平行文叩き目ののち、全面にカキ目を施し、内面は太い芯を細く粗い同心円文で囲んだ当て具痕を粗くナデ消す。甕B(529)は東岸の工房1下の炭層4A・4D層出土であるが、球形の体部に直立する口縁部をもち、工房以前の可能性がある。口径19.2cm、器高29cm。外面は均一な幅の平行文叩き目で、条の広いカキ目を櫛描直線文状に全面に施し、内面は浅く幅広な刻みの同心円文当て具痕がかすかに残る。暗灰色で白砂を含む砂質土。甕C(530)はSX1224東端の炭層3出土。浅い体部に短く直立する広口の口縁部がつく鍋形の甕で、口縁端部は小さく外肥厚して上方に凹面をもつ。肩部外面に把手の剥離痕があり、側面に円孔を穿った縦長長方形の把手と推定される。口径42.4cm。体部外面は細刻で密な平行文叩き目を部分的にナデ消し、内面には無刻あるいはかすかな刻みの当て具痕をナデ消した凹みが残る。白灰色で細砂質の胎土で東海地方産とみられる。

渦巻き文
当て具痕

美濃須衛
10号窯

鍋形の甕C

甕A(Fig.72-531, PL.251)はSX1224東端の炭層3Bと南北溝SD1110下層出土片が接合し、西の谷中段の工房の炉跡下炭層や灰色シルト層からも同一個体とみられる破片が出土する。短く外反し端部を玉縁状に肥厚させる口縁部で、外面には細刻で密な平行文叩き目を叩き締め、内面は太い芯に6弁の星形文を加えた車輪文で、幅広の溝を粗い間隔で刻んだ同心円文が囲む当て具痕。白灰色で黒色粒子が走る微砂質の胎土。口径24.8cm、頸径18cm、頸高4.5cm、体部径50.5cm、推定器高51cm。粘土紐継ぎ目や当て具の重複からみて、体部は4段階で成形されている。甕A(Fig.35-532)は口径25.2cm、頸径18.5cm、頸高5.7cm、体部径40.8cm、器高47.7cmの中型の甕で、口縁端部は上方に肥厚して外側に面をもつ。卵形の体部外面は、密な刻みの平行文叩き目ののちに、条の細かなカキ目調整。内面は5弁の星形文を、粗い間隔の深い細線で囲んだ車輪文当て具痕。頸部にヘラ記号をもち、厚手で白色砂質。SX1220の炭層3とSD1110下層に拡がる工房使用の甕である。

西の谷の甕

車輪文

甕(533~537)は内外面の成形技法をPL.248に示した。甕A(533)はSX1222西側の炭層Ⅱ出土で、口縁部を欠く。体部外面は細刻の平行文叩き目ののちに木目の広いカキ目を粗く施し、

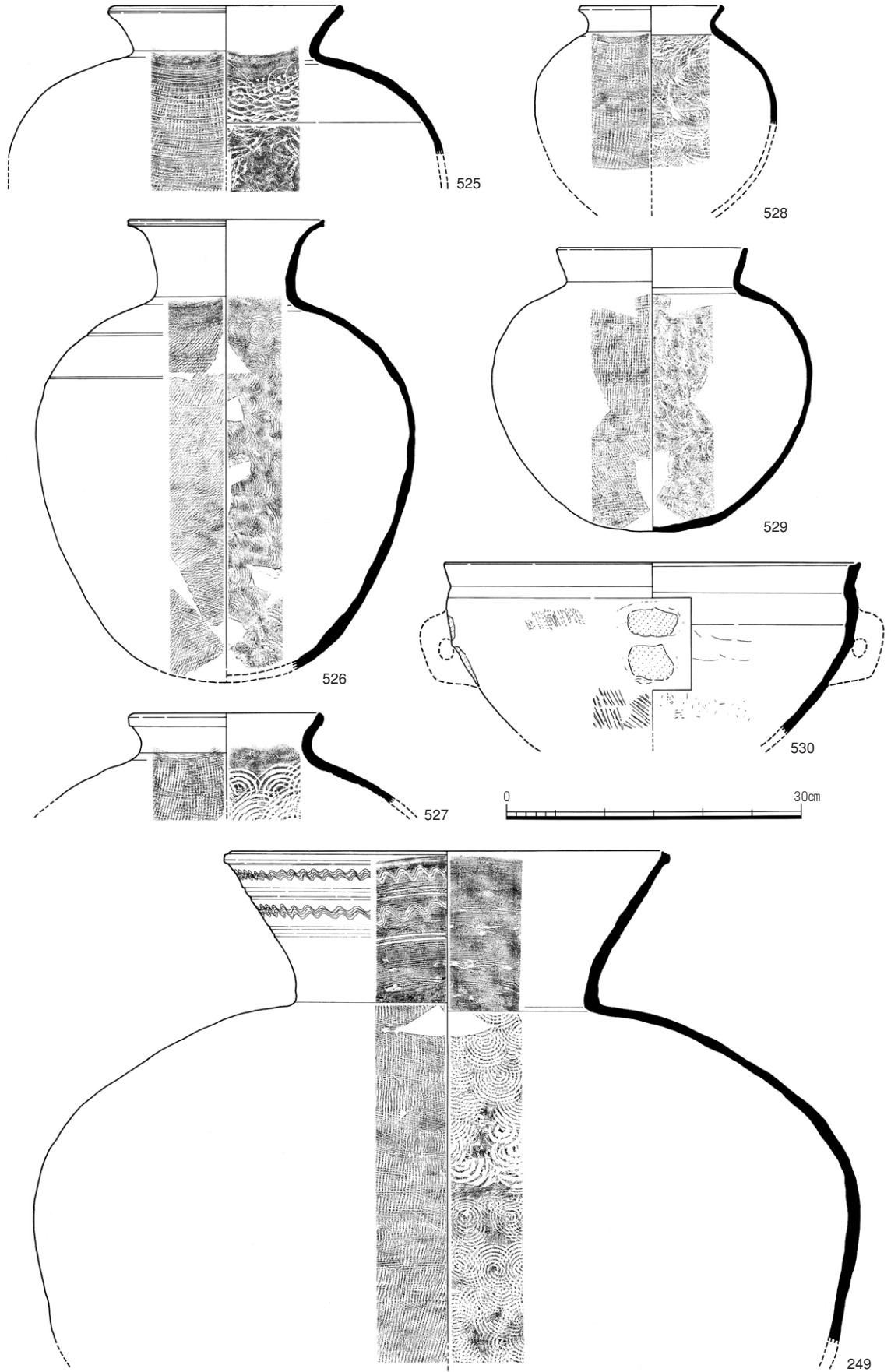


Fig. 23 炭層出土須恵器甕 1:6

楕円形文の
当て具

内面は中心の2点を楕円形に囲む広刻の同心円文当て具が特徴的である。淡青灰色で微砂粒を含む胎土。甕A(534)は短く外反する口縁の端部が内肥厚し上方に面をもつ。外面は木目に対して左斜交の細線を粗く刻んだ平行文叩き目のちカキ目を軽く施し、内面の当て具は均一な刻みの同心円文に見える。ただし、口縁形状や外面の様子からみて同一個体の可能性がある、後述のSD1173の甕A(Fig.36-1469, PL.252)では、「の」渦巻き文の当て具痕が確認されている。本例は炭層3から北地区上部包含層に拡散するが、下層遺構起源の可能性がある。甕C(535)は口縁部を欠くが、体部外面を刻線が細く、浮き出した木目が広いために横位の叩き目に見える平行文叩き目のちナデ調整。内面は無刻あるいは細刻のかすかな同心円文当て具痕。灰色を呈し、微砂と黒色・白色土を含む胎土で、東海地方産の可能性がある。甕A(536)は短く外反し端部を上下に引き出して玉縁状に肥厚させる。体部外面は細直線を粗い間隔で浅く刻んだ平行文叩き目で、幅広い木目が浮き出して横位の叩き目に見える。内面は幅広い木目に直交する細かな緩い円弧文を粗い間隔で浅く刻んだ当て具痕。黄灰色を呈し泥質の精良土。尾張猿投窯あるいは尾北窯の可能性がある。水溜SX1220上の炭層4Cなどから出土。甕A(537)もSX1220炭層4C出土の体部片。外面は細刻で密な平行文叩き目のち、条の細かなカキ目調整。

二重の
車輪文

内面の当て具痕は珍しく、中央に5個の楔形と細圈線を介した外側に8個の楔形を刻み、幅広い同心円文で囲んだ二重の車輪文当て具痕。

被熱甕片

甕片(538・539, PL.220)は体部片を転用した被熱土器。538はSX1220の炭層3出土で、外面に平行文叩き目と条の細かなカキ目を施し、内面には幅広で密な刻みの同心円文当て具痕がある。周縁部を打ち欠いて整形し、内面中央部に摩滅痕があり、全体に黒褐色の汚れが付着する。暗灰色で砂粒を含む胎土。539は盤A(398)・鉢A(397)および富本銭関連遺物とともに、富本銭出土土坑SK1240から出土した。周縁および内面の焦げ付きが著しく、被熱は外面にまで及び、平行文叩き目が摩滅している。

B 北地区の溝出土土器

i 南北大溝SD1130出土土器 (Fig.24~28-540~648, PL.221~224・228・249)

SD1130は、掘立柱塀SA1120、南北溝SD1110などの構築に相前後しておこなわれた、北地区西方の谷地形の埋め立てと造成に関わる遺構で、埋土・灰青土・腐植土層・腐植土層1~3に分層される堆積層には炭化物の多い間層を挟み、土器は、主に腐植土層・腐植土層1~3から、多量の削り屑・木簡、金属製品、木製品、瓦などと共に出土した。土器には、多くの土師器と少量の須恵器とがあり、墨書土器・漆塗土器・硯・緑釉陶器、および漆壺、漆付着土器、被熱土器などが含まれる。各層序間では、土器の構成や内容に大きな差異がみられず、接合関係は各層序間およびSD1110と、南地区の炭層・水溜下灰粘土層との間に著しい。

土師器の
器種

土師器 器種には杯A、杯B、杯C、杯D、杯G、杯H、皿A、皿G、皿H、杯B蓋、高杯C、鉢A、鉢B、鉢H、壺、小壺B、盤、甕、鍋、竈があり、ロクロ土師器に杯A、杯C、杯B、蓋がある。杯A、杯B、杯C、杯H、皿、蓋、鍋、甕には、多くの墨書土器 (Fig.89~91-1~17・19) や針書土器 (Fig.99-106・107, PL.264) があり、漆塗土器 (Fig.102-144~155) のほと

多量の墨書
土器

んどはこのSD1130出土である。供膳具は全体の約7割。中でも多様なつくりの杯Aと、皿、鉢、盤など大型の器種が目立ち、小型の杯C、杯G、杯Hはさほど多くない。煮炊具も鍋、甕Bなど大型品が多く、小型の甕Aは少ない。

杯AI (540~550) には、口径16.4~18.0cmの一般的な大きさのもの (541・546~550) と口径18.4~19.8cmの大振りのもの (540・542~545) があり、それぞれ径高指数33~37で器高の高いもの (540・542~544・548・550) と径高指数27~30の比較的低いもの (546・547・549) がある。外面調整は、548がa1手法である以外は、いずれもb手法であるが、ヘラケズリの範囲とヘラミガキの粗密に違いがあり、内面の暗文、胎土・色調には多様性がある。暗文は器高の高い一群では、1段放射文 (540~543)、2段放射文 (544・548)、2段放射文の間と上にループ状のラセン文 (550) があり、器高の低い一群には、2段放射文 (545~547)、1段放射文の上部にループ状のラセン文 (549) がある。1段放射文の540~543は、ヘラミガキと暗文が太くて粗いもの (540・541)、密なヘラミガキが底部まで及び、暗文が極めてかすかなもの (542)、ヘラミガキと暗文がジグザグに施されるもの (543) などの小異があるが、いずれも口縁部の形状や色調・胎土が、一般的な杯Aと異なる異形品である。同様の胎土・色調は、上段が幅狭い左傾きの2段放射文をもつ漆塗土器の杯AI (Fig. 102-146) にもみられ、これらの1段放射文は、平城宮土器II以後の1段放射文とは系譜を異にする。2段放射文の544は口縁端部が小さく内肥厚し、赤褐色で微白砂質の胎土の一般的な杯AIで、細かく密な放射文の上段が幅広く、底部のラセン文が3重に巡る。口径18.4cm、器高6.6cm、飛鳥Ⅲ~Ⅳに属す。545は口縁上部で外反するa類で上段の放射文の幅が狭く、546は直線的に開く口縁部の端部が小さく内肥厚するb類で外面のヘラミガキが粗い。ともに径高指数27で飛鳥Ⅳ~Ⅴに属す。547は口縁部が直立する箱型で口縁端部は小さく内肥厚し、上段の放射文の幅が広く、底部のラセン文は4重で細かい。茶褐色で赤色粒子を多く含む胎土。口径16.8cm、器高5.0cm、径高指数30。箱型の器形は飛鳥Ⅲの大官大寺土坑SK121出土土器に類例がある。548は上段の放射文が幅広く直立気味な点に特徴があり、大官大寺SK121出土例に類似する。口径16.4cm、器高5.6cm、径高指数34。茶褐色で雲母片を含む胎土は、1段放射文の上部にラセン文をもつ549と類似する。550は小さく肥厚する口縁端部の上方に面をもつ。2段放射文の間と上部のループ状のラセン文は、漆塗土器 (Fig. 102-145) や杯AII (551) と共通する。杯AII (551) は口径14.0cm、器高4.2cm、径高指数30。橙褐色で赤色粒子を多く含む胎土の一般的な杯A。a1手法でヘラミガキは粗いが、滑らかな弧を描く底部で、上段の幅広い2段放射文は細かく密であり、飛鳥Ⅲ~Ⅳに属する。

杯BI (563) は、口径17.4cm、器高6.5cm。b1手法で、口縁端部は内肥厚して内傾面をもち、器壁の薄い内寄りに、ハの字に開く高めの高台を付す。暗文は上段の幅が広い2段放射文。橙褐色で雲母片を含む精良土。杯BI (564) は底部を欠くが、高台貼り付け時のナデ調整が残る。口径16.3cm、残存高4.8cm。細かな2段放射文の間にループ状のラセン文1条を配し、上段の放射文は、わずかに内肥厚する薄い口縁端部に至る。茶褐色で砂質の胎土。漆塗土器杯BI (Fig. 102-147、PL. 267) も、放射文の間にループ状のラセン文を配する暗文であるが、下段の放射文が直立気味で、口縁端部を外肥厚させて内傾面をつくる点と、淡褐色で赤色粒子を多く含む胎土が異なる。口径16.7cm、器高6.6cm。杯BI蓋 (562) は平らな頂部の中心からややずれて、上面が平坦な大振りのつまみがつき、口縁端部が小さく内肥厚する。内面はナデ調整で、外面

杯 A

暗文の構成

杯 A の
異 形 品

箱型の杯A

杯 B

はつまみ周辺を5分割、口縁部付近を10分割して丁寧にヘラミガキし、つまみ上面にラセン暗文を施す。黄褐色で微砂質の精良土。口径19.8cm、器高3.2cm。562とほぼ同大のつまみをもつ墨書土器蓋 (fig. 89-9) では、つまみ上面に蓮花文を墨書する。蓋 (561) は丸みのある頂部に円筒形のつまみがつき、杯B以外の蓋とみられる。薄く外反する口縁部の端部がかすかに内肥厚し、つまみ周辺を6分割してヘラミガキ。ナデ調整の内面に煤が付着する。明黄色で微砂質の精良土。口径17.2cm、器高4.6cm。墨書土器蓋 (Fig. 89-7) は口径13.4cmと一回り小型であるが、口縁形態と胎土・色調は561と同じ。ナデ調整の頂部内面に「觚」と墨書する。

杯 C 杯CI (552) はb1手法。暗文は底部のラセン文が小さく、口縁部に左傾きの粗い放射文。丸底で口縁端部が外肥厚したのち内彎し凹線状をなす異形品。淡褐色で雲母片を多く含む微砂質土。外面全面に二次加熱による煤がつく。口径16.0cm、器高5.5cm。径高指数34。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属す。漆塗土器杯CI (148) はa0手法で口縁部に内傾面をつくる。口径15.7cm、器高3.3cm。杯CII (553・554) は口縁端部が浅い凹線状をなす。553は、a1手法で底部中央が上げ底状にくぼむ。口径15.1cm、器高3.8cm。554は口径15.3cm、器高3.2cm。口縁部上半の内面に煤が帯状に付着する。杯CIII (555) はa0手法で口縁上部が内屈し広い内傾面をもつ。内面の放射暗文には施文時の持ち替え単位が確認できる。口径12.6cm、器高3.3cm、径高指数26。飛鳥Ⅲに属す。杯CIII (556・557) もa0手法。556は放射文が丸く収めた口縁端部にまで及ぶ異形品で、口径10.7cm、器高3.3cm、径高指数31。正放射文の557は、鈍い内傾面をもち口径11.4cmで器高が高く、下層起源の可能性がある。

杯 G 杯GIII (558～560) は杯CIIIに似た器形で、暗文をもたない。558は口縁端部が小さく外反するGa類で、口径11.9cm、器高3.5cm。底部外面に成形時の指腹痕が放射状に巡る。茶褐色系の砂質の胎土で、全面に暗茶褐色の汚れがつき、漆工に使用された可能性がある。559は口縁端部内面が凹線状を呈すGb類で、口径12.2cm、器高3.2cm。淡褐色系で雲母片を含む微砂質土。560は口径9.6cm、器高2.9cmで最も小型。暗茶色で赤色粒子や雲母片を多く含む胎土。杯GII (565) は口縁端部が小さく外反し、底部を軽く削るGd類で、口縁部下の段や稜はない。明茶色で赤色粒子を含む胎土。口径15.0cm、器高4.9cm。内面に暗茶色の汚れが付着し、漆工に使用された可能性がある。杯Hは小型の杯HIII (566～570) のみがある。口径10.5～11.4cm、器高3.0～3.6cm。口縁部下の段が底部のヘラケズリによって稜をなす。赤色粒子や雲母片を多く含む胎土で、568には外面全面に二次加熱による煤の付着がある。

ロクロ土師器の蓋・杯B・杯C 蓋 (571・572)、杯B (573)、杯C (574) は成形・調整にロクロを使用し、細砂質の胎土で、淡黄褐色に焼成されたロクロ土師器である。蓋 (571・572) はともに小片からの復元で口径は不確かであるが、内面の小さなかえりが特徴的な大型の蓋で、炭層3や水溜下灰粘土層出土例に類似する。杯B (573) は底部の破片で、底部外面ロクロケズリ (R)。高台径11.4cm。杯C (574) は丸い底部外面をロクロケズリ (L) し、口縁端部は丸く収める。口径17.7cm、器高4.7cm。径高指数27。飛鳥Ⅲの大官大寺下層土坑SK121出土の土師器杯CIと同法量。

土師器皿類 皿類には、皿C (575)、皿AI (576～578)、高台の付く皿B (Fig. 38-579)、杯Gと同じつくりの皿G (580・581) があり、漆塗土器に小型の皿AIV (Fig. 102-150)、墨書土器に皿H (Fig. 89-2) と皿G (同-9・10) がある。皿C (575) は腰部が丸く深い。b3手法で口縁端部外面が凹線状をなし、底部内面に大きなラセン文、口縁部に1段放射文を施す。淡黄褐色で雲母片を多く含む

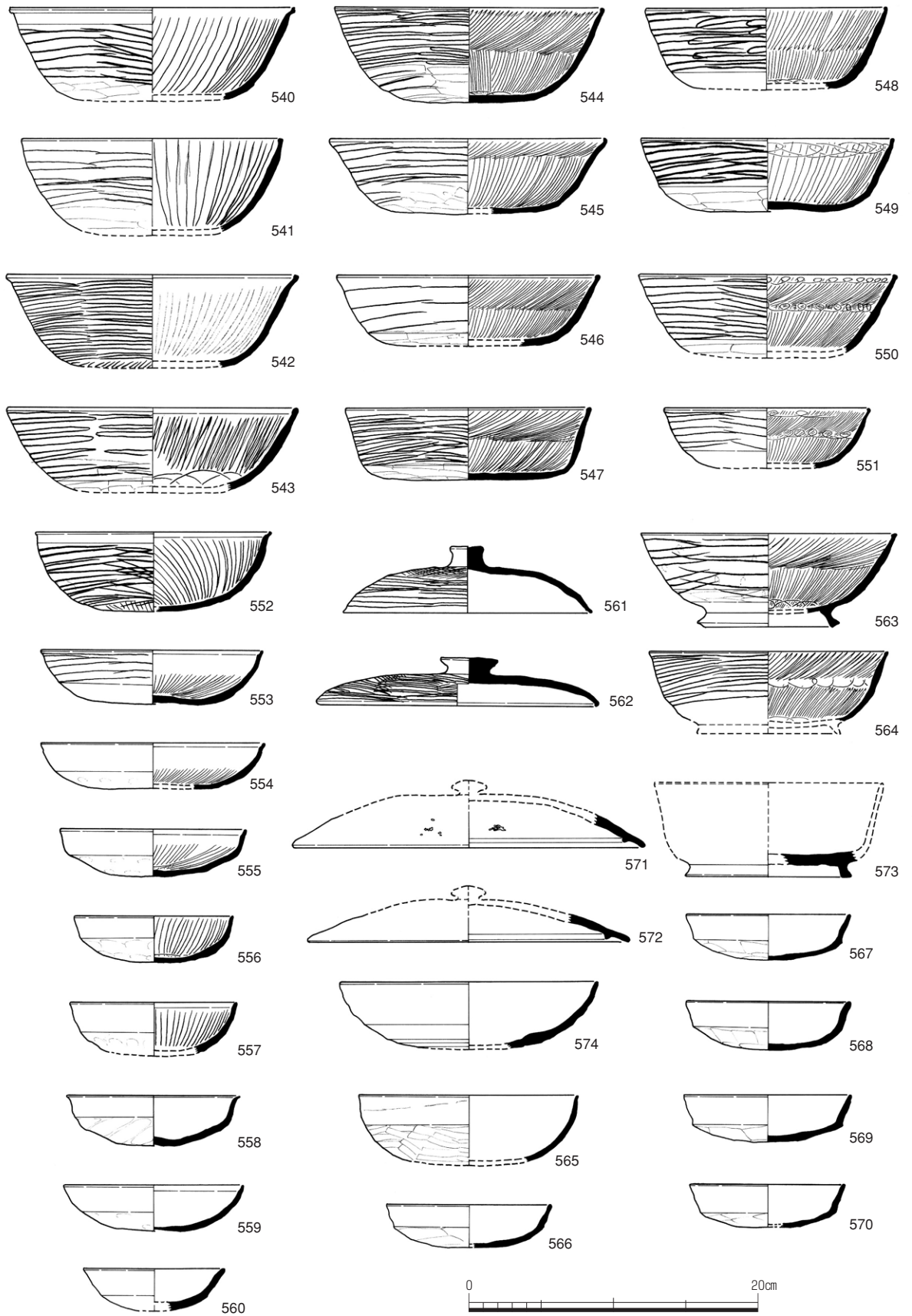


Fig. 24 南北大溝SD1130出土土器 (1) 1:4

皿 A 微砂質土。口径20.4cm、器高3.4cm。皿AI (576~578) は口径22.0~24.4cm、器高2.5~3.1cm。a0手法 (576) とb0手法 (577・578) があり、口縁端部の形状や暗文に小異がある。576は上方に面をもつ口縁端部で、底部内面にラセン文と細かな1段放射暗文を施す。淡黄褐色で雲母片を含む微砂質土。577は鈍い内傾面をもつ口縁端部で、底部内面全面に4重の小さなラセン文、口縁部に端部まで及ぶ左傾の放射文を施す。578は丸く小さく内肥厚する口縁端部で、暗文は2重の小さなラセン文と1段放射文。漆塗土器の皿AIV (Fig. 102-150) はb1手法で、直立する口縁部の端部が外肥厚し内傾面をつくる。底部内面にラセン文と放射文、口縁部に左傾する上段の放射文をもつ。口径12.2cm、器高2.0cm。

皿 B 皿B (579) は、大半の破片がSD1110上の包含層にあるが、小片の存在から本来はSD1130に属すとみられる個体で、垂れ気味の底部と内彎気味の口縁部からなる皿部に、外方へ踏ん張る長めの高台がつく。b1手法でヘラミガキが粗く、内面には底部にラセン文、口縁部に2段の放射文を細密に施す。口径18.6cm、器高3.8cm。赤褐色の精良土。皿G (580) は底部外面をヘラケズリし、口縁部との境に段のない杯Gd類と同じつくりで、口縁部下に粘土紐の継ぎ目が残る。内面は白色の付着物に全面が覆われて確認できないが、暗文は施さないとみられる。口径22.7cm、器高3.5cm。淡茶褐色で赤色粒子を含む微砂質土。皿GI (581) は斜めに開く口縁の端部が小さく外反し、底部に指頭痕、口縁部に粘土紐継ぎ目が残る。淡褐色で砂粒を多く含む胎土。内面に煤が付着する。墨書土器皿G (Fig. 89-9・10) は内彎気味の口縁部で端部が小さく内肥厚する。9の口径17.3cm、器高2.2cm。10の口径19.9cm、器高1.9cm。茶褐色を呈し、雲母片と砂粒を多く含む胎土。墨書土器皿H (Fig. 89-2) は底部との境に稜をもち直線的に開く口縁部で、口径15.7cm、器高2.4cm。胎土・色調も杯Hに共通する。

皿 G 高杯C (582~584) は杯部底部に突帯状の段が巡り、浅い杯部が特徴的。582は口縁端部がわずかに内彎し、中央が盛り上がる杯底部内面に大きな1重のラセン文、口縁部に1段放射文を施す。脚柱部外面は面取り状の縦方向のナデ調整、脚裾部内面に指頭圧痕が残る。明茶色の砂質土で口径16.6cm、器高9.5cm。583は口縁端部を丸く収め、杯部外面を密に磨く。底部内面に3重の小さなラセン文を施し、口縁部の1段放射文は一部X状に重複する。淡褐色で砂粒を多く含む胎土で、口径15.2cm。584は脚裾部外面を横方向にハケ目調整し、脚柱部は幅狭い縦方向のナデ調整。杯底部内面には大きなラセン文と放射文を施す。明茶色で雲母片を含む砂質土。脚部径9.8cm。

鉢 鉢は、口縁上部で内彎し、端部を内外に肥厚させて内傾面をつくる。平らな底部で浅い鉢B (585・586・588)、小さめの底部で深い鉢A (587) があり、いずれもb1手法。内面の暗文には底部のラセン文に、口縁部1段放射文の上に1条のループ状のラセン文 (585)、2段の放射文 (586)、2段放射文の間に1条のループ状のラセン文 (587) の別があり、暗文のない588の内面は、板状工具による横方向のナデ調整ののちに縦方向に間隔のある筋状のナデ調整を施す。588に赤色粒子が多いほかは、淡褐色~橙褐色で雲母片を含む微砂質土。585の口径19.8cm、器高7.2cm。586~588は口径18.8~21.0cm、器高8.8~9.4cm。鉢B (589) はb3手法で、外面のヘラミガキが著しく密で、内面に暗文は施さない。明茶色で底部外面に大きな黒斑があり、赤色粒子を多く含む微砂質土。口径20.0cm、器高9.7cm。体部外面に「山岳文」を描いた墨書土器鉢B (Fig. 89-11) も同様の色調・胎土をもち、暗文を欠くが、a1手法で口縁端部は尖り気味。口径22.3cm、器高

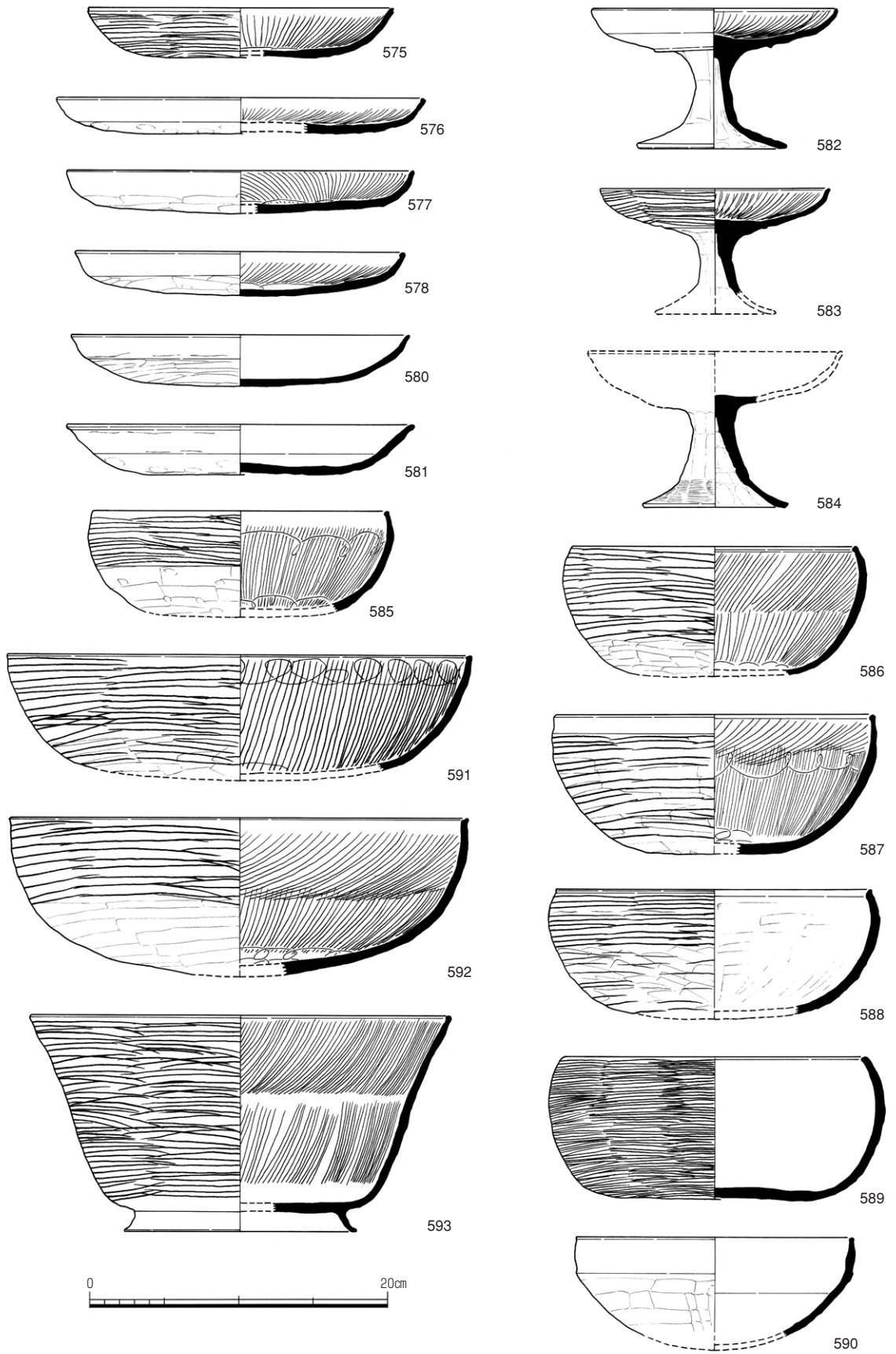


Fig. 25 南北大溝SD1130出土土器(2) 1:4

12.4cm。鉢H (590) は杯Hと同じつくりで深い。底部を横方向にヘラケズリし、口縁部との境の段を削り残す。口径18.4cm、復元器高7.8cm。なお、小片で図化し得ないが、炭層3の鉢X (369) に類似した口縁部がくの字に開く鍋形の器形で、ナデ調整の口縁・体部の内外面に線状のヘラミガキを施す鉢Xがある。口縁部と把手に小孔を穿ち、杯類に似た精良な胎土と、淡褐色の色調および煤の付着がないことを含めて、飛鳥京跡第10次遺構面出土の鍋²³⁾に酷似し、ヘラミガキする点は7世紀中頃の流路SD1173の鉢X (1450) に類似する。

盤 A 盤A (591・592) は大型で丸みをもって開く口縁部をもち、内外に肥厚する口縁端部が内傾面をなす。ともにb1手法。内面の暗文に、1段放射文の上部に上向きのループ状のラセン文を加えたもの(591)と上段の幅が広い2段放射文(592)がある。淡褐色～明茶色で赤色粒子を多く含む微砂質土。591の口径31.0cm、残存高7.8cm。592は口径30.5cm、器高10.6cm。椀Bを拡大した器形の大型椀B (593) は、口径28.4cm、器高14.6cm。径高指数51。口縁端部上面に小さく面をもち、平らな底部に、端部が外反する細い高台がつく。外面は、上方で開く口縁部の底部近くをヘラケズリするほかはヨコナデ調整で、口縁部に密なヘラミガキ。内面には底部にラセン文、口縁部に細かな2段の放射文を施す。赤褐色で細砂質の胎土。藤原京右京七条一坊西南坪に類例²⁴⁾があり、工房関係遺物、飛鳥IV～Vの土器や和同開珎銅銭と伴出している。

ハケ目調整の壺・盤 B 壺A (594) は丸底の体部外面をハケ目調整したのち線状にヘラミガキする。外反気味に開く口縁部内面は横ハケ目、体部内面は肩部に縦方向の指頭痕、下半部は横方向の強いナデ調整。体部外面に広く煤がつき、内面には汚れと焦げ付きがみられ、煮炊具としての使用が想定される。淡褐色で石粒・雲母片を多く含む胎土は、外面の調整が類似する水溜遺構の鉢X (41) と共通する。頸部径10.4cm、体部径20.2cm、残存高17.5cm。壺B (595・596) は口径7.8～9.3cm、器高6.4～7.8cm。ともに色調・胎土と口縁形状・調整法が「大和B型」の甕に共通する。595の体部外面は縦ハケ目、底部に作業台の痕跡が残り、596の体部外面には成形時の掌痕が残る。盤B (597) は丸底の浅い鉢形の体部に、幅狭く長い把手1対がつく。体部下半～底部外面を細かなハケ目調整、内面はナデ調整で、直立気味の口縁部の上端に面をもつ。口径46.0cm、器高14cm。底部外面に煤が付着する点と体部にハケ目を多用する点でも類似する壺A (594) と胎土・色調が共通し、製作地が同じ可能性がある。なお、体部片の一部が南地区の炭層4C層から出土しており、使用の場は南地区の工房とみられる。

鍋 類 鍋には平底で体部が比較的浅いもの(598・599)と丸底で深いもの(600)がある。鍋A (598) は「く」字形に外反する口縁の端部が外肥厚して上方に面をもち、体部外面上半をかすかな縦ハケ目、作業台の段以下を横方向にナデ調整し、内面を横方向にナデ調整する「大和B型」の調整法で、口縁部内面には横ハケ目状の条痕が残る。遺存する範囲内に把手がないことから鍋Aとしたが、鍋Bの可能性もある。口径39.0cm、器高14.9cm。茶灰褐色で赤色粒子・雲母片を多く含む砂質土。「小子部殿」の墨書土器鍋A (Fig. 90-16) は体部内外面をナデ調整する「大和B型」で茶褐色を呈する。口径31.6cm、復元器高11.2cm。「入」の墨書土器鍋A (Fig. 90-17) は「大和A型」の深い鍋で口縁端部が内外に肥厚する。口径29.2cm。「寺」の墨書土器鍋B (Fig. 90-12～14) も体部が比較的浅い鍋で、「大和B型」の調整法・色調・胎土であるが、口径28.8～36.6cm、器高15.6～18.1cmで、口縁部の外反度が強く、丸底で器高が高い点が異なる。鍋B (599) は外反する口縁部の端部が上方に肥厚し外側に面をつくり、体部外面全面を斜方向の

多くの墨書土器

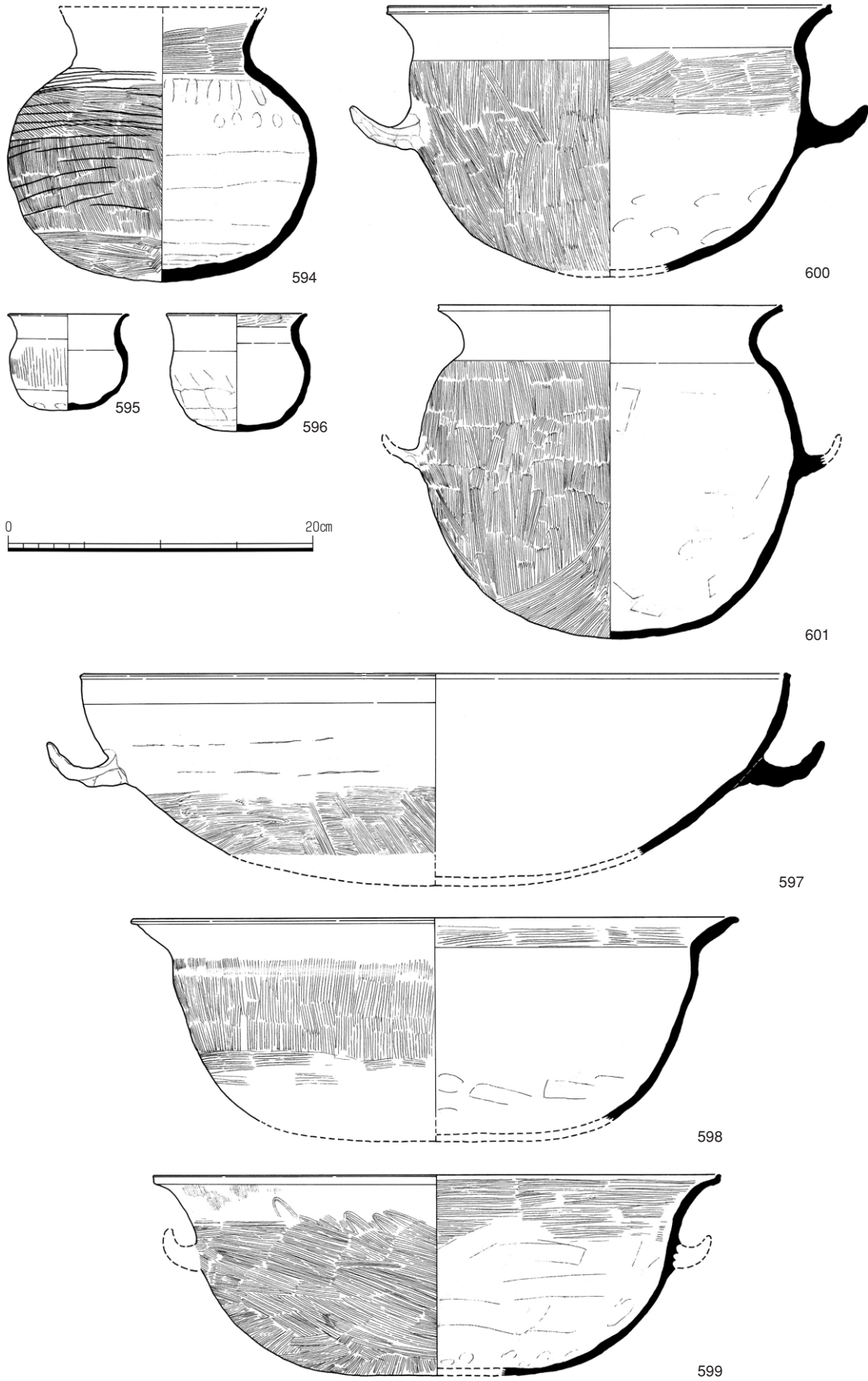


Fig. 26 南北大溝SD1130出土土器(3) 1:4

ハケ目調整、内面は口縁部を横ハケ目、体部をナデ調整、底部に無文の当て具痕が残る「大和A型」の調整法。体部上寄りに貼り付けた1対の把手が剥離する。明褐色で砂混じり胎土で、口径37.0cm、器高13.2cm。深鍋B(600)も体部内面に当て具痕が残る「大和A型」で、小さく括れて外反する口縁の端部が上下に肥厚して外側に面をつくる。体部中程に貼り付けた把手は先端の丸い三角形。把手より下に底部の二次ハケ目を施して丸底につくる。淡黄褐色で砂混じりの胎土で、口径29.0cm、器高17.8cm。甕B(601)は口径22.4cm、器高22.0cm。最大径25.0cmの球形体部と弧を描いて外反する口縁部からなり、体部中程に1対の把手を貼り付ける。体部外面は、把手より上に縦方向の一次ハケ目、下に体部・底部の二次ハケ目。内面は板状工具による平滑なナデ調整で、底部内面に緩やかな凹凸が残る。体部外面に煤が付着し、内面にタール状の付着物がある。この甕はSD1130埋土の直上層からの出土でより新相を示す可能性があるが、把手の形状や口縁端部は最下層の腐植土層3出土の鍋B(600)と変わらない。「入」の墨書土器甕B(Fig.91-19)は601よりも一回り大型であるが、「大和A型」の調整法・色調・胎土が共通する。

甕

B

須恵器の器種構成

須恵器 器種には杯A、杯B、杯G、杯H、椀A、皿A、皿C、杯B蓋、杯G蓋、杯H蓋、皿蓋、鉢A、鉢X、播鉢、平瓶、水瓶、長頸瓶、短頸壺、甕などのほか、墨書土器(杯B蓋)、ヘラ書土器(杯A)、蹄脚円面硯、圈足円面硯、転用硯(皿B・壺・横瓶)があり、漆甕(PL.391-92)を含む甕類や火舎形器台片(712)など、南地区の水溜下灰粘土層や下流部の遺構出土片と接合するものがある。鉢類は土師器と同様に多いが、大型の皿類は少なく、土師器供膳具の3割に満たない杯皿類には、転用硯や漆パレットとして使用されたものが多く含まれる。

杯蓋a類

杯蓋には、かえりをもつa類(602~612)と、端部を折り返すだけのb類(613・614)があり、a類が大半を占める。この構成は水溜遺構下の灰粘土層に類似する。口径で、18.8~19.4cmの杯BII蓋(602・613)、15.8~17.0cmの杯BIII蓋(603~605)、12.0~13.5cmの杯BIV蓋(606~610)、口径10.6~11.3cmの杯BV蓋(611・612・614)があり、杯BIV蓋には、無台有蓋の杯Ag・椀Agなどの蓋が含まれ、杯BV蓋には椀B・杯G蓋が含まれる。a類の杯BV蓋(611・612)は口径9.8cmの杯Agの蓋であるが、612が笠形の頂部をロクロケズリ(L)し、口縁端部が丸く肥厚するのに対して、611はロクロケズリ(R)で頂部を丸く削り、大振りで高い山形のつまみがつく。611は口径11.3cm、器高3.1cmで、612は口径11.1cm。ともに暗青灰色を呈し黒色粒子を多く含む胎土で、外面に広く降灰がある。杯BIV蓋(608~610)は、杯A(621)のような口径10.8~11.6cmの杯Agにかぶるもので、広く平坦な頂部で裾広がりの笠形をなし、側面の稜が明確な山形のつまみがつき、口縁端部が内側に丸く肥厚する。608は、砂粒の多い胎土で、外面から口縁端部内面までが茶褐色、頂部内面が青灰色を呈する正位での合せ口焼成。頂部外面にヘラ記号をもつ。口径12.4cm、器高2.8cm。609は灰色で砂粒を含む胎土。頂部外面ロクロケズリ(R)。口径12.2cm、器高2.1cm。610は厚手の頂部の外面をロクロケズリ(L)、口縁端部を下方に彎曲させ、かえりが大きい。淡灰色で黒色微粒子を含む精良土。口径12.0cm、器高2.8cm。杯BIV蓋(606・607)は口径11.0~12.4cmの杯Bなどにかぶるもの。606は丸い山形の頂部で、口縁端部に外傾する鈍い面をつくり、かえりは細く小さい。口径13.4cm。607は肉厚な頂部と口縁端部の丸い肥厚、山形のつまみが特徴的で、断面が赤茶色、外表が濃青灰色を呈し細砂を含む胎土。つまみ外縁が鋭く尖る608の頂部外面に「//」のヘラ記号。杯BIII蓋(603~605)は口径14.4~15.4

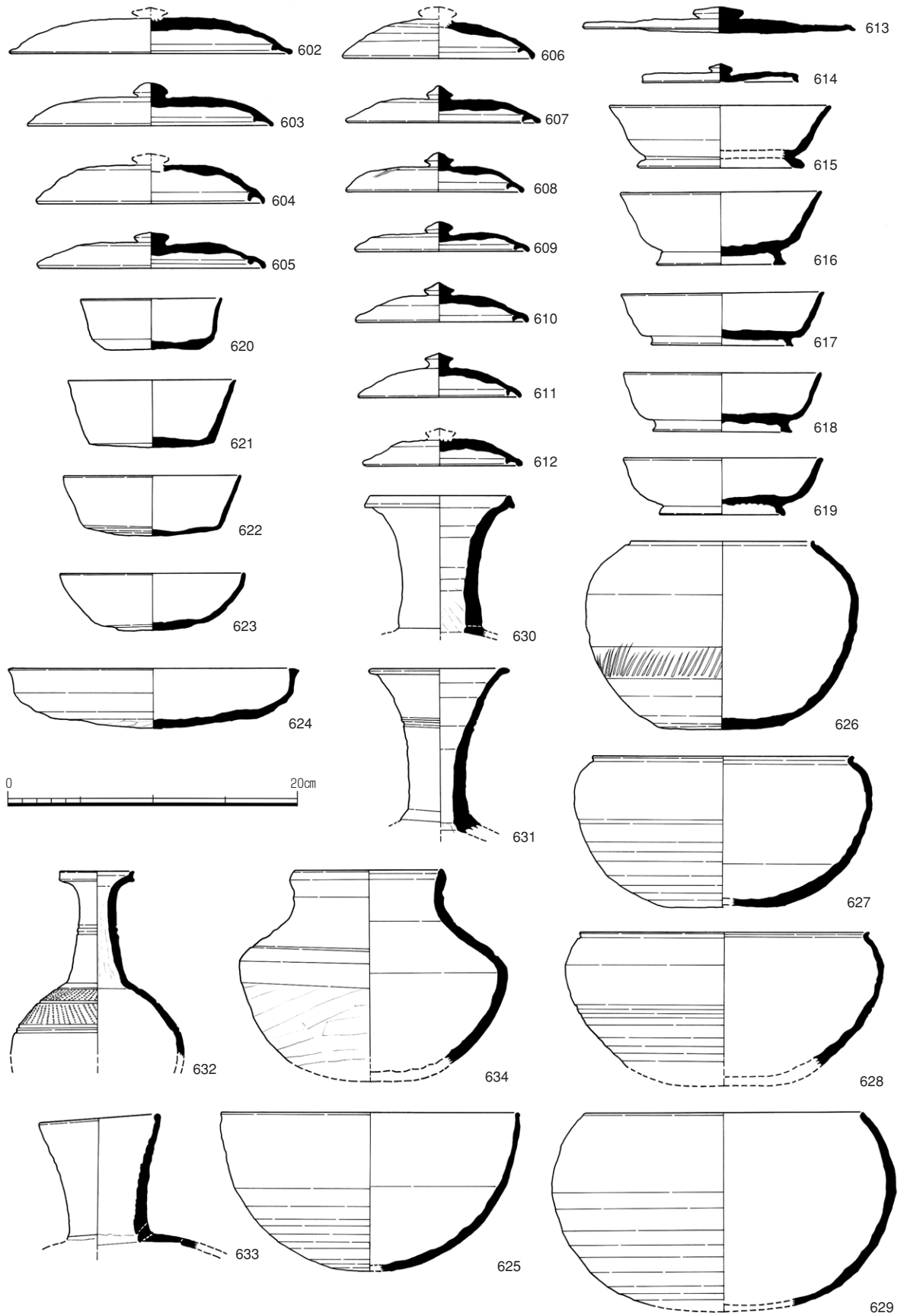


Fig. 27 南北大溝SD1130出土土器(4) 1:4

- 蓋 a 類の
転用硯 cmの杯Bにかぶる。603は広い頂部の内外面が滑らかで、かえり部が厚く、上面の丸い大振りのつまみがつく。内面全体に墨がつき、中央部が摩耗する転用硯。内面に「十」のヘラ記号。604・605は口縁部付近が段状をなし、端部が内彎する。淡青灰色で、胎土に含まれる黒色粒子がロクロケズリ（R）によって流れる。墨書土器杯BⅢ蓋（Fig. 90-18）も頂部が肉厚な a 類の蓋で、比較的高い宝珠形つまみと小さなかえりをもつ。口径15.2cm、器高3.5cm、かえり径12.1cm。淡青灰色の精良土。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。杯BⅡ蓋（602）は緩やかな弧を描く肉厚な頂部を広くロクロケズリ（R）し、外反気味の薄い口縁端部と三角形のかえりが特徴的。白色砂を多く含む胎土の青灰色で外面に黒色の降灰がかぶる。杯BⅡ蓋（613）は扁平な頂部の b 類で、薄く水平にのびた口縁の端部を外開きに折り曲げる。肉厚な中央部のみロクロケズリ（R）し、低い山形の大きなつまみがつく。口縁部外面と内面全面に墨が残る転用硯。b 類の杯BV蓋（614）は口径10.6cm、器高1.4cm。口径9.5cmほどの椀Bの蓋であろう。垂直に折れた口縁端部の内面が丸みもち、内面全面に墨が付着する転用硯。
- 杯 B 杯BⅢは口径13.5～15.2cm、器高3.8～4.4cm。器高の高いもの（615・616）と低いもの（617～619）があり、底部外面をロクロケズリするもの（615～617）とヘラ切り不調整のもの（618・619）がある。616は口縁下部に鈍い稜をもち、下端部が内外に肥厚する比較的高い高台をもつ。砂粒の多い胎土で淡青灰色。内面に茶褐色の汚れがつく。底部との境に稜をもつ617は底部内面が平坦で口縁端部を小さく外反させる。暗青灰色で黒色粒子を多く含む精良土。東海地方産であろう。619の底部外面には、高台貼り付け後に、渦巻き状に中心部へ向かう幅4mmの凹線が巡り、発泡した黒色粒子を多く含む胎土で、底部内面に墨が付着する転用硯。
- 杯 G 杯G（620）は口径9.8cm、器高3.6cm。底部外面ヘラ切り不調整で緩やかに外反する口縁部が薄く、法量と色調、胎土は蓋612と組み合う。杯Gにはほかに漆附着土器（PL. 388-29）などが
- 椀 A ある。椀A（621）は中央部の肉厚な底部と、先端が小さく外反する直線的な口縁部からなる。ロクロケズリ（L）で平滑に仕上げた底部外面が黄橙色、それ以外は黄灰褐色で有蓋の器種。口縁部にタール状の附着物が部分的につき、漆工に使用された可能性がある。口径11.6cm、器
- 杯 A 高4.7cm。猿投窯産。杯AⅣ（622）も底部外縁に鈍い稜をもち、器壁の薄い口縁部が直線的に開く。ロクロケズリ調整の底部外面に「T」のヘラ記号をもつ。内面と底部外面の一部が橙色、外側面が暗褐色を呈する有蓋の杯Agで、器壁の薄さと黒色微粒子を多く含む胎土から東海地方の製品とみられ、ヘラ記号は高蔵寺2号窯例に類似する。口径12.2cm、器高4.3cm。622には南北塀SA1120柱穴出土片が接合している。丸底の杯Ac（623）は口径12.7cm、器高4.0cm。底部外面ヘラ切りののちナデ調整。内外面に漆、内面に白色物が附着し、下層起源の杯H蓋を転用した可能性が残る。
- 皿 C 皿C（624）は直立する口縁の端部が大きく肥厚し、上方に面をもつ。底部外面は中央部を軽くロクロケズリ（R）し、内面は広く多方向にナデ調整。断面が淡茶色、外面が暗青灰色を呈し、内面に褐色の汚れが残る。口径20.0cm、器高4.3cm。
- 鉢 X 鉢X（625）は半球形の体部で口縁部が内彎しない特異な器形。体部下外面をロクロケズリ（R）、内面はナデ調整。淡灰色で一部明茶色を呈し、砂粒を多く含む微砂質土。口径20.2cm、器高11.0cm。鉢A（626～629）は、体部径19.0～24.0cm。口縁部上部で強く内彎して口が小さく器高が高いもの（626・629）と、内彎が弱く広口で器高の低いもの（627・628）があり、いずれも内面に黒色～茶褐色の汚れが付着する。後者は口縁端部を小さく折り返して内傾面をつくり、

体部中程に1条の凹線が巡る。体部下半と平らな底部外面をロクロケズリ（L）、上半は内外面ともにロクロ目が著しく、青灰～淡灰色で砂粒を多く含む微砂質土。627の底部内面には明茶色を呈する円形の重ね焼き痕が残る。尾北窯の製品。627の口径17.9cm、器高10.5cm。628の口径20.0cm。前者の626は、SD1130の埋土上部出土で、体部下半外面にはロクロケズリ（L）の上方に平行文叩き目が残る。外表が淡灰色、断面が明黄色を呈し、黒色粒子を多く含む胎土で猿投窯の製品。口径12.4cm、器高13.0cm。629の口縁端部はほとんど肥厚しない。体部下半外面はロクロケズリ（L）で、口径19.2cm、器高13.8cm。色調・胎土が626と共通する。

長頸壺（630・631）はともに体部を欠くが、630は口縁上端が段状に肥厚し外側に面をもつ、いわゆるフラスコ型長頸瓶。口径9.6cm、残存高9.8cm。631は上部で開き端部が外肥厚する口縁部で中程に2条の凹線が巡り、体部との接合部が段状をなす。口径9.8cm、残存高11.2cm。ともに胎土・色調から静岡湖西窯の製品とみられる。平瓶（633）は内面のロクロ目が著しく、端部が小さく内肥厚する長めの口縁部。口径8.1cm。胎土・色調が630などに共通する湖西窯の製品。水瓶（632）は頸部と体部上半に凹線が巡り、肩部の凹線の上に櫛状工具の刺突文を綾杉状に施す。上部で強く外反する口縁部は突帯状の段をなして上方につまみ出す。内外面共に暗い赤褐色を呈し、赤色微粒子を多く含む胎土で猿投窯の製品とみられる。口径5.0cm、残存高12.8cm。水瓶は南北溝SD1110や道路南側溝SD1080に類例（715～719・840）がある。短頸壺（634）は肩部に1条の凹線文が巡り、直立気味の口縁の端部外側に鈍い面をつくる。底部外面はヘラケズリ調整で、煤がつき、内面も全体が茶褐色に汚れる。口径10.0cm、器高14.4cm。

フラスコ型

平瓶

水瓶

播鉢（635）は口径37.8cm、底径23.4cm、器高18.8cm。広口のバケツ形で平底。口縁部の中程が極めて肉厚で、口縁端部は丸く収め、器壁が薄い底部は欠失する。口縁部外面は上半をロクロナデ、下半をロクロケズリ（R）したのちに3条の凹線文を巡らせる。内面はロクロナデののちに、口縁部下の1条の凹線文より下方の全面に、先端の丸いヘラ状工具による摺り目を刻む。摺り目は上半に5～6条の横線と左傾きの斜線、下半部に乱雑に交差する斜線を配す。暗い灰白色を呈する白色砂を含むやや粗い胎土で、内面全体に茶褐色の汚れが付着し、用途が有機物のすりつぶしにあったことを想定させる。破片の一部が南北溝SD1110最上層やその上の包含層から出土している。

播鉢

甕（Fig. 29-636～643、PL. 249-644～648）には、甕A（637～641・644～648）、甕B（642）、甕

甕の構成

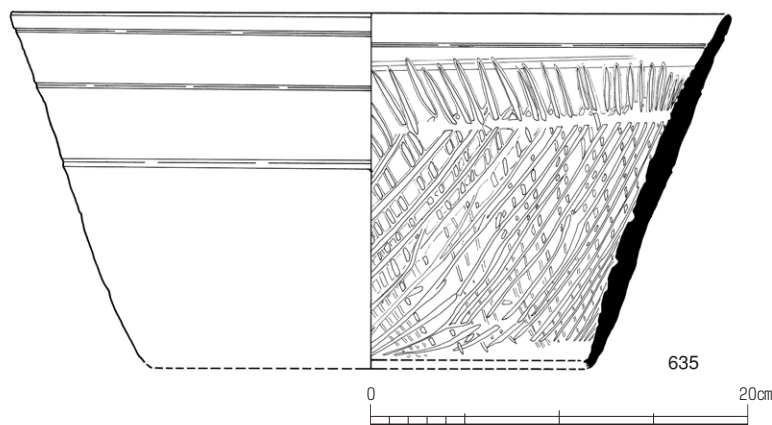


Fig. 28 南北大溝SD1130出土土器（5） 1:4

C (636・643) があり、南地区のSD1173の甕A (1467・1470・1471) や、水溜下灰粘土層の甕A (248・249)、漆甕 (PL. 391-92) の破片が含まれる。また、甕A (645) にはSD1173出土片が接合し、起源がSD1173にあると考えられるとともに、水溜下灰粘土層出土甕片の存在は、SD1130出土土器の起源の一つが、同層にあることを想定させる。

甕C (636) は一般的な甕Cとは異なり、外反する口縁の端部が丸く内彎する。体部外面は木目左斜交の平行文叩き目、内面は無刻の当て具痕で、灰色の微砂質土。口径37.4cm、頸部径34.4cm。器形は美濃須衛33号窯例²⁵⁾に類似し、胎土・色調からも美濃須衛窯の製品とみられる。甕C (643) も口縁部が外反し端部が外肥厚する点で一般的な甕Cとは異なる。口径52.0cm、体部径58.0cm。外面は細刻で浅い平行文叩き目、内面は無刻で年輪が浮き出た当て具痕をナデ消す。灰白色を呈し白土の縞をもつ精良土で、頸部と体部外面に鉄釉を塗布する猿投窯の製品。甕A (637・638) は口縁端部が内肥厚し、体部は撫で肩で長胴。637の外面は密な平行文叩き目ののちカキ目調整、内面は太い4弁の車輪文当て具痕ののち軽くロクロナデ (PL. 249)。638の外面は細刻の平行文叩き目ののち木目の細かなカキ目調整、内面は上半部に粗い同心円文とロクロナデ、下半部には当て具外周の粗い円弧文。637の口径18.2cm、638は口径21.0cm、体部径34.0cm、器高41.0cm。甕A (639) は体部外面を右斜交の平行文叩き目ののち上半部にカキ目調整、内面は小芯で広刻の同心円文当て具痕。口径23.4cm、体部径32.8cm、器高34.8cm。暗青灰色で砂混じりの胎土は陶邑窯の可能性はある。甕A (Fig. 36-640) は角張った玉縁状の口縁で、外面は細刻の平行文叩き目と粗い木目のカキ目、内面は中心の大きな同心円文当て具痕。口径32.6cm、体部径49.7cm。灰色で砂質の胎土で陶邑窯の製品の可能性がある。甕A (Fig. 36-641) は口径15.8cm、器高22.7cm。小型の甕で口縁端部は玉縁状に肥厚する。外面は細刻で粗い平行文叩き目ののちに、上半をロクロナデ、下半～底部を細木目のカキ目調整。内面は上半をナデ調整、下半は広刻で密な浅い同心円文当て具痕。灰色で赤色粒子を含む砂質土。甕B (Fig. 36-642) は外面を細刻の平行文叩き目ののちカキ目調整。内面は中心の大きな同心円文当て具痕。断面が白色で外表が黒色を呈する砂質土。肩部外面にヘラ記号をもつ。

甕の成形法

甕A (644~648) は体部内外面の写真を示した (PL. 249)。644は玉縁状の口縁部で、外面は細刻の平行文が木目よりも粗いために横位に見える平行文叩き目ののち浅いカキ目調整、内面は広刻で浅く密な同心円文当て具痕。横位に見える平行文叩き目は水溜遺構の甕198にもみられ、同心円文も類似する。645は口縁部を欠くが、外面は細かな木目が浮き出した細刻で密な平行文叩き目に、条の不揃いなカキ目調整、内面は偏芯で矩形をなす深い同心円状文当て具痕。淡青灰色で白土の縞をもつ微砂質土。内面に黒色の汚れがある。646は外面を細刻で深い平行文に、条が不揃いで深いカキ目、内面は中央の小さな広刻の同心円文当て具痕で、上半をナデ消す。645と類似した胎土で灰色を呈す。甕A (647) は灰粘土層の249に類似した大きく開く長い口縁部で、上寄りに2条の凹線文と櫛描波状文を巡らせる。口径39.6cm、復元器高約65cm。外面は細刻で粗い平行文叩き目に浅いカキ目調整で、内面の広刻で浅い同心円文と筋状のロクロナデが特徴的。大半の破片が南北溝SD1110や土坑SK1128から出土し、小片がSD1130出土である。648は内面に中央の大円に細線の4弁を加えた「車輪文」当て具痕、外面に細刻で密な平行文叩き目と条の細かなカキ目調整。暗青灰色で白色粒子を多く含む胎土。

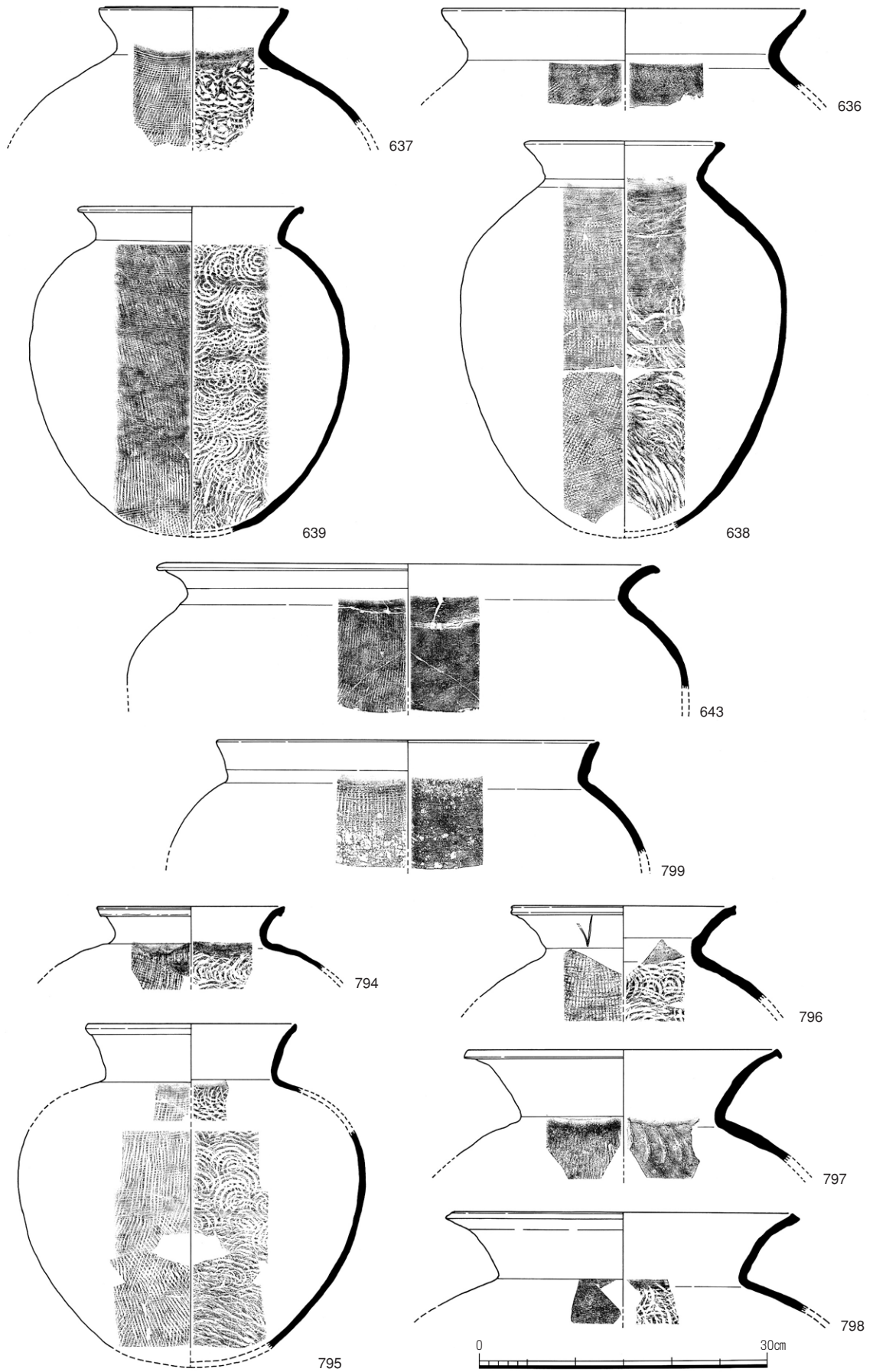


Fig. 29 南北大溝SD1130ほか出土須恵器甕 1:6

ii 南北溝SD1110出土土器 (Fig. 30~34-649~729、PL. 225~228)

SD1110は南地区の水溜遺構の水を石組方形池SG1100へ排水するための素掘溝で、途中に設けた堰SX1111周辺には石組護岸をもつ。溝は西側を並走し、基壇状盛土をもつ掘立柱南北塀SA1120の築成、および南北大溝SD1130の埋め立てと一連に構築され、3条の塀(SA1150~1152)と重なる南端では、当初(SA1152段階)は水溜SX1220西北隅から北東へ延びる溝SD1108を水口とし、のちに、より東の南北溝SD1109に変更されたことが確認されている。溝埋土は、上・中・下層とその下の木屑層とに分けられ、木屑層には多量の木簡が含まれるが、素掘部と石組部とでは溝幅、底部の深さ、堆積状況が異なり、水口のSD1108・1109埋土を含めて、その対応関係の把握は難しい。土器は木屑層を中心に、各層から出土し、溝の構築過程と機能を反映して、SD1130出土土器および上流部の水溜遺構・炭層出土土器と類似するものが目立ち、破片が接合する個体もある。また、上層・最上層には溝廃絶後のものが含まれる。

土師器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、鉢B、鉢H、盤A、壺A、甕A、甕B、甕C、鍋Aなどがあり、墨書土器 (Fig. 91-20~25) の杯A、杯B、甕A、甕B、鍋、針書土器の杯B (Fig. 99-102)、漆塗土器の杯A (Fig. 102-143) が含まれる。

杯 A 杯AI (649・650) はともにb1手法で、口縁端部が丸く内肥厚する。649は口縁部外面のヘラミガキがやや粗く、内面の暗文は上段の狭い2段の放射文で、口径19.6cm、器高5.6cm、径高指数29。淡褐色で雲母片を含む胎土。650の暗文は底部のラセン文が細かな3重で、口縁部には幅広い上段と下段の間にループ状のラセン文を配した2段放射文。外面のヘラミガキも密に施される。口径17.1cm、器高5.7cm、径高指数33。明茶色で微砂の多い胎土。漆塗土器杯AI (143) も2段の放射文の間にループ状のラセン文を配するが、口縁部の開きが大きく、口径17.5cm、器高5.3cm。径高指数30。墨書土器杯A (20) は650と同じ法量であるが、a1手法で、上段が幅広い2段放射暗文をもつ。649と漆塗土器杯A (143) は素掘部北部の木屑層、650は同地区の下層出土。墨書土器杯A (20) は南部の上層出土。650と漆塗土器杯A (143) は飛鳥Ⅲ~Ⅳに属し、649と墨書土器杯A (20) は飛鳥Ⅳ~Ⅴに属すとみられる。

杯BI (653) は密なヘラミガキのb1手法で、内面の暗文は上段の幅が広い2段放射文。口径22.4cm、復元器高8.0cmで、口縁端部が小さく内肥厚し上外方に面をつくる。径11.1cmの分厚い高台をもつ「延徳」の墨書土器杯B (21) とともに北部の木屑層出土。杯BI (654) は肉厚な底部に細く外反する高台がつく。b1手法と思われ、直線的に開く口縁の端部が小さく肥厚し、2段放射暗文の上段が幅狭い。口径20.8cm、器高6.7cm、径高指数32。端部が外肥厚する高台をもつ「弁通口」の針書土器杯B (102) とともにSD1108出土。杯BI蓋 (651) は弧を描く頂部で口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。内面はナデ調整ののちに4重のラセン暗文を施し、外面はつまみ周辺を4分割、外周を5分割してヘラミガキ。淡褐色で赤色粒子や雲母片を含む精良土。口径24.7cmで、杯BI (653) に対応する大きさだが、胎土や厚みが異なる。石組部の木屑層出土。杯BⅢ蓋 (652) は口径14.0cm、器高2.2cm。広く平らな頂部の周縁部が内彎し、口縁端部は小さく内肥厚する。頂部内面はナデ調整で、外面は6分割のヘラミガキ。偏芯した位置に上面が平らな大きなつまみがつき、つまみ上面にはラセン暗文を施す。明茶色で赤色粒子を含む精良土。

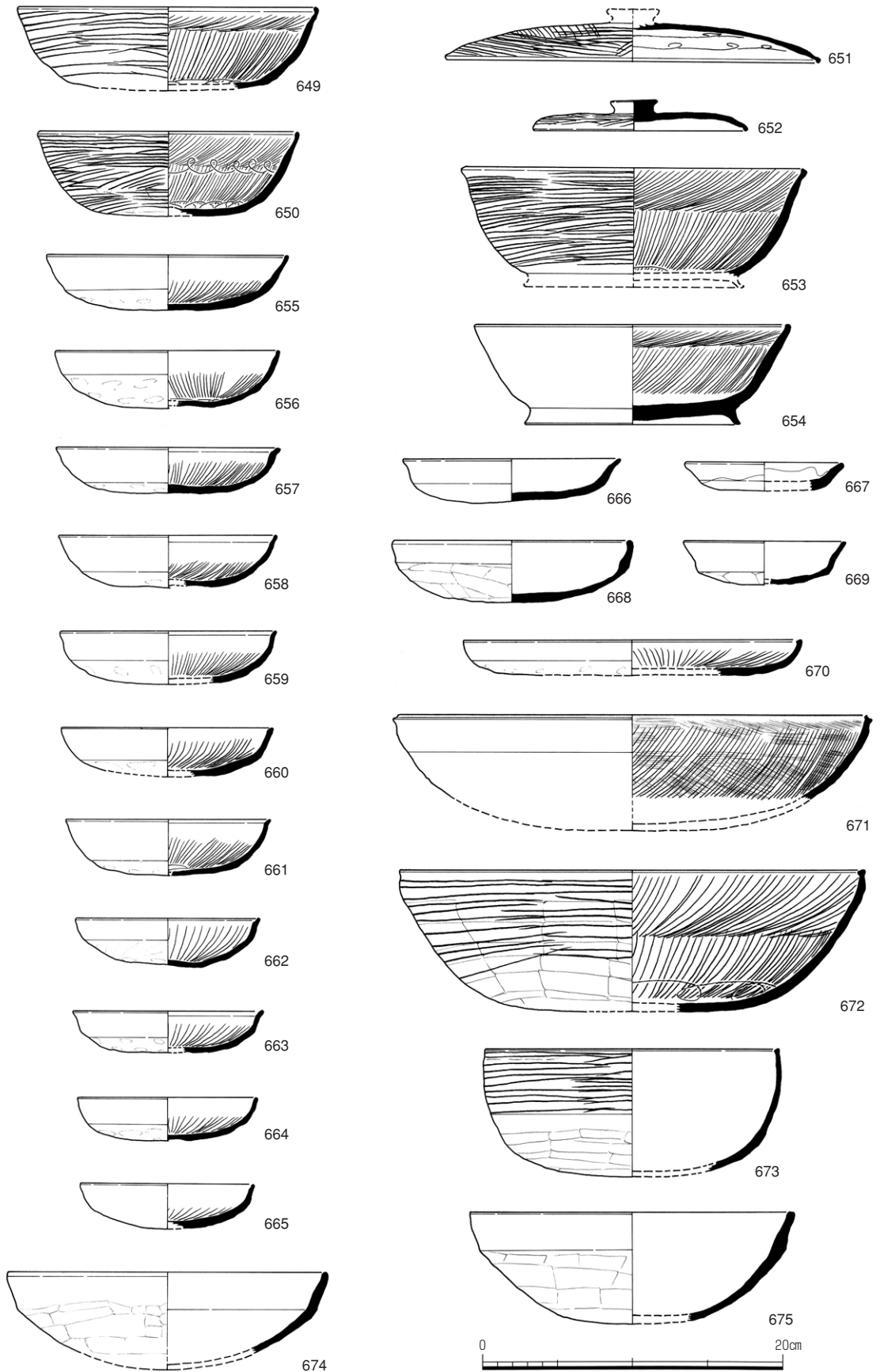


Fig. 30 南北溝SD1110出土土器(1) 1:4

- 杯 C 杯Cには、杯CI、杯CII（655～661）、杯CIII（662～665）がある。径高指数では、28～26（656・661・662・665）、25～23（655・658～660・664）、21～22（657・663）とがあり、層序では、SD1108出土（655・660・664）は径高指数23～24にまとまる傾向があり、石組部の木屑層出土（657・658・661・662）は径高指数の高いものが多いが、低いもの（657）も含まれ、素掘部の上中下層（656・659・663・665）は混在している。杯CII（655～661）は口径13.6～15.8cm、器高3.1～3.8cm。いずれもa0手法で1段放射暗文。口縁端部が小さく内肥厚するc類（655・656・658）は淡茶色で砂粒を多く含み、左傾きの1段放射暗文（656）や、灯明痕をもつもの（658）がある。口縁端部が大きく外反して鈍い面をもつc類（657）は淡褐色で微砂を含む胎土。弧を描いて開き端部に内傾面をもつb類（659・661）は赤褐色の精良土。直線的に開き端部の肥厚が著しくないc類（660）は厚手で橙褐色の砂混りの胎土。杯CIII（662～665）は口径11.4～12.6cm。端部を丸く収めるc類の664の他は、口縁上部が内屈するa類で、端部内側に凹線状の面をもつ662は、粗い放射暗文を口縁端部近くまで施し、淡褐色の精良土。底部外面に指腹痕が放射状に巡る。肉厚な底部で端部の肥厚が小さい665は、底部付近のみの1段放射暗文で、外面全面に漆が付着し、端部が鈍く外反する663には灯明痕が残る。
- 杯 G 杯G（666）は口径14.4cm、器高3.0cm。外反する口縁の端部を丸く収め、底部は不調整。淡褐色で赤色粒子を多く含む胎土。素掘部北部の下層出土。杯G（667）は平らな底部で浅く、口縁部内外面に煤がつく灯明皿。口径10.2cm、器高1.8cm。石組部の上層出土で溝機能の停止後の可能性がある。杯HII（668）は直立する肉厚な口縁部の端部が内彎気味に肥厚し、外面のヘラケズリのために底部外周の器壁が薄い。淡褐色で微砂や砂粒を多く含む胎土。口径15.7cm、器高4.2cm。素掘部北部の木屑層出土。杯HIII（669）は口径10.6cm、器高2.9cm。底部と口縁部の境に明確な稜をもち、赤色粒子を多く含む杯Hに共通する胎土。SD1108出土。
- 皿 A 皿AI（670）はa0手法で内彎気味の口縁の端部が小さく内肥厚し鈍い内傾面をなす。口径22.4cm、器高2.4cm。暗文は底部内面中央部にラセン文、底部外寄りから口縁部に1段の放射文を施し、中央部には縦横に針書きの細線がある。淡褐色で赤色粒子や雲母片を多く含む胎土。素掘部北端の最下層出土。
- 鉢 B 鉢B（673）は平底で内彎気味の器壁の薄い口縁部をもち、口縁端部は小さく内外に肥厚して上方に面をもつ。口縁部下半と底部の外面をヘラケズリし、口縁部上半にヘラミガキを施したb1手法。内面はナデ調整で暗文は施さない。明茶褐色で微砂質の胎土で、口径19.4cm、器高8.6cm。素掘部南部の上層出土。鉢H（674・675）は杯Hの技法と胎土でつくった大型品。674は口径21.0cm。外面を中心に黒色の汚れがつき、素掘部北端の最下層出土。675は口径21.4cm、器高7.3cm。南北溝SD1109近くの上層出土。
- 盤 A 盤A（671）は内彎気味に開く口縁部の端部を、甕の口縁端部と同様に内外から摘み出して凹線状の面をつくる。口縁上部はヨコナデ調整。下半は粘土紐継ぎ目が残るナデ調整。内面には細かなハケ目状の条痕が残るナデ調整を斜めに施したのちに、細い放射暗文を密に施す。淡橙色で微砂や雲母片を含む胎土。口径31.0cm、残存高5.6cm。素掘部南部の上・中・下層出土。盤A（672）は口縁上部が内屈し、端部を内外に大きく肥厚させて上方に面をつくる。口縁下半外面を横方向にヘラケズリ、上半には太いヘラミガキ。底部内面に円弧の粗いラセン暗文、口縁部には2段の放射暗文をもつ明茶色で赤色粒子を多く含む微砂質の胎土。口径30.8cm、器高9.5cm。SD1109に近い素掘部南端の上層出土。

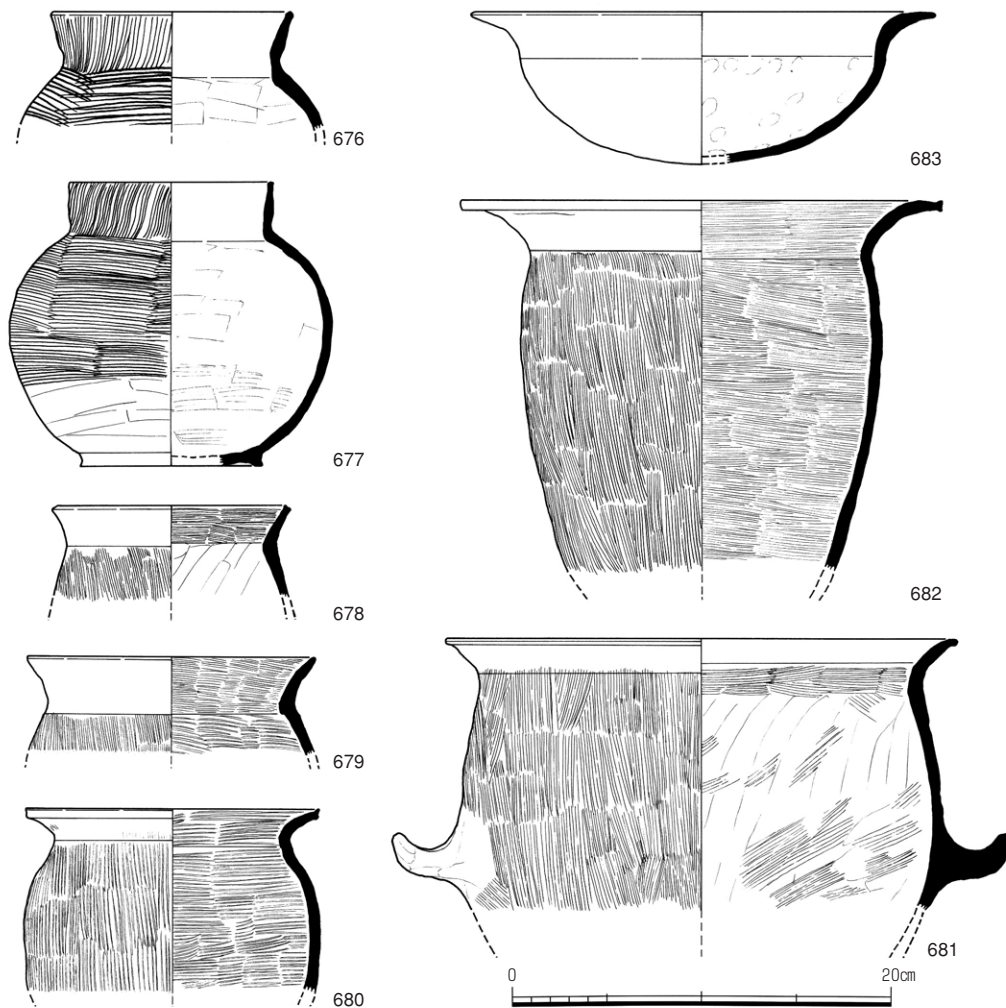


Fig. 31 南北溝SD1110出土土器(2) 1:4

壺A (676・677) は、球形の体部と長い口頸部とからなり、口縁端部は小さく肥厚する。口頸部は内外面をヨコナデ調整、外面に縦方向の細かなヘラミガキ。体部外面は上半を8回程度に分割した横方向のヘラミガキ、内面は条痕の不明瞭なハケ目を横方向に施す。ともに明茶色で赤色粒子・微砂を多く含む胎土で、676は口径12.5cm。全形の知れる677は口径10.6cm、器高15.0cm、体部径16.9cmで、体部外面下半は軽いヘラケズリ。体部中位に把手の剥離痕があり、底部外寄りに径9.6cmの低い高台がつく。ともに南部の最下層出土で、飛鳥Ⅳの藤原宮の運河SD1901A出土例に類似する。甕A (678) は直線的に開く口縁の端部が小さく肥厚し、口縁部内面を横ハケ目、体部外面を条の細かな縦ハケ目、体部内面を縦方向のヘラケズリ調整する。橙色で細砂質の色調・胎土ともども「河内型」。口径12.0cmで、外面全面に煤が付着する。素掘部の下層出土。甕A (679・680) はともに口縁・体部の内面を横ハケ目調整する。679は端部を丸く収めた外反する口縁部で、体部下半を欠くが、体部内面のハケ目の条が粗く、砂粒や雲母片を多く含む淡灰褐色系の胎土は「近江型」に通じる特徴である。口径15.0cm。素掘部の中層出土。680は口縁部が弧を描いて外反し、端部は上方につまみ出して外側に面をつくる。体部外面の縦ハケ目が粗く、外面全面に煤がつく。口径15.4cm、体部径15.5cm。溝南端近くの上層出土。

甕BI (681) は弧を描いて外反した口縁部の端部を外側に丸く肥厚させ、頸部内面を横ハケ目

壺 A

甕 A

甕 B

調整。体部外面は縦方向のハケ目調整で、肉厚で幅の狭い把手周辺はナデ調整。内面は条の粗い斜めハケ目ののち、縦方向にヘラケズリし、把手裏面を別途ハケ目調整する。口径26.8cm、体部径25.5cm。明茶褐色で細砂や赤色粒子を多く含む胎土ともども、炭層3の甕B(370)に類似する。溝南端の上層出土。墨書土器の甕BI(25)は「大和A型」で、体部内面は横方向のナデ調整。口縁部外面に「×」形のヘラ記号をもつ。体部中位に貼り付けた把手は、薄手で幅6.5cmの低い三角形をなす。上方へ肥厚する口縁端部の形状ともども飛鳥IV~Vの特徴を示す。溝

- 甕 C 南端部の上層出土。甕C(682)は水平にのびた口縁端部が上下に肥厚して外側に面をもつ。口縁部内面は横ハケ目ののちヨコナデ調整し、体部は横ハケ目。体部外面は縦ハケ目で、ヨコナデ調整の口縁部外面上端に粘土紐継ぎ目が残る。淡橙色で赤色粒子を含む砂質土。内面全面に黒色の汚れがつく。口径25.2cm、復元器高約23cm。体部径18.5cm。南部の上層出土。鍋A(683)は半球形の浅い体部に、強く外反する肉厚の口縁部がつき、端部は薄く丸く収める。内外面ともにナデ調整であるが、体部内面に押え痕が残る、淡褐色で微砂や雲母片を多量に含む胎土が「大和B型」とは異なる。口径24.4cm、器高8.0cm。堰SX1111南の最上層相当層出土。

須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、杯G、杯G蓋、杯H、椀A、椀B、椀C、高杯、皿A、皿C、鉢A、壺A、壺K、水瓶、平瓶、火舎形器台、甕など多様なものがあり、墨書土器杯G蓋(Fig.91-28)、杯BIV(Fig.91-26)、漆壺(PL.388-47)、漆付着土器杯Ac(PL.388-26)、杯B(PL.388-18)、砥土器皿A(Fig.108-245)などがある。

- 杯 A 杯A(700~702)には、無蓋のAa(700)、無蓋で腰の丸いAc(701)、平底有蓋のAg(702)がある。杯AaⅢ(700)は、底部外面をロクロケズリ(R)し、鈍い内傾面をなす口縁部内面に2ヵ所の灯芯痕、外面に広く黒色のタール状付着物がある。口径15.4cm、器高4.0cm。青灰色で微砂を含む胎土。南部の上・中層出土。杯AcⅢ(701)は、口径16.2cm、器高3.5cm。底部外面はロクロケズリ(R)で、中央に一方方向のナデ調整をした内面には火嚢きがある。口縁部内外面が淡青色、それ以外は青灰色で、黒色粒子を多く含む胎土。南部の最上層出土。杯AgⅢ(702)は口径15.4cm、器高3.5cm。薄い口縁部が直立気味で、肉厚な底部外面はロクロケズリ(L)。淡灰色を呈し黒色粒子を多く含む微砂質土。

- 椀 A 椀Ag(703)は、口径15.6cm、器高6.4cm。底部外面はロクロケズリ(R)で平滑に仕上げ内面中央部は一方方向のナデ調整。断面と底部外面の一部が茶灰褐色を呈するほかは暗青灰色を呈し、微砂と黒色粒子を多く含む胎土。南端のSD1108・SD1109・上層から出土。

- 杯 蓋 杯B蓋(691~693)にはかえりをもつ蓋a類(691・692)と、かえりのない蓋b類(693)がある。杯BⅢ蓋(691・692)は肉厚な丸い頂部で、細いかえりが外寄りにつく。691は口径14.2cm。かえり径は12.1cmで鋭い先端が口縁部よりも下方にとびだす。692は口径16.6cm、かえり径14.0cm。ロクロケズリ(L)で平滑に仕上げた頂部に、断面三角形の宝珠形つまみがつく。内面全面に煤がつき、暗灰色を呈し、砂粒を多く含む胎土。堰南の下層出土だが、SD1130出土片が接合し、かえりの形状はSD1130の603に類似する。杯BⅡ蓋(693)は薄手の口縁部が水平に開き、端部は稜をもって外側に凹面をつくる。頂部外面中央部をロクロケズリ(R)、内面全面をロクロナデし、内面には摩耗痕と墨の付着がある転用硯。外面に緑色の降灰がかかり、黒色粒子を多く含む胎土で硬質な焼成。東海地方猿投窯産。石組部の木屑層出土。蓋(694)は口径25.6cm、かえり径23.3cm。ロクロケズリ(L)で平滑に仕上げた頂部外面に、径約12cmの淡黄灰

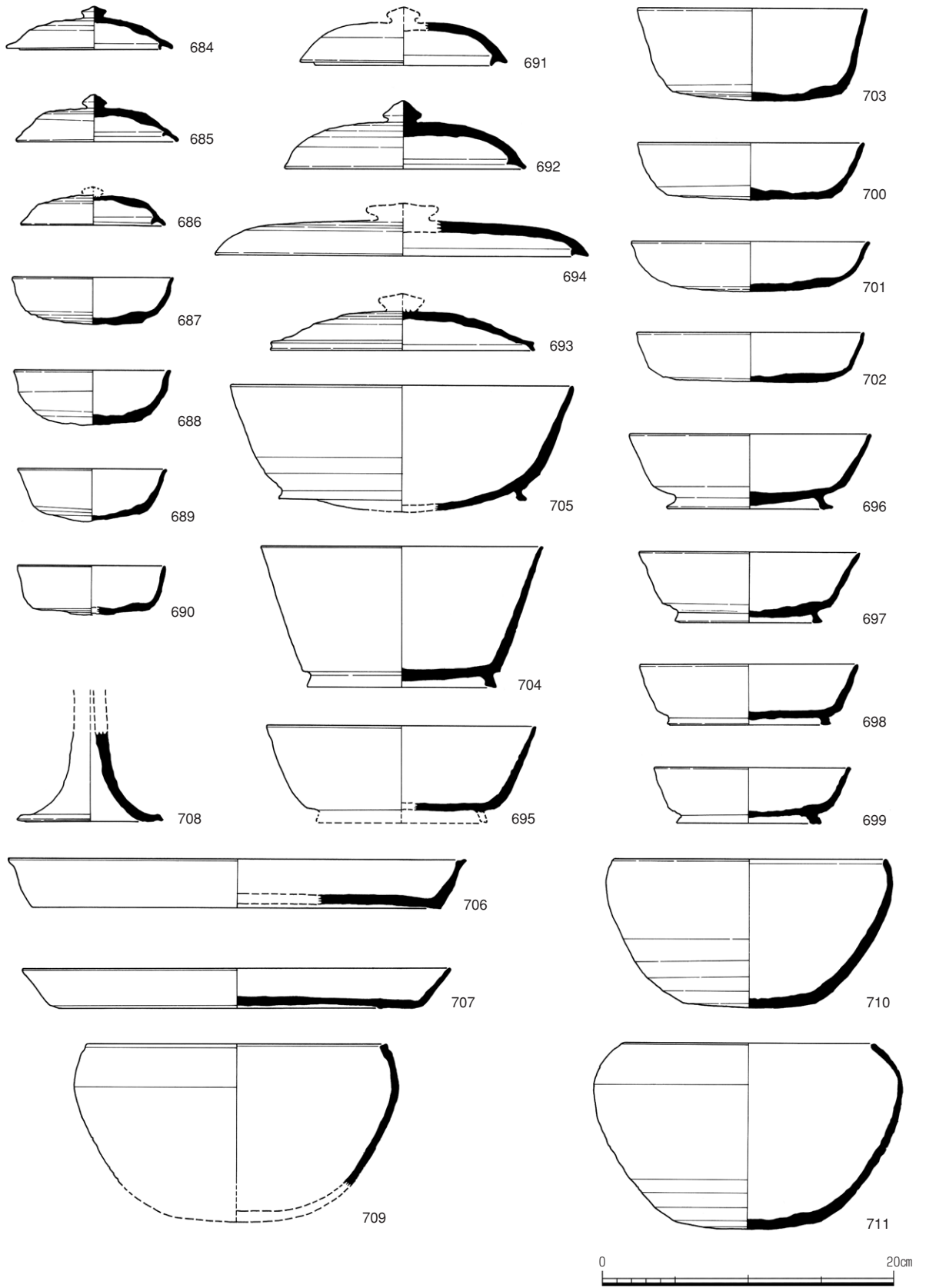


Fig. 32 南北溝SD1110出土土器 (3) 1:4

色を呈する重ね焼き痕がある。椀Bあるいは盤・皿類の蓋で、器形と法量は水溜遺構の蓋(166)に類似し、胎土、色調から尾張・尾北窯産とみられる。堰SX1111近くの下層出土。

杯 B 杯BII(695)は口径18.4cm。平坦な底部外面をロクロケズリ(R)。底部内外面が褐灰色であるほかは灰白色で、黒色粒子を多く含む胎土。折損した高台の破面が摩耗し、口縁部外面に墨書の一画があるが判読できない。南部の上層出土。杯BIII(696~698)には器高の高いもの(696・697:径高指数32)と、低いもの(698:同25)とがあり、外面調整ではロクロケズリ(696)とヘラ切り不調整(697・698)とがある。696は外方へ踏ん張った高い高台をもち、肉厚な底部中央が垂れ下がる形状はSD1130の杯B(616)と類似し、淡青灰色で白色土を含む精良土。飛鳥III~IVに属す東海地方産。石組部の木屑層出土。697は口径15.1cm、器高4.9cm。696と同様に、中央が垂れ気味の厚手の底部と直線的に開く薄手の口縁部、内外に肥厚する高めの高台が、SD1130の杯B(618)に類似する。SD1108出土。698は口径14.8cm、器高3.7cm。平らな底部に方形の高台がつき、底部内面は広く多方向にナデ調整。暗青灰色で砂混じりの胎土は陶邑窯産とみられ、飛鳥IV~Vに属す。南部の最下層出土。杯BIV(699)は口径13.4cm、器高4.0cm。底部外面をロクロケズリ(R)し、外方へ踏ん張った台形の高台付近の器壁が厚く、底部中央は薄い。南部の上層出土。漆附着土器杯BIV(PL.388-18)は、699と同口径だが器高が高く(4.4cm)、底部外面ヘラ切り不調整。中央部の器壁が薄い、底部と口縁部の境が丸く、高台が底部内寄りにつく点で古相を示し、薄く引き出された口縁部と青灰色で黒色粒子を多く含む胎土から、東海地方産とみられる。南部の下層出土。

椀 B 椀B(704)は、やや垂れ気味の底部と直線的に開く口縁部の境が角ばり、外方へ踏ん張るやや高めの高台をもつ。底部外面はロクロケズリ、内面は多方向のナデ調整で平滑に仕上げ、小さく外反する口縁端部は薄く尖る。灰色を呈し、砂粒と黒色粒子を含む砂質の胎土で、東海地方産とみられる。銅鏡形の椀C(705)は口径23.4cm、器高8.6cm。口縁部下半から一連にロクロケズリ(R)した丸い底部が下方へ垂れ下がり、外周寄りに丸く外肥厚する高台がつく。内面はロクロナデののちに、口縁部近くまで多方向のナデ調整。青灰色で粗い砂粒を含む微砂質の胎土。尾北窯の高蔵寺2号窯例に類似し、飛鳥IV~Vに属す。南端部SD1109付近の上層出土。

杯 G 蓋 杯G蓋(684~686)は、口径10.0~11.4cm。684・685のつまみは側縁に稜をもつ宝珠形で、ともに飛鳥III~IVに属す杯AgV蓋の可能性もある。684は多量に含まれる黒色粒子が発泡する胎土で、外面全面に自然釉がかかる。先端径9.6cmのかえりが内寄りに小さく突出し、器高3.0cm。685は薄い口縁部が長くのび、小さなかえりが内寄りにつく。かえり径9.0cm、器高3.3cm。口縁の外周部のみが重ね焼きにより黒色化する。686はかえり径8.0cmの小型で、笠形の頂部をロクロケズリ(R)。暗青灰色を呈し、かえりの2ヵ所に灯芯痕が残る。法量は飛鳥II末の水落遺跡出土例に類似する。684は堰SX1111南の木屑層、685・686は南部の上層出土。

杯 G 杯G(687~690)には底部の丸い687・688と平底気味の689・690とがあるが、いずれも底部外面はヘラ切り不調整で、口径は9.8~10.9cm。器高3.3~3.8cm。687は薄い口縁部が外反し、全体が黄白~灰褐色で、細砂と石英を多く含む胎土。688はSD1108出土の完形品。口径10.7cm、器高3.8cm。暗青灰色で黒色粒子多く含む胎土。689は底部中央が薄く、ロクロナデ(L)で薄く引き出した口縁端部が小さく外反する。淡青灰色で黒色粒子を多く含み、底部内面にヘラ記号をもつ。SD1109出土。690は直立する口縁部と底部外周の内面にタール状の付着物がつく。

底部内面中央部は多方向のナデ調整。ともに南部の上層出土の686と組み合う大きさで、色調・胎土も類似する。

皿A (706) は、あげ底気味の平底から稜をもって直線的に短く開き、盤Aの口縁端部と同様に外肥厚して明確な内傾面をもつ。口縁部外面下半をヘラケズリ、底面外面は中央部に指頭痕、外縁部は軽いヘラケズリののちにナデ調整。内面は口縁部と一連のロクロナデ調整で平滑に仕上げる。灰色で一部が淡黄色を呈し、黒色粒子を含む微砂質の胎土で東海地方の製品。口径30.9cm、器高3.4cm。南部の上層出土。なお、713は、頂部外面をロクロケズリ(L)することから壺A蓋として作図したが、頂部外周と口縁端部の形状が、皿A(706)を倒置した場合と同じであり、蓋としては大径にすぎ、皿Aの可能性はある。口径24.5cm、残存高3.5cm。溝南端のSD1109出土。皿A(707)は、底部外面をヘラケズリしたのち底部中央を軽くロクロケズリ(R)。口縁部はロクロナデで薄く引き出し、端部は丸く収め、底部内面は押え痕ののちにナデ調整。淡青灰色を呈し黒色粒子を多く含む胎土で、口縁上端部の内外面に降灰がかかる無蓋の器種。口径29.3cm、器高2.8cm。南端の上層出土。口縁端部の形状と胎土・色調が類似する砥土器(Fig. 108-245)は口縁下半と底部をロクロケズリ(R)。口径31.1cm、器高3.2cmで、同地区の中層出土。高杯(708)はいわゆる「長脚2段透し」の脚部で、ラッパ状に開く裾の端部外側に小さな面をつくる。脚径10.0cm。溝北部の木屑層出土。鉢A(709)は、口縁上部で内彎し、端部は外側に強いナデ調整による段をもち、上方に面をつくる。口縁形状はSK1126の鉢A(867)に類似し、淡灰褐色で微砂と黒色粒子を多く含む胎土も共通する。SD1108出土。鉢A(710)は堰南の木屑層出土。口縁部下半と底部外面をロクロケズリ(L)し、口縁上部で小さく内彎する器形と丸い口縁端部、および淡青灰色で黒色粒子を含む精良土が、富本銭出土土坑SK1240と水溜SX1222の炭層3等に破片がある鉢A(397)と酷似し、内面下半と外面上部とに降灰がかかる。幅13cm、長さ22cmほどの破片で、その外周を打ち欠き、内面の大部分および外周破面に墨が付着する。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属す鉢の破片を加工して転用硯に利用したもの。鉢A(711)は、口縁上部で強く内屈し、端部は丸く収める。口縁部下半と底部外面をロクロケズリ(R)、底部内面は多方向のナデ調整で滑らかに仕上げる。口径17.0cm、器高12.8cm、体部径21.2cm。灰色を呈し砂粒を含む胎土で堅質な焼成。飛鳥Ⅳの藤原宮の運河SD1901A出土例に類似する。

火舎形器台(712)は口径25.8cm、底径20.3cm、高さ6.8cmの口縁端部を丸く収めた盤状部と、脚径25.2cm、高さ7.0cmの極めて肉厚な脚台部とからなる。盤状部の下端に2条の凸帯、口縁部には中位の1条の凸帯で区分した上段に、櫛描き刺突文を1条の凹線文を境とする綾杉状に配し、下段には1条の櫛描波状文を巡らせる。口縁部外面はロクロナデ、内面は下半を横方向のヘラケズリ。底部外面は中央部をナデ調整、外周をヘラケズリする。ハの字に開く脚台部の裾は内彎し、外面に4条の凸帯を配す。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリし、方形の透孔を4方に穿つ。燻焼き焼成により、断面は灰白色、外表のみが黒色を呈し、石英粒を含む砂質の胎土。盤状部内面には、

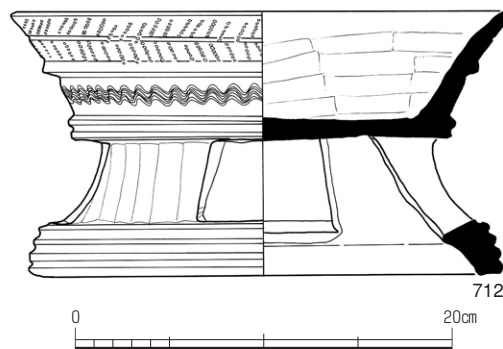


Fig. 33 南北溝SD1110出土土器(4) 1:4

- 内側が台形、外側が円弧をなす獣足様の重ね焼き痕が4個遺存し、欠失した部分を含めると5脚であったと思われる(PL.227)。全体の形状は、唐三彩の火舎形香炉の器台部に酷似する。堰SX1111周辺の木屑層・堰南の木屑層のほか、南北大溝SD1130からも破片が出土し、周辺包含層や、飛鳥池東方遺跡の流路SD1700(後期流路・暗青灰砂土)へも出土域が拡散している。
- 三彩の火舎形香炉に類似
- 壺 A 蓋 壺A蓋(714)は肉厚で平らな頂部から垂直に折れ曲がり、口縁端部は丸く細くつくられる。口径12.8cm、器高4.7cmで、外面をロクロケズリ(L)した頂部中央に、大きく扁平なつまみがつき、堰付近の最上層上部出土。細長い口頸部の水瓶(715~719)は体部・口縁部とも多様である。口頸部片(715・716)は、端部が強く水平に折れ曲がるもの。715は外面はロクロナデで、緑色に発する降灰が著しくかぶり、内面にはしほり目が残る。口径3.7cm、残存高6.8cm。南端の最上層相当層。716は内外面ともロクロナデで、内面に粘土紐継ぎ目が残る。口径4.6cm。北部の最上層出土。717は肉厚の頸部外面に2条の凹線を配し、口縁部は内側に稜をもって外屈する。水溜SX1220炭層1出土であるが、胎土・色調が718に類似する。718は張りのある肩部で、下すぼまりの体側部に1~2条一組の凹線が3組巡り、底部にハの字に外反する高台がつくが、先端は欠損する。明紫色で黒色粒子を多く含む精良な砂質土。色調・胎土を含めてSD1130の632や、道路南側溝SD1080の840などと類似し、尾張猿投窯産の可能性が高い。体部径13.2cm、残存高9.9cm。南北溝SD1108出土。719も頸部中程に2条一組の凹線を施すが、撫で肩の体部で、肩部上部に2条の凹線が巡る。青灰色で微砂混じりの胎土。南の最上層出土。
- 水瓶
- 長頸壺 壺(720)は、大型の長頸壺の口頸部片で、下端の体部との接合部と口縁部の器壁が薄い。淡青灰色で砂混じりの胎土。口径12.0cm、残存高14.7cm。南部の下層出土。壺K(721・722)は体部下半をロクロケズリ(R)し、ハの字に開く脚台がつく。721の体部は算盤玉形で鈍い稜をなす肩部に2条の凹線が巡る。口頸部は上方で大きく開き、外面にしほり目が残る。口径10.0cm、体部径16.0cm、復元器高21cm。722は台形の体部で鈍い稜をもつ肩部上部に1条の凹線文。高台の先端が外肥厚して強く踏ん張る。体部径15.2cm、高台径8.0cm。SD1108出土。壺(723)はやや長い広口の口頸部で、口縁端部は丸く外肥厚して鈍い面をもつ。口縁部は内外面ともロクロ目が目立つロクロナデ(R)で、丸く括れた頸部の内面のみ縦方向のナデ調整。淡灰色で砂粒を多く含む胎土で、口径13.4cm。南部の最下層出土。壺(724)は外反する短い口頸部で、肩部外面は平行文叩き目ののち、密なカキ目。内面は幅広い刻みの同心円文叩き目ののちに横方向のナデ調整。肩部外面に漆がわずかに付着する。短頸壺(725)は丸底で撫で肩の扁平な体部に短い口縁部がつく。底部外面はロクロケズリ(R)。青灰色で微砂質の胎土。復元口径8.2cm、体部径11.6cm、復元器高6.6cm。SX1220西方包含層出土。
- 短頸壺
- 平瓶 平瓶(726~729)には体部径約17cmの中型(726・727)と、体部径約20cmの大型(728・729)があり、体部外面下半はいずれもロクロケズリ調整するが、底部外面については、中型が全面をロクロケズリするのに対して、大型は底部中央に押え痕や布目のついた凹凸が残り、外周部のみをロクロケズリする、いわゆる板起し技法。726は丸みのある体部上面をカキ目調整し、内面には白色物が付着する。体部径18.6cm。堰SX1111近くの上層出土。727は肩部に稜をもつ扁平な体部に、広口の口縁部がつき、体部径17.4cm。728は肩部に鈍い稜をもつ肩部と、広口の口頸部に凹線が1条巡り、口縁端部は内傾面をなす。口径12.9cm、体部径21.2cm。復元器高20.1cm。727・728はSD1108出土。729は大きく開く口縁部に凹線が1条巡るが、肩部にはみえない。

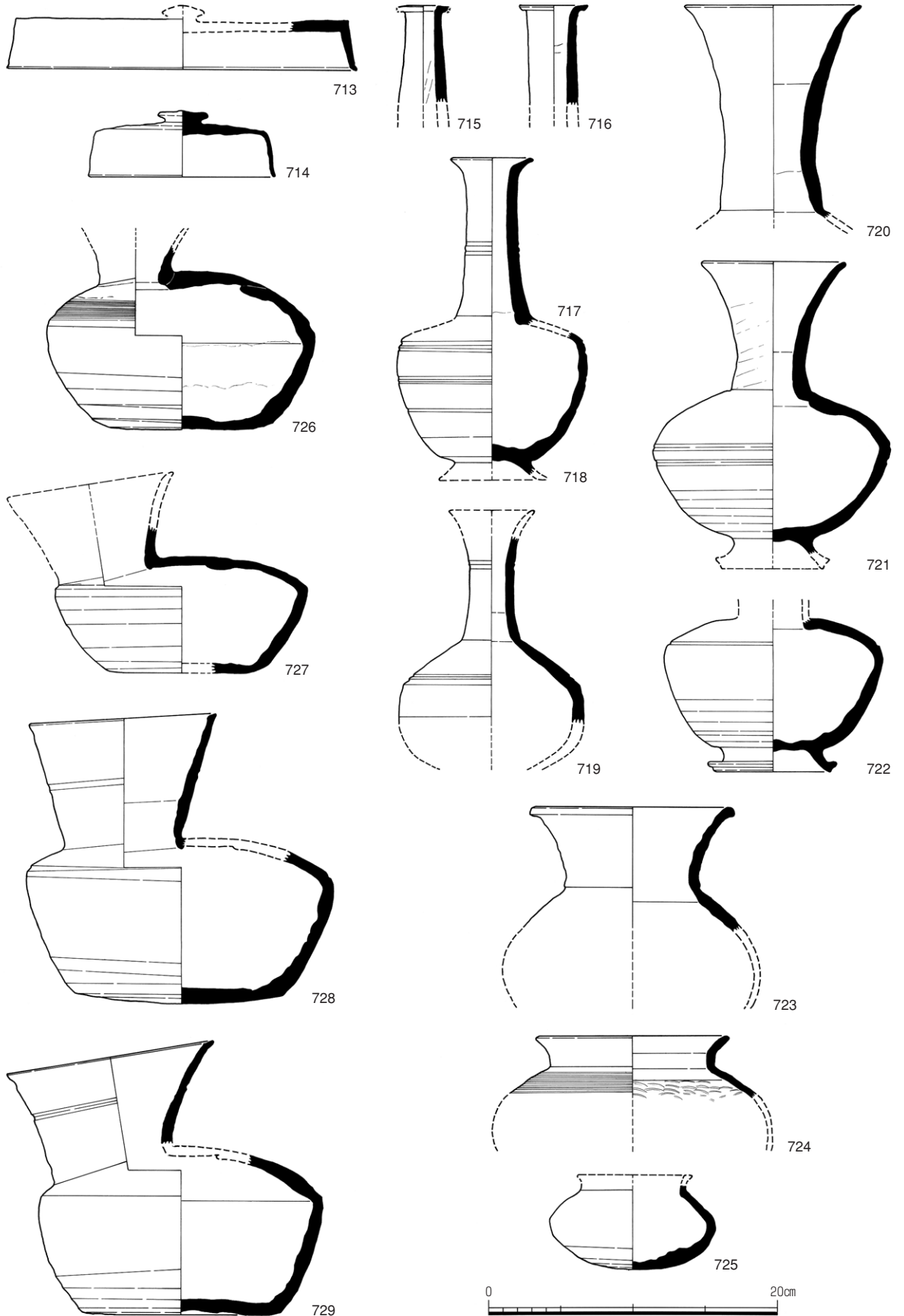


Fig. 34 南北溝SD1110出土土器(5) 1:4

淡青灰色で微砂質の精良土。南部の下層出土。

須恵器甕には、多量の甕Aと甕C、ごく少量の甕Bがある。それらのうち、より下層にあたるSD1130や上流部の水溜遺構・炭層、下層遺構出土片と接合関係にあるものの方は、本来の帰属に戻して記述した。ここでは、接合・同定作業の現状で、SD1110が最南に位置するか、あるいは最も下層にあたるものをSD1110の甕とし、SD1110が廃絶する以前には存在した資料として報告する。(Fig. 35~37-769~793, PL. 249~251)。

甕 A 甕A(769)は、直線的に大きく開く口頸部の外面に2段の櫛状工具による刺突文を巡らせ、口縁端部は上下に肥厚し外側に面をつくる。口径33.5cm、頸径25.5cm、頸高14.1cm、体部径63.5cm、器高約70cmの大型甕。体部外面は細刻の平行文叩き目を右上から左下へ流れるように施し、内面は無刻の当て具痕をナデ消す。口縁内面から外面に緑色に発色する鉄釉を塗布し、白色土の縞が目立つ精良土で、尾張猿投窯の製品。堰近くの木屑層出土で破片は土坑SK1126へもおよぶ。甕A(770)は、南の最上層出土で廃絶後の可能性が残る。外反する長めの口頸部で外面に1条の凹線が巡り、口縁端部は丸い玉縁状をなす。頸部外面は体部と同じ叩き目のちロクロナデ。体部外面は幅広く密な刻みの平行文叩き目のち密なカキ目。内面は幅広く密な刻みの同心円文当て具痕の外周部が残る。口径36.8cm、頸径25.1cm、頸高11.8cm。甕A(771)は直立気味の頸部で口縁上部が大きく開き、端部は外肥厚し上方に面をもつ。頸部外面中程に直線文2条とその間の櫛描波状文1条を巡らす。口径28.4cm、頸径19.8cm、頸高9.3cm。体部外面は粗い木目に直交してごく細い平行線を粗く刻んだ叩き目で、木目が浮き出して横位の叩き目にみえる。内面は幅広く浅い刻みの同心円文当て具痕。堰南の中層のほか、石組方形池SG1100および周辺に破片が拡散する。端部を外側に肥厚させる口縁部形状が尾北・篠岡81号窯例に類似し、淡青灰色で白土の縞を含む精良な胎土からも尾張・尾北窯の製品とみられる。甕A(772)は、短く外傾する口頸部で口縁端部は上方に突出し外側に鈍い面をつくる。体部外面は細刻で密な平行文叩き目のち密なカキ目、内面上半は中央を浅く大きく掘り窪め、細刻で密な同心円文で囲む当て具痕、下半には芯が偏る細刻の同心円文当て具痕が残る。口径18.9cm、頸径16.7cm、体部径41.6cm、器高45.7cm。暗灰色を呈する精良な胎土で、口縁部の形状と中央の大きな当て具痕が類似する備前邑久窯産の可能性²⁶⁾がある。堰SX1111南の下層のほか石組方形池SG1100、南北溝SD1103にも破片が及ぶ。甕A(773)は、短く外反し口縁端部の外側と上方に面をもつ。体部外面は一部が欠けて不揃いになった幅広い刻みの平行文叩き目のちに浅いカキ目を軽く施す。内面の当て具もひび割れが生じており、中央を浅く大きく掘りくぼめた幅広く密な刻みの同心円文当て具痕を、筋状にナデ消す箇所がある。口径23.8cm、頸径20.5cm、体部径44cm、推定器高41cm。青灰色で白色土の縞をもつ砂質の胎土。口縁の形状は陶邑TG55号窯例に類似する。堰SX1111近くの木屑層および上層出土。

甕A(774・775)は、分厚い頸部からやや長く緩やかに外反し、口縁端部付近で薄くなる。774は口縁端部を上下に肥厚させて外側に面をつくり、体部外面は粗い木目が浮き出した左斜交で細刻の平行文叩き目、内面は細い「e」字形渦巻き文当て具痕。叩き目および渦巻き文当て具痕は美濃須衛10号窯例²⁷⁾に類似し、胎土・色調からも美濃須衛窯の製品とみられる。溝SD1108出土で、SD1110の初期段階の甕とみられ、破片は石敷井戸SE1090の周溝埋土等に拡散する。775は口縁端部を欠失するが774のように上下に肥厚するとみられる。体部外面は木目

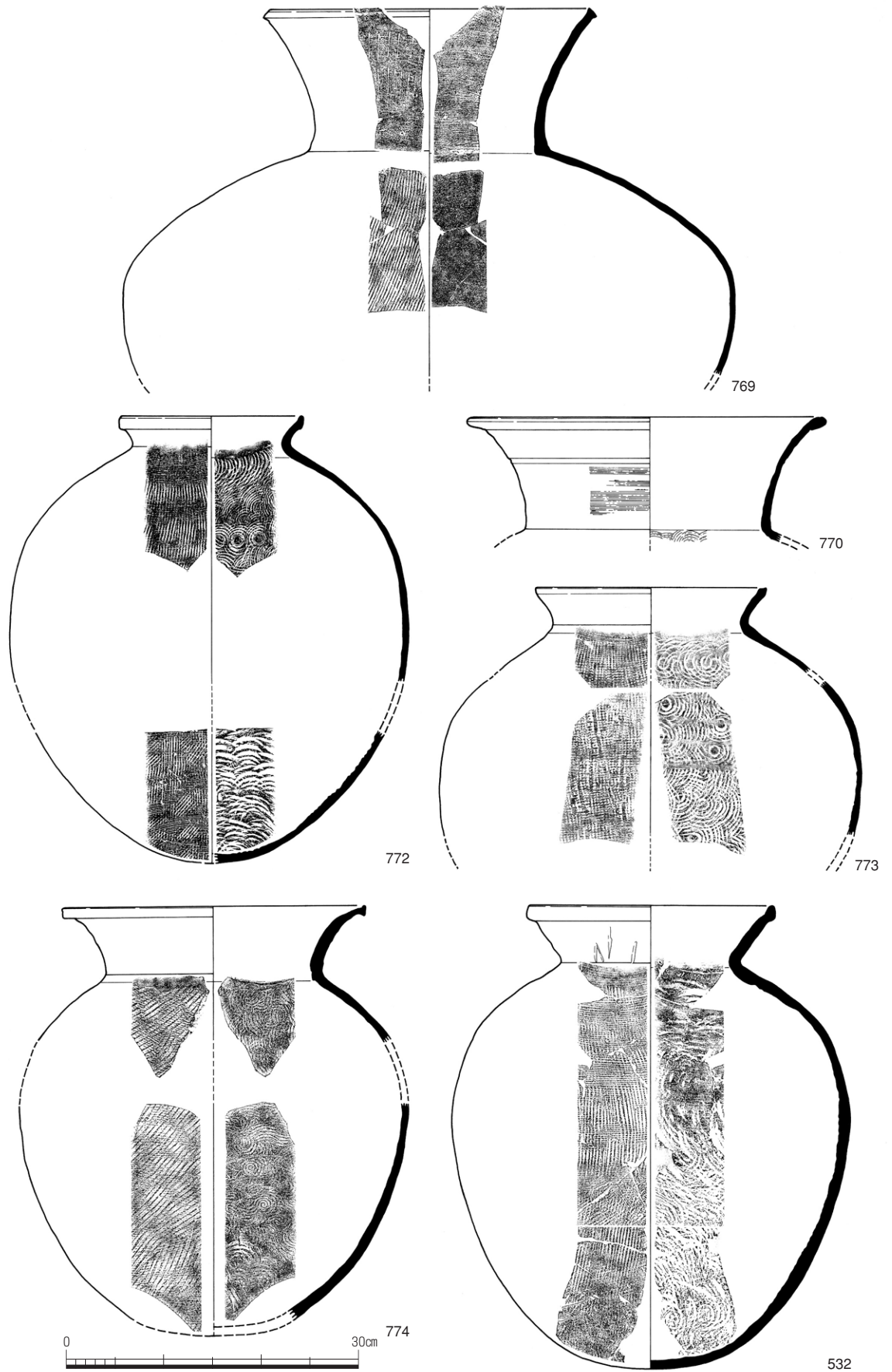


Fig. 35 南北溝SD1110出土須恵器甕 1:6

右斜交の細刻で粗い平行文叩き目で、左上から右下へ流れるように見え、内面は細くて粗い同心円文を浅く刻んだ当て具痕で、当て面は広く平坦。淡青色を呈する微砂質の胎土が、774などに類似する美濃須衛窯の製品。堰SX1111近くの最上層出土。

美濃須衛窯

甕A(776)は丸い頸部から直線的に開く口縁部の端部を上方に三角形につまみ出す。口径24.8cmで口縁部内面に「|」のヘラ記号をもつ。断面が紫色で外表が暗灰色を呈する微砂質の胎土で陶邑窯産であろう。堰SX1111以南の最下層出土。甕A(777)は外反する長めの口頸部で、口縁端部が上内方に突出して外側に面をもつ。口径21.4cm。頸径18.3cm。体部外面は左斜交で細刻の平行文叩き目ののちカキ目を密に施し、内面は幅広く密で深い刻みの同心円文当て具痕。外表が暗青灰色で断面が暗紫色を呈する微砂質の胎土が776と類似する。堰以北の木屑層と石組方形池SG1100の上層から出土。甕A(778・779)は口縁端部が上方へ突出し外側に面をもつ。778はSD1108と堰南の中層から出土し、口径19.4cm、頸径16.3cm。撫で肩の体部外面は、細刻で密な平行文叩き目ののちに条の細かなカキ目を施し、内面は中央が大きく幅広い刻みの同心円文当て具痕。青灰色を呈し微砂を多く含む胎土。779も撫で肩の体部であるが、胎土・色調および外面の叩き目や内面の当て具痕が、甕A(774)に類似する美濃須衛窯産。当て具の渦巻き文は、遺存部分では確認できず、口径22.1cm、頸径15.3cmと一回り小型の別個体である。南の最下層出土で、体部片はSX1220炭層1からも出土。

甕 C

甕C(780)は、広い頸部から外反する口縁部で、端部が玉縁状に肥厚する。外面は細刻の平行文叩き目ののちに条の広いカキ目を密に施し、内面は幅広く密な刻みの同心円文当て具痕。当て具の年輪の芯と刻みの中心が一致しないために刻みの縁辺が毛羽立つ特徴をもつ。口径38cm、頸径33.1cm、推定体部径約45cm。南の上層出土。甕C(781)は短く外反する口縁部の端部が外肥厚し、丸みのある体部と尖り気味の底部をもつ珍しい器形。体部外面は細かな木目に直交する細刻の平行文叩き目ののち、体部中位に2条一組の凹線を2組巡らし、内面は小さな円形の傷がある無刻の当て具痕を、ヘラケズリ状の条痕が残るナデ調整を斜めに施してかき消す。灰色を呈するきめの細かな胎土で、外面には釉薬状の降灰が著しく、東海地方の製品とみられる。口径46cm、体部径48.4cm、器高32.7cm。内外面の調整と色調・降灰などが特徴的で、堰SX1111以北の木屑層と石組方形池SG1100に加えて、石組排水路SD1101および飛鳥池東方遺跡のSD1700(後期流路)への拡散が確認できる。

東海地方産

甕C(782・783)は、直立する口縁の端部が内外に肥厚し上方に面をつくる一般的な形態である。782は体部外面を粗い木目に直交する幅広い刻みの平行文叩き目、内面は無刻の当て具痕を縦横にナデ消して平滑に仕上げる。口径40.0cm、頸径38.5cm。淡灰色を呈する微砂質の胎土で、東海地方産とみられる。堰以北の下層から出土した。783は体部外面を細刻の平行文叩き目ののちにナデ調整、内面は小さな傷をもつ無刻の当て具痕の輪郭のみが残る。外表が暗灰色で断面が茶色を呈する微砂を多く含む胎土で、口径38.6cm。南の上層出土。甕C(784)は、短く外傾する口頸部で口縁端部は内肥厚して内傾面をつくる。体部外面は細く粗い刻みの平行文叩き目を叩き締め円弧を描いて施したのち、均一な木目のカキ目調整を粗く施す。内面上半は無刻で細かな年輪が浮き出した当て具痕をナデ消して平滑に仕上げ、下半の当て具には小さな傷がみられる。外表が黒灰色で断面が白色を呈する微砂質の精良土。口径43.5cm、頸径39.5cm、体部径53.3cm。東海地方の製品とみられる。

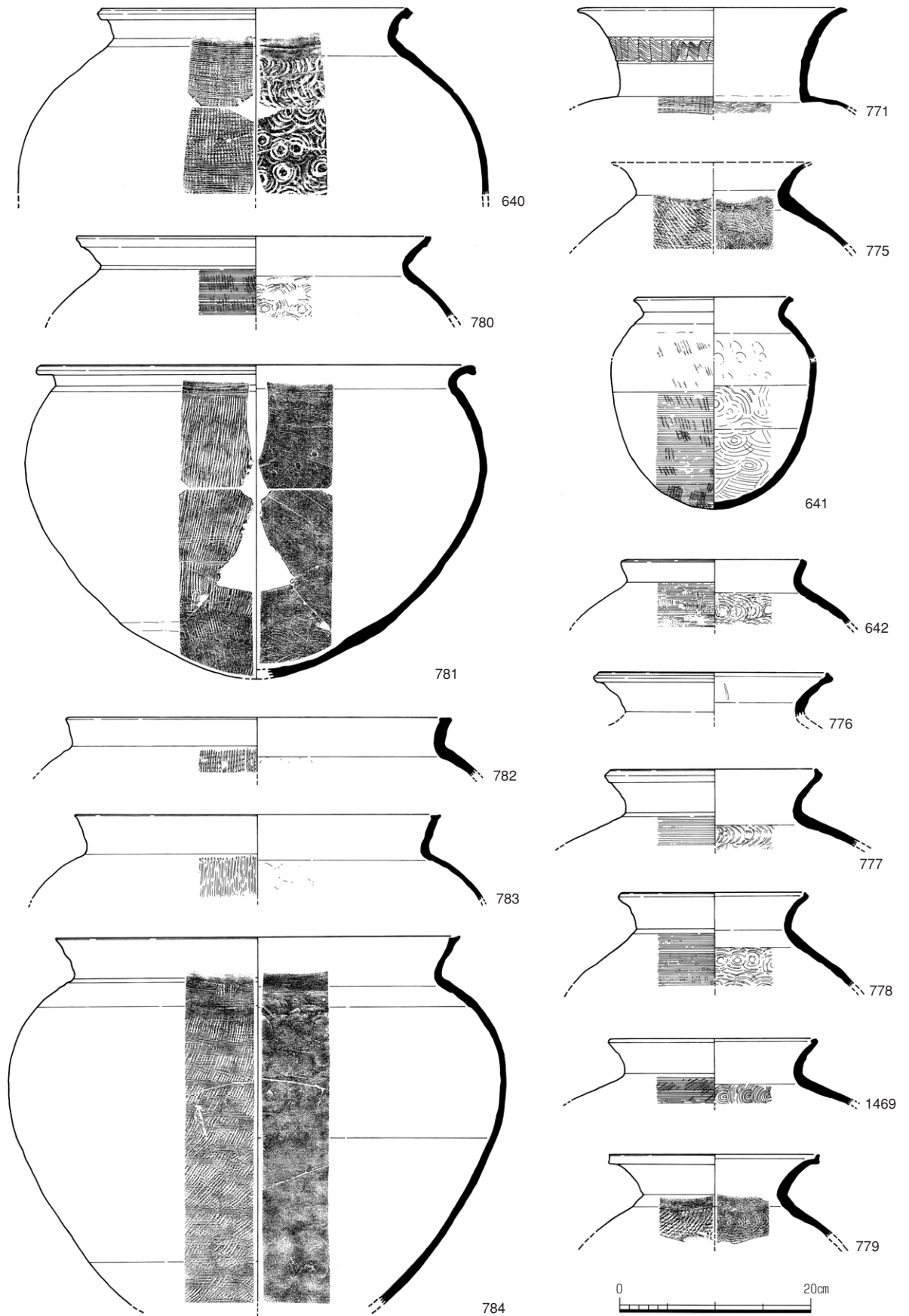


Fig. 36 南北溝SD1110ほか出土須恵器甕A・C 1:6

甕

B 甕 B (785) は、内傾気味に直立する口縁の端部を丸く収め、丸い肩部に4つの円環状把手を付す。外面はカキ目を密に施し、内面は幅広い刻みの密な同心円文当て具痕。黒色粒子を多く含む微砂質土で暗灰色を呈し、肩部外面に著しい降灰がある。口径13.4cm、体部径34.5cm。甕 B (786) は、外傾気味で端部が内肥厚する口縁で、肩部にボタン状の浮文をもつ。外面は密な平行文叩き目ののち上半部に条の細かなカキ目を密に施す。内面は幅広く密な刻みの同心円文当て具痕。灰色を呈し微砂を多く含む胎土で、口径14.6cm。体部径30.4cm。南北溝SD1110南部の最上層とSX1220炭層1に破片がある。

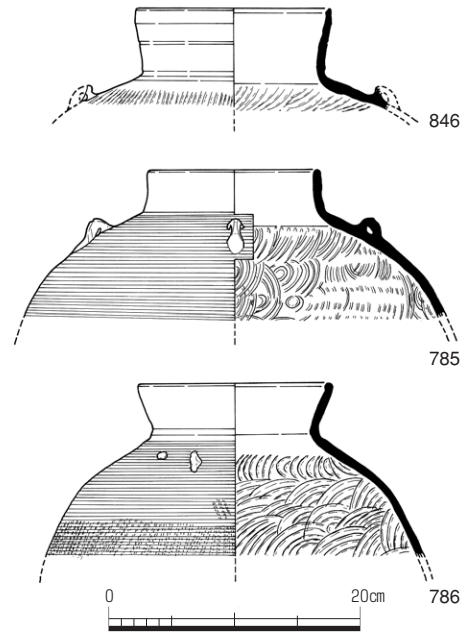


Fig. 37 SD1110ほか出土須恵器甕B 1:6

須恵器甕 (787~793) は、内外面の調整技法を示した (PL. 249~251)。甕 (787) は短く外反

する口縁の端部に内傾面をもつ甕C形で、体部中程に角状の大きな把手がつく。内面の当て具は中央に10本の細長い線を放射状に刻んだ特徴的な車輪文 (PL. 249) で、周りを囲む細く密な刻みの同心円文部には放射状のヒビや彫り込みの際の傷がある。外面は幅が一定しない細刻で粗い平行文叩き目で、体部には条の細かなカキ目を、底部には条の広い浅いカキ目を施す。断面が淡褐色、外表が暗灰色を呈し微砂質の精良土。細長い10本の放射状刻みをもつ車輪文当て具痕は、陶邑TG64号窯²⁸⁾のほか備前邑久窯等にも類例がある。口径約27cm、推定体部径約38cm。堰以南の下層出土でSK1126・SD1103などにも破片がある。甕A (PL. 250-788) は体部外面に細かな刻みの平行文叩き目、内面に幅広い同心円を密に浅く刻んだ当て具痕。外面にかかる著しい降灰が流れたし、灰色で白色土の縞を含む微砂質土で、東海地方の製品とみられる。大半の破片がSD1110の南最下層出土だが、頸部片がSX1222の粗炭層にあり、炭層3相当の甕と推定される。甕A (PL. 250-789) は、外傾する口頸部で口縁端部は丸く収める。口径約24cm。体部外面は細い溝を深く密に刻んだ平行文叩き目ののちに条の広いカキ目を施し、内面は小芯で細刻の粗い同心円文当て具痕。黒色を呈し、砂粒の多い粗い胎土。南の最下層出土。

甕A (PL. 250-790) は、緩やかに外反する口縁部の端部外面が玉縁状に肥厚する。肩部外面に厚く降灰がかかり、体部外面は細刻の平行文叩き目ののちカキ目を粗く施し、内面は体部上半に細刻の同心円文、下半に弧状の平行文の当て具痕が残り、上半の同心円文当て具には中央にひび割れがある。外表が黒色を呈すきめの細かい精良土で、平行文の当て具痕は、弧状をなす点で後述の845や美濃須衛10号窯例とは異なる。SD1108およびSD1110上層出土。

甕 (PL. 251-791) は、短く外反する広い口頸部で、口縁端部を丸く収めた甕Cとみられる。体部外面は不均一で疎らな刻みの平行文叩き目で、内面は中心部を含めて幅広く密な刻みの同心円文当て具痕が残る。端部の形状が類似する甕C (643・878) とは、それらが内面の当て具痕をナゲ消す点で異なり、本例は中国地方産の可能性はある。北の木屑層出土の小片のほかは、SD1080にまで拡散する。甕A (PL. 251-792) は、撫で肩で卵形の体部をもち、短く外反する口

特徴的な
車輪文

縁の端部が玉縁状に肥厚する。体部外面は、幅が揃いな細刻の平行文に大きな「×」形の刻みを加えた特異な叩き目で、体部全体に6条の細い凹線文を巡らす。内面は幅広く均一で密な同心円文当て具痕。暗灰色で微砂質の胎土。破片が西の谷の炭層2やSD1130からも出土し、本来はSD1130以前に属するものである。甕A (PL. 251-793) は、体部内面上半に、小さな中央部に刻んだ不均等な配置の4弁の星形を幅広く粗い同心円文で囲んだ車輪文当て具痕、下半に細刻で深い同心円文当て具痕をもつ。外面は細刻で浅い平行文叩き目のちカキ目調整。青灰色で砂混じりの粗い胎土。SD1108出土であるが、破片は水溜SX1226上の茶土等からも出土しており、水溜遺構の初期段階に南地区で廃棄されたとみられる。

特異な
叩き目4弁の
車輪文

南北溝SD1110周辺包含層出土土器 (Fig. 38・39-730~768, PL. 228・229・239)

SD1110の北方からSG1100の西方周辺は谷の最深部にあたり、その上部の包含層(緑灰土など)や「大土坑」として検出した窪みなどから出土した多量の土師器・須恵器には、SD1110・SG1100の廃絶およびその後と関わる奈良時代前半の土器に混じって、SD1130、SD1110、炭層・水溜遺構出土土器と類似するものが含まれている。ここでは、SD1110など出土土器を補足する資料として抽出して報告する。なお、土師器730~732、須恵器743・747~749・755・757・760・762・799は、後述の墨書土器83~85・88・108などととも、SG1100西南壁を壊し、かつ完全に覆い隠す埋立土である「緑灰土」からの出土土器であり、これらが埋没した段階には水溜遺構からSG1100へ向かう導水路としてのSD1110はすでに機能していない。

SD1110
廃絶時

土師器 杯A、杯B、杯B蓋、杯G、杯D、皿A、皿B、皿G、椀Bなどがある。

杯A (730・731) はa1手法で、径高指数が21前後と器高が低く、奈良時代に降る資料である。杯AI (730) は口縁部内面に2段の放射暗文、底部にラセン暗文を施し、口径18.2cm、器高3.8cmに復元される。杯AⅢ (731) の口縁部内面には1段放射暗文と連弧暗文が施され、底部にはラセン暗文があり、外面のヘラミガキが粗い。口径11.6cm、器高2.5cmに復元される。杯BI (733) はa1手法で、垂れ気味の底部、内屈する口縁端部が異例である。基部の幅が広い高台をもつ。口径20.6cm、器高6.3cm、径高指数31。淡橙色で赤色粒子を多く含み、内面は2段放射暗文とみられる。杯B蓋 (732) は、外縁が弧を描く平坦な頂部で、口縁端部をわずかに肥厚させる。口径20.6cmで、外面は頂部を4分割、外縁を5分割のヘラミガキ、内面に粗いラセン暗文を施す。淡茶色で赤色粒子を少し含む。

奈良時代の
杯 A

杯G (734~737) には小径で浅いもの(734~736)とやや大径で深いもの(737)があり、前者は口径9.8~11.3cm、器高2.3~3.0cm。後者は口径12.7cm、器高3.4cmで杯Gcにあたる。736のほかに外面に粘土紐の継ぎ目を残す。いずれも口縁部内外面や底部内面に灯明痕をもつが、口縁端部、胎土、色調は多様である。杯D (738) は平底で、内彎する口縁の端部を丸く内肥厚させる。外面のヘラミガキの有無は不明。口径14.1cm、器高4.6cm。

皿A (739) はbo手法で、直線的に開く口縁の端部を丸く内肥厚させ、1段の放射暗文を口縁端部まで施す。赤褐色を呈す精良土で、口径21.4cm、器高2.5cm。皿G (740) は平坦な底部外面に粘土紐継ぎ目を残すa0手法で、斜めに大きく開く口縁の端部を丸く収め、内面に暗文をもたない。淡褐色を呈し微砂や雲母片を含む胎土で、内面に炭化物の汚れがある。口径29.4cm、器高3.9cm。SD1130出土の581よりも口径が大きく、径高指数が小さい。椀B (741) は腰部が丸く深い器形の僅少な器種で、肉厚な口縁部の上部内側を薄くし口縁の端部を丸く収める。b1手法

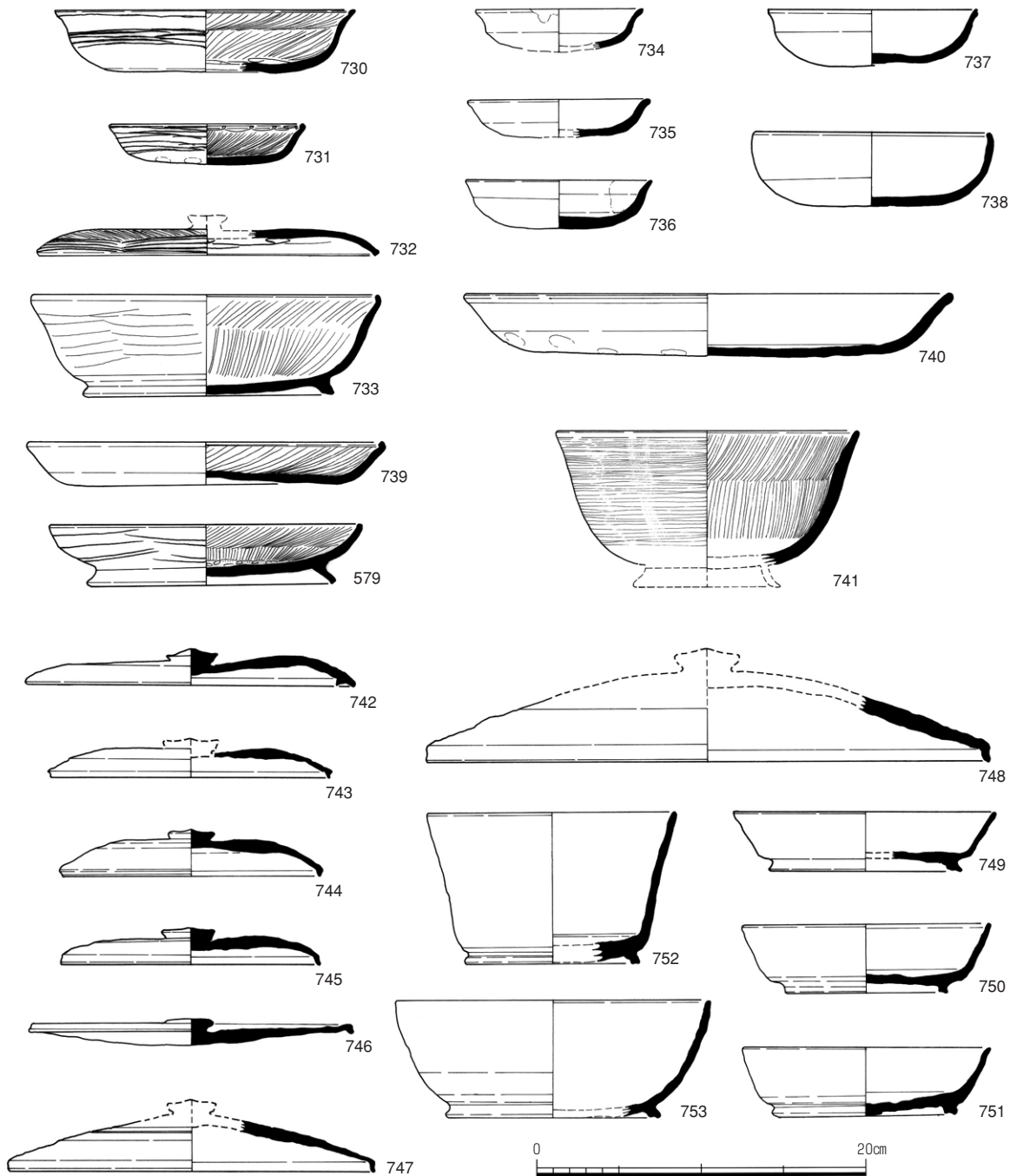


Fig. 38 南北溝SD1110周辺包含層出土土器(1) 1:4

の底部に高台貼り付け時のナデ調整が残る。口縁部外面のヘラミガキと内面の2段放射暗文が細密で飛鳥Ⅳ以前に属す可能性がある。橙褐色で微砂質の精良土。口径18.2cm、残存高8.1cm。

SD1130の
皿 B

なお、皿B(579)は前述のように、SD1130に出自をもつとみられる個体で、垂れ気味の底部から内彎気味に開き、口縁端部は小さく内肥厚する。ヘラミガキが粗いがb1手法で、底部のラセン暗文と上段の幅広い2段放射暗文が極めて細密で、飛鳥Ⅳに属するとみられる。

須恵器 杯A、杯B、杯蓋、皿蓋、椀B、椀C、杯G、杯H、皿A、盤A、鉢A、鉢X、壺A蓋、平瓶および甕類がある。

杯蓋にはa類(742)と、b類(743~747)があり、b類が多量で多様である。742は口径18.6

cmほどの杯類にかぶる蓋で、外周寄りにつく基部の厚いかえりが特徴的。ロクロケズリ（R）調整の頂部に大振りで高いつまみがつき、淡青灰色で白土と黒色粒子を多く含む。b類のうち、745は屈曲する口縁端部がやや長い外傾面をなし、つまみは大振りで、飛鳥Vに属す。口径15.6cm。器高2.5cm。743・744は内傾面をなす口縁端部でつまみは小さく、奈良時代に降る可能性がある。ともに頂部をロクロケズリ（R）し、淡青灰色で黒色粒子を多く含む。口径15.6～16.8cm。器高2.8cm。746は厚い頂部中央が口縁部よりも垂れ下がる扁平な器形で、薄い口縁の端部が三角形に肥厚する。頂部の大半をロクロケズリ（R）し、上面が平坦で縁部が丸いつまみがつく。口径19.6cm、器高1.6cm。747は山形をなす厚手の頂部で、屈曲する薄い口縁部はやや長い外傾面をなす。ロクロケズリ（L）調整の頂部上半に2条の凹線が巡り、淡茶灰色を呈す。748は口径34.0cmで大型の皿類の蓋とみられ、頂部外面をロクロケズリ（R）し、口縁端部を下方へ屈曲する。器形から747・748は東海地方産とみられ、748は淡灰色で砂質の胎土から美濃須衛窯産とみられる。

奈良時代の
可能性

杯B（749～751）は口径14.8～15.8cm、器高4.2～3.7cm。749はロクロケズリした底部外面に、基部が厚く端部が外肥厚する高台がつく。底部へラ切り不調整の750・751の高台は角形で底部の内寄りにつく。いずれも飛鳥Vに属すとみられる。椀B（752）は直立気味に開く薄い口縁部と厚い器壁の底部とからなり、ロクロケズリ（R）した丸みのある底部外縁に踏ん張り気味の高台がつく。口径15.0cm、器高9.2cm。銅鏡形の椀C（753）は、内彎気味に開く薄い口縁の端部を丸く収め、ロクロケズリした底部外縁につく高台は、下面が凹面をなして外肥厚する。外面が暗茶色、内面が青灰色を呈する東海地方産。口径19.0cm、器高7.2cm。

杯A（754）は外面をロクロケズリ（R）した丸みのある底部と、内彎気味に開く薄い口縁部からなる。口縁部の内外面が降灰のある淡青灰色、底部内外面が明茶色を呈する同一器形重ね焼きの無蓋（Ac類）で東海地方産。口径15.8cm、器高4.5cm。杯A（755）はロクロケズリの平底から直線的に開き、口縁端部は薄く尖る。淡灰色を呈する口縁部外面に降灰があり、口縁端部が摩耗する有蓋の杯Ag類。口径15.0cm、器高4.0cm。杯A（756）はロクロケズリした平坦な底部から直線的な口縁部が斜外方にのび、口縁部外面が青灰色で内面と底部外面が赤味をおびる有蓋の杯Ag類。口径13.2cm、器高5.1cm、径高指数39。底部外面に半円弧を3つ組み合わせたへラ記号をもち、胎土、色調からは尾北窯の製品とみられる。

杯Gと杯Hはともに、後述の工房下層包含層（灰緑色粘砂層）等に起源のあるもの。杯Gには小さな平底で腰部が丸い757と、平底で直立気味に立ち上がる758とがあるが、ともに底部外面はへラ切り（R）不調整。口径8.9～9.6cm、器高3.2～3.6cm。これらにかぶる杯G蓋は小片で図化し得ない。杯H（759）は外面がへラ切り（R）不調整の丸い底部で、内面のロクロ目を多方向のナデ調整で消す。口縁部、受け部ともに器壁が薄く端部は丸い。受け部径11.8cm、口径9.6cm、器高4.0cm。淡青灰色で微砂質土。

下層起源の
土器

皿A（760・761）と盤A（762）は、いずれも外面をロクロケズリ（R）した底部が丸く垂れ下がる。底部外縁に稜をもつ760は内彎する口縁の端部が内傾面をなす。底部内面は多方向のナデ調整。淡茶色を呈し白土や黒色粒子を多く含む東海地方産。口径31.8cm、残存高3.8cm。底部外縁が丸い761は口縁端部が細く尖る。淡青灰色を呈する非東海産で、底部内面が使用により摩滅する。口径28.8cm、器高4.5cm。盤A（762）は口縁端部が外肥厚して上方に面をもつ。底部

使用痕

内面に当て具痕の凹凸が残り、口縁部外面に鉄釉を塗布した条痕がある。暗灰色を呈し断面は暗紫色、内面に薄い降灰がある。尾張猿投窯産とみられる。口径28.2cm、器高6.5cm。

鉢A (763・764) には多様なものがある。763は断面半球形をなす体部の中程に1条の凹線を巡らせ、体部下1/3と平らな底部をロクロケズリ(L)する。口縁部は外側を強くなでて小さな段をつくる程度にわずかに内彎する。口縁部外面から中央部を除く内面が厚い降灰のかかる淡灰色で、外面が茶灰色を呈する東海地方産。口径20.6cm、器高9.2cm。764は体部上方で内屈し、直線的にのびる口縁の端部がにぶい内傾面をなす。底部外面は「板起こし技法」による不調整で、体部外面は下半をロクロケズリ(R)するが、内面は多方向のナデ調整。体部中程に重ね

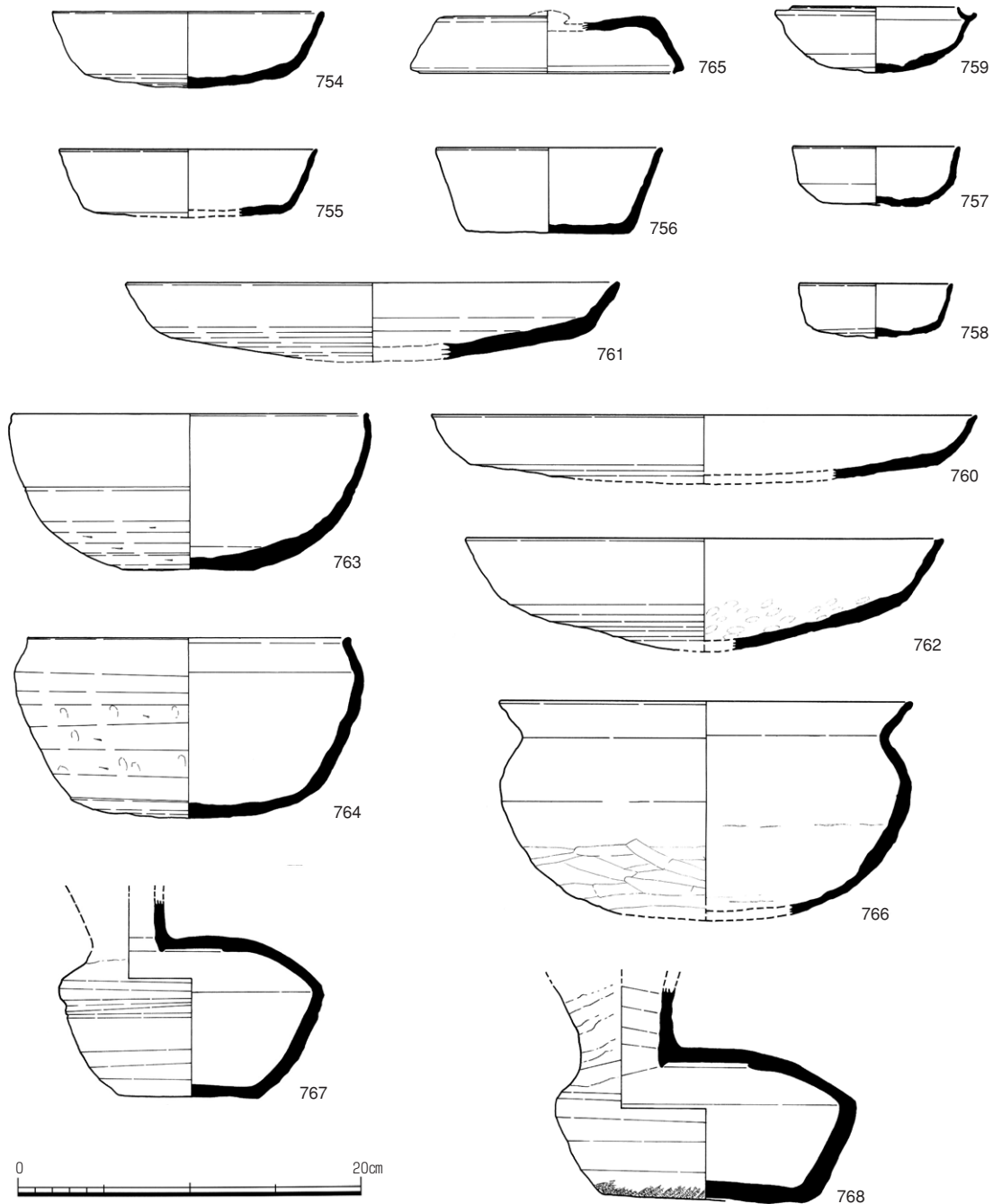


Fig. 39 南北溝SD1110周辺包含層出土土器 (2) 1:4

焼きに起因する凹みが周回する。淡灰色で微砂質の胎土に含まれる黒色粒子がケズリやナデで流れる特徴が大阪陶器窯産に通じる。口径18.7cm、器高10.6cm。

壺A蓋(765)はハの字に開く口縁の端部を内側に折り返し細く尖らせる。青灰色で外面全面の厚い降灰が釉状をなす。口径16.0cm、残存高3.4cm。

鉢(766)は広口の甕Cに類似するが、端部を丸く収めた口縁が外反し、体部下半が浅く丸底である点が異なり、土師器鍋類に通じる特徴をもつ。粘土紐を巻き上げて成形した底部の外面を軽くヘラケズリし、内面に粘土紐継ぎ目が残る。体部上半は淡青灰色で降灰があり、内面と体部下半が淡灰色を呈し微砂質の胎土。口径・体部径23.9cm、器高12.9cm。

鍋形の鉢

平瓶(767・768)はともに細頸の口縁上部を欠く以外は完存する個体で、図の体部内面は推定である。丸く弧を描く体部上半、鈍い稜をなす肩部、板起し技法による平らな底部からなり、体部外側面下半をロクロケズリ(R)、体部上面に厚い降灰がかかる。体部高はほぼ同高(9.0~9.5cm)で、体部径15.8cmの767には肩部の下に凹線が1周半巡り、体部径17.8cmの768の体部最下には平行文叩き目が削り残される。現状では内面に漆の付着はない。平瓶にはほかに、体部径9.0cmで上面が平坦なものがあるが、提梁をもつものはない。

甕類には、甕A(794~798)と甕C(799)がある。甕A(794)は、丸い頸部から口縁部が短く外反し、端部を三角形に肥厚させる。体部外面は細刻で密な平行文叩き目と条の細かなカキ目、内面は幅広い同心円文を粗く刻む当て具痕。口径19.4cm、頸径15.8cm、推定体部径約36cm。断面が赤紫色で外表は青灰色を呈し、陶器窯産の可能性があり、体部各所に火膨れがある。破片の一部が北地区の東西棟建物SB1134の柱穴から出土。甕A(795)は、直立気味に開くやや長い口縁部で、端部を上方につまみ出し外方に小さな面をつくる。外面は細刻で深い平行文叩き目ののち、粗い木目のカキ目を体部上半は密に、下半は粗く施す。カキ目の回転方向は体部の下1/3を境に逆転する。内面は幅広く深い同心円文を密に刻んだ当て具痕で、底部は当て具側縁部の円弧文。口径21.4cm、頸径17.8cm。体部径は約36cmで器高も約36cmに復元される。淡青灰色で微砂質土。甕A(796)も、端部を上方につまみ出し外方に面をつくる口縁部であるが、斜めに大きく開き、頸部外面に「V」字形のヘラ記号をもつ。破片が南地区の水溜SX1222の炭層にもある。外面は粗い木目に直交する細刻で粗い平行文叩き目で、内面は細かく深い刻みの同心円文当て具痕。暗灰色で白土を含む精良土。口径23.0cm、頸径16.5cm。

甕A(797)は大きく開いた口縁の端部を外方へ折り返し、外側に丸い面をつくる。体部外面は細刻で粗い平行文叩き目、内面は無刻もしくは細く粗い同心円文をごく浅く刻んだ当て具痕。体部外面に緑色に発色する鉄釉がかかり、尾張猿投窯の製品とみられるが、当て具痕は尾北高蔵寺2号窯例にも類似する。口径31.8cm、頸径21.1cm。甕A(798)は外傾気味に大きく開き、上方に面をもつ口縁部で、口径35.4cm、頸径25.8cm、頸高6.9cm。外面はごく細い刻みの平行文叩き目で、太く浮き出た木目が横位の平行文にみえる。内面は無刻でかすかに年輪が浮き出す当て具痕。黒色粒子を多く含む微砂質の胎土から美濃須衛窯の製品とみられる。甕C(799)は直立する短い口縁の端部上方に内傾面をもつ。体部外面は広い木目の板に幅広く密な平行文を浅く刻んだ叩き目。内面は無刻でかすかに浮き出した年輪による同心円文状当て具痕をナデ消して平滑に整える。口径39.2cm、頸径37.5cm、頸高4.5cm、体部径49.8cm。白色を呈し砂質の粗い胎土で東海地方産とみられ、内面に茶褐色の汚れがつく。

尾張猿投窯
の
甕

iii 道路南側溝SD1080出土土器 (Fig. 40~42-800~846, PL. 229)

飛鳥寺南面大垣SA1060に沿う道路SF1070南側溝にあたり、橋状遺構SX1082以西では、南岸に石組の護岸を備え、石組井戸SE1090からの排水は石組溝SD1093、および暗渠SD1094を経てSD1080に注ぐ。飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器を主体とし、平城宮土器Ⅲまでの土器が含まれる。

土師器 器種には杯A、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、鉢B、甕A、鍋などがある。全体に器面の遺存状況が悪く、暗文・調整など確認しがたい点がある。

杯AI (800) はb1手法で、口縁端部が丸く内肥厚する。上段の放射暗文が長く、口径17.3cm、器高5.2cm、径高指数30で、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。なお、石敷井戸SE1090からのびる石組溝SD1093との接続部の上層から出土した土師器杯A (Fig. 53-1011) は、粗いヘラミガキのb1手法で1段放射暗文をもち、平城宮土器Ⅲに属するもので、溝存続の下限を示す。杯Cには小さな平底で、口縁上部が内屈し、端部が小さく内肥厚して内側が凹線状をなすもの (a類: 801) と、平底から弧を描いて開く口縁の端部に鈍い内傾面をもつもの (b類: 804) があり、ほかに、杯CI (802) のように丸底気味の底部を軽くヘラケズリし、口縁端部を小さく外反させて内傾面をつくるもの (c類) がある。杯CⅢ (801) は口径13.7cm、器高3.7cm、径高指数27で飛鳥Ⅲに属し、内面のラセン暗文と1段放射暗文がわずかに残る。杯CI (802) は口径18.8cm、器高4.4cm、径高指数23。細砂質の胎土がc類に特徴的である。杯CⅢ (804) は口径13.8cm、器高3.3cm、径高指数24。後2者はともに器表が荒れて暗文の有無は明らかでない。

溝の下限は
平城宮土器Ⅲ

杯GI (803) は口径16.1cm、器高4.0cm、径高指数25で、法量は杯CI (802) と類似するが、口縁部のヨコナデが強く、底部は不調整のまま凹凸が著しく、暗文、ヘラミガキは施さない。杯GⅢ (805・806) はともに口径10cm余りで、灯明痕をもつが、平底気味で口縁端部が外反する杯Ga類 (805) と、丸底気味で口縁に内傾面をもつ杯Gb類 (806) とでは胎土・色調が異なる。杯HⅡ (807) は口径14.0cm、器高3.5cm。赤色粒子を多く含む胎土が特徴的。

皿AI (808・809) はともにa0手法。808は平らな底部と直線的に開く短い口縁部からなり、口縁端部は内側に肥厚させて上方に面をもち、底部外面に木葉痕が、内面にラセン暗文と放射暗文が明瞭に残る。口径23.6cm、器高1.7cm、径高指数7と極めて浅く、奈良時代に降る可能性が高い。809は内彎気味の口縁部で、口縁端部を巻き込むように肥厚させる。口径21.8cm、器高2.4cm、径高指数11。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。皿BI (810) は口縁部を強くヨコナデし、口縁端部内側を小さくつまみだして外傾する面をつくる。口径31.0cm、器高6.0cm、径高指数19で、杯Gc類の胎土・色調に類似し、暗文は施されていない可能性がある。鉢B (811) は口縁近くで小さく内屈し、端部を内側に肥厚させて上方に鈍い面をつくる。口縁部外面をヘラミガキし、内面に暗文は施さないであろう。口径21.0cm、器高7.4cm。

甕A (812・813) はともに「大和A型」の調整手法。812は口径24.4cmの大型で、把手をもつ甕BIの可能性が高い。口縁端部の上下への肥厚と外傾する面が大きく、飛鳥Ⅴ以降に属するとみられる。813は口径14.1cmの小型で、外彎する口縁部の先端を小さく肥厚させ、口縁内面は横ハケ目調整をナデ消す。飛鳥Ⅴ以降に属する可能性がある。

鍋 (814~817) は、大小、浅深と多様である。鍋A (814) は口径31.2cmで体部が深く、外彎する口縁の端部を上下に肥厚させて外方に面をもつ。「大和A型」の調整手法で体部下半に二次

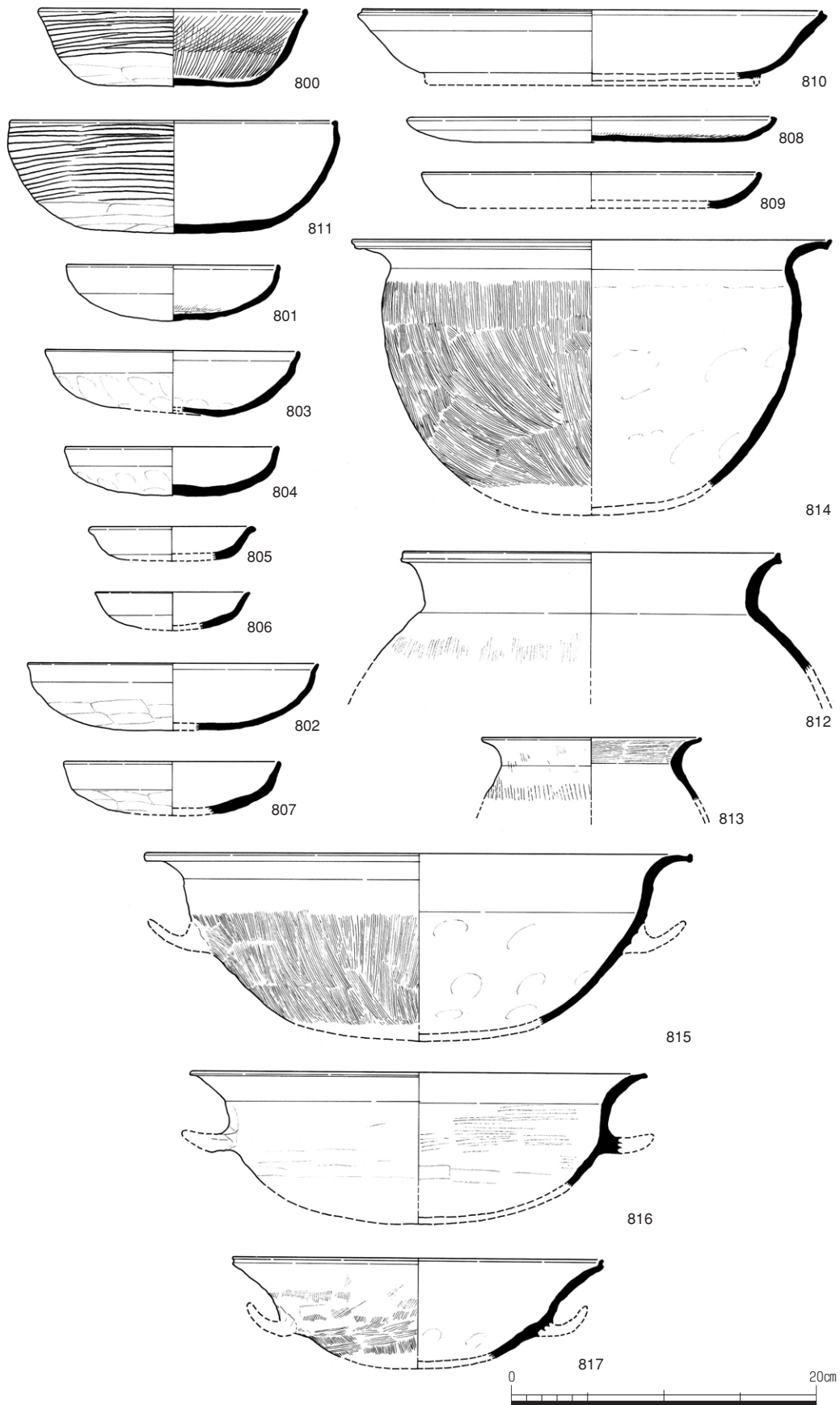


Fig. 40 道路南側溝SD1080出土土器 (1) 1:4

ハケ目を施す。鍋Bには法量で鍋BI (815・816) と鍋BII (817) がある。815は「大和A型」の調整手法で、把手より下部に二次ハケ目を施し上部はナデ調整。口径35.5cm。なお、814と815は鍋BIの浅深の別である可能性がある。816は体部外面にかすかな縦ハケ目、内面にかすかな横ハケ目を施し、口縁端部を丸く収める「大和B型」の調整手法で茶褐色の胎土。口径29.6cmで、把手は肉厚である。鍋BII (817) は体部と口縁部の境目が不明瞭で、口縁端部は大きく上方へ肥厚する。「大和A型」の調整手法で、把手よりも下部に二次ハケ目を施す。口径24.0cm、器高7.2cm。橙褐色。口縁端部の大きな肥厚は新しい様相であろう。

須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、杯G、椀A、椀B、蓋X、高杯、鉢A、壺A、壺L、水瓶、甕などがあり、蹄脚円面硯 (Fig. 100-110)、漆附着土器杯A (PL. 388-24・25) がある。

杯Aには口径15cm内外のAIII (828・829) と口径12～13cmのAIV (827) および口径12cm未満のAVがある。AIIIには底部ヘラ切り不調整で腰の丸いAc (829) と底部外面がロクロケズリで内底が屈曲するAg (828) がある。829は口縁端部が小さく外反し、降灰の様子からも無蓋であるのに対して、828は有蓋で口縁端部に内傾する小さな面をつくる。829は径5mm程の長石類と微細な白色砂を多く含む胎土が特徴的。AIV (827) は、丸い腰と外傾する口縁部をもつAc類で、腰以下をロクロケズリで平底に仕上げ、薄い口縁端部が小さく外反する。降灰の様子からも無蓋とみられる。杯AVには漆附着土器 (PL. 388-24・25) がある。丸底気味 (24) と平底気味 (25) の違いがあるが、ともに底部外面ヘラ切り不調整で、降灰の様子から無蓋。いずれにも灯明痕跡がある。

杯B蓋にはa類 (818～822) とb類 (823～826) がある。a類のうち、818は肉厚で山形の頂部に宝珠つまみがつき、薄いかえりが強く外彎して口縁部よりも下方にのびる。壺類の蓋の可能性もある。また、819は扁平な頂部から水平にのびる薄い口縁で、端部は丸く収め、かえりが口縁よりも下方に突出する。断面が赤褐色を呈し、白色砂を多く含む胎土で東海地方産の椀類の蓋とみられる。820は低い笠形の頂部に大振り高い宝珠形つまみがつき、かえりは細く小さい。頂部が肉厚で丸い山形の822や、扁平な頂部で口縁部が屈折気味の821を含めて、いずれも飛鳥III～IVに属する口径14cm程度の杯Bにかぶる蓋である。b類には、扁平な頂部に中央が凹むつまみを付したもの (825) や口縁近くで段をなして薄く斜めに開く傘形 (824・826)、狭い頂部の山形 (823) などがあり、823は形態、胎土、色調から東海地方の産品である。

椀Aには平底で内底部が角張り、底部外面ロクロケズリのもの (830) と底部外面ヘラ切り不調整で内底部の丸いもの (831) がある。830は口径16.0cmの有蓋、831は口径16.6cmの無蓋。椀Bには口径19.0cm、器高8.7cmの椀BI (832) と口径12cm代の椀BIV (833) がある。832は外面をロクロケズリした底部が垂れ、外方に踏ん張る高台を付す。833は底部外面ロクロケズリ (R) の箱形で、断面三角形に近い高台がつき、飛鳥Vに属す東海地方の産品とみられる。

蓋X (834) は杯Aに類似した形態であるが、外面全面に著しい自然釉がかかり、口縁端部下端に面をもつことから、壺類の蓋と考えられる。口径17.6cm、器高4.6cm。口縁部が外方へ屈曲し先端を下方へ折り曲げた蓋X (835) は肩部をロクロケズリで仕上げる。銅鏡模倣形の椀C類の蓋であろう。口径18.4cm。色調から東海地方の産品とみられる。高杯 (836) は内面をロクロナデで平滑に整え、外面をロクロケズリで仕上げた平らな杯部にラッパ形の脚をつける。脚端は蓋b類と同様に小さく折り返す。脚径10.0cm。淡黄色を呈し東海地方の産品の可能性がある。

灯明痕跡

東海地方
の産品

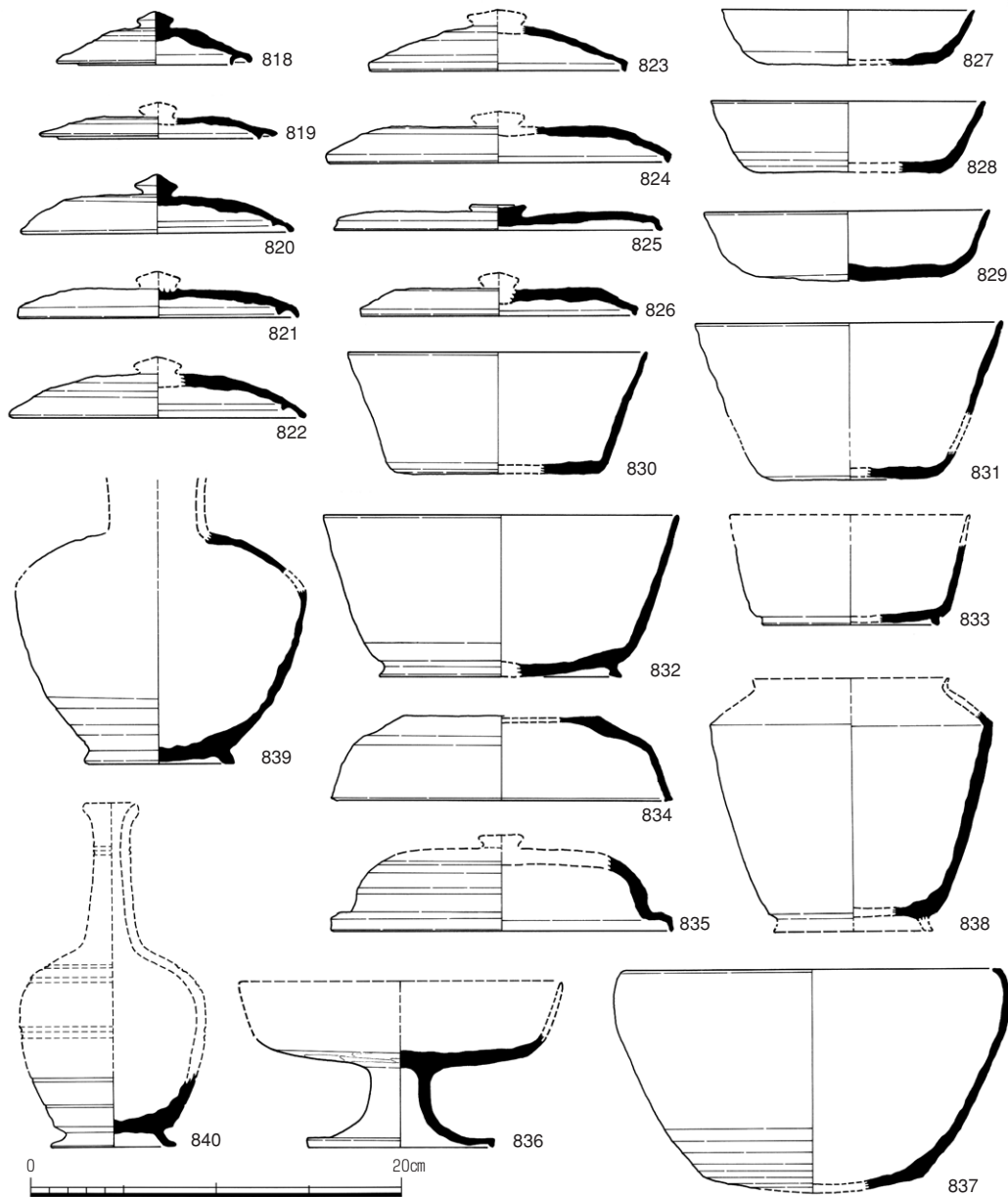


Fig. 41 道路南側溝SD1080出土土器(2) 1:4

鉢A(837)は口縁部付近で内彎し、口縁端部は内側に肥厚させ上方に面をもつ。体部下半が直線的な形態は、SD1130出土例など全体に内彎する形態よりも新しい様相で、飛鳥Vに属すると思われる。壺B(838)は肩部が鋭く屈曲する深手の短頸壺で、底部外縁の高台が剥離している。壺L(839)は体部下半から底部をロクロケズリ(R)し、ハ字形に踏んばった太目の高台を付す。ロクロ目の著しい底部内面に自然釉がかかり、胎土・色調から遠江湖西窯産とみられる。水瓶(840)は体部下半に2条の凹線が巡り、平らな底部にハ字形の薄い高台がつく。胎土と色調から東海地方産とみられるが、尾北の高蔵寺²⁹⁾2号窯例とは高台の形が異なる。

遠江湖西窯産

甕には甕A(841・843~845)、甕B(842・846)のほか、SD1130の甕A(640)やSD1110の甕C(791)の体部片などがある。甕A(841)は口径16cm、推定体部径約30cmの小型の甕で、強く外傾する口縁の端部が外肥厚して上方に面をもつ。外面は平行文叩き目ののちにカキ目を粗く施し、内面は幅広で浅い同心円文を密に刻んだ当て具痕。尾北の篠岡81号窯例に類似する。

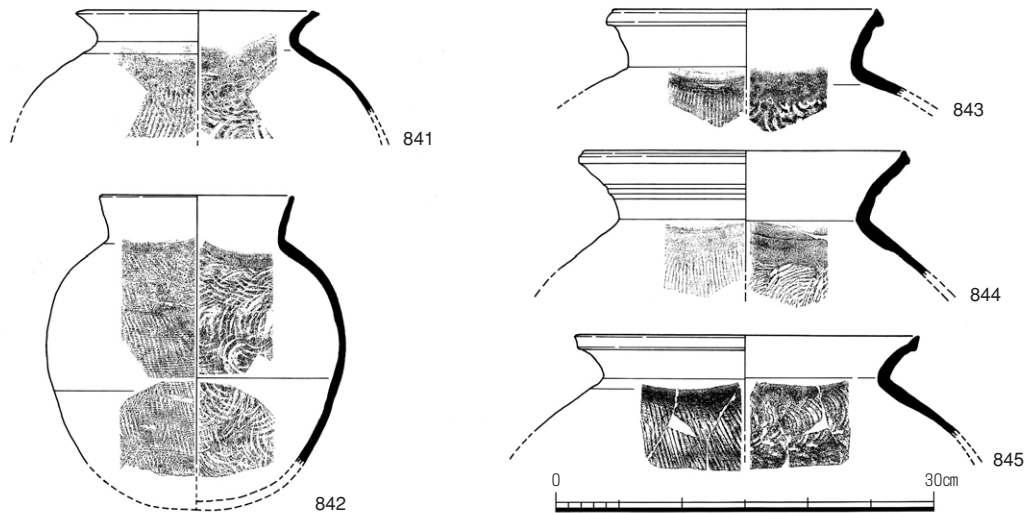


Fig. 42 道路南側溝SD1080出土土器 (3) 1:6

甕A (843) は口縁端部を上方につまみ出して三角形の玉縁形に肥厚させる。口径20.8cm。外面は細刻の平行文叩き目のちに条の細かいカキ目調整で、内面は幅広い刻みの同心円文当て具痕。灰白色の粗い胎土。甕A (844) は口径25.6cmで、外傾する長めの頸部中程に2条の凹線が巡り、口縁端部は上方につまみ出し外側に面をもつ。体部外面は細刻の平行文叩き目、内面は細刻で深い同心円文を密に刻んだ当て具痕。胎土中の白色粘土の縞が特徴的で猿投窯の産品とみられる。破片がこのSD1080を南側溝とする東西道路SF1070路面下の東西溝SD1071からも出土しており、飛鳥V以前に属す可能性が高い。甕A (845) は口径27.2cmの中型の甕で、口縁端部は上外方につまみ出し外側に内傾面を持つ。体部外面に木目右斜交の細刻平行文叩き目、内面には細刻で浅い同心円文当て具痕。底部片の内面は、美濃須衛³⁰⁾窯に類例がある年輪を横断する複数の平行文を刻む当て具痕で、胎土、色調、口縁部、叩き目の特徴から、美濃須衛窯の産品とみられる。甕B (842) は直立する口縁の端部上面に小さな面をもつ。口径15.2cm、体部径23.8cm。卵形の体部外面は右流れの平行文叩き目を施したのち、粗い間隔のカキ目調整。内面の当て具痕は細刻で粗い同心円文の中央に十字形を刻んだ「車輪文」。白色系微砂質の胎土で、淡緑色の自然釉が底部内面にまでかかる。美濃須衛窯の産品とみられる。甕B (846) は口径15cmで、肩部に4耳をもつ。口頸部に2条の凹線が巡り、口縁端部は小さく内彎して内傾面をもつ。外面は平行文叩き目、内面は同心円文当て具痕ののちナデ調整。

美濃須衛窯
の産品

iv SD1116・1118出土土器 (Fig. 43-847~853、PL. 229)

SD1116・SD1118は北地区SD1110以西の水をSD1110へ排水するために掘られた平行する3本の東西溝のうちの2本で、約6mの間隔があり、ともに幾度かの掘り直しがある。

SD1118出土土器 少量の土師器・須恵器がある。土師器杯蓋 (847) は、頂部の中央に上面が平らで裾広がり円形つまみが付き、口縁端部が小さく内側に肥厚する。外面はナデ調整の口縁部を除き、つまみ寄りを4分割、口縁寄りを5分割して密にヘラミガキするが、内面はナデ調整のままである。口径11.4cm、器高2.5cm。杯蓋 (848) は、張りのある頂部の中央に縁部が薄く尖る高い山形つまみがつく。内面に1重のラセン暗文を施し、外面はつまみ寄りを4分割、口縁寄りを6分割して丁寧にヘラミガキする。口径15.8cm、器高3.1cm。両者は、法量やつまみ

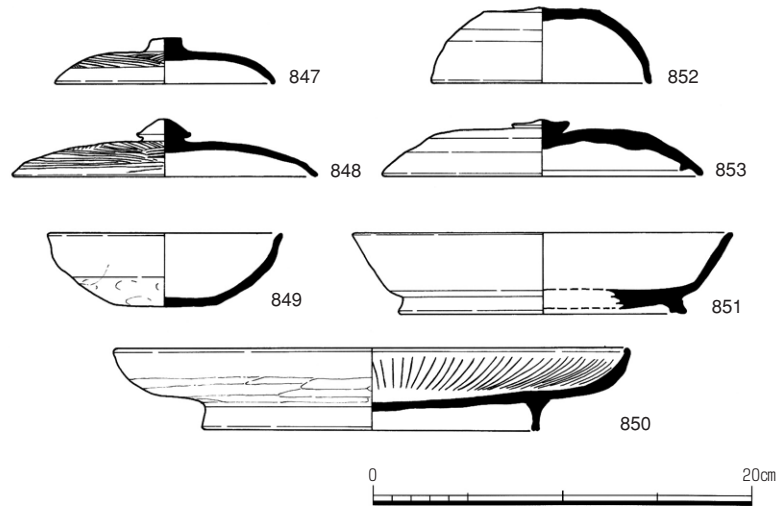


Fig. 43 SD1116・1118出土土器 1:4

の形状が異なるものの、口縁外周の内外面が幅1cmの環状に黒色化することと、淡褐色を呈し赤色粒子を多く含む微砂質の胎土が共通している。土師器椀C(849)は丸底に近い小さな平底で、内彎する口縁の上部が内屈して端部に内傾面をもち、底部外面に粘土紐の継ぎ目が残る。口径12.1cm、器高3.9cm。雲母片を多く含む胎土で、内外面が炭化物などによって黒色化する。奈良時代に降る可能性がある。土師器皿BI(850)は、b0手法の皿底部内寄りに直立する高い高台を付す。内彎気味に直立する口縁の端部が丸く内側に肥厚し、口縁部内面に放射暗文をもつが、底部内面中央部は磨滅していてラセン暗文の有無は明らかでない。口径26.8cm、器高4.4cm。高台径17.6cm。須恵器杯BI(851)は直線的に開く薄い口縁部と、外面をロクロケズリ(R)した肉厚な底部との境が角張り、底部の内寄りに外方へ踏んばった高台がつく。口径19.8cm、器高4.3cm。飛鳥IV～Vに属す。

椀 C

SD1116出土土器 出土土器は少量で、図化できたものは須恵器2点のみである。須恵器杯H蓋(852)は口径11.4cm、器高4.0cm。頂部はヘラ切り不調整。口縁部内面に1ヵ所の灯芯痕と内外面の1/3に煤の付着があり、灯明皿としての使用が確認される。PL.229は使用時の姿で示した。形状は杯Ac類に類似するが、それらはやや大型で底部をロクロケズリするものであることから、特徴が類似するSD1700出土の1501などとともに杯H蓋と判断した。杯H蓋の灯明皿としての使用は土坑SK1128出土の876でも確認され、ともに下層起源の土器とみられるが使用の時期は明らかでない。杯BII蓋(853)は、かえりが残るa類で、ロクロケズリ(R)ののちに、扁平な宝珠形つまみを付ける。口径17.0cm、かえり径14.6cm。飛鳥IVに属す。

杯H蓋の
灯明皿

C 土坑出土土器

i 北地区土坑SK1126出土土器 (Fig. 44-854~869, PL. 229)

SK1126は南北溝SD1110の北部を壊して掘られた土坑で、土師器・須恵器が出土した。SD1110、SD1130および炭層出土土器と接合、あるいは酷似する飛鳥Ⅲ～Ⅴの土器のほか、平城宮土器Ⅱの土器が含まれる。中層木屑層に、郡里制下の付札木簡を含む多量の木簡があるほか、

土師器杯A、杯C、蓋、甕・鍋類、須恵器甕などに多数の墨書土器 (Fig. 92-29~41) があり、針書土器 (Fig. 99-105)、転用硯 (Fig. 101-129・136) や漆壺が少量含まれる。

土師器 器種には、杯A、杯C、杯D、杯G、杯H、高杯C、鍋A、鍋B、甕などがある。

杯A (854) はb1手法で口縁端部は内側に小さく肥厚し、上方に小さな面をつくる。口径16.2cm、器高5.5cm、径高指数34。やや深く、外面のヘラミガキと内面の2段放射暗文がともに密で、飛鳥Ⅲ~Ⅳに属す。杯 (855) は底部を欠失するが、口径18.2cmと大振り深く、器壁も厚いことから、杯BIの口縁部である可能性がある。外面のヘラミガキを太く密に施し、内面には直立気味の2段の放射暗文の間に、1条のループ状のラセン暗文を施す。小さく外反する口縁端部と、淡褐色で砂質の胎土が通有の杯A・杯Bと異なる。杯Aには他に、口縁の上半部が開くa類で、外面のヘラミガキが粗く、下段の放射暗文が斜めに傾く個体がある。口径17.4cm、器高4.6cm、径高指数26で、飛鳥V~平城宮土器Ⅱに属し、土坑の掘削時期は、この個体が示す。なお、杯Aの暗文の種類別では、855のような2段放射文の間にループ状のラセン文を配すもの15片、2段放射文29点、1段放射文4点、無暗文2点で、後2者は少ない。

杯CにはCI (856) とCII、CIII (857) がある。杯CI (856) はb1手法で口径16.4cm、器高3.8cm、径高指数23。内面の暗文は1段放射文+1条のループ状のラセン文であるが、SD1103出土例 (1057) および藤原宮SD101・105、平城京長屋王邸SD4750出土土器など³¹⁾、飛鳥V~平城宮土器Ⅱの暗文とは異なり細密で古相である。なお、図示していないが杯CIIには、a0手法で、口径13.8cm、器高2.5cm、径高指数18の平城宮土器Ⅱに属するものがある。杯CIII (857) はa0手法で、口径11.4cm、器高2.9cm、径高指数25で飛鳥Ⅳ以前に属す。

杯D (858) は、小振りの平底から丸みをもって内彎気味に立ち上がる器形で、口縁端部は内側に小さく肥厚する。口縁部の器表が荒れて明確ではないが、外面を密にヘラミガキし、内面に暗文を施さないものとみられる。口径14.7cm、器高4.5cm。淡橙褐色を呈す。杯GIII (859) は皿形態に近い器形で茶褐色を呈し、赤色粒子や砂粒を多く含む。口径11.1cm、器高2.8cmで口縁部に灯明の痕跡が残る。杯HIII (860) はヨコナデ調整の口縁部の段より下をヘラケズリする。微細な赤色粒子と金雲母を含む特有の胎土で、口径11.9cm、器高3.5cm。灯明皿として使用されている。高杯C (861) は口縁が屈折する浅い杯部で、底部内面のラセン暗文が粗く、杯部外面下半の指押え痕の間に脚部との接合痕が残る。口径17.4cm。

鍋には把手のつく鍋B (863) とつかない鍋A (862) があり、墨書土器の鍋A (Fig. 92-39) がある。鍋A (862) は半球形の体部に大きく開く口縁部がつき、口縁端部は薄く丸く収める。体部外面はかすかな条痕の縦ハケ目、内面はナデ調整で、赤色粒子や金雲母を含む胎土で淡橙褐色を呈する。墨書土器の鍋A (39) とともに「大和B型」で、口径35.4cm。鍋B (863) は口径44.4cmの大型で、深めの半球形体部に斜めに開く口縁部がつき、端部は外方へ巻き込むように肥厚する。体部の中程に基部の幅10cm、厚さ3cmの把手がつくが先端は欠失している。外面は上半をナデ調整もしくはかすかなハケ目調整、下半は横方向にヘラケズリし、内面は条痕の明確でないハケ目調整で平滑に仕上げる。外面全体に煤が付着し、淡茶色で精良な胎土が特徴的な「南河内型」であろう。薄くて幅広い把手の形状から飛鳥V以降に属するとみられる。

須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、鉢A、平瓶、甕があり、転用硯 (Fig. 101-129: 蓋a類、136: 杯B) の他に徳利形の漆壺 (PL. 388-51) などがある。杯BIII (865) は口径15.4cm、器高4.1

大和B型の鍋

南河内型の鍋

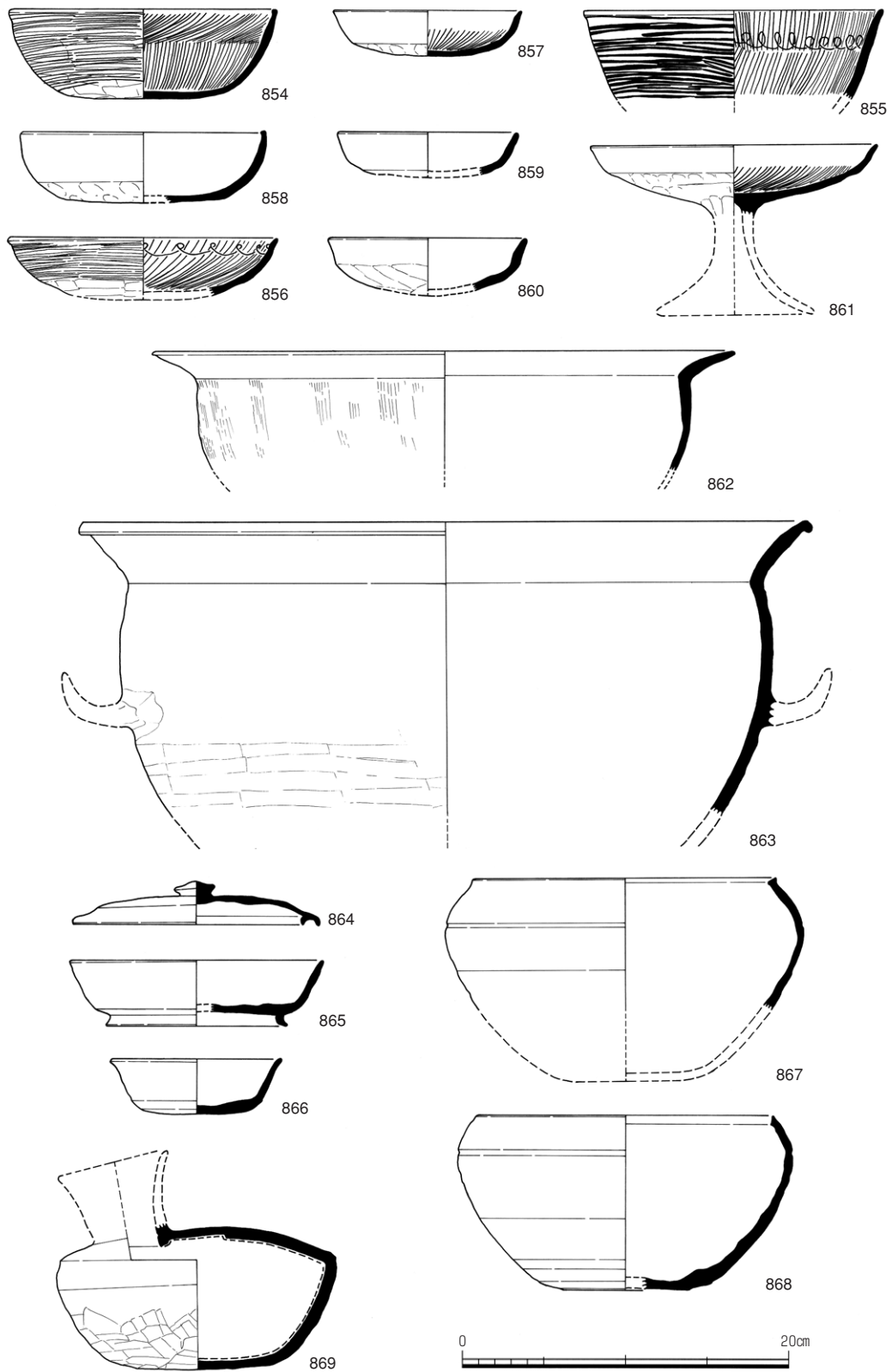


Fig. 44 土坑SK1126出土土器 1:4

cmで、ロクロケズリ(R)調整の底部内寄りに、端部が外肥厚する長めの高台がつく。杯B蓋(864)は太めのかえりをもつa類で、ロクロケズリ(R)で仕上げた頂部に、幅広の宝珠形つまみがつき、外面全体に厚い降灰がかかる。口径15.3cm、かえり径13.1cm、器高2.7cm。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属す。杯AⅣ(866)は斜めに開く口縁の端部が小さく外反し、底部外面はロクロケズリ(R)。口径10.4cm、器高3.5cm、径高指数34で、有蓋の杯A_gの可能性はある。内面全体に朱が、口縁端部に漆が付着し、朱漆のパレットとして使用されたとみられる。

鉢A(867・868)は体部中程の凹線より上方が内彎し、口縁端部に面をもつ。底部まで残る868は、小さく平らな底部を「板起し技法」のナデ調整、底部近くの側面のみをロクロケズリ(R)する。868の口径18.0cm、器高10.8cm。867は口径18.5cmで、重ね焼きにより外面のみが黒色を呈する。ともに飛鳥Ⅳ～Ⅴに属す。平瓶(869)は直径17.2cmの鈍い稜を持つ肩部で、丸みのある体部下半から平らな底部を不定方向のヘラケズリ。白色砂と黒色粒子を多く含む胎土で、青灰色を呈し、高火度の焼成により黒色粒子が流れ出す。

ii 北地区土坑SK1128出土土器 (Fig. 45-870~878、PL. 230・251)

SK1128は方形池SG1110の西南にある長方形土坑で、整理箱2箱程度の土師器・須恵器が出土した。飛鳥Ⅳ～Ⅴを主体に奈良時代前半までの土器があり、7世紀中頃の土器を少量含む。

土師器 器種には杯A、杯D、皿A、鍋やロクロ土師器高杯などがあり、土師器鍋の多くは墨書土器である。杯AⅠ(870)は直線的に開くやや厚手の口縁の端部が小さく丸く外反する。外面はb₁手法であるが、ヘラミガキの単位幅が太く、内面の2段放射暗文は下段が直立気味で上段がジグザグ状に施され、明橙色で細砂質の胎土ともども、通有の杯Aとは異質である。口径20cm、復元器高6cm。法量は飛鳥Ⅳ～Ⅴの一般的な杯Aと変わらない。杯D(871)は内彎気味の口縁の端部が内側に丸く肥厚する。b₁手法で、外面のヘラミガキは著しく密に施すが、内面に暗文はない。口径13.6cm、器高4.4cm。皿AⅠ(872)はb₀手法で、口縁端部が小さく内肥厚する。口径21.8cm、器高2.6cm。底部は波打ち気味で外面に黒斑がつく。ロクロ土師器の高杯脚部(875)

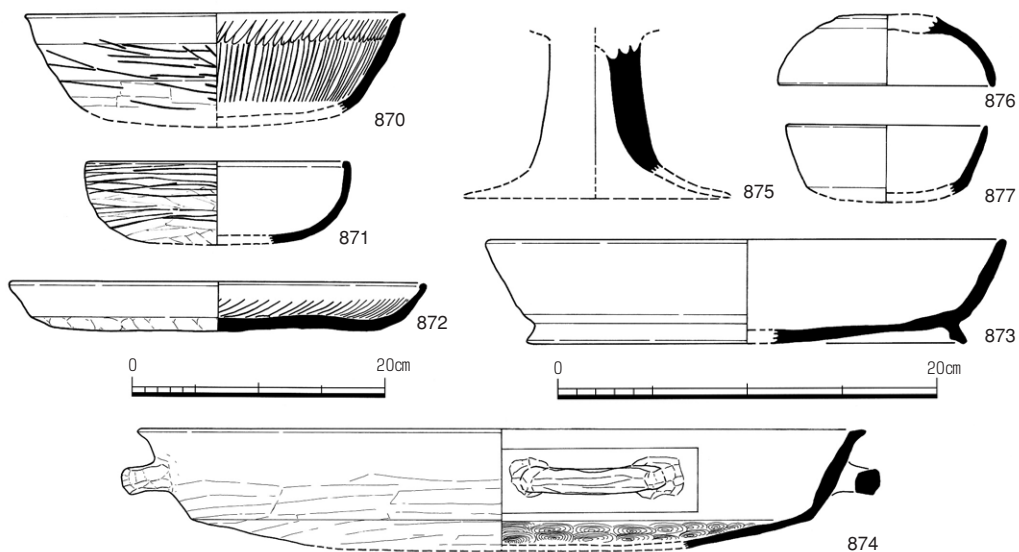


Fig. 45 土坑SK1128出土土器 1:4 (874のみ1:6)

は、7世紀前半代の土器で、幅狭い切込み状の透かしを四方にあける。

鍋には墨書をもつもの (Fig. 92-45~47, PL. 261) がある。「仲」の墨書土器45は大きく開く口縁の端部を上につまみ上げるように肥厚させて外側に面をつくり、体部に縦方向のハケ目をかすかに施す「大和A型」の調整手法。「鉢丁」の墨書土器46は口縁端部を丸く収め、体部内外面をナデ調整する。墨書土器47も端部を丸く収め、口縁部の外面に「□人」の墨書。ともに茶褐色を呈するが、46に雲母片が多い。いずれも飛鳥Vに属すであろう。

〔鉢丁〕の墨書

須恵器 器種には杯G、杯H蓋、皿BI、盤A、甕Cなどがある。杯G (877) は内面に朱が付着し、杯H蓋 (876) は内面に灯芯痕跡をもつ。朱や灯芯痕をもつ杯G・HはSD1173や灰緑色粘砂層出土土器にもあり、使用時期は特定できない。皿BI (873) は垂れ気味の底部縁辺部に、比較的高く外方へ踏ん張った高台を付す。底部外面はロクロケズリ (L)。口径27.0cm、器高5.5cm。

盤A (874) は、口径57.6cm、器高9.5cmの大型の盤で、器壁が薄く垂れ気味の底部と直線的に開く分厚い口縁部とからなる。口縁端部は外肥厚して上方に面をもち、口縁部の中位にヘラケズリで面を整えた把手を貼り付ける。底部内面には細かく浅い同心円文当て具痕が明瞭に残り、外面は把手の下までヘラケズリ調整。皿BI (873) とともに淡灰色の東海地方産。

甕C (Fig. 57-878, PL. 251) は、破片が石組方形池SG1100、土坑SK1126からも出土し、これらの遺構の親近性を示す。広口で直立する口縁部の端部は丸く、内面の無刻の当て具痕および外面の細刻の平行文叩き目をナデ消す。淡灰色の砂質土で、頸部内外面に鉄釉を塗布した猿投窯産。口径43.5cm、体部径54.3cm、推定器高約47cm。

iii 南地区土坑SK1170出土土器 (Fig. 46-879~904, PL. 230)

土坑SK1170は、西の谷の西岸中段の播鉢状の土坑で、堆積層序は上・中・焼土・下層に分かれ、各層からは、フイゴの羽口・銅滓・炭等の工房関係遺物や漆壺などとともに土師器・須恵器が比較的多く出土したが、層序による差異は認められない。土坑の北西側の工房から数度にわたって投棄されたものとみられる。なお、土師器の遺存状態が悪いために、図示のほとんどが須恵器であり、円面硯 (Fig. 100)、漆壺 (PL. 388・391)、被熱土器 (PL. 359) などは別掲した。**土師器** 器種には杯A、杯C、杯H、杯G、皿A、托、小型鉢A、甕、鍋、などがあるが、図示し得たものは杯A (879)・小型鉢A (880) およびロクロ土師器の托 (899) にとどまる。

杯A (879) は底部外面をヘラケズリ、口縁部にヘラミガキを施すb1手法。ミガキの密度が比較的粗いものの、内面の2段放射暗文は細かく密に施され、口径11.0cm、器高3.0cm。托 (899) は口縁端部が遺存しないが、口径約25cm、器高約3.5cmの大型品と推定され、器を受ける圏状突起は径11.8cm。口縁部はロクロナデ、底部外面にロクロケズリののちに細い高台を貼り付ける。均一な明橙色を呈する。鉢A (880) は口径9.2cmに復元される小型品で、内外面をヨコナデ調整する。精良な胎土で被熱は認められないが、形状から未使用の埴塙の可能性はある。

須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、杯G蓋、皿A、椀A、盤C、大皿蓋、蓋X、壺類、平瓶、甕Aおよび別掲の圏足円面硯 (Fig. 100-119) がある。

杯AⅢ (887) は焼土層出土で、被熱により脆く、灰白色を呈する。底部外面はヘラ切り不調整で、降灰の様子から無蓋とみられる。口径15.8cm、器高5.1cm、径高指数32で飛鳥Ⅳ~Ⅴに属する。杯AⅣ (888・889) は口径12.8~13.6cm、器高4.4~4.8cm、径高指数34~35。ともに底部

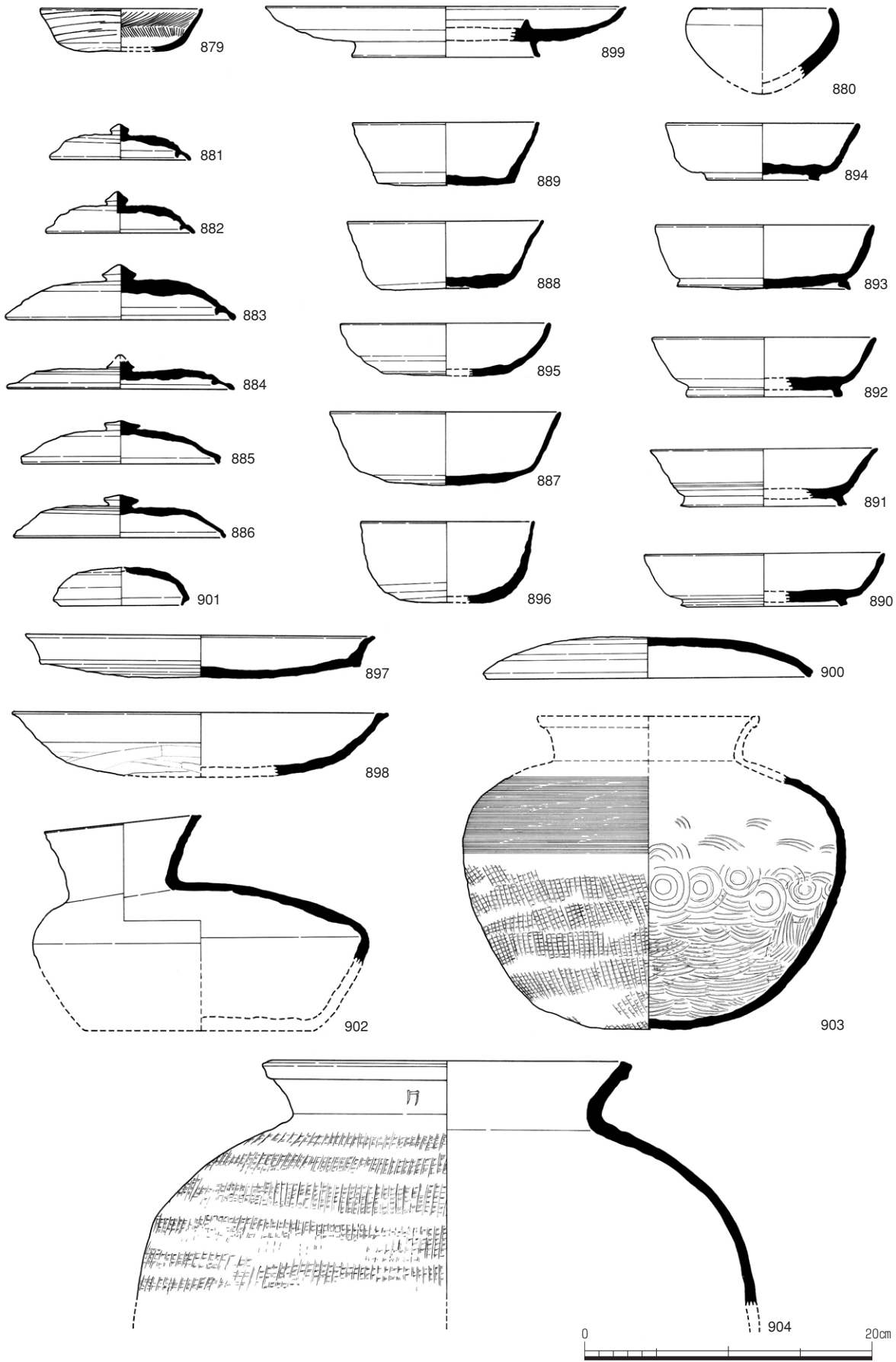


Fig. 46 土坑SK1170出土土器 1:4

ロクロケズリで蓋を伴う。小振りの平底から丸く内彎する杯Ac (895) は土師器杯Cの器形をうつしたもので、口縁下半から底部をロクロケズリで仕上げた無蓋の器種。口径14.4cm、器高3.7cmで被熱土器としての使用がうかがわれる。杯BにはBⅢ (890~893) とBⅣ (894) がある。浅手のBⅢである890は肉厚の底部から内彎気味に開く口縁部で、端部は薄く尖り、ロクロケズリ (R) で丁寧仕上げた底部の内寄りに外方へ踏ん張った小さな台形の高台がつく。口径16.6cm、器高3.7cm。内外面に漆が付着する。器高が4.0~4.5cmと深めの杯BⅢ (891~893) は直線的に開き口縁の端部が外反するもの (891)、厚い底部から内彎気味に開くもの (892)、底部が垂れ気味で、外端が接地する高台をもつもの (893) など、多様であるが、いずれも底部外面をロクロケズリ (R) で仕上げ、比較的高い高台が踏ん張り気味につく。891は外面下半に2条の凹線を巡らせた漆付着土器杯BⅢ (PL. 388-23) と同様の器形である。杯BⅣ (894) は底部外面へラ切り不調整で低い高台がつく。口径13.2cm、器高4.0cm。杯G蓋 (881・882) は口径10.0~10.3cmで、口径9cm余の杯Gにかぶるもので、高い宝珠形つまみをもつ。

杯B蓋にはかえりのあるa類とかえりのないb類がほぼ等量ある。a類の883・884は口径15cm前後の杯BⅢの蓋で、側縁に稜をもつ高い宝珠形つまみが特徴的。883は頂部が肉厚で外面は丁寧にロクロケズリする。b類の885・886は口径13cm余りの杯BⅣの蓋で扁平な宝珠形つまみをもつ。椀A (896) は肉厚な底部をロクロケズリで丸く仕上げ、薄い口縁の端部に小さな面をもつ有蓋の器種。口径12.0cm、器高5.7cm。皿A (897) は丸く垂れた底部から鋭く屈曲し、端部が外反する短い口縁部に至る。底部をロクロケズリ (L) で仕上げ、明黄色を呈する東海地方の産品。盤C (898) は丸みのある底部をへラケズリで仕上げ、口縁端部は外方に肥厚する。胎土、色調から東海地方の産品とみられる。

東海地方産

蓋X (901) は『年報1999-II』では杯Hに類似した杯と報告したものであるが、外面のロクロケズリが丁寧で、口縁端部も杯Hの受け部の退化と理解するよりも、壺A蓋の端部に通じることから、短頸壺などの蓋であると判断した。口径8.4cm、器高2.7cm。蓋X (900) も概報では浅い皿Aとしたが、外面を広く丁寧にロクロケズリすることと、端部の形状が蓋b類と類似することから、口径20cm余りの鉢類の蓋と考えた。鉢の蓋の類例は銅製品ではあるが伊福吉部徳³²⁾足比売骨蔵器の蓋がある。口径22.3cm、器高2.9cm。

蓋 X

平瓶は漆壺として別掲した小型の器種 (PL. 391-66) のほかに、広口で扁平な体部をもつ902がある。鈍い稜をなす肩部の形状から飛鳥Ⅳに属すると考えられる。小型の甕A (903) は体部径26.8cmで体部外面に細刻の平行文叩き目を施し、上半部は密にカキ目調整する。内面は幅広い刻みの同心円文当て具痕で、外面のカキ目に対応して横方向にナデ消す。甕A (904) は外傾する短い口縁部の端部を突帯状に肥厚させ、頸部外面に漆付着土器の杯BⅢ (PL. 388-23) と類似したへラ記号を刻む。体部外面は細刻の平行文叩き目を横方向にナデ消し、体部内面は当て具痕をとどめないまでにナデ調整する。口径24.4cm、体部径42.8cm。

iv 北地区土坑SK1153出土土器 (Fig. 47・48-905~940、PL. 231・232)

土坑SK1153は、南北溝SD1110の東、石組方形池SG1100の南にある大きな土坑で、埋土は下層 (暗灰色砂)、中層 (木屑層)、上層 (灰色砂土) の3層に大別され、木屑層からは大宝令以前の7世紀末の「評里」表記の荷札木簡1点を含む大量の木簡が出土している。土器は各層から

出土し、層序の違いに関わりなく飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するものがあるものの、下層や木屑層出土土器にも平城宮土器Ⅲの特徴をもつものが含まれる。土器は多量の土師器供膳具・煮炊具と少量の須恵器供膳具で構成され、土師器煮炊具における鍋の割合の高さ、須恵器貯蔵具の少なさが特徴的である。また、墨書土器、圈足円面硯、転用硯や漆付着土器、被熱土器が少量含まれる。

土師器 器種には杯A、杯B、杯G、皿A、皿G、鉢B、高杯、甕、鍋などがあり、墨書土器皿A (Fig. 92-42)、鍋 (同43)、漆付着土器杯HⅢ (PL. 388-2) がある。

杯AⅠ (905) はb1手法であるが、ヘラミガキの幅が3mm程度と太く、口縁端部が小さく内肥厚し、外側に鈍い面をもつ。内面の2段放射暗文の上段が幅広く、口径18.2cm、復元器高5.1cm。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。杯AⅢ (906) は口縁下部に指頭痕のあるa1手法。内面はナデ調整で暗文は認められない。杯Aが無暗文化する平城宮土器Ⅲに属する可能性があるが、口縁端部内寄りを小さくつまみあげて外側に面をつくり、淡褐色を呈する点で、杯Gcに通じる特徴をもつ異形品。口径12.9cm、器高3.4cm。905・906は下層出土。杯AⅣ (907) はb1手法で、底部に丸みがある。内面の底部にラセン暗文、口縁部に上段の幅が狭い2段放射暗文を施す。口径10.6cm、器高3.0cm。中層の木屑層出土で飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

杯BⅢ蓋 (908) は張りのある頂部に大振りのつまみがつき、口縁端部は小さく肥厚する。外面はつまみの周りを4分割のヘラミガキ調整、内面には大きなラセン暗文を施す。口径17.4cm。

墨書土器皿A (42) は小さく外反する口縁端部が凹線状の内傾面をなし、底部外面は指頭痕が残る程度の軽いヘラケズリ、内面は左上方へのナデ上がりをもつヨコナデ調整で暗文は施されない。明茶色を呈し砂粒と赤色粒子を多く含む胎土は一般的な杯Cと変わらず、平城宮土器Ⅲに属する可能性がある。口径17.1cm、器高3.1cm。径高指数18。中層木屑層出土。

杯Gには平底で口縁上端が外反するGa (909) と、小さな内傾面のGb (910)、底部を粗く削るGd (911) があり、909の外面には粘土紐の継ぎ目が残る。口径9.8～12.5cm、器高2.3～2.8cm。全て中層出土で、910は内外の全面が黒色を呈し、909・911には灯芯痕が残る。

皿AⅠ (912～914) は平らな底部から強く屈曲して口縁部に至り、口縁端部は内側に小さく肥厚する。いずれもa0手法で、内面は暗文を施さないナデ調整。中層出土の913・914が砂粒や雲母片を多く含み、黄褐色を呈するのに対して、上層出土の912は砂粒をあまり含まず、淡褐色を呈し、底部外面に黒斑がつく。口径19.8～22.4cm、器高2.4～2.9cm。外面のヘラミガキと内面の暗文を施さない点から、平城宮土器Ⅲに属するとみられる。皿G (915) はゆるやかな弧を描いて開く口縁の端部外側が幅広く肥厚して面をもつ。底部外面を軽くヘラケズリするb0手法。内面はナデ調整で暗文はなく、杯Gdの特徴に類似する。口径17.9cm、器高2.1cm。皿G (916) はa0手法で口縁端部が外反する杯Gaの特徴をもつ。内面全体と口縁部外面が黒色化し、漆パレットの可能性もある。口径14.6cm、器高1.7cm。915・916は中層出土。

鉢B (917・918) は小さな平底と内彎気味の口縁部とからなり、口縁端部は内肥厚する。口縁部下半から底部外面をヘラケズリするb1手法で、内面はナデ調整。淡褐色で砂粒を含む胎土の917は暗文をもたず、口径24.0cm、器高8.0cmで中層出土。茶褐色で砂粒を多く含む胎土の918は3重のラセン暗文をもち、口径21.8cm、器高7.3cmで下層出土。

高杯A (919) は浅い皿状の杯部をもつ大型の高杯で、脚部のみが残存する。脚柱部外面は縦方向のナデ調整で、大きく開く厚手の脚裾部外面には4～5回に分割したヘラミガキを施し、

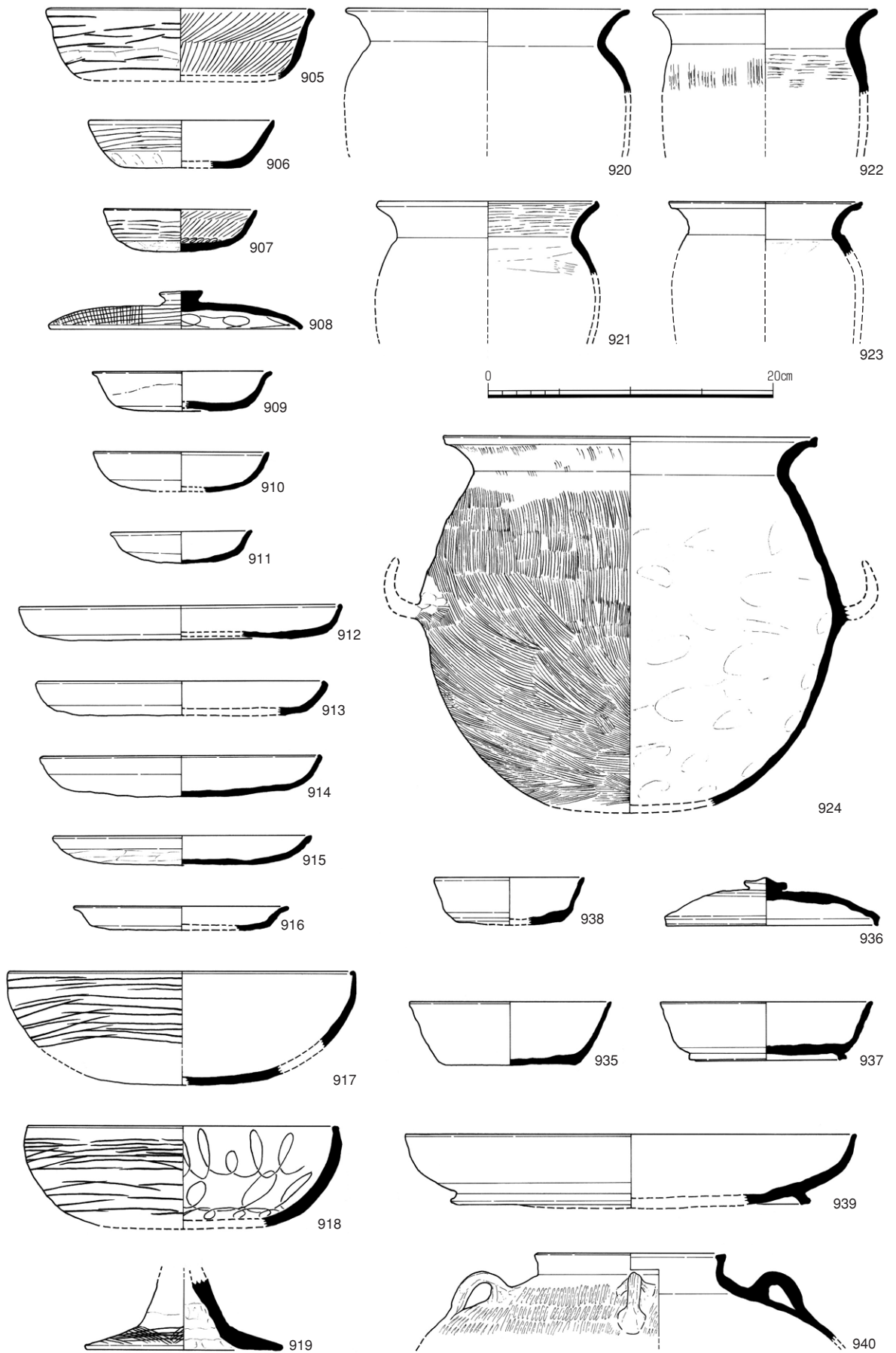


Fig. 47 土坑SK1153出土土器(1) 1:4

裾端部は丸く収める。内面には脚柱部に絞り目と指頭圧痕があり、ナデ調整の及ばない脚裾部に布目痕が残る。脚裾径13.6cm。高杯Aは、飛鳥V以降に出現する器種で、脚柱部外面をヘラケズリで多面体化するものが一般的であるが、本例は脚部内面の布目痕とともに異例に属する。また、脚裾部をヘラミガキする高杯Aは、南地区からの出土がなく、北地区でもSD1103など奈良時代に降る土器を含む遺構・層序からわずかに出土する器種である。

甕には中・小型の甕A（920～923）と大型で把手のつく甕BI（924）があるが、長胴の甕Cは出土していない。甕A（920）は口径19.8cmの中型で、くの字形に外反する口縁部は器壁が薄く、内外面をヨコナデ調整して端部を丸く収める。体部は内外面ともにナデ調整でハケ目の形跡がない。砂粒と赤色粒子を多く含む胎土で茶褐色を呈し、河内地方の一部の産である可能性がある。甕A（921～923）は口径13.5～15.4cmの小型の甕で、いずれも体部外面と口縁部内面に炭化物が厚く付着する。それぞれ口縁部の形状、体部内外面の調整方法などが異なり、産地を異にするとみられる。921は大きく上方へ開く口縁の端部が小さく上方に肥厚し、外傾する面をもつ。口縁部内面を横方向のハケ目調整ののちに、内外面をヨコナデ調整し、体部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整を施す。砂粒を多く含む胎土で煤のつかない内面は褐色を呈する。遺存する範囲内に内面の削り調整がみられないが、口縁部の形状は「河内型」に類似する。922は頸部が厚手で締りが少なく、薄く外方へ開く口縁端部に肥厚はない。体部外面はかすかな縦ハケ目で、内面は横方向のハケ目調整。長胴気味の体部とみられる。923は頸部に強いナデ調整による段をもち、弧を描いて外反する口縁の端部を上方につまみだすように肥厚させて小さな面をつくる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整とみられ、体部内面には板状工具によるナデ調整痕が残る。淡褐色で砂粒を多く含む胎土。甕BI（924）は球形の体部に強く外反する口縁部がつき、体部中程に基部の幅約8cmの薄い把手を貼り付ける。口縁端部は上方に肥厚して外側に面をつくり、外面には口縁端部直下から体部上半に縦方向の一次ハケ目、把手下部から底部に斜め方向の二次ハケ目が施され、口縁外面のハケ目は内面の横方向ハケ目とともにナデ消している。体部内面は径3cm程の無文の当て具痕の凹みが残る程度にナデ調整する。典型的な「大和A型」の甕Bで、口縁端部や把手の形状からは飛鳥Vに属するとみられる。

河内地方の
甕 A

大和A型の
甕 B

多様な鍋

鍋には把手のない鍋A（925～928）と把手をもつ鍋B（929～934）があり、それぞれ口径の大小と体部の深浅など多様なものがあり、量的には甕の2倍以上、煮炊具の2/3を占める。鍋A（925）と鍋B（929～931）が上層出土であるほかは、中層の木屑層出土。鍋A（925）は浅い体部の小型で、口縁部は頸部内側に稜をもって大きく外反し、端部は丸く収める。体部は内外面ともに板状工具によるナデ調整でかすかな条痕が残る、濃黄褐色を呈し砂粒と赤色粒子を多く含む胎土。内外面ともに煤による汚れと炭化物の付着がある。口径25.4cm、器高6.5cm。鍋A（926）も小型の浅手で、大きく外反する口縁の端部を丸く収めるが、925にみられる内側の稜はない。外面は体部をハケ目調整、底部はナデ調整で、内面はナデ調整。淡黄褐色で赤色粒子を多く含む胎土。底部と体部との間の段は明瞭ではないが「大和B型」に属する。鍋A（927）は小型で体部がやや深く、肉厚な口頸部が斜めに開き、端部は鈍く内肥厚する。体部外面ハケ目調整、内面ナデ調整で、口頸部内面に粘土の継ぎ目が残る。淡褐色を呈し、赤色粒子を含む胎土で、「大和A型」に属する。外面全面が煤化し、体部内面には厚く炭化物が付着する。口径20.0

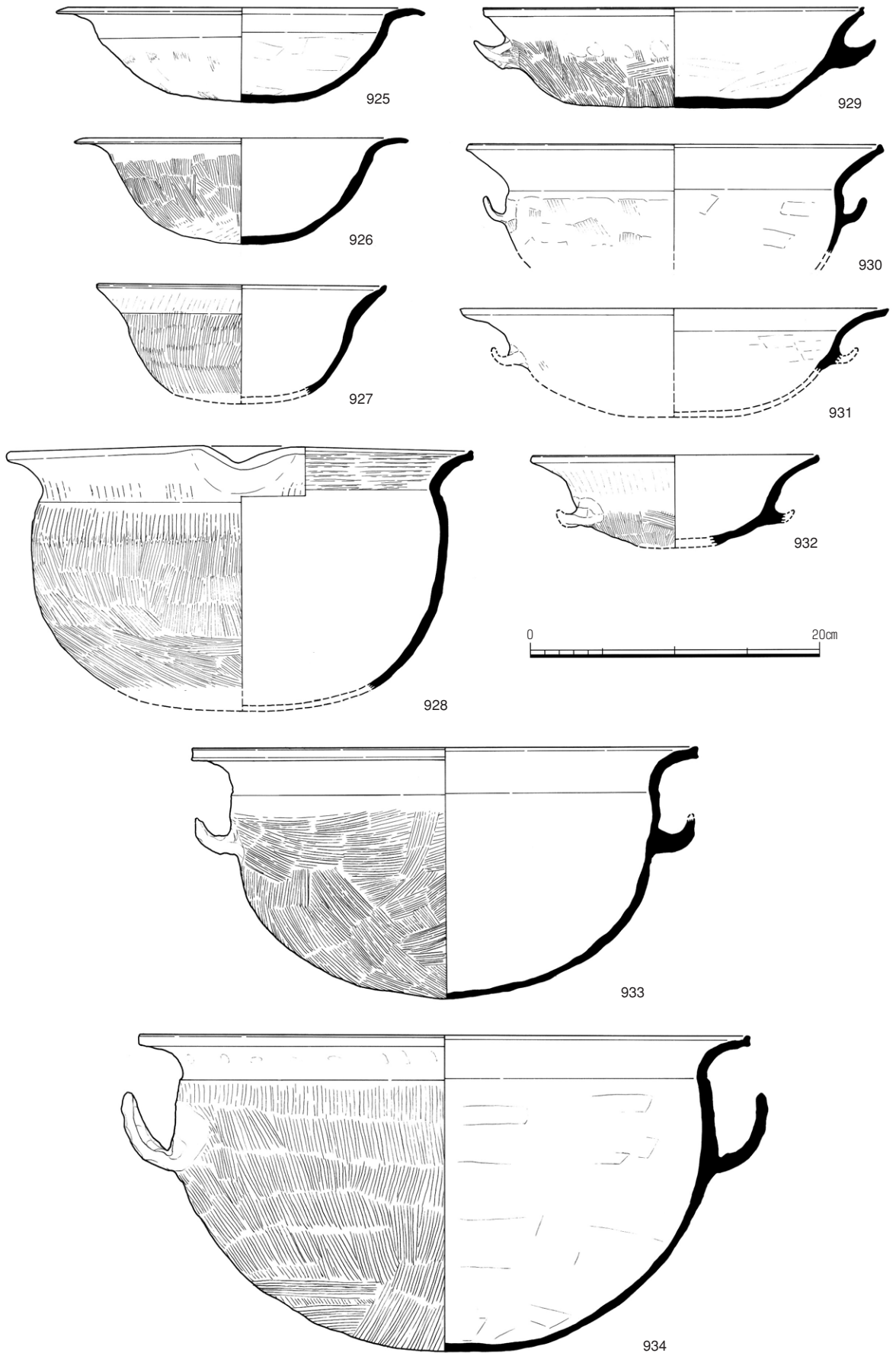


Fig. 48 土坑SK1153出土土器(2) 1:4

cm、復元器高8.3cm。鍋A(928)は体部の深い大型で、内彎気味にくびれた頸部に小さな段をもち、外反する口縁の端部は上方へ肥厚して外側に面をつくる。口縁部は完存し片口部が確認されるが、体部の欠損部に把手がつく余地がある。体部上半外面は口頸部と一連の条の粗い縦ハケ目調整で、口縁部はヨコナデ調整でナデ消す。体部下半～底部の外面は条の細かなハケ目を縦方向および斜め方向に施す。内面は、口縁部を横ハケ目ののちヨコナデするほかはナデ調整で、底部付近に当て具痕状の凹凸が残る。飛鳥Vの「大和A型」。

盤形の鍋

鍋B(929)は平底で頸部のくびれと口縁部の外反がほとんどない盤形を呈し、把手は肉厚で幅狭い。口縁端部は上方へつまみだして外側に凹線状の面をつくり、外面は体部上半を縦方向に、下半から底部を多方向にハケ目調整し、口縁部のハケ目はヨコナデで消し、内面は口縁部のヨコナデ以外は多方向のナデ調整。淡橙色で赤色粒子や砂粒を多く含む胎土で、外面に煤が、内面に炭化物の汚れがつく煮炊具である。口径26.3cm、器高7.0cm。鍋B(930)は直線的に斜めに開く長い口頸部で、口縁端部は小さく内肥厚し、外側に面をもつ。体部外面はかすかな条痕のハケ目調整、内面は横方向の板状工具によるナデ調整。強いヨコナデによる小さな段をもつ頸部下に、薄い器壁の把手がつき、把手先端は上方へ内屈する。外表が明褐色、断面が黄白色を呈し、石英細粒と赤色粒子を多く含む胎土。頸部の小さな段と口縁端部・把手の形状から飛鳥V以降に属すとみられる。口径28.7cm、残存高7.5cm。鍋B(931)は930と胎土・色調・調整技法などが共通するが、口縁部の外反が強く、浅い体部で、口縁端部は内肥厚せずに外側に面をもつ。口径29.6cm。929～931は上層出土。鍋B(932)はごく浅い体部と大きく外反する長い口縁部とからなり、口縁端部はわずかに内肥厚して外側に面をつくる。底部外面をハケ目調整、内面はナデ調整。体部下方に基部が肉厚な把手がつく。淡橙色で石英粒を含む胎土。口径19.8cm、器高6.4cm。内面の大部分に炭化物の汚れがつく。

鍋B(933・934)は墨書土器鍋B(Fig.92-43)とともに、大型で体部が深く、小さな段をもつ頸部から口縁が強く外反し、体部内外面の調整と淡褐色で赤色粒子をわずかに含む色調・胎土が共通する。口縁端部は比較的小さな933と大きめの934、および上下の肥厚が大きな墨書土器鍋B(43)とで若干の差があるが、いずれも、つまみだすように上方に肥厚させ、外側に凹線状の面をつくる。把手は体部上寄りに貼り付けられ、934では基部幅10cmで先端の丸い台形で、上方に内屈して器壁が薄い。これらの特徴は、飛鳥V～平城宮土器IIに属する「大和A型」の甕類に共通する。934の外面には煤・炭化物が厚く付着し、把手位置の内面には黒色の帯状に喫水線が残るほか、いずれの内面にも煮炊きによる汚れがみられる。933は口径34.8cm、器高17.5cm。934は口径42.0cm、器高22.0cm。墨書土器鍋B(43)は口径26.0cm、残存高8.8cm。いずれも中層の木屑層出土。

須恵器 器種には杯A、杯B、杯G、杯H、皿B、甕B、器台があり、圈足円面硯(Fig.100-112・118)、墨書土器杯B蓋(Fig.92-44)、漆付着土器杯A(PL.388-14・27)がある。工房以前に属する杯G、杯H、器台を含めても土師器の2割程度の少量である。

杯AⅢ(935)は底部外面をロクロケズリし、大きく開く口縁部の器壁が薄い。口径14.0cm、器高4.5cm。淡青灰色を呈し、砂粒混じりの胎土で、無蓋。内外面ともに薄い汚れがつく。下層の暗灰砂出土。漆付着土器杯AⅡ(PL.388-14)も下層出土で、口縁部が薄く、底部外面はロクロケズリ(R)。口径16.6cm、器高4.1cm。杯BⅢ蓋(936)は、低い笠形のb類で、中央が盛り上

がった扁平な宝珠形つまみをもち、肉厚な頂部の外面はロクロケズリ（R）。口縁端部は鈍く内屈して外側に浅い凹面をつくり、口径14.8cm、器高3.4cm。「寺」の墨書土器杯B蓋（44）も低い笠形のb類だが、口縁端部は鋭く内屈して小さく尖る。口径16.1cm、器高3.3cm。杯BⅢ（937）はほぼ完形で、ヘラ切りののちナデ調整した平らな底部の外寄りに、内端部をつまみ出した方形の高台がつく。口径14.7cm、器高4.2cm。ともに飛鳥Ⅳ～Ⅴに属し、中層の木屑層出土。杯G（938）は底部外面ヘラ切り（R）不調整で、口径10.4cm、器高3.3cm。図示しなかった杯Hとともに下層遺構起源の土器とみられる。

皿BI（939）は丸い底部が高台よりも下方に垂れ、底部外面はロクロケズリ（R）で平滑に仕上げ、内面はロクロナデののちに多方向に板状工具によるナデ調整。口縁は上部で内屈し、薄く引き出した端部を丸く収めるが、ゆがみがあり、口径23.8～31.4cm、器高5.2cm。上層出土で、内外面に炭化物による汚れが残る。甕B（940）は口径13.1cmの直立する短い口縁部で、端部は三角形に内肥厚して内傾面をつくる。体部外面は細かな刻みの平行文叩き目、内面は細刻の同心円文当具痕をロクロナデで平滑に消し、茶褐色の汚れが残る。肩部には粘土紐を貼り付けた円環状の耳が1個残るが、本来は4個とみられ、淡青灰色を呈し、黒色粒子を多く含む微砂質の胎土から東海地方産とみられる。下層出土。なお、甕にはSD1110の水口部、SD1108出土の甕A（Fig. 35-774、PL. 250）の体部片（e渦巻き文当て具）が含まれている。

東海地方産

v 西の谷の水溜状土坑SX761出土土器（Fig. 49-941～963、PL. 248-964、PL. 252-965）

水溜状土坑SX761は後述のSK764・770とともに飛鳥寺1991-1次調査で検出した西の谷の工房に関わる水溜遺構に相当する土坑で、下層の石敷遺構SX815・814を壊している。そのため、埋土の「粘土混炭層」出土の土師器、須恵器には、下層の古墳時代、7世紀中頃と、工房に関わる飛鳥Ⅳ～Ⅴのものが混在し、下層遺構のSD811と接合する須恵器杯Gや灰緑色粘砂層出土片と接合する須恵器甕（965）のほか、漆壺（図版編〔Ⅱ〕PL. 393-65）などが含まれる。ここではおもに下層遺構起源の7世紀中頃の土器について記述し、古墳時代の土器は別項（H：古墳時代の遺構等出土土器）に記した。

西の谷の水溜遺構

土師器 器種には杯C（941～946）、甕A（947）、鍋Bなどがある。

杯CI（941）は、b1手法で細密な2段の放射暗文。口縁端部に内傾面をもつ。口径18.2cm、器高5.1cm、径高指数28。杯CI（942）はa1手法で1段の細い放射暗文。口縁上部が屈曲し端部は薄く尖る。赤褐色で微砂質の胎土。口径15.4cm、器高5.3cm、径高指数34。杯CⅡ（943）はa0手法で、口縁上部が屈曲し口縁端部は肥厚して凹面をなす。口径14.6cm、復元器高4.0cm。杯CⅢ（944）はa0手法で、底部外面に指頭痕が残り、口径13.0cm、復元器高2.6cmの浅い器形。図示した杯Cではこれのみが飛鳥Ⅴに属する。杯CⅢ（945）は口径10.0cm、器高3.4cm、径高指数36と深い器形で、滑らかな弧を描いて立ちあがる口縁の端部が、小さく外肥厚して内傾面をつくる。内面の放射暗文は太く、外面は丁寧なナデ調整。赤褐色の精良土。杯CⅢ（946）は底部の厚さに比べて薄い口縁の端部を肥厚させずに丸く収める。口径8.4cm、器高2.6cm、径高指数31で、分量は飛鳥Ⅱの坂田寺跡SG100出土例に類似する。飛鳥Ⅴに属する944を除いた杯Cは、調整手法や径高指数にばらつきがあるものの、飛鳥Ⅰ～Ⅱの7世紀中頃に属し、須恵器杯G、杯Hなどに対応する。

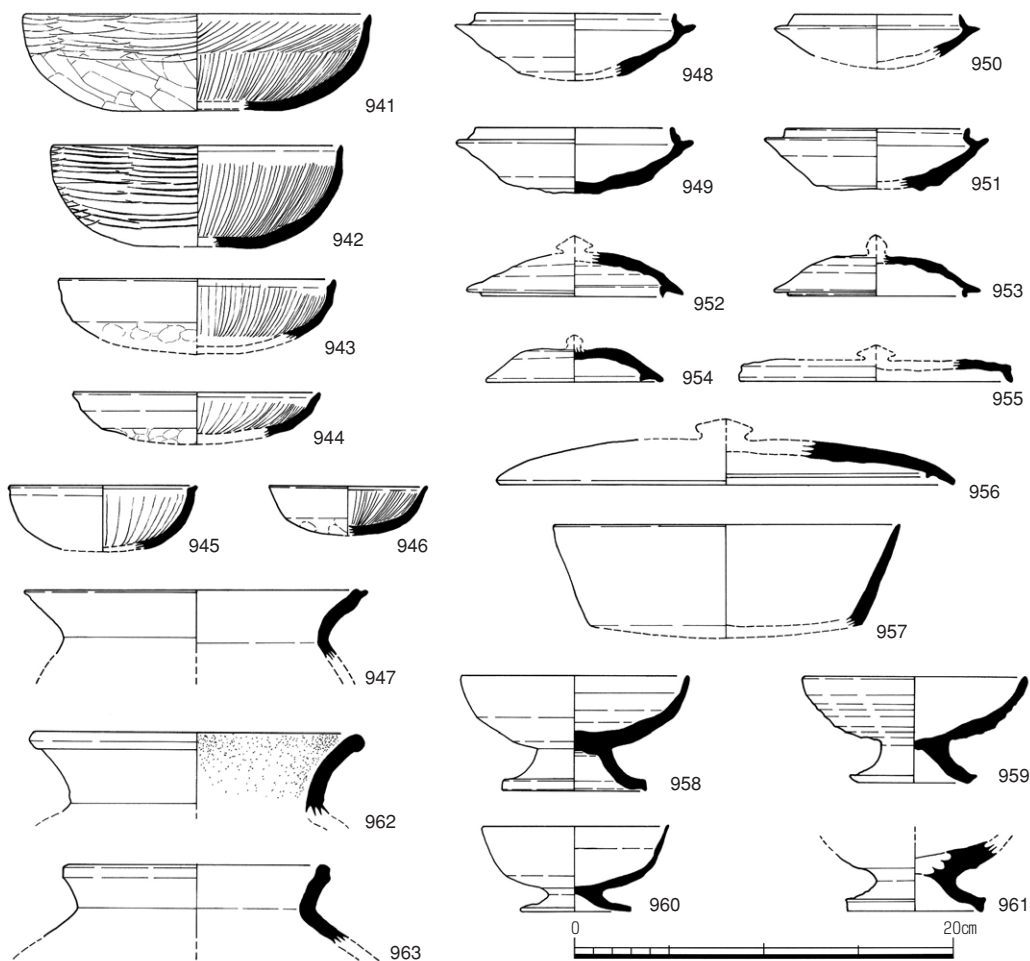


Fig. 49 水溜状土坑SX761出土土器 1:4

甕A (947) は口縁上部がわずかに内屈し、端部が外肥厚して上方に凹面をもつ。体部を欠くが、口縁形状と雲母片を多く含む橙褐色の胎土から、体部内面はハケ目調整が残る程度にヘラケズリするものとみられる。口径18.4cm。なお、図示を省略した鍋Bは、浅い半球形の体部と強く外反する口縁部からなり、口縁端部は巻き込むように上肥厚し、外面をハケ目調整、内面を多方向にナゲ調整する「大和A型」。口径35.7cm、復元器高12.5cm。把手は体部上寄りに貼り付けた比較的薄手の三角形で、飛鳥IV～Vに属する。

須恵器 器種には杯A、杯B蓋、皿B蓋、杯G蓋、杯H、高杯、甕などがある。

杯A (957) は直線的に開く口縁部の端部が尖り、内外面ともロクロナデ。底部は大半を欠失するがロクロケズリとみられる。口径18.4cm、復元器高5.4cm、径高指数33。飛鳥IV～Vに属する。杯B蓋 (955) は扁平な頂部のb類で、口径14.2cm。外面に降灰がみられ、小型の椀類にかぶる可能性がある。皿B蓋 (956) は厚手の頂部から緩やかな弧を描いて端部を丸く収めた口縁部にいたる。a類だが内面のかえりは凸線状に小さい。外面が暗灰色、内面が灰緑色を呈し、口径24.2cm。口径22cm前後の皿類にかぶるとみられる。杯G蓋 (952～954) には弧を描く頂部の952・953と、小さな平坦面から屈曲して開く954とがある。前者は口径が11.0～11.5cmで、かえり先端が口縁端よりもと下にとびだし、後者は口径9.4cmで、かえり先端は口縁端部に揃う。後者はより新相で飛鳥IIに属する。なお、図示していないが杯Gには口径10.2cm、器高3.6cm、底

部ヘラ切り不調整の個体があり、SD811出土片と接合する。杯H（948～951）は口縁部の形状に微細な差があるが、いずれも底部外面はヘラ切り不調整とみられる。最も小さい950は受け部径10.9cmで、口径9.8cm前後の蓋がかぶるとみられ、その他は受け部径11.8～12.7cm、器高3.2～3.6cmで、かぶるべき蓋の口径は11.5cm前後であろう。

高杯はいずれも低脚であるが、杯H蓋を逆転させた杯部の高杯H（958・959）と杯Gのように屈曲して直線的に開く高杯G（960）とがある。高杯Hは口径11.8～12.0cm、器高5.6～6.0cm。厚手で端部を肥厚させた脚部をもつ。高杯Gは口径9.8cm、器高4.5cmで、端部を丸く収める小さな脚部をもち、脚部、杯部ともに器壁が薄い。なお、脚径7.2cmで脚端部が上下に肥厚して面をつくる961は杯部の底が肉厚で、内面を広くナデ調整しており、壺類の脚部の可能性がある。

甕A（962）は外反する口縁の端部を丸い玉縁状に外肥厚させる。口径17.6cm。黒色粒子を含む胎土で黒灰色を呈し、内外面に著しい降灰がある。甕（963）は、く字状に短く開く口縁の端部を上方につまみ出す。口径13.2cm。頸部以下もロクロナデ調整で、壺Bの可能性がある。灰色を呈す精良土で、口縁上端より外側に降灰がある。甕（PL. 248-964）は内面の当て具が中央に5弁の星形を刻んだ「車輪文」で、外面は細刻の平行文叩き目。大振りでも明確な車輪文は陶邑窯TG64号窯出土例³³⁾に類似する。甕A（PL. 252-965）は灰緑色粘砂層および灰色シルト層出土片と接合する個体で、直立気味に開く口縁端部が玉縁状をなし、外面は均一な刻みの平行文叩き目に木目の広いカキ目調整。内面の当て具は、浅く幅広い溝を密に刻んだ同心円文が歪む特徴がある。

5弁の星形
を刻んだ
車輪文

vi 西の谷の土坑SK764・770出土土器 (Fig. 50-966～969・970～984)

SK764・770はSX761の下流部にある長方形・方形の土坑で、砂や粘質土が堆積し、出土土器の構成もSX761に類似する。

SK764出土土器には土師器杯C、杯H、甕Aなどがあり、図示したものはいずれも7世紀中頃に属する。杯C（966）はb1手法の深い半球形で、口縁端部は小さく外反して内傾面をもつ。口径9.2cm、器高3.6cm。径高指数40。外面のヘラミガキは粗く、内面の暗文は細かい1段の正放射文。杯HII（967）は口径14.8cm、復元器高5.4cm。ヘラケズリ調整の底部がきわめて薄く、口縁部との境の稜は目立たない。杯HIII（968）は口縁部と底部の境が明瞭な段をなす。口径10.5cm、器高3.5cm。径高指数33。甕A（969）は弧を描いて外反する口縁の端部を上方へつまみ上げて外側に面をつくる。体部内面は横方向のハケ目調整、外面はナデ調整で、口縁部外面には粘土紐継ぎ目が残る。口径19.0cm。

SK770出土土器には比較的多量の土師器と少量の須恵器とがある。

土師器の器種には杯C、杯G、杯H、皿A、甕A、甕X等がある。杯CIII（970）はa0手法で、細密な1段放射暗文が口縁端部近くまで及ぶ。口径9.0cm、器高2.4cm、径高指数27。杯GIII（971）は内彎する口縁部の端部が内側に尖るc類で、口径10.8cm、残存高2.8cm、径高指数31。杯HII（972）は口縁部と底部との境が内外面ともに段をもち、底部外面を幅広くヘラケズリする。口径15.2cm、残存高3.8cm。皿A（973）は丸く内彎する口縁の端部が小さな内傾面をなす。bo手法とみられ、内面に太く粗い1段放射暗文を施す。口径23.2cm。残存高4.0cm。雲母片と赤色粒子を含む赤褐色の精良土。皿A（974）はa0手法で、口縁端部は幅広く内肥厚して上方に面

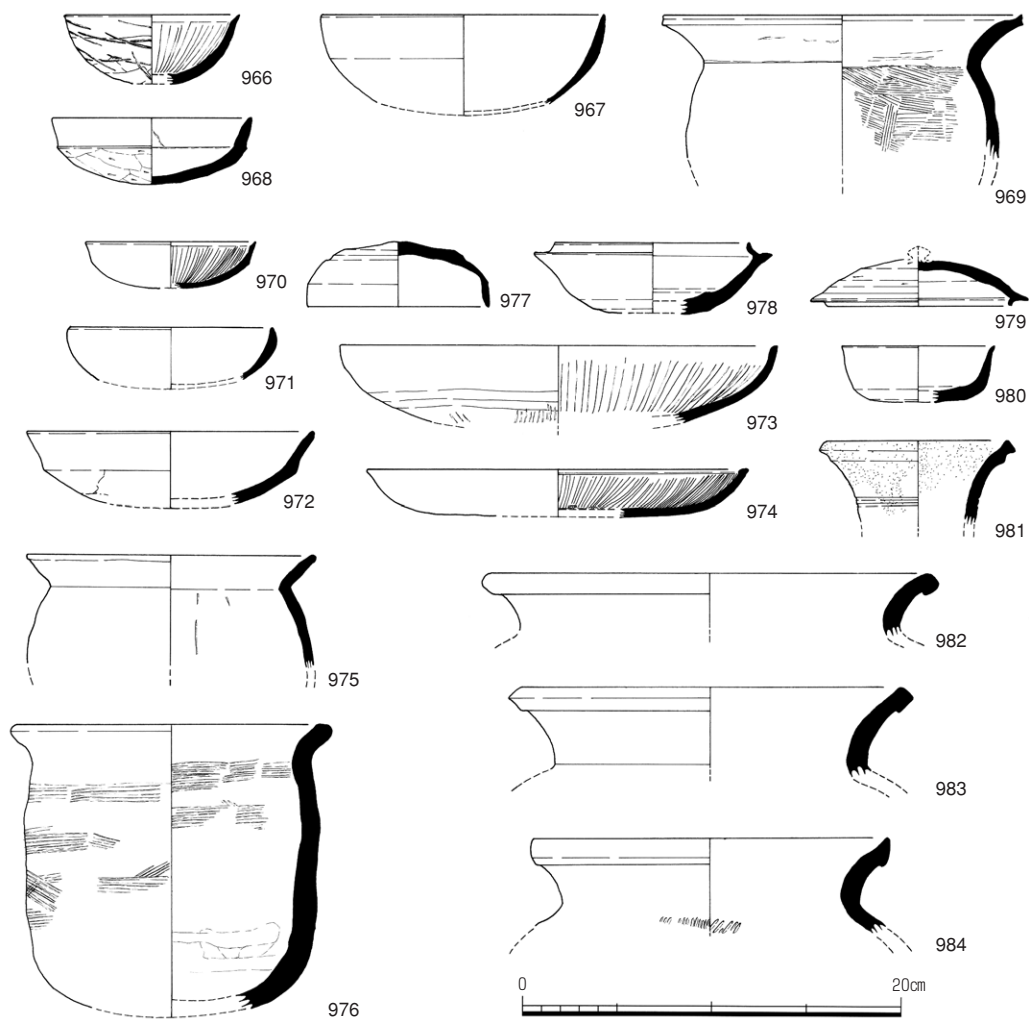


Fig. 50 西の谷の土坑SK764・770出土土器 1:4

をつくる。暗文は底部のラセン文と口縁部の1段放射文ともに細かく、赤褐色で長石を含む精良土。口径20.4cm、器高2.5cm。径高指数12。飛鳥Vに属す。

甕A (975) は撫で肩の体部と、く字形に開く口縁部からなり、頸部内面に稜をもつ。頸部と丸く収めた口縁端部を薄くした、中脹らみの断面形をなす口縁部と、白色砂粒を多く含む褐色の胎土は、坂田寺SG100出土甕類などに多くみられる「大和型」甕の特徴である。口縁部内外面と体部外面をナデ調整し、体部内面にコテ状工具のあたりが残る。口径15.2cm、残存高5.7cm。甕X (976) は筒形の体部と短く外反する口縁部とからなる甕Cに類似した形態であるが、全体に器壁が厚く、胎土に石英を主体とする砂粒を多く含む点は埴塙のそれに類似する。体部外面は横方向のハケ目調整、内面は上半に横方向のハケ目、下半に不定方向のナデ調整と指頭圧痕が残る。口径17.0cm、復元器高15.5cm。

須恵器の器種には杯G、杯H、壺、甕Aなどがある。杯H蓋 (977) は頂部へラ切り後ナデ調整で、口径9.6cm、器高3.5cm。杯H (978) は厚手の底部で、外面はへラ切り不調整。口縁の端部が上方へ屈曲し、口径10.4cm、受け部径12.6cm、器高3.7cm。受け部以下の外面が降灰のある青灰色で他は淡灰色を呈する。杯G蓋 (979) は丸い頂部で口縁部が水平ののび、かえりの先端が下方へ突出する。つまみ剥離痕は細身。口径11.6cm、かえり径9.6cmで、口径10.6cmほどの杯

大和型の甕

Gにかぶる。杯G(980)は口径8.1cm、器高3.0cmで、底部外面はヘラ切り不調整。最も小型化する飛鳥Ⅱに属する。壺(981)はフラスコ形長頸壺の口頸部で、口径9.7cm。頸部に2条の凹線が巡り、外側に面をつくる口縁端部の直下に段をもつ。内外面に暗灰色～暗緑色の自然釉がかかる尾張猿投窯産で、炭層等出土の漆壺に類似する。甕A(982～984)はいずれも外彎する口縁部で、端部を折り返して玉縁状につくるもの(982・983)や、上方につまみあげて外側に面をつくるもの(984)がある。984の体部には外面に平行文叩き目、内面に弧状の刻みの当て具痕がわずかにみえる。口径19.0～24.0cmで、982の内面には炭化物が付着する。

尾張
猿投窯産

D 井戸出土土器

i 石敷井戸SE1090と関連遺構出土土器

(Fig. 51～53-985～1023, PL. 233・234, PL. 251-1024～1026)

石敷井戸SE1090は北地区西北部にあり、下円上方の2段構成の井戸枠の周囲を石敷SX1091とし、大規模な長方形の石組遺構で囲む。石組の底には、四辺の壁際と北部中央とに石敷を欠く浅い溝SX1092を配し、井戸枠からのびる北部中央の溝は、石組北壁と一連に構築された石組溝SD1093として、東西溝SD1080に接続するが、石組北壁以北では、蓋石をもつ石組暗渠SX1094となり、その上部は土坑状に埋められる。井戸廃絶後には上部の井戸枠が抜き取られ、石組とともに埋め立てられている。出土土器は、土師器・須恵器が少量ずつあり、以下では、井戸枠内埋土(985)、井戸枠抜取穴埋土(986～996)、石組遺構埋土(997～1010)、石組溝SD1093内堆積土(1011～1016)、石組暗渠SX1094埋土(1017～1023)に分けて記述し、互いに接合する個体のある須恵器甕(1024～1026)は、まとめて記述する。

石敷を伴う
井戸

井戸枠内埋土出土土器 上部4層の砂質土に、土師器杯A、杯H、蓋、須恵器杯、平瓶などの小片があり、下部1層の粘質土に須恵器杯B(985)などがある。

須恵器杯BⅢ(985)は、口縁下半の器壁が薄く、上半部で外反して端部が尖る。やや厚手の底部外面はヘラ切りののちナデ調整で、小さく外彎する方形の高台が底部内寄りにつく。口縁部外面は上縁を除き暗灰色で降灰がかかり、内面は淡青灰色。黒色微粒子を多く含む精良土で東海地方産とみられる。口径14.2cm、器高3.9cm。径高指数29。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

井戸枠抜取穴埋土出土土器 土師器杯A(986)、杯C(987)、皿A(988～990)、壺B(991)、鍋A(992)、須恵器杯A(994)、杯B(995)、皿A(993)、壺E(996)などがあり、平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する。

土師器杯AI(986)は、平底で口縁端部が小さく内肥厚する。外面はヘラケズリが口縁端部にまで及び口縁部をヘラミガキするc1手法で、内面はナデ調整し暗文は施さない。橙褐色を呈し砂粒を含む胎土。口径18.4cm、器高4.7cm。杯C(987)はa0手法で、口縁端部に鈍い内傾面をもち、内面に暗文は施さない。口径17.6cm、器高3.4cm。径高指数19。胎土・色調は986と同じ。皿A(988)は内彎気味に開き、端部は小さく内肥厚する。c0手法で暗文はなく、口径22.6cm、器高2.7cm。皿A(989・990)はともに、b0手法で、口縁上部が外反し、端部が巻き込むように内肥厚して外側に面をつくるa類であるが、989がやや肉厚で、大粒の赤色粒子と金雲母を多く

含むのに対して、990は薄手で微細な赤色粒子と微砂を含むが、雲母片がない。産地を異にするとみられる。989は口径21.1cm、器高2.4cm。990は口径20.4cm、器高2.3cmで、二次加熱をうけて外面が煤ける。壺B（991）は広口の頸部から短い口縁部が丸く外反する鉢形で、口縁端部は内側がヨコナデによる凹面をなして丸く収め、体部は下半が直線的にすぼまる。体部外面はナデ調整で、内面は押え痕が残るナデ調整。茶褐色を呈し赤色粒子を多く含む砂質の胎土で、南河内地方の産とみられ、一部に薄い煤化と黒斑がある。口径16.0cm、復元器高10.5cm。鍋A（992）は半球形の深い体部と直線的に開く口縁部からなり、口縁端部は小さく上方に肥厚して外側に面をつくる。体部外面は条の細かな斜めハケ目、内面は押え痕の凹みが残るナデ調整で、「大和A型」。淡黄茶色で角の丸い砂粒を多く含む砂質の胎土。外面全面の煤化と炭化物の付着が著しく、表面が細かく剥離する。口径23.0cm、復元器高11.7cm。

須恵器杯AaII（994）は、口径17.6cm、器高4.1cm。垂れ気味の底部外面はヘラ切り（R）ののちナデ調整。直線的に開く口縁部の下端にロクロナデによる凹みが巡り、底部との境に鈍い稜が生じる。淡灰色で雲母片を含む軟質の胎土。内外面ともに薄い茶色の汚れがつく。皿AaII（993）は口径18.0cm、器高2.9cmで、土師器杯C（987）とほぼ同大。中央が上げ底となる底部外面をヘラ切り（R）ののちナデ調整。淡灰色を呈し、黒色微粒子を多く含む軟質の胎土で内外面ともに摩耗が著しく、細かな剥離痕がある。杯BIV（995）は、底部外面をヘラ切り（R）不調整、内面中央部に一方向のナデ調整。直立気味に開く薄い口縁の上部が外反し、高台は細くてやや高い。青灰色を呈し、黒色粒子を多く含む胎土で硬質。口径12.4cm、器高4.0cm、径高指数32。壺E（996）は体部上方で強く内屈して稜をもち、口縁部は短く外反する。ロクロケズリ（R）した体部下半は直線的にすぼまり、ナデ調整の底部に長めの高台がつく。淡青灰色を呈し、黒色微粒子と微砂を多く含む胎土で、硬質な焼成。高台内側を含めた外面に降灰がかかる。口径9.2cm、器高6.1cm。肩部径11.3cm。995を除き平城宮土器IV～Vに属する。

奈良時代

石組遺構埋土出土土器 土師器杯G（997・998）、皿A（999～1001）、鉢B（1002）、鍋A（1003・1006）、鍋B（1004・1005）、須恵器杯A（1007・1008）、壺K（1009・1010）などがあり、厚手の製塩土器片が少量含まれる。井戸枿採取穴出土土器と同内容である。

土師器杯G（997）はao手法で外反気味に開く口縁部。淡茶灰色を呈する金雲母を多く含む胎土で、灯明痕が残る。口径11.1cm、器高2.7cm。杯G（998）は、口径12.4cm、器高3.1cm。内彎気味に開き、口縁端部が外肥厚して鈍い内傾面をつくる点は杯Cに類似し、橙茶色で赤色粒子を多く含む胎土と、不調整の外面に粘土紐継ぎ目が残る点は、碗C（1014）に類似する。内面に茶色の汚れが付き、灯明皿の可能性はある。

灯明皿

皿AI（999）はbo手法で、内彎気味に開く口縁部の上半がヨコナデ調整により小さく外反し、口縁端部は杯Cに似た鈍い内傾面をなす。内面の暗文は、底部中央にラセン文、口縁部に1段の斜放射文を施し、放射文上部に重ねて施されたループ状のラセン文は、奈良時代前半の平城宮土器II～IIIの杯CIのそれに類似する。濃橙茶色で雲母片を多く含む微砂質の胎土。口径19.6cm、器高2.5cm。皿AI（1000）と皿AII（1001）は、平底で、口縁部が内彎気味に開き、口縁端部の形状に小さな内傾面（1001）と尖形（1000）の違いがあるが、いずれも正倉院宝物の佐波理加盤に類似する器形。1000は口径18.2cm、器高2.7cm、1001は口径16.6cm、器高2.5cmで、ともに径高指数15。外面を口縁端部までヘラケズリするc0手法、橙褐色を呈し赤色粒子と雲母片を

奈良時代
前半

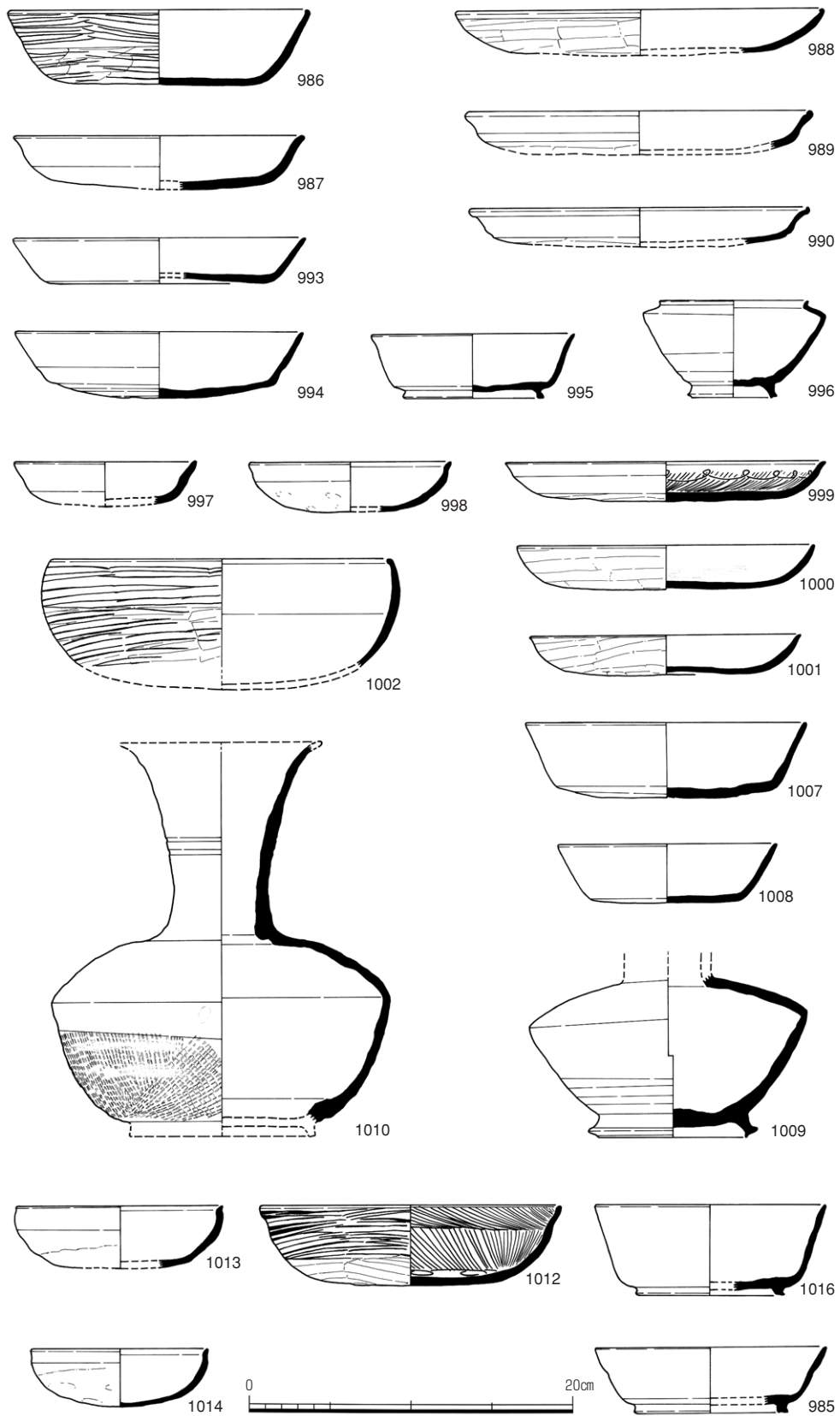


Fig. 51 石敷井戸SE1090と関連遺構出土土器(1) 1:4

多く含む胎土、口縁部と底部内面に薄く煤が付着し灯明皿の可能性のある点でも両者は共通し、1000には底部内面に「井」のヘラ書きがある。平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する。

鉢B (1002) は内彎する口縁部の端部が丸く内肥厚する。外面は口縁部下半をヘラケズリ、上半をヨコナデ調整ののちに、ヘラミガキを施し、内面はナデ調整で暗文は施さない。口径20.6cm、復元器高8.0cm。橙茶色で砂粒を多く含む胎土。道路南側溝SD1080の811に類似する。

土師器鍋

鍋A (1003) は浅い体部と長く直線的に開く口縁部とからなり、口縁端部は上方へ小さく肥厚して外側に凹線状の凹みをもつ面をつくる。体部外面をハケ目調整、内面は押え痕をナデ調整する「大和A型」。口径24.6cm、器高5.8cm。明橙色で砂粒を含み、内面に薄く茶色の汚れがつく。鍋A (1006) は口径45.6cm、復元器高28.6cm。肉厚な口縁部が斜外方に開き、体部は裾すぼまりで、平底。体部外面は縦方向のハケ目調整で、内面は不定方向のナデ調整。外面の調整は、底部近くの鈍い段を境に変わり、横～斜め方向のハケ目ののちにナデ調整。口縁部内面は横ハケ目調整ののちにヨコナデし、外面は体部と一連の縦ハケ目をヨコナデ調整でナデ消す。茶灰色で赤色粒子と雲母片を多く含む砂質の胎土は「大和B型」に共通する。体部と底部は直接接合せず、遺存する体部片には把手の痕跡がみられないが、鍋Bの可能性はある。口縁部の外反度と形状は、飛鳥Ⅱ～Ⅲの甕Bに類似する。

鍋B (1004・1005) は口縁端部外側に凹面状の面をつくり、体部上寄りに薄手で基部が幅広く先端が丸い三角形の把手を貼り付ける。1004は口径36.2cm、残存高11.4cm。体部外面は把手よりも下方を横方向のハケ目調整、上方はナデ調整。内面はナデ調整で平滑に仕上げる。茶褐色を呈し赤色粒子を多く含む胎土で、体部外面下半に薄く煤が付着する。1005は口縁部から体部上半の外面を一連の一次縦ハケ目で調整し、把手位置より下を斜め方向に二次ハケ目調整。内面は口縁部と体部上半を横方向のハケ目で調整し、下半はナデ調整。胎土色調ともに1004に類似する「大和A型」だが、煤の付着はほとんどない。両者は把手と口縁部形状から飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅱに属するとみられる。

須恵器杯A

須恵器杯A (1007・1008) はともに無蓋のAa類。杯AⅡ (1007) は口径17.2cm、器高4.7cm。底部外面はラセン状のヘラ切り(R)ののちナデ調整。内面は多方向のナデ調整で、ロクロナデ調整の口縁部との境に凹線状の段が生じる。暗灰白色で黒色粒子と雲母片を多く含む色調・胎土は994に類似する。杯AⅣ (1008) は、口径13.4cm、器高3.7cm。外面をロクロケズリ(R)、内面はナデ調整。二次加熱を激しく受け、黄色を帯びる点を除けば1007と同色・同質で、口縁下半部外面と内面上端部とに火襷が残る。ともに奈良時代後半から末に属する。

壺K (1009) は鋭い稜をもつ肩部で、底部へ直線的にすぼまり、ハの字に開く高台端部は内外に肥厚して、内傾する凹面をつくり、内端が接地する。体部下半ロクロケズリで、その他はロクロナデ。青灰色を呈し、黒色粒子を多く含む胎土で、肩部外面と、底部内面中央部とに緑色に発色する自然釉が厚く付着する。壺K (1010) は丸みのある体部上半との境が鈍い稜をなし、太い口頸部の外面に2条の凹線文が巡る。体部下半外面は細刻の平行文叩き目が残し、内面はロクロナデ。復元口径12.5cm、体部径20.8cm、高台部を除く器高約22cm。暗青灰色で砂混じりの胎土で、飛鳥Ⅳに属するとみられる。

石組溝SD1093内堆積土出土土器 溝南部の砂層から出土した土師器杯AⅠ (1012)、鍋A (1015)、須恵器杯B (1016) と、溝北部の暗渠出口から出土した土師器碗C (1013・1014) などがあり、

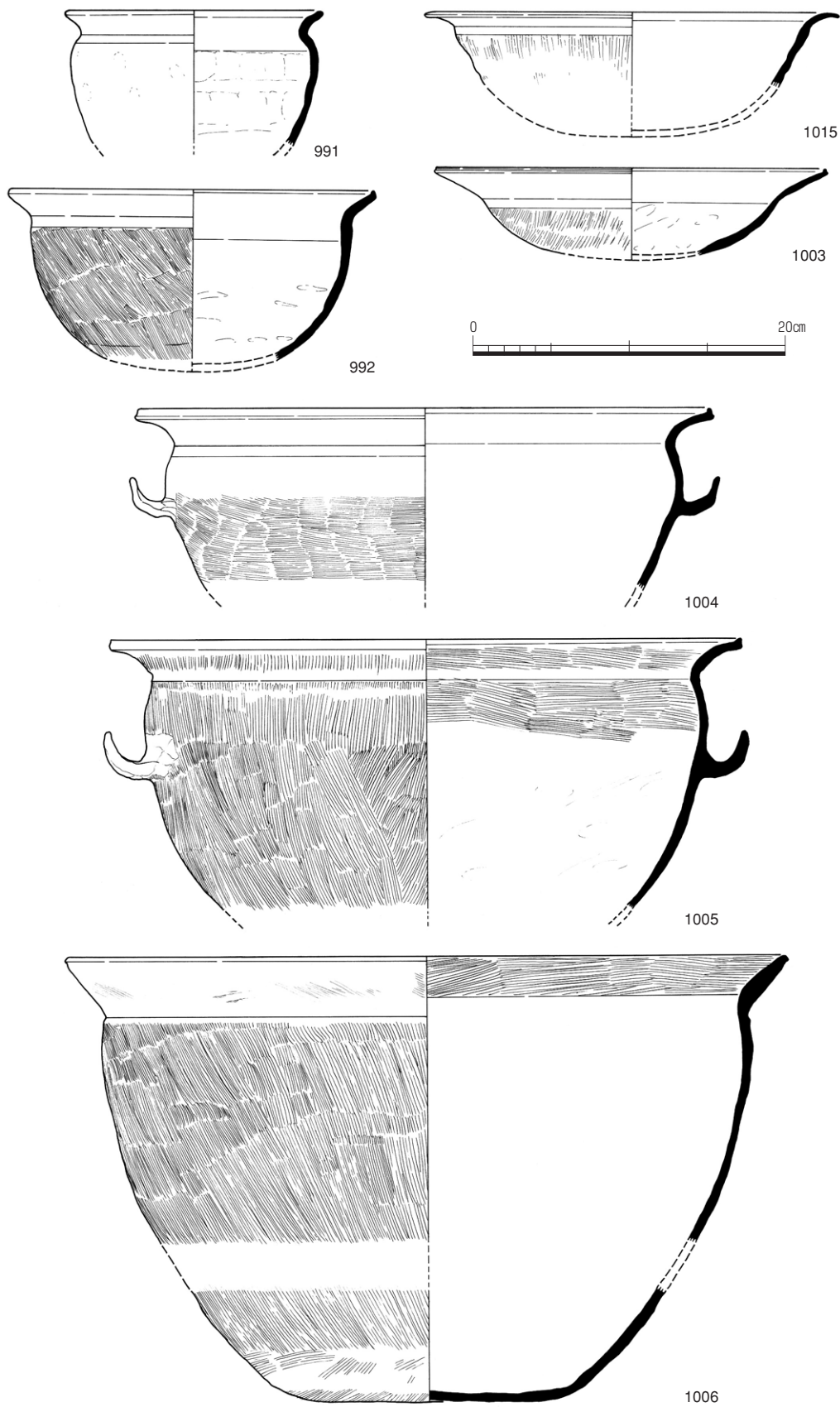


Fig. 52 石敷井戸SE1090と関連遺構出土土器(2) 1:4

土師器杯A (1011) は、暗渠埋土の北端がSD1093の石組と重なる位置から出土したもので、石組溝堆積土の最上層に相当する。

溝南部、砂層出土の土師器杯AI (1012) は、口縁上部が外反する a 類で、口縁端部は小さく内肥厚する。外面はb1手法、内面の暗文は底部に3重のラセン文、口縁部に左傾きの2段放射文を施し、橙茶色で白色微砂と赤色粒子を多く含む胎土。口径18.4cm、器高5.0cm。径高指数27。内外面全面の外表が、暗茶色に汚れていて、漆塗土器の可能性があり、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。鍋A (1015) は口径26.4cm。端部を丸く収めた口縁部が強く外反し、体部外面はかすかな条痕の縦ハケ目、内面はナデ調整。茶褐色で赤色粒子を多く含む胎土の「大和B型」に属する。須恵器杯B (1016) は外面をヘラ切り不調整、内面を多方向のナデ調整した平らな底部と端部が広い内傾面をなす直立する薄い口縁部とからなり、下端部が外肥厚する低い高台がつく。口径14.1cm、器高5.6cm。外表が青灰色で断面が暗紫色を呈し、微砂を含む胎土。

大和B型の鍋A

溝北部、暗渠出口出土の土師器碗C (1013・1014) は、口縁上部が内屈し、端部に明確な内傾面をつくる。口縁部のヨコナデ以外は不調整で、指押え痕と粘土紐の継ぎ目が残る。橙茶色で赤色粒子・雲母片を多く含む砂質の胎土。1013は口径12.6cm、器高3.8cm。1014は口径10.8cm、器高3.6cm。ともに、平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する。土師器杯A (1011) は平底で口縁上部が小さく外反し、端部はわずかに内肥厚する。外面はヘラミガキの粗いb1手法で、内面は底部にラセン暗文、口縁部に1段の斜放射暗文。明橙色で赤色粒子を多く含む胎土。口径15.7cm、器高3.3cm。径高指数21。平城宮土器Ⅲに属するとみられる。

石組暗渠SX1094埋土出土土器 土師器杯A、鉢B (1017)、甕A、鍋A (1018)、須恵器杯A (1019)、杯B (1020～1022)、杯G蓋 (1023)、鉢A、平瓶などがある。

土師器鉢B (1017) は、内彎する口縁の端部が内肥厚し、上方に鈍い面をつくる。外面は口縁上部付近までヘラケズリしたのち、線状に粗くヘラミガキし、内面はナデ調整で、暗文を施さない。口径20.6cm、器高6.0cm。明橙色で雲母片を多く含む胎土。鍋A (1018) は、口径28.2cm。半球形の浅い体部で、口縁部は強く外反し、端部は上方につまみ出して外側に凹線の巡る面をつくり、体部外面上半を縦ハケ目、下半は横ハケ目で、内面は上半に押え痕、下半に縦方向のハケ目が残る。口縁部内面は横ハケ目ののちにヨコナデ調整、外面は押え痕が残る「大和A型」。橙茶色で赤色粒子を多く含み、体部外面に薄く煤が付着し、内面の一部に炭化物の付着がある。口縁部の形状から飛鳥Ⅴに属するとみられる。

須恵器杯AⅢ (1019) は底部外面ヘラ切り (R) 不調整で、直線的に開く薄い口縁の端部が小さく外反する。外面には口縁部から底部に至る火襻きがあり、無蓋のAa類。淡青灰色で細砂を含む軟質の胎土。口径14.6cm、器高3.1cm。径高指数21。杯BⅢ (1020) は口径16.4cm、器高4.3cm。径高指数26。底部外面ヘラ切りで低い方形の高台がつく。口縁部下半にある鈍い稜を境にして器壁が薄くなり、端部は丸く収める。淡灰色で黒色粒子を多く含み、外面に灰色の降灰がかかる。杯BⅢ (1021) はヘラ切り (R) 不調整の底部が上げ底状に歪み、やや高い高台が底部内寄りにつく。完形で口径14.6cm、器高3.7cm。灰色を呈し、黒色粒子を多く含む胎土で、内面は黄灰色。東海地方産の可能性もある。杯BV (1022) は口径9.8cm、器高3.1cm。口縁部内面に3ヵ所の灯明痕がある。杯G蓋 (1023) はヘラケズリした頂部と口縁部との境に段をもつ笠形で、かえり裏の口縁端部が盛り上がり、くびれの長い低い宝珠形のつまみがつく。暗青灰色で

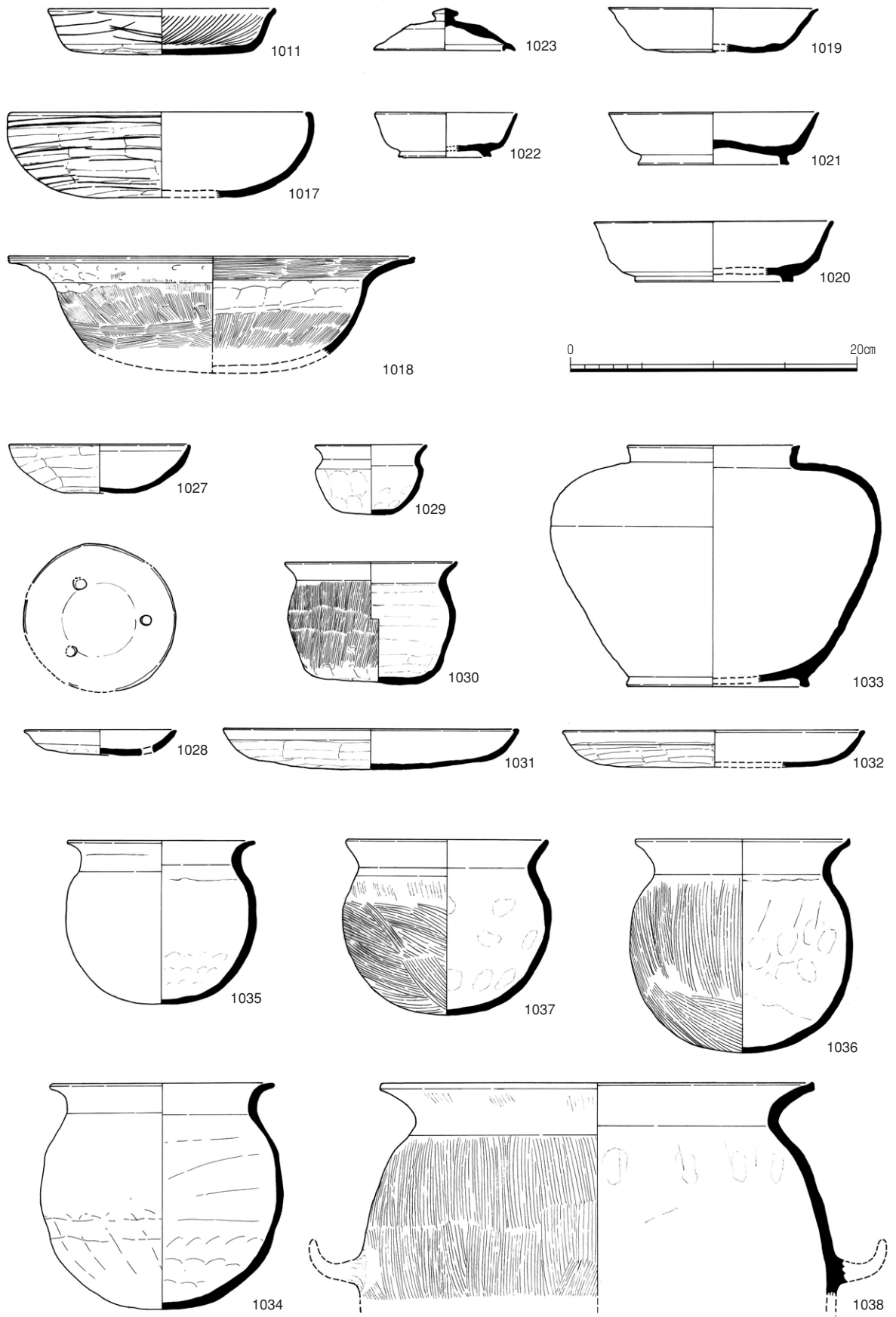


Fig. 53 石敷井戸SE1090と関連遺構(3)・SE1159・SE1160出土土器 1:4

黒色粒子を多く含み、外面全面に著しい降灰がかかり、内面中央部に褐色の汚れがつく。口径10.0cm、かえり径8.2cm、器高3.0cmで下層遺構起源の土器とみられる。

須恵器甕類 SE1090および関連遺構出土の須恵器甕類には、PL. 251に示した甕A (1024~1026)のほかに、石組の埋土から水溜遺構の甕A (248)やSD1130の甕A (646)の体部片が、石組周囲の溝から炭層3の甕A (534)、SD1110上流部SD1108の甕A (774)の体部片が出土し、下層包含層灰色シルト層の甕B (1472)の破片も含まれており、これらが井戸SE1090周辺での使用や直接的投棄を示すと考えることには困難があるが、井戸廃絶までに存在した甕であることは確かである。また、出土甕体部片には、甕A (1025)のほかに、SD1103やSG1100の埋土との間に接合関係が確認されるものがあり、北地区西北部の石組井戸SE1090と東北部の石組方形池SG1100の埋没の契機が共通している可能性が高いことが想定される。

甕A (1024)は大きく直線的に開く長い口頸部で、口頸部中程に2条の凹線文と緩やかな振幅の櫛描波状文2条が巡り、口縁端部は上下に肥厚し、外側に面をもつ。体部外面は、ごく細かい木目に直交する幅が不揃いの平行文を浅く粗く刻んだ叩き目で、内面は幅広くかすかな刻みもしくは無刻の浅い同心円文状当て具痕。青灰色を呈する微砂質の胎土で東海地方産とみられる。破片は、石組中央部のSD1093とSD1080に分布し、SD1110上の包含層にも破片がある。

甕A (1025)は、口縁部を欠くが、体部内面は中心に刻んだ7弁の車輪文を幅広く密な刻みの同心円文で囲んだ当て具痕。外面は右斜交で細刻の平行文叩き目ののち、細かな木目のカキ目を粗く施す。灰色を呈した微砂質の胎土で薄手硬質な焼成。井戸周囲の排水溝や石組外周の溝や石組暗渠SX1094上の土坑状の埋土、石組方形池SG1100などに破片が分布する。甕A (1026)は、大きく開く長い口縁部をもち、頸径24cm。体部外面は細刻で粗い平行文を刻んだ細かい木目の叩き目。内面は小芯で細く密な刻みの同心円文当て具痕。内外の調整の組み合わせや焼成が水溜遺構下灰粘土層出土の甕A (249)に類似し、東方遺跡のSD1700(後期流路)へ流出した破片がある。

ii 井戸SE1159出土土器 (Fig. 53-1034~1038)

井戸SE1159は、北地区と南地区を分けるSA1150~1152の3条の塀の北部東辺にある縦板組小型井戸で、土器は井戸枠内の中位から、土師器甕A 5個体と甕B 1個体が一括投棄された状況(PL. 73参照)で出土し、ほかに須恵器杯A、杯Bの小片がある。

土師器甕Aには、体部外面ナデ調整の「大和B型」(1034・1035)と、ハケ目調整の「大和A型」(1036・1037)とがあり、それぞれ大きさで、体部径13~14cmの小型(1035・1037)と、一回り大きい体部径15cm余(1034・1036)とがある。ナデ調整の甕Aは、球形の体部に弧を描いて強く外反する口縁部がつき、口縁端部は丸く収める。体部内面は下半に径3cm弱の押え痕の凹みが多数残り、上半は横~斜方向のナデ調整で平滑に仕上げる。体部外面のナデ調整は、内面の押え痕の範囲と対応する位置を周回する凹みの上下で異なり、成形時の作業台(外型)の痕跡である下部には、斜め方向のナデ調整と粘土紐の継ぎ目が認められる。小型の甕A (1035)は口径13.0cm、器高11.5cmで、口縁下部までの外面に煤が著しく付着するが、1034(口径15.4cm、器高15.9cm)にはほとんど認められない。ともに淡茶灰色を呈し、長石と雲母片を含む比較的粗い胎土。体部外面をハケ目調整する「大和A型」の甕(1036・1037)は、体部内面全般に当て具痕が残り、上半部を中心に板状工具によるナデ調整を施す。小型の1037は、口径14.0cm、器高

南地区と
接合

7弁車輪文

井戸枠内の
土器

大和B型
の甕

大和A型
の甕

12.3cmで、球形の体部と直線的に外反する口縁部とからなり、口縁端部は丸く収める。半乾燥時に施す斜め方向の二次ハケ目が体部上半部に及び、成形時の縦方向の一次ハケ目が頸部下の狭い範囲にしか残らない。甕A(1036)は口径14.9cm、器高15.0cmで、縦長気味の体部に、弧を描いて外反する口縁部がつき、口縁端部は上方に小さく肥厚して外側に面をもつ。体部の下1/3の範囲に底部の二次ハケ目を施す。ともに体部外面には厚く煤が付着し、肩部は二次加熱のために白赤色に変色する。甕B(1038)は、体部内面を板状工具によるナデ調整で平滑に仕上げ、肩部に部分的に当て具痕が残る「大和A型」で、強く外反する口縁の端部は、小さく上肥厚して外側に面をもつ。口径約30cm、体部径34cmで、体部中程に貼り付け技法による把手がつき、把手先端は欠損している。把手よりも下部に二次ハケ目が施される。肥厚が著しくない口縁端部と把手の特徴から、飛鳥Ⅳに属するとみられる。

iii 石敷井戸SE1160出土土器 (Fig. 53-1027~1033, PL. 234)

石敷井戸SE1160は、北地区と南地区を隔てる3条の塀(SA1150~1152)の西端、丘陵裾部にあり、先述したSE1090と同様に井戸枠周りを石敷と長方形の石組で囲む。石敷東南隅から石組溝SD1161が設けられ、3条の塀のうちで最も新しい塀SA1151の間をくぐって、水溜SX1220へ排水される。井戸枠はSE1090と同構造とみられるが、ほぼ完全に抜き取られ、石組とともに埋め立てられる。出土土器には、井戸枠抜取穴の土師器皿(1028)、壺B(1029)と石組埋土の土師器椀A(1027)、皿A(1031・1032)、高杯A、甕A(1030)、須恵器壺A(1033)などがあり、飛鳥Ⅴ、平城宮土器Ⅲ~Ⅴに属するものがある。

石敷を伴う
井戸

井戸枠抜取穴出土土器 土師器皿(1028)は口縁部をヨコナデ調整するほかは不調整で、口径10.2~10.6cm、器高1.7cmの浅くいびつな器形。茶灰色を呈し赤色粒子を多く含む胎土で、底部に焼成後に穿った径0.7cmの円形小孔が3個あり、外面の一部に煤が付着する。煮炊具の蓋として使用された可能性があるが、具体的用途は不明。壺B(1029)は体部内外面ともに押え痕とナデ調整。明茶色で赤色粒子を多く含む胎土で口径7.7cm、器高4.9cm。

石組埋土出土土器 土師器椀A(1027)は、上げ底気味の小さな平底から内彎気味に開き、口縁端部は小さく内肥厚する。外面を口縁端部までヘラケズリするc手法で、口径12.5cm、器高3.4cm。明茶褐色を呈し、赤色粒子と白色砂を多く含む胎土。平城宮土器Ⅳ~Ⅴに属する。皿A(1031・1032)は、口縁上部が直線的なb類で、口縁端部は丸く内肥厚する。内面はナデ調整で暗文はなく、外面のヘラケズリはヨコナデ調整した口縁上部にまで及びc0手法に近い。ともに淡茶褐色を呈し、白色砂と赤色粒子を多く含む胎土で、1031は口径20.4cm、器高2.9cm。1032は口径21.0cm、器高2.6cm。平城宮土器Ⅴに属する。甕A(1030)は体部外面を条の細かな縦ハケ目、平らな底部外面は中央部が不調整で外周部はナデ調整。内面は体部・底部ともに横方向に強くナデつける。明茶色を呈し、赤色粒子を多く含む胎土で、底部外面に煤が付着する。口径12.0cm、器高8.6cm。

須恵器壺A(1033)は口径11.8cm、体部径23.5cm、器高16.9cm。体部下半が直線的で、強く内彎する肩部が体部上寄りにある。口縁部は短く直立し、端部は小さく外肥厚して内傾面をつくる。高台は平らな底部の外縁につく。高台内の外面にロクロケズリ(R)が残り、底部内面を多方向にナデ調整するほかは、ロクロナデ調整で器壁は薄い。淡青灰色で黒色粒子を多く含み、

頸部外面から外側に白色の降灰がかかる。奈良時代末、平城宮土器Vに属するとみられる。

iv 井戸SE777出土土器 (Fig. 54-1039・1040)

井戸SE777は、西の谷の右岸出口、谷の合流部の南岸にある曲物を井戸枠とする小規模な井戸で、曲物内から少量の土師器、須恵器が出土した。土器には、土師器杯C、甕、須恵器杯H、甕などがあるが、図示し得たものはいずれも工房以前に属するものである。

工房以前の
土器

須恵器杯H (1039) は、受け部が短く、器壁の薄い口縁部上半が強く外彎する。受け部径12.6cm、かえり径10.6cm、残存高2.4cm。甕A (1040) は外反する長めの口縁部片。口径15.6cm。口縁端部を上方へつまみ出して外側に幅広い面をつくり、端部外面にはカキ目調整のちに、ヘラ状工具による刺突文を綾杉状に刻み、頸部中程に1条の太いヘラ書き波状文を乱雑に巡らす。白色微砂を多く含む胎土で、灰味を帯びた赤褐色を呈する。

v 井戸SE822出土土器 (Fig. 54-1041~1043)

下層遺構の
井戸

井戸SE822は、西の谷下流域右岸で検出した下層遺構である。石敷SX823の南端に設けられた5段の横板組の井戸で、枠板には転用材を用いている。掘方から平瓦が出土し、土器は、埋土最下層から土師器甕Bやロクロ土師器鉢、須恵器鉢Aなどが出土した。

ロクロ土師器

土師器甕B (1041) は厚手で平らな底部をもつ体部下半が残存し、把手は欠失する。体部外面は縦方向のハケ目調整で、底部はナデ消し、内面は体部を横方向に、底部は多方向にナデ調整する。茶灰褐色で微砂を多く含む胎土の「大和B型」。体部径約26cm。ロクロ土師器の鉢 (1042) は、銅鉢形の端正な半球形で、口縁端部は三角形に内肥厚して明確な内傾面をつくる。内面および口縁部外面はロクロナデ、外面下半は同心円状のロクロケズリ (R) で、底部中央に小さな平坦面をつくる。淡橙褐色を呈する微砂質の胎土。口径19.0cm、器高6.4cm。径高指数34。須恵器鉢A (1043) は口径18.6cmで、口縁部が上方で内彎し、口縁端部は外側が凹線状にくぼみ、内側に丸く肥厚する。体部中程に2条の凹線が巡り、下半はロクロケズリ (R)。淡青灰色を呈し、黒色微粒子を多く含む胎土で、口縁外面と底部内面に緑色の降灰がかかり、尾張猿投窯産の可能性はある。

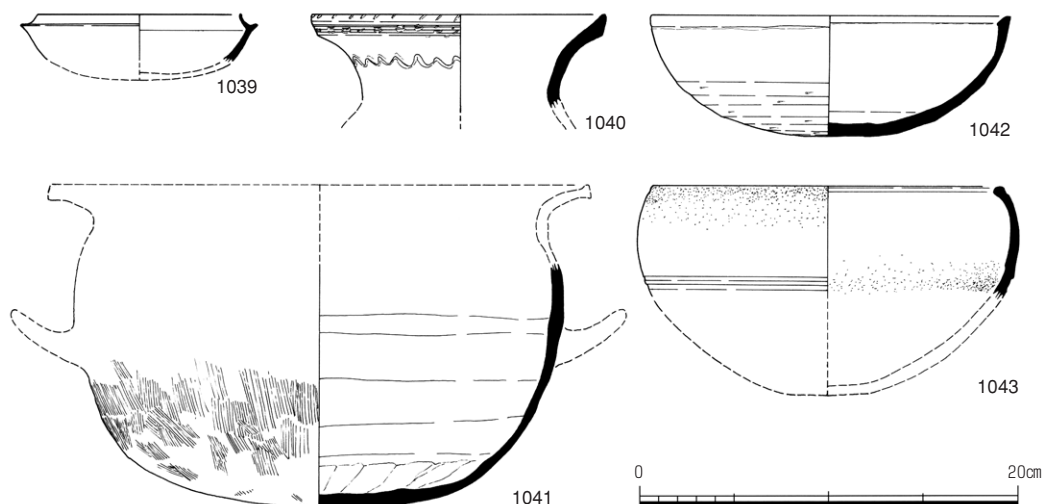


Fig. 54 井戸SE777・SE822出土土器 1:4

E その他の遺構出土土器

i 北地区石組方形池SG1100出土土器

(Fig. 55~57-1112~1153・1156・1160、PL. 237・238・251)

石組方形池SG1100は、南地区の水を、流路SD1700へ排出する水処理体系の一部としての沈殿池と考えられる。石積南辺西部の階段状の石積につながる南北溝SD1110を導水路とし、東北隅の石組溝SD1101を排水路とする。池の東辺石積は改修されて2重となり、導水路はのちに東南隅に流れ込むSD1103に付け替えられ、西・南辺の石積は大きく抜き取られている。埋土は、最上層（淡茶褐色砂質土）・上層（灰緑色砂質土）・中層（暗灰色土）・下層（灰色砂）・最下層（青灰色砂・黒色粘土）に分けられるが、いずれも東辺石積の改修後の堆積で、池底の最下層はごく薄く、下層は遺存する西辺石積上端までの堆積砂層、上層・中層は西辺石積抜き取りと一連の埋め立て土層と理解される。土器には土師器・須恵器のほか墨書土器・硯・漆附着土器・施釉陶器・円板などがあるが、多量の土師器とわずかの須恵器とからなる構成で、土師器鍋類が目立つ。土器は水系のつながりと変遷を反映して、水溜遺構・炭層・SD1130・SD1110出土土器などと類似する飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器に加えて、下層までに奈良時代前半の土器が、上層・中層までに奈良時代後半の土器が含まれる。なお、付け替え後の導水路SD1103出土土器と接合するものは、SD1103出土土器として次項に収めた。

水 処 理
沈 殿 池

堆 積 層 序

補 修 と
付 け 替 え

土師器 器種には杯A、杯C、杯D、杯G、碗C、皿A、鉢A、甕A、鍋などがあり、主に上層・中層出土土器に、墨書土器杯 (Fig. 97-66)、甕・鍋 (Fig. 98-82~85・88)、針書土器皿A (Fig. 99-104・108)、漆附着土器杯C (PL. 388-4)、SD1101出土土器に墨書土器杯A (Fig. 93-52) がある。

杯A (1112~1115) はいずれもb1手法で、口縁上部が外反するa類。中層出土の1112・1113・1115は口径17.8~20.4cm、器高4.6~5.0cm。最下層出土の1114は口径18.8cm、器高4.9cm、径高指数26。いずれも内面の暗文は底部のラセン文と口縁部の2段放射文であるが、前者は、口縁部の外反と端部の内肥厚が大きく、上段の放射文が幅狭い点から、平城宮土器Ⅰ～Ⅱに属し、上段の放射文の幅が比較的広い1114は飛鳥Ⅴに属するとみられる。放射文が左に傾く1115は底部内面のラセン文が細かく、細砂や赤色粒子を多く含む胎土で、右傾の放射文と比較的粗いラセン文をもつ1114は、明橙色で微砂や雲母片を多く含む胎土である。SD1101出土の杯A (1150) は口径16.2cm、器高3.4cm、径高指数21。平底で内彎気味に開く口縁端部近くまでをヘラケズりするc手法。内面はナデ調整で暗文はなく、明茶褐色で赤色粒子を多く含む胎土。平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する奈良時代後半の土器。

杯 A

杯Cには杯CI、杯CII (1116)、杯CIII (1117・1118・1128) があり、いずれもa0手法。1128が中層出土であるほかは、最下層出土。杯CII (1116) は丸底で口縁上部が屈曲し端部が凹線状をなす。明茶色の精緻な胎土で底部外面に針書きをもつ。口径15.5cm、器高3.8cm、径高指数25。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属す。杯CIII (1117・1118) は口径13.9cm、器高3.0~3.2cmの同大であるが、1118は丸底で口縁端部が内肥厚し、明茶色で砂粒を含む胎土で、内底面に炭化物の汚れが付き、底部外面に針書きをもつ。これに対して1117は小さな平底から屈曲する口縁の端部が小さく外反

杯 C

して、凹線状の鈍い内傾面をなし、黄褐色で微砂を含む胎土で、飛鳥Ⅳ～Ⅴでもより新しい様相をもつ。1128は口径12.3cm、器高2.7cm、径高指数22。肉厚な平底で、口縁端部は鈍い内傾面をなす。淡褐色で砂粒を多く含み、底部外面に黒斑をもつ。暗文は底中央に2重のラセン文、口縁部に太い1段放射文を施し、底部外面に針書をもつ。なお、方形池出土の杯CⅢにはほかに、漆附着土器(PL.388-4)、墨書土器(Fig.97-66)があり、いずれも飛鳥Ⅴに属する。

- 杯 G 杯G(1119～1121)はいずれもa0手法。上層出土の杯GⅡ(1119・1120)は口径14.6～14.7cm、器高3.5～4.0cm。1119は平底気味で直線的に開く口縁の端部に鈍い内傾面をつくり、淡褐色で砂粒を含み、内外面に煤が付着する。1120は口縁上部が内彎し、端部はヨコナデによって外反し幅広い内傾面をもち、口縁内面にコテ状工具の痕跡が、外面に粘土紐の継ぎ目が残る。灰白色で赤色粒子と砂粒を多く含む胎土。口縁部外面に炭化物の付着がみられる。中層出土の杯GⅢ(1121)は口径11.5cm、器高3.4cm。丸底で内彎気味の口縁上部を強くなでて外反させ、凹線状の内傾面をつくる。淡褐色で砂粒を多く含む胎土。SD1101出土の杯G(1151)は、1121と同じ凹線状の内傾面をもつ。口径13.6cm、器高3.2cm。明褐色で砂粒と赤色粒子を多く含む。SD1101出土の杯G(1152)は口縁端部が小さく外肥厚するa類で、杯CⅢに類似した形態。淡褐色を呈し赤色粒子を多く含む胎土。口縁部内面に3ヵ所以上の灯芯痕が残る灯明皿。椀C(1122)は上層出土のほぼ完形品。口径13.2cm、器高4.3cm。外面にスノコ状の圧痕が残る小さな平底で、口縁端部近くが内彎して内傾面をつくる。淡褐色で赤色粒子を多く含む胎土。平城宮土器Ⅲ以後に属する。

- 皿 A 皿AIには、a0手法(1123・1124)とb0手法(1125)がある。中層と最下層出土片が接合する皿A(1123)は、肉厚な底部から薄い口縁部が直線的に開き、端部は大きく内肥厚して内傾面をつくる。内底面全体にラセン暗文、口縁部に1段の放射暗文を施し、茶褐色で赤色粒子を多く含む胎土。内面の大半と外面の一部に煤がつく。口径23.2cm、器高2.6cm。中層出土の皿AI(1124)は、口縁端部を内折して外側に面をつくり、暗文は底部内面の中央寄りに1重のラセン文、底部外寄りから口縁部に長い1段放射文を施す。上げ底気味の底部外面に木葉痕がかすかに残り、内面に薄い汚れがつく。淡褐色で赤色粒子の少ない胎土。口径22.4cm、器高2.4cm。1123・1124はともに飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅱに属する。上層出土の皿AI(1125)は直立する口縁の端部が丸く内肥厚し、暗文は細かな1段放射文。淡茶色で砂粒を多く含む。口径22.6cm、器高2.9cm。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。「母波司阿」の針書土器皿AI(Fig.99-104)は、a0手法で口縁端部が丸く内肥厚し、1段の放射暗文。口径20.2cm、器高2.4cm。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

皿AⅡ(1126)は直線的に開く口縁部と端部の形状は皿AI(1123)に似るが、b0手法で、暗文は底部に2重のラセン文、口縁部に左傾きの1段放射文。淡褐色で赤色粒子が少ない胎土。口径18.7cm、器高3.1cm。皿A(1127)は、口縁端部を強くヨコナデして小さく内肥厚し、外面は口縁部近くまでをヘラケズリするc手法。内面はナデ調整で、暗文はなく、淡橙色を呈する砂質の胎土。平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する可能性がある。SD1101出土の皿AⅣ(1153)はa0手法で、口径12.9cm、器高2.1cm。平底で直線的に開く口縁の端部が外肥厚して鈍い内傾面をもち、内面中央に1重のラセン文、口縁部に左傾きの1段放射文を施す。中層出土の皿AⅣ(1129)は平底で短く外反する皿Gに似た器形のa0手法で、淡褐色を呈し雲母片を多く含む胎土。口径12.7cm、器高1.8cm、径高指数14。

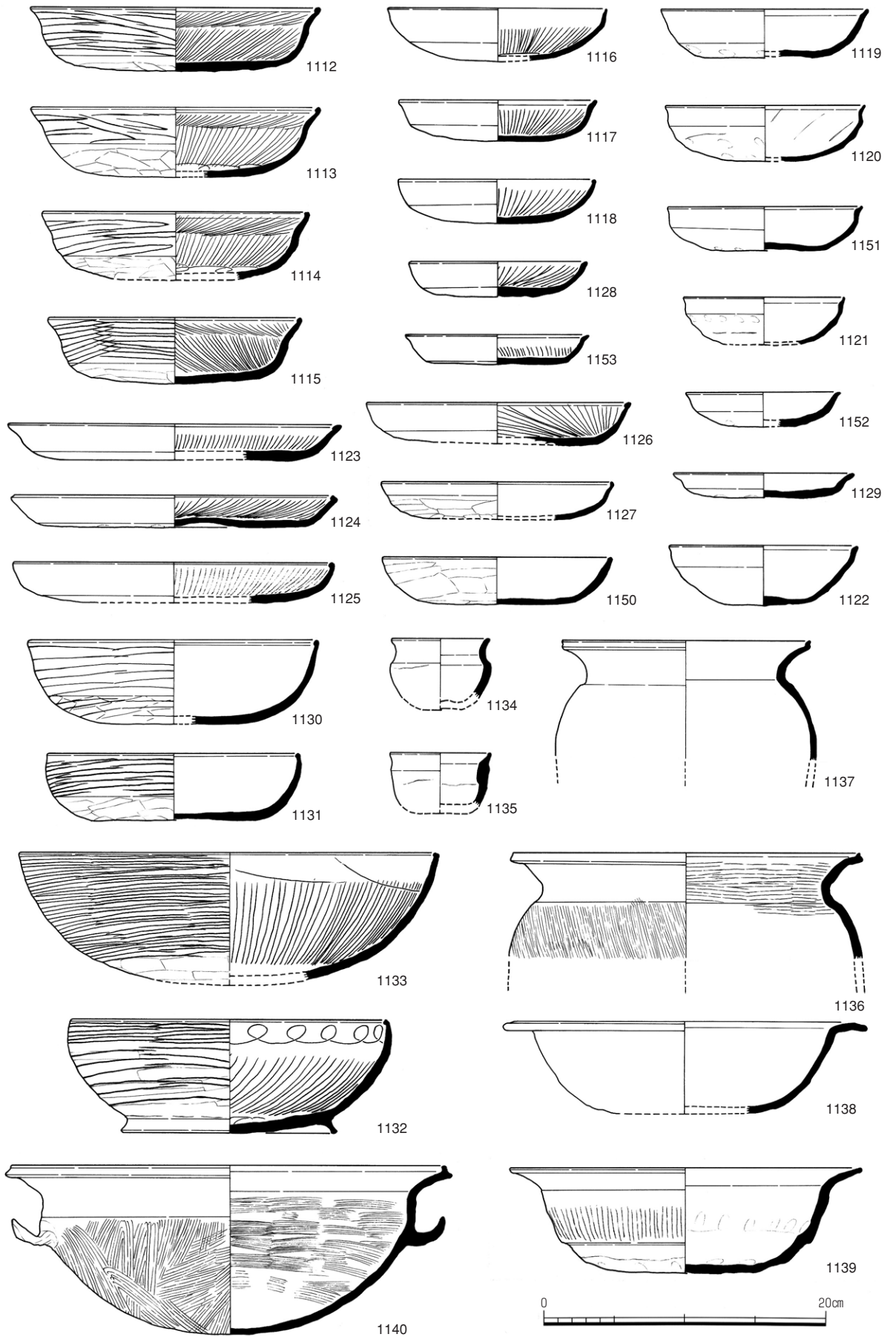


Fig. 55 石組方形池SG1100出土土器 (1) 1:4

- 鉢 B 鉢B (1130・1131) はb1手法の平底で、内彎する口縁の端部を内肥厚させ、内面はナデ調整。大型の1130は上層出土で、口径20.4cm、器高6.0cm。径高指数29。ヘラケズリが軽く、粗いヘラミガキが底部近くまで及ぶ。明茶色で微砂の多い胎土。1131は中層出土で、口径17.6cm、器高4.7cm。底部外周の器壁が厚く、中央部が薄い。橙褐色で砂粒の多い胎土。ともに飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。鉢C (1132) は、鉢Bに高台をつけた器形で、口径22.2cm、器高8.1cm、高台径15.0cm。体部下半を広くヘラケズリするb1手法で、内彎する口縁の端部を内肥厚させ、外方へ踏ん張る高台は細く、底部中央が丸く垂れ下がる。内面の暗文は南北溝SD1103の杯CI (1057) と同様に、底部中央付近から始まる1段放射文と口縁部上端の上向きのラセン文で構成され、明橙茶色を呈し微砂や赤色粒子を多く含む胎土も共通する。平城宮土器Ⅱに属する。鉢A (1133) は最下層と下層とに破片があり、浅い半球形の口縁の端部は内肥厚して、上方に面をもつ。底部を幅広くヘラケズリし口縁部は密にヘラミガキ。内面はナデ調整で、細かい1段の放射暗文を密に施し、上部に円弧の長い連弧文を施す。赤褐色で微白砂・赤色粒子を多く含む精良土。内面に広く褐色の汚れが付着し、口径29.2cm、復元器高9.4cm。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。
- 壺 B 壺B (1134・1135) は中層・上層からの出土で、器形では、口縁部がくびれる1134と端部を薄く引き出した短い口縁部の1135とは大きく相違するが、頸部下の内外面に粘土紐の継ぎ目が残り、淡褐色・黄褐色で赤色粒子を多く含む独特の胎土が、「大和B型」の甕とも共通する。1134の口径6.8cm、残存高4.3cm、1135の口径7.0cm、残存高3.7cm。
- 甕 A 甕A (1136) は、頸部のくびれが強い「大和A型」で緩やかに開く口縁の上端部が強く外反し、内側を上方へつまみ出して外側に面をつくる。口頸部内面は条痕の粗い横ハケ目で、外面は縦ハケ目をナデ消し、体部内面ナデ調整、体部外面縦ハケ目。黄白色で石英砂粒を含む胎土。口縁端部の形状と頸部のくびれから平城宮土器Ⅱに属するとみられる。口径24.4cm、体部径25.2cmで、甕Bの可能性もある。甕A (1137) は口縁・体部内外面ともにナデ調整で器壁が薄く、緩やかに開く口縁の端部を上方に長くつまみ出して外側に面をつくり、頸部外面には口縁部のヨコナデとの境に段ができる。淡褐色を呈し赤色粒子を多く含む胎土で「大和B型」あるいは「南河内型」。口径17.8cm、体部径18.5cm。外面は煤の付着と二次加熱による剥離が著しく、内面には全面に炭化物が付着する。中層出土で外面に段をもつ頸部の形状から奈良時代に降るとみられる。
- 鍋 A 鍋A (1138・1139) には、全体に薄い器壁で、体部内外面を平滑にナデ調整するもの (1138) と体部の器壁が厚く、体部外面を粗い縦ハケ目、底部内面を指頭による押圧ののちナデ調整するもの (1139) があるが、ともに底部外周に作業台縁辺によって生じた段をもつ。1138は口頸部内面に稜をもって強く外反し、口縁端部は丸く収める。茶褐色を呈し細砂・赤色粒子を多く含む胎土で、甕A (1137) と同じ産地とみられ、口径26.0cm、器高6.5cm。外面は煤により黒褐色を呈し、内面の褐色の汚れも著しい。中層出土。1139は弧を描いて外反する口頸部で、口縁端部を薄く丸く収め、淡褐色を呈し砂粒と赤色粒子の多い胎土の「大和B型」で、底部に大きな黒斑がつく。口径24.9cm、器高7.6cm。最下層出土。
- 鍋B (1140) は薄い器壁の体部内外面をハケ目調整する「大和A型」で、強く外反する口縁の端部を内方へ長くつまみ出し、外側に凹面をつくる。把手は基部幅が広く、上端に丸みのある三角形で薄手。淡橙色を呈し砂粒の多い胎土で赤色粒子は少ない。口径30.7cm、器高12.1cm。

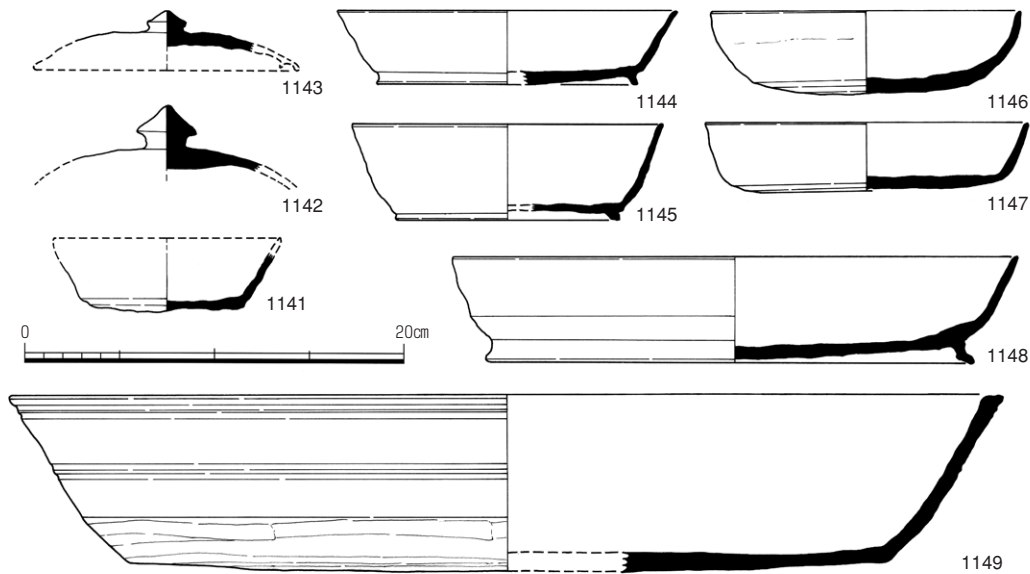


Fig. 56 石組方形池SG1100出土土器(2) 1:4

中層と上層とから出土した破片によって、ほぼ完形に復元できる。なお、「入入」の墨書土器鍋A (Fig. 98-85) は1140と同じ技法の肩部片で、上部包含層出土である。

須恵器 器種には、杯A (1141)、杯B (1144・1145)、杯Ac (1146)、杯B蓋 (1142・1143)、皿A (1147)、皿B (1148)、盤A (1149)、甕A (1156)、甕C (1160) などのほか、漆附着土器杯B (PL. 388-19) があるが、土師器に比べて少量であり、大半は飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

須恵器の
構成

杯AaⅣ (1141) は直線的に開く口縁部で底部外面へラ切り (R) 不調整。復元口径約12cm。残存高3.1cm。断面が明紫色、外表が青灰色で砂粒を少量含む堅緻な焼成。飛鳥Ⅳ～Ⅴの陶邑窯産。底部外面に「ハ」のヘラ記号を刻み、内面に漆状の付着物がある。中層出土。杯Ag蓋 (1143) はくびれの小さな三角形のつまみをもち外面はロクロナデ (R)、内面は多方向のナデ調整。淡灰色で細砂粒を多く含む堅緻な焼成。口縁部を欠くが復元口径約14cmでかえりをもつa類と推定される。蓋 (1142) は大型で高い円錐形のつまみをもち、中央が肉厚な頂部外面はロクロケズリ (R)、内面はナデ調整。青灰色で砂粒を多く含む堅緻な焼成。上層出土。

杯 A

杯BⅡ (1144) は口径17.9cm、器高4.0cm。径高指数22。中央が肉厚な底部外面はロクロケズリ (L)、高台は細くハの字に踏ん張り、薄い器壁の口縁部が直線的に開く。淡灰茶色で黒色粒子を多く含む精良土。色調・胎土・高台の形状などから猿投窯産とみられ、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。杯BⅢ (1145) はロクロケズリ (R) した薄い底部に低い台形の高台がつき、口縁下半が内彎気味に開き、端部は丸く収める。淡青灰色で微砂粒を含む堅緻な焼成。底部内面に摩滅痕がある。口径16.2cm、器高5.1cm、径高指数31で飛鳥Ⅳ～Ⅴに属す。漆附着土器杯BⅣ (PL. 388-19) はヘラ切り (R) 不調整の厚い底部が垂れ気味で、内寄りにつく太い高台がハの字に踏ん張る。青灰色で微砂質の胎土。口径13.7cm、器高4.5cm。径高指数33。飛鳥Ⅳに属する。杯AgⅡ (1147) は口縁部外面に部分的に降灰がみられる有蓋の器種で、器壁の厚い底部はロクロケズリ (R) ののちナデ調整。底部との境が丸く、口縁端部は丸く収める。淡青灰色で粗い砂粒と黒色粒子を多く含む胎土。底部外面に「十」のヘラ記号。口径16.8cm、器高3.7cm。東海地方産の可能性が有る。杯AcⅢ (1146) は土師器杯Cに類似した形態で、底部外面をロクロケズリ (L)、内面

杯 B

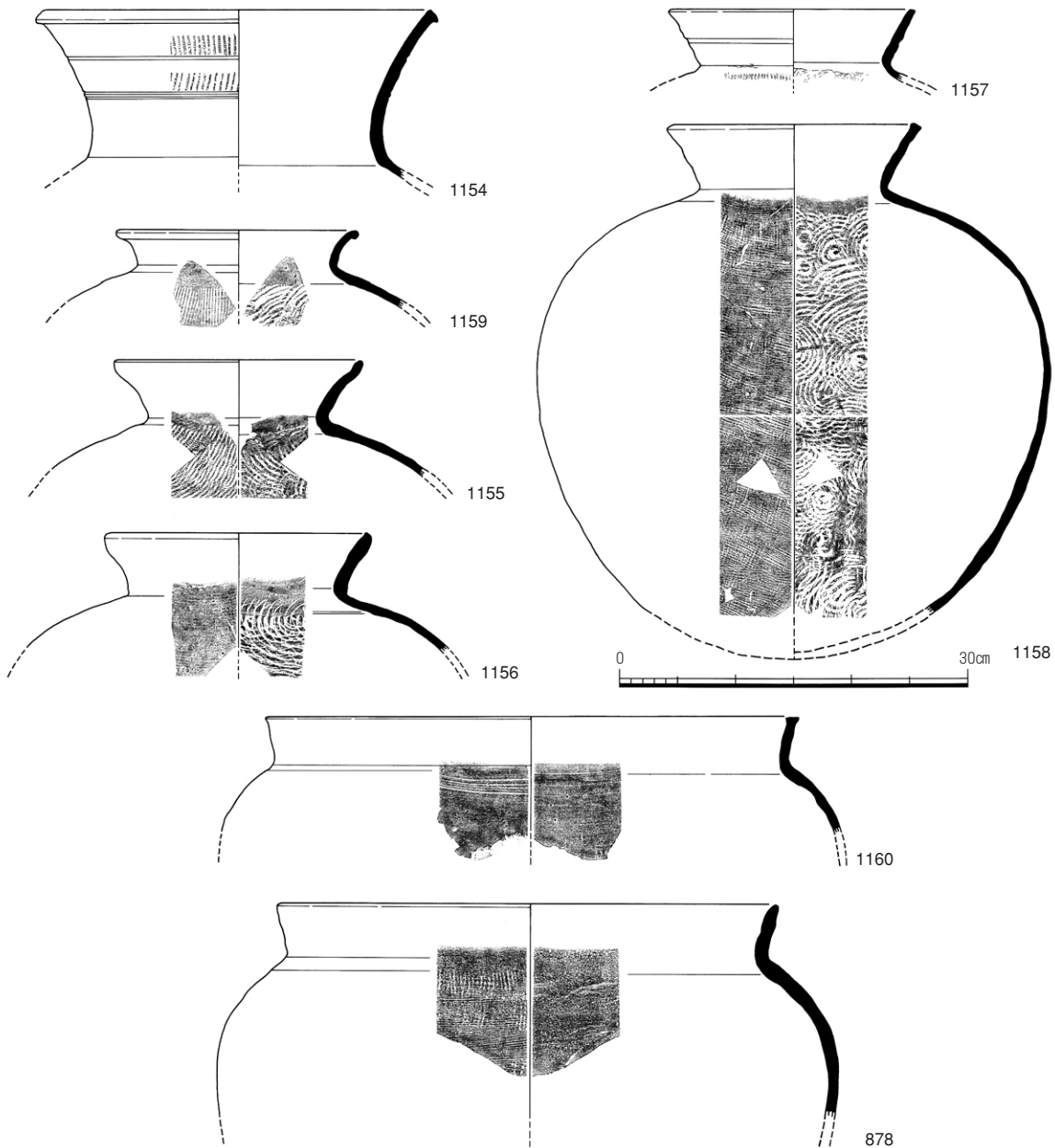


Fig. 57 石組方形池SG1100(3)・南北溝SD1103出土須恵器甕 1:6

は底部中央をロクロナデ調整。灰白色で粗い砂粒を多く含む胎土。内外面に茶褐色の汚れがつく。口径16.2cm、器高4.4cm。

大皿B (1148) は、口縁下半部と底部外面をロクロケズリ (R)。垂れ気味の底部内面は、厚い器壁の高台裏までを多方向のナデ調整。薄く直線的に開く口縁端部は丸く収め、淡灰色で砂粒を多く含む胎土で、口径29.7cm、器高5.7cm。高台は細く、中程から大きく外屈して端部を丸く収める。底部外面に降灰と部分的に淡黄褐色を呈する箇所があり、杯BII (1144) と同じ東海地方産。最下層出土。盤A (1149) も最下層出土で、平坦な底部外面はロクロケズリ (L)、内面はナデ調整。口縁部下半はヘラケズリ。直線的に開く口縁の端部は外肥厚して上方に面をつくる。口縁端部直下と中程とに各2条の凹線文が巡り、中程の凹線文の位置に把手がつく可能性があるが遺存しない。灰色で外面と底部とに降灰が残る伏せ焼き。口径52cm、器高9.3cm、径

高指数18。外表が青灰色で、素地が明黄茶色を呈する東海地方産。

SG1100出土須恵器甕片には、SG1100単独の甕A (1156)、甕C (1160)、SD1103・SG1100・SD1101にまたがる甕A (1155・1158)、SD1103・SG1100とで接合する甕A (1154) などのほかに、図示していない甕A・甕B・甕C・甕Xがあり、SK1128出土の甕C (878)、SE1090石組埋土の甕A (1025) など破片がSG1100出土片と接合するものも多い。ここでは、接合作業の現状で、SG1100単独出土のものを記述し、その他は現状で最も上流にあたるSD1103出土土器としたが、いずれも本来の出自ではない。

甕A (1156) は肉厚で外傾するやや長めの口縁部で、口縁端部の内側が小さく突出して尖る。口径22.3cm、頸径19cm。推定体部径約42cm。体部内面は、中央の小さな芯部を幅広で密な刻みの同心円文で囲んだ当て具痕。体部外面は、細刻で均一な平行文叩き目ののち広い木目のカキ目を密に施す。灰色を呈す微砂質の胎土で、口縁部内側と外面とに厚く自然釉がかかる。奈良時代前半に降る可能性がある。甕C (1160) はSG1100の下層などから出土。口径46.2cm、体部径53cmの大型で推定容量約70ℓ。直立する口縁の端部は内外に肥厚して上方に面をもち、体部内外面の叩き目や当て具痕をロクロナデ調整で消す。断面が淡橙色、外表が青灰色を呈し、白色土の縞が入る微砂質の胎土で尾張猿投窯産であろう。

ii 南北溝SD1103出土土器

(Fig. 57～61-1044～1111・1154・1155・1157～1159、PL. 234～237・251)

石組方形池SG1100東南隅部に流れ込む素掘溝で、出土土器には比較的多量の土師器と少量の須恵器があり、墨書土器、転用硯、漆パレット、漆壺、灯明皿などが含まれる。土器組成の概数は、土師器供膳具40個、須恵器供膳具10個、土師器煮炊具23個であり、平城宮土器Ⅱ～Ⅲに降るものを含む土師器杯A・皿Aと大型の土師器甕・鍋類が目立つ点を含めて、近接する土坑SK1153での組成に類似する。また、須恵器甕類の接合関係から南地区水溜遺構や炭層からの流入が確認されるとともに、方形池SG1100の上部層出土片と接合する土師器 (1050・1115・1081・1132・1086・1104・1140)、須恵器 (1105・1107・1109) が多く含まれる。

土師器 器種には、杯A、杯B、杯C、杯G、椀C、高杯A、皿A、皿B、皿E、鉢B、盤B、甕A、甕B、鍋A、鍋Bがあり、高杯A、皿B、鍋Bには墨書をもつものがある。多様な皿A、杯G、杯Aと、使い込まれた甕・鍋類の種類と量の多さが目立ち、南地区の土器群にみられない高杯Aの出土が特徴的。

杯Aには、杯AI (1044～1052)、杯AⅢ (1053) があり、いずれも口縁上部が外反するa類。調整手法にはb1手法 (1044・1046～1048・1050)、a1手法 (1053)、a0手法 (1049・1051・1052) があり、底部を欠く1045もb1手法とみられる。内面の暗文は、b1手法に2段放射文 (1044・1045) と1段放射文+連弧文 (1046・1047) があり、内面の風化が著しい1050は下段の放射文が左傾することのほかはわからない。a1手法には、1段放射文+連弧文 (1053)、a0手法には1段放射文 (1049) と無文 (1051・1052) がある。奈良時代前半の土師器杯Aでの手法と暗文の変遷過程に照らすと、2段放射文は飛鳥V～平城宮土器Ⅱ、1段放射文+連弧文は平城宮土器Ⅱ、1段放射文や無文は平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属する。

杯AI (1044) は底部のラセン文が細かな3重で、口縁上段の放射文が幅広く、古相を示す。

土器の構成

土師器の器種

杯 A

口径19.2cm、器高4.2cm、径高指数22。扁平な器形と内屈気味で大きく肥厚する口縁端部は新相を示し、橙褐色で堅緻な精良土で、上下段ともに左傾きの放射暗文であることからすれば、暗文に見る古相は産地の個性と理解される。1段放射文+連弧文の1046~1048は口径18.0~19.8cm、器高4.1~4.5cm、径高指数23で、底部のヘラケズリの範囲が2段放射文の1044よりも狭くなる。1048ではヘラケズリが木葉痕を残す程度に浅く、暗文が底部のラセン文、口縁部の放射文、連弧文ともに間隔が粗い。平城宮土器Ⅱでもより新しい様相である。1段放射文の1049は、無文の1051と同様に口縁部が屈曲気味に立ち上がる器形で、口径18.7cm、器高4.3cm、径高指数23。明橙色を呈し、微砂、赤色粒子、雲母片を多く含む胎土。底部外面に大きな黒斑があり、底部内外面に針書きをもつ。1052は小さな平底から斜めに開く杯Cに似た器形であるが、口縁上部で外反し端部が巻き込むように肥厚し、底部外面に木葉圧痕が残る点から杯AIの異形とみられ、明褐色で微砂と赤色粒子を多く含む胎土。口径18.8cm、器高4.1cm。杯AⅢ（1053）は口縁部が小さく外反し、端部を巻き込まない異形品。淡褐色で微砂の多い胎土で、口径11.6cm、器高2.8cm、径高指数24。連弧文は小さく外反する口縁端部に幅狭く施される。

平城宮
土器Ⅱ

杯AIの
異形品

杯B蓋

杯B蓋には口径18.4cmの杯BⅡ蓋（1054）と口径23.0cmの杯BⅠ蓋（1055）がある。1054は口縁部を屈曲させた扁平な頂部で、外面は横方向のヘラミガキ、内面に粗いラセン文をもつ。淡褐色で微砂と赤色粒子を多く含む胎土。1055は口縁端部を小さく丸く内肥厚させ、扁平な頂部外面を4分割のヘラミガキ。大振りのつまみの上面と頂部内面とに円弧の大きなラセン暗文を施す。頂部内面の周縁部に「E」字形の針書きをもつ。淡褐色で微砂・赤色粒子を多く含む精良な胎土。杯BⅠ（1056）はb1手法で、大きく開く口縁部の端部が丸く内肥厚する。口縁部の暗文は上段の幅が広い2段放射文。底部外周寄りの高台はハの字に開き内端が接地する。赤褐色で赤色粒子を多く含む精良土。口径23.0cm、器高6.5cm。飛鳥Ⅴに属するとみられる。

杯B

杯C

杯Cには杯CⅠ（1057）と杯CⅡ（1058~1061）がある。杯CⅠ（1057）は丸底で口縁端部が小さく外反し、内傾面をつくる。粗いヘラミガキのb1手法で、内面の暗文は底部にラセン文、口縁下段に放射文、口縁上段に円弧の大きな連弧文を施す。茶褐色で、微砂や赤色粒子を多く含み、内面全体に煤がつく。大型で連弧文をもつ杯Cは藤原宮内裏東大溝SD105や平城宮土器Ⅱの長屋王邸溝状遺構SD4750出土土器に類例がある。口径18.4cm、器高4.2cm。杯CⅡ（1058~1061）はいずれもa0手法で、口径13~14.0cm、器高2.6~3.2cm、径高指数19~23。口縁上部で屈曲する1059は淡褐色で微砂を含む胎土でa類。1段放射暗文を粗く施す。丸底の1058は口縁端部が小さく外反し、鈍い内傾面をつくる。乳褐色で砂粒を多く含む胎土で、暗文の間隔が粗い。ともに飛鳥Ⅳ~Ⅴに属する。1060は器高が浅く、内面の暗文は口縁端部におよぶ。褐色を呈し微砂を多く含む胎土。平城宮土器Ⅱ~Ⅲに属す。1061は内面の暗文が不明で杯G類との区別が難しいが、明茶色で赤色粒子を多く含む胎土。内面に灯芯痕状の汚れがある。杯C（1068・1069）は小さな平底で、口縁上部で屈曲し、口縁端部が凹線状の内傾面をなす。内面にコテ状工具痕、外面に粘土紐の継ぎ目が残る。淡褐色で微砂を多く含み内面に暗褐色の汚れがつく。1068は口径12.6cm、器高3.8cm。1069は口径13.4cm、器高3.6cm。いずれも平城宮土器Ⅲ以降に属するとみられる。

杯C

杯G

杯G（1062~1067）には量方でGⅢ（1062~1064）、GⅣ（1067）、GⅤ（1065・1066）があり、口縁部の形状などでは、Ga類（1062・1064）、Gb類（1063・1067）など多様なものがある。1062は口径13.4cm、器高3.6cm。外面に粘土紐の継ぎ目が残る。1063は口径14.4cm、器高3.5cmで底部中

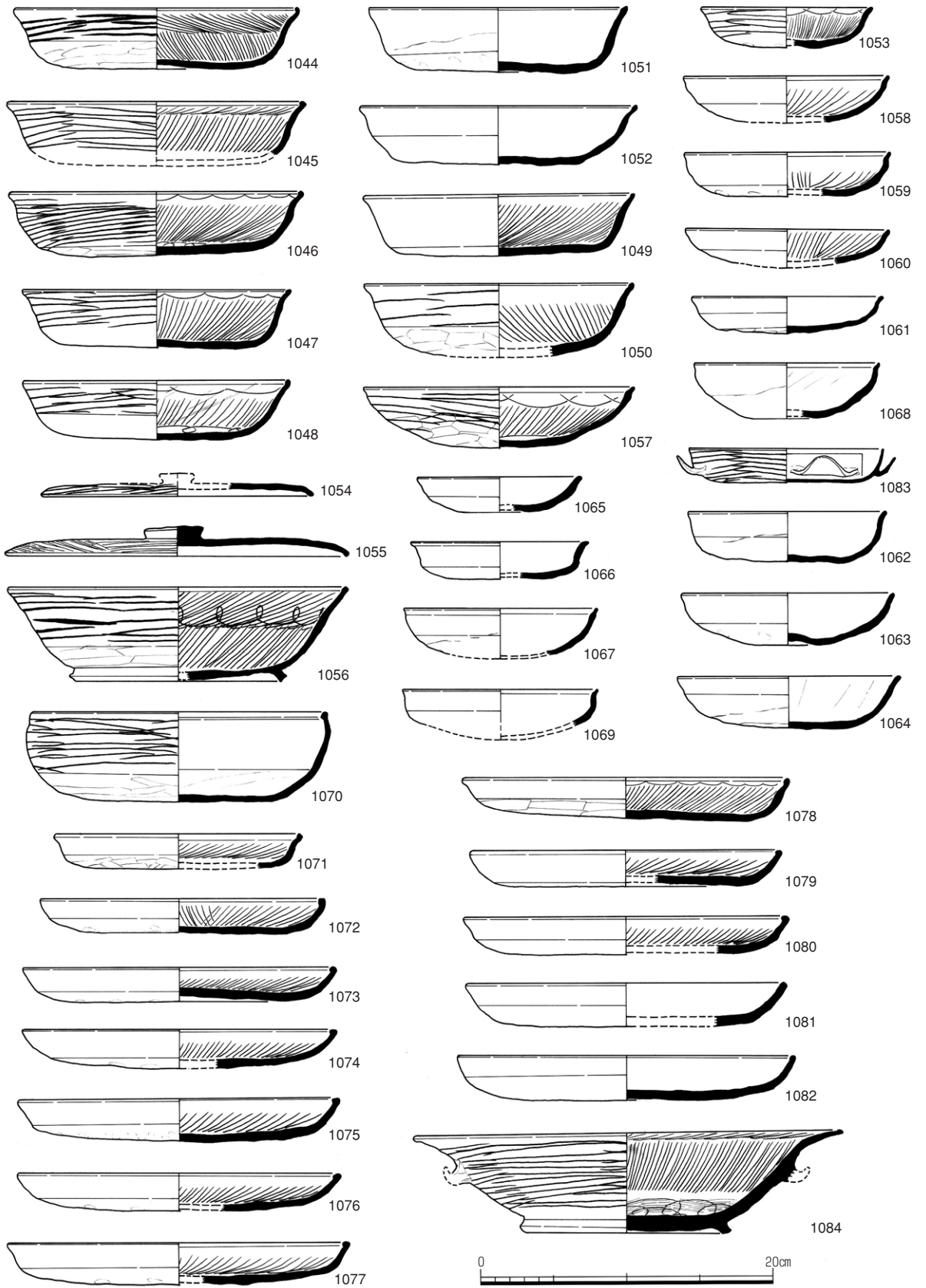


Fig. 58 南北溝SD1103出土土器(1) 1:4

央が上げ底となり、内外面ともに二次加熱を受けて淡褐色に変色している。1064は口径15.4cm、器高3.7cm。黄白色で砂粒の多い胎土。1067は口縁部に内傾面をつくり、内面に板状工具痕、外面に粘土紐の継ぎ目が残る。1065は口径11.2cm、器高2.4cm。1066は口径12.0cm、器高2.6cm。ともに口縁端部が小さく外反し、灯明痕が残る。

鉢 B 鉢B (1070) はb1手法の平底。内面はナデ調整で暗文を施さない点ではSG1100の1130・1131と類似するが、内彎気味の口縁部の上部が内屈し、内側に巻き込んだ端部に鈍い内傾面をつくる点が異なる。橙褐色を呈し、口径19.9cm、器高6.2cm。

高杯Aは、墨書土器高杯A (Fig. 93-48) のほかに杯部片が数片あるがいずれも図化し得ない。墨書土器高杯A (48) はヘラケズリで面取りした脚柱部に、動物の頭・胴・脚等を描いている。高杯Aは、SG1100、SE1090埋土など奈良時代に降る資料を含む北地区の土器群でも散見するが稀少であり、南地区にはみられない器種である。

皿 A 皿Aには皿AI (1072~1082) と皿AII (1071) とがあり、bo手法の1071・1078を除けば、いずれもa0手法で、内面の暗文には、1段放射文+連弧文 (1078)、1段放射文 (1071~1077・1079・1080・1082)、無暗文 (1081) がある。皿AII (1071) は口縁上部が外反するa類で、軽い削りのbo手法。内面の1段放射暗文は斜めに傾き、明橙色で微砂を多く含む胎土。口径16.7cm、器高2.4cm。皿AI (1072) は口径19.5cm、器高2.5cm。厚手で口縁上部が内屈する異形品。暗文は左傾きの箇所がある。淡褐色で赤色粒子を多く含む胎土。皿AI (1073・1074・1076) は丸く巻き込むように内肥厚する口縁端部で、暗文が細かく、口径21.0~21.8cm、器高2.4~2.7cm。皿AI (1075・1079) は口縁上部を段状にヨコナデし、端部は小さく内肥厚する。放射文の間隔が粗く、平城宮土器Ⅱ~Ⅲに属する。1075の口径は21.8cm、器高は3.0cm。1079は口径21.0cm、器高2.5cm。皿AI (1078) は軽いケズリのbo手法で、口縁端部が丸く肥厚し、内面の暗文は密な1段放射文と口縁端部近くの連弧文。黄橙色で赤色粒子を多く含む。皿AI (1081) は端部が肥厚せずに丸く収めた口縁で、淡褐色で赤色粒子を多く含み、口径21.6cm、器高3.0cm。皿AI (1077・1082) は口径23.0cm、器高2.9~3.1cm。暗文がかすかである。墨書土器皿BI (Fig. 93-50) は口縁端部を小さく内肥厚して上方に面をつくり、外面はa1手法で、内面は底部に3重のラセン文と細かな下段の放射文、口縁部に上段の放射文を施す。肉厚な底部が垂れ下がり、長方形の高台は内端が接地する。淡褐色で赤色粒子を多く含む胎土。

皿 E 皿E (1083) は平底から端正な弧を描いて直立する口縁部に至る器形。三角形の把手を含めて極めて薄い器壁とb3手法による丁寧な作りが特徴的で、微砂と赤色粒子を含む赤褐色の精良土。口径13.2cm、器高2.4cm。径高指数18。飛鳥Vの藤原宮東面内濠SD2300等に類例がある。

盤 B 盤B (1084) は口縁上部が強く外反し、肉厚な底部の周縁に基部の太い高台がつく。底部外面はナデ調整で口縁部外面に横方向の分割ヘラミガキ、底部内面には条の細かなハケ目を施したのちに、4重の細かなラセン文、口縁部には細くて密な2段の放射文を施し、上段の放射文は口縁部の外反する範囲に太く施される。口径29.1cm、器高6.9cm。内面および口縁部外面の一部に茶褐色の汚れがあり、淡褐色で赤色粒子を多く含む胎土。

甕 A 甕A (1085~1092) には法量で口径22.0~26.7cmの甕AI、口径15.8~18.7cmの甕AII、口径13.8~14.9cmの甕AIIIがあるが、いずれも外面に煤が多量に付着し、使い込まれている。甕AI (1085) は、口縁部の外反が小さく、口縁端部は上方へつまみ出して外側に小さな面をつくる。体部外

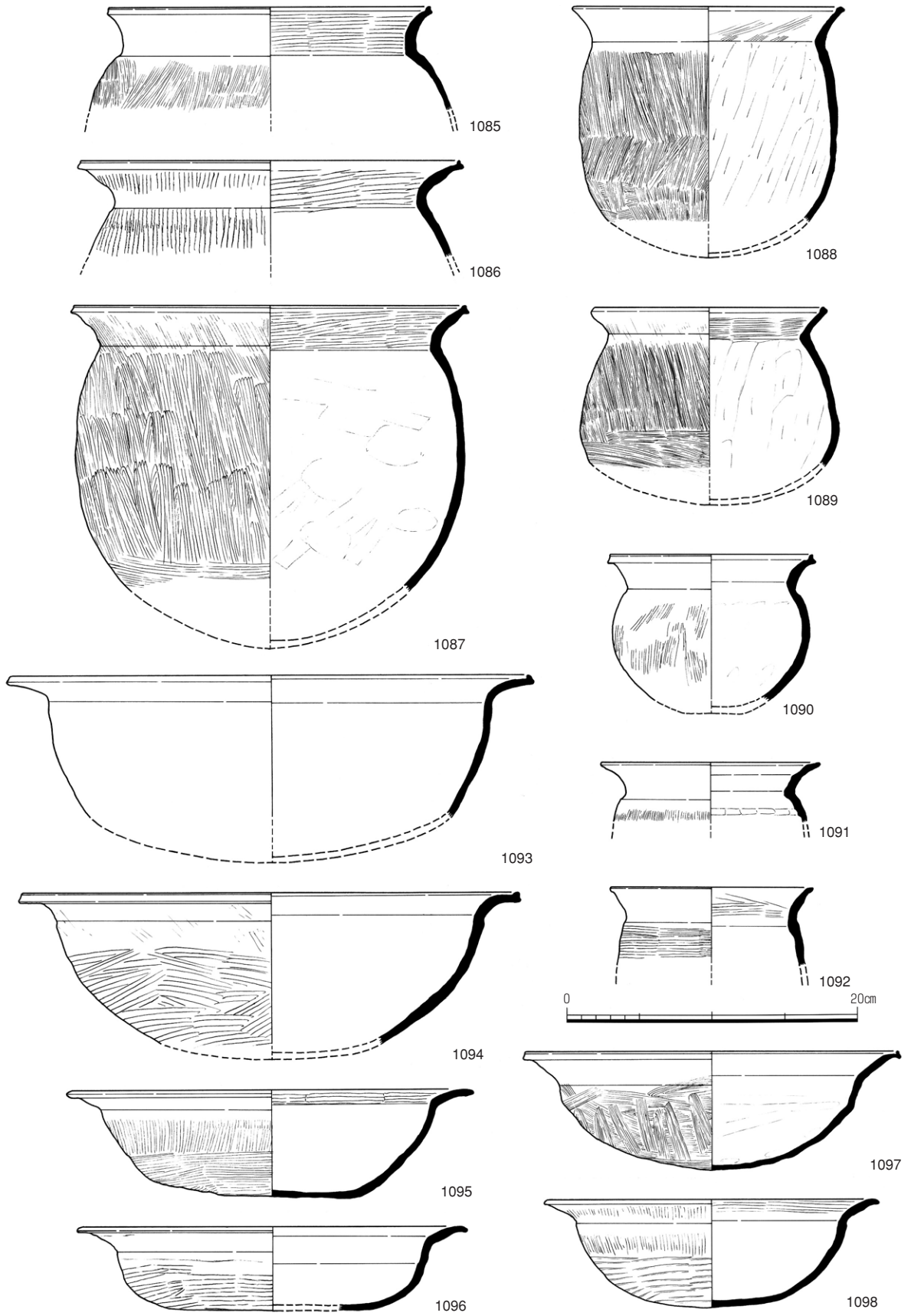


Fig. 59 南北溝SD1103出土土器 (2) 1:4

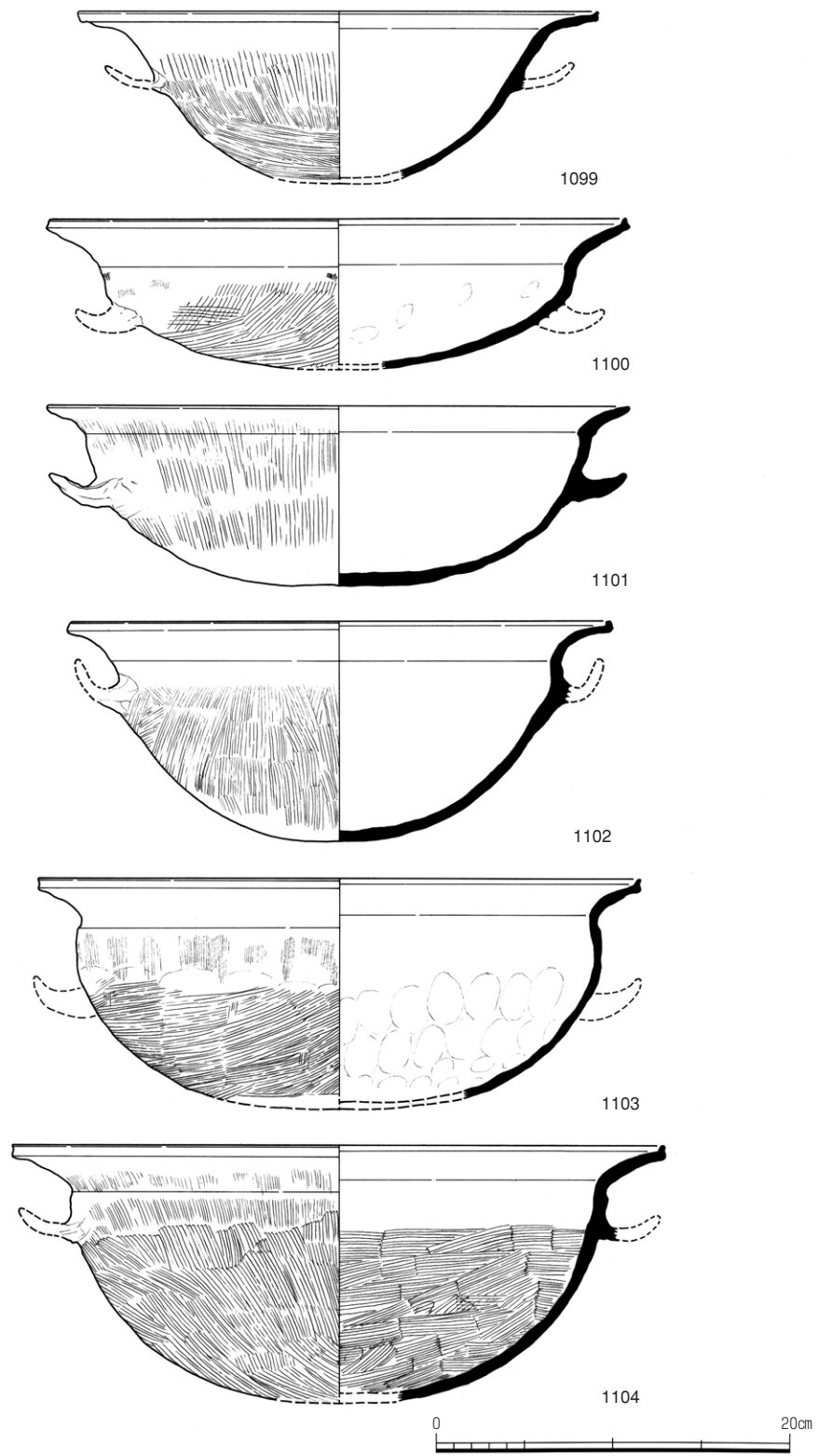


Fig. 60 南北溝SD1103出土土器 (3) 1:4

面を縦ハケ目、口縁部内面を横ハケ目ののちにヨコナデ調整。体部外面に煤が付き、内面には茶褐色の汚れが付着するが、口縁部ではいずれもみられない。微砂と赤色粒子を多く含む胎土で「大和A型」。飛鳥Vに属するとみられる。甕AI (1086) は「大和A型」であるが、1085に比べて口縁の外反度が強く、口縁端部のつまみ出しが大きい。頸部内面は条の粗い横ハケ目、体部内面はナデ調整。頸部外面は体部と一連の縦ハケ目をヨコナデで消す。溝の上層出土で、口縁部の外反度などから1085よりは新しいとみられる。甕AI (1087) も「大和A型」で、体部内面下半に無文の当て具痕が多数みられ、上半は板状工具によりナデ調整。体部外面は縦方向に往復して施したハケ目調整で底部では横方向に施す。溝中層出土。口径26.8cm、復元器高約23cm。

大和A型甕

甕AII (1088・1089) は、ともに体部内面を縦方向にヘラケズリし、直線的に開く口縁部の端部が内肥厚して外側に面をとる特徴が共通する「河内型」であるが、器高と体部の形状が異なる。1088の口径18.2cm、体部径17.5cm、1089の口径15.8cm、体部径17.6cm、復元器高13.6cm。甕AIII (1090) は「大和A型」で、強く外反する口縁の端部を上方へつまみ出し、外方に凹面をつくる。口縁端部付近まで炭化物が厚く付着し、内面にも炭化物の汚れが著しい。口径13.9cm、器高11.0cm、体部径13.8cm。甕AIII (1091) は外反する口縁部内面を段状になで、体部内面を横方向にヘラケズリする「青野型」。灰褐色を呈し、微砂・細砂を多く含む胎土も水溜遺構出土の93・108などと共通する。口径14.9cm、体部径約13cm。下層出土。甕AIII (1092) は緩やかに外反する口縁の端部を丸く収め、体部外面を横方向のハケ目調整。淡褐色で、微砂と赤色粒子を多く含む胎土。口径13.9cm、体部径12.8cmで、甕Cの可能性はある。

河内型甕

青野型甕

鍋には把手のつく鍋B (1099~1104) とつかない鍋A (1093~1098) がある。鍋Aには、口径の大小 (I : 1093・1094、II : 1095~1098)、体部の深浅 (I深 : 1093・1094、II深 : 1095・1097・1098、II浅 : 1096) があり、底部の形状で丸底 (1093・1094・1097・1098) と平底 (1095・1096) がある。鍋Bにも口径の大小 (I : 1100~1104、II : 1099)、体部の深浅 (深 : 1099・1102~1104、浅 : 1100・1101)、底部の平底・丸底・尖底 (丸 : 1100・1101・1103・1104、尖 : 1099・1102) とがある。鍋AI (1093) は水平近くに開く口縁の端部を、丸く内肥厚して外側に面をつくり、体部内外面をナデ調整。口径35.8cm、残存高9.9cm。淡橙色で砂混じりの胎土は「南河内型」に近い。外面の煤化よりも内面の褐色の汚れの方が著しい。1094は口縁部の形状は1093と同じだが、体部外面を条痕の粗いハケ目調整、内面はナデ調整。口径33.9cm、器高10.5cm。口縁部直下にヨコナデによる段ができる。橙色で砂混じりの胎土。内面の暗褐色の汚れが著しい。鍋AII (1095) は頸部内側に鈍い稜をもって外反し、端部下方にかすかな面をつくる。淡褐色で細砂を含む胎土は「大和B型」に通じる。口径28.0cm、器高7.5cm。体部外面上半を縦ハケ目、下半から底部を横方向のハケ目調整。平底部分の外面はナデ調整でハケ目を消す。浅鍋AII (1096) は1095と同様に頸部内側に稜をもち、外反する口縁の端部は丸く収める。平底部分が広く、体部外面は底部周縁に沿って横方向の条の粗いハケ目調整。口径26.8cm、器高5.8cm。茶褐色で微砂砂粒を多く含む胎土で、底部の破片は、破片となった後で火を受けている。鍋AII (1097) は口縁部が長く弧を描いて外反し、端部を折り返して外側に面をつくる。全体に器壁が薄く、体部外面は往復するハケ目調整、内面は当て具押捺痕をナデ消し、胎土・色調ともに「大和A型」。鍋AII (1098) は外反する口縁端部を丸く収め、体部下半外面に横方向の二次ハケ目、上半に縦方向の一次ハケ目を施す。口縁部内面は横ハケ目ののちにヨコナデ調整。口径23.0cm、器高7.5cm。茶

鍋の細別

南河内型

大和B型

大和A型

褐色で、赤色粒子と砂粒を多く含む胎土。外面全面に煤や炭化物が多く付着し、底部内面に褐色の汚れがある。なお、大型の1093・1094は全周が遺存するわけではないので、鍋Bの可能性はある。

鍋 B 鍋BI (1103・1104) は外反する口縁の端部を鋭く摘み出し、外方に凹面をつくる。体部内面に当て具痕が残るもの(1103)と、ハケ目調整するもの(1104)の違いがあり、1103は頸部のくびれが強く、体部外面を斜めにハケ目調整。1104は縦方向にハケ目調整する。1103の口径34.0cm、器高13.2cm、1104の口径36.6cm、器高14.5cm。把手が頸部寄りにつく1104の把手は幅広で薄く、底寄りにつく1103の把手は肉厚な剥離痕。明橙色で赤色粒子を多く含む胎土は共通する。体部の浅い鍋BI(1100・1101)には、口縁端部を丸く収める「大和B型」と、端部を肥厚させて面をつくる「大和A型」とがある。「大和B型」の1101は淡黄褐色で赤色粒子の少ない胎土。外面全面が煤により黒色化し、内面もほぼ全面に褐色の汚れがつく。把手は上端が丸く幅広い。「大和A型」の1100の口縁部は小形の1097の口縁部と類似し、体部下寄りに把手の剥離痕がある。1101の口径32.8cm、器高10.2cm。1100の口径32.5cm、器高8.5cm。体部の深い鍋B(1099・1102)はともに底部が尖り気味であるが、それぞれ口縁部の外反度が異なり、口縁端部も1099では上方へつまみ出し、1102は鈍く折り曲げる。1099の口径29.3cm、器高9.8cm。1102の口径30.3cm、器高12.5cm。1099には口縁内側に炭化物の付着が著しく、1102の底部内面には褐色の汚れが厚く付着する。

少量の器 須恵器 器種には杯A、杯B、杯B蓋、杯X、椀A、椀B、壺、甕があり、ほかに転用硯の蓋(Fig. 101-127・131)や、上部包含層に圈足円面硯(Fig. 100-116)があるが、土師器に比べて少量で、その多くは飛鳥IV～Vに属する茶褐色の汚れがついた工房での使用を想定させる土器である。

杯 A 杯AgII(1105)は、底部外面を平滑にロクロケズリ(R)、内面は中央部のみナデ調整。口縁上部を薄く引き出し、丸く小さな端部が摩滅する。淡青灰色で微細な黒色粒子を多く含む。口径17.8cm、器高4.1cm、径高指数23で飛鳥V～平城宮土器IIに属する。杯AaIV(1106)は底部ヘラ切り(R)不調整で、無蓋。直線的に開く口縁部に歪みがあり口径12.4～13.4cm、器高4.1cm。灰白色で白色砂を多く含む。椀AgIII(1107)は底部外面ロクロケズリ(R)。口縁上端部外側を強くナデて薄く尖らせ、微砂と黒色粒子が多い東海地方産。口縁部外面は青灰色で降灰があり、その他は淡青灰色を呈する有蓋の器種で、口径13.6cm、器高4.9cm。

杯 B 杯Bには杯BI(1108)、杯BIII(1109)があり、ほかに漆附着土器の杯BIV(PL. 388-15)がある。杯BI(1108)は薄く平らな底部と、稜をもって屈折し直線的に開く薄い口縁部とからなり、屈折部のやや内寄りに比較的高い高台がつく。底部外面をロクロケズリ(R)、内面は多方向のナデ調整。淡灰色の微砂質の胎土で堅緻な焼成。口径20.4cm、器高6.5cm、径高指数32。杯BIII(1109)は口縁下部に丸みがあり、平らな底部外面はヘラ切り(R)不調整で内面は多方向のナデ調整。青灰色を呈し微砂・黒色粒子を多く含む。底部内寄りにつく高台は細く外方へ肥厚する。口径14.8cm、器高3.8cm。破片が方形池SG1100へ流入している。

杯B蓋はb類の転用硯が多く、少量含まれるa類の杯Ag蓋も内面使用の転用硯(Fig. 101-127)である。椀BII(1110)は薄くて長い口縁部をもつ器種で、屈折部近くに低い外方へ張り出した高台がつく。淡灰色を呈し黒色粒子の多い微砂質の胎土で、口径14.0cm、器高7.3cm。飛鳥Vに属す。杯X(1111)はヘラ切り(R)ののちナデ調整の丸い底部に外彎する口縁部がつく。

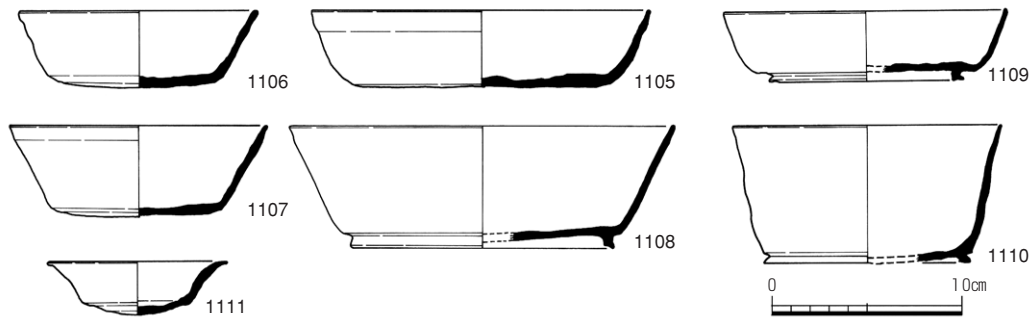


Fig. 61 南北溝SD1103出土土器(4) 1:4

口径9.5cm、器高2.9cm。明青灰色で微砂質。口縁部内外面に褐色の汚れが残る灯明皿。

甕A(1154)は、直立気味に開く長い口縁部で、口径33.6cm、頸高13.8cm。口縁端部は外方へ折り返して外側に丸い面をもつ。頸部上半に2条の凹線文を巡らせ、凹線の上部にそれぞれ櫛刺突文を施す。淡灰色で黒色粒子を多く含む胎土の硬質焼成。頸部内・外面に自然釉が厚く付着する。口縁部形態が特徴的で、東海地方尾北窯の製品とみられる。甕A(1155)は細い頸部(径15.6cm)からやや長い(高さ5.2cm)口縁部がのび、端部は内屈して内傾面をもつ。推定体部径約37cm。体部外面は木目左斜交で細刻の粗い平行文叩き目のち細かい木目のカキ目調整。内面は小さな中央を囲む同心円文当て具痕。当て具には一方向のひび割れがある。青灰色を呈し白色土の縞をもつ微砂質土で東海地方産であろう。SD1103からSG1100・SD1101に広がる。甕A(1157・1158)はやや長く直線的に開く口縁部で、SD1103に多い形状。1157は口頸部中程に1条の凹線を巡らせた口縁部で、内外面に降灰がある。口径20.8cm、頸径16.5cm、頸高4.7cm。青灰～淡灰色で微砂質。1158もSD1103からSG1100、SD1101に破片が分布する。体部径に比べて小さな頸部から直線的に開く長めの口縁部で、小さく外肥厚する平坦な端部がわずかに突帯状をなす。体部は張りのある丸い肩部、大きな体部、丸底気味の底部の3分割成形で、細刻の平行文叩き目、芯の太い広刻で密な当て具痕と外面のカキ目の粗密が対応している。口径21.0cm、頸径16.3cm、体部径44.6cm、推定器高約45cm、容量約30ℓ。叩き目、当て具、口縁部の特徴は備前邑久窯の新林窯跡例に類似している。甕A(1159)は、緩やかに外反する口縁の端部を丸く収める。口径20.4cm、頸高3.0cm。素地が紫色を帯びた暗灰色を呈し、体部外面を細刻の平行文叩き目ののちに細かい木目のカキ目を粗く施す。内面は細刻で密な同心円文当て具痕。破片はSG1100の西に建つSB1134の柱穴やSE1090石組埋土、飛鳥寺南面大垣の南側のガラス敷きにまで広がる。

甕

iii 北地区その他の遺構等出土土器 (Fig. 62-1161~1167・1241~1250、PL. 239)

北地区と南地区を隔てる3条の東西堀SA1150~1152の柱穴や南北溝SD1110の西を並走する南北堀SA1120の柱穴、およびSD1110へ注ぎこむSD1118がSA1120の基壇状の盛土をくぐるために設けられた木樋暗渠SX1119出土土器が、それぞれ少量ずつある。また、Fig. 62には、主に北地区の包含層出土土器の中から、特異で稀少な器種(1241~1250)を抽出した。

東西掘立柱堀SA1152柱穴出土土器 SA1152は北地区と南地区とを隔てる3条の東西堀のうちの最北の堀で、南北溝SD1110の水口にあたるSD1108・1109との関係から、SD1110の築造当初に対応すると考えられる。柱穴からは図示した土師器鍋A(1161)、須恵器鉢A(1162)のほ

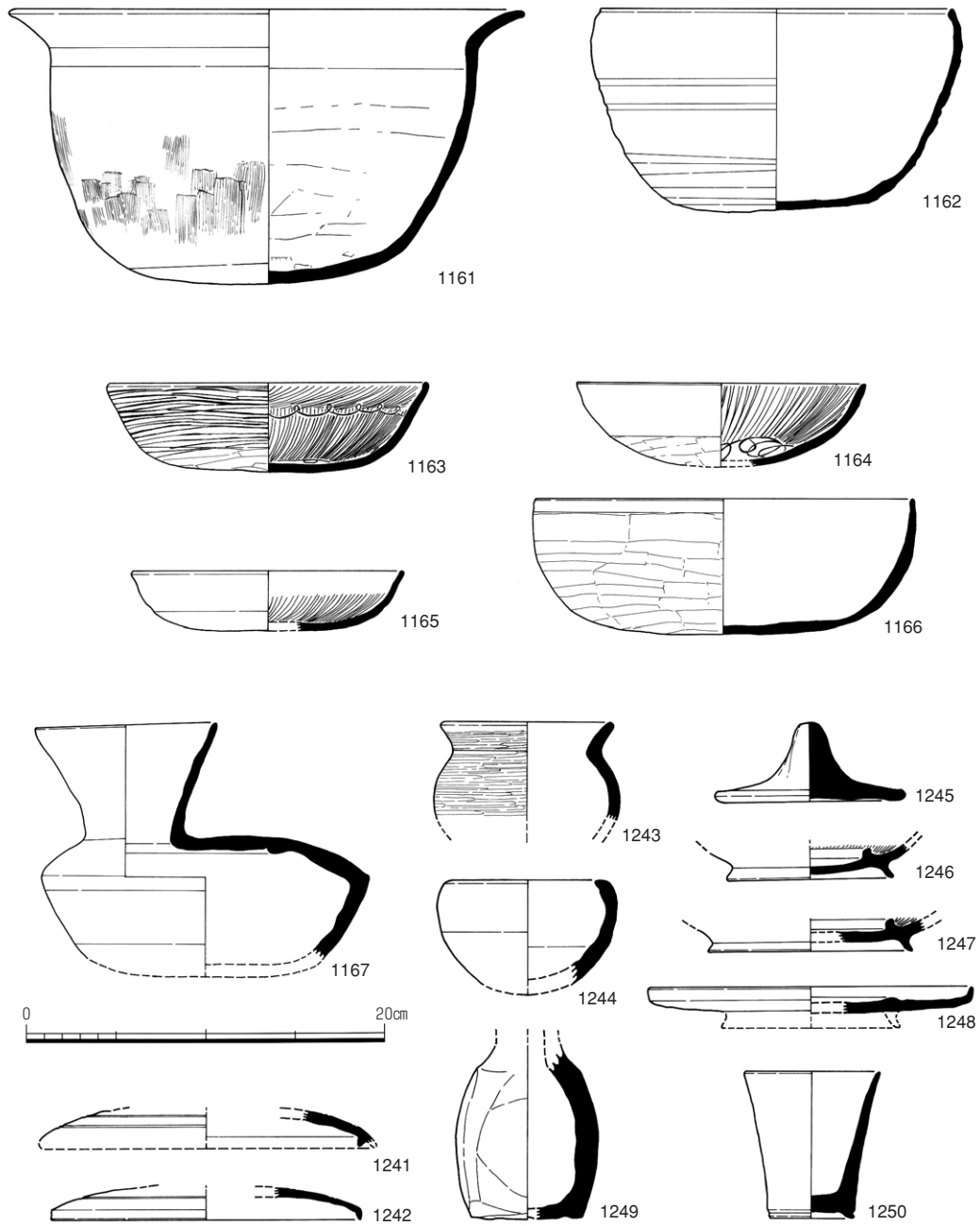


Fig. 62 その他の遺構・包含層出土土器 1:4

かに、土師器杯A、杯C、甕A、鍋B、須恵器杯Bなどが出土し、飛鳥Ⅳに属する土器が主体を占める。また、3条の堀のうち、SA1152に次いで造られた最南の堀SA1150の柱穴からは、土師器杯A、杯B、皿Aなどのほか、墨書土器の土師器鍋B (Fig. 94-54) が出土し、中央で最新の堀SA1151の西端の柱穴からは土師器鍋Aが出土している。

土師器鍋A (1161) は、強く外屈する長い口縁部と深手の体部をもつ大型の鍋で、小さく外肥厚した口縁端部は丸く収める。口径29.5cm、器高15.5cm。体部下半に成形作業台縁部とかわる帯状の窪みもち、体部内面は横方向の板状工具によるナデ調整、外面を縦ハケ目のちナデ調整する「大和B型」成形調整手法。黄橙色を呈し白色砂と雲母片を多く含む胎土。須恵器鉢A (1162) は体部上方で内彎する口縁で、端部は内外に肥厚して内傾面をもつ。体部内面

から口縁外面のロクロナデ調整、体部外面下半以下のロクロケズリ（R）によって、淡灰色で少量の白色砂が混じる胎土に含まれた黒色粒子が尾をひき、内面下半には茶褐色の汚れが残る。口径19.4cm、器高11.4cm。

なお、SA1150柱穴出土の墨書土器土師器鍋B（Fig. 94-54）は、口径30.5cm、器高9.9cm。外反する口縁の端部を小さく内肥厚させて外側に面をつくり、体部外面をハケ目調整、内面は下半部に押え痕が残るナデ調整の「大和A型」で、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。また、図示していないが、SA1151柱穴出土の土師器鍋Aは、口径30.5cm、器高12.0cm。深い体部の「大和A型」の調整法であるが、口縁上部が外反し口縁端部外側の面が小さく、淡黄色を呈し、赤色粒子の少ない細砂質の胎土である点に小異がある。

大和A型甕

南北塀SA1120柱穴出土土器 SA1120は南北溝SD1110の西壁を形成する細長い基壇状の盛土をもつ塀で、SD1130の埋め立て整地、SD1110の築造、木樋SX1114の埋設などと一連の工程で築造されている。したがって、柱穴出土土器には、SD1130・1110出土土器と接合する個体が多く含まれる。土師器杯、鉢、甕、須恵器杯、皿、甕などがあり、転用硯須恵器皿BI（Fig. 101-138）がある。

土師器杯AI（1163）はb1手法で、口縁端部が小さく内肥厚し、内面の暗文は底部に密なラセン文、口縁部に2段の放射文とその間にループ状のラセン文を施す。口径17.8cm、器高5.0cm。径高指数28。赤褐色で赤色粒子と白色微砂を多く含む精良な胎土も、SD1110出土の漆塗土器（Fig. 102-143）に類似し飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。

杯CII（1164）は、丸底の半球形でb0手法。肥厚せずに丸く収めた口縁端部まで、ジグザグ状の1段放射暗文が及び、底部に大振りのラセン暗文を施す異形品。淡黄茶色の微砂質土で、口径16.0cm、器高4.4cm。径高指数28。杯CII（1165）はa0手法で、内面の暗文は細かな1段放射文。赤褐色で赤色粒子を多く含む精良土の一般的な杯C。口径15.0cm、器高3.3cm。径高指数22。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。鉢B（1166）は直立気味の口縁端部がヨコナデ調整で薄く、外面のヘラミガキを欠くb0手法。内面はナデ調整で暗文を施さない。明橙色を呈し赤色粒子と砂粒を多く含む胎土で、内面は摩耗する。口径21.0cm、器高7.6cm。径高指数36。

朱墨の転用硯である須恵器皿B（138）は口径25.9cm、器高3.7cm。内傾面をもつ口縁端部で、ロクロケズリ（R）した平らな底部の内寄りに細い高台がつく。

木樋SX1119出土土器 木樋SX1119は南北溝SD1110の西方一帯の水をSD1110へ排水する東西溝SD1118が、基壇状の盛土をもつ南北塀SA1120をくぐるために設けられた木樋暗渠で、須恵器平瓶（1167）のほか、土師器杯A・甕A・鍋B、須恵器杯A・鉢の小片が出土した。

須恵器平瓶（1167）は、肩部が稜をなして強く屈折し、わずかに弧を描く扁平な体部の周縁寄りに、漏斗状の短い口縁がつく。口径10.0cm、肩部径は18.4cm、口縁上端までの器高14.2cm。暗青灰色を呈する細砂質の精良土で、口縁内外面と体部上半に緑色の自然釉が厚くかかる。降灰の色調や肩部の稜の様子から、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する東海地方産とみられる。

包含層等出土の特殊土器 北地区・南地区ともに包含層等に希少で特異な器種が含まれている。ここでは、須恵器の金属器模倣形蓋や細く深い椀B、扁平な方形壺や、土師器・須恵器の托、東国系黒色土師器壺、坩堝形の土師器鉢などを特殊土器として抽出した。

須恵器蓋（1241・1242）は、頂部外面に細い凹線をもつ金属器模倣形の蓋である。1241はa

計量器か
土師器托
黒色土師器

類で口径18.5cm、かえり径17.0cm。凹線は2条。1242はb類で口径17.0cm、凹線は1条である。いずれも北地区石組方形池SG1100上の包含層からの出土である。椀B（1250）は、口径7.3cmの細く直線的に開く口縁部で、器高8.1cmと背が高く、高台径5.0cmの低い高台がつく。容量約250mlで計量器の可能性はある。北地区北端包含層出土。壺（1249）は外面を面取りするように方形に削り出した扁平な小型壺。東の谷東岸の工房1上層の青灰粘土層出土。

土師器托（1246・1247）は、ともに北地区の土坑SK1126付近の包含層出土。丸みのある底部外面に、細くてやや長い「ハ」の字に踏ん張る高台がつき、内面の圈状突起より外側に放射暗文を施す。圈状突起の径は6.6cmと9.4cm。須恵器托（1248）は南地区西の谷中段の工房の炭層1出土。口径17.8cm。口縁端部は須恵器蓋b類に似た形状で、圈状突起は低く、基部の細い高台が剥離する。南地区には、ほかにSK1170出土の一回り大きなロクロ土師器托（899）がある。

壺B（1243）は、口径8.6cm。内外面とも黒色を呈し、外面は密なヘラミガキ調整。いわゆる東国系の黒色土師器とみられる。南地区西の谷中段の工房の包含層出土。

小型鉢（1244）は内彎する口縁部の上方に面をもち、口径8.8cm。東の谷の水溜SX1220炭層2B出土片とSX1230茶土層出土片が接合し、外面に軽い焦げ付きがみられる。SX1230茶土層には同様の小型鉢で体部外面下半を縦ハケ目調整し、1対の穿孔をもつものなどもあり、使用痕跡はないものの、SK1170出土の土師器鉢A（880）と同様に埴塙の可能性はある。

土師器蓋（1245）は、径10.5cmの円盤状部と中実のつまみ部からなり、外表は粗いナデ調整。円盤状部が平坦であることから蓋と考えたが、土製当て具の可能性はある。別項（P）の土製当て具には当て部に被熱のみられるもの（Fig. 108-258）があり、埴塙蓋としての転用が考えられているが、本例に被熱の形跡はない。北地区中世の東西溝SD1127上の包含層出土。

iv 西の谷の工房関連遺構・包含層出土土器（Fig. 63-1168～1197、PL. 239）

西の谷の工房関連遺構出土土器には、合流部北岸の銅工房の掘立柱建物SB805に関連する溝SD803・SD804と西の谷が水溜SX1222に合流する素掘溝SD784出土土器がある。また、工房遺構構築以前の層序からの出土土器として、建物SB785内の炉SX788の基盤をなす土層および南岸の炭層下包含層と下層遺構SD811出土土器があり、西の谷中段の工房の炉跡下に広がる炭層出土土器、および合流部北方の水溜SX1220西岸を形成する整地土出土土器がある。

工房建物
外周の溝

溝SD804出土土器 溝は合流部北岸の工房建物SB805の北辺と西辺を区画する素掘溝。炭層・炭層Ⅱの下で検出し、多量の銅製品・銅片などとともに、土師器杯A・杯C・甕A、須恵器杯・高杯・平瓶・甕や漆附着土器、被熱土器などが出土した。

土師器杯AI（1168）は粗いヘラミガキのb1手法で、口縁端部が小さく内肥厚する。口縁部内面の2段放射暗文が上下段ともに粗いが、口径17.1cm、器高5.2cm、径高指数30で、飛鳥Ⅳに属するとみられる。赤褐色で微白砂を多く含む精良土。杯CⅢ（1169）は、軽いヘラケズリのb0手法。口径13.8cm、器高3.4cm、径高指数25。小さく外反する口縁端部に凹線状の鈍い内傾面をつくる。1段放射暗文の始点が底部中央寄りにあり、飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。甕A（1170）は肉厚な頸部で、薄い口縁端部が小さく内肥厚し、外方にかすかな面をつくる。体部外面は口縁部までの縦ハケ目調整ののちナデ調整。内面もナデ調整で、頸部との境に継ぎ目が残る。口径21.2cm。黄白色を呈し石英・雲母片を含む胎土で、下層遺構起源の「伊勢型」の可能性はある。

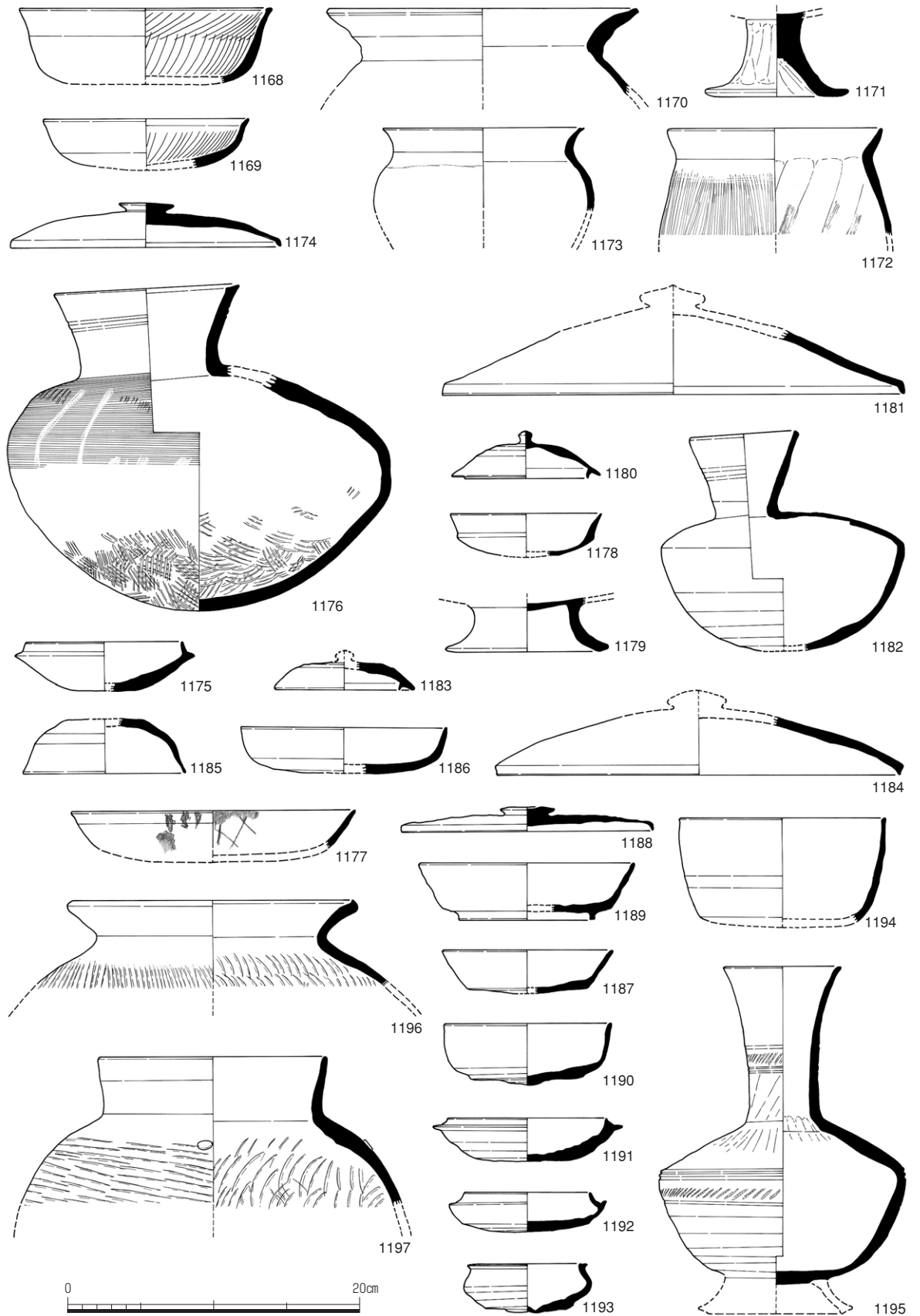


Fig. 63 西の谷の工房関連遺構・包含層出土土器 1:4

溝SD803出土土器 SD804の丘陵側を並走する素掘溝で、土師器杯、須恵器杯Aなどが出土した。須恵器杯A（1177）はハの字に開く薄い口縁部で、内外面に火襷きをもつ無蓋のAc類。口縁内外面にタール状の付着物があり、灯明皿もしくは漆皿としての使用が想定される。口径19.4cm。淡灰色で白色土の縞を含む精良土。東海地方産。

合流部の溝

南北溝SD784出土土器 SD784は西の谷が水溜SX1222へ合流する溝。土師器杯、高杯H、甕、須恵器杯、甕などのほか少量の漆付着土器、被熱土器がある。土師器高杯H（1171）は、脚径9.7cm、残存高5.9cmの脚部の破片で、脚柱部外面を縦方向にヘラケズリし、脚裾部内面を円錐形に抉る。甕A（1172）は、内彎気味に開く口縁の端部が小さく内肥厚し、上方に面をつくる。口縁部内面は横ハケ目、体部外面は細かな縦ハケ目、内面は斜めのハケ目ののちに頸部までヘラケズリする「河内型」。赤褐色で微白砂・赤色粒子を含む精良土。口径14.6cm、残存高7.4cm。1171の脚高と1172の口縁の外反度から、図示した2点は下層遺構起源の土器とみられる。

炉跡以前

炉SX788基盤土出土土器 炉SX788は、建物SB785内の西妻南部に設けられ同一箇所でも5回の造り替えがある。その周り（基盤）からの出土土器には土師器杯、甕、須恵器杯蓋、杯、甕などがあり、SB785内での工房作業の上限を示す。土師器甕A（1173）は、口縁端部が外肥厚して上方に面をつくり、体部外面は不調整で掌文が残り、内面はコテ状工具によるナデ調整で平滑。茶褐色で赤色粒子を多く含む精良土。河内地方の一部の産（南河内型）。口径13.8cm、残存高5.7cm。須恵器杯B蓋（1174）は、頂部中央が肉厚で、薄い口縁の端部が鈍い稜をもって下屈するb類。頂部外面ロクロケズリ（R）ののちにロクロナデし、大型で上面が平坦なつまみがつく。外面に広く透明な淡緑色の自然釉がかかり、内面は口縁端部のみ暗灰色、その他は淡灰色で、正位での重ね焼き。内面中央部に径9cmほどの円形に暗褐色不透明の漆が付着し、周りに光沢のある漆の飛沫があり、外面にも飛沫がある。内面を漆調整皿として使用したもの。完形品で口径18.4cm、器高3.1cm。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。炉に先行して漆工がおこなわれたことが想定される。

漆調整に用

溝SD811出土土器 SD811は西の谷南岸の炭層下で検出した下層遺構である。土器には7世紀中頃の土師器杯、甕、須恵器杯G、杯H、平瓶、甕などや、古墳時代の土器があり、後者の須恵器杯H・甕A（1646・1647）は別項（H）に収めた。杯H（1175）は受け部径12.2cm、口径10.6cm、器高3.3cm。底部外面は外周に切り離し時の段が残る軽いロクロケズリ（R）で、内面中央部は一方向のナデ調整。青灰色で石英粒を含む胎土。平瓶（1176）は体部径26.2cmの大型で、口径12.6cmの広口がつき、口縁端部は浅く凹んだ内傾面、頸部外面に2条の凹線が巡る。直径12cmほどの成形時の口に蓋をし、やや偏る位置に直径10cmの穴を穿って口頸部をつける3段成形。体部外面は丸い肩部までを細刻の平行文叩き目を周回して施したのち、細木目のカキ目。内面は当て具痕をほとんど消し去るロクロナデ。尖り気味の底部外面は平行文叩き目を重ね、体部下半をナデ消し、内面には同心円文当て具痕が残る。青灰色で白色土を含む精良土。

下層遺構

南岸炭層下包含層出土土器 地点と層序には、合流部南岸出口の炭混淡青灰色砂質土（1178・1179）・黄褐色砂質土（1181・1182）、西の谷中段の工房の整地土上面（1180）の違いがあるが、いずれも炭層下の工房構築以前の層序である。土師器杯H（1178）・台付杯（1179）、須恵器杯G蓋（1180）は、ともに下層遺構起源の土器。杯H（1178）は口径10.3cm、器高3.0cm。茶灰褐色で雲母片と赤色粒子を多く含む。口縁部下の段に削り残しがある。台付杯（1179）は外反する

炭層以前

長い脚部の破片で、端部は小さく外肥厚する。脚部径11.5cm。杯底部は中央部が厚く、丸みのある外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。橙褐色で微白砂質の胎土。須恵器杯G蓋（1180）は、丸い笠形の頂部に細長く小さな宝珠形つまみがつく。口径10.3cm、かえり径8.5cm、器高3.2cm。頂部外面ロクロケズリ（R）、外反するかえりの先端は鋭い。青灰色で黒色粒子が発泡する。須恵器大皿蓋（1181）は、端部を内屈したb類で、復元口径31.4cm。頂部外面ロクロケズリ（R）、内面中央部ナデ調整のほかはロクロナデ。淡黄灰色を呈し白色土を含む精良土の東海地方産。須恵器平瓶（1182）は丸底で、肩部に鈍い稜をもち、やや盛り上がる体頂部に細長い口頸部がつく。口縁端部は丸く収め、頸部中程に浅い凹線が2条巡る。底部外面はロクロケズリ（R）し、体部外面はカキ目調整で、暗灰色の降灰がかかり、東海地方尾北窯産の可能性はある。

中段の工房炉跡下炭層出土土器 中段の工房の炉跡には下層に炭層が広がるものがあり、JO38 炉跡下炭層地区の炉跡下炭層出土の土器は、西の谷の初期段階の工房に関連する土器と考えられる。土師器杯、甕、須恵器杯蓋、杯A、杯G蓋、皿蓋、甕のほか、被熱土器の土師器杯・須恵器杯（図版編〔Ⅱ〕PL.385-50・54・60）がある。須恵器杯蓋（1185）は口縁部外面だけが暗灰色を呈し、その他が淡灰色を呈するため蓋と考えたが、頂部外面ヘラ切り不調整で、大きく開く口縁部の形状は深手の杯Acに類似し、無蓋の杯の可能性はある。口径10.9cm、器高3.7cm。径高指数34。杯Ac（1186）は口径13.9cm、器高3.1cmの皿形で、底部中央の外面をロクロケズリ（R）、内面は広く多方向のナデ調整。淡灰白色で砂質の胎土を含めて、被熱土器の須恵器杯（50）と類似する。本例には被熱や打ち欠きによる片口の痕跡はみられないが、同様の用途と考えられる。これらは飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。杯G蓋（1183）は頂部外面ロクロケズリ（R）で、口縁端部内寄りに細く外反するかえりがつき、口縁部の歪みが大きい。断面が赤紫色、外表が青灰色で陶邑窯産とみられる。皿蓋（1184）は復元口径27.8cm。口縁端部を下方に小さく摘み出して外側に面をつくるb類。頂部外面を広く平滑にロクロケズリし、端部はロクロナデ。内面は中央部を多方向にナデ調整。淡黄灰色を呈する精良土で、頂部外面の口縁端部までに暗緑色に発色する鉄釉を塗布する尾張猿投窯産。なお、須恵器甕片には東の谷の水溜SX1220東南の炭層3等出土の須恵器甕（531）の破片が含まれており、531は西の谷あるいは下層起源の土器とみられる。

合流部北方整地土出土土器 合流部北岸北方は下層の流路SD1173の上に水溜SX1220・1222の西岸を形成する整地がなされ、整地土には下半を中心に下層起源の土器が多く含まれ、上半部には飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が少量含まれる。土師器杯C、杯G、台付杯、高杯C、鉢A、甕A、甕B、須恵器杯A、杯B、杯G、杯H、椀A、皿A、鉢A、壺B、壺K、水瓶、甕A、甕B、甕Cなどがある。

須恵器杯A（1187）は、口径11.4cm、器高3.0cm。底部外面ヘラ切り（R）不調整で、口縁部内面に灯明痕がある。杯B蓋（1188）は端部を内屈し外側に面をつくるb類。口径17.2cm、器高1.7cm。杯BⅢ（1189）は底部外面ヘラ切り不調整。口径14.6cm、器高3.9cm。径高指数27。これらは上部整地土出土で飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するとみられる。杯G（1190）は底部外面ヘラ切り不調整（R）。口径11.2cm、器高4.2cm。灰緑色粘砂層の杯G蓋（1383）に類似する法量と胎土・焼成。杯H（1191）は受け部径13.0cm、口径10.8cm、器高3.0cm。底部外面ヘラ切り不調整の肉厚の体部に、細く小さな受け部と口縁部がつく。底部内面には細かなロクロ目が残る。外面に厚く降灰がかかり、内面には薄く炭化物の汚れがつく。杯H（1192）は短い受け部と外反する長い口

縁部をもち、暗茶褐色を呈する微白砂質の胎土が特徴的で、椀A(1194)とともに尾張猿投窯産。底部外面ロクロケズリ(R)。底部外面に厚い降灰がかかる。1192は受け部径10.6cm、器高2.8cm、口径8.4cmで、飛鳥地域出土の尾張猿投窯産の杯Hでは、川原寺SD02出土例よりも新相で、水落遺跡出土例よりも古相をしめす。

壺B(1193)は広口の鉢形をなすほぼ完形品で、底部は外面ヘラ切り不調整で中央部が薄く、内彎する体部から内傾気味に立ち上がり、口縁端部は強く外肥厚して上方に凹面をつくる。体部径8.6cm、口径8.1cm、器高3.4cm。椀A(1194)は内彎気味に直立する薄く長い口縁の端部が、かすかに肥厚して鈍い内傾面をつくる。口縁部下半と底部外面をロクロケズリ(R)。茶褐色の外面に白色の降灰がかかる。口径14.0cm、残存高7.2cm。壺K(1195)は外面をロクロケズリ(R)した体部下半が丸く、直線的な体部上半との境は鈍い稜をなし、底部中央に径6.0cmの脚剥離痕がある。上半が緩く外反する口頸部の中程に2条の凹線と右傾きの刺突文と1条の凹線を巡らせ、肩部にも同様の組み合わせの凹線・刺突文を配す。肩部内面と頸部内外面に、しぼり目が残り、灰色を呈す精良土で、肩部と口縁部外面の片側、および口縁部内面と底部内面中央に暗灰色の降灰がかかる。口径7.8cm、残存高21.7cm。甕A(1196)は強く外反する短い口縁部で、内端部が小さく肥厚し、外側に小さな凹面をつくる。体部外面は細刻の平行文叩き目、内面は細刻で密な同心円文当て具痕。口径19.0cm。甕B(1197)は端部を丸く収めた直立する口縁部で、丸い肩部に小さな円形浮文1個を配す。体部外面は平行文叩き目と思われるが、厚い降灰がかかり不明。内面は幅広く密な刻みの同心円文当て具痕を部分的にナデ消す。口縁部内外面のみ赤褐色を呈する有蓋での焼成。1190~1196は下層遺構起源とみられ、後述(H)の灰緑色粘砂層やSD1173出土土器を補完する資料である。

v 東の谷の工房関連遺構・包含層出土土器 (Fig. 64-1198~1220)

東の谷東岸の工房1内の土坑・溝・上部包含層出土土器と、東の谷西南部の南北堀SA1237柱穴出土土器がある。東岸の工房1では、工房作業面は上・中・下の3面があり、下層工房段階には丘陵側を素掘溝SD1194で区切り、谷側で検出した土坑群SK1180~1189のうち一部を掘り、中層段階に北端を埋めて瓦窯SY1200を構築するとともに、丘陵側の素掘溝を谷側にずらしてSD1193とし、谷側の素掘溝SD1190の内側に、軽微な掘立柱建物SB1178を建てて覆屋としている。したがって、区画溝SD1194とSD1193、谷側の土坑群SK1180~1189と区画溝SD1190との間に重複関係が想定されるが、それぞれの出土土器は、溝の造り替えや3面の工房作業面の年代差を示すには至らない。個々の炉からもわずかずつ土器が出土し、炉の掘方に飛鳥Ⅲ~Ⅳに属する須恵器杯蓋a類片を含む炉もあるが、小片のために図示し難く確定的でない。また、これらの工房作業面を広く覆う青灰粘土層には下層遺構起源の7世紀中頃の土器と飛鳥Ⅳ~Ⅴの土器に加えて、奈良・平安時代に降る土器が含まれる点で、水溜遺構最上層の茶土、炭層最上層の炭層1および工房と重なる地区での炭層4Aと酷似した内容をもつ。

東岸の工房1
の土坑・溝

下層工房の
土坑

土坑SK1183出土土器 谷側に並ぶ南北に長い土坑の一つで、土師器杯C・甕A・甕B、須恵器杯Ac・杯B蓋・皿B・盤A・甕Aなどが出土した。土師器杯C(1198)は、太いヘラミガキのb1手法で、内彎気味に立ち上がる口縁部の端部をわずかに内肥厚させる。口径13.4cm、器高3.7cm、径高指数28。赤褐色で微白砂を多く含む精良土。下層起源の土器である。土師器甕Bは

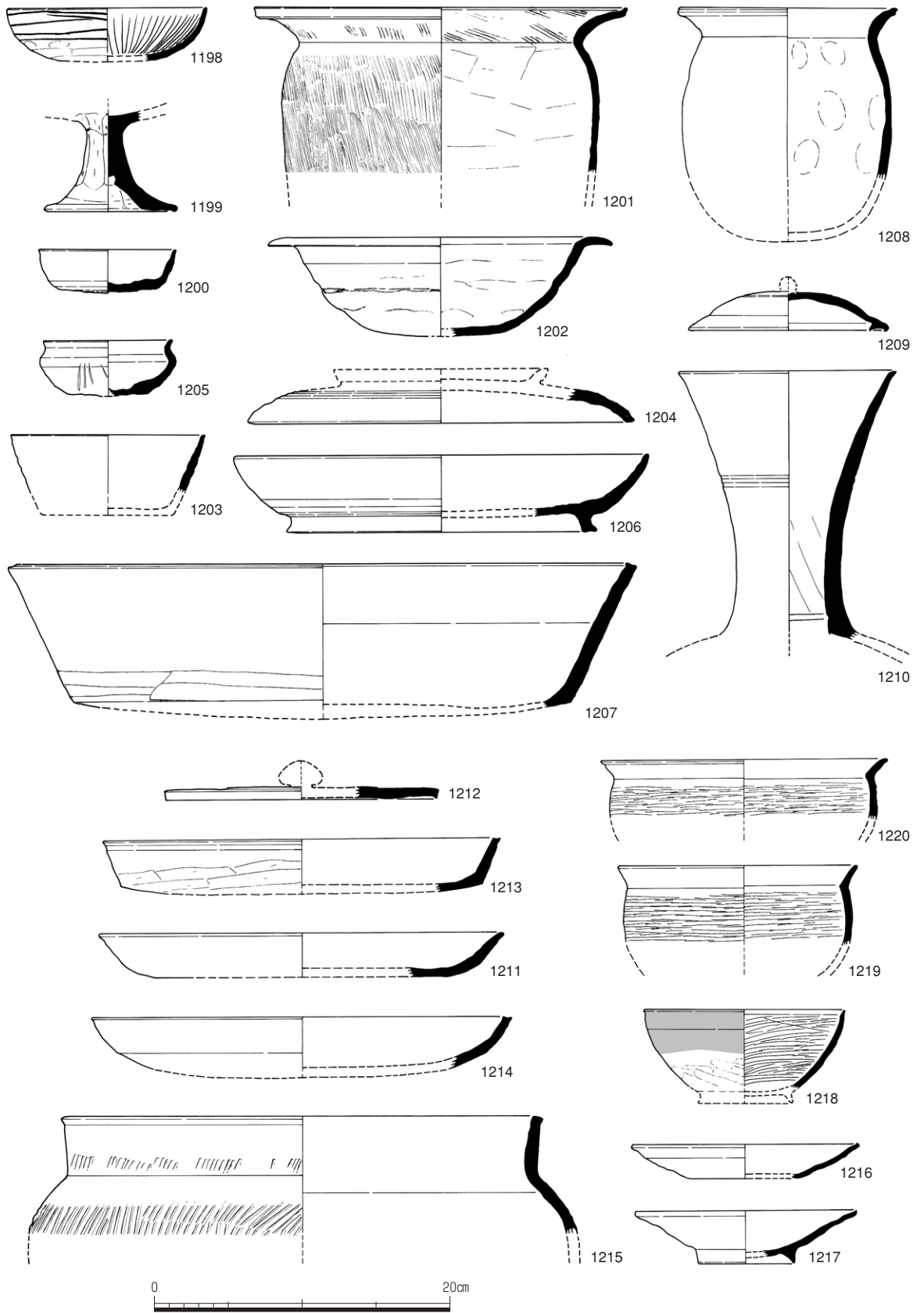


Fig. 64 東の谷の工房関連遺構・包含層出土土器 1:4

把手の基部幅が広い貼付式で、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属し、二次加熱を受ける。須恵器皿BI (1206) は中央部が厚く丸みのある底部外面は、口縁部下半とともに軽いロクロケズリ (R)。口縁部との境の外面に稜をもち、その内側に高く外方へ踏ん張る高台がつく。内面は多方向のナデ調整とロクロナデにより緩やかな弧を描き、内彎気味に開く口縁の端部は小さく外肥厚して鈍い内傾面をつくる。口径28.0cm、器高5.3cm。外表が青灰色で、断面が赤紫色を呈し、微砂と赤色粒子を多く含む胎土の陶邑窯産。盤A (1207) は直線的に開く口縁部の端部が小さく内肥厚し、上方に凹面をつくる。口径41.0cm、復元器高10.4cm。口縁部下端と底部外周をヘラケズリし、口縁部はロクロナデ。砂粒と黒色粒子を多く含む砂質の胎土で、口縁部外面は暗灰色、内面上半は灰色を呈するが、内面下半は著しく擦り減って、白灰色の胎芯が露出する。炭層3 (富本銭出土土坑SK1240) の盤A (398) とほぼ同大で、「ゆり盆」としての使用が想定され、口縁側面につくとみられる把手部分は、小片のために失われている。

ゆり盆の盤

土坑SK1184出土土器 SK1183の北に直列する南北に細長い土坑で、土師器杯C・高杯H・甕A、須恵器杯Ac・杯G・杯G蓋・壺・甕などが出土した。口径約15cmの須恵器杯Acのほかは多くは7世紀中頃の下層遺構起源の土器である。土師器高杯H (1199) は脚柱部外面と裾部内面をヘラケズリし、杯Hに通有な色調・胎土をもつ。脚径8.6cm、残存高6.9cm。西の谷のSD784の高杯H (1171) よりも小径で脚高が高く、やや古相である。須恵器杯G (1200) は底部外面ヘラ切り (R) 不調整、内面中央に一方のナデ調整。口縁上部が薄く外反し、端部は丸く収める。口径9.2cm、器高3.0cm。口縁部外面は青灰色で内面と底部外面とが灰色を呈し、外面の色調の境目には重ね焼きした蓋のかえり部先端が粘着し、口縁部内端が細かく剥離する。

土坑SK1185出土土器 SK1184の北で直交する位置にある東西に長い土坑で、土師器杯A・杯B・杯C・杯H・甕A・甕C・鍋A、竈片、須恵器杯A・杯B・椀A、皿蓋・壺B・平瓶・甕A・甕Cのほか被熱土器が出土した。いずれも小片ではあるが、土師器甕Aの一部と須恵器壺片を除けば、飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する工房使用の土器である。

工房使用の土器

土師器甕C (1201) は、外反する口縁部の端部を上方につまみ出し外側に面をつくる。口縁部内面に外面および体部上半と同じ条の粗いハケ目を施したのちに内外面をヨコナデ調整し、体部外面下半には条の細かな二次ハケ目、体部内面は板状工具によるナデ調整を施した「大和A型」。角の丸い石英粒を含む胎土で、外表のみが茶褐色に赤変し、内面と断面は白褐色を呈し、口頸部内面に黒褐色の焦げ付きがみられる。口径25.4cm。口縁端部の形状から飛鳥Ⅴに属する。鍋A (1202) は、外反する口縁の端部を丸く収め、体部外面不調整で、上半に掌文が、下半に作業台の段と粘土紐の継ぎ目が残る。雲母片を多く含む胎土で淡茶灰色を呈する典型的な「大和B型」。口径23.4cm、器高6.8cm。なお、ほぼ同大、同工の鍋A片には口縁部内面に焦げ付きによる黒変がある。

須恵器椀A (1203) は、直線的に開く口縁部で、端部が小さく外反し、ロクロ目が目立つ外面のみが暗青灰色で降灰がかかり、内面は青灰色のAg類。白色土の縞と微砂を含む精良土で尾張猿投窯産の可能性はある。口径13.0cm。皿蓋X (1204) は、口縁部が内彎する皿形で端部は小さく外肥厚する。頂部外面のロクロケズリ (R) がミガキ状に平滑で、内面をロクロナデのち多方向のナデ調整することから蓋と考えた。水溜下灰粘土層の蓋 (242・243) や炭層4C層の蓋 (314) と同様に輪状のつまみがつく可能性がある。口縁外端よりも外側が暗紫灰色、内側

は淡灰青色を呈し、東海地方産とみられる。口径26.0cm。壺B（1205）は、杯Hと同様の底部から強く内彎したのちに外反して薄い口縁部をつくる。底部外面ヘラ切り不調整で、内面はロクロナデ。底部中央の器壁が極端に薄い。体部外面に4条の刻みによるヘラ記号をもつ。暗青灰色を呈し砂粒を多く含む胎土で、口縁部内側に灯芯痕が残る。口径8.6cm、器高3.8cm。

灯 明 痕

区画溝SD1190出土土器 工房谷側の区画溝SD1190からは、土師器杯C・蓋・高杯C・甕A・鍋、須恵器鉢A・平瓶・甕のほか被熱土器の須恵器杯Aが出土した。土師器甕A（1208）は、口径14.6cm、復元器高約16cm。縦長の体部外面を縦ハケ目、内面は押え痕が残るナデ調整。口縁端部は上下に小さく肥厚して外側にかすかな面をつくる。微白砂を多く含む砂質の胎土で、二次加熱により、内面は黒褐色、外面は口縁端部内側まで暗赤褐色に赤変し、肩部より上方の器面の荒れが著しい。

中層工房の
区 画 溝

堀SA1137柱穴出土土器 水溜遺構SX1226～1230の西岸上を区切る南北堀SA1237は西岸を形成する整地土（「溝上層」）上面から柱穴が掘られており、南から2番目の柱穴掘方から土師器杯、須恵器杯蓋が、南端柱穴からは須恵器壺などが出土した。須恵器杯蓋（1209）は、かえりをもつa類だが、端部を丸く巻き込んだ口縁部が水平に幅広く、ロクロナデ（R）ののちにナデ調整した丸みのある笠形の頂部に浅い凹線による段が巡ることから、杯以外の蓋である可能性がある。口径13.5cm、かえり径11.0cm、残存高2.6cm。淡青灰色で微白砂を含む精良土。壺（1210）は大型長頸壺の口頸部で、体部を塞ぐ円盤上に穿孔して接合する3段成形。大きく開く口縁の端部は外肥厚して内傾面をつくり、頸部中程に2条の浅い凹線が巡る。頸部内外面にロクロ（R）の絞り目が残る。淡灰色で白色砂粒を多く含む多孔質の胎土で、口頸部内面に淡灰褐色の降灰が厚くかかる東海地方産。口径14.6cm、残存高17.6cm。

水 溜 西 岸
の 堀

工房上包含層出土土器 東岸の工房1上を覆う青灰色粘質土層には、平安時代の東西溝SD1177周辺の工房南半部を中心に、工房使用の飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器（1211～1215）に加えて、9～10世紀代の平安時代の土器（1216～1220）が多く含まれ、灰釉陶器椀B（197）が伴出するが、平城宮土器Ⅳ～Ⅶの8世紀後半から9世紀初めに比定される土器が欠落する。

工 房 上
包 含 層

土師器皿A（1211）はa0手法で底部との境が内彎し大きく開く口縁端部は丸く収め、黄茶褐色で、甕類に似た砂粒を多く含む胎土。口径27.1cm、器高3.0cm。須恵器蓋（1212）は扁平な頂部に小さな凸線状の段が巡り、口縁端部は小さく内肥厚して外側に面をもつ。頂部内面はヘラミガキ状のナデ調整で平滑に仕上げ、外面に暗緑色の降灰がかかる。つまみは欠失するが大きな宝珠形とみられ、金属器模倣の椀・鉢類にかぶると推定される。黒色粒子を多く含む精良土で尾張猿投窯の製品とみられる。口径約18cm。須恵器盤A（1213）は口径26.6cm、器高3.7cmの浅い皿形で、底部との境に稜をもち直線的に開く口縁の端部は小さく外肥厚して上方に浅い凹面をつくる。口縁部下半と底部外面をヘラケズリ、底部内面を多方向にナデ調整するほかはロクロナデ（R）。淡黄灰色を呈し、黒色微粒子を多く含む胎土で口縁部外端より内側に厚い降灰がかかる。盤A（1214）は底部との境が弧を描き内彎気味に開く口縁部で、端部は上方に凹面をつくる。口径28.1cm、復元器高4.1cm。口縁部内外面はロクロナデ調整で、底部外面はロクロナデ（R）。黒色粒子を多く含む胎土で、外面中央部が暗灰色、外面周縁部と内面に白色の降灰がかかり、部分的に降灰のない淡茶色の重ね焼き痕があり、東海地方尾北窯産の可能性がある。須恵器甕C（1215）は広口で直立する口縁部で、端部は小さく外肥厚して上方に面をつく

工房使用の
土 器

る。体部外面は間隔の粗い平行文叩き目で、叩き板の端が口縁部下半にあたり、頸部下までをロクロナデ調整でナデ消す。体部内面は斜め方向のナデ調整。淡灰色で黒色微粒子を含む精良土で、内面に暗灰色に発色する鉄釉を塗布した尾張猿投窯産。口径31.0cm。

平安時代の
土器

土師器杯(1216)は薄い器壁で、口縁部をヨコナデし、底部外面不調整のe手法。口縁端部が小さく内側に突出し橙褐色で赤色粒子を多く含む。口径15.2cm、器高2.3cm。南地区の茶土(38)や炭層1(498~501)・炭層4A(260)および北地区のSD1127周辺出土の杯A(1234)などとともに、平安時代の10世紀初めに属する。皿B(1217)はハの字に開く口縁部をヨコナデするe手法で、小さな平底の外周に基部が大きく先端が尖る三角形の高台を付す。白色微砂混じりの胎土で、外面は茶褐色で内面は朱色を呈し、口径14.8cm、器高3.6cm。薬師寺西僧房出土土器に類似し、10世紀後半に位置づけられる。

黒色土器碗B(1218)は内面と口縁上部外面が黒色のA類。内彎気味に開く口縁の内端部に凹線が巡り、外面下半を横方向にヘラケズリ、内面は密なラセン状ヘラミガキを施す。黒色土器甕(1219・1220)は内面および口縁部外面が黒色を呈するA類で、体部外面は茶灰色の器胎に煤が付着する。口縁部と体部の内面は密なヘラミガキで平滑に仕上げ、1219の体部外面はナデ調整ののち線状のヘラミガキを施すが、1220では摩滅して確認できない。1219の口径16.2cm、1220の口径19.1cm。平城京左京SD650B出土土器(『平城報告VI』)に類似する。

vi 北地区の平安時代・中世の遺構出土土器 (Fig. 65-1221~1240, PL. 239)

ここでは石敷井戸や方形池が完全に廃絶し埋め立てられた後の北地区の遺構および包含層出土土器をまとめた。遺構には中世の東西溝SD1127、平安時代の井戸SE1142のほか、それらの周辺で検出したが遺構図での表示を省略した土坑状の凹みがある。

中世の瓦器

中世の東西溝SD1127等出土土器 SD1127は、北地区西北部の石敷井戸SE1090の石組を壊して東南流する自然流路状の東西溝で、より下層の諸遺構・包含層をも洗い流している。出土土器には遺構の時期を示す中世の瓦器碗(1237・1238)などに混じって、飛鳥Vから奈良時代中頃まで及び平安時代に属するものが含まれ、北地区における遺跡の変遷過程を示している。これは、遺跡全体を通じて、土師器杯皿類の外面すべてを削るc手法の盛行する奈良時代後半~平安時代初頭の土器が少なく、西側や東側の丘陵に近い周辺部に限定されていることと対応し、この時期の谷の中央部はすでに埋没していたことを示す。なおSD1127にはほかに、13世紀末の瓦器碗が含まれている。

1221~1233は溝出土の飛鳥III~奈良時代の土器である。杯Aには内面の暗文に、2段放射文(1221・1222)、1段放射文+連弧文(1223・1224)のほか、1段放射文のものがある。杯AI(1221)は口径17.1cm、復元器高4.8cm。b1手法で口縁端部を小さく内肥厚させ、内面上段の放射暗文が幅広い。飛鳥IV~Vに属する。1222は底部の大半を欠くがa手法で、口径21.1cm。外傾する口縁の端部が内肥厚し、平城宮土器I~IIに属する。1223はa0手法で、内側に巻き込む口縁端部近くに横長の連弧文、底部内面に巻きの大きなラセン文を施す。口径21.2cm、器高4.3cm。平城宮土器II~IIIに属する。1224はb0手法で内面の1段放射文が直立気味であるが、口縁端部近くに連弧文をもつ。口径20.0cm、器高3.6cm。平城宮土器IIに属する。皿A(1225)は口縁部が直立気味に屈曲し、端部が丸く内肥厚する。a0手法で1段放射文。口径21.8cm、器高3.6

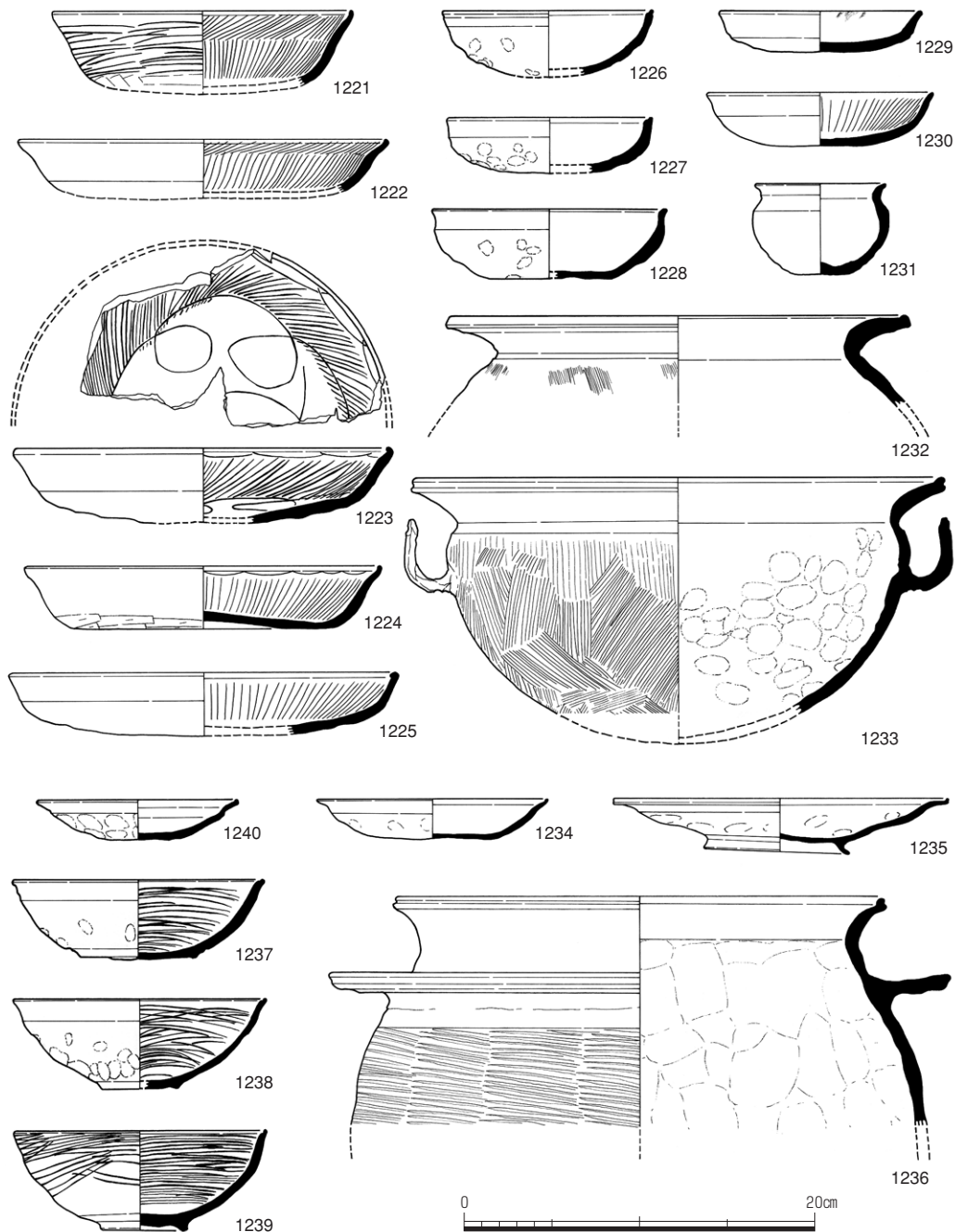


Fig. 65 その他の遺構出土土器 1:4

cm。飛鳥Vに属するとみられる。杯G（1226）は丸みのある底部外面に指頭痕が残り、直立気味の口縁端部の外面に凹線をもつGc類。口径12.2cm、器高3.8cm、径高指数31で、下層遺構起源の土器とみられる。杯G（1227）は緩やかな弧を描く底部から内屈して口縁部に至り、端部に内傾面をつくる。口径11.6cm、器高3.2cm。奈良時代前半の土器であろう。椀C（1228）は平底と口縁上部で内屈する点で杯Gとは区別され、強いヨコナデで外肥厚した端部に内傾面をつくる。平城宮土器Ⅲ以降の奈良時代中頃の土器とみられる。杯G（1229）は口径11.4cm、器高2.4cm。灯明痕が明瞭に残る。杯CII（1230）は口径12.8cm、器高3.1cmで、飛鳥Ⅲ～Ⅳに属し、壺B（1231）は口径7.4cm、器高5.2cm。SD1130など出土例と類似する。甕A（1232）は口径26.0cm。鍋B（1233）

は口径30.1cm、器高15.3cm。ともに「大和A型」で、SD1103の甕A（1086）・鍋B（1102）やSK1153の鍋B（930）に類似し、飛鳥V～奈良時代前半に属する。これらは土師器杯A（1223・1224）や椀C（1228）などとともに、SD1110廃絶とSD1103への付け替えが、当該期の北地区中央部の利用に関わることを示す。

1234～1236はSD1127周辺の土坑状の凹みから出土したもの。平安時代の杯A（1234）はe手法で、橙色で赤色粒子の多い砂質土。口径13.1cm、器高2.5cm。灰釉陶器模倣形態の皿B（1235）は口径19.0cm、器高3.0cmで、2段ナデの口縁部。羽釜（1236）は強く巻き込む口縁の端部が上肥厚し、体部は横方向の平行文叩き目。内面の当て具痕に傷がある。口径27.6cm、体部径33.0cm。10世紀代であろう。瓦器椀（1237～1239）は口径14.2～14.4cm、器高4.6～5.8cm。SD1127の1237はヘラミガキが粗い12世紀後半、ヘラミガキを欠く1238は13世紀前半に比定され、包含層出土の1239は密なヘラミガキと台形の高台から、12世紀中頃に比定される。

井戸SE1142出土土器 井戸SE1142は北地区西部にある小規模な井戸で、底部中央に据えた3段の曲物内埋土から土師器杯などが出土した。杯（1240）は口径11.3cm、器高2.3cm。底部外面に指頭圧痕をとどめるe手法で、平安時代の10世紀前半に比定され、埋土最下層から出土した延喜通宝（907年初鑄）と矛盾しない。

F 工房下層遺構包含層等出土土器

下層の7世紀中頃の土器

工房建物SB805周辺下層で検出した西の谷の流路SD829の灰緑色粘砂層、東の谷の下層流路SD1173、および西の谷の下層石敷遺構周辺などからは7世紀中頃の土師器・須恵器が出土した。廃棄物層や工房関連遺構出土土器などに含まれる当該期の土器は、これら下層の土器を起源とするもので、SD1173とかかわる「溝上層」出土土器、下層石敷を壊す水溜状土坑SX761出土土器、下層井戸SE822出土土器などについては前節までに既述した。以下では、灰緑色粘砂層およびその上層の灰色シルト層、SD1173出土土器について報告する。

i 工房下層包含層（灰緑色粘砂層）出土土器（Fig. 66～70-1251～1422、PL. 240～244）

灰緑色粘砂層出土土器

灰緑色粘砂層は工房建物SB805、溝SD804・803周辺の下層で、炭溜り・青灰整地土・木屑混茶褐土の薄い土層および灰色シルト層を介して検出された北北西にのびる流路SD829の堆積層で、比較的多量の瓦類、木製品、土器が出土し、少量の金属器・フイゴ羽口・漆壺などが含まれる。出土した土師器・須恵器は調整手法などの観察が可能な良好な遺存状況にあり、供膳具は大型を含む土師器と小型が主体の須恵器の違いはあるが、ともに多く、多様な土師器煮炊具、須恵器貯蔵具とともに、当該期の標式資料となりうるまとまった内容をもつ。

標式資料

土師器の構成

土師器 器種には杯C、杯D、杯G、杯H、高杯C、高杯G、高杯H、皿A、方形皿、鉢、蓋、台付椀、壺H、甕A、甕B、甕C、甕X、鍋Bなどがある。このうち、杯Cは全体の32%で、杯G・杯Hを合わせると55%を杯類が占める。他は3種の高杯が25%で、皿・鉢などの大型の供膳具はごく少量ずつ、甕Aを主体とする煮沸具は12%である。

杯 C

杯Cには、法量で杯CI（1271～1282）、杯CII（1267～1270）、杯CIII（1252～1265）、杯CIV（1251・1266）がある。小型の杯CIIIが約5割を占め、次いで杯CIが33%で、杯CII・IVは少ない。

杯C類は調整手法の構成、径高指数の点で飛鳥Ⅱの標式資料である坂田寺跡SG100の土器群よりも古い様相を示し、飛鳥Ⅰに属する山田寺下層の土器群よりも新しいものが含まれる。

飛鳥Ⅱより
古くⅠの
山田寺下層
より新しい

杯CIの大半はb1手法で、a1手法は器高の浅い1282など数点に限られる。b1手法には底部周縁を4分割し、それに底部中央を加えた5分割でヘラケズリするもの(1271)と底部と周縁を一連に3分割でヘラケズリするもの(1276~1279)、底部のみを1方向に削るもの(1281・1282)の別がある。1273~1275は5分割か3分割かを確定できないが、確実な5分割ケズリと1方向削りはそれぞれ2点のみで、多くは3分割ケズリである。5分割ケズリの杯CI(1271)は口縁端部に内傾面をもち、暗文は底部の小さなラセン文と口縁部の細い正放射文。赤褐色のきめ細かい精良土で、口径15.3cm、器高5.7cm、径高指数37。1272は底部を欠くが、ヘラケズリの重なり方から5分割削りとみられ、口径16.8cm。口縁部に細い正放射文を施す。確定できない1273~1275を含めた3分割削りの杯CI(1273~1279)には、口縁上部で内屈し端部の内傾面が明確なもの(1274・1276・1278)と、そうでないもの(1273・1275・1279)の別があるが、いずれも赤褐色を呈する精良土で、赤色粒子を含むもの、きめの細かなもの、白色微砂を含むものの胎土の違いは対応しない。口径14.6~17.2cm、器高5.5~5.6cm。径高指数36前後(1273~1276)と32前後(1278・1279)とがあり、確実なものでは5分割削りよりも口径が大きい傾向にある。1方向に削る杯CIには、口縁上部での内屈が著しく、内傾面が凹線状を呈するもの(1280)と、内屈せずに直立気味の薄い口縁部で内傾面が目立たないもの(1281)がある。前者は赤褐色で砂混じりの胎土で、口径16.0cm、器高5.4cm。径高指数33。後者は茶褐色を呈し白色砂粒を多く含む胎土で、口径15.7cm、器高4.9cm。径高指数31。ともに口縁下部の外面に指頭痕の凹凸が残り、後者では削りの及ばない底部周縁の器壁が厚い。底部ナデ調整のa1手法の杯CI(1282)は口縁端部に緩やかな内傾面をもち、赤褐色のきめ細かな胎土で細かな赤色粒子を含む。口径15.7cm、器高5.0cm。径高指数32。底部外面は滑らかで、平坦部が他より広く、底部内面のラセン文が他では小さな1重であるのに対して2重に巡る。

3分割ケズリ

杯CII(1267~1270)は口径11.7~12.2cm、器高3.8~3.9cm、径高指数31~32。小さな平底で口縁端部に内傾面をもつもの(1267・1269)と丸底気味で口縁端部の内傾面が目立たず凹線状をなすもの(1268・1270)とがある。外面調整は、前者の1267が底部のみを1方向に軽く削るb0手法であるほかは、底部をナデ調整するa0手法で、後者には指頭痕が残る。ともに赤褐色で微砂を含む精良土。1269の口縁端部内側に灯明痕が残る。

杯CIIIは口径9.1~10.7cm、器高3.2~3.7cm。径高指数36~38のものと同径高指数30~33のものに分かれ、多数を占める前者(1252~1259・1264)は5・3分割削りの杯CIに対応し、後者(1260~1263・1265)は3分割・1方向削りの杯CIや杯CIIに対応する。外面調整は大半がa0手法で、b0・b1手法のもの(1264・1265)がわずかに含まれる。器高のより高い(3.4cm以上)前者には、口縁上部で内屈気味のもの(1255・1257・1258)と緩やかな弧を描くもの(1252~1254・1256)の別があり、口縁端部では小さく外反して凹線状をなすもの(1254・1258)と薄く尖るもの(1253・1255)などの小異があるが、いずれも赤褐色系の精良土で、胎土のきめが細かく白色土の混じるものや微砂質のものとの違いは必ずしも対応しない。これらの口径は9.1~10.4cmの範囲で漸移的に分布し、モデルの銅鏡が備える重鏡構造がうかがえる。b手法の杯CIII(1264)は内彎する口縁の端部が小さく外肥厚し、淡褐色で雲母や赤色粒子、砂粒を多く含む胎

土が杯G類のそれに類似する。外面は口縁上部までの側縁部と底部を分割してヘラケズリ。内面にための1段放射文を施す。

後者の器高のより低い(3.3cm以下)杯CⅢにも、多くのa0手法とわずかなb手法がある。a0手法(1260~1263)には口縁上部で内屈気味のもの(1262)、緩やかな弧を描くもの(1260)の別があり、口縁端部に内傾面をつくるもの(1261)や、薄く尖るもの(1260・1262)がある。最も径高指数が小さい1263は他に比べて平底気味で、直立する口縁の端部の内傾面が明確であるが、赤褐色できめ細かな胎土は共通する。これに対して、b手法の杯CⅢ(1265)は、底部外面に1方向のヘラケズリ、口縁部外面に太いヘラミガキを施し、口縁端部は広い凹線状の内傾面をもつ。底部内面の暗文がラセン文ではなく大きな×文である点でも他と異なっている。暗茶褐色を呈する微砂質の胎土で、内外面全面が煤けている。

杯CⅣにはb1手法(1251)とa1手法(1266)とがあるが、それぞれ1点のみである。杯CⅣ(1251)は縦横の2方向にヘラケズリした丸みのある底部と、直立し端部が肥厚しない口縁が特徴的。外面はジグザグに往復するヘラミガキを全周を4分割して施し、内面の暗文は口縁中程までの放射文と1重のラセン文。赤褐色で微砂質の精良土。口径8.2cm、器高3.1cm。径高指数38。杯CⅣ(1266)は外反する口縁部で端部に広い面をつくり、外面を粗くヘラミガキする。口径7.9cm、復元器高2.5cm。径高指数32程度。

杯 D 杯D(1284・1285)には、丸底気味で口縁端部が尖るもの(1284)と平底気味で内傾面をもつもの(1285)があるが、ともに、内面の暗文がなく、底部外面をヘラケズリしたのちに施したヘラミガキが著しく緻密で、橙褐色で微砂を多く含む胎土が特徴的。口径15.2~15.4cm、器高4.3~4.4cm。径高指数28~29で、この器種に法量による器種分化はない。

杯 G 杯G(1286~1291)は口径9.7~11.2cm、器高3.0~3.7cmで、杯CⅢと同法量。いずれも底部外面に粘土紐継ぎ目や指頭痕をとどめるa手法で、暗文・ヘラミガキを施さず、内面にコテ状工具痕が残るもの(1287・1290・1291)がある。口縁端部内側が尖り、外側が凹線状をなす杯Gc類(1286~1288)と内傾面や凹線をつくる杯Gb類(1289~1291)とがあり、前者は白淡灰色で石英粒を含む胎土、後者は茶灰褐色で微細な赤色粒子や雲母片を含む。

杯 H 杯Hには、法量で杯HⅡ、杯HⅢがあり、小型の杯HⅢが大半を占める。杯HⅡ(1306)は口径13.4cm、器高4.5cm。杯HⅡでは大型で、高杯Hの杯部片との区別は難しく、1点のみ確認。直立する厚手の口縁部で端部が薄く外反する。茶灰褐色で赤色粒子を含むきめ細かな胎土。杯HⅡ(1304・1305)は口径11.7~11.8cm、器高3.2~3.6cm。大きさに対応する杯CⅡと同様に、点数が少ない。底部の厚い1304は器高が高く、淡褐色で大粒の赤色粒子を含む微砂質土。器高の低い1305は底部が薄く、厚めの口縁部が直線的。淡褐色で砂混じりの微砂質土。杯HⅢ(1292~1303)は口径9.5~10.9cm、器高2.8~3.5cm。径高指数28~34。丸みのある底部で器高が高く、薄い口縁部が外反するもの(1293・1297など)と小さな平底で器高が低く、口縁部が厚く直線的に開くもの(1294・1305など)とがあり、後者のヘラケズリは口縁部との境の段を削り取り明瞭な稜をつくる傾向にある。胎土には金雲母が多いものや、赤色粒子の大粒なもの(1297・1299・1304)、それらの目立たない微砂質のもの(1300・1305)があるが、淡褐色~茶褐色の色調と、微細な赤色粒子を含む胎土が一般的で、形態の小異と胎土・色調は対応しない。

高杯 C 高杯C(1307~1316)は杯部内面にラセン文と放射文をもつ杯Cに対応する。杯部の深めのも

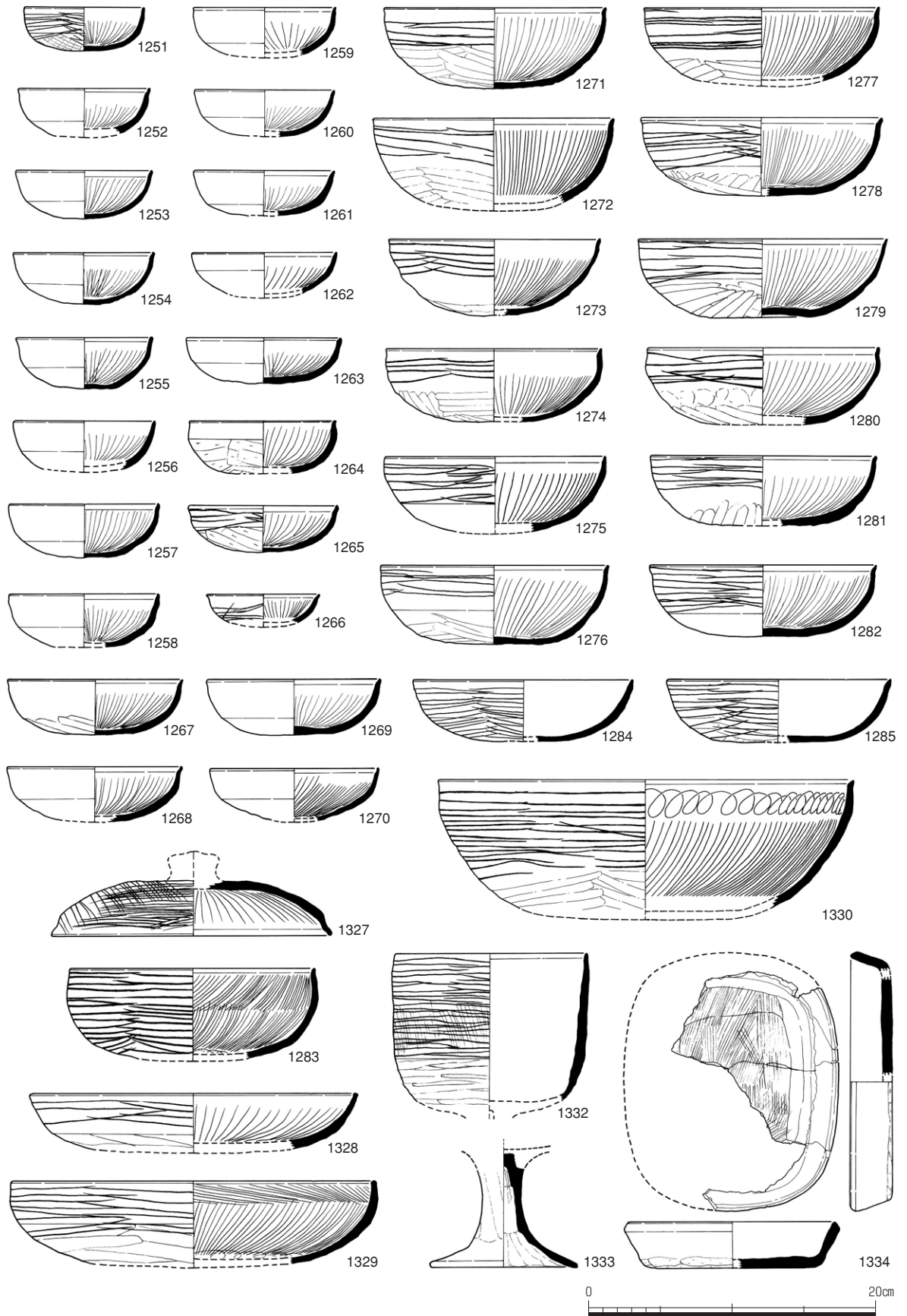


Fig. 66 灰綠色粘砂層出土土器 (1) 1:4

の(1310~1312など)と、浅めのもの(1313・1315)があり、ともに脚部と杯部の境に凸線状の段をもつが、後者の段が小さく不明確な傾向にある。杯CIと同様に、杯部上部で内屈し口縁端部に内傾面をもつもの(1307・1308・1310)と、緩やかに彎曲し口縁端部が小さく内肥厚して薄く尖るもの(1309・1311・1312)の別があり、前者には杯部外面にヘラミガキを施すもの(1314・1315)があり、内面の放射暗文にループ状の連弧文が加わる。胎土には赤褐色できめの細かなものと、淡赤褐色で赤色粒子を含む微砂質のものなどがあるが、形態と色調・胎土とが必ずしも対応しない点も杯CIと同じである。

高杯 G 高杯G(1317~1320)は暗文・ヘラミガキを施さない杯Gに対応する。下端に段をもち大きく開く杯部と、裾広がりて外面に縦方向のナデ調整、内面にしぼり目が残る脚部とからなり、強く外折して長くのびた脚裾部はヨコナデ調整。直線的に開き口縁端部を丸く収めるもの(1317・1320)と内彎気味に開き端部外面に凹面をつくるもの(1319)があり、全形が知れる1320は口縁端部を内屈し、杯部内面にコテ状工具痕が残る。茶褐色で砂混じりの胎土で、口径14.8cm、器高11.4cm、脚部径9.7cm。杯部(1319)は口径14.5cm。口縁端部は杯Gc類(1286など)と同様で、白褐色で石英粒を含む胎土も共通する。杯部(1317)と脚部(1318)は色調・胎土が杯Gb類(1289など)と同じで、口径16.6cm、脚径9.7cm。

高杯 H 高杯H(1321~1326)には、杯Hと同じ技法でつくった口径13.8~15.0cmの杯部(1321・1322・1324)と、中実でつくり内面をヘラケズリで円錐形に抉りとり脚径9.6~9.8cmの脚部(1323・1325・1326)があるが全形を知れるものがない。杯部には口縁部が短く浅いもの(1322)と長めで深いもの(1321・1324)の別があり、脚柱部外面のヘラケズリが及ぶ範囲が異なり、底部内面に布目痕を残すもの(1323・1325)がある。強く外反する脚裾部は内外面ともヨコナデ調整で、内側に小さく肥厚させるもの(1325)のほかは丸く収める。胎土・色調は杯Hに対応する。

鉢 H 鉢H(1331)は口縁端部がわずかに内彎するが、ヘラケズリした丸い底部とヨコナデした直立気味の口縁部との境に段をもち、色調、胎土も杯Hと共通する。口径16.8cm、器高8.5cm。小壺H(1335)は小壺Bの形態で、体部外面のヘラケズリ調整と赤色粒子を含む淡褐色の胎土が、杯H、高杯H、鉢Hと共通する。口径6.8cm、復元器高5.5cm。鉢B(1283)は法量と口縁端部の内傾面が杯CIに似るが、底部が広く、内彎する口縁部が異なる。底部外面をヘラケズリののちに口縁部を広く密にヘラミガキし、内面の暗文は底部中央に小さなラセン文、口縁部に2段の放射文を密に施す。淡褐色で微白砂を含む精良土。口径17.0cm、器高6.4cm。径高指数38。

蓋 蓋(1327)は浅い杯Cを逆転した形状で、外反する口縁部の内側を鈍い内傾面とする。頂部外面に分割した密なヘラミガキ、内面に粗い放射暗文を施す。頂部に大きなつまみの剥離痕があり、灰色シルト層例(1426)から復元した。口径19.2cm、残存高3.9cm。蓋類は1426を含めて2点のみと僅少で、1327は重椀構造の外容器としての鉢B(1283)にかぶる可能性がある。

皿 A 皿A(1328)はb1手法で、底部の器壁が厚く、薄い口縁の端部はわずかに内肥厚し、上方に小さな面をもつ。内面の1段放射暗文と外面のヘラミガキがともに粗く、赤褐色で微白砂を含む精良な胎土。口径22.4cm、器高4.2cm。器高の低い鉢(1329)は丸みのある口縁下半~底部外面をヘラケズリするb1手法。内彎気味に開く口縁の端部がわずかに肥厚する。赤褐色で微白砂を含む精良土。口径25.2cm、復元器高6.1cm。鉢(1330)は平底から斜めに開き、上部で内屈する口縁の端部が鋭く外肥厚して内傾面をつくる。外面は口縁部下半をヘラケズリし、上半にヘ

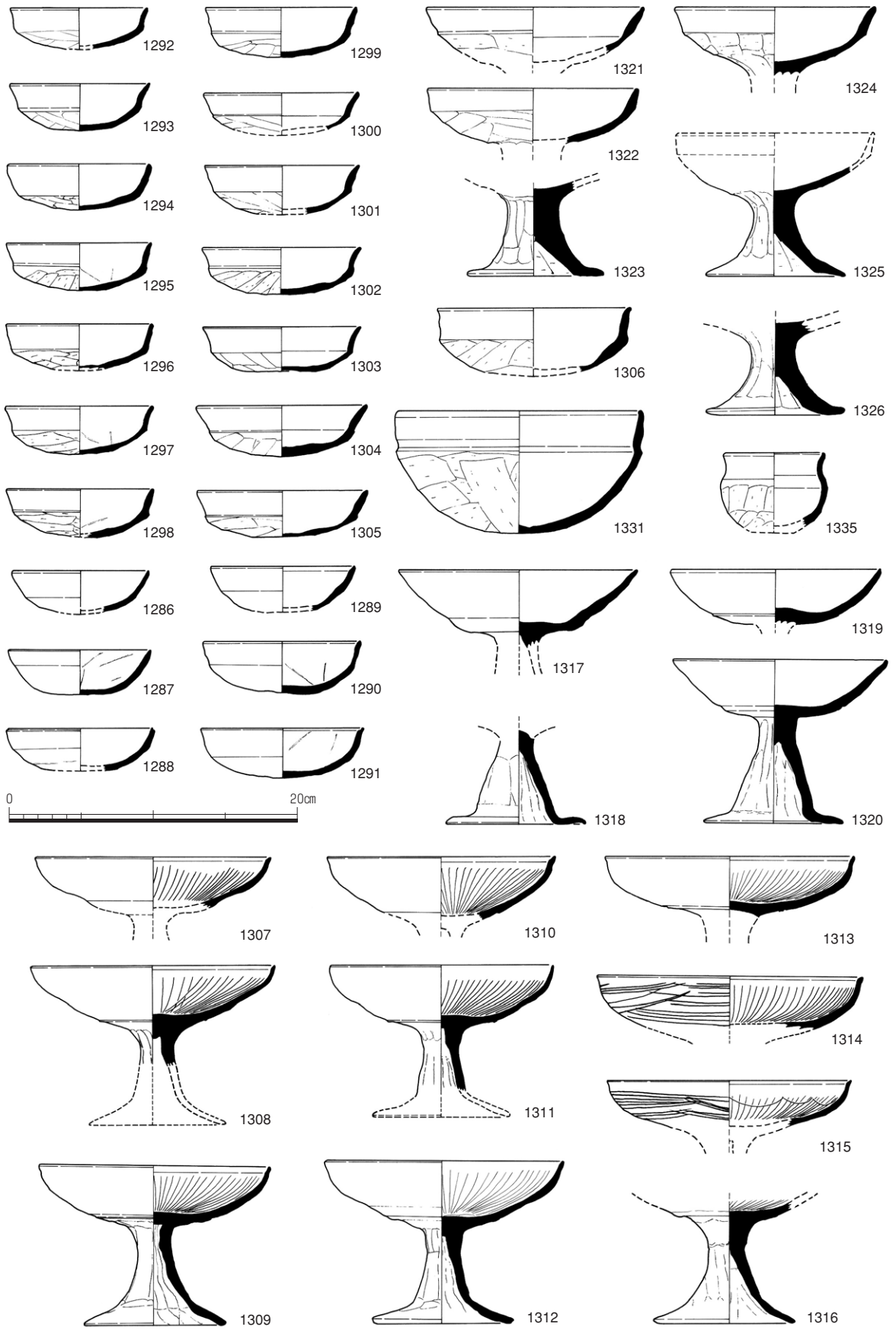


Fig. 67 灰綠色粘砂層出土土器(2) 1:4

ラミガキを粗く施したb1手法。口縁部内面には斜放射文と下向きのループをもつラセン文を施す。淡橙褐色で砂粒を含む胎土で、口径28.9cm、復元器高9.5cm。台付椀(1332)は口径13.3cmの筒形の椀部で、薄い口縁端部に鈍い内傾面をつくる。外面下半はヘラケズリ、中程をハケ目調整のち上半部にヘラミガキを施す。高杯Cと同じつくりの脚部(1333)がつくと思われる。ともに淡橙褐色で砂粒を含む胎土。石神遺跡SE800出土の類例(『藤原概報15』65頁、第29図-7)では椀部内面に放射文とループ状のラセン文を施し、下半部外面に1本の細長い角状の把手を貼り付けるが、本例にはいずれもみられない。

隅丸方形皿 平面形が折敷に似た隅丸方形皿(1334)も珍しい器種で、平らな底部に口縁端部外側に面をもつ短い口縁部がつく。底部内面のハケ目調整を外周のヨコナデ調整で消し去り、底部外面は外周をヘラケズリするほかは不調整。橙色で石英粒を含む砂質土。復元長径18.0cm、復元短径15.0cm、器高3.3cm。なお、隅丸方形皿は前述の水溜SX1230堆積土や、飛鳥寺南方遺跡、川原寺北方遺跡の7世紀中頃の須恵器に稀少な出土例があり、奈良・平安時代の興福寺一乗院宸殿下層出土土器³⁴⁾に格狭間形の脚をもつ土師器がある。

甕 A 甕Aは煮炊具の7割を占め、法量の大小や、形態・製作手法などに多様なものがある。甕A(1336・1337)は下膨れの体部と直線的な口縁部、体部外面の細かな縦ハケ目と底部の二次ハケ目、体部内面の斜めのヘラケズリと底部内面に残る指頭圧痕など、典型的な「河内型」の特徴をもつ。口縁端部を小さく内肥厚し外側に面をつくり、口縁部内面を断続的な横ハケ目調整し、暗茶褐色系で、金雲母を多く含む微白砂質の胎土。口径13.6~13.8cm、器高11.5~13.5cm。一回り大きい甕A(1338)や内彎気味の口縁端部を外肥厚させる甕C(1347)も、同様の色調・胎土で、体部内面のヘラケズリが頸部付近では幅狭く、粘土紐継ぎ目が残るなどの小異があるが「河内型」に属する。1338の口径16.6cm、復元器高16cm、1347の口径13.8cm。甕Aではこれらの「河内型」が目立ち、いずれも体部外面の煤と、口縁部外面の赤変が著しく、口縁部内面が焦げ茶色の汚れが付着する。甕A(1340)は緩やかに外反する口縁の端部を上方につまみ上げて外側に面をつくり、体部内面上半に横~斜めハケ目、下半に押え痕が残る。黄灰色で赤色粒子や石英粒を多く含む胎土と口縁部形状は「伊勢型」に近く、体部外面の煤けが弱い。復元器高約17cm。

甕A(1339・1341)は縦長気味の体部と短く外反する口縁部からなり、ともに口縁端部が外傾面をなすが、つくり方が異なる。1339は、ハケ目調整が残る丸い頸部で口縁端部が内肥厚し、体部外面をハケ目調整、内面は頸部下に粘土紐接合痕が残るナデ調整で、下半にコテ状工具のあたりが残る。底部中央を除く外面の被熱が著しく、体部内面上半が焦げ茶色を呈する。口径14.0cm、器高16.2cm。1341は、頸部内側に口縁接合時の稜をもち、口縁端部を外側に肥厚させ、体部外面は縦横のナデ調整、内面下半にコテ状工具痕が残る。石英粒を多く含む砂質の胎土で、被熱が軽い底部は茶灰褐色、被熱により器面が荒れた体部上半は暗褐~赤褐色を呈し煤が厚く付着する。口径12.0cm、器高15.2cm。小型の甕A(1342)はくの字に開く口縁の端部外側に面をもつ。体部外面をハケ目調整、体部内面をナデ調整し、口縁部内側にハケ目調整が残る。口径12.2cm。「大和型」に属すが口縁形状は異例である。甕A(1343)は内彎気味で端部が外肥厚する口縁部と、外面をヘラケズリした器壁の薄い球形の体部が特徴的。赤色粒子を含む茶褐色の胎土。口径12.3cm、器高11.9cm。口縁部内面に粗い条のハケ目が残る、ナデ調整の体部内面下

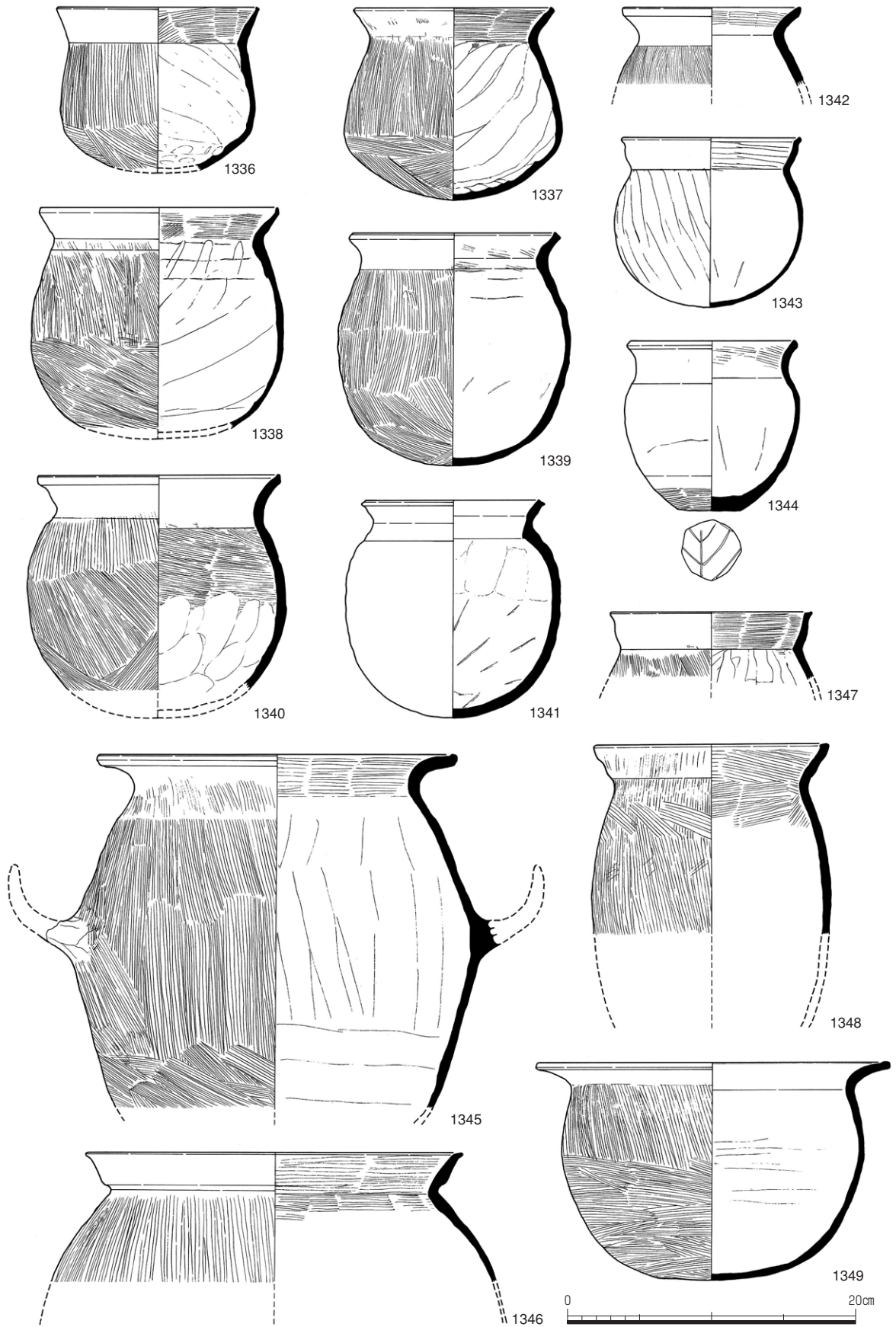


Fig. 68 灰綠色粘砂層出土土器 (3) 1:4

半にコテ状痕が残る。石神遺跡SE800などに僅少な類例がある。

平底の甕 甕X (1344) は口径11.2cm、器高11.8cm。近畿地方には珍しい平底の甕で、器壁の厚い底部外面には木葉痕が残り、体部外面は底部周辺に横方向の粗いハケ目調整を施すほかは、ナデ調整で、体部内面はコテ状工具痕が残る平滑なナデ調整。灰褐色で石英粒を多く含む砂質の胎土で、

甕 B 体部上半は被熱で白褐化し、下半と内面は煤などにより黒色を呈す。甕B (1345) は強く外反する厚手の口縁部で端部は内肥厚する。縦長気味の体部中程に厚手で挿入式の把手がつき、内面は上半を縦方向に下半を横方向にナデ調整。淡褐色で赤色粒子を含む微砂質の胎土が特徴的。口径25.0cm、復元器高約27cm。甕B (1346) は口縁部中程の器壁が厚く、薄く外肥厚させた口縁端部の上方に凹面をつくる。体部外面の縦ハケ目は口縁部に及び、体部内面は横方向のナデ調整。口縁部内面と頸部下は横ハケ目で平滑に仕上げる。茶褐色で白砂や雲母片を含む砂質の胎土も「大和型」の特徴をもち、坂田寺跡SG100出土甕Bに類似する。

甕 C 甕C (1348) は口径16.0cm、残存高13.4cmの小型で、くの字に開く口縁の端部を小さく内肥厚させて上方に平坦面をつくる。口縁部外面には、体部上半と一連の粗い一次ハケ目がかすかに残り、部分的に赤変し、体部下半は条の浅い二次ハケ目調整で厚く煤が付着する。口縁部内面は粗い横方向のハケ目、体部内面は横方向のナデ調整。暗赤褐色で石英粒を多く含む砂質の胎土が特徴的。鍋 (1349) は深手の体部に甕B (1345) に似た強く外反する広口の口縁部がつく。体部外面上半を縦方向、下半を横方向、底部を一方向にハケ目調整し、内面は横方向のナデ調整。口縁部外面に粘土紐継ぎ目をもち、口縁端部はかすかに肥厚する。淡褐色で赤色粒子の縞や雲母片を多く含む微白砂質土。外面は口縁下部までの全面が煤け、内面は底部下半に煤けた跡がある。口径24.4cm、器高15.1cm。「大和型」に属す。

須恵器 器種には杯G、杯H、台付杯、蓋、高杯G、高杯H、壺B、鉢、短頸壺、平瓶、細頸壺、台付長頸壺、甕などのほか、別掲した漆容器の壺 (図版編〔Ⅱ〕PL. 391-53・54・58) がある。このうち杯G・杯H・台付杯の杯類は、蓋類を除いた全体の約5割を占め、高杯類の11%などを加えると約6割が供膳具で、貯蔵具は多様な形態の壺類が17%、甕類が16%である。杯類では杯G・杯H・台付杯はそれぞれ全体の20・25・2%の出土量であり、大きさが土師器杯CⅢ等の小型器種と同じ杯G・杯Hが主体で、杯Hが杯Gよりも幾分多く、土師器杯CIや高杯と同じ大きさの台付杯が極めて少ない。この時期の須恵器供膳具の特色を示す。

須恵器の構成

杯 H 蓋 杯H蓋 (1350~1359) は口径10.2~11.3cm、器高3.2~3.9cm。1353のほかは口径10cm代が主体を占める。いずれも頂部外面ヘラ切り (R) で1350・1351・1357にはナデ調整が加わり、内面は1351~1353・1357を除き、一方向の仕上げナデを施す。形態には頂部が平坦な笠形で口縁部が内屈するもの (1350・1353など) と丸みのある頂部で口縁部が直線的なもの (1352・1355など) があり、前者には底部と口縁部の境が段をなすもの (1356・1359など) がある。内面の成形時の凹凸が小さい前者が主体を占める。色調・胎土は1357が灰白色で石英粒を含むほかは、暗灰色~青灰色で青色微粒子を含む微砂質土。杯H (1360~1373) は受け部径11.2~12.4cm、口径8.6~10.3cm、蓋があたる箇所での径9.8~11.4cm、器高2.5~3.4cm。1371・1373が底部外面ヘラ切り (L) であるほかは、いずれもヘラ切り (R) 不調整で、1364には一方向のナデ調整が加わる。内面は1361~1363・1365を除き底部に一方向のナデ調整を施す。形態には丸みのある底部で直線的な受け部 (1360・1370など) と、平坦な底部で内彎気味の丸い受け部 (1362・

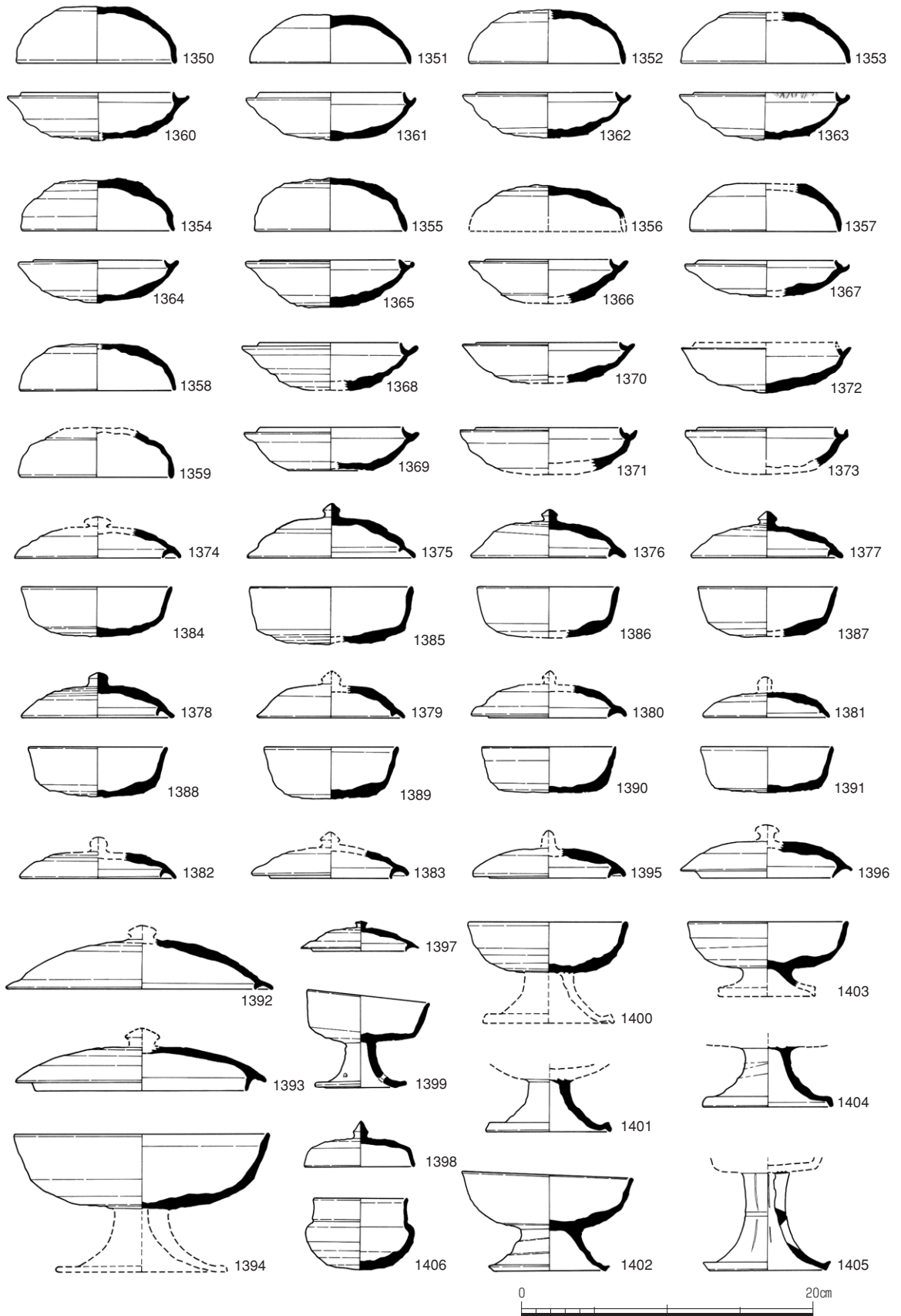


Fig. 69 灰綠色粘砂層出土土器(4) 1:4

1363・1365・1371など）とがあり、後者には受け部外端に面をつくるもの（1367・1373など）や端部が丸く内肥厚するもの（1363・1365）があり、口縁部が強く外反する傾向にある。前者の1361が淡灰色で微白砂を含む硬質であり、1368が黒色で微白砂が目立つ粗い胎土である他は、暗灰色～青灰色で青色微粒子を含む微砂質土。胎土・色調と大きさを加味すると、蓋の1350～1353は身の1360～1363と組み合わせる可能性があり、1350～1360は暗灰色で微砂質、1351～1361は淡灰色で微細な青色粒子を含む硬質。1352～1362と1353～1363は青灰色で微砂質。なお、蓋1356と身1364の内面全面に朱墨が付着し、身の1362・1363・1370に灯明痕があり、1365の内面は茶色の汚れが著しく、道具として使用されたことがうかがえる。

朱墨の付着
灯明痕

杯 G 蓋

杯G蓋（1374～1383）はかえり径7.2～9.4cm、口径8.6～11.4cm、身にあたる箇所径7.7～10.0cm。最も大きな1375と最も小さい1381はそれぞれ1点のみで、多くは口径8.9～10.0cmの杯Gにかぶる大きさ。いずれも頂部外面の1/2程度をロクロケズリし、小径で背の高い擬宝珠形（1377・1376）や乳頭形（1378）のつまみをつけ、内面中央には一方向のナデ調整を施す。1374・1375を除きロクロは右回転。形態では口縁部が直線的か外反気味のもの（1376～1378など）と段をもって内彎するもの（1374・1380・1383など）とがあり、前者のかえりには内寄りに小さいもの（1375・1378・1381）があり、後者のかえりには長く反転して下方へ突き出るもの（1380・1383）がある。胎土色調は、1376～1378が赤紫色の断面で外表が暗青灰色を呈し青色微粒子を含む微砂質の胎土で、外面に白色系の降灰がかかる。この特徴は前者に一般的。後者は淡灰色～淡青灰色で、外面に白色系の降灰が薄くかかる特徴をもつが、最小口径の1381は、大粒の青色粒子を多く含む精良土で、内面に黒灰色の降灰が著しくかかる。

杯 G

杯G（1384～1391）は口径9.0～11.1cm、器高3.2～4.0cm。口径の大きいもの（1385）と口径に比して深いもの（1389）は少なくそれぞれ1点のみ。口径9.4～10.2cm、器高3.5～3.6cmで底部を丸くロクロケズリするもの（1384・1386～1388）が一般的で、小型で底部が平らなもの（1390・1391）が少量含まれる。後者は口径9.0～9.2cm、器高3.2cm。ヘラ切り不調整（1391）とロクロケズリ（1390）とがあり、1391の底部内面に一方向の仕上げナデ調整がみられるが、ともに内面には朱が付着する。大型の1385は底部外面ヘラ切り不調整（R）で、断面が赤色、外表が暗青灰色の青色微粒子を含む精良土。大きさで対応する蓋1375と胎土・色調が共通する。大きさと胎土・色調から、蓋と身は1374～1384、1376～1386、1377～1387、1378～1388についてはそれぞれ対応するとみられるが、1389・1390は口径の対応に従った。

蓋と身の
対応

台付杯の蓋

大型の蓋（1392・1393）は、法量から後述する1394や、灰色シルト層の1433などの台付杯（杯Bの祖形）の蓋とみられる。1392は口径18.2cm、かえり径15.6cmで、口径16.8cm程の身にかぶる。当該期の台付杯の類例では難波宮址北西地区谷部³⁵14～16層に口径15.5～16cmのものがあり、水落遺跡の杯Bは口径17.0cm。いずれも杯Gの1/10以下の出土量である。口縁部は直線的で薄く、張りのある丸い頂部の外面1/2程度をロクロケズリ（R）し、中央につまみ接合時のロクロナデが残り、内面は全面をロクロナデ調整。全面に二次加熱を受けて煤け、暗茶褐色を呈す微白砂質の胎土。1393は口径17.1cm、かえり径14.4cm、残存高3.0cm。口径15.6cmほどの身にかぶる。丸い頂部の2/3程度をロクロケズリ（R）で平滑に仕上げ、中央部につまみ接合時のロクロナデ、内面は広い範囲を複数回の一方向ナデ調整。微白砂質の精良土で、白色の降灰がかかる外面は暗青灰色、内面は暗紫色。長く大きなかえりが口縁部よりも下方にのびる形態は、蓋（1396）

と類似し壺類にかぶる可能性がある。

台付杯 (1394) は口径17.3cm、残存高5.2cm。丸みのある底部と直線的に開く口縁部からなり、台付杯
 鈍い内傾面をもつ口縁端部は杯G (1385) のそれに類似する。ロクロケズリ (R) した底部中央
 に直径4.0cmの脚台の剥離痕があり、灰色シルト層の1433のような内寄りにつく高い台ではなく、
 高杯脚部のような脚台と想定した。白色砂粒を多く含む精良土で、外面が黒い青灰色、内面は
 青灰色を呈し、蓋を正位で重ね焼きにした有蓋の器種である。

多様な形の蓋 (1395~1398) はそれぞれ1点のみの希少な器種。蓋 (1395) は、ロクロケズリ
 ののちにナデ調整した平滑な頂部で、かえりの基部が厚く、鋭い先端が口縁部より下に出る点
 が、杯G蓋と異なる。口径10.6cm、かえり径8.2cm。黒灰色で外面に黄灰色の降灰がある。蓋 (1396)
 は肉厚な頂部外面が平滑で、短い口縁部と、内向きに長く突き出るかえりが薄い。黒色粒子を
 少量含む精良土で、内面は暗青灰色。外面に暗緑灰色の降灰がかかる。口径11.8cm、かえり径
 9.0cm。壺類の蓋である。蓋 (1397) は口径8.2cm、かえり径6.4cm、器高2.1cm。口径7.4cm程の杯
 G形の杯部をもつ小型の高杯Gの蓋で、甘樫丘東麓遺跡の焼土層SX037出土土器に、ヘラ記号
 の一致で蓋と身の対応が確認される類例がある。頂部外面の1/2をロクロケズリ (R)、内面の
 ロクロナデは低速回転で角張る。暗灰色の内面で断面が赤く、外面には淡灰色の降灰がかかる。
 蓋 (1398) は頂部をロクロケズリ (R) し、細長い宝珠形のつまみをもつ。高杯の蓋
壺の蓋
 壺B (1406) のよう
 な小型壺類にかぶる蓋とみられ、口径7.4cm、器高3.2cm。暗灰色で青色粒子を含む精良土。壺
 B (1406) は小さな肩部から、薄い器壁の口縁部が長く直立し、肉厚な底部と体部外面はロク
 ロケズリ (R)。暗灰色で微砂混じりの精良土。口径6.4cm、器高4.9cm。高杯G (1399) は底部
 外面ロクロケズリの杯Gに、裾部が外反する低い脚がつき、小円孔が3方にあく。外面黒灰色
 で杯部内面は淡灰色。黒色粒子や白色土が目立つ精良土で、杯部内面中央に一方向のナデ調整。
 口径8.6cm、器高6.4cm。高杯H (1400~1404) は、杯H蓋を逆転した形の杯部にハの字に開く脚
高杯G
高杯H
 をつけたもの。丸く肥厚する口縁端部で、小さな平底の杯部外面はロクロケズリ (R)。脚部の
 形状には裾部が外屈して縁帯をつくるもの (1401・1404) や、中程に段をもってハの字に開き、
 端部外側に面をもつもの (1402) がある。1400の口径10.9cm。1403の口径は10.8cm。1401の脚
 部径8.5cm。ほぼ完形の1402は口径11.5cm、器高6.6cm。脚部径8.5cm。淡青灰色を呈し、胎土に
 含まれる青色粒子と白色土がロクロナデによって線状に尾をひく。高杯 (1405) は脚柱部中程
 に1条の凹線が巡る、長脚2段の脚部。4方に切り込み状の透孔をあけ、内面には絞り目が残
 る。大きく開く脚裾部は、端部を上方に肥厚させ外側に面をもつ。石英粒・細砂を多く含む粗
 い胎土で暗灰色を呈し、脚部径7.9cm、残存高6.8cm。

鉢 (1407) は内彎気味の口縁の端部を丸く収め、ロクロケズリ (R) した丸い底部に「キ」の
 ヘラ記号を刻む。底部内面は多方向のナデ調整で、底部外面とともに使用による磨耗がみられ
 る。暗青灰色で、石英粒を多く含む微砂質土。底部内面にも降灰がかかる無蓋の器種。口径
 19.2cm、器高8.1cm。焼け歪みが著しく、本来は平底気味で深手の皿形の可能性がある。鉢X (1408)
鉢 X
 は口径24.6cm。残存高12.7cm。体部中程に2条の凹線とハケ目工具の刺突文が巡り、小さく内
 彎する口縁の端部は鈍く内傾し、使用による磨耗痕がある。体部内外面はロクロナデで、体部
 下半外面に平行文叩き目がかすかに残るが、内面の当て具痕は明確でない。暗灰色で黒色粒子
 を多く含む胎土で、底部内面と外面に白色の降灰がある。

- 短頸壺** 短頸壺には口縁端部が内肥厚するもの(1409・1410)や、長めの口縁部が直立するもの(1411)などがある。1409は体部径17.8cm。肩部に2条の凹線が巡り、体部下半はロクロケズリ(R)。灰白色で砂混じりの胎土。1410は口径9.6cm。口縁部の肥厚が著しく外傾する面をつくる。暗灰色で微砂質土。1411は口径10.2cm。内外面ともロクロナデ調整で、全体に器壁が薄く、口縁端部は外側を強くなでて尖り気味。肩部に凹線はない。黒灰色を呈する外面と口縁部内面上半に白色の降灰がかかり、体部内面は灰色で無蓋の器種。胎土は白砂混じりの精良土。
- 壺 K** 壺Kには底部が平らで広いもの(1417)と底部が小さい算盤玉形のもの(1418・1419)があり、脚台部にはハの字に開くもの(1418)や二重口縁状の段をもつもの(1419・1420)がある。1417の脚台は、平らな底部の内寄りに外径5.5cmの円環状剥離痕として残る。肩部には2条の凹線が巡り、体部下半はロクロケズリ(R)。体部径14.1cm。内面は頸部にしほり目、底部に指頭痕が残るほかはロクロナデ。白色土・石英粒・青色微粒子を多く含む精良土で、外面は光沢のある黒色。断面に赤紫色を帯びる部分がある。1418は体部径16.4cm。稜のある肩部に2条の凹線が巡り、ハの字に開く脚台には小円孔の透孔が3方にあき、脚部内面に直径11.5cmの重ね焼き痕をもつ。色調・胎土は透孔が同じ高杯G(1399)と共通する。1419は体部径18.5cm、台径13.2cm。肩部に凹線と櫛状刺突文帯が巡り、脚台は段をもって内屈し、端部は外肥厚して面をもつ。底部外面をロクロケズりするほかは、ロクロナデで器壁が薄く、淡灰色で砂粒を多く含む胎土。1420は有段の脚部で、1条の凹線が巡る段より上に長方形の透孔が3方にあく。剥離部の形状から、平底の体部に付されたものとみられ、台径12.5cm。
- 罍** 罍(1414)は口径11.4cm、体部径9.6cm、器高14.3cm。上段の長い有段の口頸部で、口縁端部は尖り、内面にヘラ記号をもつ。扁平な体部の底面は横方向のナデ調整。側面にあけた円形孔の下に粘土の貼り足しがある。暗灰色で硬質な焼成と胎土が壺K(1417)、脚台(1420)などと共通する。細頸瓶(1415・1416)には細い口頸部と肩部に凹線が巡るもの(1415)と、凹線をもたず下膨れで平底の体部のもの(1416)がある。1415には肩部外面に格子文状の細いヘラ描きがあり、体部下半のカキ目状条痕のほかはロクロナデ調整で、頸部内面にしほり目が残る。黒色粒子を多く含む微砂質で緻密な胎土。淡灰色～暗灰色で肩部外面と口頸部内面に白色の降灰がかかる。1416は平らな底部中央に細かな布目を介した「板起し技法」の押え面が残り、その外側の体部下半をロクロケズリ(R)し、体部上半はロクロナデ。色調・胎土と器壁の薄さが
- 平瓶** 壺K(1419)のそれに共通する。体部径14.8cm、残存高16.4cm。平瓶(1412・1413)には体部形と製作技法を異にする大型品(1413)と小型品(1412)がある。1412は体部上半が高い算盤玉形で、底部外面はヘラケズリ。肩部に窯壁片、底部に杯G蓋あるいは杯H身の破片が熔着する。
- 漆壺** 口径6.5cm、体部径18.4cm。1413は肩部に鈍い稜をもち、体部下半はロクロケズリ。体部径19.6cm。なお、壺類には他に小型の漆容器3点(PL.391-53・54・58)があり、53には下層石敷
- 横瓶** SX823上出土片が接合し、西の谷の下層遺構と灰緑色粘砂層の親近性を示す。横瓶(1421・1422)には口縁端部を上方につまみ出すもの(1422)と端部外側に面をもつもの(1421)があり、胎土・色調が異なるが、ともに口径は約10.5cm。1421の体部外面は平行文叩き目のちカキ目調整で、内面は同心円文当て具痕。暗青灰色を呈し白色砂を含む精良土。1422は青色粒子を多く含む緻密な胎土と、暗灰色を呈する硬質な焼成が、口縁部形状ともに甕(1461)に類似する。
- 甕** 須恵器甕には多量の甕Aと少量の甕B・甕Cがある。灰緑色粘砂層とSD1173等出土甕には

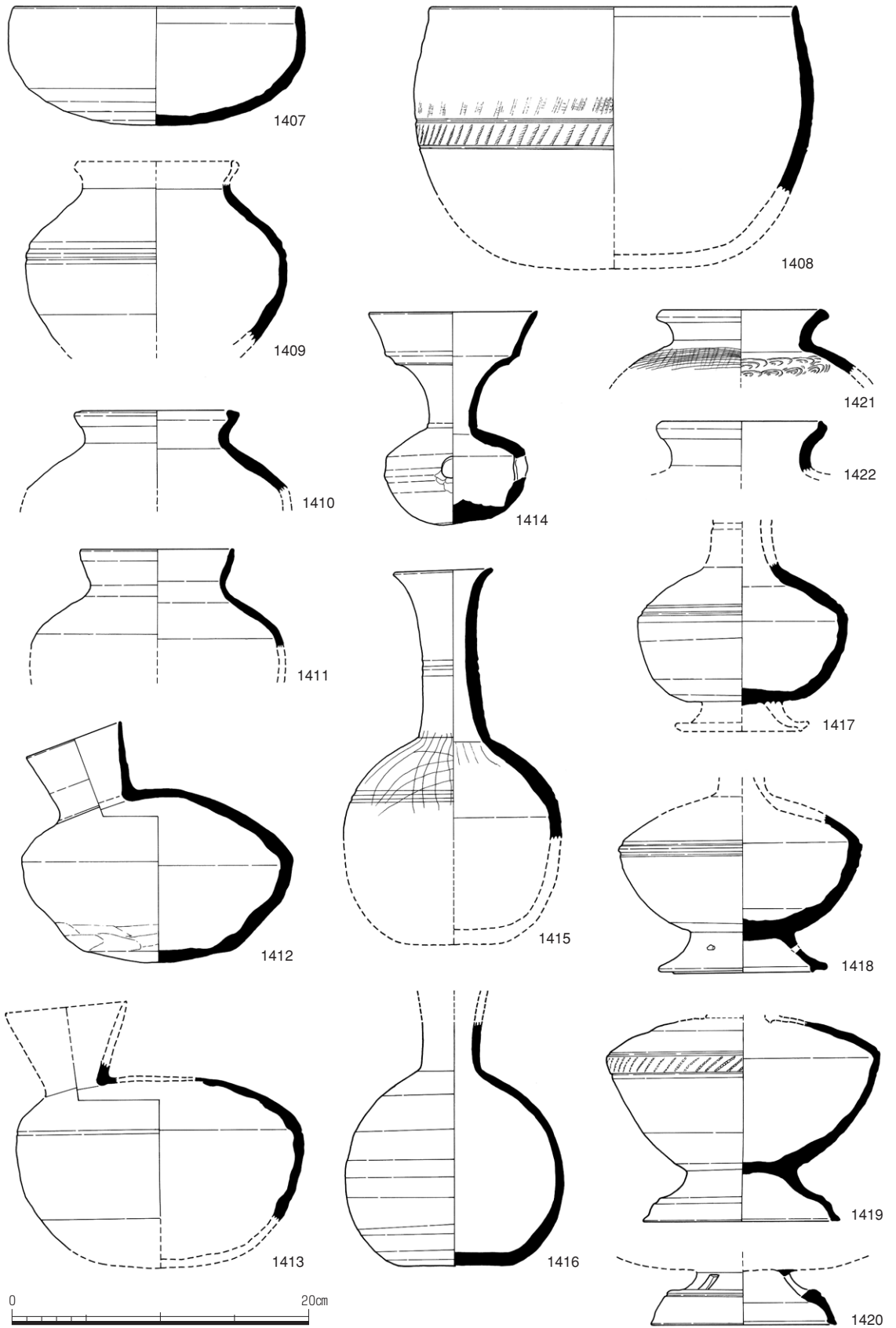


Fig. 70 灰綠色粘砂層出土土器 (5) 1:4

濃密な接合関係があり、本来一体のものとも考えられ、灰色シルト層には既述した水溜状土坑 SX761出土の965や、炭層4出土の531の体部片が含まれており、いずれも下層遺構起源の甕とみられることから一括して記述する (Fig. 71・72-1459~1463・1471~1473・531, PL. 252)。個別の出土層序は、接合作業の現状では、灰緑色粘砂層単独 (1460~1462)、灰緑色粘砂層+SD1173 (1459・1463~1466)、SD1173単独 (1468)、SD1173+他の遺構など (1467・1469~1471)、灰色シルト層・SX761他 (965・1472・1473・531) に分けられる。

甕Aには、口頸部の長さの異なる3種があり、大半を占める短く外反する小型のAの多くは、口縁部の先端を外側に玉縁状に肥厚させるもので、それには、肥厚が角ばるもの (1471・531) と丸いもの (1459・1463・1470) とがあり、他には、小さく外肥厚して外側に面をつくるもの (1462) と、上内方につまみ出して外側に面をつくるもの (1461) がある。後述のように、大半を占める前者は陶邑窯産、その他少量の后者は東海地方産の可能性はある。

甕A (1473) は口径31.6cm。上部で段をなして内彎気味に開く長い口頸部を、体部の成形後に積み上げる2段成形で、体部径72cm以上の大型品。口縁端部は内肥厚して上方に面をつくり、口頸部外面に3条の凹線と2条の櫛描波状文を配す。体部外面は細刻の平行文叩き目と木目の細かなカキ目で、内面は広刻で密な浅い同心円文当て具痕。茶褐色を呈し白色土の縞をもつ胎

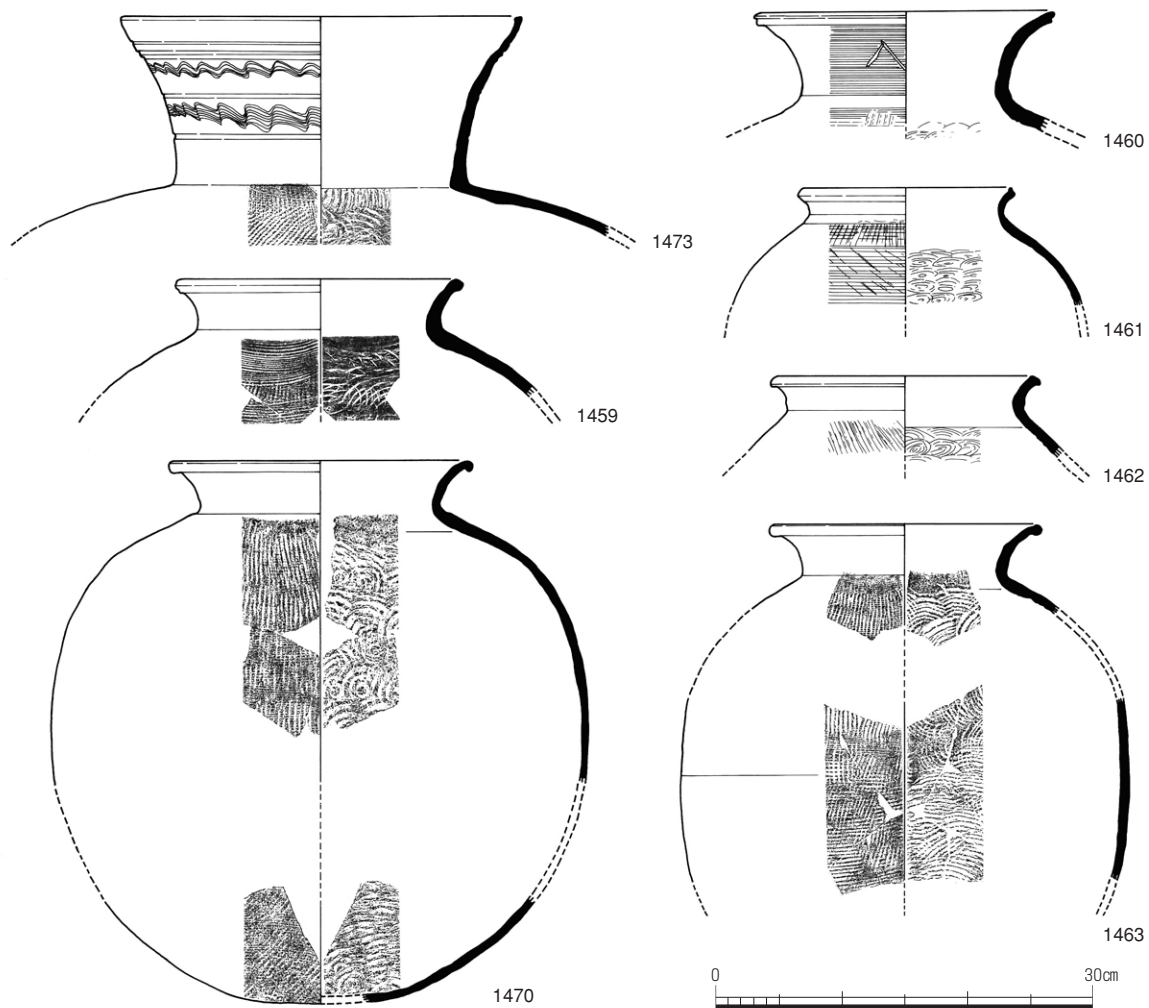


Fig. 71 灰緑色粘砂層ほか出土須恵器甕 (1) 1:6

土で、東海地方の製品の可能性がある。この甕は破片が、西の谷の水溜状土坑SX761と整地土とから出土したもので、厳密には灰緑色粘砂層に属さない。甕A(1460)は口径23.0cm、頸高6.4cm。やや長く上方で開く口頸部の端部が凹線状の面をなす。密なカキ目調整の口頸部外面に「T」のヘラ記号。体部外面は平行文叩き目のちカキ目調整、内面は同心円文当て具痕。暗灰色で砂粒の多い胎土。

甕A(1459)は口径22.6cm、推定体部径約40cm。短く外反する丸い玉縁状の口縁端部で、体部外面は細刻密の平行文叩き目と木目の細かなカキ目調整、内面は広刻密の浅い同心円文当て具痕を筋状にナデ消す。断面の赤い暗灰色を呈し砂混じりの胎土。甕(PL.252-1465)は内面の当て具痕の中央に5弁の星形の放射文を加えた「車輪文」当て具であるが、外面の叩き目と色調などその他の特徴が1459と酷似し、同一個体の可能性がある。甕A(1468)も5弁の星形の放射文を加えた車輪文当て具痕をもつ。ともに胎土・色調からは陶邑窯産とみられるが、いずれの車輪文もTG64号窯等の5弁星形の車輪文とは異なるようである。甕A(1463)は口径21.6cm。丸い玉縁状の口縁端部で内端を小さくつまみ出す。体部外面は細刻粗の平行文叩き目のち、頸部から体部上半に木目の細かなカキ目調整。内面は上半部に小芯で浅い細刻密な同心円文、下半部に細刻粗の周縁部弧状文の2種の当て具痕。茶灰褐色で砂粒を多く含む胎土。体部片が水溜SX1224の西岸寄りからも出土し、起源が水溜遺構の西岸の下層流路SD1173にあると想定される。甕A(1470)は口径23.6cm、体部径43.2cm、推定器高43.2cm。SD1173と南北大溝SD1130とに破片がある。丸い玉縁状の口縁端部で、体部外面に細刻粗の平行文叩き目のち木目の細かなカキ目調整を全面に施す。内面は細刻粗の同心円文と弧状文当て具痕。青灰色で胎土は石英粒を含む粗い砂質土。

5弁星形の
車輪文

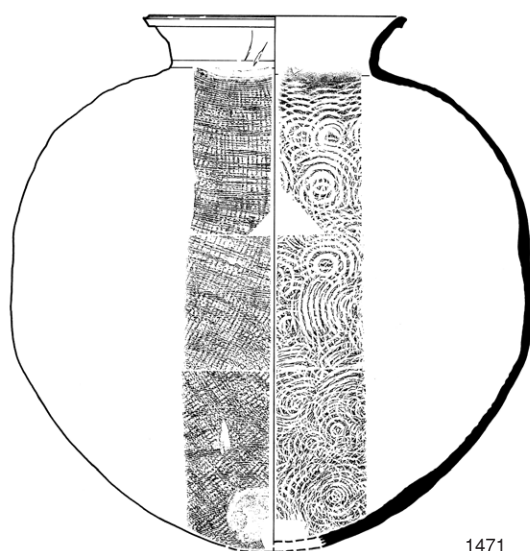
甕A(1471)は玉縁状の口縁端部が角張るもので、炭層4等・灰色シルト層出土の車輪文当て具痕をもつ甕A(531)と類似する。1471は口径20.1cm、体部径41.5cm、器高42.6cm。口縁部外面に「リ」のヘラ記号をもち、体部外面は木目が粗いために刻みが乱れた細刻の平行文叩き目で、細木のカキ目を粗く施す。内面は中央が大きい細刻で深い同心円文当て具痕。青灰色で断面が赤く、白色砂混じりの胎土は陶邑窯産の可能性がある。

玉縁状口縁

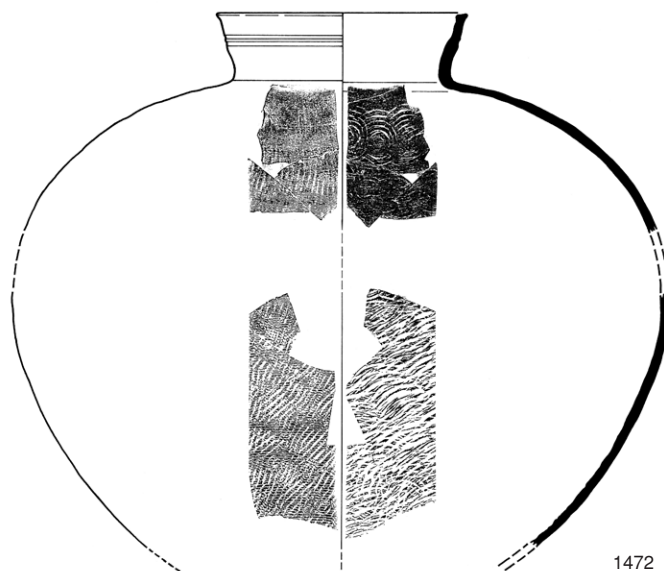
甕A(1461)は口縁端部を上内方につまみ出して外側に面をつくるもので、青色粒子を多く含む緻密な胎土と、暗灰色を呈する硬質な焼成が、横瓶(1422)と類似する。体部外面は細刻粗の平行文叩き目を右流れに施したのち、粗い木目のカキ目調整で消し去り、内面は細刻で浅い同心円文当て具痕が残る。甕A(Fig.36-1469)は1461の口縁端部に類似した、端部が内肥厚する口縁部で、体部外面は左斜交で細刻の平行文叩き目のち細木目のカキ目調整。内面は細刻で「の」字形の渦巻き文当て具痕。淡青灰色で白色土を含む砂質土。この左斜交の叩き目はSD1173にも破片がある1466(PL.252)と類似しており、左斜交の平行文叩き目と「の」字形渦巻き文は美濃須衛18号窯に類例があり、内肥厚する口縁端部、胎土・色調は美濃須衛窯の製品の可能性を示しているが、奈良時代に降るとされる18号窯の製品とはみられない。また、体部外面の叩き目と胎土とが類似する炭層3出土の甕A(PL.248-534)もまた美濃窯産の可能性が考えられる。口縁端部が外肥厚して外側に面をつくる甕A(1462)は口径20.2cm。体部外面は細刻粗の平行文叩き目を右流れに施し、内面は細刻粗の同心円文当て具痕。白色砂を多く含む微砂質で硬質な胎土で東海地方産の可能性がある。

上方へつまみ
出す口縁の字形
渦巻き文

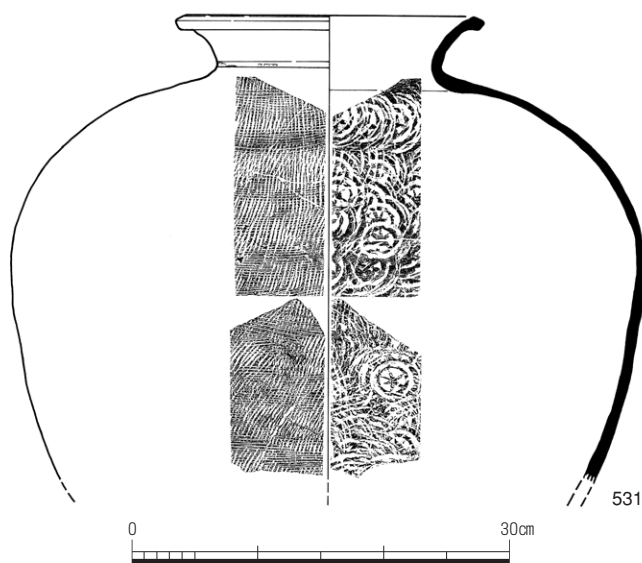
美濃須衛窯



1471



1472



531

Fig. 72 灰緑色粘砂層ほか出土須恵器甕(2) 1:6

甕A (1464-PL.252) は長めの口頸部。外面は細刻で粗い平行文叩き目でカキ目はなく、内面の当て具痕は、偏芯した細刻で粗い同心円文で溝の間に年輪が浮き出している。甕A (1467) は口縁部を欠く个体。外面は細刻で粗い平行文叩き目で、叩き板の木目の細かさが特徴的。内面は上半を細刻で粗く深い刻みの同心円文、下半は当て具外縁の弧状文。SD1173から炭層3およびSD1130へ流出する。

甕B (1472) は灰色シルト層出土でSD1110などへ破片が流出する。口径20.0cm、頸径17.8cm、頸高5.2cm、推定体部径約53cm。直立する口頸部に凹線が2条巡り、端部は外肥厚して上方に面をもつ。体部外面は広刻で密な平行文叩き目ののち、全面にカキ目を粗く施し、内面は広刻で密な同心円文当て具痕と細刻で粗い弧状文が体部中位で交替する。暗灰色で断面が紫色を呈し、黒色粒子を含む微砂質土。陶邑窯産であろう。

甕 B

ii 工房下層包含層 (灰色シルト層) 出土土器 (Fig. 73-1423~1435)

灰色シルト層出土土器

灰緑色粘砂層の上部を覆う灰色シルト層出土土器には、土師器・須恵器があり、灰緑色粘砂層と同じ7世紀中頃のものに、ごく少量の飛鳥Ⅲ~Ⅳの土器が混じる。須恵器甕に灰緑色粘砂層や炭層3などと接合するものがある。

土師器 器種には杯A、杯C、蓋、壺B、鉢A、甕Aなどがある。

杯AI (1423) は口径17.2cm、復元器高4.9cm。遺存する範囲内ではa1手法。口縁端部が小さく内肥厚し、口縁内面の暗文は上段の幅が広い細かな2段放射暗文で、右傾と左傾とが交差するように見え、杯Bの可能性もある。飛鳥Ⅲ~Ⅳに属する。杯CIにはa1手法 (1424) と底部を一方方向に削るb1手法 (1425) があるが、ともに灰緑色粘砂層と同内容で、口径15.3cm、器高5.5cm。

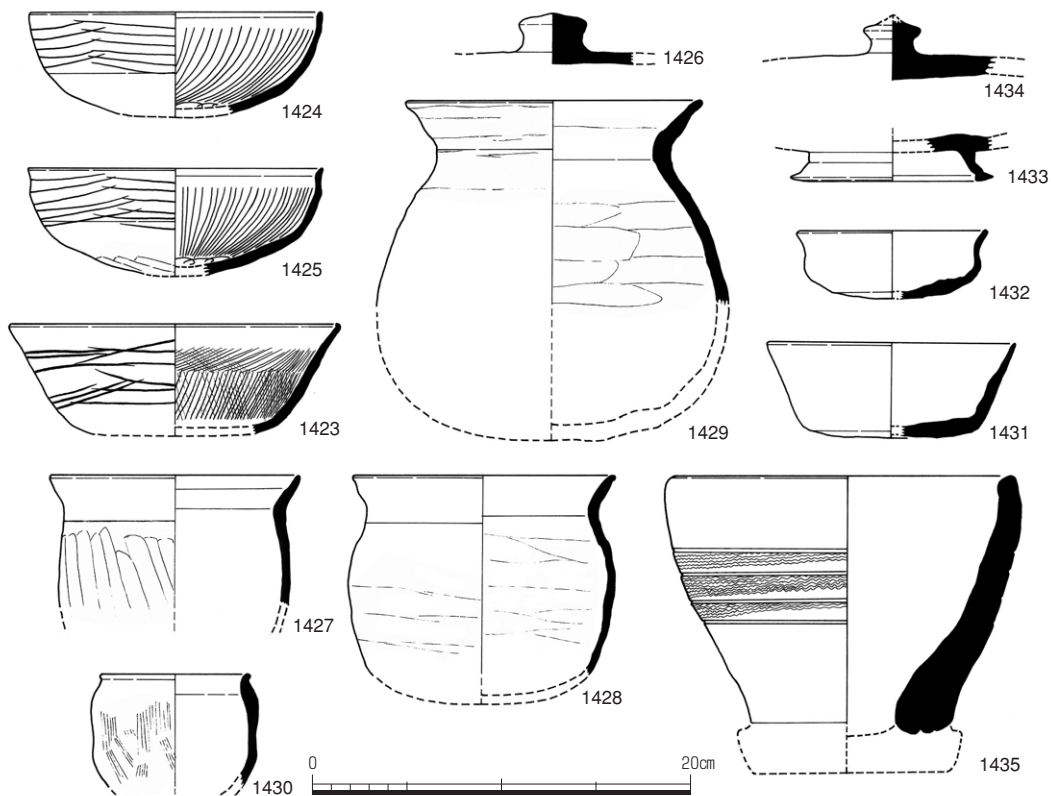


Fig. 73 灰色シルト層出土土器 1:4

前者は暗赤褐色で微砂質土、口縁部との境が屈曲する後者は明褐色で石英粒が混じる。蓋(1426)は背の高いつまみ部の破片。灰緑色粘砂層の蓋(1327)と同じ赤褐色の微砂質精良土。壺B(1430)は内彎気味の口縁の端部が小さく外反する。体部外面を縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整。赤褐色の微砂質土だが、肩部を中心に二次加熱による赤変がみられ、形状からも埴塙の可能性がある。口径7.6cm、残存高5.2cm。甕Aは、体部外面ハケ目調整のほか、縦方向のヘラケズリ(1427)やナデ調整(1428・1429)など多様であるが、灰緑色粘砂層と同時期とみられる。1427は暗赤褐色で微細な金雲母と赤色粒子を含む胎土。口縁部の様相が異なるが、胎土は同じく外面をヘラケズリする灰緑色粘砂層の1343、水溜遺構の88・99と類似する。1428は口径13.6cm、復元器高12.0cm。体部外面は粘土紐の継ぎ目が残るナデ調整。茶褐色で胎土は1427に似ている。1429は下膨れの体部でくの字に開く口縁の端部が丸く、口径15.5cm。体部内面は横方向のナデ調整。茶褐色で1427に類似する胎土は金雲母が目立つ。

須恵器 器種には杯A、杯G、杯H、台付杯、椀A、蓋、高杯H、播鉢、横瓶、壺、甕(Fig. 72-1472)などがある。

椀A(1431)は器壁の厚い底部の外面をロクロケズリ(R)、口縁端部は薄く尖り、口縁部外面の降灰から有蓋の器種とみられる。口径13.0cm、器高5.0cm。飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。台付杯(1433)は底部の内寄りに、ハの字に開く高めの台がつく。端部は内外に肥厚し、外面に降灰がみられる。台径約11.2cm。青灰色で白色微砂を含む精良土。杯G(1432)は口縁上部で括れて外反する特異な器形で、底部外面はヘラ切り(L)不調整。口径9.8cm、器高3.6cm。蓋(1434)は大径で、頂部の器壁が厚く、盤・皿類にかぶるとみられ、頸部の長い宝珠形つまみをもつ。外面は青灰色で、内面は灰色。播鉢(1435)は剥離した底台部以外は完形で、一部内彎する口縁の端部が内傾面をなすが、片口部はない。口縁の中程に4条の凹線と3条の細かな櫛描波状文からなる文様帯をもち、白色砂粒を多く含む胎土で器壁が著しく厚く、内面下部に摩耗痕がある。口径17.5cm、復元器高約16cm。

播 鉢

iii 東の谷7世紀中頃の流路SD1173出土土器(Fig. 74-1436~1458、PL. 245)

7世紀中頃の流路SD1173

SD1173は東の谷の東西両斜面部で確認した7世紀中頃の流路堆積である。谷西側の一部を遺構の希薄な石敷井戸SE1160の南と北で掘り下げて検出し、瓦、木製品、漆器、フイゴ羽口などととも7世紀中頃の土師器・須恵器が出土した。土器は少量ながら、灰緑色粘砂層出土土器とはほぼ同内容で、須恵器甕類に顕著な接合関係が認められることは前述の通りである。

土師器 器種には杯C、杯G、杯H、皿A、鉢A、鉢X、高杯C、蓋、甕などがある。

杯Cには、杯CI、杯CII、杯CIIIがあり、おもに灰緑色粘砂層には稀な胎土・色調・調整手法のものを示した。杯CI(1436・1437)は口径15.2~15.3cm、器高4.7cm、径高指数31。1436はb1手法であるが、内面の暗文を欠き、口縁端部外面のヨコナデ調整が強い。茶褐色で砂混じりの胎土も一般的な杯Cと異なる。1437もb1手法で口縁上部で強く屈曲し、内面の細かな正放射暗文が口縁端部にまで至る点が異なり、淡褐色で砂混じりの胎土。b1手法の杯CII(1438)も灰緑色粘砂層には稀で、口縁端部が薄く外反する。口径13.5cm、器高3.6cm。橙褐色で砂混じりの胎土。杯CIII(1439~1441)には、口縁端部が小さく内肥厚するもの(1439)や、小さく外反するもの(1440)のほかに、口縁端部が内肥厚して鈍い内傾面をもつもの(1441)がある。前2者は

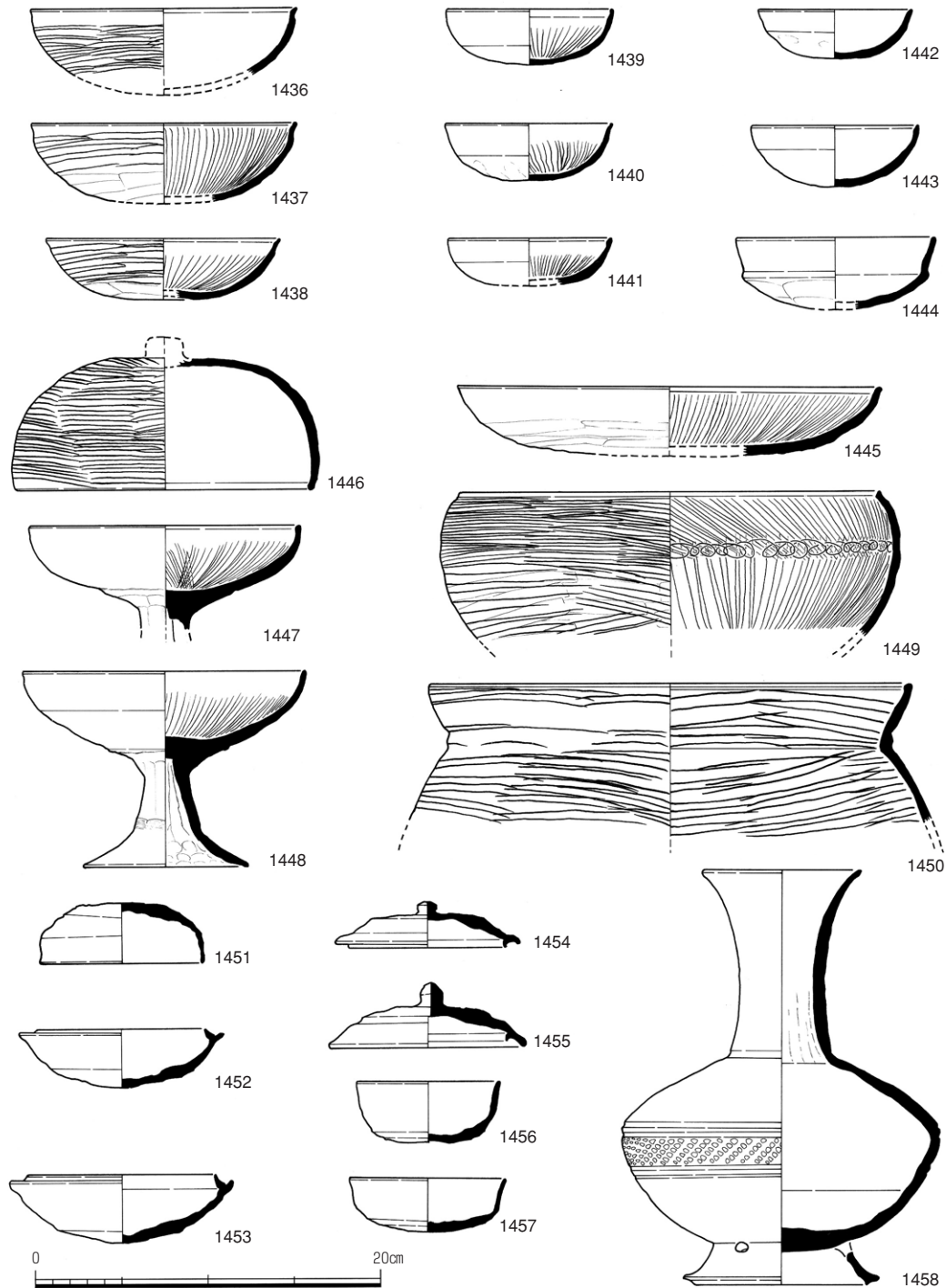


Fig. 74 東の谷7世紀中頃の流路SD1173出土土器 1:4

口径9.6cm、器高3.3cm、径高指数34で、灰緑色粘砂層に通有のものであるが、1441は口径9.4cm、器高2.7cm、径高指数29と浅く、器高が低めの杯CII (1438) と同様に茶褐色で砂混じりの胎土で、口縁部内外面に煤が付着する。杯G (1442・1443) はいずれも口縁端部に内傾面をもつb類で、赤褐色で微細な赤色粒子を含む胎土。1442は口径8.8cm、器高2.9cm、径高指数33で、杯Gでは最も小さい。1443は口径9.6cm、器高3.6cm。径高指数は38。杯HII (1444) は口径11.5cm、器高4.4cm。内外面ともに口縁部下端の段が明瞭で、段の下外面に底部のヘラケズリが及ばない不調整の面が残る点で古相である。

皿AI (1445) はb0手法。弧を描いて開くc類(皿C)で、口縁端部は小さく外肥厚する。内面には細かな正放射文を長く施し、赤褐色で微砂質の精良土。口径24.2cm、器高4.1cm。蓋X (1446) はb3手法の杯・鉢を伏せた形態で、頂部中央につまみ周囲のナデ調整痕がある。口縁端部が小さく内屈し、内面はナデ調整で暗文はない。口径17.0cm、残存高9.7cm。壺Aにかぶるとみられる。高杯C (1447・1448) には杯部が浅く口縁端部に小さな内傾面をもつもの(1447)と杯部が深く口縁端部が尖り気味のもの(1448)があるが、いずれも杯部底に段をもち、外面のヘラミガキはない。1447は淡褐色で砂混じりの胎土で、口径15.5cm。1448は赤褐色で微白砂を含む精良土で、口径16.2cm、器高11.3cm。脚部外面は脚柱部を縦方向に、裾部を横方向にナデ調整。内面は脚柱部にしぼり目が残し、裾部は指頭痕の凹凸が著しい。鉢A (1449) は口径24.2cm、残存高8.3cm。内彎する口縁の端部が外肥厚し、内傾面をなす。外面はb1手法で、ヘラミガキは上半部を緻密に、下半部は粗く施す。内面の暗文は左傾する2段の放射文の間に下向きのループをなすラセン文1条。赤褐色で微白砂を含む精良土。広口で頸部が「く」字形をなす鉢X (1450) は口径27.8cm。体部外面をヘラケズリ、その他をナデ調整したのちに、全面に線状のヘラミガキを施す。頸部外面に削り残しのために生じた突帯状の段がある。橙褐色で微砂質の精良土。なお、ほかにSD1130出土片と同様の、口縁部と把手に小孔を穿ち全面に線状ヘラミガキを施す鍋形の鉢Xの破片が数点あるが、本例とは口縁部の形状と傾きが異なる。

須恵器 器種には杯G、杯H、壺K、甕Aなどがある。

杯H蓋 (1451) は口径9.3cm、器高3.6cmのほぼ完形品。口縁部が直立気味で杯Gとの区別は難しいが、ヘラ切り(R)不調整の頂部が滑らかで、口縁端部がわずかに内肥厚することから蓋と考えた。短頸壺蓋の可能性もある。外表が暗青灰色で断面の一部が茶色を呈し、黒色微粒子の多い精良土。外面に薄い降灰がみられ、頂部内面に褐色の汚れがつく。杯H (1452・1453) はいずれも底部外面ヘラ切り(R)不調整。1452は、底部内面に一方向のナデ調整、外面にヘラ記号をもつ。淡灰色で微細な黒色粒子を含む微砂質土。口径9.6cm、受け部径11.9cm、器高3.4cm。1453は灰緑色粘砂層を含めた中で最も大きく、口径10.8cm、受け部径13.0cm、蓋のあたる箇所径12.1cm、器高4.0cm。内彎気味の短い受け部で、強く外反する口縁の基部が凹線状をなす。青灰色で底部外面に広く緑色の降灰がかかる。杯Gには、底部外面ヘラ切り不調整(1456)とロクロケズリ(1457)がある。1456は直立気味の口縁部で深く、口径8.2cm、器高3.6cm。杯Gが最も小型化する飛鳥Ⅱ末の水落遺跡出土例に類似し、暗青灰色の微砂質土。1457は丸みのある肉厚な底部と薄く引き出した口縁部が特徴的で、底部内面に一方向のナデ調整をもち、1452と同じ淡灰茶色で黒色粒子を多く含む胎土。口径9.0cm、器高3.2cmで、ロクロケズリの杯Gでは最も小さい。杯G蓋には、ボタン形で小さいつまみの1454と乳頭状で高いつまみの1455とがある。1454はロクロケズリ(R)した頂部が平坦な低い笠形で、内彎気味で丸い口縁部との境が段状をなし、細いかえりが口縁部よりも下方に出る。青灰色で頂部全体に厚い降灰がみられ、口径10.8cm、かえり径9.0cm、器高2.7cm。口径9.7cmの杯Gにかぶる。1455はロクロケズリ(R)の境の段が目立つが丸みのある頂部で、口縁部は外反気味で長く、鋭いかえりが口縁内寄りにつく。暗青灰色を呈し外面全面に降灰があり、口径11.5cm、かえり径9.0cm、器高3.8cm。口径10cmの杯Gにかぶる。前者の形態は灰緑色粘砂の杯G蓋(1380)、杯H(1369など)に通じ、後者は同じく杯G蓋(1378・1375)、杯H(1364など)に通じる特徴である。

最も小型化した杯G

壺K (1458) は下半部に膨らみがある算盤玉形の体部と、上部でのびやかに開く長い口頸部、ハの字に開く脚部とからなる。口縁部は薄く引き出し、肉厚な頸部内面にはしぼり目が残る。体部外面下半をロクロケズリ (R) したのち、2条一組の凹線を鈍い稜をもつ肩部と体側部中程に施し、その間に6本の櫛状工具による右傾きの刺突文を配す。底部内面は指頭痕およびナデ調整で平坦に整え、外面はロクロナデ調整。底部中央が肉厚である。脚部は下端が大きく外肥厚し、鋭くつまみ出した脚部内端が接地し、脚部の付け根の3方に直径約3cmの小孔を穿つ。これらの点は灰緑色粘砂層の1418と酷似する。青灰色で白色砂・黒色粒子を多く含む胎土で、外面と口縁部内面上半、底部内面の一部に白色の降灰がかかる。口径9.0cm、器高24.1cmで、体部径は18.4cm、脚部外径は11.2cm。

G 飛鳥池東方遺跡出土土器

飛鳥池東方遺跡の出土土器は、縄文時代から中世に至るものがある。土器類は各トレンチ全般から出土したが、西端の流路SD1700および谷筋中央部の掘立柱建物群周辺やそれらを覆う瓦礫層などに比較的多い。それらは、漆工・金工等の工房関連の土器・土製品を含む7世紀代の土器が主体を占め、少量含まれる蹄脚硯・圈足硯・土馬・土製円板・瓦製円板などの特殊遺物も、飛鳥池遺跡出土のものと酷似していて、飛鳥池工房との関係の深さをうかがわせるが、調査が狭長なトレンチによる確認調査であるために、それぞれまとまりに欠ける。ここでは、遺跡の存続期間と性格を反映するとともに、飛鳥池遺跡出土土器と接合するものが含まれる流路SD1700出土土器と、その東岸の堀SA1755柱穴出土土器、およびSD1700出土の縄文土器について概要を記し、その他は割愛する。

飛鳥池東方
遺跡

i 流路SD1700等出土土器 (Fig. 75・76-1474~1561、PL. 246)

流路SD1700は、飛鳥池遺跡東方の丘陵東裾、飛鳥池東方遺跡の西端において、畦畔や白砂の詰まる牛足跡を伴う中世の水田遺構の下層で検出した。SD1700の堆積層全体では7世紀から平安時代にわたる土器が含まれるが、第86次8区と第92次I区では、その最深部が順次西方へ移動する4つの流路に大別され、上部の流路により新しい時期の土器が含まれる傾向が確認されることから、以下では、初期流路、前期流路、中期流路、後期流路と呼称した大別にして概要を記述し、流路の上流部にあたる第92次G区出土土器、および流路に並行する掘立柱堀SA1755柱穴出土土器を補足する。

流路
SD1700
の大別

初期流路出土土器 (1474~1483) 初期流路は直線的な斜面をなす流路東壁および平坦な底面に沿って堆積する黒灰砂・灰色砂・淡褐色砂などからなる流路で、上部と西部とに前期流路が重なる。7世紀前半~中頃および飛鳥Ⅲに属する土師器・須恵器が少量出土し、器種には、土師器杯C、杯G、杯H、杯蓋、甕A、須恵器杯H、杯G、甕などがある。

初期流路

土師器杯CⅢ (1474・1475) はa0手法で、薄い口縁端部が内傾面をなし、暗文は細い1段放射文で、茶褐色~赤茶色を呈する微砂質の精良土。1474は口径10.2cm、器高3.3cm、径高指数32。1475は口径9.7cm、器高3.4cm、径高指数35。ともに飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層など出土例(1265・1260)と類似する。蓋(1476)は円筒形のつまみを付した扁平な頂部周縁が丸く内彎し、

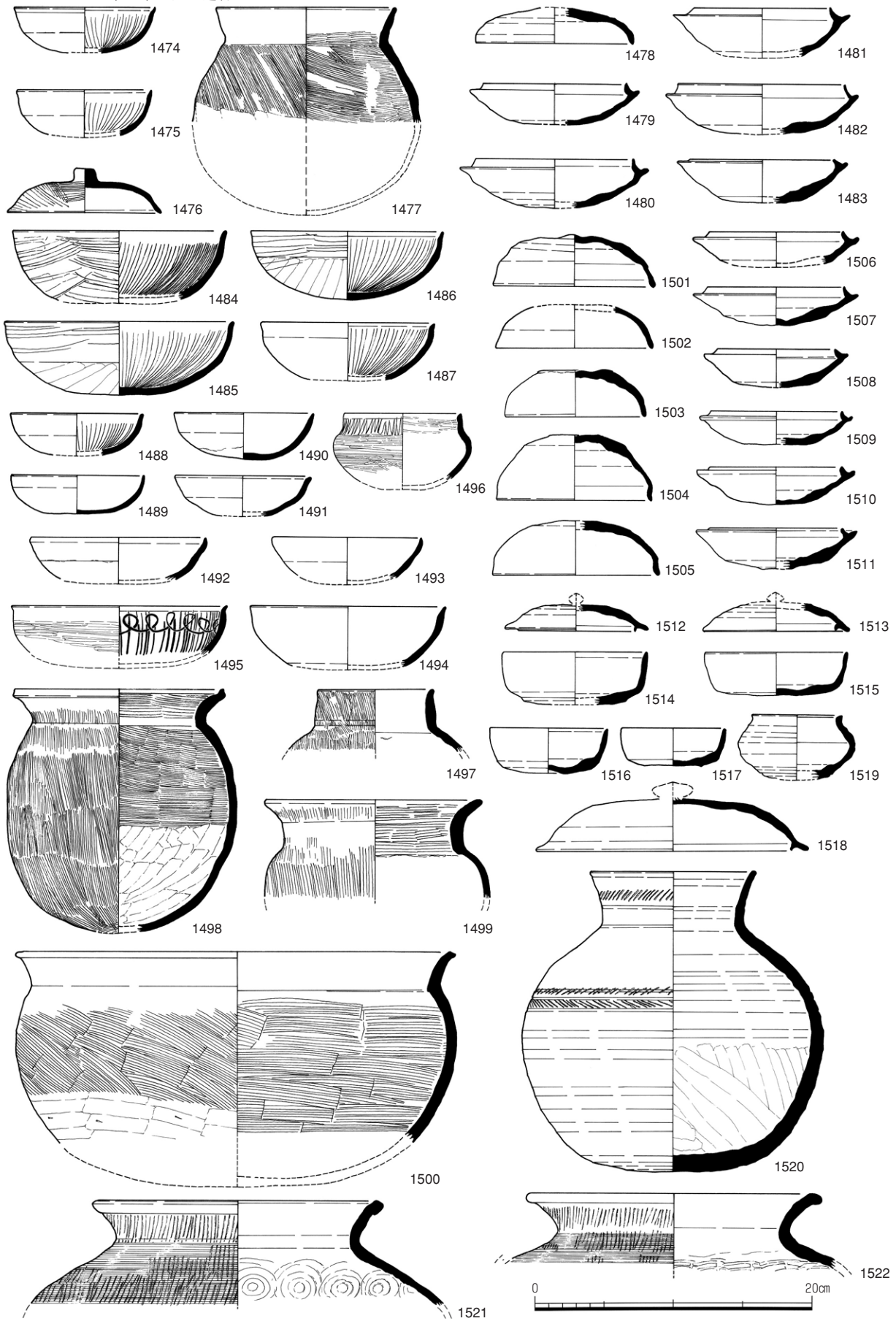


Fig. 75 流路SD1700出土土器(1) 1:4

小さく外反する口縁の端部に内傾面をつくる。頂部外面に4分割のヘラミガキを施し、内面中央を一方向にナデ調整する。茶灰色で精良な胎土も、飛鳥Ⅲの大官大寺下層土坑SK121出土例³⁶⁾に類似し、そこでは長めの脚台がつく台付杯が伴出する。口径11.1cm、器高3.2cm。甕A(1477)は撫で肩の体部に、端部を丸く収めた長めの口縁部がつく。口縁部外面は体部と一連の斜めハケ目ののちにヨコナデ調整。体部外面下半部には縦方向のヘラケズリ、内面は横～斜め方向のハケ目調整。口頸部は、稜をもつ頸部に断続する横ハケ目が残るヨコナデ調整。「近江型」甕に通じる調整法であるが、濃褐色で細砂を多く含む胎土が異なる。口径13.2cm。

須恵器杯H蓋(1478)は頂部外面ヘラ切り(R)ののちナデ調整。口縁端部外側が鈍い面をなし、内側は内傾面をなして先端が尖る。口径11.3cm、器高2.7cm。杯H(1479~1483)は口径14.0~12.2cm、器高3.0~3.6cm。比較的大径で口縁部が薄く長い1482が、底部外面をロクロケズリするほかは、底部外面はヘラ切り不調整で、内面中央に一方向のナデ調整を施し、それらの口縁部には、やや長く内傾(1481)、直立(1480)、短く内傾(1483)などの差異がある。最も小型の1483は灰緑色粘砂層などに一般的な大きさで、平坦な底部と、基部が厚く先端が鋭く尖る小さい口縁部が特徴的。

前期流路出土土器(1484~1522) 前期流路は初期流路の西半を覆う暗褐色粘質土・木屑層・暗灰色砂礫などからなる堆積で、最深部は初期流路の底部平坦面とほぼ揃う。出土土器は、初期流路と同様の土師器・須恵器が主体を占めるが、やや新しい傾向を示すとともに、飛鳥Ⅳ~Ⅴに属する土器が少量含まれ、紡錘車(252)、円板(296)などがある。

前期流路

土師器の器種には、杯C、杯G、杯H、杯、壺、甕A、鍋Aなどがある。杯Cには、b1手法の杯CI(1484・1485)と杯CII(1486)、a1手法の杯CII(1487)と杯CIII(1488)があり、いずれも内面に1段放射暗文を施す。杯CI(1484)は口径15.4cm、復元器高5.3cm、径高指数34。ヘラミガキ・暗文ともに細密で、底部のヘラケズリは5分割の可能性はある。1485は粗いヘラミガキで、3分割のヘラケズリ。口径16.5cm、器高5.3cm。径高指数32。灰緑色粘砂層に一般的で、色調・胎土も類似する。杯(1495)は、内彎気味で肉厚な口縁部の端部が、薄く小さく外反する杯CIの異形品で、橙褐色の色調と外面の密なヘラミガキが杯Dと類似し、内面の暗文は1段の正放射文にループ状のラセン文が加わる。口径15.6cm、復元器高4.4cm。杯CII(1486)は丸みの強い底部を3分割ヘラケズリし、口縁端部は小さな内傾面をつくる。口径13.8cm、器高4.9cm。径高指数36と深く、口縁端部近くまで及ぶ細密な1段放射暗文が古相を示す。1487は口縁上部で内屈し、端部は鈍い内傾面。口径12.5cm、器高4.2cm。径高指数34。灰緑色粘砂層に一般的。杯CIII(1488)は丸底で、直立気味の口縁端部を丸く収める。橙褐色で微白砂を多く含む胎土で、口径9.5cm、器高3.1cm。径高指数33。

杯Gには法量で、杯GII(1492・1494)、杯GIII(1489~1491・1493)があり、口縁形状などによる細分では、杯Gb類(1489・1491)、杯Gc類(1490・1492・1493)、杯Gd類(1494)など多様なものがある。杯Gb類の1489は口径9.7cm、器高2.8cm。薄い器壁とわずかに外肥厚する端部が特徴的。ほぼ同法量の1491は口縁上部が内屈し、端部は小さく外反して内傾面をなす。杯Gc(1490)は口径10.3cm、器高3.4cm。口縁端部は上方へ摘み出して尖り、外面に黒斑をもつ。杯Gc(1492・1493)は1490よりも一回り大きく、1492の口径12.6cm、残存高3.0cm。1493は口径10.9cm、残存高2.9cm。ともに口縁端部が小さく内屈し、外方に面をもつが、茶褐色を呈する微砂質

の胎土で、一般的な杯Gcが黄灰色系であるのと異なり、外面上半を丁寧なヨコナデ、下半を不定方向に粗くナデ調整し、一部に粘土紐の継ぎ目が残る。小さな平底部を軽く多方向にヘラケズリする杯Gd (1494) は、厚手で内屈する口縁の端部に内傾面をつくり、暗茶褐色で砂粒と雲母片を多く含む胎土。口径14.4cm、器高4.4cm。

壺 (1496・1497) は大きさと調整法に違いがあるが、ともに短い肩部に内傾気味の口縁部がつき、口縁端部が内傾面をなす。1496は、短い口縁部の外面を縦方向のジグザグに、内面を横方向にヘラミガキし、体部外面は横方向の密なヘラミガキ、内面はナデ調整。口径8.4cm、体部径10.0cm。1497は長めの口縁部で内傾度が大きく、端部はわずかに外反する。口縁～体部の外面を縦方向のハケ目調整、口縁部内面はヨコナデ調整で上方への幅広いナデ上げ痕が残る。肩部内面には粘土紐の継ぎ目残り、黄白色を呈し赤色粒子を多く含む精良土。甕A (1498) はやや縦長の球形体部で、外反する口縁部の端部は三角形に肥厚して外方に匙面をもち、体部外面を縦ハケ目、内面上半を横ハケ目、下半を縦方向にヘラケズリする「伊勢型」甕の特徴をもつ。褐色を呈し細砂粒を多く含む胎土で、口径15.0cm、器高17.5cm。外面全面に煤が付着し、内面下半に炭化物の汚れが付着する。甕A (1499) は直立する肉厚な口頸部で、口縁上部が大きく外反し、端部は丸く収め、頸部内面には接合痕の段が残る。口縁部内面を横方向のハケ目調整、体部内面を当て具押圧痕の残るナデ調整の「大和A型」で胎土・色調も共通する。口径15.8cm、残存高7.0cm。鍋 (1500) は上方で滑らかに内彎する深い体部と、頸部内面に稜をなして外反する短い口縁部からなり、口縁端部は外肥厚して上方に鈍い面をつくる。口径32.0cmの大型で、残存高13.7cm。体部外面は上半に条の粗いハケ目を斜めに施し、下半は横方向のヘラケズリ。内面は外面と同じ条の粗いハケ目を横方向に密に施す。初期流路の甕A (1477) と同様に、「近江型」に通じる調整法であるが、外面が茶褐色、内面は黄褐色を呈し、微砂と赤色粒子を多く含む胎土が、通有の「近江型」とは異なる。

須恵器の器種には、杯H、杯G、杯蓋、壺、甕Aなどがある。杯H蓋 (1501～1505) は、口径12.1～10.4cm、器高4.7～3.2cm。口縁部下方で内屈し端部が小さく外反するもの (1503～1505) や、より直線的に開くもの (1501・1502)、小さな頂部で器高が高いもの (1504) や緩やかに弧を描くもの (1505) など形態は多様であるが、最小口径の1503が、ヘラ切り不調整で平坦な頂部であるほかは、丸みのある頂部外面をヘラ切り (R) ののちナデ調整し、内面の中央を一方方向のナデ調整。杯H (1506～1511) は、受け部径12.1～10.3cm、器高2.8～2.5cm。底部外面はヘラ切り不調整で、内面中央に一方方向のナデ調整を施す。受け部が長く外端を丸く収めるもの (1506・1507) は口縁の立ち上がりが比較的大きく、立ち上がりが小さく内傾するもの (1508～1511) には、受け部の外方に面をつくるもの (1509) がある。杯G蓋 (1512・1513) はともにつまみは欠くが、頂部外面をロクロケズリ (R)、内面中央部は一方方向のナデ調整。頂部の広い1512は細いかえりが口縁部よりも下方へ突出し、口径14.4cm、残存高1.9cm。丸い頂部の1513は口径10.6cm、残存高2.0cm。ともに淡青灰色の精良土。杯G (1514～1517) は、底部外面をヘラ切り (R) 不調整、内面中央部に一方方向のナデ調整を施すほかはロクロナデ調整。灰緑色粘砂層出土例に似た大きさの1514・1515 (口径10.4cm、器高3.1～3.8cm) が主体を占め、口径7.4～8.5cm、器高2.7～3.2cmの小型品 (1516・1517) が少量含まれる。後者は、杯Gが最も小型化する段階 (飛鳥Ⅱ末) の飛鳥水落遺跡出土例と類似し、1517の内面には朱が付着する。杯蓋 (1518) は

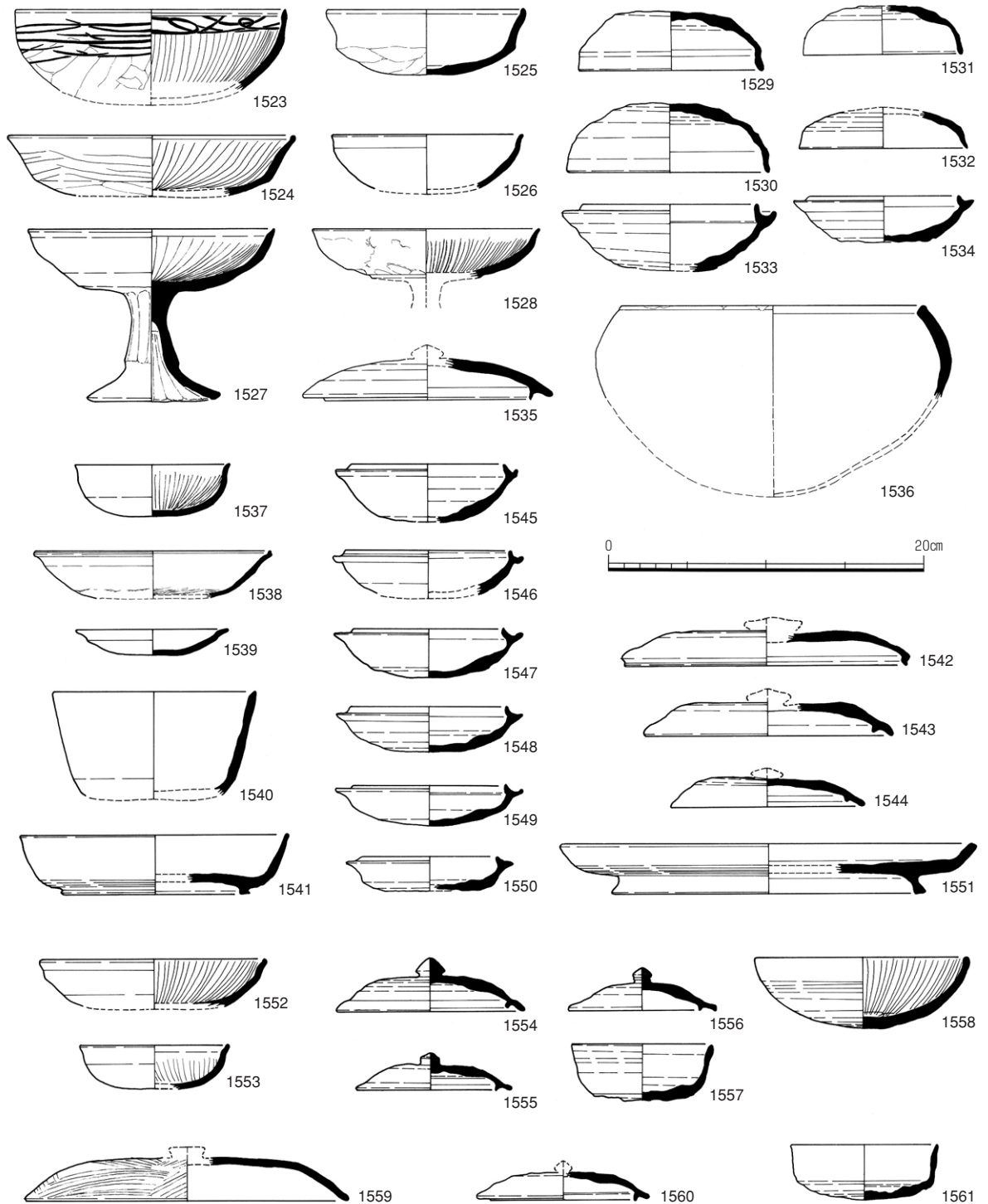


Fig. 76 流路SD1700ほか出土土器(2) 1:4

口径19.8cm、かえり径17.3cm。頂部周縁が丸く内彎し、外反する端部内側に鋭いかえりがつく。頂部中央には口径に比して小さめのつまみの剥離痕がある。頂部外面口クロケズリ(R)、内面は多方向のナデ調整。口径18cm余の台付杯にかぶるとみられる。

壺(1519)は、杯Hの底と類似した器壁の厚い底部外面をヘラ切り不調整。体部中程で内屈し、口頸部は短く外反して端部上方に内傾面をつくる。淡灰色の砂粒を含む胎土で、内外面に褐色の汚れが付着する。口径6.6cm、器高4.7cm。壺(1520)はやや外傾する長めの口縁部と、撫

で肩で丸みのある平底の深い体部とからなる。口径11.8cm、器高21.7cm。体部内面の下半を斜方向にナデ調整するほかはロクロナデ調整で薄く引き出し、「板起し技法」による器壁が厚い底部外面は板状工具によるロクロナデ調整。丸く収めた口縁端部の直下が凹線状に凹み、口頸部に1条の凹線文と櫛状工具の刺突文、肩部に3条の凹線文と綾杉状に施した2条の刺突文からなる文様帯が巡るが、口頸部文様帯の上方の凹線を欠き、肩部文様帯の上段の刺突文は凹線文と重なる。微砂を多く含む胎土で、淡灰色を呈し、外面には広く褐色の自然釉がかかり、内面には褐色の汚れがつく。甕A（1521・1522）は丸く外反する短い口縁で、端部には丸い玉縁形に肥厚するもの（1521）や外肥厚して上方に面をもつもの（1522）などがある。頸部～体部外面を細刻の平行文叩き目のちに、頸部にはロクロナデ、肩部には密なカキ目調整を施し、体部内面には広く浅い同心円文当て具痕が残る。1521は口径21.2cm、1522は21.5cm。ともに青灰色を呈し微細な黒色粒子を含む精良土。

中期流路 **中期流路出土土器**（1523～1536） 中期流路は、前期流路の西半の堆積層と底面を挟り、灰色粗砂・淡灰色砂と黒灰色粘土などの堆積層をもつ流路で、出土土器の主体は7世紀代であるが、8世紀前半の平城宮土器Ⅲまでの土器や奈良時代の土馬が含まれるほか、ヘラ書土器の須恵器杯A（Fig. 98-94）や土師器甕製の円板（Fig. 108-293）などがある。

土師器の器種には、杯A、杯C、杯G、杯H、高杯、甕、鍋などがある。杯A（1524）は口径18.1cm、残存高3.8cm。ごく粗いヘラミガキのb1手法で、暗文も間隔の粗い1段放射文。口縁端部は丸く内肥厚し、茶褐色で微砂を多く含む胎土。平城宮土器Ⅲに属す。杯C（1523）は、太いヘラミガキのb1手法で、暗文は下半部に細密な放射文、口縁近くに太いループ状のラセン文を施す。口径17.4cm、復元器高6.0cm。杯G（1526）は口縁上部外面を強くヨコナデし、端部に鈍い内傾面をつくるb類。茶褐色を呈し石英細粒を含む胎土で、口径12.3cm、残存高3.4cm。杯H（1525）は長い口縁部の端部が小さく内彎し、口径12.8cm、器高4.2cm。高杯C（1527・1528）は、ともに杯底に段をもつ、杯部2段成形のa0手法で、暗文は1段の放射文。杯部に、深手（1527）と浅手（1528）があり、前者の口縁は上部が直立気味で、端部に長い内傾面をもち、脚部は長い脚柱部外面を縦方向のナデ調整、脚裾部との境にヨコナデによる段をもち、脚柱部内面にしぼり目、脚裾部内面には指頭痕が残る。口径15.8cm、器高11.0cm。脚径8.7cm。脚部を欠く1528は、杯底部の段が不明瞭で、口縁端部が小さく外反して先細り気味に開く。口径14.6cm、残存高3.2cm。ともに赤褐色の精良土であるが、前者がより古相を示す。

須恵器の器種には、杯B、杯G、杯H、鉢A、甕などがあり、ヘラ書土器の杯A（Fig. 98-94）がある。杯B蓋（1535）はa類で丸い頂部をロクロケズりする。口縁端部は丸く収め、細く鋭いかえりの先端が口縁部よりも下方に突き出る。口径16.0cm。杯H蓋には、より大型（1529・1530）と、より小型（1531・1532）とがあり、それぞれ、杯H（1533）と杯H（1534）に組み合わせ、後者の法量と形状は、飛鳥水落遺跡出土例に類似し、飛鳥Ⅱ末に属するとみられる。前者の蓋（1529・1530）は段をもって内屈した口縁部が小さく外反し、器壁の厚い頂部はヘラ切り不調整。口径11.6～12.6cm、器高3.7～4.4cm。後者の蓋（1531・1532）は、直線的にのびる口縁の端部がわずかに外肥厚する。口径10.1～10.7cm、器高2.6～3.1cm。1532は扁平な形態と明灰色で黒色粒子を含む胎土が特徴的で、尾張猿投窯産の可能性もある。杯H（1533）は太い基部から弧を描いて強く外反する口縁が特徴的で、底部外面ヘラ切り（R）不調整。受け部径13.8cm、口

径11.1cm、器高4.3cm。杯H（1534）は短い立ち上がりで、底部外面ヘラ切り不調整。受け部径11.4cm、口径9.4cm、器高3.0cm。鉢A（1536）は丸く内彎する体部上半の破片で、口縁端部は小さく外肥厚して明確な内傾面をつくり、復元口径19.4cm。

後期流路出土土器（1537～1551） 後期流路は、初期～中期流路の上部をも幅広く覆う暗茶褐色砂土・暗灰褐色砂土などからなる堆積で、最深部は調査区西端外方にある。出土土器には、7世紀代のものに加えて、奈良・平安時代に属するものがあり、飛鳥池遺跡の出土土器（SD1110-712、SK1128-878、SE1090-1026など）と接合するものや、墨書土器土師器杯（Fig.97-68、PL.263）、瓦製円板（Fig.108-271・290）などが含まれる。

土師器には、杯A、杯C、皿A、甕などがある。杯C（1537）はa0手法で1段の放射暗文。口径9.8cm、器高3.3cm。7世紀中頃に属す。杯A（1538）は薄手のe手法で、小さく外反する口縁の端部が上方に内屈して肥厚し、底部外面に粘土紐継ぎ目、内面にハケ目調整が残る。口径14.8cm、器高3.0cm。10世紀代に属する。皿A（1539）は口縁部外面を強くヨコナデして、かすかに外反し、小さな平底は不調整。口径9.7cm、器高1.7cm。10世紀代。

須恵器には、杯B、杯B蓋、椀A、杯H、皿Bなどがある。椀A（1540）は直線的に開く長い口縁部で、平らな底部との境は丸くロクロケズりする。灰色を呈し、口径12.9cm、器高6.6cm。杯B（1541）は、薄い器壁の底部外面はロクロケズリ（R）、内面は多方向のナデ調整。口縁端部がかすかに外肥厚して、その下部が凹線状を呈する特徴から、東海地方産の可能性もある。復元口径17.0cm、器高3.8cm。杯B蓋（1542～1544）にはかえりのないb類（1542）と、かえりをもつa類（1543・1544）とがある。1542は平坦な頂部外面をロクロケズリ（R）し、内面は多方向にナデ調整。内屈する端部内側に丸みがあり、淡灰色で細砂質の胎土からも美濃窯産の可能性もある。口径18.0cm。1543は上面の広い笠形の頂部外面をロクロケズリ（R）、内面中央部を一方方向のナデ調整。口縁端部外側が鈍い面をなし、基部の太い三角形のかえりが内寄りにつく。口径16.0cm、かえり径13.6cm。1544は口縁端部を丸く収め、内寄りに小さなかえりがつく。口径12.4cm、かえり径10.2cm。杯AgIVにかぶるとみられる。杯H（1545～1550）は最も小型（受け部径10.8cm）の1550を除くと、いずれも、底部外面ヘラ切り（R）不調整で、受け部径11.6～12.1cmのほぼ同大であるが、器高の高いもの（1545）や低いもの（1550）があり、口縁部・受け部の形状も多様である。1550は比較的広い平底で、外面はヘラ切り（L）不調整、内面中央部に一方方向のナデ調整を施す。皿B（1551）は直線的に開く短い口縁の端部が外傾面をなし、外面を丁寧なロクロケズリ（R）で平坦に仕上げた底部の内寄りに、外方へ踏ん張るやや高い高台をつける。口径26.6cm、器高3.2cm。

第92次G区出土土器（1552～1558） 前述の土器群を検出した地点の上流約80mに位置する第92次G区では、上から茶灰土・木屑層・灰緑砂・褐粘土などの堆積層を確認した。各層と大別流路との対応関係は明確ではないが、各層の出土土器には大きな差異がなく、木屑層に1点の荷札木簡がある。

土師器には、杯C（1552・1553）があり、ロクロ土師器の杯C（1558）がある。杯CII（1552）、杯CIII（1553）はともにa0手法で、1段放射暗文。1552は口縁上部で内屈し、端部に内傾面をつくる。口径14.2cm、器高3.2cm。径高指数23で飛鳥IVに属す。1553は直立気味の口縁の端部が小さく外反し、内傾面が凹線状になる。淡褐色で微砂や赤色粒子を多く含む胎土。口径9.5cm、器

高2.8cm。径高指数29。飛鳥Ⅱ～Ⅲに属す。ロクロ土師器杯C（1558）は口径13.4cm、器高4.5cm。半球形の底部外面をロクロケズリ（R）、口縁端部はロクロナデで丸く収める。外面のヘラミガキはみられないが、内面には底部中央にラセン暗文、口縁部には端部まで及ぶ正放射暗文が施され、これが土師器杯Cの模倣であることを明確に示す。

須恵器には杯G（1557）と同蓋（1555・1556）および杯B蓋（1554）がある。杯G（1557）は口径9.0cm、器高3.6cmの深い器形。肉厚な底部外面はヘラ切り（R）不調整、内面中央部の凹みに一方向のナデ調整。杯G蓋（1555・1556）は口径9.4～10.4cm、器高2.4～2.7cm。頂部が狭い笠形の1556のつまみは高く細い宝珠形で、広い笠形の1555のつまみは基部が太く低い乳頭形。杯B蓋（1554）は背の高い三角錘形のつまみをもち、口径12.1cm、器高3.4cm。太い基部で先端が外反するかえりが、口縁部内面の内寄りにつき、飛鳥Ⅲ～Ⅳの椀Bにかぶる可能性がある。

堀SA1755柱穴出土土器（1559～1561） 堀SA1755は第92次Ⅰ区で検出したSD1700東岸近くを並走する堀の一つで、前期あるいは初期流路に伴う可能性がある。堀の1つの柱穴から、土師器蓋（1559）と、須恵器杯蓋（1560）・杯G（1561）が出土した。

土師器蓋（1559）は初期流路の蓋（1476）を大きくした形態で、平坦な頂部から丸みをもって外方へ開き、口縁端部はかすかに外反する。頂部外面は中央部と口縁部とをそれぞれ4～6分割でヘラミガキし、内面はヨコナデ調整。胎土・色調も蓋（1476）に類似し、つまみは円柱形とみられる。口径20.6cm、残存高2.8cm。飛鳥Ⅲ～Ⅳの杯BIあるいは台付杯にかぶる蓋であろう。須恵器杯蓋（1560）は、口径10.9cm、かえり径9.2cm。小さく外彎する口縁部の内面に、細い三角形のかえりが付き、かえり先端が口縁端部よりもわずかに突出する。口径9.9cmほどの杯Gあるいは杯AgVにかぶるとみられる。杯G（1561）は丸みのある底部外面をロクロケズリし、内面は一方向のナデ調整を施すがロクロ目が残る。口縁部は直立し、端部内側は幅広い内傾面をなす。口径9.5cm、器高3.3cm。7世紀前半代。

ii 飛鳥池東方遺跡出土縄文土器 (Fig. 77-1562～1567)

縄文土器

縄文土器は6点出土しており、すべてⅠ区のSD1700堆積層と包含層出土である。1562は北白川C式の深鉢B。隆帯の上縁に2条の凹線で区画をつくり、区画間はRLの充填縄文を施す。³⁷⁾4期の新しい時期に位置づけられる。1563は中津Ⅱ式の浅鉢。口縁を内側に折り返し肥厚させている。縄文はRLの充填施文で、凹線により内面がミミズ腫れ状になっている。1565は中津式の深鉢胴部。1564・1566も深鉢の胴部である。1564は摩耗のため調整は不明。1566にはLR縄文の地文がある。いずれも後期前半とみられる。1567は底部片で中期末～後期初頭のもの。底径は9.6cm。以上、飛鳥池東方遺跡の縄文土器は6点と少なく、すべて中期末～後期前半の時期に収まる。

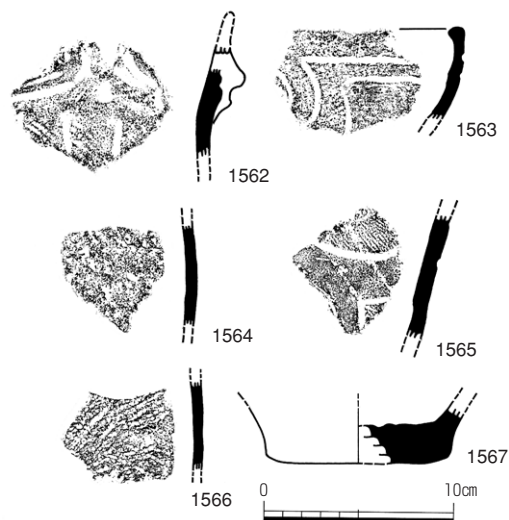


Fig. 77 東方遺跡出土縄文土器 1:4

H 古墳時代の遺構等出土土器

古墳時代の遺構は、西の谷では中流域に2基の竪穴建物（SB1650・1651）、弧状溝SD1652、南北溝SD1653があり、それらを覆う包含層からも比較的多くの土器が出土した。それらは工房関連遺構成などに関わる切土・盛土に壊されており、下流域の諸遺構等（SD811やSX761など）にも古墳時代の土器が含まれる。東の谷では、谷奥の確認調査第112次調査区で工房平坦面裾の竪穴状遺構SX1706、工房作業面下層の南北溝SD1705・1708を検出し、SX1706埋土（PL.4-2・3参照）に土師器甕・須恵器甕片、SD1708埋土に製塩土器が少量含まれるが、いずれも西の谷の弧状溝SD1652出土例に類似したもので、ここでは割愛した。東の谷中流域では、南地区水溜遺構下層の部分的な断割調査において、谷底の有機物を含む自然流路上の堆積層に少量の土器が含まれることを確認し、また、北地区東端の石組方形池SG1100の北方で、須恵器を主体とする少量の土器を含む方形土坑SK1185を検出している。これらの土器の主体は、陶邑窯編年のTK23～TK47型式（5世紀後半～末）の須恵器と同時期の土師器にあり、飛鳥盆地内の平野部（飛鳥寺下層、伝承飛鳥板蓋宮跡下層、川原寺北方遺跡など）での様相と差異はなく、包含層や方形土坑などに6世紀前半～中葉のMT15～TK10型式に属するものが含まれるが、その後は飛鳥寺創建期を含めた断絶がある。

古墳時代の土器

飛鳥寺創建期を含めた断絶

竪穴建物SB1650・1651出土土器（Fig. 78-1568～1573） SB1650出土土器には、土師器椀、高杯、壺、甕、甑、須恵器甕があり、高杯が建物東辺のやや南寄りに設けられたカマド内に倒立して出土した（PL.3-2・3）ほかは、カマド周辺の埋土からの出土である。

土師器椀（1568）は短く外反する薄い口縁部をヨコナデし、肉厚で不整形な底部外面には指頭圧痕が残り、内面はナデ調整。淡褐色で細砂混じりのやや粗い胎土。口径12.4cm、器高5.6cm。高杯（1569）は出土状況から、カマド内の支脚として使用されたと考えられるが、二次加熱の形跡は明確ではない。口径13.4cmの椀形の杯部に細い円柱形の脚柱部を挿入し、杯部下半と脚柱部の外面を縦方向のハケ目調整、脚柱部内面にしぼり目が残る。赤褐色で長石・雲母片を含む緻密な胎土。残存高7.4cm。壺（1570）は丸い体部の下半を欠失し、薄く外反する口縁部の端部は丸く収める。暗橙褐色を呈し、赤色微砂を多く含む胎土で、軟質。外面の調整は摩耗のために不明で、ヨコナデ調整の内面に炭化物による汚れがつく。口径12.2cm、体部径12.4cm。甕（1571）は直線的に開く短い口縁部で、端部に鈍い面をもつ。口頸部内外面はヨコナデ調整、体部はナデ調整。暗褐色で微砂混じりの精良土。口径14.1cm。甑（1572）は丸底状の短い砲弾形で、体部中程に太く短い角状の把手がつき、底部周縁に楕円形孔の一部が残るが、数と配置は不明。口縁部はわずかに外彎し、端部は小さく内側につまみ出して上方に浅い凹面をつくる。口縁部外面はヨコナデ、内面は斜め方向のハケ目調整で、体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整。口径21.2cm、復元器高17.7cm。暗茶褐色を呈し、長石を多量に含む胎土が他の甕類と異なる。

竪穴建物SB1651は、谷中流域東岸近くにあり、近世の梵鐘鑄造土坑SX1600に西半部が壊されるが、東北隅部に炭を多量に含む不整形土坑で、壁面近くに焼土の広がりをもつ（PL.4-1）。出土遺物には砥石1点と土師器・須恵器があるが、土器はいずれも細片で、土師器甕（1573）

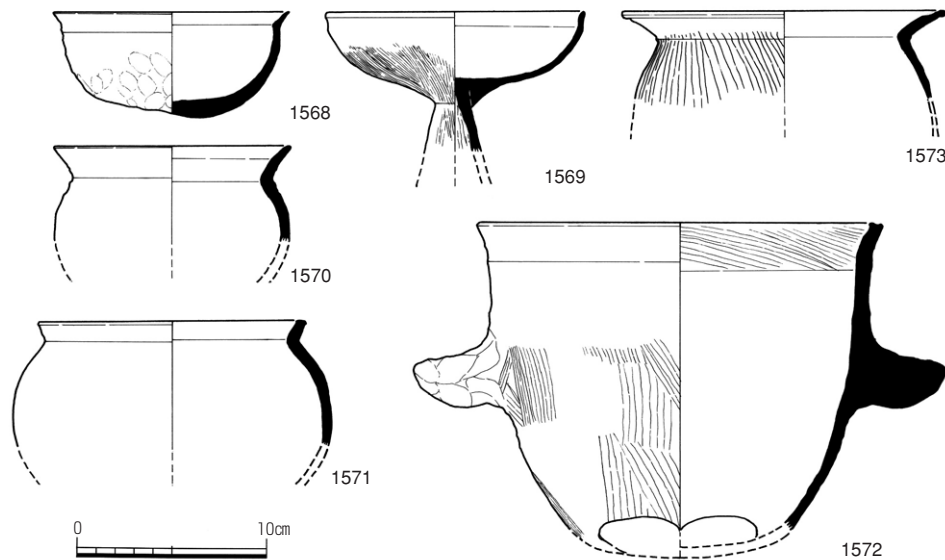


Fig. 78 竪穴建物SB1650・1651出土土器 1:4

のほかは図示できない。1573は、くの字形に開く長めの口縁部で、体部外面の条の粗いハケ目調整と淡白黄色を呈する胎土から、東海地方のいわゆる「くの字状口縁台付甕」とみられる。口径17.0cm。なお、建物直上からは、後述する下層包含層の土師器椀（1617）が出土している。

弧状溝SD1652出土土器 (Fig. 79~81-1574~1595, PL. 253~255) SD1652は竪穴建物SB1650の北、谷西岸の斜面に沿って弧状を呈する素掘溝で、谷中央寄りの土坑状に幅広くなった箇所から、多量の土師器・須恵器・製塩土器がそれぞれ折り重なるように集中して出土した (PL. 5-4参照)。土師器には高杯・甕・鍋・羽釜・竈があり、須恵器には杯H・有蓋高杯・無蓋高杯・甕・器台などがある。なお、後述のように、製塩土器は西の谷ではこの溝のみ含まれる。

土師器高杯（1574）は緩やかに開く浅い杯部に、裾が「くの字形」に開くやや長めの脚部がつく。接合部の補充粘土および杯部下半を斜めのナデ調整。脚部外面は板状工具によるナデ調整で小さな面をもち、内面には脚柱部にしほり目、裾部に指頭圧痕が残り、脚端部を内外に小さく肥厚させて面をつくる。図示を省略した他の脚部片もほぼ同じつくりで、赤茶褐色を呈し長石・石英・赤色粒子を多く含む胎土。口径17.9cm、器高13.6cm、脚径11.0cm。甕（1575）は口頸部が緩やかに外反し、体部下半に成形時の段をもつやや縦長の壺形の器形であるが、丸い底部を除く外面に煤が付着する。段以下の底部内・外面は指頭痕とナデ調整。体部上半外面は縦方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目を軽く施すが、粘土紐継ぎ目が明確に残る。茶褐色を呈し雲母片と砂粒を多く含む胎土で口径10.0cm、器高12.2cm。甕（1576）は球形の体部とやや長めの口頸部からなり、口縁端部は小さく内屈して内肥厚する。体部外面は丸い底部まで縦方向のハケ目調整、内面は指頭によるナデ調整。口縁部内面には斜方向のハケ目がかすかに残る。口径11.0cm、器高12.8cm。茶褐色で白色砂粒と雲母片を多く含むやや粗い胎土。底部付近の外面に環状の二次加熱痕と煤の付着がみられる。甕（1577）は外反する口縁の上部が内彎気味をなし、端部は内外に肥厚して上方に凹面をつくる。体部外面は斜め方向のハケ目調整で、肩部に横位のハケ目を加え、内面は縦方向の指頭ナデ。外面が淡茶褐色で内面が黒色を呈し、雲母片を多く含むやや粗い胎土。口径12.0cm、体部径15.2cm。

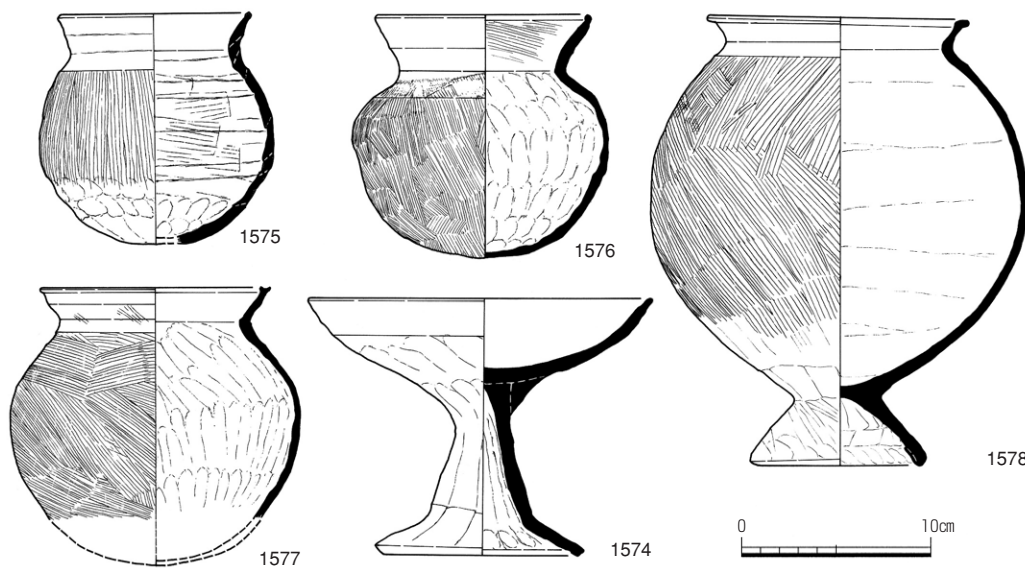


Fig. 79 弧状溝SD1652出土土器 (1) 1:4

甕 (1578) は東海地方産のいわゆる宇田型台付甕。口縁部の外反度が比較的緩く、端部は内外に肥厚し上方に面をつくる。中程が大きく膨らむ体部に、ハの字に開き端部を折り返した脚台がつく。体部外面は条の粗い櫛目状の斜めハケ目を羽状に施し、内面は平滑なナデ調整。脚台外面は体部と同じ粗いハケ目調整ののちナデ調整、内面は折り返した端部に指頭痕が残る。淡黄褐色で、長石を含むやや粗い胎土は他の甕類と大きく異なる。脚台部を中心に二次加熱により赤変し、体部～口縁部外面に厚く煤が付着する。口径13.4cm、体部径19.8cm、脚径9.1cm、器高23.7cm。鍋 (1579) は、平底気味で深手の体部と直線的に開く口縁部からなり、体部中程に挿入式の把手1対がつく。口縁端部は内外に肥厚して外方に凹面をつくる。把手は平面三角形の両側が内彎して中央部が凹む。体部外面は全面を縦ハケ目調整したのちに、底部に横方向のハケ目、体部上半に口縁部と平行する横ハケ目と1条の凹線を施し、把手周辺を斜め方向のハケ目で整える。内面は体部下半から底部に右上がり、上半部に左上がりのナデ調整を施し、横方向のハケ目調整が部分的に残る。口径32.4cm、器高29.2cm。全体に器壁が厚く、黄灰褐色で長石・石英粒を含む胎土が、後述の甕 (1580)、羽釜 (1581)、竈 (1582) と共通し、これら韓式土器に系譜のある器種の製作地は、前述の甕類とは異なる可能性が高い。

東海地方
の
甕

甕 (1580) は平底気味で口縁部が直線的に開く下すぼまりの器形で、体部中程に基部の太い把手がつき、底部周辺に残る楕円形孔は、図のような配置に復原される。口縁端部は内側につまみ出して上方に凹面をつくり、体部外面は斜め方向に、条痕の不明確な板状工具によるナデ調整。内面は下半を右上がりに、上半を左上がりにナデ調整。把手は体部を破って挿入した芯に粘土をかぶせて成形する。口径25.4cm、器高25.8cm。羽釜 (1581) は丸底で砲弾型の体部と直線的に開く口縁部からなり、口頸部外面に×状のヘラ書き刻み目を施して、下向きに開く肉厚で幅広い鏝を貼り付ける。口縁端部と鏝端部はヨコナデ調整により内側に小さく肥厚し、外方に凹線状の凹みが巡る。体部外面は横方向のハケ目調整ののちに斜めのナデ調整、内面は指頭押圧痕とナデ調整。頸部内面にハケ目のあたりが残る。口径18.8cm、鏝部径29.0cm、器高31.2cm。全体に淡茶灰色を呈する良好な焼成で、鏝部外面の一部に黒斑がつく。竈 (1582) は上部

異なる
製作地

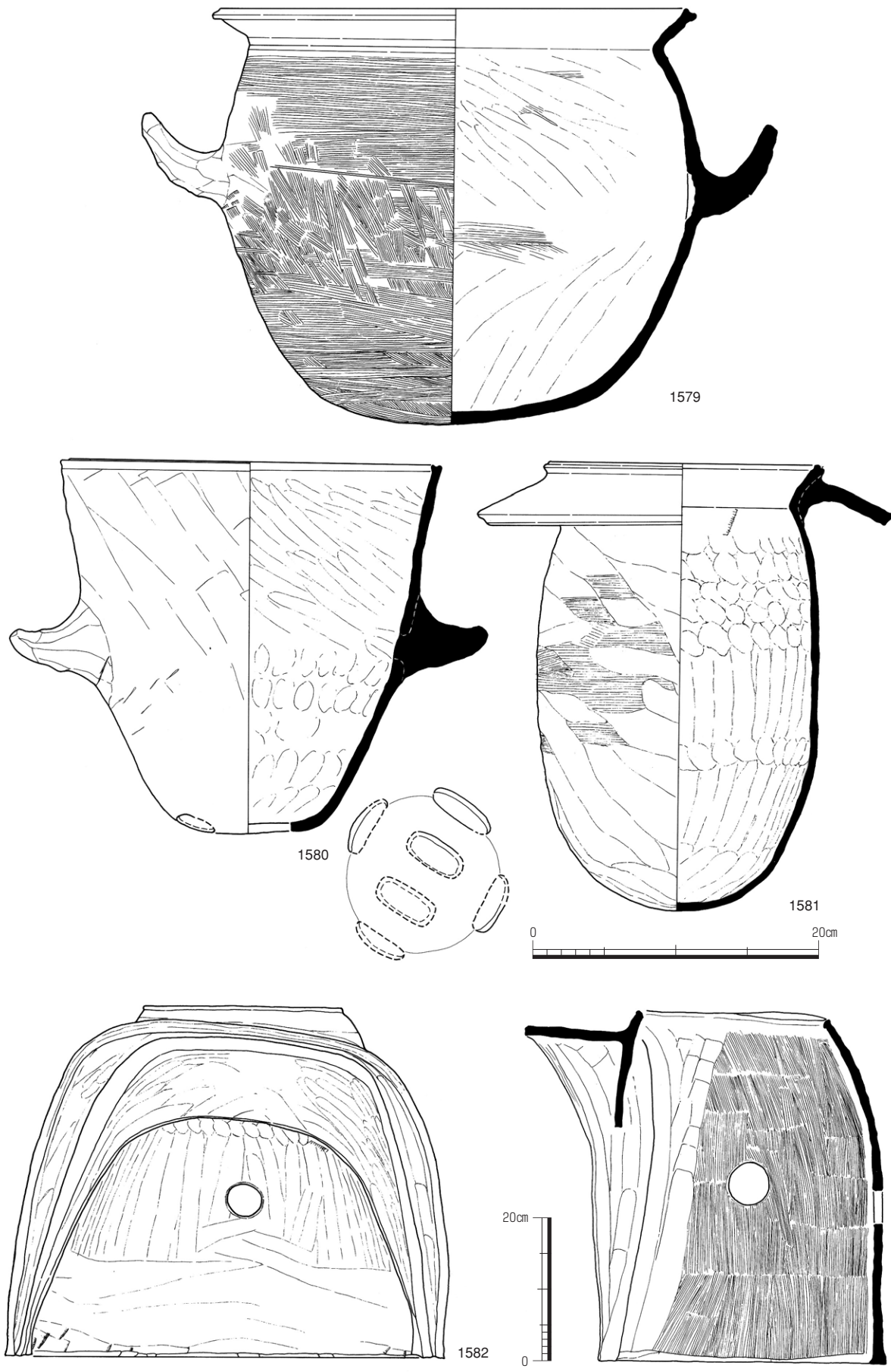


Fig. 80 弧状溝SD1652出土土器 (2) 1:4 (1582のみ1:8)

ですぼまる円筒形の一面を深い鉢形に切り取り、その周囲に上部で幅広く下部で幅狭い庇を貼り付け、体部中程の左右と奥との3ヵ所に直径5～6cmの円孔を穿つ。口縁端部は内外に小さく肥厚して内傾する鈍い面をなし、基底部分は自重により内外に肥厚する。体部外面は4～5段に分割した縦方向のハケ目調整で、庇の内外面と周辺はナデ調整、内面は下半を横方向に、上半を縦方向にナデ調整。竈奥壁には、乾燥時に生じた縦方向のひび割れとその補修のための粘土帯が残り、体部内面と底部内面とに薄く煤が付着する。口径27.7cm、器高49.5cm。

須恵器杯H (1588・1589) は丸い底部の1/2をロクロケズリ(L)し、口縁端部に浅い凹面をなす鈍い段をもつ。暗青灰色で黒色粒子を含む精良土。1588は口径10.5cm、器高4.6cmで、底部外面に火嚳きをもち、1589は口径10.3cm、器高5.2cm。有蓋高杯蓋 (1583～1587) には、つまみ

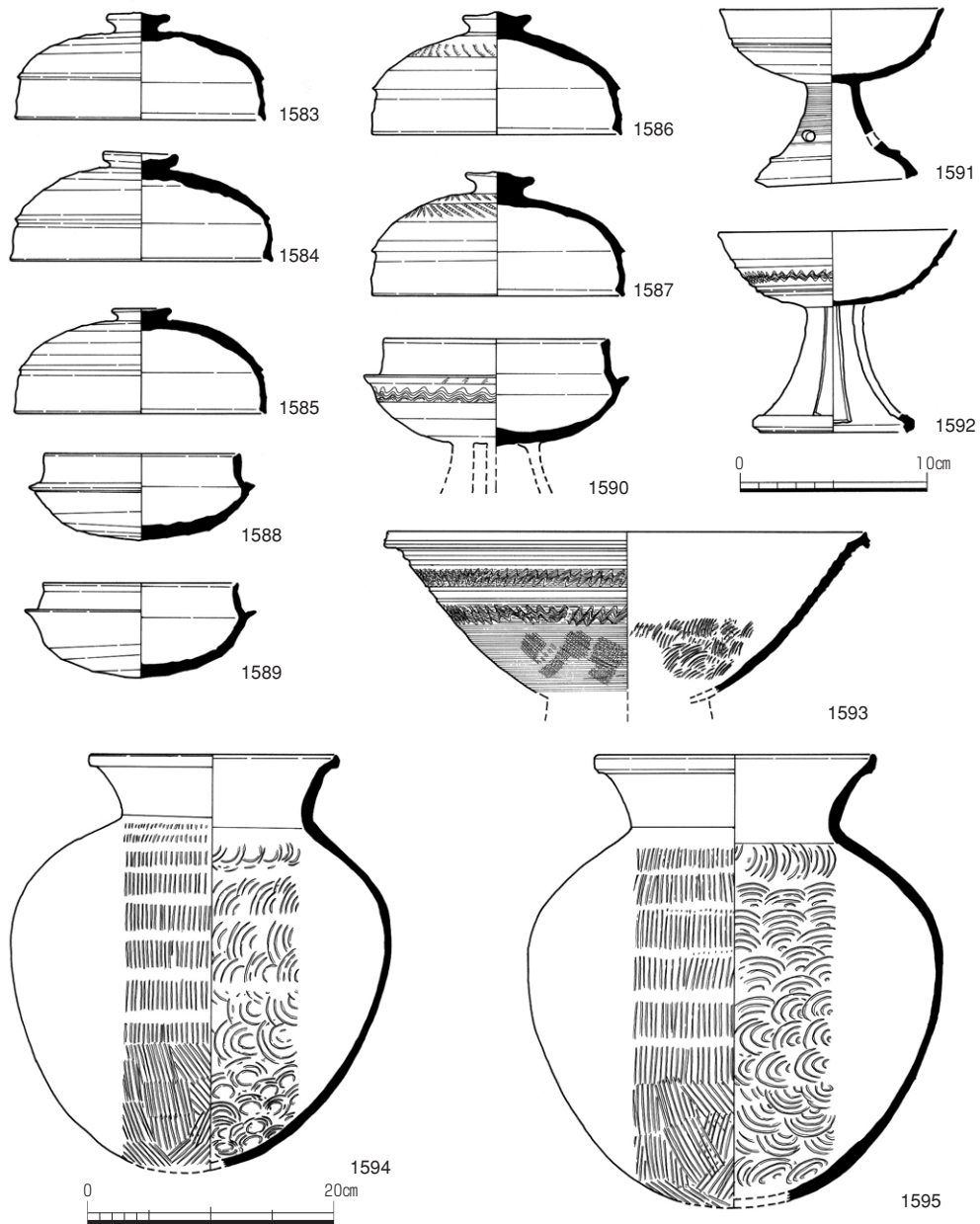


Fig. 81 弧状溝SD1652出土土器 (3) 1:4 (1593～1595は1:6)

の頸部が長く上面中央がやや突出するもの(1583・1586・1587)と、低いつまみの中央が窪むもの(1584・1585)とがあるが、いずれも頂部外面の1/2前後をロクロケズリし、内彎気味の口縁部の端部が内外に肥厚して内傾する面をつくる。口径13.3~13.9cm、器高5.7~6.6cm。前者は肩部の稜がやや鋭く、1583は平坦な頂部内面を一方向にナデ調整し、灰色で石英粒を含む精良土。丸い山形の頂部で器高が高い1586・1587は、内面の中央までをロクロナデし、暗灰色で長石を含む粗い胎土。外面のつまみ寄りに櫛歯状の刺突文が巡り、1583とは産地を異にするとみられる。後者の肩部の稜は凸線状で鈍く、灰白色で黒色粒子を多く含む精良土。有蓋高杯(1590)はロクロケズリした底部に3方透孔をもつ脚部の剥離痕が残る。口縁端部は幅広い内傾面で、受部上面は水平面をなす。受部下を巡る櫛描波状文の一部が受部外側面に及ぶ。口径12.0cm。無蓋高杯(1591・1592)には、脚部・杯部の形状が異なる2種がある。1591は杯H蓋を逆転した形状の杯部に、下半で外反し裾部が内彎する脚部がつく。裾部外面に1条の細突帯が巡り、透孔は小さな円形孔。口径11.8cm、器高9.4cm。1592は外方へ直線的に開く杯部の中位に2条の直線文と1条の櫛描波状文をもち、緩やかに開く長脚気味の脚部は端部を内屈し、1段の細長い方形透孔4孔を穿つ。口径12.6cm、器高10.8cm。

器台(1593)は直線的に開く浅い台部で、小さく外反する口縁の端部は上下に肥厚して外方に面をつくる。外面はカキ目調整ののち、上半部に2条一組の直線文2組と櫛描波状文2条を巡らし、下半部には外面に格子状叩き目、内面に同心円文当て具痕がかすかに残る。黒灰色~青灰色を呈し、口径37.8cm。甕A(1594・1595)はやや長めの口頸部で、体部外面は細刻の平行文叩き目ののちに、摺り消しの直線文が5~7条巡り、内面には細刻の同心円文当て具痕が残る。1594は口径19.5cm、器高33.2cm、体部径30.3cm。やや大きい1595は口径22.0cm、器高36.0cm、体部径33.0cm。

南北溝SD1653出土土器 (Fig. 82・83-1596~1616, PL. 256) 南北溝SD1653は西の谷の中流域最深部の素掘溝で、溝埋土には多量の土器が含まれ、土師器甕を主体として土師器椀・高杯・罍、須恵器杯・壺・甕などがある。下流部最深の土器集中部では、その多くが口縁部を上方に向け直立した状態で並ぶ完形品で(PL.5参照)、周辺および一部の土器内部に多量の滑石製品(白玉・有孔円板・鏝など)を伴っており、後述する包含層出土の須恵器の一部と一体で、何らかの祭祀に関わるものと想定される。

土師器椀(1596)は口縁部が短く外反し、内外面ともナデ調整。橙色を帯びた赤褐色を呈し、口径12.8cm、器高4.8cm。高杯(1597~1600)には直線的に開く深い杯部で脚裾部が強く屈曲するもの(1597)と内彎気味の杯部で脚裾の屈曲が緩やかなものがあり、後者には深い杯部(1598・1599)と浅い杯部(1600)の別がある。1597は杯底中央部から粘土を充填し、脚部内面は横方向のナデ調整。杯部に鉄製品と滑石製白玉3点が入っていた。後者は杯部に挿入した脚部の周りに粘土を補い、脚柱部内面にしほり目、脚裾部には指頭痕が残る。1597は赤褐色で、杯部外面に大きな黒斑をもち、口径15.2cm、器高10.0cm。後者は黄褐色~橙色で、脚裾部に黒斑をもち、口径13.9~15.2cm、器高10.6~11.3cm。壺(1601~1603)には、縦長の体部に直立気味の口縁部がつく1601と、横長気味の球形体部で口縁部が外反する1602・1603とがあり、器壁の薄い1602と厚い1601・1603とは、橙色系の色調・体部外面のナデ調整・内面の指頭痕では共通する。1601は口径8.2cm、器高11.2cm。1602は口径8.2cm、器高12.5cm。1603は体部径14.0cm。

完形品が
並んで出土

滑石製品
相伴

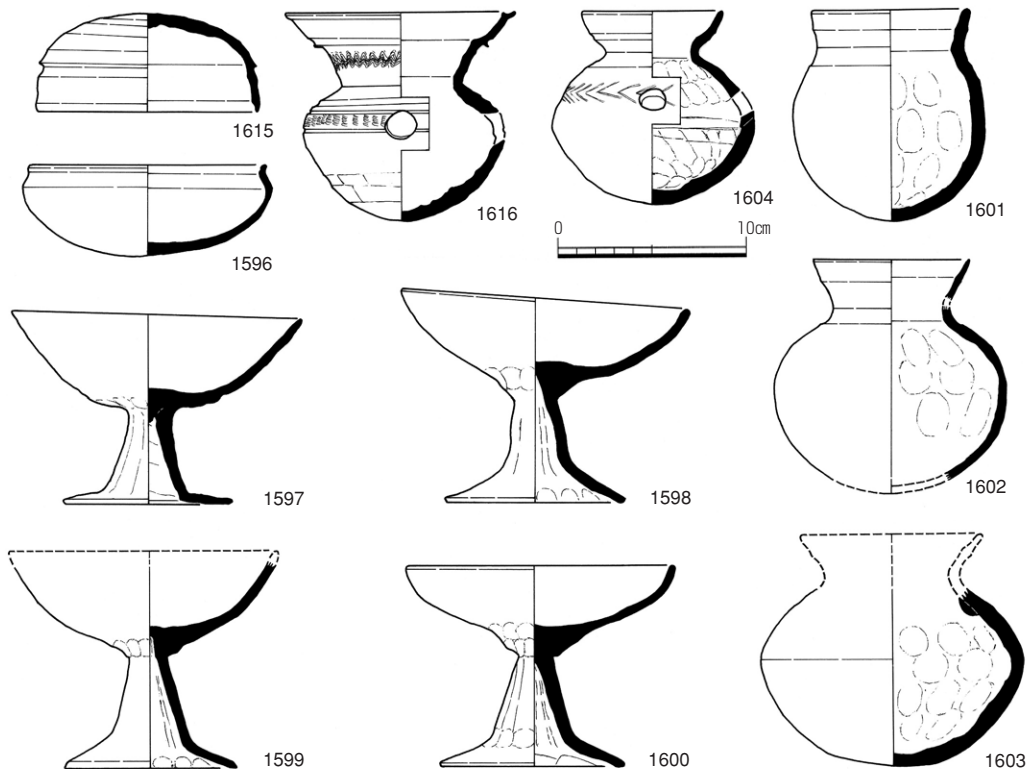


Fig. 82 南北溝SD1653出土土器(1) 1:4

罍 (1604) は細い頸部に内彎気味の口縁部がつき、体部上半に「く」字形の刺突文と小円孔をもつ。淡赤褐色を呈し、口径7.4cm、器高10.3cm。

土師器甕 (1605~1614) は、最も小型の1605を除き、体部外面はハケ目調整。法量や体部・口縁部形状の相違、ハケ目の粗密に関わりなく、赤褐色~茶褐色系の色調で微細な白色砂を多く含む胎土が共通する。1605は口縁部が強く外反し、体部内外面はナデ調整。茶褐色で一部赤変し、口径13.2cm。1606・1607は体部径14cm内外の小型甕で、内彎気味に開く口縁の端部は上方に内傾面をつくり (1606)、体部外面を条の細かいハケ目調整、内面に指頭痕が残る。口径約12.0~14.2cm、器高12.2~14.0cm。1608~1611は体部径16.1~18.4cmの中型甕。内彎気味に直立する口縁の端部が内傾面をなすもの (1608)、緩く外反する口縁の端部が薄く尖るもの (1609)、口縁上部が内屈し、口頸部内面と体部外面に条の粗いハケ目を施すもの (1610)、頸部が細く括れて複合口縁状の内彎する口縁の端部が内肥厚するもの (1611) などがあり、1608が体部内面を斜めにナデ調整するほかは指頭痕が著しい。口径11.5~14.4cm、器高15.5~19.5cm。1612~1614は体部径約23.0~25.4cmの長胴化した大型甕。直線的に開く口縁の端部が外方に面をなすもの (1612)、緩く外反した口縁の上部が玉縁状に肥厚し上端が尖るもの (1613)、口縁上部が段をなし上方に内傾面をつくるもの (1614) があり、1612の口縁部内面は斜め方向のハケ目調整。口径15.2~19.4cm、器高約26.0~31.2cm。

須恵器杯H蓋 (1615) は口縁端部の段と肩部の稜が鈍く、頂部にヘラ記号をもつ。灰白色で口径11.6cm、器高5.2cm。罍 (1616) は上面が凹面をなす口縁端部で、細かな櫛描波状文を巡らせた細い頸部との境に鋭い稜をもつ。体部中位には上下を凹線で区画した櫛描刺突文を施し、1円孔を穿つ。底部外面はロクロケズリ。灰白色で口径12.0cm、器高11.0cm。

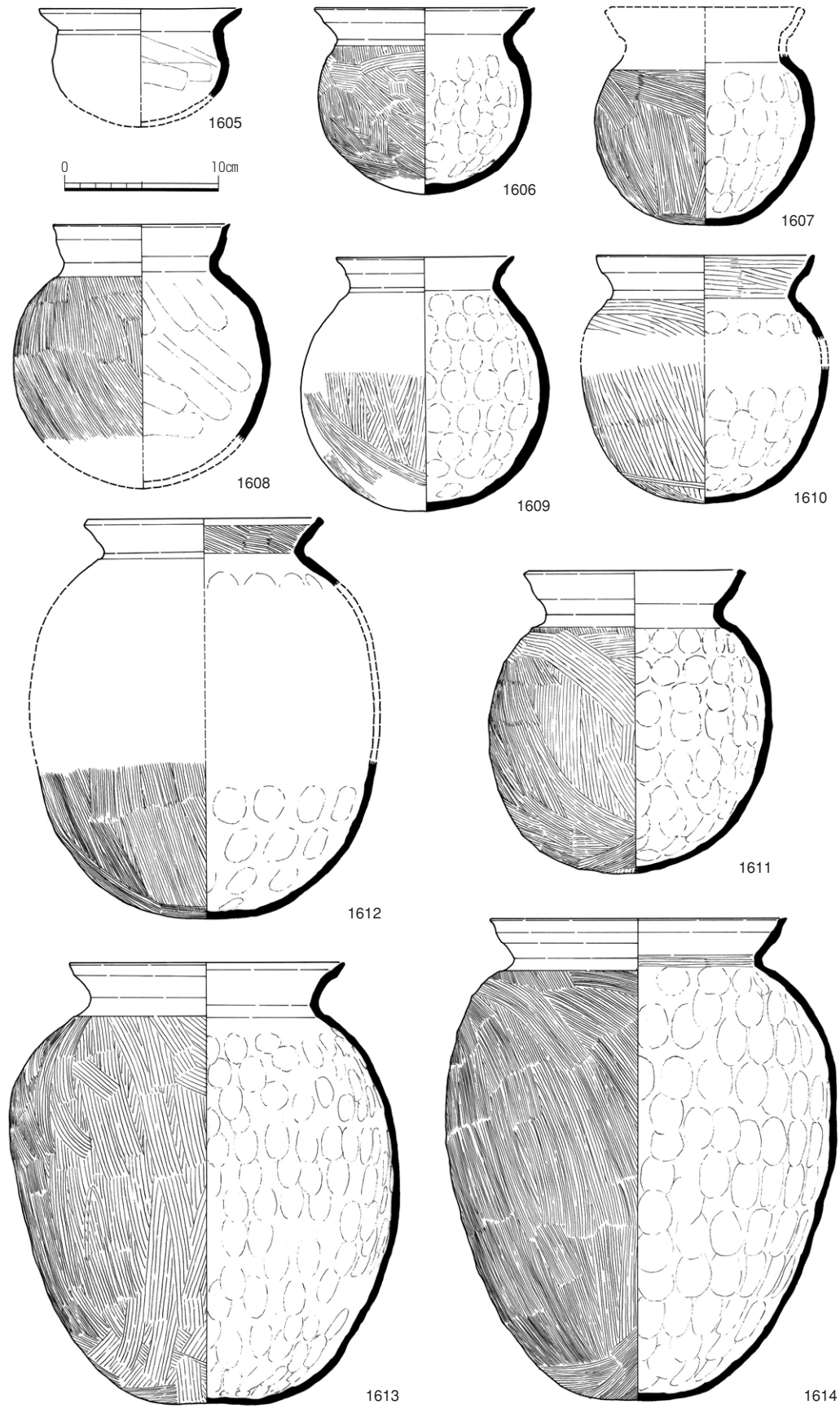


Fig. 83 南北溝SD1653出土土器 (2) 1:4

西の谷下層包含層出土土器 (Fig. 84・85-1617~1644) 西の谷の中流域中央部、南北溝SD1653・弧状溝SD1652などの上部を覆う遺物包含層(茶褐色土・黄土混茶褐色土)出土土器には、少量の土師器椀、高杯、甕と多量の須恵器杯H、高杯、壺、甕などがあるが、多くはSD1653の直上付近出土である。SB1651直上の土師器椀(1617)、および茶褐色土出土の須恵器(1622・1623・1629・1631・1633・1635・1640・1641・1644)を除くものは、SD1653出土土器と一体をなす可能性が高い。

土師器椀(1617)は薄い口縁部が内彎気味に開く。体部は摩耗が著しく調整は不明。暗橙褐色を呈し、長石粒を含むやや粗い胎土で軟質。口径11.9cm、復元器高5.6cm。高杯(1618)は弧を描く椀形の杯部に円柱状の脚柱部を挿入する。脚柱部内面にしぼり目、脚裾部内面には断続するハケ目調整がわずかに残り、外面は縦方向のナデ調整。部分的に赤味を帯びた茶褐色を呈し、赤色粒子を含む精良土。口径14.5cm、器高11.0cm。脚部径9.7cm。高杯(1619)は口縁上部が内屈して段をもつ杯部で、口縁端部はヨコナデ調整。杯部内面は斜め方向のハケ目、外面は縦方向のナデ調整。脚柱部内面にしぼり目が残り、脚裾部内面はヨコナデ。脚柱部に対向する2円孔を穿つ。赤褐色で赤色粒子を含むやや粗い胎土。口径14.1cm、器高10.1cm。

小型甕(1620)は小さな平底で張りのある体部に上方で内彎する長めの口縁部がつき、口縁端部は小さく内肥厚する。体部外面は底部のハケ目調整を除き、二次加熱と摩耗により調整不明。内面は斜め方向のヘラケズリで、底部に指頭圧痕が残る。底部内面を除くすべてに煤・炭化物による汚れが付着する。淡茶色で石英粒を多く含む胎土。口径9.8cm、器高10.7cm。甕(1621)

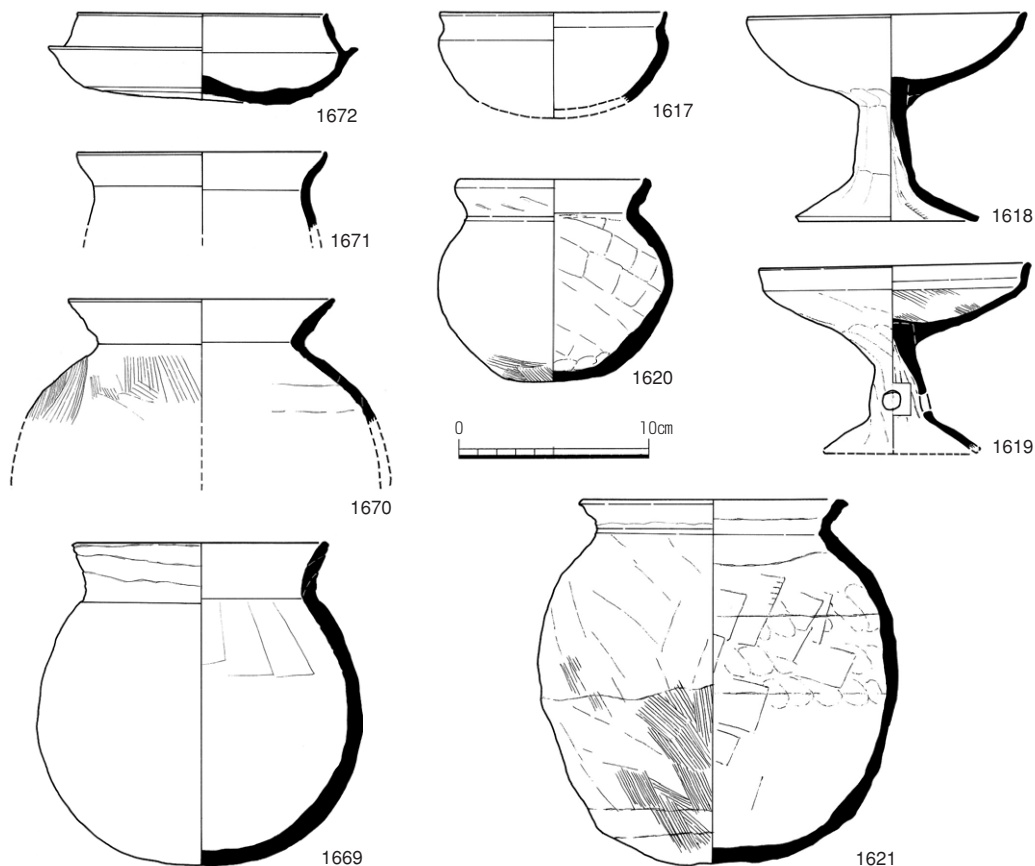


Fig. 84 西の谷下層包含層(1)、東の谷下層包含層出土土器 1:4

は外反する口縁の端部を三角形に小さく摘み出し、上外方に鈍い面をつくる。体部外面を斜め方向にハケ目調整するが、体部下半部と口頸部に粘土紐の継ぎ目が残る粗い調整で、体部内面は指頭押圧痕ののちハケ目調整。頸部下に粘土紐の継ぎ目が残る。底部外面付近に煤が付着し、赤褐色で砂粒を含むやや粗い胎土。口径13.5cm、器高19.1cm。

須恵器杯H蓋(1622~1628)には小型で口縁端部の段が明確なもの(1624・1625)と、やや大型で口縁端部に内傾面をもつもの(1626~1628)があり、上層の茶褐色土には、口縁端部を丸くおさめ、肩部の稜が失われたもの(1622)や、かすかな稜をもつもの(1623)が含まれる。1622は灰白色を呈し、口径12.0cm、器高3.8cmで、頂部外面のロクロケズリの範囲が狭く、1623は赤灰色で口径11.5cm。ともに混入の可能性はある。小型の1624・1625は口径11.7~12.7cm、器高3.8~4.2cm。頂部の約1/2をロクロケズリする。やや大型の1626~1628は丸い頂部の2/3をロクロケズリし、長い口縁の端部が小さく外肥厚する。口径14.0~14.2cm、器高4.2~5.1cm。杯H(1629~1634)はいずれも底部の丸みが強く、約1/2程度をロクロケズリするが、小型(1629~1633)とやや大型(1634)とがあり、前者は口径9.3~10.8cm、器高4.3~5.4cm。受部が上方に開き、内傾気味の口縁の端部に段をもつ。後者の1634は口径11.4cm、器高5.7cmで、受部が水平に開き、口縁端部を丸く収める。壺・高杯等の脚台(1635)は、下半が緩やかな段をもって開き、端部は外肥厚して下方に面をもつ。透孔は長方形を3方に穿つ。茶褐色出土で、形状等が灰緑色粘砂層の1420に類似し、混入の可能性はある。無蓋高杯(1637~1640)には低脚で椀形杯部の1636と、大きく開く杯部に凸線・凹線の段と櫛描波状文を施した1637~1640がある。1636は杯H蓋を逆転した杯部に鈍い段をもち、口縁端部は内傾面をなす。ハの字に開く脚部中程に3方の円形透孔をあけ、端部は下方に肥厚して外方に面をつくる。口径12.2cm、器高9.5cm。後者には大小があるが、全形の知れる1637は長脚で3方に長方形透孔。口径13.1cm、器高12.3cm。小振りで深い杯部の1638は、4方に長方形透孔をもつ脚部が付き、口径12.2cm。大型の1640は茶褐色出土で、口径21.0cm、杯部高約8cm。

壺(1642)は口頸部上半を欠く。体部中程に2条の凹線と1条の緩やかな櫛描波状文が巡り、体部下半外面に平行文叩き目、内面に無文の当て具痕。体部径14.2cm。罍(1643)は体部中程に2条の凹線と櫛描刺突文が巡り、1円孔を穿つ。体部下半は外面をヘラケズリで整え、内面はナデ調整。口頸部下半の櫛描波状文が細かく、上半との境の段が鋭い。体部径11.5cm。甕(1641・1644)はともに茶褐色出土で、小型の1641の頸部外面には細い凸線と細かな櫛描波状文を巡らせる。小さく外反する口縁の端部は上方へ肥厚して外側に甲張りのある面をつくる。口径15.6cm。1644は口縁端部を欠くが、頸部の中程に施した1条の凹線の上下に櫛描波状文をもつ。体部外面は細刻の平行文叩き目を縦位に施したのち、筋状の摺り消し直線文を8条巡らせ、底部の叩き目は乱雑に重なりあう。内面には細刻で粗い同心円文当て具痕がかすかに残る。体部径38.7cm、復元器高約35cm。

西の谷素掘溝SD811出土古墳時代土器(Fig. 86-1645~1647) SD811は西の谷工房下層の石敷SX815に連なる素掘溝で古墳時代の遺構ではないが、出土土器には、7世紀中頃の細片のほかに、古墳時代に属す須恵器杯(1645)・甕(1646・1647)などがある。上流部からの流入とみられ、次のSX761出土土器とともに、西の谷下流域への古墳時代土器の広がりを示す。

須恵器杯H(1645)は底部外面を受け部直近までロクロケズリ(R)するほかはロクロナデ調

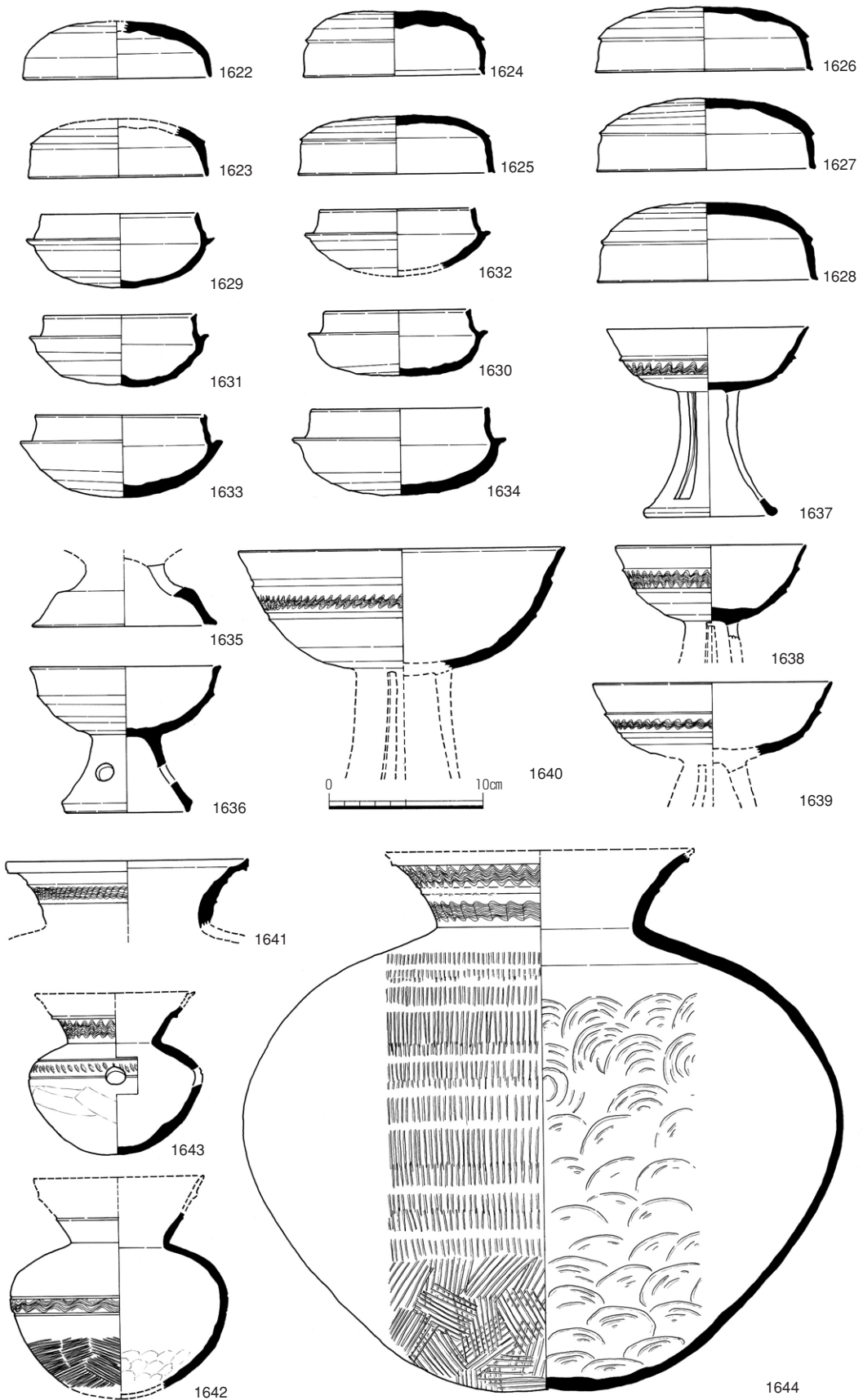


Fig. 85 西の谷下層包含層出土土器(2) 1:4

整。内傾気味で長い口縁部の端部を小さく外方へ摘み出して内傾面をつくる。黒灰色を呈し石英細粒を含む胎土で、口径11.8cm、器高5.0cm、受け部径14.1cm。破片はSX761出土片と接合し、SD1653等出土土器と同様に陶器窯編年のTK47型式に属する。小型甕（1646）は外反する口縁の上部を欠くが、体部径18.1cm、残存高18.0cm。体部外面は細かく深い刻みの平行文叩き目ののち、肩部に条の細かなカキ目調整。内面は細刻の同心円文当て具痕。暗青灰色で砂粒を多く含む粗い胎土。中型甕（1647）は丸く外反する口頸部で、口縁端部は小さく下肥厚して外側に面をつくる。体部外面は平行文叩き目ののちカキ目調整で、頸部に叩き目の縁端が残る。口径17.6cm。

TK47型式

西の谷水溜状土坑SX761出土古墳時代土器

(Fig. 87-1648~1653) 南北溝SD1653の下流部に掘られた西の谷の水溜状土坑SX761からは、前述（C v）した7世紀中頃と飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器に混じって、土師器椀、甕、甌（1648）、須恵器杯H蓋（1649・1650）、杯H（1651）、罎（1652・1653）、甕などの古墳時代の土器が出土している。

土師器甌（1648）は把手部の破片。肉厚で短い牛角状（幅4.5cm、厚さ4.0cm）を呈し、中央上面に開けられた切り込みが一部下面に貫通する。明褐色で赤色粒子や雲母片を多く含む砂質の胎土。甌の体部内面はナデ調整とみられる。

須恵器杯H蓋（1649・1650）はともに、頂部外面を広くロクロケズリ（R）し、口縁部との境には明確で先端が鋭い段（1649）あるいは鈍い稜（1650）があり、直立する口縁の端部はごく浅い凹面をなす。1649の口径12.2cm、器高4.2cm。1650の口径12.0cm、器高3.8cm。杯H（1651）は強く内傾する口縁の端部にかすかに凹む内傾面をつくり、丸みのある底部は軽いロクロケズリ。青灰色で雲母片を含む胎土。口径11.1cm、器高5.0cm。罎には小型（1652・1653）のほか、体

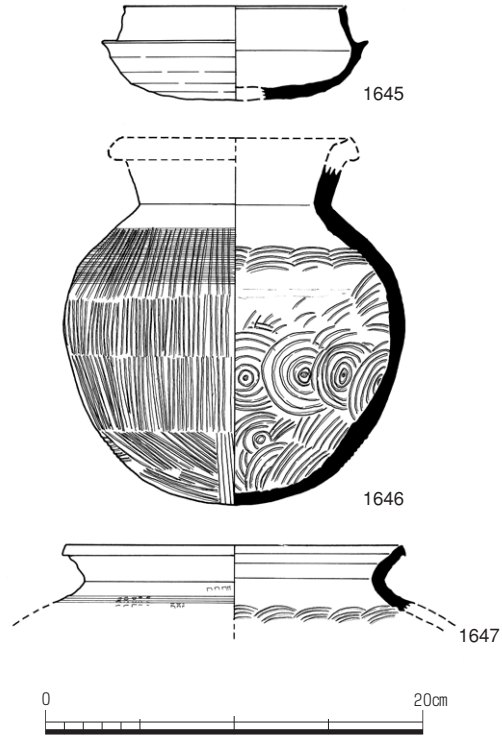


Fig. 86 素掘溝SD811出土古墳時代土器 1:4

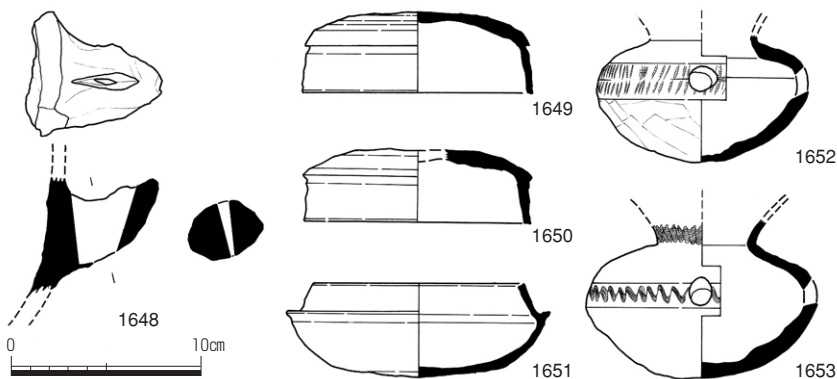


Fig. 87 水溜状土坑SX761出土古墳時代土器 1:4

部径17.3cmの大型品があるが、いずれも口頸部の大半を欠く。前者はともに、尖り気味の小さな底部で、体部のやや上寄りが強く屈曲し、肩部は直線的。体部中程に櫛描波状文(1653)や刺突文(1652)を施し、1個の円孔を穿つ。1653は体部径12.3cmで、底部外面はナデ調整。頸部外面に条の細かな櫛描波状文をもつ。1652は体部径11.2cmで、底部外面は斜め方向のヘラケズリ。杯類とともに陶邑窯編年TK47型式に属する。

TK47型式

東の谷下層包含層出土土器(Fig. 84-1669~1672) 部分的な断割調査の結果、東の谷の水溜遺構下の灰色粘土層の下には、無遺物の堆積層を介して、古墳時代の遺物包含層があり、その下は地山の谷底上の有機物を含む自然堆積層であることが確認された。包含層出土の土器は少量で、土師器甕(1669~1671)、須恵器杯(1672)などがある。

土師器甕(1669)はやや縦長の肉厚な体部に、端部を丸く収めた直立気味に開く口縁部がつく。体部外面はナデ調整、内面は上半を板状工具によるナデ調整で、口縁部外面に粘土紐継ぎ目が残る。赤橙色の緻密な胎土で、底部中央を除く外面には煤が厚く付着する。口径13.2cm、器高17.0cm。甕(1670)は器壁の薄い丸みのある体部に、く字形に大きく開く口縁部がつき、端部は薄く尖り気味。体部外面ハケ目調整、内面は粘土紐継ぎ目が残るナデ調整。暗褐色の精良土で、外面に薄く煤が付着する。口径13.9cm。甕(1671)は頸部が緩く外彎し、口縁上部が内彎する。暗橙色を呈する精良な胎土で、口径13.0cm。

須恵器杯(1672)は大型で器高が低く、内傾する長い口縁部の端部は、かすかに外肥厚して小さく鈍い内傾面をなし、凹線状の段をもたない。底部外面は1/3程度のロクロケズリ(R)で、中央部が上げ底気味に歪む。外面が暗灰色、内面が灰色で雲母片を含む精良土。口径13.2cm、器高4.8cm、受け部径16.5cm。陶邑窯編年のMT15型式に属する。

MT15型式

方形土坑SK1085出土土器(Fig. 88-1654~1668) SK1085は北地区の石組方形池SG1100北方で検出した土坑で、出土土器には、多量の須恵器杯Hと少量の土師器杯、須恵器高杯がある。多くは口縁部を上方に向けた状況で出土した完形に復せるものであり、内1点には滑石製白玉

滑石製白玉

1654は淡黄褐色を呈し砂粒を含む胎土で、口径12.8cm、器高5.2cm。1655は茶灰色を呈し、口径14.1cm、器高5.1cm。口縁下半外面には粘土紐継ぎ目が残る。

杯 G 類
の 系 譜

土師器杯(1654・1655)は、口縁上部外面~底部内面を横ナデし、口縁下半から底部外面は不調整。口縁上部が小さく外反し、端部を内彎気味に内肥厚させるもの(1654)と口縁端部に鈍い内傾面をもつもの(1655)があり、ともに7世紀代の杯G類の系譜につながる様相を示す。1654は淡黄褐色を呈し砂粒を含む胎土で、口径12.8cm、器高5.2cm。1655は茶灰色を呈し、口径14.1cm、器高5.1cm。口縁下半外面には粘土紐継ぎ目が残る。

須恵器杯H蓋(1656~1658)は丸みのある頂部で、口縁部との境の稜が鈍く、口縁端部は内傾した鈍い凹面状の段をもつ。いずれも、暗青灰色を呈し、法量では口径11.8~12.0cm、器高4.7~4.8cmの小型(1656・1657)と、口径15.2cm、器高5.8cmの大型(1658)とに分かれ、前者は頂部の約2/3を、後者は約1/2をロクロケズリする。杯H(1659~1667)も口径9.6~10.8cm、器高4.1~5.2cmの小型品(1659~1664)と、口径12.4~12.8cm、器高4.8cm前後の大型品(1665~1667)とに大別され、それぞれ、杯H蓋の大・小の別に対応する。小型品には、底部の約1/2をロクロケズリし、口縁端部の段が明確に残るもの(1659~1662)と底部のロクロケズリの範囲が約1/3と狭く、口縁端部の段が消滅したもの(1663・1664)があり、色調は前者全てが淡青灰色、

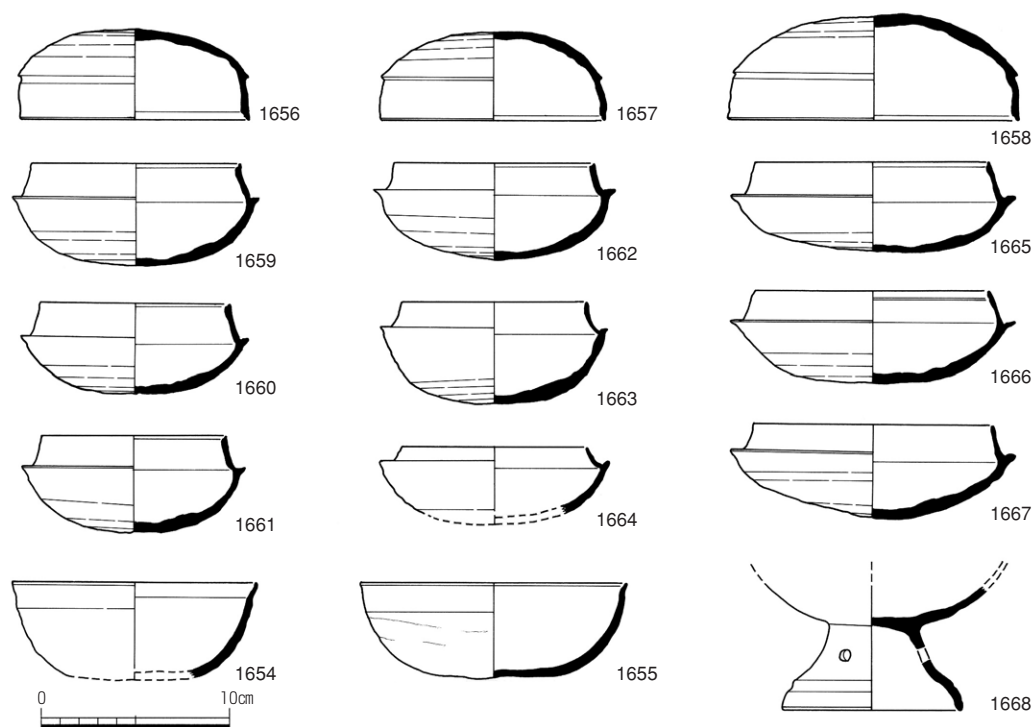


Fig. 88 方形土坑SK1085出土土器 1:4

後者の1663が灰色、1664が暗灰色を呈する。大型品には、底部が平坦で口縁端部が内傾し段が凹線状に形骸化したもの(1665・1666)や、尖り気味の底部で、口縁部が短めで内傾し、端部を丸く収めたもの(1667)があり、1667の底部内面には同心円文当て具痕跡が残る。色調は1665と1667が淡灰色、1666は淡青灰色を呈する。杯H・同蓋のうち、短く内傾する口縁部の小片1664を除く小型品は陶邑窯編年のTK23型式～TK47型式、大型品はMT15型式～TK10型式の特徴をもつ。高杯(1668)は下半で外反したのち脚裾部が内彎する台部片で、脚端部は丸く収め脚柱部に3個の円孔を穿つ。杯部外面下半をロクロケズリし、外面上半と内面はロクロナデ調整。暗青灰色を呈し、脚部径9.4cm。

I 墨書土器・ヘラ書土器・針書土器

墨書土器 本遺跡からは墨書土器108点、ヘラ書・針書土器17点が出土した。出土エリアごとに見た場合、遺跡を南北に分ける3条の堀(SA1150～1152)の北側、第84次調査区からの出土資料が88点(70.4%)と圧倒的に多い。出土遺構別では、SD1130が21点と最も多く、次いでSK1126:14点、南北溝SD1110:9点、SD1103:4点、SK1153:3点、SK1128:3点、SG1100:4点、その他遺構2点と続く。遺構外からの出土では炭層が多く12点ある。器種別にみると、土師器杯皿類39点、杯皿類蓋5点、鉢1点、鍋甕類38点(甕9点、鍋20点、不明9点)、須恵器杯皿類10点、杯皿類蓋7点、鉢1点、壺5点、甕2点で、土師器杯皿類と土師器鍋・甕類の占める割合が、双方ともに30.4%と著しく高い。墨書の記載内容は、「寺」を含むものが9点と多く、寺院へ物品の施入を示す「入」を含む資料も12点ある。また「弁通」「道宣師」「延徳」など僧侶と推定される人名を記す資料や、寺院との関係を想起させる「蓮華文」や「卍」を記す資料もある。

る。これら寺院との関係を示す資料の総数は24点であり、文字が判読できた資料の20.9%を占める。これ以外では、人名・地名・食料の名称を示す資料があるが、大多数は一字のみで構成される、あるいは遺存状況の悪い資料であり、その性格は不明である。以下、出土点数が多かった遺構・遺物包含層を中心に報告し、墨痕および筆慣らしの類は原則的に報告しない。

寺との関係
を示す資料

SD1130出土墨書土器 (Fig. 89~91-1~19, PL. 259・260) 南北大溝SD1130は北地区の谷地形の埋め立てと造成に関わる遺構で、またその堆積土は、自然に堆積したものは上部の一部で、比較的短期間に埋め立てられたものが大半と考えられる。よってSD1130から出土した遺物は、整地土出土資料として扱うべきかもしれないが、本報告ではSD1130を遺構として扱っているため、本節でも遺構出土資料として扱う。

1は土師器杯Bの内面に不整形な7個の「○」を、底部高台内部に「1+8」の「⊖」を、口縁部外部にはやや不整な連弧状文様を墨書する。「⊖」は種子、連弧文様は蓮弁と考えると、外面の文様は蓮華文を表現したものと推定される。2は土師器皿Hの内外面の広範囲に、墨痕・筆慣らしの類が多数認められる。墨痕と筆慣らしが錯綜し、判別が困難であるが、内面に「見」が複数、外面に「枝」2カ所、「道」3カ所、「見」1カ所が判読できた。9・10は土師器皿底部外面にそれぞれ「散阿」「秦」と墨書する。双方ともにそれ以外の筆の走りが認められるが判別不能。3~5は土師器杯または皿の破片で、3・4の内面にはそれぞれ「須」「観」と、5の外面には「諸事」と書く。6は、土師器杯蓋または皿蓋のつまみ部上面に螺旋暗文に似た蓮華模様が描かれ、螺旋暗文として描かれるものとは図像が異なる。7は口縁部が外方へのびる特徴をもつ蓋の内面に、「觚」と書く。「觚」の訓読みは「サカツキ」であり、本資料が杯としても利用された可能性を示唆する。8は、土師器鍋または甕の小破片で、外面に「入」と書く。11は土師器鉢Bで、口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面上半にはミガキ調整、下半~底部には横方向のケズリを施す。体部外面に山岳文と推定される絵を描く。体部中央~下部にかけて山または岩と推定される表現がなされ、口縁部に近い位置には5~6個の「、」からなる円弧状の「樹木」文様が複数配される。12~14には体部外面に「寺」と墨書する土師器鍋を示した。12と13は把手付きの大型鍋で、口縁部外面はヨコナデ、体部外面には縦位あるいは斜位のハケ目が認められる。内面の調整は口縁部は双方ともに横位のハケ調整、体部は12は板状工具による横および縦ナデ、13は横または斜位のハケ調整である。13は遺存状態が悪いが、正位の「寺」の下部が残ると判断した。14はやや小型の把手付鍋で、外面の調整は12・13と同様であり、内部は口縁~体部中央付近まで横方向のハケ目、体部下半はナデ調整する。墨書の「寺」を横位に配するのが特徴的である。15は甕の肩部付近に「寺」と墨書した資料である。内外面ともに縦方向のハケ目が見られ、内面はナデにより一部擦り消す。16は土師器鍋の体部外面に縦位で「少子部殿」と墨書する。内外面ともにハケ目は明瞭ではなく、茶褐色の胎土で金雲母を含む。17・19は土師器鍋の肩部付近に「入」と墨書した資料である。前者は横位に、後者は正位に書かれる。両者ともに外面肩部から体部にかけて縦方向または斜め方向のハケ目が認められ、後者の内面は横方向にハケ目調整する。18は内面に、「□無覧／無相／有□□／哭」と墨書した須恵器杯B蓋である。比較的高い宝珠形のつまみもち、かえりは短い。

蓮華文カ
墨痕・
筆慣らし

「觚」

山岳文カ

「寺」

「少子部殿」

「入」

SD1110出土墨書土器 (Fig. 91-20~28, PL. 260・261) 20は土師器杯A口縁部外面に横位で焼成後に「大奉」と針書きし、底部外面には「水取」と墨書する。口縁部外面にはヨコナデ調整を

「大奉」の針書きと「水取」の墨書

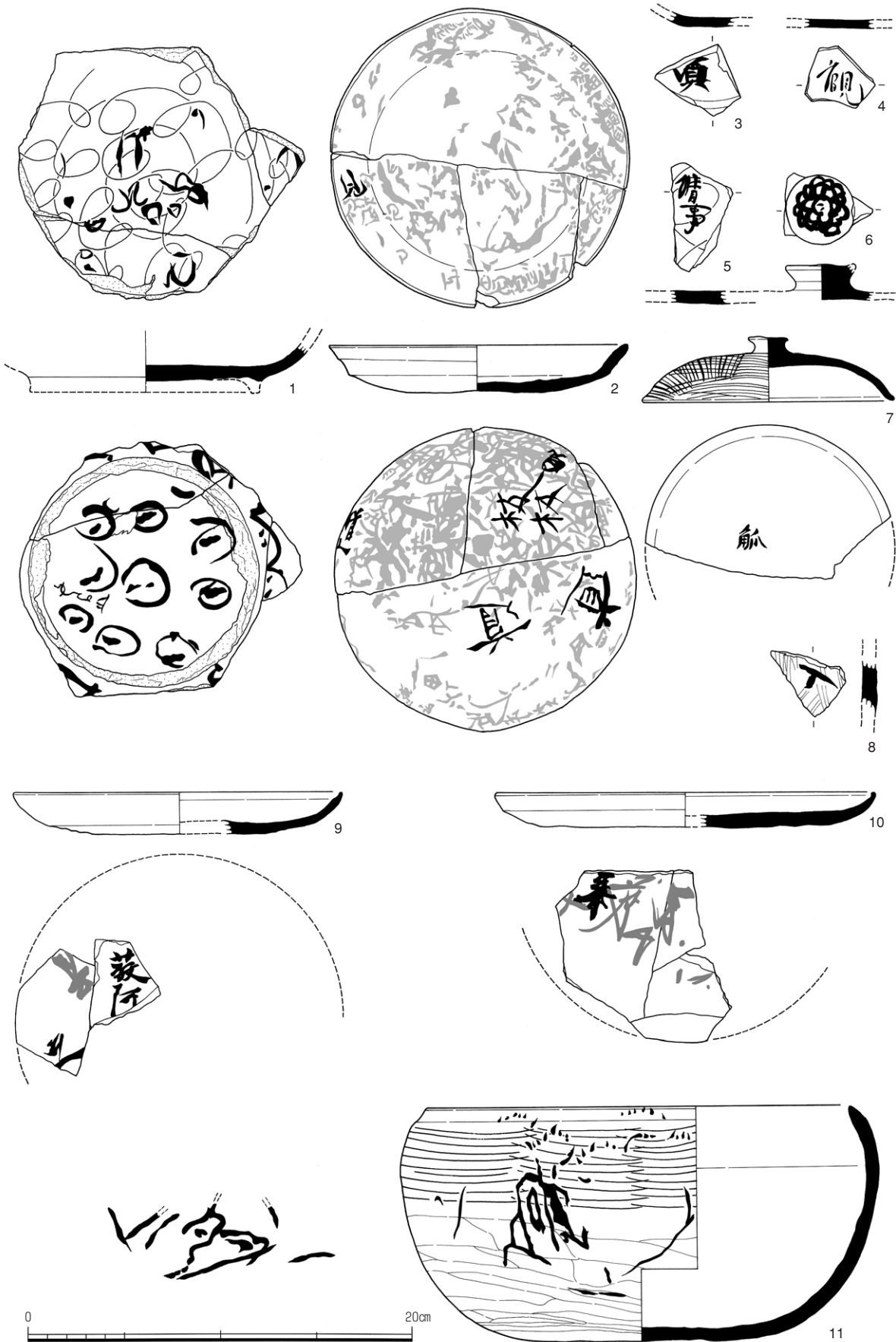


Fig. 89 南北大溝SD1130出土墨書土器 (1) 1:3

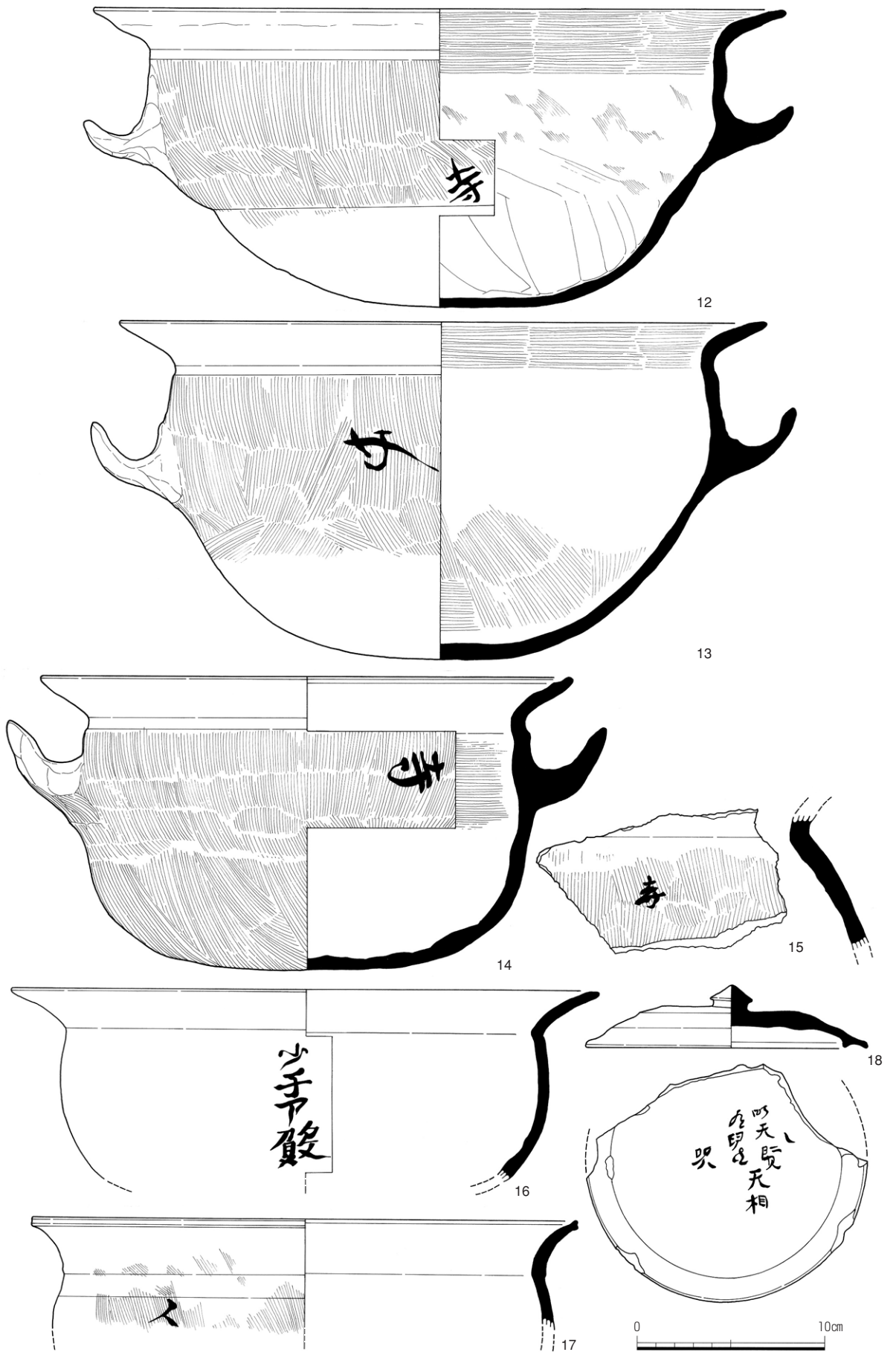


Fig. 90 南北大溝SD1130出土墨書土器 (2) 1:3

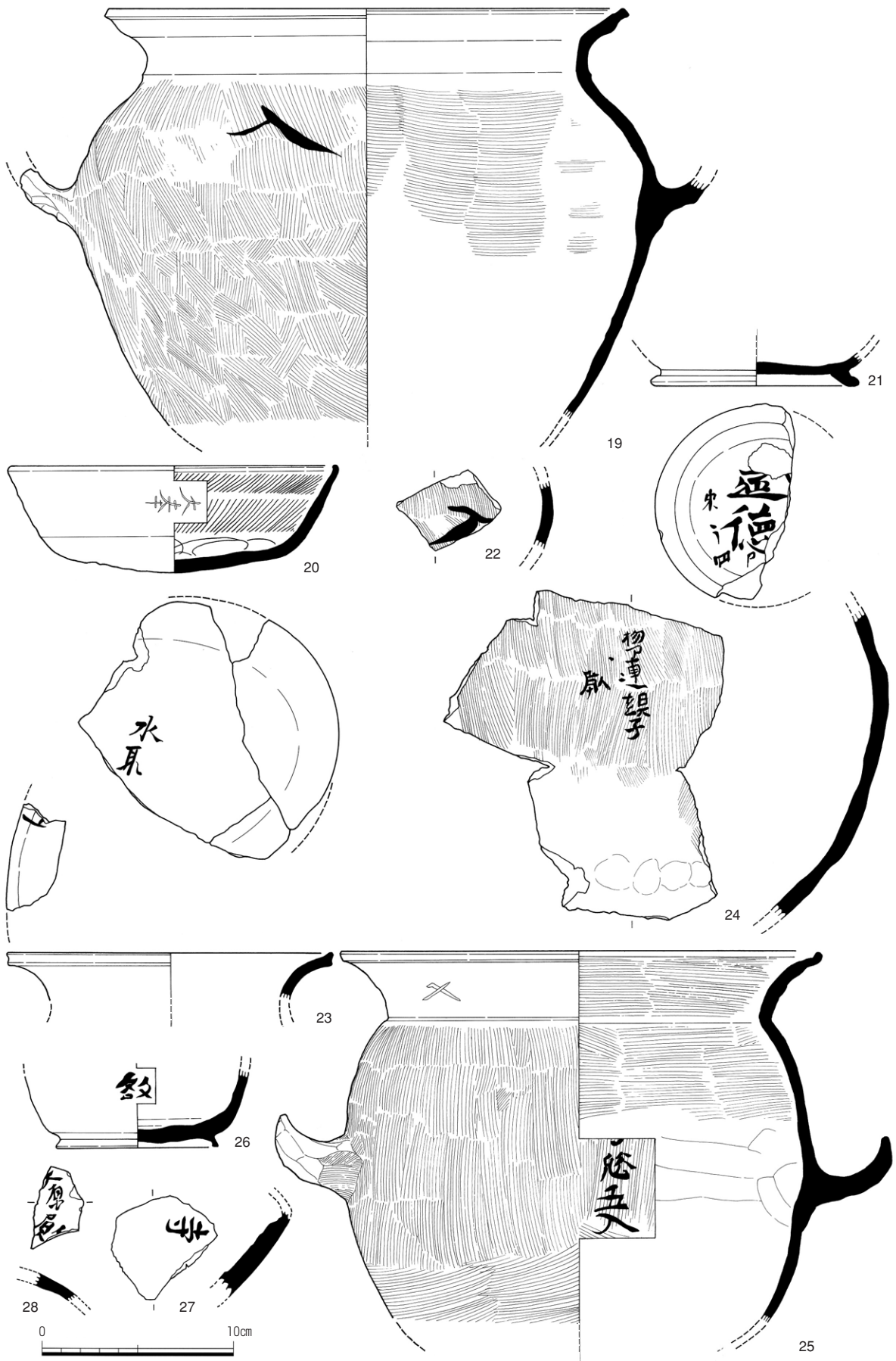


Fig. 91 南北大溝SD1130 (3)・南北溝SD1110出土墨書土器 1:3

施し、内面には2段の放射暗文が、底部内面は螺旋暗文が認められる。径高指数33.3。21は土師器杯B底部外面に「延徳」と大書し、脇に「東／□ [四カ]」と小書された資料である。「延徳」は僧侶の名であろう。22・23は土師器甕および鍋に「入」と墨書した資料。墨書の位置は、前者が体部外面、後者が口縁部内面である。24は土師器甕体部外面に縦位で「物部連縣子／猷」と墨書した資料である。体部外面には縦方向にハケ目調整をおこない、下部はナデ消す。底部に近い位置の内外面にはオサエ調整が認められる。茶褐色土の胎土をもつ。25は土師器甕BI体部外面に縦位で「□瓮五入」と墨書した資料であり、口縁部外面には焼成前のヘラ記号「×」がある。「瓮」はものを入れる器の意。口縁部外面から体部にかけてハケ目を施し、口縁部については後にナデ消す。内面については、口縁部から体部にかけてハケ目調整し、体部下半はヘラ状の工具によりナデ消す。26は須恵器杯B口縁部外面に縦位で「敬」と墨書した資料である。28は須恵器蓋で、外面に「大原殿」と墨書したもの。27は須恵器平瓶の体部外面に「寺」と書く。

SK1126出土墨書土器 (Fig. 92-29~41, PL. 261) 36・37はSK1126上層、それ以外は下層からの出土。29は土師器杯Aの底部内面に「□弁」と書く。口縁内面には2段放射暗文を、底部内面には螺旋暗文を施す。径高指数27.5。30は土師器杯の口縁部外面に横位で「□ [己カ] □ [止カ]」と墨書した資料である。口縁内部には2段放射暗文と連弧暗文を施す。31~34には土師器杯または皿に墨書した資料を示した。31は底部内面に「入」、32は口縁部内面に「前□」、34は底部外面に「丈」、33は底部外面に「□□□ / 天大 / 尔」と書く。35は土師器杯または皿の蓋の内面に「器記」と書いた資料である。36~40には土師器鍋あるいは甕の体部外面に墨書した資料を示す。36は縦位で「西」、37は縦位で「客人」、39は倒位で「入」、40は斜位で「□ [方カ]」と書く。38は縦位で「□善」と墨書するが、「善」の上の文字は、偏が「木」あるいは「禾」の漢字である可能性が高い。41は墨痕がきわめて薄い、須恵器甕の肩部に「阿羅女」と墨書したものと判断した。これは質の劣る海藻の「アラメ」を示すものと考えられる。「アラメ」は「滑海藻」あるいは「粗海藻」と書くのが一般的であり、万葉仮名で示された本資料は珍しい例である。

SK1153出土墨書土器 (Fig. 92-42~44, PL. 261) いずれもSK1153木屑層からの出土。42は口縁部外面に、横位に「道道」と墨書した土師器皿Aである。それ以外にも底部付近に墨が付着する。口縁部内外面ともにヨコナデ、底部外面にはケズリ調整を施す。43は、土師器鍋の体部外面に横位で「加良屋古」と墨書した資料である。口縁内部から端部にかけて強くヨコナデする。口縁部・体部外面に縦方向・斜方向のハケ調整が認められるが、口縁部についてはナデ消す。44は須恵器杯B蓋の転用硯である。頂部外面に「寺」と墨書される。

SK1128出土墨書土器 (Fig. 92-45~47, PL. 261) いずれもSK1128の下層から最下層にかけての出土。45は体部外面に縦位で「仲」と墨書した土師器鍋である。体部内面をケズリ調整したのちに口縁部内面も含めてナデ調整をおこなう。外面は口縁部から体部にかけて縦方向にハケ目を施し、そののちに口縁部は横方向の、体部は縦方向のナデ調整をおこなう。46は口縁部外面に横位で「鉢入」と墨書した土師器鍋である。体部内面にはオサエ調整、口縁部~体部外面にはヘラケズリをおこない、そののちに全体にナデ調整を施す。47は土師器鍋あるいは甕の口縁部小破片。外面に横位で「□人」と墨書する。

SD1103出土墨書土器 (Fig. 93・94-48~51, PL. 261・262) 50は大型の土師器皿Bであり、底部

「延徳」

「物部連縣子
／猷」

「□瓮五入」

「大原殿」

「器記」

「客人」

「阿羅女」

「加良屋古」

「寺」

「仲」

「鉢入」

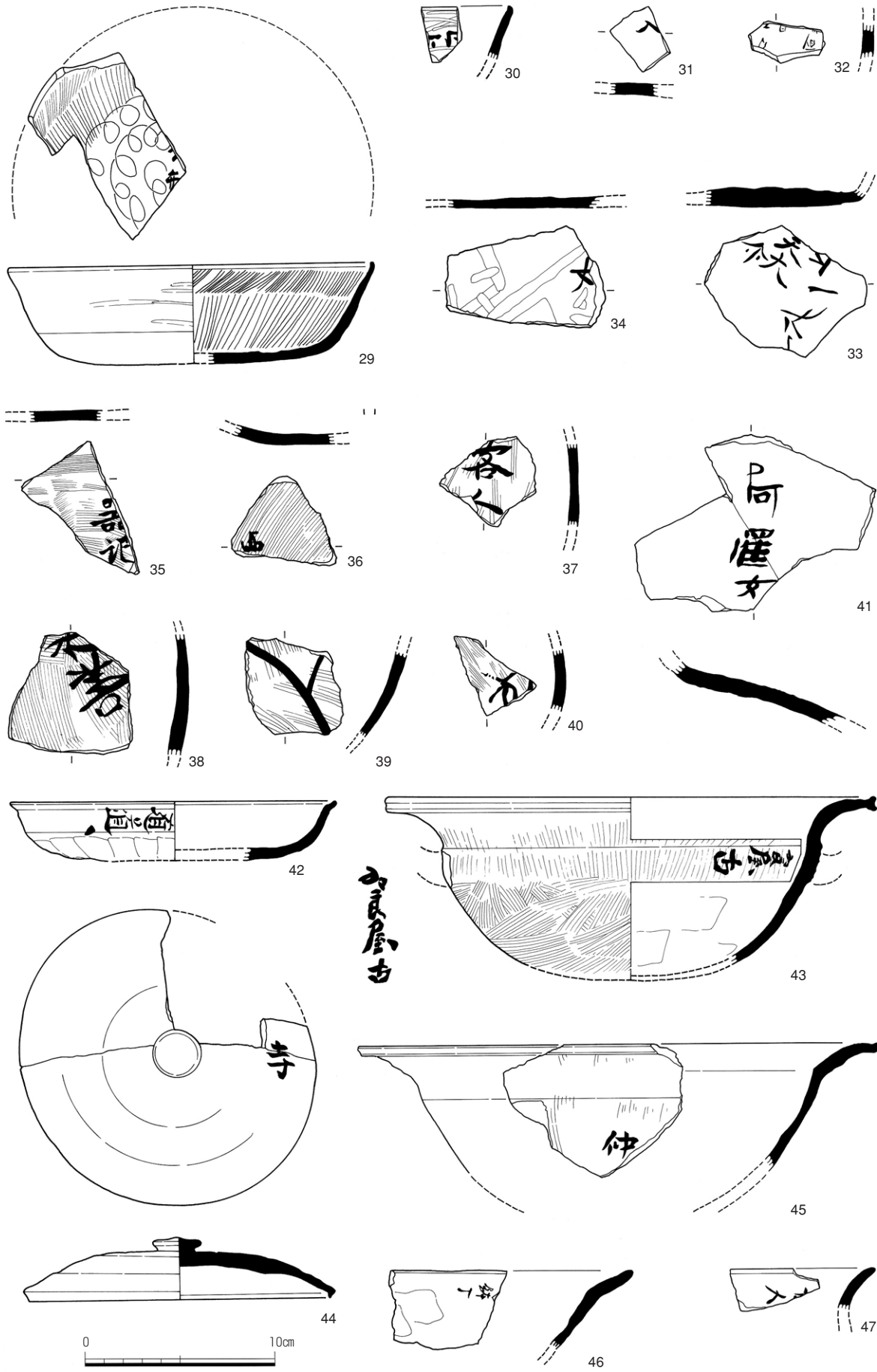


Fig. 92 土坑SK1126・SK1153・SK1128出土墨書土器 1:3

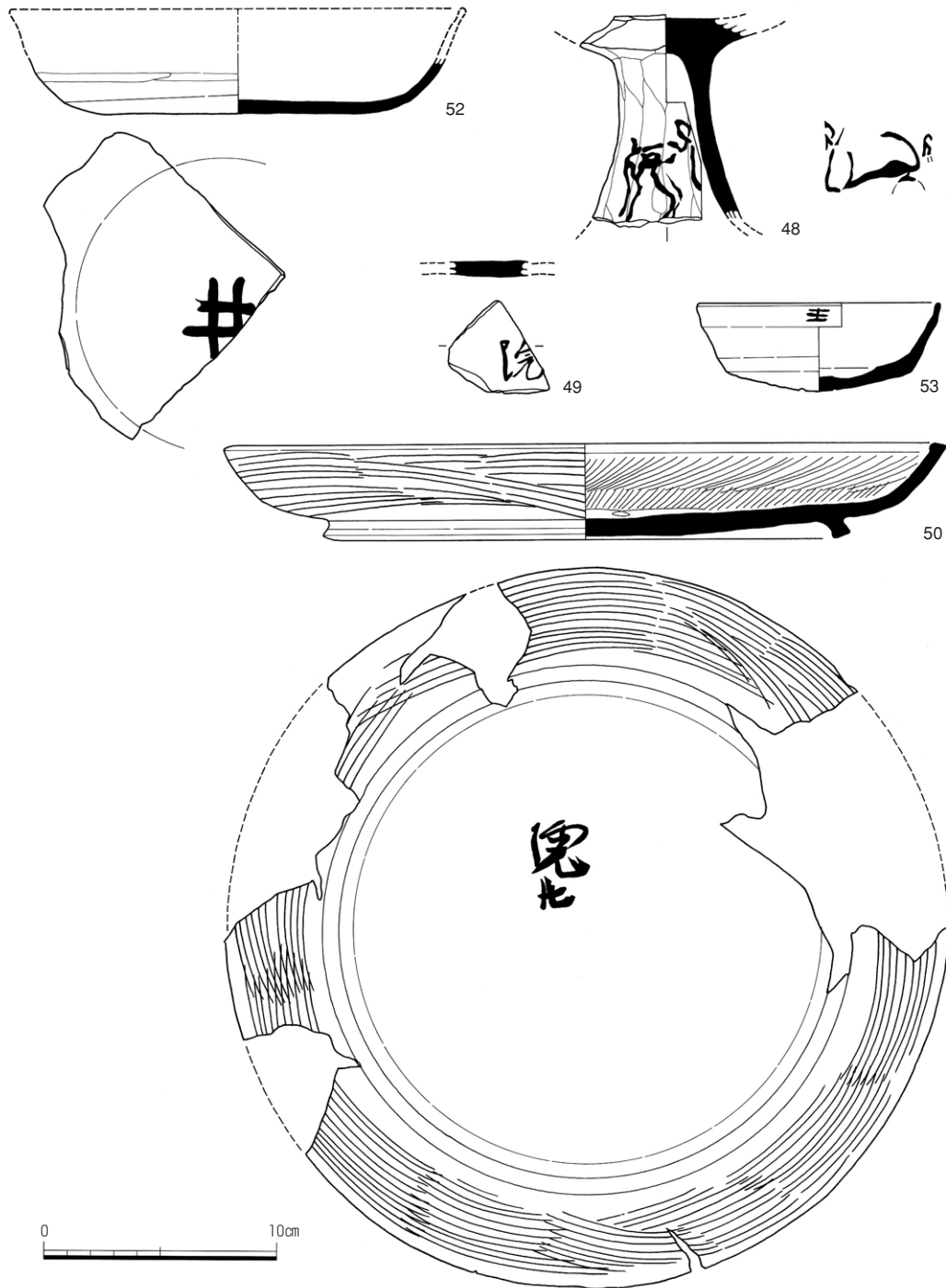


Fig. 93 南北溝SD1103およびその他の遺構出土墨書土器 (1) 1:3

外面ほぼ中央に「院□」と墨書する。内面には二段放射暗文と螺旋暗文を施し、外面には太い「院 □」ミガキが認められる。49は土師器杯または皿の底部外面に「院」と墨書した資料。48は土師器動物の絵カ高杯の脚部に、頭部・胴部・前肢・後肢からなる動物状の模様が認められる。51は土師器鍋体「丸 部」部外面に横位で「丸部」と墨書した資料。口縁部内外面にはナデ調整、体部外面には縦方向のハケ目が認められる。

その他の遺構出土墨書土器 (Fig.93・94-52~55, PL.261・262) 52は土師器杯A底部外面に「井」と墨書する。口縁外面はミガキ調整で、調整底部外面はヘラケズリののちにナデ調整する。

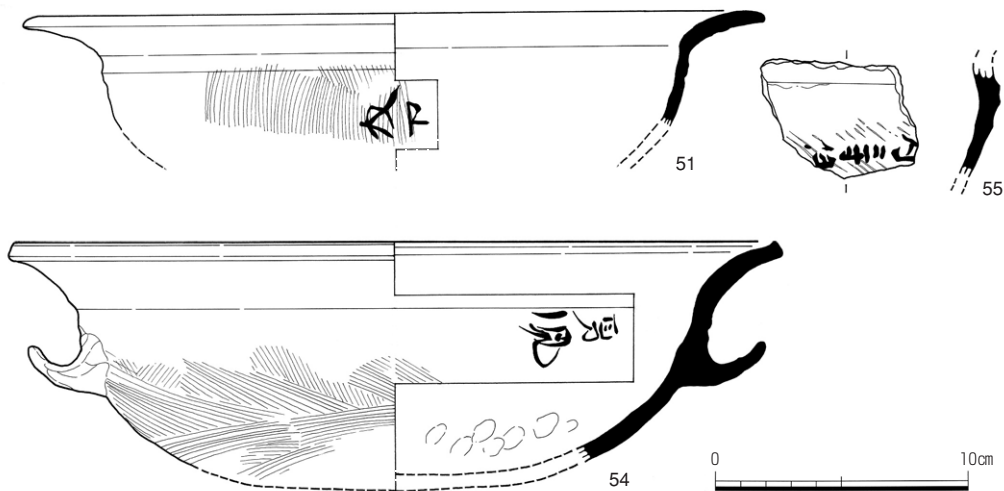


Fig. 94 南北溝SD1103およびその他の遺構出土墨書土器 (2) 1:3

器体内面は風化・剥落が激しく、暗文の有無など調整は不明。石組方形池からの排水路SD1101出土資料。53は須恵器杯Gの口縁部外面に「主」と漆書した資料である。口縁部内外面ともにロクロナデ、底部はヘラ切り未調整である。NM36で検出した土坑状の落ち込みからの出土。
 「自刀児」 54は土師器鍋体部外面に横位で「自刀児」と墨書した資料。「刀自」とは女性の意である。口縁部内外面～体部内面はナデ調整、体部外面にはハケ目を施す。また底部内面にはオサエも認められる。東西堀SA1150出土。55も土師器鍋体部外面に横位で「□ [内カ] 三寸径」と墨書する。体部外面には斜め方向のハケ調整ののちにナデを施す。ND29で検出したやや不整な平面形状をもつ土坑からの出土。

「物女」 炭層出土墨書土器 (Fig. 95・96-56~65, PL. 262・263) 56・57は土師器杯A。56は底部外面に「物女」と記す。口縁部外面には粗いミガキ調整、底部には不調整で、口縁部内面には連弧暗文と1段放射暗文が認められる。HN30炭層1 (水溜SX1220) 出土。57も底部外面に「壺」と墨書する。口縁部内面には2段の放射暗文を施す。HL30炭層2B (SX1220) 出土。56・57ともに平城宮土器Ⅱに属する。58は四ヶ所に把手の付く大型土師器鍋に、縦位で「石河宮」、逆位で「完」と墨書した資料。口縁は端部に面をもち、内外面ともにヨコナデ調整する。体部外面には縦方向のハケ目を施し、内面は無文当て具痕をナデ消す。これらは、飛鳥Ⅳ～Ⅴの大和産土師器鍋の特徴である。WM23炭層 (SX1222) 出土。61は土師器鍋の体部外面に「岡」と墨書する。体部外面には縦方向の、内面には斜方向のハケ目が認められ、前者の上部はナデ消される。口縁部はヨコナデ調整。HN26炭層3B (SX1220) 出土。59・60は土師器鍋または甕の体部外面に縦位で墨書したもの。59は「養戸」、60は「人」と書く。「養戸」とは「工房維持ないしは工人たちの資養のための戸」である可能性が高い。59はWN23炭層 (SX1222)、60はHN31炭層1 (SX1220) 出土。62は須恵器杯A底部外面に「酢」と墨書する。口縁部内外面ともにロクロナデ、底部はヘラ切りのちナデ調整。径高指数28.1。WN23炭層 (SX1222) 出土。63・64は須恵器杯B。63は底部外面に「入寺」と墨書する。径高指数22.5。HH23炭層3 (SX1224) 出土。64も底部外面に「□女」と書く。口縁部は欠失するが、高台が低くつぶれることから飛鳥Ⅴに比定される。HM29炭層2A (SX1220) 出土。65は須恵器鉢口縁部外面に横位で「道宣師鉢」と墨書した資料である。「道宣」は僧侶の名であると考えられる。口縁部は内外面ともにロクロナデ、

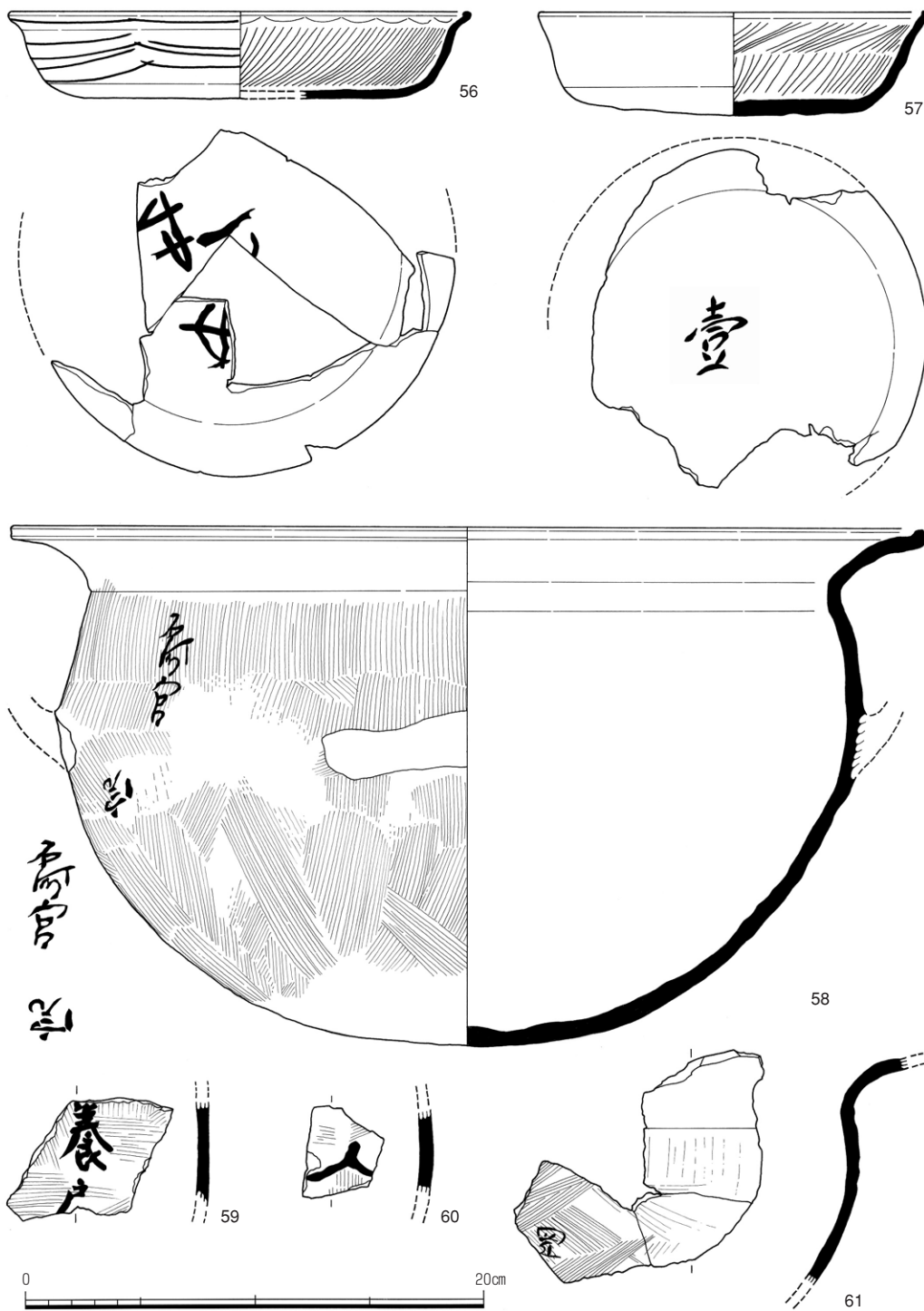


Fig. 95 炭層出土墨書土器(1) 1:3

体部外面から底部外面はロクロケズリを施す。HQ28炭層1 (SX1220) 出土。

包含層ほか出土墨書土器 (Fig. 97・98-66~92、PL. 263・264) 66は土師器杯A底部外面に「×」と墨書する。底部内面はナデ調整で、外面は不調整。石組方形池SG1100灰緑砂質土出土。67・69は土師器杯C。67は底部外面に「○」と墨書する資料。底部内面から口縁部外面にかけてはヨコナデ調整、底部外面は不調整。径高指数22.4。NJ32緑灰砂土出土。69は土師器杯で、口縁部外面に横位で「道」と墨書する。口縁部内外面ともにナデ調整。暗文は認められない。「道」

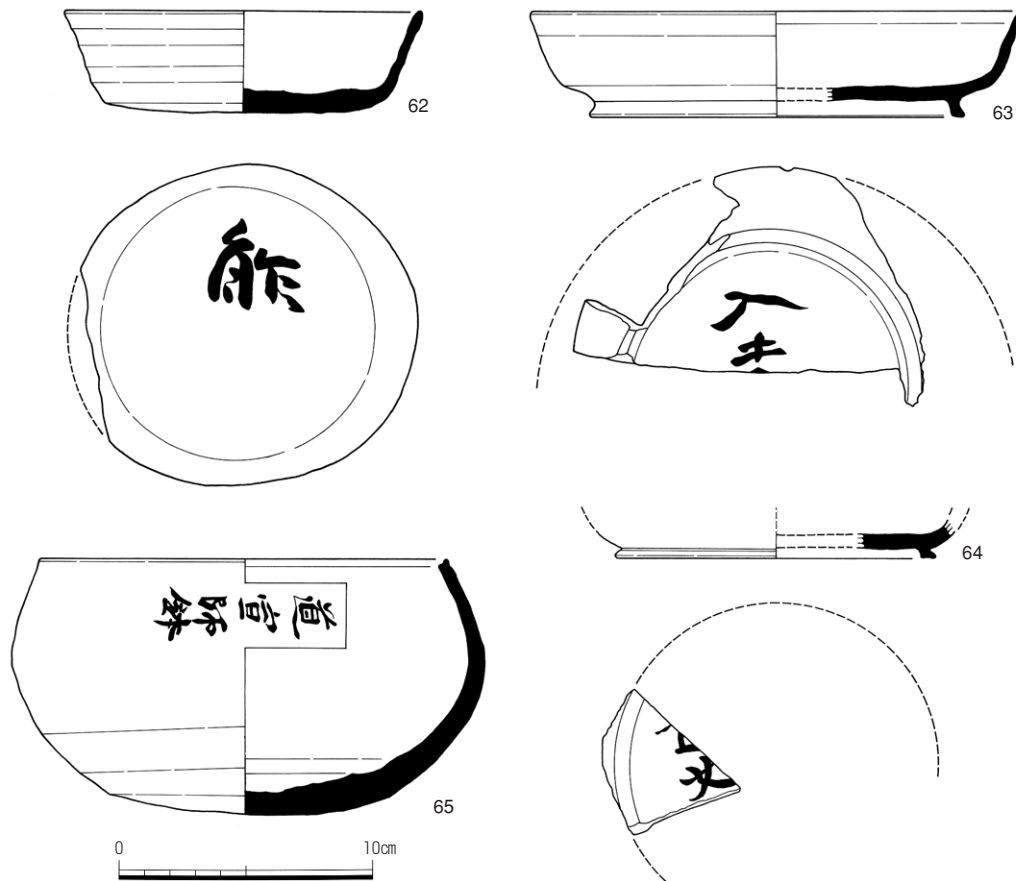


Fig. 96 炭層出土墨書土器(2) 1:3

「田」 NI35明灰黄土出土。68は土師器杯または皿底部外面に「田」と墨書した資料。MF27の平安時代以降の自然流路の堆積土出土。70・72は土師器杯または皿に墨書したもの。70は底部内面に「土」、72は底部外面に蕨手状の模様を書く。70は「寺」の上部、72は「寺」または「為」の可能性もある。出土地点は、70：HM25炭粘土、72：NH34明灰黄土。71は、土師器杯蓋の外面に「倍／仙□」と墨書する。NI34灰緑炭土出土。73は土師器皿蓋つまみ部に「為」と墨書した資料である。つまみ部の形状は扁平なボタン形で、螺旋暗文が施される。頂部外面には比較的細く密なミガキ調整を、内面にはヨコナデを施す。NH34明灰黄土出土。74は土師器皿A底部外面に「米」と墨書した資料である。底部外面にはケズリ調整、口縁部内外面にはヨコナデ調整を施す。HG24茶土出土。75は須恵器杯A底部外面に「□[×カ]」と墨書する。底部外面はヘラ切りのままで、口縁部内外面はロクロナデする。径高指数は32.2。JP16茶土出土。76・77は須恵器杯底部内面にそれぞれ「□院」、「□迎□」と墨書した資料である。76はNC33遺物包含層、77はNG34明灰黄土からの出土。78は須恵器杯または皿底部外面に「□／田□」と墨書する。NI35灰緑炭土出土。79は須恵器杯蓋頂部外面に「□[間カ]／□」と墨書する。ND32暗褐土出土。80は須恵器杯B蓋内面に墨書で「道／前／且」と書く資料。内面に墨痕が残る転用硯で、書かれた文字も習書の類と考えられる。80はNK36黄灰砂土、81はNK35黄褐砂土からの出土。81は須恵器杯B蓋内面に「□評」と墨書した資料である。82・83・86には、土師器鍋に墨書した資料を示した。82は体部上端に「×」と書く。口縁部内面から体部にかけては、まず縦方向のハケ目調整を施し、後にナデ消す。石組方形池SG1100を覆う遺物包含層(炭混茶褐

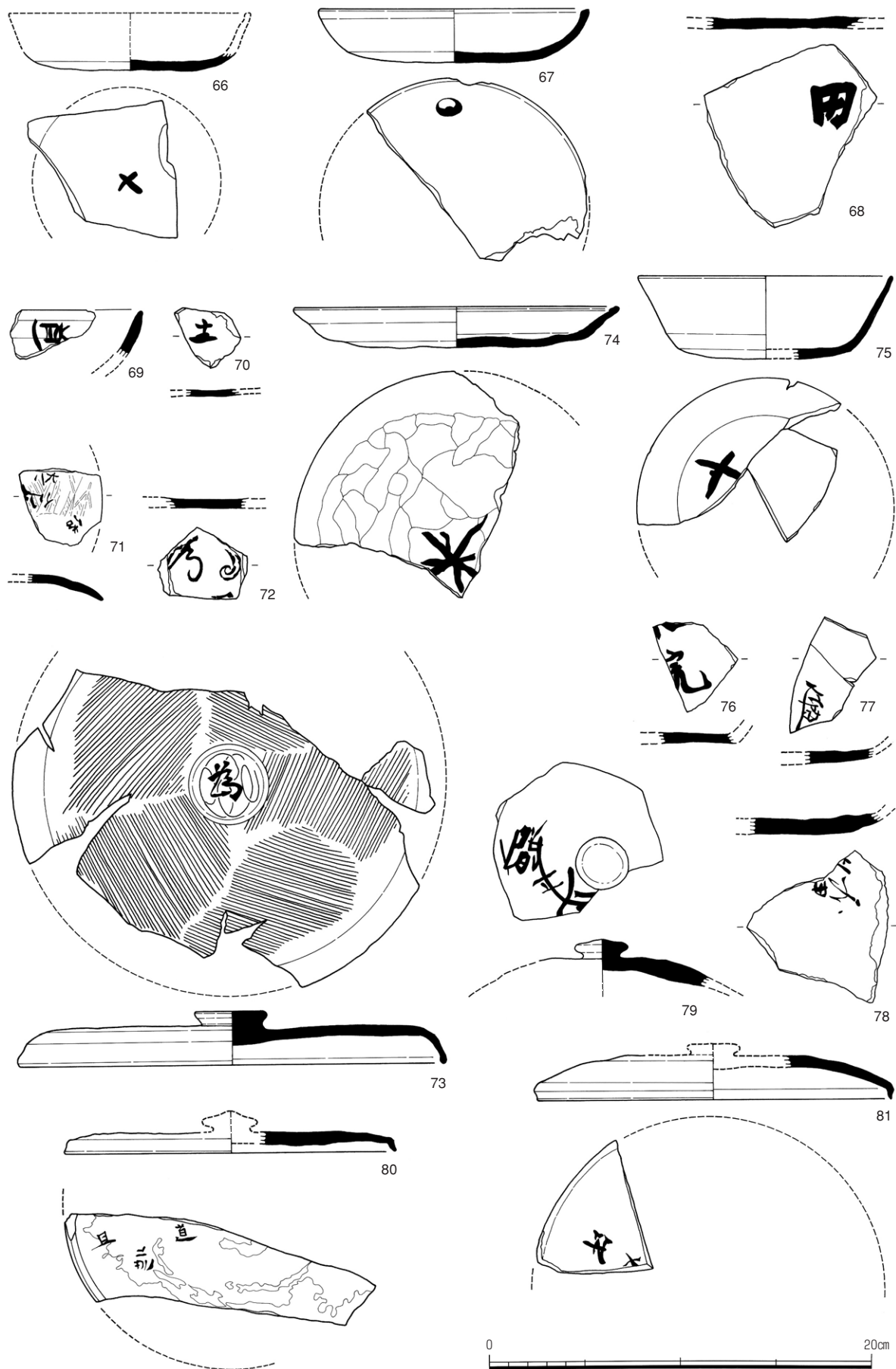


Fig. 97 包含層ほか出土墨書土器 (1) 1:3

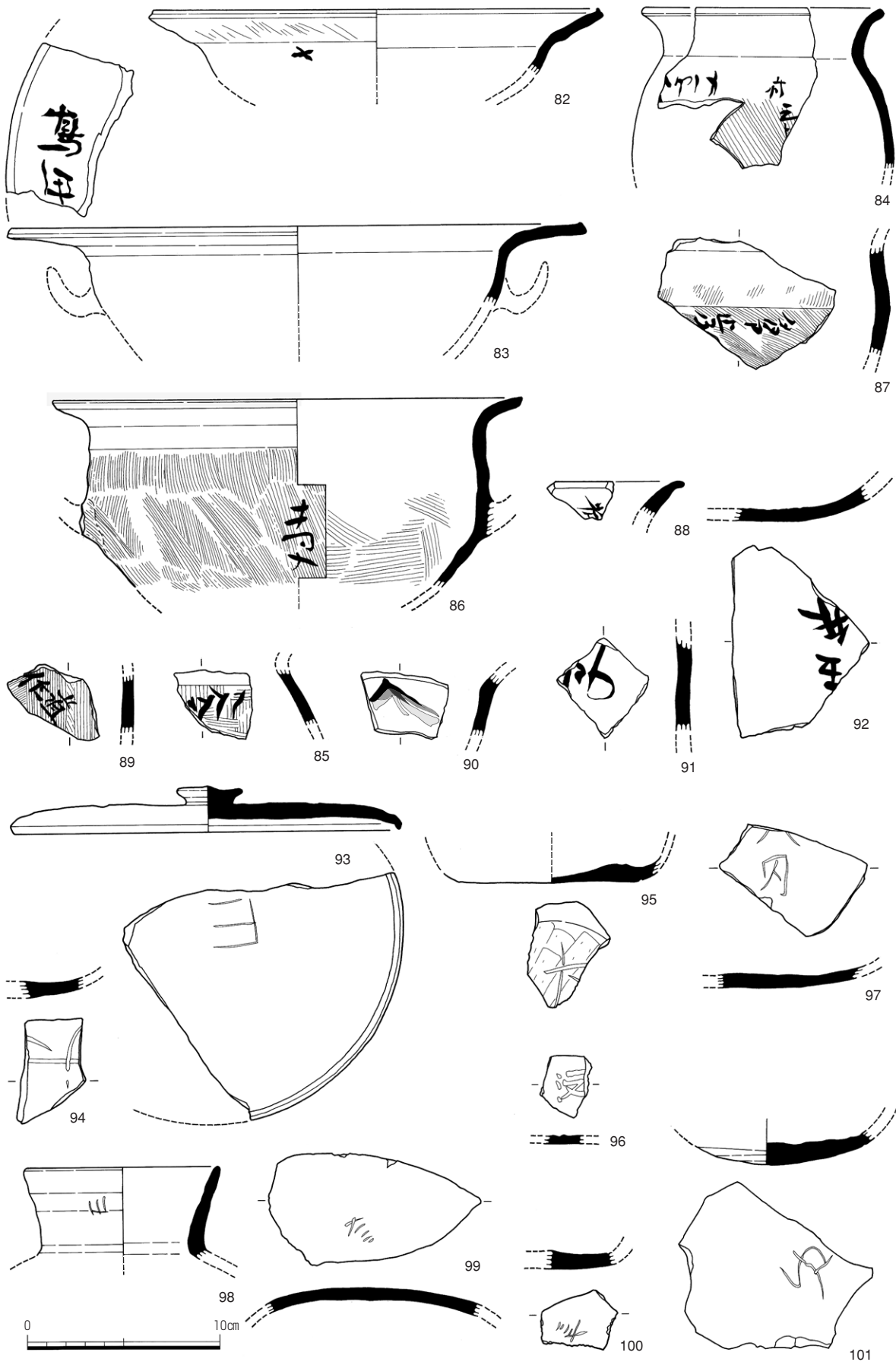


Fig. 98 包含層ほか出土墨書土器 (2)・ヘラ書土器 1:3

土)からの出土。83は口縁部内面に横位で「寫田」と墨書する。口縁部には内外面ともに、横・斜方向の丁寧なナデ調整を施す。SG1100の埋立土(緑灰土)からの出土。86は体部外面に縦位で「寺入」と墨書する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面には縦方向のハケ目調整を施す。体部内面には斜め方向・横方向のハケ目調整をおこない、後にナデ消す。HB22炭混灰土出土。84・87には土師器甕の体部外面に墨書した資料を示した。84は比較的小型の甕で、縦位で「□之□」と墨書する。それ以外にも筆の走りが認められるが、状態が悪く判読不能。口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面には斜め方向のハケ目調整を施す。石組方形池SG1100の埋立土(緑灰土)からの出土。87は横位で「多部止乃」と書く。体部内面はケズリ後にナデ調整、外面にはハケ目調整のちにヨコナデを施す。NJ32灰緑砂土出土。88は土師器鍋または甕の口縁部内面に横位で「物」と墨書する。内外面ともに横方向のナデ。NO34焼土層出土。85・89～91は土師器甕または鍋の体部外面に墨書した資料である。89は斜位で「道／作」、85は横位で「入入入入」、90は正位で「入」、91は斜位で「寺」と墨書する。このうち特筆すべきは90で、「入」を重ね書きする。うち一回は朱書であり、朱の種類はベンガラ(酸化鉄)である。出土地点は、89:NI34灰緑炭土、85:NO33暗灰砂質土、90:NH34灰緑砂土、91:NJ35炭混黄灰砂土である。92は須恵器甕底部外面に「五升」と墨書する。内面は同心円状叩き目ののちにナデ調整、外面は平行叩きののちにカキ目調整を施す。NK35出土。

ヘラ書土器 (Fig. 98-93~101, PL. 264) 本項ではヘラ書文字を中心に報告し、明らかに記号と判断される資料は、遺構・包含層出土土器の項目で記載する。93・96・97は焼成後、それ以外は焼成前のものである。95は土師器杯A底部外面に「大」と書く。底部外面はヘラケズリする。HB23灰褐土出土。97は土師器杯C底部内面に「□[大カ]内」と書く。FK62暗褐土出土。96は土師器杯底部内面にヘラ書きした文字の一部と考えられるが、釈読不能。NK34灰褐土出土。93は須恵器杯B蓋の頂部内面に「ヨ」(「山」カ)とヘラ書きする。内外面全体にロクロナデを施す。飛鳥寺1991-1次炭層上面からの出土。94は須恵器杯底部外面に「大」と書く。MF27平安時代以降の自然流路の堆積土からの出土。98は須恵器壺口縁部外面に「山」と書いた資料。内外面ともにロクロナデ調整。1991-1次調査粗炭層出土。101は須恵器壺底部外面に「皮」とヘラ書きする。外面にはヘラケズリ調整を施し、内面には灰が厚く降着する。1991-1次調査炭層出土。99・100には須恵器壺底部外面に「×□」とヘラ書きする資料を示したが、記号の可能性もある。99は87次調査炭層1、100はJO38明褐土の出土である。

針書土器 (Fig. 99-102~108, PL. 264) すべて土師器で焼成後の針書きである。102は杯B底部外面に「弁通□[何か] / □□」と針書きされる。「弁通」は僧名である。「日本書紀」(持統7年3月16日条、同10年11月10日条)、「続日本紀」(和銅5年9月15日条)などに散見する。弁通は大官大寺に属する僧侶であり、持統7年には遣新羅学問僧として純・綿・布などを賜っている。持統10年には食封40戸を賜っており、この頃までに帰国したことがわかる。和銅5年に少僧都となった。NC33溝A出土。103は杯または皿底部外面に「卍」と針書きする。内面はナデ調整ののちに暗文を、外面はヘラケズリを施す。NJ37茶褐土出土。106は杯または皿底部外面に、105は同内面に「大」と針書きした資料である。出土地点は、106が南北大溝SD1130、105が土坑SK1126下層である。104は皿A底部外面に「母波司阿」と針書きしたもの。字義は不明。内面全体と口縁部外面はナデ調整、底部外面は未調整のままである。石組方形池SG1100出土。

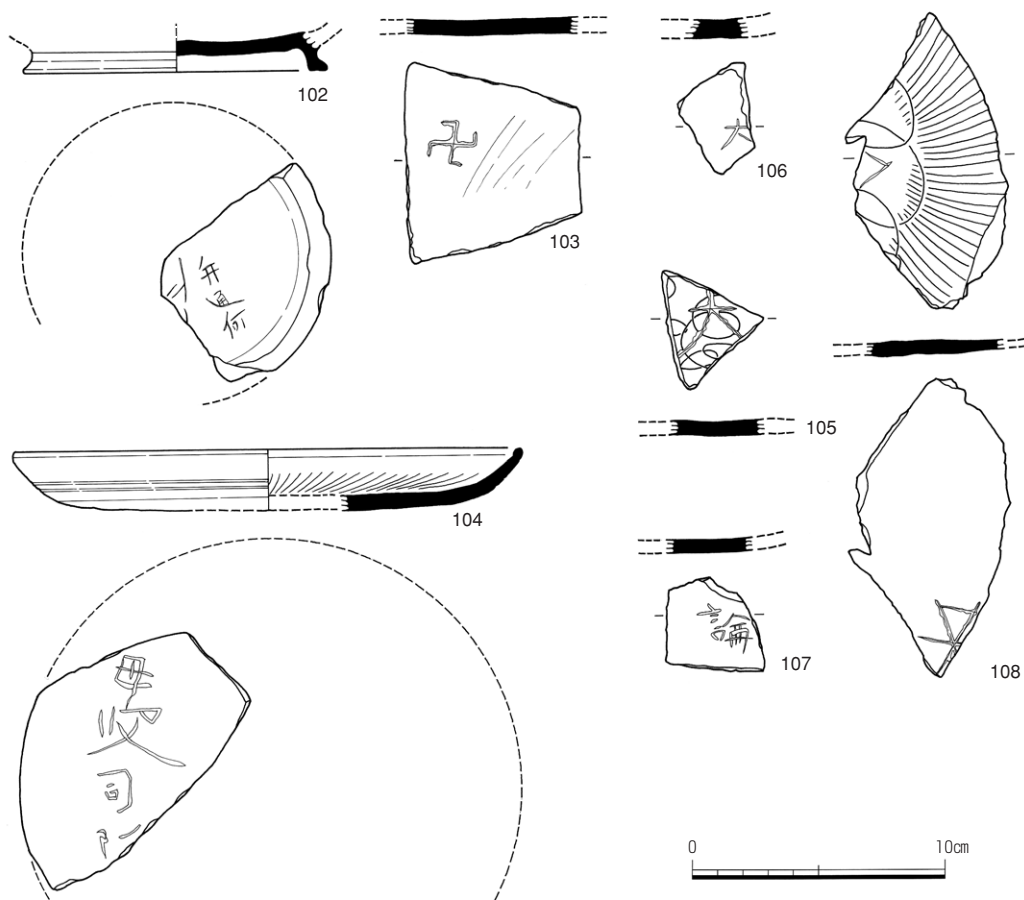


Fig. 99 針書土器 1:3

「論」 107は、皿または杯の底部外面に「論」と針書きした資料。南北大溝SD1130青灰土出土。108は、皿の底部外面は割れているので判読不能。内面には「入」と針書きする。底部内面には螺旋暗文と放射暗文が観察される。NO34緑灰土出土。

J 陶 硯

円面硯 調査区全域から合計60点の円面硯が出土している。その内訳は蹄脚円面硯10点（うち白磁製1点）、獣脚円面硯1点、圈足円面硯25点、脚形不明の円面硯23点、中空円面硯1点であり、これ
転用硯 以外に転用硯が103点出土している。出土数の多い遺構としては土坑SK1126（15点）、南北大溝SD1130（7点）、土坑SK1153（6点）があるが、多くは包含層からの出土資料である。蹄脚硯・圈足硯の分布状況をみると、遺跡を南と北とに区画する3条の塀SA1150～1152の北側出土の資料が43点（71.7%）、南側出土のものが17点（28.3%）である。また、転用硯の分布については、塀の北側65点（63.1%）、南側38点（36.9%）で、出土地点がやや北側に偏るという、両者の分布状況はよく近似している。一方、接合関係をみると、3条の塀SA1150～1152の北側のエリア内でのみ接合する資料（111・112・118）のほかに、南北両エリアを挟んで接合する資料（109）があり、陶硯についても3条の塀の北と南に明確に区分することは難しい。

蹄脚円面硯 (Fig. 100-109～111・126, PL. 265・266) 合計10点が出土し、そのうち4点を図示し

た。109は硯部と脚部上半が遺存し、脚の数は21に復元される。硯面外縁は外堤とほぼ同じ高さであるが、中心部に向かい緩やかに傾斜する。外堤外側には2条の凸帯がある。内面のほぼ全体と外面の一部とに降灰が認められる倒置焼成。焼成は堅緻で、色調は青灰色。硯面径15.2cm、外堤径20.6cm。HP31炭層1（水溜SX1220）出土。110は硯面部外堤から半球状の脚部上半にかけてが遺存する。脚部上半の半球状の膨らみは、109に比較して小振りで縦長気味。外堤外側面の凸帯は1条のみである。復元脚数は24。外面の色調は淡青灰色。内面には自然釉が降着し、倒置焼成と推定される。外堤径24.0cm。道路南側溝SD1080出土。111は、三角錘状の脚部下半から輪台部のほぼ全周が遺存する。型造りの脚部中位には、細く角張った2条の凸帯を配す。復元脚数20。ほぼ全面に自然釉が付着する。外表が茶褐色を呈する堅緻な焼成で、愛知県猿投山古窯址群の製品であろう。輪台径28.6cm。南北大溝SD1130出土。126は白磁蹄脚円面硯の脚部下半のみの小片。上端は折損し、下端は輪台部が剥離している。白色の胎土に透明感のある釉がかかる。色調は淡灰白色、出土地点は西の谷のJL36炭層1である。

白磁蹄脚
円面硯

圈足円面硯 (Fig. 100-112~123, PL. 265) 合計25点が出土し、そのうち12点を示した。硯面部のサイズから、14~17cmの大型の資料(112・113・115・122・123)、11~13cmの中型の資料(116~118・120)、10cm以下の小型の資料(119)に分けられる。透孔の形態には長方形(112~122)と十字形(123)とがあり、前者はさらに細長方形(112~114)と長方形(115~119)および広目の長方形(120・121)に細分できる。

透孔の
形態で細分

112は18孔に復元される縦型細長方形の透孔をもつ。圈脚は大きく外反し、外面下端付近に一条の細い凸線を巡らせる。陸部は外堤とほぼ同じ高さで、海から垂直に立ち上がる。外堤はやや外反し外側面には比較的細い1条の凸線が認められる。色調は青灰色を呈する。硯面径15.8cm、外堤径20.4cm、脚部径24.4cm、器高9.5cm。土坑SK1153出土。113は硯面部と脚部上端までが遺存する。縦長の長方形透孔を30孔もつ。外堤に比較して陸部はわずかに高く、海は幅広く浅い。硯面中央に研磨痕があり、墨が薄く残る。外面に厚く灰をかぶることから正置焼成と推定される。色調は青灰色を呈する。硯面径14.3cm、外堤径19.3cm。NH32褐灰土出土。114は脚部下半のみを遺存する資料で、28ヵ所に復元される縦型の長方形の透かしをもつ。脚端部に横方向の凹線3条を巡らせ、4条の凸帯を表現する。色調は淡青灰色を呈し、外面に自然釉が付着する正置焼成。脚部径22.0cm。MA35灰褐土出土。115~118は透孔の短辺の長さが比較的大きい一群である。透孔の数はそれぞれ13、9、12、7孔に復元できる。このうち115は外堤から圈脚部までが遺存する。陸と外堤の高さはほぼ同じである。脚部上端には2条の凸帯を巡らせ、同部下端には太い凸帯をつくり出す。透孔の内面側をヘラケズリによって面取りする。陸には研磨痕が、海には薄い墨が残る。色調は淡灰色で、外面に緑色の自然釉が降着する正置焼成である。硯面径16.4cm、外堤径21.9cm、器高7.8cm。JO39炭層出土。116は硯部のみが遺存。115に比べて小振りで、陸部外縁に凸帯が巡り、幅広い海部をもつ。外堤側面にやや不整な直方体の筆立て部があり、その上部に開けられた孔は径0.9×0.7cm、深さ0.9cmである。陸から海部にかけて部分的に墨が濃く残る。色調は灰青色である。硯面径12.4cm、外堤径18.2cm。SD1204灰色砂出土。なお図示しなかったが、円面硯の筆立て部は西の谷の炭層からも1点出土しており、その形態・法量はほぼ同一である。117は外堤から脚端部までが遺存する。外堤は外側に開き、外側面のやや下方には、外方に大きく突出した幅広い凸帯をもつ。脚下端は大

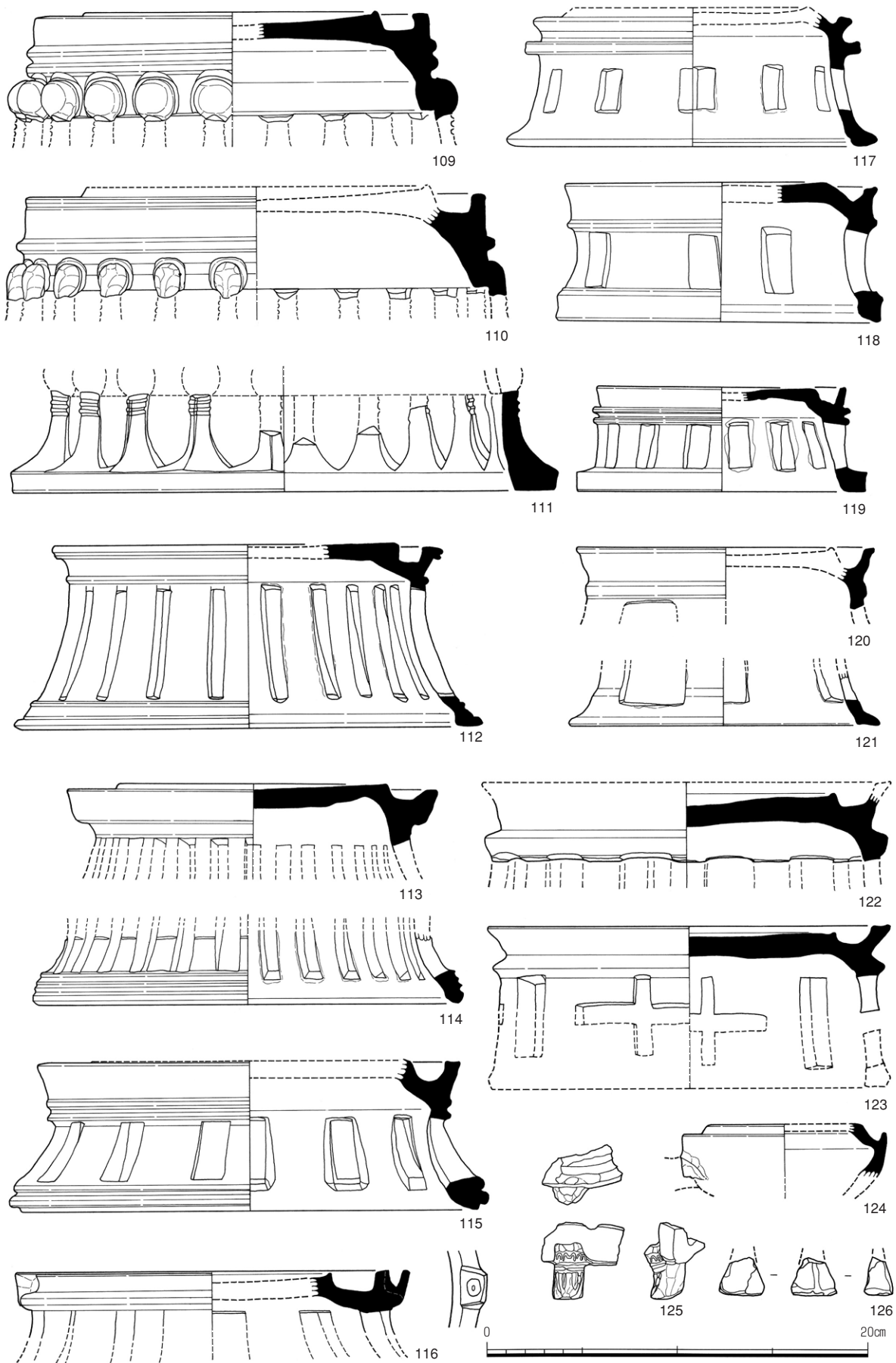


Fig. 100 円面碗 1:3

きく外反する。外面全体に灰が厚く降着し、色調は青灰色である。外堤径16.6cm、脚部径19.3cm。南北大溝SD1130出土。118は中型の資料で、硯部の一部と脚部が遺存する。外堤は硯面に比べてわずかに低く、海は幅広である。外堤外側には比較的細い凸帯が1条巡る。透孔も含めて、器体全面に墨が付着する。内面全体に灰の降着が認められる倒置焼成。色調は暗青灰色を呈する。硯面径11.1cm、外堤径16.2cm、脚部径16.5cm、器高7.2cm。土坑SK1153出土。119は、最も小型の圈足円面硯である。硯面部よりも高い外堤は幅狭く、外側面には細い2条の凸帯が巡る。他の圈足円面硯の脚部が外側に大きく開くのに対して、本資料はほぼ垂直に落ち、下端部分で外側に直角に外反する。透孔の数は14に復元した。自然釉が部分的に降着し、色調は灰白色である。硯面径9.8cm、外堤径12.8cm、脚部径14.9cm、器高5.4cm。土坑SK1170出土。120・121は横方向に長い透孔をもつ資料である。前者は外堤から脚上端付近まで、後者は脚部のみが遺存する。120は外堤の幅に比較して、海の深さは比較的深い。外堤外側面やや下にある凸帯は幅広であるが、高さは低い。色調は淡青灰色を呈する。外堤径15.4cm。NQ49遺物包含層出土。121は、透孔の幅が3cm前後、脚の幅は4.3~4.9cmである。脚部は比較的緩やかに外反するが、末端で反りが強くなる。焼成は比較的良好で、色調は灰色を呈する。脚部径16.3cm。南北大溝SD1130出土。122は大型圈足円面硯で、脚部破損後も破面を平坦に磨って使用している。透孔は、縦型の長方形と推定され、12個に復元できる。外堤は端部を欠損するが、硯面部よりも高い。硯面部には著しい研磨痕があり、内側に向かって緩やかに傾斜する。色調は淡青灰色を呈する。硯面径15.5cm。NK34灰褐土出土。123は、十字形と長方形の透孔を交互に配する圈足円面硯である。外堤よりも硯面が低く、脚部の外反も緩やかである。色調は青灰色で、外面に灰が厚く降着。硯面径15.2cm、外堤径20.8cm。HM28灰粘土出土。

小型の圈足
円面硯大型圈足
円面硯

獣脚円面硯 (Fig. 100-125, PL. 266) 本遺跡で出土した唯一の獣脚硯で、外堤と海部の一部が残る。脚部は型造りで、上部には6単位の「∩」字形の、下部にはやや縦長の蓮弁形の模様を配す。暗灰色を呈し、胎土に多量の砂粒を含む。脚を蓮弁状に表現した獣脚円面硯は、中国・朝鮮半島のほか、石神遺跡、藤原京などからの出土が知られる。本例とそれらとは胎土・焼成の上で大きく異なるものの、藤原京出土の印花文をもつ³⁹⁾碗蓋と色調・胎土が類似しており、新羅土器の可能性はある。HN31炭層出土。

新羅土器カ

中空円面硯 (Fig. 100-124, PL. 266) 須恵器杯Hに似た外形の硯部に把手を付すもの。接合痕跡しかとどめないため、把手の形状は不明である。また硯面部の遺存状態が悪く、不明な点もあるが、幅1.1cm、陸部からの深さ0.7cmの海が確認できる。硯面部は口縁端部より高い。色調は明灰色。NI38灰褐土出土。

転用硯 (Fig. 101-127~142, PL. 266) 合計103点が出土し、そのすべてが須恵器の転用である。器種別に見ると蓋類74点(71.8%)、杯皿類16点(15.5%)、甕4点(0.4%)、壺2点(0.2%)、鉢1点(0.1%)、横瓶1点(0.1%)、その他5点(0.5%)であり、蓋類のしめる割合が著しく高い。使用面の大半は蓋の内面で、他に無台の杯・皿Aの内面、および有台の杯B・皿B・壺の高台内部があり、壺底部外面の凹部を使用する例もある。このうち図示したのは16点である。なお図中では、研磨痕の認められる範囲を斜線で、墨痕の範囲を網目で示した。

蓋類が多い

127~132は杯の蓋を転用したものである。127は内面にかえりをもつ蓋aで、大きさから杯Gの蓋と推定される。中央部に墨痕があるが、研磨痕は明確ではない。128~130は口径14~15

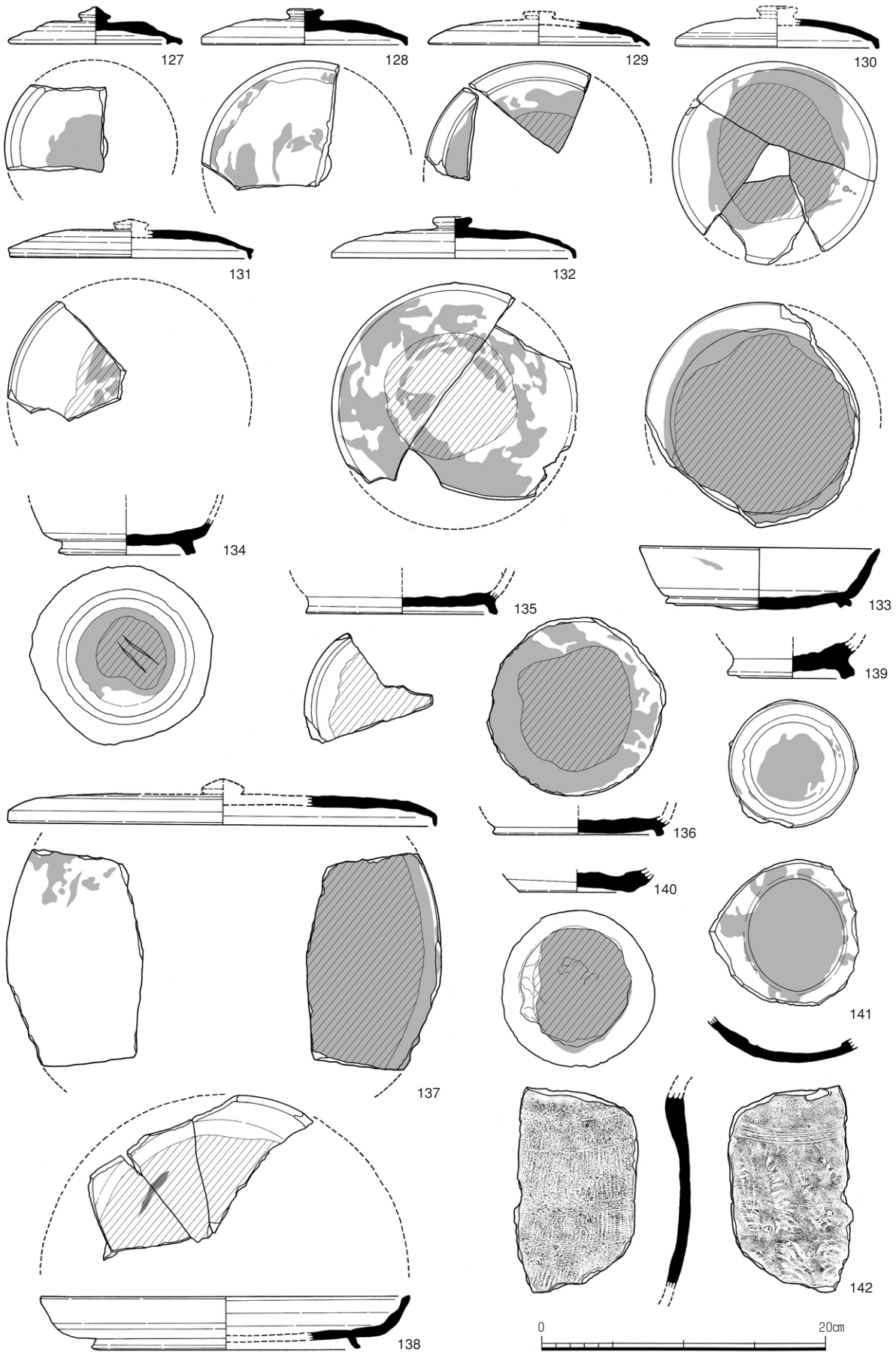


Fig. 101 転用碗 1:4 (斜線は研磨痕、アミは墨痕)

cm前後の杯BⅢの蓋であり、このうち129は内面にかえりをもつ蓋aである。いずれも内面に墨痕と研磨痕が認められる。131・132は口径17cm前後の杯BⅡの蓋で、ともにかえりをもたない蓋b。内面中央部に研磨痕があり、ほぼ全面に墨痕が広がる。出土地点は127・131：南北溝SD1103、128：NI32灰緑砂土、129：SK1126、130：WN24炭層、132：NQ35淡青灰色粘質土である。133・134・135・136は須恵器杯Bを転用したものである。133と136は器体内面を、134・135は外面を硯面として利用している。133は杯Bの内面を完形の状態で利用したものであるのに対して、134～136は高台より上の口縁部分を打ち割って、円形に整形して、その内面あるいは外面を利用している。使用痕跡としては、135が研磨痕を残すのみであるが、それ以外には研磨痕と墨痕の双方が認められる。134の底部外面中央にはヘラ記号「ク」がある。出土地点は133：HA35炭混暗緑灰土、134：HD24灰粘土、135：MC48茶灰土Ⅱ、136：土坑SK1126である。137は大型皿の蓋と推定される資料の転用品を示した。器体内面ほぼ全体に墨痕と研磨痕が認められ、器体外面の一部にも墨痕がある。破損面にも墨の付着が認められることから、皿蓋の破片を俵形の平面形に加工して使用したと推定される。色調は灰白色。HJ24炭層3出土。138は皿Bの転用硯である。遺存部分の底部内面に研磨痕が認められ、部分的ではあるが朱墨の痕跡がある。色調は灰色で、NK34柱穴1断割からの出土。139と140は壺の底部を利用した転用硯である。いずれも壺底部を打ち割って円形に成形する。139は底部外面の高台の内側を、140は底部内面の凹部を使用しており、前者には墨痕が、後者には墨痕と研磨痕が残る。色調は前者が灰白色、後者が黒褐色であり、焼成は双方ともにやや軟弱で脆い。出土地点は、139がNH33灰褐土、140が南北大溝SD1130である。141は横瓶体部の接合部にできる凹部を利用した転用硯である。凹部全体に墨痕が残り、一部はその外に筋状にひろがる。色調は褐灰色。南北大溝SD1130出土である。142は甕の肩部～体部内面を利用した、所謂「猿面硯」である。表裏両面ともに研磨痕が認められる。内面の墨痕は薄く、その範囲は不明瞭。硯面(内面)には同心円文、外面には平行叩き文を有する。色調は暗灰白色で、外面には自然釉が残る。NG33灰褐土出土。

杯Bを転用

皿蓋の破片を加工

朱墨の痕跡

猿面硯

K 漆塗土器

本遺跡からは破片総数で合計388点の漆塗土器が出土した。ここで言う漆塗土器とは、器体の内外面あるいはその一方の全面に漆を薄く均質に塗布した資料をさし、比較的広範囲に漆の残る漆工用パレットとの分別が困難な資料も含まれる。種類別には土師器が328点、須恵器が60点となる。全体の器種構成については破片資料が多く、詳細を論じることは困難であるが、土師器杯A、B、C、皿A、鉢A・B、須恵器杯A・B、鉢Aなどがある。その中でも特に土師器杯Aの割合が19.8%と他に比較して高い。漆の塗布部位については、内外面双方に塗布された資料336点(86.6%)、内面のみ50点(12.9%)、外面のみ2点(0.5%)であり、内外面ともに塗布された資料の割合が多い。塗布された漆の色調は、基本的にやや赤みを帯びた黒褐色を呈するが、遺存状態の悪い場合には脱色がすすみ茶褐色になり、中には土器器体表面の色が直接見える資料もある。またミガキ調整の結果生じる線状の浅い凹部にのみ漆を残す資料もある一方で、暗文の内部にまで漆が十分に入り込まないものもあるなど、その遺存状態は様々と言える。出土資料の92.2%に

漆塗土器

器種構成

塗布部位

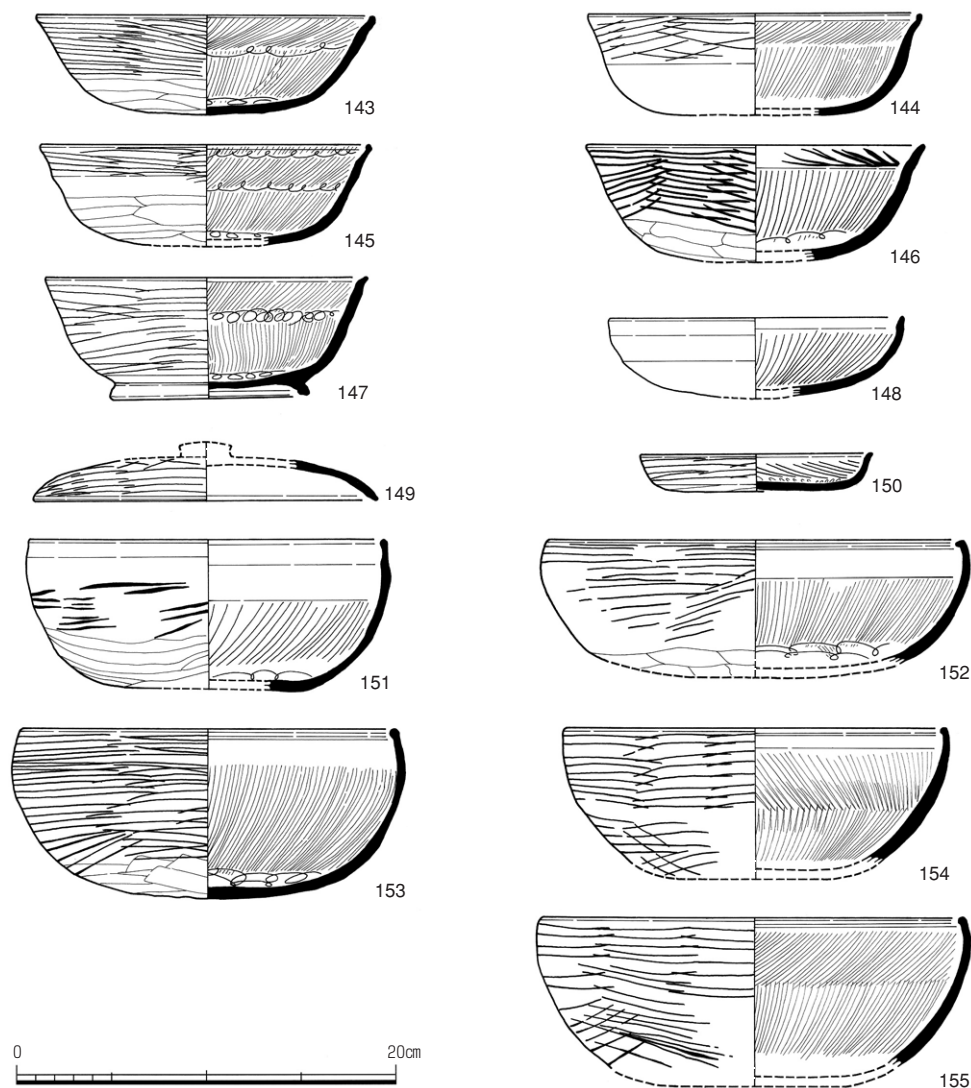


Fig. 102 漆塗土器 1:4

あたる357点が、遺跡中央で検出した3条の塀SA1150~1152の北側84次調査区からの出土である。そのうちの約6割が南北大溝SD1130からのものであり、残余は南北溝SD1110およびそれらを覆う包含層からの出土である。明らかにその分布は遺跡の北側に偏り、一見、飛鳥寺との関連性が示唆される。しかしながらSD1130出土土器については、別に示す如く、接合関係の上でSD1110および東の谷の炭層、水溜各層との間で親近性が認められ、SD1130堆積土は、遺跡南側の谷筋などを浚渫した際に生じた土壌を利用しての埋立土、すなわち整地土であるとの評価もあり、早計な結論は下せない。以下、代表的な資料について詳述する。

杯 AI Fig. 102-143~146は土師器杯AIである。いずれも内外面ともに漆が塗布される。外面の調整は共通しており、いずれも底部外面をヘラケズリし、口縁外面をヘラミガキしたb₁手法。また口縁端部内面はヨコナデする。内面の暗文については差が認められる。143は、口縁部に2段放射暗文、底部に螺旋暗文を施し、2段放射暗文の間にはループ暗文を配す。144は2段の放射暗文のみである。145は口縁部に2段放射暗文があり、その間と、口縁端部にループ暗文が、底部には螺旋暗文がある。146は口縁部には上段が左に傾く2段放射暗文が、底部には螺旋暗文が認められる。143~145の径高指数はそれぞれ30.3、30.9、31.5である。いずれも飛鳥

Vに属するが、2段放射暗文の粗い144は新しく、細密な2段放射暗文の間にループ暗文を施す143・145は古相を示す。また、146は杯Aとしては異形であり、径高指数は34.4と高く、丸底気味で、ミガキおよび暗文も太いという特徴がみられる。この種の杯Aは、南北大溝SD1130、炭層、水溜遺構に類例があるが、漆の塗布されたものは少ない。出土遺構は、143：南北溝SD1110、144～146：南北大溝SD1130である。147は土師器杯BIであり、底部外面をヘラケズリ、口縁部外面にはナデ調整後にヘラミガキを施す。内面には2段放射暗文と、その間と底部の2ヵ所の螺旋暗文が認められる。内外面ともに漆が塗布され、黒褐色を呈する。径高指数39.5。SD1130出土。148は土師器杯Cである。底部外面はヘラケズリ、口縁部内外面は横方向のナデ調整が施される。内面には1段の放射暗文が認められる。内外面ともに漆が塗布される。径高指数21.01。SD1130出土。149は杯Bの蓋である。外面はヘラケズリ後にミガキ調整。内面には横方向のナデ調整が施される。内面は漆が塗布され黒褐色を呈するが、外面は大部分の漆が剥落し痕跡的である。SD1130出土。150は小型の皿Aである。底部外面をヘラケズリ、口縁部外面はヨコナデのちミガキ調整する。内面口縁部は密度の低い放射暗文、底部は螺旋暗文を施す。内外面ともに漆が塗布されるが、脱色がすすみややや明るい暗茶褐色を呈する。SD1130からの出土。151はSD1110、152～155はSD1130から出土した土師器鉢Bである。いずれも端部を内側に軽く巻き込む口縁形状を持ち、内外両面に漆が塗布される。外面の調整については、151～153は底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデのちにヘラミガキする。153と154は、底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデし、後にミガキ調整。内面の調整については151～153は口縁部に1段放射暗文、底部に螺旋暗文が施される。154・155は2段放射暗文が認められるが、底部は欠失しており螺旋暗文の有無は不明。

杯 BI

杯 C

杯 B 蓋

皿 A

鉢 B

L 新羅土器

印花文をもつ台付碗の蓋、独特の口縁をもつ壺口縁部片のほか、印花文をもたないが色調などの特徴が類似する蓋がある。Fig. 103-156は頂部が丸く、口縁部を長く引き出し、端部の内面にかえりをもつ台付碗の蓋で、車輪状の小さなつまみを欠く。頂部外面には小円弧文を10個連ねた連続縦長文を放射状に刻印する。暗灰色の自然釉が外面全面にかかるのに対して、内面は青灰色でなめらか。文様裏には爪形痕が残る。断面は暗紫灰色で、胎土に黒色微粒子を含む。口径11.6cm。HJ24炭層3出土。157は広く平坦な頂部とやや長く水平にのびる口縁部からなる蓋である。口縁端部は丸く収め、内側にかえりはない。頂部の外縁に2条一組の浅い凹線を巡らす。新羅土器に特有な印花文はない。外面全面にかかる暗灰色の自然釉と、非常になめらかに仕上げ、青灰色を呈する内面の一部に火襷が残るなどの特徴は「新羅土器」に類似する。印花文を欠き、類例もみないが、桜井市阿部丘陵遺跡群大西ヶ谷地区出土のつまみ周囲に印花文をもつ蓋と類似する形態であることから、「新羅土器」とした。口径12.4cm。WI29炭層出土。他に口縁部が盤形に開く、いわゆる盤口壺の小片があるが図示できない。156など

新羅土器
台付碗の蓋

連続縦長文

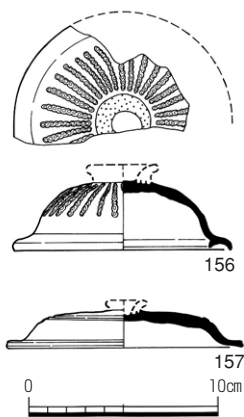


Fig. 103 新羅土器 1:4

口径11.6cm。HJ24炭層3出土。157は広く平坦な頂部とやや長く水平にのびる口縁部からなる蓋である。口縁端部は丸く収め、内側にかえりはない。頂部の外縁に2条一組の浅い凹線を巡らす。新羅土器に特有な印花文はない。外面全面にかかる暗灰色の自然釉と、非常になめらかに仕上げ、青灰色を呈する内面の一部に火襷が残るなどの特徴は「新羅土器」に類似する。印花文を欠き、類例もみないが、桜井市阿部丘陵遺跡群大西ヶ谷地区出土のつまみ周囲に印花文をもつ蓋と類似する形態であることから、「新羅土器」とした。口径12.4cm。WI29炭層出土。他に口縁部が盤形に開く、いわゆる盤口壺の小片があるが図示できない。156など

とともに炭層4・炭層3からの出土である。

M 施釉陶器

施釉陶器 施釉陶器等には、鉛釉・緑釉陶器と灰釉陶器および磁器がある。緑釉陶器は、南地区東・西の谷の炭層および北地区の南北大溝SD1130、南北溝SD1110、石組方形池SG1100などから出土した7世紀代に属すると考えられるものと、おもに北地区の包含層・中世大溝、南地区の炭層と工房上を覆う包含層などから、灰釉陶器や平安時代の土師器等と伴出したものに分けられ、両者は形状・色調などから明確に区別される。

i 7世紀の鉛釉・緑釉陶器 (Fig. 104-158~180, PL. 253・254)

施釉陶器の器種 南地区炭層出土の杯蓋(158)、杯B(159)、壺(167)、壺蓋(163~166)、壺付属楕円球形土製品(175~180)、長方板形土製品(168~174)と、北地区のSD1130・1110出土の壺体部片(161・162)、SG1100出土の壺口縁部片(160)がある。このうち、蓋(158)は頂部外面の一部に筆塗りした部分的な施釉であり、杯B・壺蓋・壺・付属土製品には、呈色剤としての銅の含有が少ない無色~淡緑色の透明釉(鉛釉)が薄くかかり、かつ熔融の不十分なものが含まれるのに対して、壺(160~162)には比較的厚く不透明な濃緑色の釉薬が全面にかかる違いがある。

杯 B 杯B(159)は外面をロクロナデしたやや厚手の底部と、上部で外反する薄手の口縁部からなり、方形断面の高台の下端が凹面をなす。高台および口縁下半部がロクロ成形による円形であるのに対して、口縁上半部が隅丸方形に整形された特異な形状で、金属器・玉器・犀角器の形状を模倣した可能性がある。灰黄色の緻密な胎土で、内外面全面にかかる淡黄緑色の透明釉が部分的に光沢をもち、剥落した箇所的外表は灰色を呈す。復元口径8.1~8.9cm、器高3.6cm、高台径5.4cm。杯Bは互いに接合する小片として広範に散乱し、高台部は西の谷上流部(JM38)炭層1出土片と東の谷の水溜SX1224西岸(HE26)の炭層2出土片からなり、口縁部は水溜SX1224西岸(HD27)の炭層2B、同中程(HG24)の炭層2、工房に近いSX1226東岸(HG20)の炭層2F出土片で構成され、炭層への投棄は最高所である西の谷上流部でおこなわれたものと考えられる。蓋(158)は端部を下方へ折り曲げたb類で、扁平な頂部外面に2重の凹線文を巡らせ外方が下がる段をもつ。中央部につまみを貼り付けたナデ調整が残る。淡茶灰色を呈し、微細な白砂を含む精良な胎土で、復元口径9.7cm。破片の中央、頂部の2重の段の間に淡黄緑色の薄い緑釉が筆塗りされ、遺存する箇所は光沢をもち、剥落した箇所は灰色に変色する。この変色が釉薬が塗布された箇所とその裏面とに限定されていることから、この蓋片は、発色の程度を確認するための「色味」である可能性が高い。西の谷下流域南岸の炭層出土。

壺蓋 壺蓋(163~166)は4個体以上あり、いずれも扁平な頂部の外縁が丸く内彎し、直立するやや長い口縁部に至る形態で、ロクロ成形ののちに、頂部の内外面をヘラミガキして平滑に整え、口縁端部は小さく内肥厚するもの(166)と、丸い内傾面をなすもの(163)がある。つまみは165に残る大きな剥離痕から、金属器模倣形態に特徴的な大振りの宝珠形と思われる。いずれも頂部外面に2条、口縁部との境に1条の段をもつが、その表現法は、両側を掘り窪めた凸線

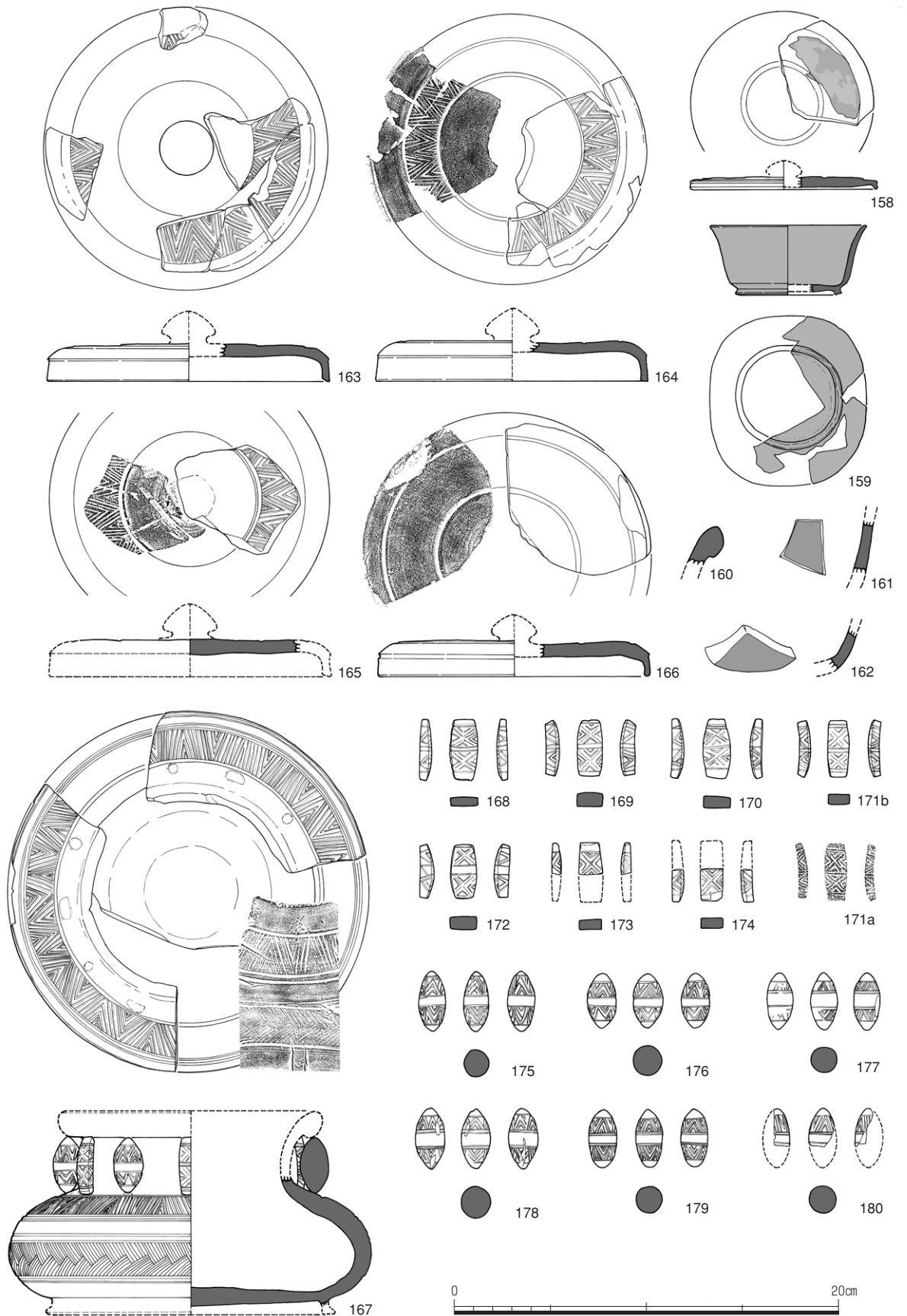


Fig. 104 鉛釉陶器・緑釉陶器 1:3

(165)、凹線 (164・166)、外側を掘り下げた低い段 (163) の違いがあり、頂部の2つの段の間隔とその間に刻まれた文様に、交互に対向する3～4本の山形三角文 (164・165)、5～6本の山形三角文 (163)、無文 (166) の違いがあつて、それぞれ個性的である。外表の色調は硬質の165が淡灰色、やや軟質の163は赤味を帯びた淡灰色で、断面中央部はいずれも淡茶褐色。蛍光X線分析の結果、内外面から鉛が検出され、灰色系の色調は鉛釉の施釉よるものとみられる。163は口径14.6cmで、西の谷奥の炉跡北方の炭層1、164は水溜SX1224西岸の炭層2、165は西の谷下流域南岸の炭層2からの出土。無文の166は口径14.1cmで、164と同じSX1224西岸の炭層出土で、椀B (159) や「色味」の蓋 (158) の出土地点・層序と重なり、最高所の西の谷上流部で投棄されたと考えられる。なお、壺蓋の類例は、古宮遺跡 (旧称小墾田宮推定地) 第1次調査の包含層 (暗褐土) から出土した1点があり、口縁部の形状、内外面のヘラミガキ、頂部文様帯の文様、胎土・色調のいずれもが酷似し、同一地産と考えられるものである。

鉛 釉

壺

壺 (167) は扁球形の体部で大きな平底に大径の高台がつく。口頸部以上と高台の先端を欠くが、体部の形状が類似する中国南北朝の唾壺のような広口壺と考えられ、後述のように付属土製品 (168～180) および石組方形池SG1100出土の緑釉壺口縁部片 (160) を参考に、上部で外反し外側に巻き込む玉縁形の口縁部に復元した。壺は中央部がやや垂れた底部外面を、細かな条痕が残るロクロナデ (R) で平滑に整え、高台貼り付け位置に1条の凹線を刻み目印としている。底部内面は緩やかに波打つロクロナデと一方向のナデ調整で中央部が肉厚になり、体部内面は下半部の強いナデにより頸部と高台部の器壁が薄く (0.5cm)、肩部は肉厚 (0.9cm) である。胴部径18.8cm、高台径約15cm。素地は全体に淡橙褐色を呈し、微細な白色土を含む多孔質で軟質の胎土で、外表は埋没環境により黒色を呈する部分があるほかは、施釉の影響から灰色を帯びた黄褐色を呈する。壺の内外面とも素地に直接、白色粉末が付着し、白色粉末は蛍光X線分析の結果、鉛を多量に含む未熔融の釉薬と判明している。壺肩部の1片が水溜SX1220西南部の炭層1、その他は壺蓋 (164・166) や高台付杯 (158) と同じ水溜SX1224西岸の炭層1からの出土であり、同時に投棄された可能性が高い。

鉛を多量に含む未熔融の釉薬

体部外面には肩部中程の1条の凹線と腹部上半の2条の凹線とで文様帯を区画し、体部下半には上下を2条一組の凹線で区画した文様帯を設けている。肩部の文様帯には、壺蓋 (163～165) の文様と同様の、交互に対向する山形三角文からなる複合鋸歯文を配し、腹部の文様帯には、人字形を連ねてできた羽根状の区画の中を4～7条の平行線で埋めた交互配置の斜線文を刻むが、これは、下半の斜線が弧を描くことから、いわゆる「三つ編み」の平面的表現とみられる。肩部上半には、肩部の文様帯に接して、小円形と下辺に丸みのある長方形の剥離痕が交互にそれぞれ6個配され、剥離痕の周りにはごく少量の粘土の付着がみられる。それらの大きさと形状が後述の2種の付属土製品の端部と一致し、胎土・色調も壺と同じであることから、肩部に文様を刻んだ土製品12個を、ごく少量の粘土を使って貼り付けた特異な形状をもつと考えられ、下端だけでは容易に剥落することから、土製品の上端は口縁部下面に接合されたと考えられた。口縁部の形状は、金属器・陶器の唾壺では、口縁上部が段をなして直立する「盤状口縁」が一般的であり、本例もその可能性があるが、ここでは、胎土の色調が一致するSG1100出土の緑釉壺口縁部片 (160) を参考にして、土製品上端を固定できて、外観上は盤状口縁のように見える丸い玉縁状口縁に復元した。なお、前述の壺蓋の類例が出土した古宮遺跡 (旧称小墾

山形三角文からなる複合鋸歯文

肩部に土製品を貼付

田宮推定地)の第1次調査の床土からは、鋭い細線で刻んだ文様が酷似する壺肩部片1片が出土しており、胎土・色調も一致する。

付属土製品には、左右両側縁が弧を描く長方板盾形(168~174)と、楕円球形(175~180)の2種があり、長方板盾形土製品は、完形の5点(168~172)と上半(173)・下半(174)の破片各1点、楕円球形土製品は完形の5点(175~179)と1点の上半部片(180)がある。長方板盾形の168~170・172および楕円球形の176~178・180は西の谷奥部の炭層1出土で、楕円球形の179は東の谷と西の谷の合流部南岸の炭層2、長方板盾形の173と楕円球形の175は水溜SX1224西岸の炭層1と炭層2、長方板盾形の174は東の谷東岸の工房1南端の炭層2からの出土で、いずれの地点層序も壺蓋・緑釉高台付杯や、鉛ガラス片・ガラス罎塼・小玉鑄型などの出土地点・層序と重なり、西の谷最奥部から同時に投棄されたものと考えられる。

長方板盾形土製品(168~174)は、長さ2.7~3.1cm、最大幅1.1~1.4cm、上下端幅0.8~1.1cm、中央部の厚み0.5~0.8cmで、両側縁の弧が強い170、細長い171など形状に微妙な差異がある。左右両側面と正面の3面は甲張り状に膨らみ、裏面は縦方向のヘラケズリでわずかに匙面をなす平坦面に加工する。上下両端面は内傾面をなすが、これは、壺肩部と口縁部下面の傾斜に合わせた加工とみられる。裏面を除く左右両側面と正面には、中央に2本、上下両端に各1条の直線文を刻んで、3つの無文帯と2つの文様区画をつくり、文様区画には山形三角文を4辺から対向させるが、中央の無文帯が広く、ヘラ書き文様の刻線が細い172、中央の無文帯が斜めに傾く1条の直線文となった170、山形文が中央で食い違う168、山形文が×状に均等に交差する169などそれぞれ個性的である。色調は破断面と上下端の剥離面とが淡橙褐色で、外表は釉薬の影響を受けた暗灰色。169の文様を刻んだ3面に、黄緑色で光沢のある透明釉が部分的に残るほかは、灰色を呈し文様刻線内に灰白色の粉末が残る。楕円球形土製品(175~180)は、長さ2.9~3.2cm、最大径1.4~1.6cmで、丸みの強い176、細長い179などの微妙な差異がある。土製品の端部は上下それぞれ尖り気味で、素地の橙褐色を呈するが、両端で接合粘土の剥落痕が異なり、剥離痕が全周に残る1端が壺肩部に接合する下端、1面に片寄る今一端は口縁部下面へ接合する上端である。土製品には中央に2条、両端寄りに1条の直線文を巡らして、3つの無文帯と2つの文様帯をつくり、文様帯には壺蓋頂部・壺肩部文様帯と同じ山形三角文を交互に配置した複合鋸歯文を刻む。中央の無文帯の幅が狭い175・176、無文帯が幅広い177・178、概ね均等な配置の179・180などそれぞれ個性的で、焼成状況も177は片面が橙褐色、今一面には淡灰緑色に発色した透明釉が残り、176ではほぼ全周にわたって同色の光沢のある透明釉が残るほかは、熔融の不十分な灰色を呈する。

長方板盾形
土製品

山形三角文

楕円球形
土製品

複合鋸歯文

透明釉

長方板盾形土製品に刻まれた対向山形三角文は、高松塚古墳東壁の青龍の頸部に描かれた文様に酷似し、対向山形三角文は赤色、両端の帯は白色に塗り分けている。この文様は網干善教が四神の頸部装飾の第1類型とするものであるが、その淵源は、昇天する龍に必要な「尺木(節のある博山形をしたもの)」⁴⁰⁾にあり、南北朝から隋代初めの画像では網干が第2類型とした「斜格子文」として描かれ、「両端を区切る帯」と後方に噴き出す「火炎文」を伴っている。この斜格子文は、初唐の7世紀後半の龍では「両端を帯で区切る多重の対向山形三角文」⁴²⁾に転化し、7世紀末から8世紀前半には「2~3重の対向山形三角文」さらには「複線の×文」に簡略化されながら墓門のマグサに描かれた鳳凰の「火炎宝珠を伴う頸部装飾」として様式化され、⁴³⁾

対向山形
三角文

8世紀後半以後には、四神に伴うものとの認識から白虎・玄武の頸部⁴⁴⁾に描くものや、「単線の×文」あるいは「文様帯のない円環」としたものが出現する。

長方板盾形土製品や高松塚古墳青龍の文様は7世紀後半には成立していた文様であり、楕円球形土製品は、節をもつ博山形・宝珠形である。また、壺体部に交差する斜線文からなる文様帯が巡る例には、中国陝西省永泰公主墓（706年葬）の石郭東壁内側に線刻された男装女官が捧げ持つ「鳳首瓶」があるが、その鳳の頸部には「複線×文」が巡る⁴⁵⁾肩部と口縁部とに接合された土製品とは、口縁部を啄む鳳凰や龍首の意匠化の可能性が考えられ、南北朝の唾壺に類似した器体部をもつ壺（167）には、7世紀後半から8世紀初めの龍・鳳凰に関わる文様が集約されているとみることができる。

未成・失敗品
色 味
西の谷奥の
ガラス工房
で 生 産

肩部に土製品を貼り付けた壺（167）および口縁部を隅丸方形に加工した高台付杯（159）は、鉛釉陶器生産が先行する朝鮮半島・中国を含めて類例に乏しい特異な形態であり、壺が熔融の不十分な釉薬が付着した未成・失敗品とみられることは、これらが、飛鳥池遺跡内で生産されたことを示しており、「色味」として使われたとみられる蓋片（158）、緑釉の原料と同成分である鉛ガラスやガラス坩堝・小玉鋳型などの出土分布と全く重なることから、その生産は、西の谷最奥部に想定されるガラス工房の一画でおこなわれたと考えられる。

壺口縁部（160）は上端がやや尖り気味の丸い玉縁形に肥厚させた端部の小片で、玉縁下部での器厚は0.7cm。北地区石組方形池SG1100の最下層（第4層）から出土した。素地は前述の壺（167）などに似た橙褐色で微白砂を含む軟質の精良土。外表に濃緑色に発色する透明な緑釉が比較的厚くかかる。

壺体部（161・162）は、器厚は約0.5cmと薄く、内彎する162は底部に近い下半部片、直線的な161は体部中程の破片とみられ、ともに内面は平滑なロクロナデ調整。外面に濃緑色の緑釉がかかるが、素地は167や181などとは異なる、白灰色を呈するやや硬質な精良土であり、輸入品の可能性がある。161は南北溝SD1110の北部木屑層、162は南北大溝SD1130の腐植土層2出土であるが、同一個体の可能性が高く、伴出土器は飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。

ii 平安時代の施釉陶器・磁器 (Fig. 105-181~210)

緑釉陶器・灰釉陶器および磁器がある。南地区では、東の谷の炭層に緑釉陶器（181・183・184・189）、合流部の炭層1に灰釉陶器（202）、合流部の包含層に緑釉陶器（182・185・188）と灰釉陶器（194・199・206）、西の谷の包含層、炭層に緑釉陶器（187）・灰釉陶器（198・203・204）、東の谷工房上の青灰色粘土などに灰釉陶器（197）がある。また、北地区では、中世の東西溝SD1127に緑釉陶器（186）、周辺の包含層に灰釉陶器（195）、調査区西北部の飛鳥寺南面大垣南の包含層に灰釉陶器（196・200・201）が含まれ、磁器は北地区東南部の灰褐土（207）、飛鳥寺南面大垣南の包含層（209）、南地区西の谷中程の包含層（210）のほか飛鳥池東方遺跡の床土層（208）などから出土している。以下、種類別に記述する。

緑釉陶器 器種には碗、皿、壺がある。このうち、壺（181）は、内外面ともにロクロナデ調整で、ヘラミガキは確認できないが、灰色味を帯びた緑釉を高台内側下面にも施す。底径6.6cm。黒色微砂をわずかに含む胎土と外表の色調とが、前述の杯B（159）に類似し、水溜SX1222北端の炭層2C出土であることから、7世紀に属する可能性があり、下端部が外方へ肥厚すること

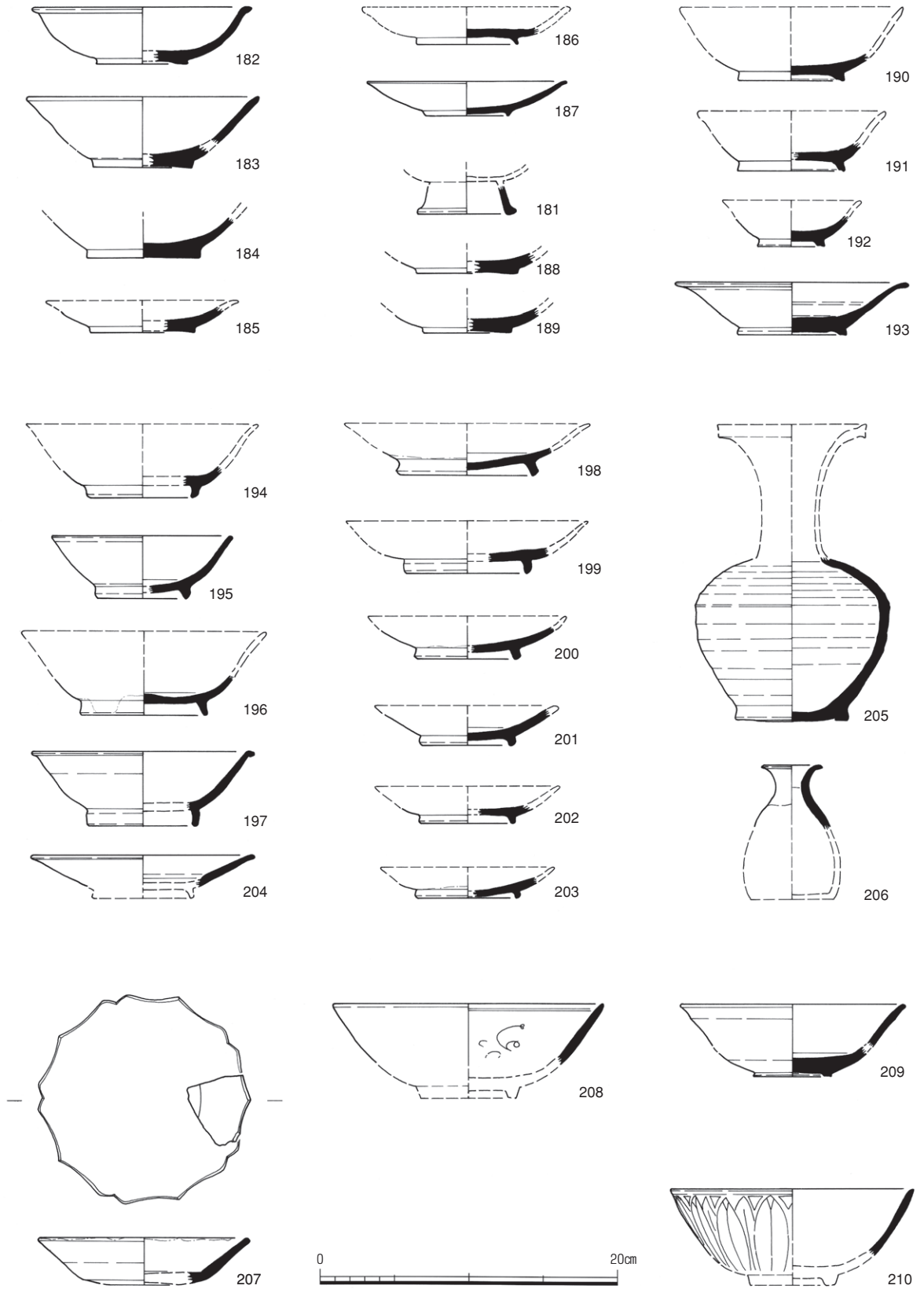


Fig. 105 施釉陶器 1:4

から壺の高台部として作図したが、他器種の可能性もある。

椀には削り出し高台（182～184）と貼り付け高台（190～192）とがあり、いずれも杯部内外面にヘラミガキを施す。椀（182）は中央部がやや窪む蛇の目高台で、内彎気味に開く口縁の端部が強く外反し、暗灰色で硬質の素地に淡緑色の釉薬を薄くかける。口径14.6cm、器高3.9cm。中央部が浅く窪む平高台の皿底部（188）とともに西の谷合流部北に位置する旧飛鳥池の堆積層にあたる灰色粘砂層から出土した。9世紀前半の畿内産。椀（183）も削り出し平高台だが、直線的に開く口縁部をもち、端部は薄く尖る。素地は軟質。復元口径15.6cm、器高4.8cm。底部は水溜SX1222西北部の炭層1、口縁部はSX1220の炭層1出土。椀（184）はやや内彎気味に開く口縁部で、底径7.6cmの削り出し平高台の中央部がわずかに凹む。暗灰色の硬質素地に淡緑色の緑釉を全面にハケ塗りし、底部内面に輪状の重ね焼き痕跡をもつ。9世紀中頃までの畿内産で、水溜SX1220中央部の炭層出土。椀（190～192）は底部外面を回転糸切りしたのちに下面に段のある輪高台を貼り付ける。分厚い底部の内面中央部をナデ調整し、薄い口縁部は内外面ともヘラミガキする。暗灰色の硬質の素地に淡緑色の緑釉を全面に塗布する。190・191の底径7.2cm、192は底径4.6cm。いずれも北地区のSD1110上の遺物包含層出土で、高台の形状と胎土、釉色から10世紀代の近江産であろう。皿（185～187）にも削り出し高台（185・188・189）と貼り付け高台（186・187）とがある。皿（185）は削り出し平高台で、ゆるやかに外反する口縁部の外端部を小さくヘラケズリするほかはヘラミガキ。口径13.2cm、底径7.0cm、復元器高約2.5cm。白色微砂を含む暗灰色の硬質素地で淡緑色の透明緑釉を薄くハケ塗りする。9世紀前～中葉の畿内産とみられ、WN27炭層の上を覆う灰色粘砂から平安時代の土師器杯などと伴出した。削り出し平高台の底部（188・189）は内外面ともヘラミガキして施釉した皿とみられるが口縁部を欠き、185よりも底部が厚手であり椀の可能性もある。189は東の谷東岸の工房1に近接した炭層2A出土。皿（186）は北地区の中世の東西溝SD1127から出土し、広く平坦な内底部の外端に周囲する凹線がある。糸切りののちにヘラケズリした底部外面に復元径約7cmの小さな三角形高台を貼り付け、灰色硬質の東海系の製品。皿（187）も小さな三角形の高台を貼り付け、赤褐色の軟質素地の全面に緑釉を塗布するが遺存状況は悪い。復元口径13.4cm、器高2.3cm。西の谷最奥部の含炭暗褐土出土。皿（193）は口縁部中程の内面に凹線状の小さな段をもち、口縁端部は水平近くまで大きく外反して開く。皿部内外面にヘラミガキを施し、厚手の底部外面には回転糸切り痕を残す。硬質。口径15.6cm、器高3.5cm。

灰釉陶器 器種には椀、皿、段皿、壺、瓶がある。⁴⁶⁾ 椀（194～197）はいずれも杯部内面、外面上半をロクロナデし、外面下半から底部をロクロケズリする。高台の形状に、短く内彎して先端部に外傾する面をつくるもの（194・195）と、薄く長くのびるもの（196・197）がある。椀（194）は比較的平らな底部から屈曲して口縁部に至る器形で、高台部にも釉がかかる漬け掛け。美濃の大原2号窯式に属する。小形の椀（195）はゆるやかに内彎しつつ直線的に開く口縁部の先端がわずかに外反する。復元口径12.2cm、器高4.2cmで高台外面にまで釉が垂れる漬け掛け。尾張折戸53号窯～東山72号窯式に属し、10世紀後半代とみられる。北地区のSD1110の上を覆う灰褐土出土。196は薄く長い高台が外方へ開くもので折戸53号窯式、10世紀前半に属する。197は直立気味に内彎する高台で、内彎気味に開く口縁部の先端が外反する。復元口径14.8cm、器高5.0cm。10世紀初めの尾張黒笹90号窯に属し、南地区東岸の工房1の上層を覆う青灰粘土層から

同時期の土師器杯などと伴出した。

皿（198～203）はいずれも口縁部を欠失するが、高台径9.5cmの大型（198・199）と高台径7.0cmの小型（200～203）がある。西の谷の炭層1出土の198・202はそれぞれ10世紀初頭的美濃光ヶ丘1号窯と10世紀後半の美濃虎溪山1号窯に属する。高台径の小さな200と201とはともに北地区の遺物包含層灰褐土出土であるが、200が外傾する面をもち10世紀中頃の大原2号窯後半に属し、201は明褐土出土の203とともに高台内側が弧を描く「三日月高台」で10世紀後半の虎溪山1号窯に属する。段皿（204）は段より上の幅広い口縁部の破片で、復元口径15.0cm。内面に厚い茶灰緑色の釉を内面に厚く外面には薄く塗る。尾張産。壺（205）は肩部がわずかに角張る肩部と裾すばまりの体部とからなる器形で、平らな底部外面の外側に幅広い高台を付す。体部下半はロクロケズリ、2段構成の口縁部は欠失している。灰茶色の釉のほかに、体部外面上半および底部内面に緑茶色の自然釉がかかる。残存高10.9cm。茶褐色の精良な胎土で猿投窯産。10世紀後半の折戸53号窯式に属する。飛鳥寺南面大垣南に並行するバラス敷などから出土した。瓶（206）は内外面ともにロクロナデで成形し、口縁部内外面に茶灰緑色の釉をハケ塗りする。頸部～胴部上半部が完存するにもかかわらず、注口や把手の痕跡は認められない。口径4.0cm、残存高4.1cm。尾張猿投窯の黒笹90号窯式に属し、9世紀中頃までの畿内産の緑釉陶器182・185・188とともに飛鳥寺1991-1次の灰色粘砂層から出土した。

磁器 いずれも青磁碗である。碗（207）は厚手の底部から内面に段をもって口縁部が直線的に開き、口縁端部を5つの稜をもつ花卉形に削り出す輪花碗である。灰白色の精良な素地にくすんだ灰黄緑色の不透明釉をかけた越州窯系。北地区の中世の東西溝SD1127付近の灰褐土出土。碗（209）も茶灰緑色の釉を全面にかけた越州窯系の碗で、削り出した低い輪高台の下面のみ釉を削り取る。復元口径15cm、高台径5.2cm、器高4.8cm。北地区飛鳥寺南面大垣南外側の灰褐土出土。外面に鑄蓮弁を刻み、龍泉窯系の半透明の青緑色釉を厚くかけた碗（210）は西の谷中流域の明褐土出土。碗（208）も龍泉窯系の灰緑色の釉が全面に厚くかかり、口縁部内側に凹線を巡らせ、下に陰刻花文をもつ。飛鳥池東方遺跡の第86次6トレンチ床土から出土した。

N ミニチュア土器

いわゆるミニチュア土器である小型の土師器および須恵器は計19個体以上が出土した。器種は多様で、煮沸具、供膳具、貯蔵具がある。調査区全体から散発的に出土しているが、東の谷の水溜遺構の上層にあたる茶土にまとまっている。

ミニチュア
土器

須恵器には杯（Fig. 106-211・212）、壺がある。杯のうち211は口径6.6cm、高さ1.9cm。底部外面をロクロケズリ、口縁部をロクロナデする。灰青色を呈する。MA31灰褐土出土。212は口径6.9cm、高さ2.0cm。底部外面はケズリ、口縁部はロクロナデで仕上げる。灰色を呈する。北地区の石敷井戸SE1090出土。また遺存状態が悪く図示しなかったが、炭層4Cから外反する口縁をもち灰色を呈する壺の小型品が出土した。

土師器のうち煮沸具以外の器種には高杯（215）、碗（213・214）、甕（217）、壺（216・218）がある。西の谷の土坑SK770から壺（216）、北地区の掘立柱建物SB1134の柱穴から壺（218）が出土した。ほかは遺物包含層出土である。

器種

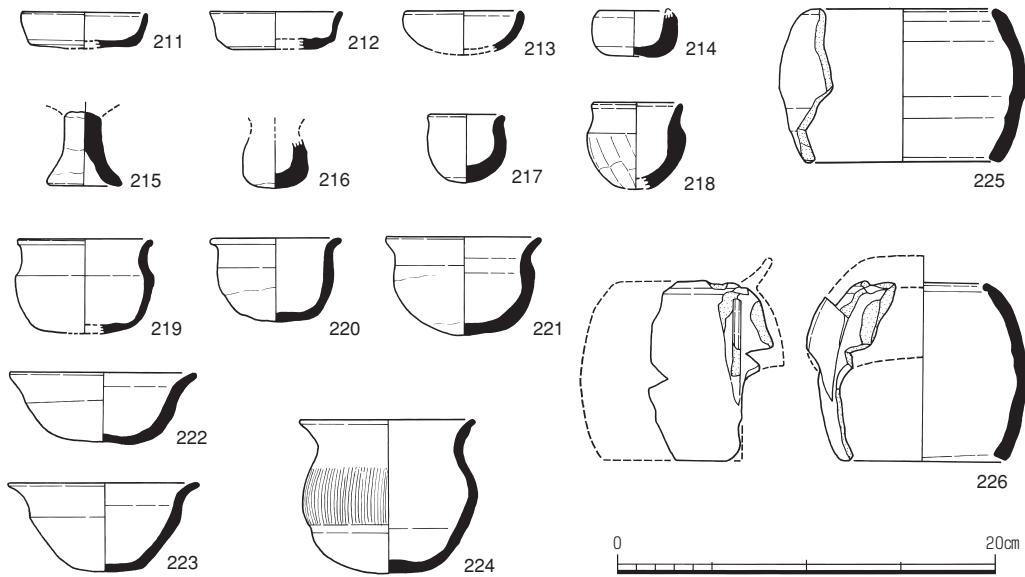


Fig. 106 ミニチュア土器 1:4

高杯 (215) は杯部を欠損した脚部である。手づくねによる粗成品だが、内面にはシボリ痕跡がある。椀 (213・214) のうち214は底部外面を不調整のまま、内面と口縁部はヨコナデする。褐色を呈する。炭層1から出土した。213は丸い口縁端部をもち、内外面ともヨコナデを施す。明褐色を呈する。甕 (217) は内外面ともヨコナデで仕上げる。褐色を呈する。壺 (216) は手づくねで成形し、底部外面のみケズリで調整する。暗褐色を呈する。壺 (218) は肉厚な体部をもち、体部外面をケズリ、口縁部外面から体部内面までをヨコナデで仕上げる。

煮 沸 具
の セ ッ ト

土師器煮沸具のセットでは、甕形土器である壺と、鍋、竈が出土した。壺 (219・221・220・224) のうち224のみ体部下半の成形に型を用いている。調整は体部外面タテハケののち口縁部をヨコナデする。口径9.1cm、高さ8.1cm。黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。水溜SX1231出土。他の壺は型を用いず、粘土紐巻き上げで成形している。219は体部内面をヨコナデ、外面を不調整とし、口縁部はヨコナデする。口径7.0cm、高さ5.0cm。褐色を呈する。HF24茶土出土。221は口縁部をヨコナデし、内面は軽くヨコナデ、外面は不調整である。口径8.0cm、高さ5.2cm。褐色で粗い胎土である。HI21炭層出土。220は内面と口縁部をヨコナデし、体部外面は粘土紐の跡が残っている。褐色を呈する。HJ27炭層2C出土。鍋には浅いものと深いものがあり、223は体部外面を不調整、内面をヨコナデし、不調整部分には粘土紐の痕跡が残る。口径10.0cm、高さ4.7cm。褐色で胎土は砂を含む。HA18茶土出土。222も体部外面を不調整、内面をヨコナデする。口径9.7cm、高さ3.7cm。褐色を呈し、胎土に砂を含んでいる。JR18茶土出土。竈 (225) は底を欠損しており、外面には粘土紐の痕跡が残っている。内面は粗いヨコナデ、体部下端は切っている。褐色を呈し、胎土に砂を多く含む。JQ17茶土出土。竈 (226) は球形の体部の上半に底がつく。内面は全面ヨコナデ、外面は下半のみオサエと斜め上方へのナデを施し、上半はほとんど不調整で粘土紐の痕跡が残る。受部はヨコナデで調整し、内側へ巻き込む。灰褐色を呈する。JP14茶土出土。

〇 土馬

土馬は合計78点が出土した。出土した土馬はいずれもいわゆる都城型の土馬である。小破片が多いため詳細な時期は判別しがたいが、7世紀に比定しうる個体は数点のみで、奈良時代のものが大半である。⁴⁷⁾また、多くは遺物包含層、中世以降の堆積層などからの出土であり、古代の遺構に伴う個体は少ない。胎土は雲母・赤色粒子・白色細砂を含む胎土をもつものが多い。比較的精良なものから砂質のものまでであるが、胎土の特徴は共通している。色調は明黄褐色～燈褐色を呈する。以下、遺物包含層出土資料、遺構出土資料の順に個別に記載をおこなう。

遺物包含層出土土馬 炭層を含めて遺物包含層出土の土馬は77点あるが、そのうち遺存状態の良好な資料あるいは技法上の特徴をよく示す資料17点を時代順に報告する。確実に藤原宮期に属する資料としては、Fig. 107-228がある。頭部の大部分が欠失するが、胴部の遺存状態は良好で、鞍と鬣はつまみ出して表現し、尾は垂れ下がる。胴は円筒状で細長く、脚部は太く直線的である。藤原宮期を含めて7世紀末から8世紀前半に位置づけられる資料としては、227、229～231、233～236がある。227は胴部で、垂れ下がる尾部をもつ。脚は左右わかれており、胴部の円孔に差し込む。229は比較的残りがよい個体である。胴部は円筒形で、左右一連でU字形に折り曲げた脚部を、胴部下面の窪みに差し込んで接合する。背中には強いナデで鞍を表現する。頸は背側を扁平にして鬣とし、細長い耳は斜め上向きに貼り付けている。顔面は円形の粘土板をかぶせ、竹管刺突により目を表現し、三角形の刺突で鼻腔を表現する。額の反り返りは小さい。230は頭部のみを遺存するが、頭部顔面の上半を欠損する。耳を貼り付けたのちに、顔を頸部にかぶせてナデ仕上げ。231も顔面。顔は半円形粘土板を折り曲げて、頸部にかぶせる。竹管刺突により目を表現するが、手綱などはない。鼻先は欠損している。233は胴部から尾部が残る。背中に強いナデを施して鞍を表現し、尾は水平から垂れ下がる形態である。235は頸と尾を欠損する。背中には粘土をつまみ出した鞍をもち、尾はわずかに上がってから垂れ下がる形態である。脚部は胴部の大きな窪みに、U字形に曲げた2本一連の脚をはめ込む。234は胴部みの遺存であるが、鞍の表現などが235に類似する。236は胴部に差し込む形態の脚部。奈良時代前半のものであろう。239は明瞭な鞍の表現はないが、横方向のナデを施してあり、鞍の意識はあることから奈良時代前半から中頃に位置づけた。胴部は円筒形で、やや胴長である。正面観では脚はV字形にひらく。奈良時代中頃から後半の資料としては、頭部みの遺存であるが232がある。顔面の一部を欠くが、耳の位置が低いことが確認できる。237、238、240、242、243は奈良時代後半から末にかけての資料である。この時期の土馬は折り曲げ成形で、鞍の表現が無く、尾が斜め上方にそり上がるという特徴をもつ。237は胴部から尾部の破片である。尾は斜め上方にまっすぐのびる。鞍はとくに表現しない。胴部は折り曲げ成形。238は胴部である。折り曲げ成形で、頸は直立し、尾は斜め上方にまっすぐ上がる。脚は大きく開き、腹部はナデている。240は腰から尾部で、尾は斜め上に反り上がる。241と242は胴部。鞍の表現はない。尾は斜め上方にまっすぐのびる。242は241に比較して頸も長く、背側を薄くして鬣とすることがよくわかる。243は胴部から尾部の破片である。尾はまっすぐに反り上がる。

遺構出土土馬 244は脚部で、腿部分が広く平坦な珍しい形態。あるいは土牛かもしれない。

藤原宮期
の土馬

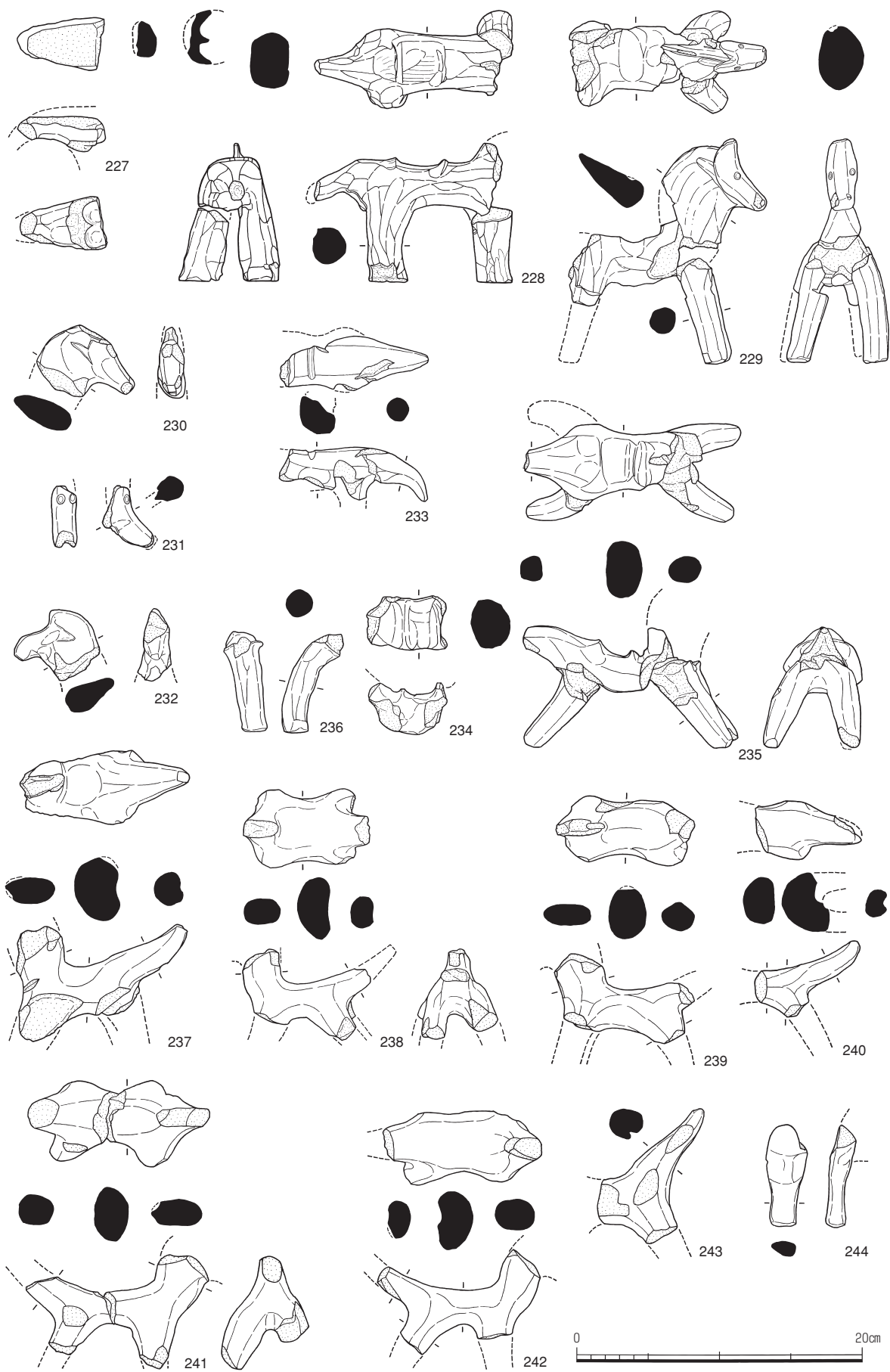


Fig. 107 土馬 1:4

胎土は他の土馬と変わらず、雲母・赤色粒子・白色砂粒を含み明褐色である。石敷井戸SE1090周囲の石敷SX1091出土。類例は藤原京右京五条三坊の奈良時代の井戸SE2742および大阪府茶山遺跡から出土している⁴⁸⁾。

P その他の土製品

砥土器 (Fig. 108-245~251) 土師器・須恵器の一部を砥石の代わりに転用したものを砥土器と仮称した。形状および使用曲面から持砥と置砥に分類でき、前者は5点、後者は2点出土している。持砥(247~251)はいずれも不整形な土器片の破面を用いる。248は須恵器杯蓋で、頂部破片の2側面を研磨に用いる。250は須恵器甕体部で、側面全周とともに甕内面に当たる面も良く擦れているが、墨が付着しているので、転用硯の破片をさらに転用したものであろう。247は土師器高杯Hの脚部の転用品。脚端部を除去して下端で擦る。杯部は意図的に除去したと考えられるが、破面のままで研磨には使用しない。以上の3点は南北大溝SD1130出土。249は須恵器甕の頸部で、破面全体がよく擦れている。JQ16遺物包含層出土。251は須恵器の破片を転用しており、図上端はよく擦れて円弧状になる。他の側面は割れており、もとは現状より大きな砥土器だったと考えられる。堰SX1199をなす東西堀SA1150出土。大型で据え置いて使用したと思われる置砥(245・246)のうち、245は須恵器皿Aを利用したものである。内面全体がよく擦れており、とくに底部内面を局部的に使用した結果、直径10cmほどの範囲が著しくすり減ってくぼんでいる。底部外面から口縁部下半はロクロケズリを施す。口径31.1cm、器高3.2cm。明灰色を呈する。南北溝SD1110出土。246は須恵器甕体部で、内面の中央を擦っており、側面は用いない。HK25炭層3出土。なお、炭層および水溜遺構からは内面に磨滅痕をもつ須恵器甕底部片が出土しており、ほかの付着物から金属加工の作業台として使用された可能性がある。それと砥土器との区別は難しい。また、材質が異なるだけで、同様の用途と推定される2点の砥瓦がある。詳細は砥石の項(本文編〔I〕、174頁)を参照されたい。

破片を転用した砥土器

置 砥

当て具 (Fig. 108-257~260, PL. 270) 土師質の当て具で、いずれもキノコのような形態である。257と260は、HQ27炭層4から、258と259はWH28炭層IIからの出土である。257は当部の直径7.0cm、握部は一辺2.5cm、長さ1.5cmの長方体状をなす。当部は無文で、丸みを帯びてふくらむ。表面はナデ調整。握部と当部の接合部にはオサエ痕跡がある。炭層4Bより出土した。258の当部は直径6.9cmで、無文。やや不整な円錐形の握部は径1.9cm、長さ3.9cmである。当部には、被熱により赤褐色に変色した部分がドーナツ状に認められ、埴塙蓋の可能性もある。炭層IIからの出土。259の当部は、直径6.0cm、無文で、丸くふくらむ。握部は258と同じく円錐形で、直径3.4cm、長さ2.2cm。260は当部直径4.4cmで、無文。握部は長さ1.0cm、断面1.8×1.4cmの楕円形である。当部の摩耗が著しい。これらの当て具は土師器甕の製作に使用したと考えられ⁴⁹⁾、飛鳥池遺跡での土器製作の可能性が示唆される。

土師質の当て具

土師器甕の製作に使用

紡錘車 (Fig. 108-252~255, PL. 270) 4点出土した。いずれも土師質の粘土円板を焼成前に穿孔する。253は手づくねで成形し、直径6.5cm、厚さ4.1cm、重量193g。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で褐色を呈する。NK37褐色砂土出土。252も手づくねで成形し、胎土・焼成は253とよく似る。直径4.9cm、厚さ1.1cm、重量34g。MG25淡灰粗砂出土。254はケズリにより仕上

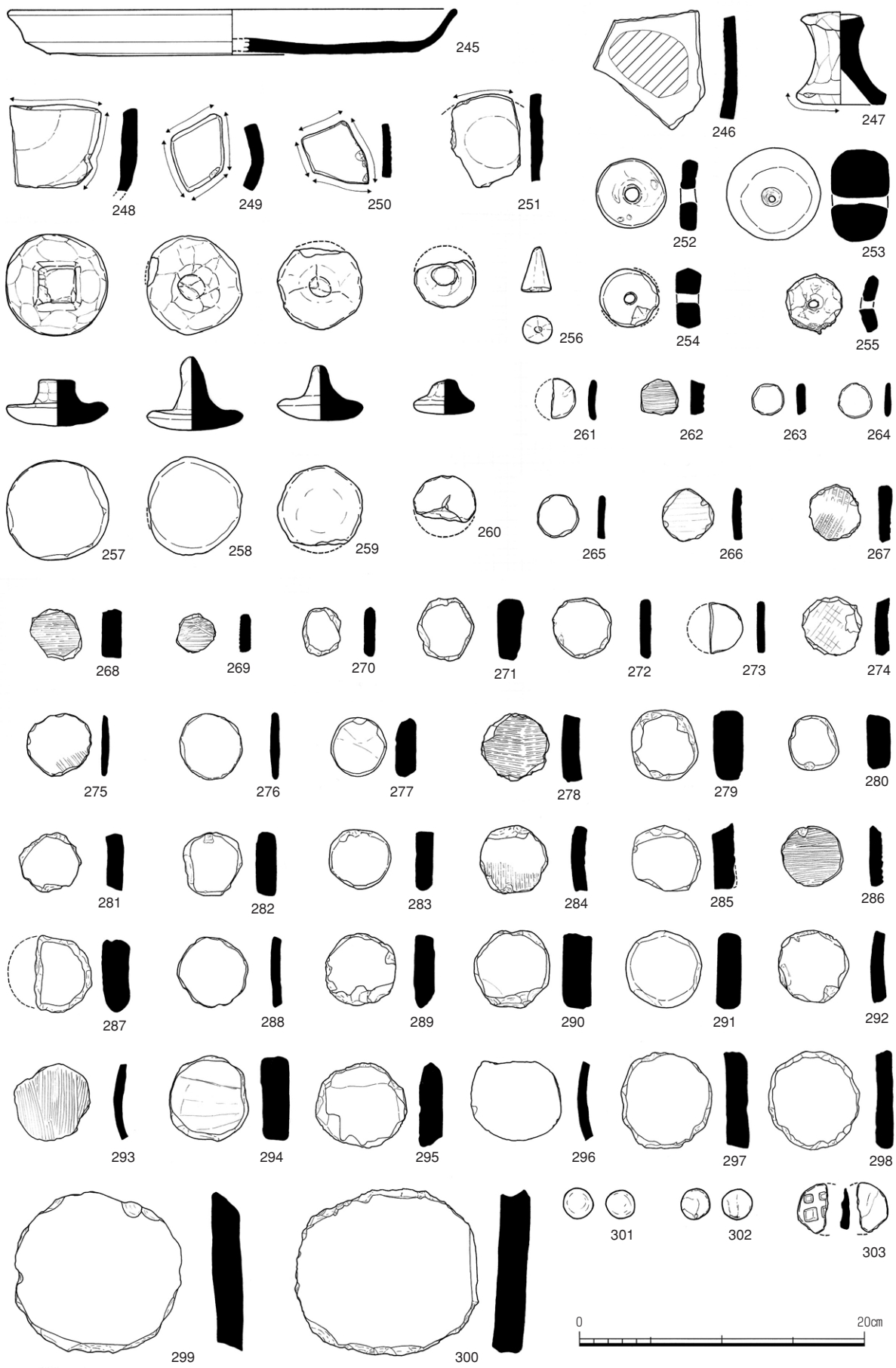


Fig. 108 砥土器・紡錘車・当て具・円板等 1:4

げられており、直径4.2cm、厚さ1.8cm。暗褐色でやや粗い胎土である。HK31整地土出土。255は手づくねの粗製品で、直径4.0cm、厚さ1cm、重量15g。二次的な被熱により一部が軽石状に変質している。成形も形態も他と大きく異なり、紡錘車ではないかもしれない。HN31炭層2B出土。

円板 (Fig. 108-261~300, PL. 270) 円板は縄文時代から明治時代までであるとも言われ、性格や用途は依然はっきりしない。飛鳥池遺跡の調査では計40個の円板が出土した。すべて、土器、瓦の破片を直径数センチの円板状に加工した転用品である。外周は打ち欠くものと、打ち欠いた後に研磨するものがあり、研磨の程度もほとんど研磨しないものから丁寧に研磨するものまで差がある。素材は瓦17点、土師器13点（杯類2点、甕8点）、須恵器10点（甕8点）である。皿や杯底部ではなく甕が多いのは、1個体から多数製作できること、わずかに彎曲する形態を選択したことが理由と考えられる。厚さと重量は素材によって左右されるためばらつきが大きい。40点は直径2.3~2.9cm、3.6~6.7cm、11.4~12.1cmという3群に分けられるが、加工技法などとの対応関係は見いだせない。なお、299と300（同18）は瓦を加工した大型品であり、石神遺跡SE800出土品と似る⁵⁰⁾。一般的な小型の円板とは性格が異なるかもしれない。飛鳥池遺跡での出土遺構あるいは層位は、石組方形地SG1100（272・292）、南北溝SD1103（291）、石組排水路SD1101（283）、土坑SK1126下層（289）、87次炭層1（261）、93次炭層2C（273）、工房整地土（262・297）から出土しており、確実に7世紀に遡るものが存在する。出土遺構にまともではなく、全体から散漫に出土する。軟質なために全体が磨滅している個体を除けば、いずれもほとんど磨滅しておらず、使用痕を思わせる擦痕も確認できない。また油の付着や灯火の痕跡もない。

土玉 (Fig. 108-301・302) 土師質の玉は2点（301・302）が出土した。301は直径2.2cm、重量10gで、褐色を呈する。胎土は砂粒を比較的多く含む。飛鳥寺南面に沿う東西道路南側溝SD1080出土。302は直径2.2cm、重量9gで、明褐色を呈し胎土は精良である。NI35灰褐土出土。

その他の土製品 (Fig. 108-256・303) 円錐形土製品（256）は須恵質で、ナデにより中実の円錐形をなし、下面は平らである。直径2.2cm、高さ3.2cm、重量9g。用途不明である。円板状土製品（303）は手づくねで成形した直径3.5cm、厚さ0.6cmの薄い不整形な円板の片面に、タタキか棒の押しつけによって凹みをつける。土器片転用のいわゆる円板とは異なっている。これも用途不明である。

Q 製塩土器

製塩土器 (Fig. 109-304~332, PL. 271) には西の谷の弧状溝SD1652とその直上の遺物包含層から古墳時代の土師器・須恵器とともに出土したもの（304~322）と、北地区の土坑SK1126、土坑SK1128、石組方形池SG1100、石敷井戸SE1090などの諸遺構およびそれらを覆う遺物包含層から出土したもの（323~332）がある。なお、東の谷最奥部（第112次）で検出した南北溝SD1708からも少量出土しているが、SD1652出土資料と変わらないので割愛した。

弧状溝SD1652は古墳時代の堅穴建物SB1650の北側を、丘陵西斜面に沿った弧状にのびる素掘溝で、谷中央付近では土坑状に幅広くなって、土師器甕・甌・羽釜類、須恵器杯類と製塩土

製塩土器

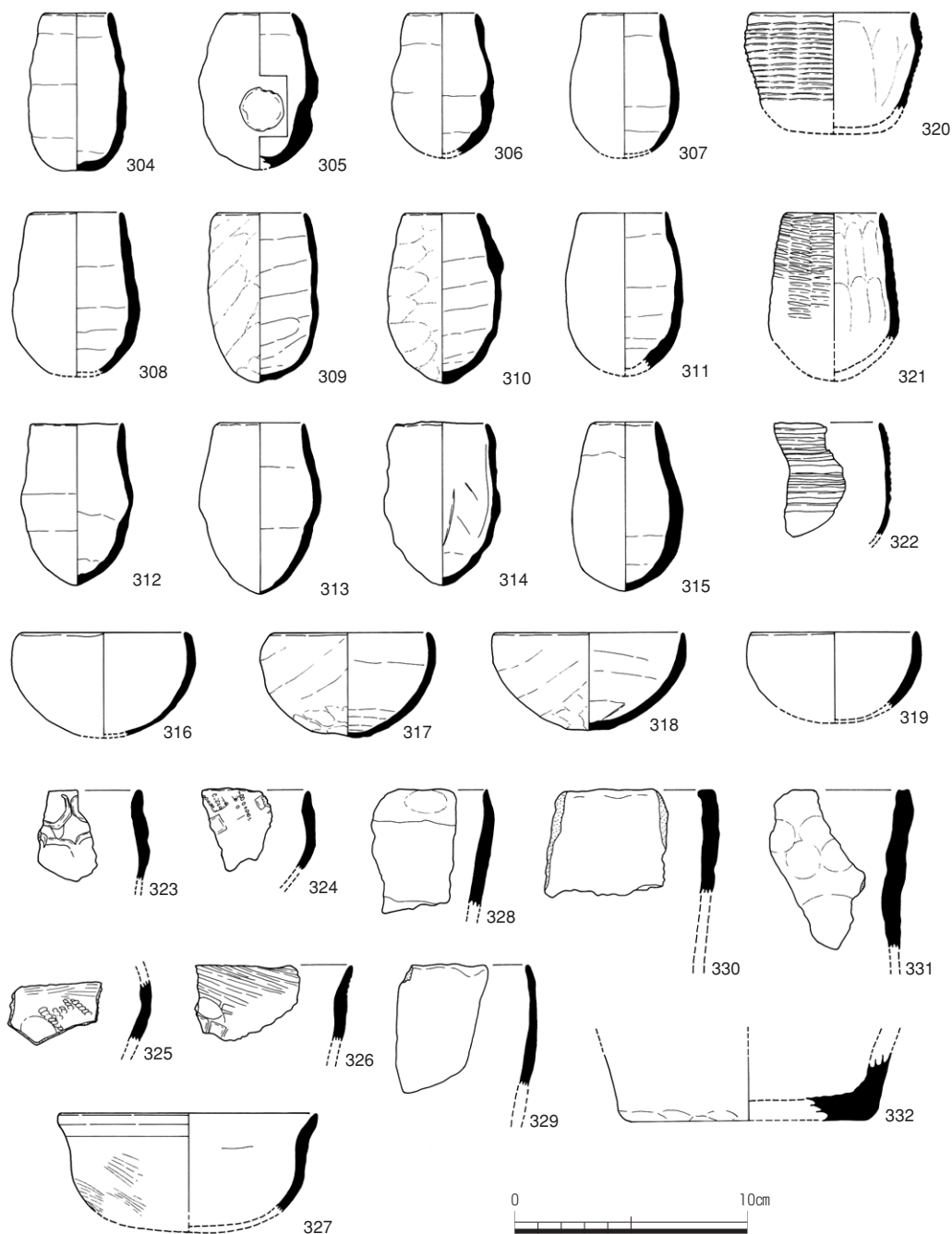


Fig. 109 製塩土器 1:3

器がそれぞれ集中して出土した (PL. 5-4)。製塩土器は溝内の約35cm四方の範囲に折り重なるとともに、土師器カマド類、須恵器杯類の集中部にも広がり、都合整理箱2箱分出土した。しかし、竪穴建物や南北溝SD1653など周辺の古墳時代遺構に製塩土器は含まれていない。

SD1652出土の製塩土器には、縦長の円筒・砲弾形 (A) と椀形 (B) とがある。縦長のAは底部の形状 (平底・丸底・尖底) や調整技法 (ナデ・叩き) によって、a～d類に細分される。Aa類 (304・309) は口縁部上半がややすぼまる円筒形で、小さな平底をもつ。金雲母片を含む緻密な胎土が特徴的な304は体部と底部の境に小さな段が周回し、口径2.9cm、器高6.7cm。長石などの砂を含むやや粗い胎土の309は内外面を斜めにナデ上げる。口径3.8cm、器高7.3cm。Ab類

(305~308・310・311・315)は丸みのある体部と内彎する口縁部とからなる砲弾形で丸底。外面を斜めにナデる310が砂を含むやや粗い胎土であるほかは、雲母片を含む緻密な胎土で、巻き上げた粘土紐を強くナデることで生じた器壁の厚薄が著しく、端部が尖るものが多い。305の体部外面には成形時にできた穴を円形の粘土粒で補修する。口径3.0~3.8cm、器高6.2~7.3cm。体部中程が屈曲し底の尖ったAc類(312~314)は、内面をヘラ状工具などで幅広く横方向にナデる。313・314の胎土は砂混じりで粗い。口径3.6~3.8cm、器高6.9~7.3cm。外表面に平行叩き目が残るAd類(321・322)は円筒形で、内面を縦方向にナデ、口縁端部が細く尖る。長石など砂混りのやや粗い胎土で赤褐色。321の口径4.0cm、残存高5.5cm。

椀形のBは内外面の調整技法と胎土によりe~g類に細分される。Be類(316・319)は器壁が薄い丸底から緩やかに内彎し、直立気味の口縁端部内外面をヨコナデする。雲母片を含む緻密な胎土で赤褐色。口径7.0cm、器高4.4cm。Bf類(317・318)は底部外面を指押えによって小さな平底につくる。体部外面を斜め方向にナデ上げ、内面はヘラ状工具で整える。長石や黒色粒子を含みやや粗い胎土で灰茶褐色。外面に横方向の平行叩き目をもつBg類(320)は口縁部直下で内側に屈曲しつつ肥厚する椀形で、口縁端部は内側に内傾面をもって尖る。平行叩きをもつ砲弾形のAd類と同様に、砂粒を含むやや粗い胎土で、体部内面は縦方向のナデ調整を施す。口径7.0cm、残存高4.1cmで、復元器高は約5cm。

北地区の諸遺構および遺物包含層出土の製塩土器は整理箱1箱分ある。大半が口縁部の小片で全形を知りうるものはないが、体部が屈曲し口縁部が外反する鉢・深鉢形(C類)と、口縁部が直立する円筒・砲弾形(D類)があり、平底(E類)はわずかである。

C類は、器形と調整とでh・i類に細分できるが、口縁部内外面に各種叩き目がみられるCh類(323~326)が少量あるほかは、外反する口縁部の先端が尖る鉢形のCi類(327)は1点のみである。Ch類の叩き目には、外面に六角形線陰文(323)、格子叩き目(324)、平行叩き目と格子叩き目の併用(326)などがある。323・324は雲母片を含む緻密な胎土で、土坑SK1128出土。326は口縁部の上方に平行叩き目、その下に格子叩き目を施し、端部が外反して薄く尖る。砂混じりの粗い胎土で土坑SK1126出土。325は石組方形池SG1100出土の体部の破片で口縁部内面上半に刷毛目と縄目叩き痕が残る。鉢形のCi類(327)もSK1126出土で、体部外面をハケ目調整したのちに、口縁部をヨコナデして外反させる。器形の類例は、和歌山県西庄遺跡4号墳にみられる。

D類には、薄手で口縁部上部が内彎気味に尖るDj類(328・329)と、厚手で口縁上端部に面をもち内側に肥厚するDk類(330・331)とがある。両者は内面を横方向にナデ調整し、不調整の外面に粘土紐の継ぎ目が残る点では共通しているが、前者は緻密な胎土で硬質、後者は微砂や砂を含む胎土で軟質のものが多い。Dj類の328はSK1128出土、329は石敷井戸SE1090の石組埋土出土。円筒形のDk類(330・331)はCj類に比べて厚手で、口縁上端部に面をもち内側に肥厚する特徴をもつ。いずれも灰褐色で砂粒を多く含む胎土で、330はSE1090の石組埋土出土、331はSG1100出土である。平底のEl類(331)は胎土に砂粒を多量に含み、加熱により全体が赤褐色に発色し肌荒れを起こしている。底部径は10.2cm。同法量の平底製塩土器には奈良時代の「志摩式」があるが、通有の「志摩式」が底部の円盤に粘土紐を積み上げて成形するのに対して、粘土をのぼして成形する点で若干異なるようである。

SD1652出土の製塩土器は、器形でA・Bの2種に大別され、調整法などからa～gの7類に細分された。大半が内外面をナデ調整するもの（a～c、e・f類）で占められ、外面に平行叩き目をもつ（d・g類）が少量含まれる点で、同時期の近畿地方の内陸部出土製塩土器の構成と変わらない。それらの産地についても、緻密な胎土から紀淡海峽産とみられるb類、e類が多数を占め、ほかに、胎土が緻密で金雲母片を含む大阪湾南部周辺産とみられるもの（a類の一部とc類とg類）および、砂混じりで軟質な備讃瀬戸産の可能性が高いもの（a・b類の一部、f類）があり、平行叩きのd類は大阪湾北部産とみられる。

北地区の諸遺構出土製塩土器はC・D・Eの3種、h～l類の5類に分けられた。それらを出土遺構別にみると、評里木簡が伴出したSK1126ではCi類が多数を占め、叩きをもつCh類、砲弾型のDj、Dk類が少量ずつ含まれている。7世紀後半～8世紀の土器が伴出する土坑SK1128ではCh、Dj類、奈良時代の堆積が顕著なSG1100からはCh、Djに加えてDk類がある。平安時代の土器が含まれる石敷井戸SE1090の埋土はDj、Dk類、中世土器が伴出する東西溝SD1127ではDj類があり、平底のEl類は南北溝SD1110上に掘られた奈良時代以降の土坑出土である。

周辺遺跡で年代が比較的明らかな製塩土器の出土は極めて稀であるが、藤原京右京一条一坊の複数の井戸から出土した少量の製塩土器が、内面を横方向にナデ調整し、外面に手掌文、粘土紐継ぎ目が残る不調整のD類である可能性が高いことが参考になる。この井戸は藤原宮期～平城宮Ⅱの土器が含まれる井戸であり、飛鳥池遺跡における出土状況と年代的に重なるようである。

工房操業期に限定できる資料に欠けることは、大量の工房関連遺物が投棄された水溜や炭層から製塩土器が出土していないことと符合している。6世紀後半から7世紀初めの牛窓湾・児島諸島の製塩土器に類似する、叩き目をもつCh類⁵²⁾については、飛鳥池遺跡出土土器にはその時期の土器が欠落しており、製塩土器だけが搬入されることも考え難い点で問題がある。むしろ、藤原京出土例や伴出土器から見る限り、北地区の諸遺構出土の製塩土器C・D・E種は、工房操業期ではなく、以後の奈良、平安時代に属すると考えるべきで、工房で必要とされた塩は製塩土器以外の形態で供給されたと考えるのが妥当であろう。

R 埴輪

東の谷の最下部の水溜SX1220東半部から、8点の埴輪片が出土した（Fig. 110-333～338、PL. 271）。1点の家形埴輪（338）のほかは円筒埴輪である。

円筒埴輪 円筒埴輪の基底部（333）は外面を縦ハケ目ののち横ハケ目調整、内面をナデ調整。外表が明黄褐色、断面が淡灰色を呈する硬質な焼成。円筒部片（334～337）のうち、335は青灰色を呈するいわゆる須恵質埴輪で、内面に縦ハケ目、外面に縦ハケ目ののち断続するB種横ハケ目を施し、低い台形の突帯を貼り付ける。その他はいずれも外面を縦ハケ目、内面をナデ調整し、334には円形透孔の一部が残る。切妻造の家形埴輪屋根部片（338）には凹線による網代の表現が残るが外表の風化が著しく、調整法は不明。外表が赤褐色、断面は暗灰色を呈し、黒斑をもつ。円筒埴輪片（333～337）はいずれも窖窯焼成で、断面台形の突帯やハケ目調整の基底部から5

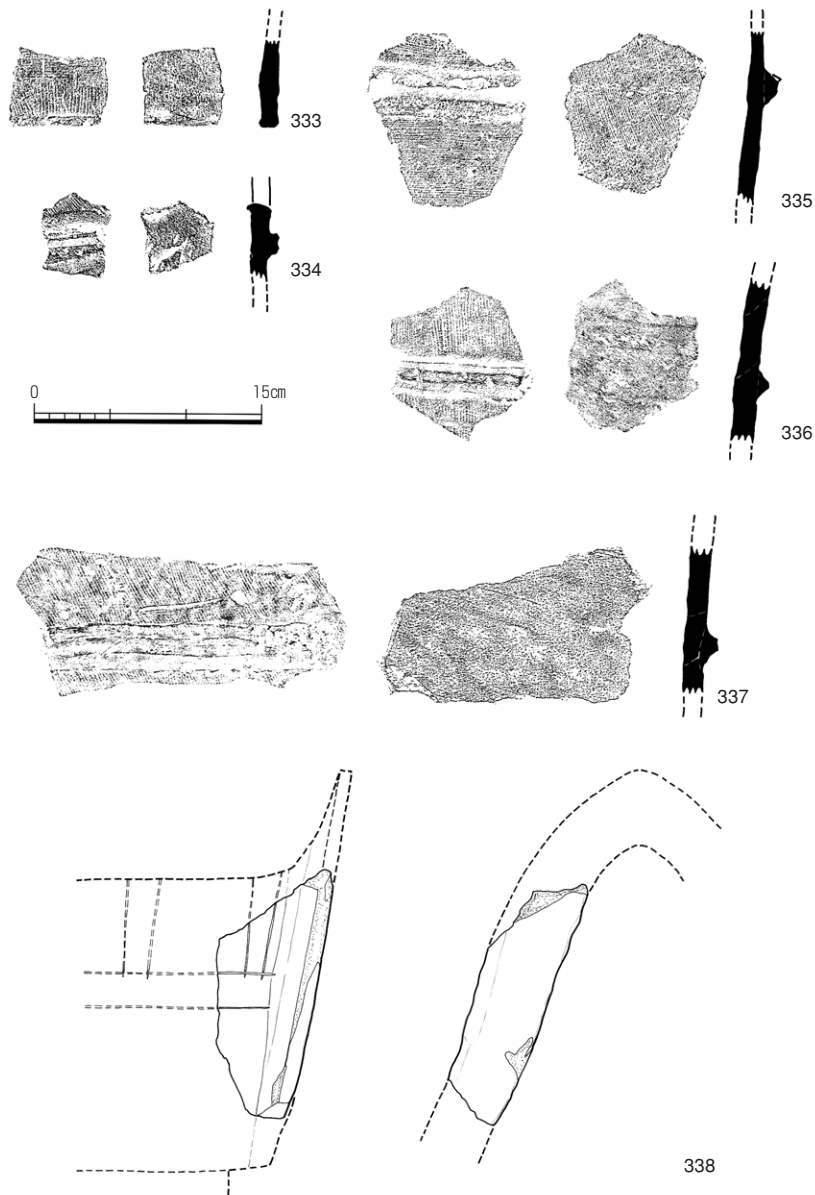


Fig. 110 埴輪 1:5

世紀末葉～6世紀前半に比定され、黒斑をもつ家形埴輪は5世紀後半に位置づけられる。

飛鳥池遺跡では埴輪が示す5世紀後半～6世紀前半は、竪穴建物、弧状溝、南北溝、方形土坑などが営まれ、比較的多量の土師器、須恵器、製塩土器などが出土している。それらの遺構遺物は、西の谷中流部に集中するが、東の谷でも、最奥の第112次調査区から谷底の腐植土層に少量ずつながら当該時期の土器片が確認されている。数片の資料ではあるが本例は、遺跡の南方に位置する酒船石遺跡東南方の丘陵上部における近年の調査（明日香村教育委員会、酒船石遺跡第24-2次調査）で確認された、石見型埴輪や蓋形埴輪、円筒埴輪片ともども、飛鳥盆地東方の丘陵の上位部に営まれた古墳に伴うものである。

- 1) 器種の細分は、『平城報告Ⅺ』1982年、『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』藤原京右京七条一坊発掘調査会1987年、『藤原概報24』1994年など。時期区分の標式資料は、飛鳥Ⅲの大官大寺下層SK121出土土器は、玉田芳英・西口壽生「大官大寺下層土抗の出土土器」『紀要2001』、飛鳥Ⅳの藤原宮SD1901A出土土器は『藤原概報8』1978年、飛鳥Ⅴの藤原宮SD2300出土土器は『藤原概報9』1979年、飛鳥Ⅱ末の水落遺跡出土土器は『藤原報告Ⅳ』1995年によった。
- 2) 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-2、1980年。西口壽生「土師器の地域色—6・7世紀の機内とその周辺—」『文化財論叢』1983年。渡邊淳子「都と甕—七世紀飛鳥・藤原地域における煮炊具の研究—」『文化財学報』18、奈良大学文学部文化財学科2000年。城ヶ谷和広「東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年。および、古代の土器研究会『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』1996年所掲資料などを参照。
- 3) 『藤原報告Ⅱ』1978年、51頁、PL.54-8~10。『平城報告Ⅸ』1978年、PL.39-31。
- 4) 須恵器の類例は飛鳥寺南方遺跡の皿X、川原寺北方遺跡の皿蓋がある。奈文研『飛鳥寺南方遺跡発掘調査報告』1995年、fig.4-36、奈文研『川原寺寺域北限の調査』2004年、Fig.22-38。
- 5) 『藤原概報25』1995年、98頁、Fig.71。
- 6) 石川考古学研究会『北陸の古代土器研究の現状と課題—資料編』1988年、419頁。
- 7) 石崎善久「『青野型甕』について」『京都府埋蔵文化財論集』3、1996年。前掲註2) 古代の土器研究会1996年、263~295頁。
- 8) 118に類似する口縁部小片が瓦窯SY1200から出土し、窯内で二次加熱を受け、窯壁が焼き付いている。
- 9) 後藤建一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』1989年、第22図-4
- 10) 叩き板の木目に直交して平行線を刻んだもの。これが大多数を占めるので、以後、特記しない。
- 11) 叩き板先端の右上—左下に刻むものを「左斜交」、左上—右下を「右斜交」とした。前者を水平に用いると、器面の凸線は右上—左下に、後者は左上—右下に見える。木目が不明確で左流れとした平行文は左斜交の刻みと考えられる。
- 12) 『藤原概報8』1978年、10頁-3。
- 13) 前掲註2)『古代の土器4・煮炊具』1996年、224頁、MR94-8次SD701-356。
- 14) 前掲註2)『古代の土器4・煮炊具』1996年、223頁、DB91-1次SD801-30・31。
- 15) 前掲註2) 文献、小笠原1980「伊賀伊勢型」、西口1983「南勢型」にあたる。城ヶ谷1996に従う。
- 16) 岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981年、図版14-10。
- 17) 飛鳥資料館『日本古代の墓誌』1977年、107頁。
- 18) 小牧市教育委員会『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』1979年、愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』1983年。
- 19) 『藤原概報23』1993年、65頁、第35図。
- 20) 奈文研「石神遺跡（第17次）の調査」『紀要2005』図105-37。大阪市文化財協会『難波宮址の研究第十一—前期難波宮内裏西方官衙地域の調査—』2000年、Fig.54-254。
- 21) 横山浩一のいう、器面にみえる「右回りに旋回する渦巻き文」。「左旋回の渦巻き文を刻む当て具」で押捺すると、器面の凸線は「の」字形の渦巻き状をなす。器面での見かけに従い「の」渦巻き文と呼称し、その逆は「e」渦巻き文と呼んだ。横山は岐阜県内出土の陶製当て具の渦巻き文は左旋回が多いとする。横山浩一「狸山A遺跡出土須恵器の渦巻文叩き目をめぐって」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会『古文化論集』下巻、1982年、1191~1194年。
- 22) 各務原市教育委員会『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』、1984年、図版16-6。
- 23) 奈良県立橿原考古学研究所編『飛鳥京跡二』1980年、240頁、図版第67-370。
- 24) 西口壽生「和同開珎銅銭と伴出した土器」『年報1999-Ⅱ』。
- 25) 前掲註22) 各務原市教育委員会1984、図版23-7。
- 26) 大阪府教育委員会『陶邑Ⅱ』1977年、図版107-14。
- 27) 前掲註22) 各務原市教育委員会1984、図版16-7。
- 28) 前掲註26) 大阪府教育委員会1977、第171図-10。
- 29) 前掲註18) 愛知県教育委員会1983、第19図13・16。
- 30) 前掲註22) 各務原市教育委員会1984、図版17-2。

- 31) 奈良県教育委員会『藤原宮』1969年、SD101 (PL.8-2)・SD105 (PL.9-16)。奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈文研学報第54冊、1995年、SD4750 (PL.85-43) など。
- 32) 飛鳥資料館『日本古代の墓誌』1977年、109頁。
- 33) 前掲註26) 大阪府教育委員会1977、第171図-8。
- 34) 奈良県文化財保存事務所『重要文化財 旧一乗院宸殿・殿上及び玄関移築工事報告書』1966年。
- 35) 大阪府文化財調査研究センター『難波宮跡北西の発掘調査』2000年、図47-45・46。
- 36) 前掲註1) 玉田・西口2001、図44-2・3、台付杯は6・7。
- 37) 泉 拓良「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター、1985年。
- 38) 西別府元日『日本古代地域史研究序説』思文閣出版、2003年。
- 39) 安田龍太郎「飛鳥藤原地域出土の新羅印花文土器」『文化財論叢Ⅲ』奈文研、2002年。
- 40) 網干善教「四神図の頸部装飾とその類型」『関西大学博物館紀要』4、1998年。『高松塚古墳の研究』同朋舎、1999年。
- 41) 註40) 文献は、北魏の墓誌、西安李和墓 (582年葬)、南京西善橋南朝墓 (576年) を掲げる。北魏の墓誌の原典は王子雲編『中国古代石刻画選集』1957年。
- 42) 註40) 文献は西安碑林所蔵の「大明宮龍首」を掲げるが、碑側面の龍に「×山形三角文と火焰宝珠」を刻んだ乾陵無字碑の碑頭龍首には「多重の対向山形三角文」が刻まれる。無字碑は武后葬年の705年以前の建立。
- 43) 「2~3重の対向山形」と中央が交叉する「×山形」の区別は写真や模写図では難しい。註40) 文献の墓門の朱雀 (716年葬)、西安李仁墓 (726年葬)、法門寺地宮門楣のほか寧夏史阿耽墓 (670年葬—固原博物館編『固原唐墓発掘調査報告』1994年) がある。また、「複線×文」には陝西節愍太子墓 (710年葬—陝西省考古研究所編『唐節愍太子墓発掘調査報告』2004年) がある。
- 44) 青龍と白虎の例には陝西劉士准墓誌 (850年葬) があり、玄武の例である西安高元珪墓 (756年葬) と西安緯十路蘇思佐助墓 (745年葬) は互いに近接し、酷似する。
- 45) 陝西省博物館編『陝西古代美術巡礼4—永泰公主石線刻画』陝西人民美術出版社、1985年。
- 46) 灰釉陶器の産地・時期比定にあたっては、尾野善裕氏の教示を得た。
- 47) 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25、1975年。奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984年。木村泰彦「乙訓出土の土馬集成」『長岡京古文化論叢』1986年。
- 48) 「藤原京右京五条三坊」『藤原概報11』1981年。羽曳野市教育委員会『茶山遺跡発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書4、1979年。
- 49) 渡邊淳子「土師質の当具について」『年報1999-II』。
- 50) 石橋茂登「飛鳥藤原の円板」『紀要2004』。
- 51) 奈文研『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』1997年、SE8690 (fig.7-8)、SE8685、SE8664など。
- 52) 大阪市細工谷遺跡SD501から奈良時代中頃の土器や和同開珎枝銭と伴出した製塩土器に、外面に叩き目をもつもの (Ⅲ群) が少量あるが産地不明とする。大阪市文化財協会『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』1999年、111頁、図83-324。

報告書抄録

ふりがな	あすかいけいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	飛鳥池遺跡発掘調査報告							
副書名	本文編〔Ⅱ〕 一土器・土製品一							
巻次								
シリーズ名	奈良文化財研究所学報							
シリーズ番号	第71冊							
編著者名	西口壽生 金田明大 渡辺丈彦 石橋茂登 加藤雅士 飛田恵美子 安田龍太郎 松村恵司 箱崎和久							
編集機関	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1 TEL: 0742-30-6733 (研究支援推進部総務課)							
発行年月日	2022年3月3日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あすかいけいせき 飛鳥池遺跡	ならけん 奈良県 たかいちぐん 高市郡 あすかわら 明日香村 あすか 飛鳥	294021	14-D-292	34° 28' 26" (日本測地系) 34° 28' 38" (世界測地系)	135° 49' 30" (日本測地系) 135° 49' 20" (世界測地系)	①1991.4.5) 1991.8.9 ②1997.1.8) 2001.3.12	14,220㎡	①1991年調査は飛鳥池の埋め立てに伴う事前調査。 ②1997年以降の調査は埋立地に計画された万葉文化館建設に伴う事前調査。その後、国の史跡指定に向けた遺跡の範囲確認調査を実施。
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
飛鳥池遺跡 飛鳥池東方遺跡 飛鳥寺	生産遺跡 流路跡 「狂心渠」の可能性 寺院跡	飛鳥時代 (七世紀後半を中心)	炉跡、陸橋、水溜、工房建物、掘立柱塀、掘立柱建物、石敷井戸、石組方形池、導水路、飛鳥寺南面大垣、道路、大溝、瓦窯、土坑、粘土採掘坑、江戸時代の梵鐘製造土坑。	富本銭、富本銭の鋳型や鋳棹・鋳バリ、金・銀と熔解用坩堝、被熱土器、多彩な銅製品、鋳型、坩堝、羽口、砥石、各種鉄製品と鉄滓、鉄鉗、石製坩堝、ガラス玉、ガラス坩堝・蓋、ガラス小玉の鋳型、水晶・琥珀玉、漆製品と漆刷毛・漆パレット・漆運搬容器などの漆工具、屋瓦と塼、様(木製の製品見本)、墨書土器、陶硯、鉛釉・緑釉土器、新羅土器、漆塗土器、ミニチュア土器、土馬、建築部材、木簡。		最古の鋳造貨幣である富本銭の生産遺跡。金・銀の加工と多様な銅製品や鉄製品、漆製品、瓦を生産。国産ガラスの製造の始まりが確認されるなど、古代の手工業技術を集約した一大工房群であることが判明。出土した八千点近い木簡の内容から、南地区は、遺跡の西南400mに位置する飛鳥浄御原宮と密接に関係し、宮廷の需要に応えるとともに、寺院や宮殿の造営に必要な物資を生産した国家的工房と推測される。一方、北地区は飛鳥寺三綱政所の業務空間として、道昭を中心とした東南禪院住僧の活動が想定される。本書は、出土遺物のうち、土器・土製品を報告。生産工房関係遺物を収録した本文編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕、付図は2021年12月に刊行。遺構等は続刊の本文編〔Ⅲ〕に収録。		

2022年2月22日 印刷
2022年3月3日 発行

飛鳥池遺跡発掘調査報告

本文編〔Ⅱ〕—土器・土製品—

奈良文化財研究所学報第71冊

著作権所有者
発行者 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

印刷者 岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町車木215

ISBN 978-4-909931-63-4